默阿弥全集

第十三巻

黙阿弥全集

第十三巻

解説

一座の立作者は決定した上演曲目に就いて、舞臺裝置の圖案である大道具帳を作り、又番附や看板の下繪や下書を全部作らねばならなかつた。これは默阿彌の書いた看板の下繪の一つである。狂言は第十六卷に收めた「島衞月白浪」の第四幕目及び五幕目の分、三枚の內である。下方は四幕目の「明石屋の場」であり、上方は五幕目の招魂社前の場である。朱字は繪師に對する注意書きである。この下繪が立作者の手から繪師鳥居氏の方へ廻ると、是れによつて、彩色された看板繪が出來、開場に先だつて座の前に掲げられるのである。

解説

一座の立作者は決定した上演曲目に就いて、舞台装置の図案である大道具帳を作り、又番附や看板の下繪や下書を全部作らねばならなかった。これは黙阿彌の書いた看板の下繪の一つである。狂言は第十六巻に收めた「島鵆月白浪」の第四番目及び五番目の分、三枚の内である。下方は四番目の「明石屋の場」であり、上方は五番目「招魂社前の場」である。朱字は錦画に對する注意書きである。この下繪が立作者の手から繪師鳥居氏の方へ廻るので、是れによって、彩られた看板繪が出来、開場に先だって小屋の前に掲げられるのである。

花舞臺
東京
賣上簿
萬
松助

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十三卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第十三卷目次

挿繪目次

第貳番目は英國の名譽の學者リトン氏が筆を揮ひしモニーの演劇大意は人のまじはりも兎角に金へ目をつけて浮薄にながるゝ人情を穿ちつくせし西洋の狂言趣向も深き池の端名におふ福地先生が飜譯なして御噺ありしを及ばぬ筆に横濱へうつす脚色も春の夜のおぼろに筋も波戸場の月影まとまり兼ねしをやう〳〵に綴りあけしは此演劇外へ取られぬ其のうちにと座主も作者も俳優も欲が先立つ新狂言

人間萬事金世中

『金の世の中』は明治十二年二月、新富座に書きおろされた、作者六十四歳の時であつた。これは扉の「語り」の中に明らかに記されてゐる如く、リツトンの小説を福地櫻癡居士が飜譯したのを劇化したもので、西洋種を使用したのは、此時を以て始めとする。續々歌舞伎年代記には「登場の人物何れも出來榮見えたるが取分け仲藏の邊見勢左衞門見るから頑冥不靈金錢の外眼中何物をも認めざる强慾の人物を寫して餘りあり、輕妙のしぐさ群を抜きて最も妙を極めたり。次は小團次のお品我儘にして輕薄の蓮葉娘を描寫して殘す處なく此優唯一の當り役として非常の賞讚を博し是れより賣出したり。序幕の「業平さんでもひよつとこでも明りを消して寢てしまへば同じこと」のセリフ滿場を唸らせたり……横濱波戸場の道具は海原より空を見たる書割にて、丸く滿月を切出し瓦斯を點じて時々雲の懸るあつらへ、是れも梅幸(菊五郎)の考案なりしが目新らしく、大向うでは月が出ると「お月さま〳〵」と褒めたり。切出し火入りの月は此時が始めてなり」とある。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(毛織五郎右衞門)、尾上菊五郎(惠府林之助)、岩井半四郎(門戸妻あさき、おくら)、中村仲藏(邊見勢左衞門)、中村鶴藏(おらん)、市川左團次(壽無田宇津藏)、坂東家橘(手代藤太郎)、市川小團次(おしな)、市川團右衞門(雅羅田臼右衞門)等であつた。

挿繪にしたのは、國周筆團扇繪の錦繪である。

大正十四年七月

校訂者

人間萬事金世中（金の世の中――二幕）

横濱境町邊見店の場
同仙元下裏借家の場
同邊見宅遺狀開の場

序幕

「役者――毛織五郎右衛門、惡府林之助、邊見勢左衛門、門戶の手代藤太郎、雅羅田臼右衛門、親類山本當助、邊見の番頭蒙八、差配人武太兵衛、米屋宇四郎、薪屋勘次郎、邊見の若者鐵造、同電吉、邊見の妻おらん、同娘おしな、おらんの姪おくら、林之助乳母おしづ、乳母の孫千之助、其他。」

（邊見店先の場）――本舞臺上手へ寄せて三間の間常足の二重、金網の蹴込み、下の方二間の落間、この正面土藏の入口、二重の正面上の方一間、中仕切りのある間平戶の戶棚、この前に帳場格子、眞中一間大阪格子の出這入、下の方一間の板羽目、これへ狀差し帳面などを書割り、五間の間一面の瓦庇、軒口積問屋の板看板その外蒸汽船の名を記したる板札を大分に掛けてあり、例のところ門口、此の外正面ペンキ塗りの板塀、總て横濱境町積問屋見世先の體、上手帳場格子の內に蒙八、散髮鬘羽織着流し前垂掛けの番頭にて張面を附けて居る、下手落間の前に鐵造、電吉、荷介何れも散髮鬘着流し前垂れ掛けの若い者にて、銘々荷拵へをして居る、野毛松散髮の丁稚にて取散しある繩を片附けて居る、この見得玩具の木琴の入りし濱唄にて幕明く、

鐵造　もし番頭さん、神戸行きの海上丸へ積込む荷物は、これで仕揚り、
電吉　これから直に積出さうとも、少しも差支へはござりませんから、
荷介　どうか帳面へ間違はないやうに、控へておいておくんなさい。
蒙八　いや貴様達が間違へればとて、おれの記した帳面に間違ひのあつた例はない、餘計な心配はせぬが好い。
野毛　そんな口綺麗なことを言つて、お前さんの顏のやうに叉凹んぢやいけませんよ。
蒙八　えゝ、この才槌めが、引込んで居ろ。
　　　ト爰へ奥より、おえい下女のこしらへにて盆へ茶腕を四つ載せて持つて出で、
えい　皆さん御苦勞でござります、お茶でもあがつてお出掛けなさい。
蒙八　いや、さう氣が附いてくれるから、どうでもおえいどんは賴もしい、みんなもわしの相伴をさつしやい。
鐵造　わたし共こそ力業をして、だいぶ息が切れたから、
電吉　茶の一杯も呑まないぢやあ、波戸場へ擔いで行かれぬが、
荷介　蒙八さんは帳場へ坐り、骨なんぞは折れない筈だ。

えい　ほんにお前さん方三人に、汲んで來たのでございますよ。

蒙八　いや人目があるゆゑさうは言へど、わしに呑ませようと持つて來たのぢや、呑んでやるから爰へ出しな。（ト皆々茶を呑むことよろしく。）

野毛　おい〳〵おえいどん、おいらにも茶をくれないのか。

えい　いえ〳〵お前は、大きな形で遊んでばかりおいでだから、お茶も何もいらぬわいなあ。

野毛　えゝ何で遊んでゐるものか、繩からげの手傳ひをして、一人前は働いて居らあ。

蒙八　これ〳〵野毛松、ふざけるな、小僧のくせに利いた風に、茶など呑むには及ばぬことだ。

野毛　いや小僧だつて番頭だつて、開化の世界は同じ權だ、さう安くして貰ひますまい。

蒙八　えゝ、ふざけたことを言やあがるな。

鐵造　これ〳〵野毛松、茶が呑みたけりやあ臺所へ行つて、手前の勝手に汲んで呑め。

電吉　どこの家でも小僧の分まで、茶を汲んで來て呑ませるものか。

荷介　早く貴樣も出世をして、肩揚げの下りた着物を着やれ。

えい　呑みたくばお前にも、今汲んで來てあげるわいなあ。

蒙八　おえいどん打捨つておかッし、そんなことをすると癖になります。

野毛　えゝ夜這に行つてはぢかれた癖に、女の肩を持つても無駄なことだ。
蒙八　うぬ、そんなことを吐かしをつて。（ト算盤を持つて立掛る。）
野毛　やあ、はぢかれ番頭が算盤を持つた。
蒙八　えゝ、どうするか見やあがれ。
ト野毛松を追廻す。爰へ奥より勢左衞門散髮の白髮鬘羽織着流しにて出來る、野毛松奥へ逃込むゆゑ、蒙八勢左衞門を打たうとして心附き、
勢左　蒙八どん、何の眞似だ。
やあ、こりや違つた。
蒙八　いゝいゝそろばん先きの杖、いや、間違へました。
勢左　いゝ年をして小僧を捉へ、馬鹿な眞似をさつしやらずと、積込みの荷の間違はぬやうに、帳へちやんと控へさつしやい。
蒙八　へい、もうちやんと控へました。どれ手水にでも行つて來よう。（トつんとして奥へはひる。）
勢左　これおえい、貴様も何で女のくせに、見世先きへ出て遊んで居るのだ。
えい　いいえ、遊んでは居りませぬ、荷拵へのお見世の衆へ、お茶を汲んで參りました。

勢左　えゝそれが餘計な世話燒きだ、餘所から來た客ぢやァあるめえし、茶が呑みたけりやお勝手に呑むわ、茶を汲んで來る暇があるなら、臺所へ行つて雜巾でもさせ。

えい　はい〳〵、御免下さりませ。（トつんとして奥へはひろ。勢左衛門若い者三人に向ひ、）

勢左　又貴樣達も貴樣達だ、荷拵へが出來たなら早く波戸場へ持つて行くがいゝ、物の高い横濱に居て大飯を喰ふ奉公人に、遊んで居られてたまるものか。

鐵造　どれ、それぢやあ今のうち、

電吉　波止場へ行つて船の中へ、

荷介　積込んでしまふとしよう。

勢左　積込む時にひよろついて、海へ荷物を落すまいぞ。

鐵造　よい〳〵ぢやァあるめえし。

勢左　何だと。

鐵造　いえ、よろしうございます。

勢左　よろしくなくツてどうするものか。（トこれにて三人件の荷物を擔ぎ下手の方へはひろ。勢左衛門下に居て、）いや人を使へば使はるゝと、少しでも目が放れると奉公人め等がふざけてならぬ。それに因

果とこの家ほど喰ひ潰しの多い家はない、一人の甥を據ろなく家へ引取りおいてやると、又女房の一人の姪を餘儀なく引取ることになり、十人からの暮しゆゑ喰せるばかりも年に積ると三百圓ではあがらぬから、餘程稼がにや引合はぬわい。

ト思案の思入、やはり木琴入りの濱唄になり、花道より臼右衛門散髮羽織着流し駒下駄がけ、襟卷獺虎のしやつぽな冠り出で、直に舞臺へ來り、門口にて内をのぞき、

臼右　いゝ、いゝ、

勢左　勢左衛門さん、お見世にござつたか。（ト内へはひる。）

勢左　いよ、これは臼右衛門さん、よくござつた、まあこつちへ上らつしやい。

臼右　いゝ儲け口でもないかと思つて、ぶらりとこつちへ出かけて來ました。

ト二重へあがり、よろしく住ふ。

勢左　今も一人で考へてをつたが、知つての通りわしの家は十人からの暮しゆゑ、どんなにしても家の掛りが月に三十圓は堅くかゝり、其の外地代や商法の税で十圓づゝはきつと出るから、積問屋位で斯うして居ては所詮殘る所へ行かぬから、石炭油の出る山でも見出して、何萬圓といふ大金の蔓にでも取附きたいものだ。

臼右　先づわしの目的では、毎年箱根や伊豆の熱海が夏季になると繁昌するゆゑ、もつと手近な大山の

麓へ温泉を開いて、東京中の地獄を殘らず狩集め、湯女と號して娼妓をさせ湯場と貸座敷の元締をしたら、きつと金儲けが出來ると思ふが、此の企てはどうでござらう。

勢左 成程それは好い思ひ附きだが、大山邊で湯の湧き出る場所でも見出してござつたのか。

円右 いや其の目途はまだ立たぬが、不動が祀つてあるからは、湯が湧き出るに違ひない。

勢左 そりや又どういふ見込があつて、

円右 はて不動明王の眞言にも、あびるおんせんそわかと言ひます。

勢左 えゝ、落し咄しか、馬鹿々々しい。

兩人 はゝゝゝ。

ト煙草をのみ居る、やはり木琴入りの濱唄になり、花道より林之助散髪鬘羽織着流し駒下駄にて小さな風呂敷包みを持ち、後より以前の荷介出來り、

荷介 もし林之助さん、今お歸りでござりますか。

林之 おゝ荷介どんか、今歸りました、お前は何處へ行きなすつた。

荷介 今波戸場へ荷を積込みに行きましたが、判取を忘れたゆゑ取りに歸つたのでござりまする。

林之 それでは又、れこが大小言であらう。

荷介　なに、朝から晩までの小言ゆゑ何とも思ひはしませんが、お前さんは奉公人と違つて現在の甥御さんでありながら、私共同様にあゝがみ〳〵おつしやるとは、實に喧しい旦那でござります。

林之　浮沈みとはいひながら、親に死なれ家に離れ、便りない身に親類の伯父の家へ居候、朝晩箸の上げ下しに、やれ喰潰しの意氣地なしのと、口汚なく追ひ使はれこんな悔しい事はない、掛取にでも出た時が少しはこつちの壽命延し、家へ歸れば又がみ〳〵、伯父の小言を聞かねばならぬが、あんまり小言はどつとせぬものではないか。

荷介　その内にもわたくしは大嫌ひでござりますが、どうかお前さんが内々で、入口にある判取をちよつと取つて下さいませんか。

林之　ありさへすれば知れないやうに、わたしが出して上げよう。

荷介　どうぞお願ひ申します。

林之　さあ〳〵早く行きませう。（ト舞臺門口へ來て、）伯父さん、行つて參りました。

ト内へはひり、門口にある判取を勢左衞門に知れぬやうに外へ出してやる。荷介悦んで下手へはひる。勢左衞門林之助を見て、

勢左　えゝ行つて來たもねえものだ、僅か五丁か十丁の所へ掛取りに行つて二時間餘り、何でこんなに

手間取つたのだ。

林之　先方の旦那がお留守ゆゑ、歸りを待つて居りましたので、大きに遲くなりました。

勢左　むゝ、歸りを待つて居たのなら、掛金は殘らずよこしたであらうな。

林之　へい、取つて參りましてござりまする。

勢左　そんなら早く爰へ出せ。

林之　へい〳〵、お納め下さりませ。

ト小風呂敷の包みを出す、これにて勢左衞門風呂敷を開き、通ひの帳面と札を出し算へて居る。

臼右　林之助どの、何處へ行かしやつた。

林之　これは本町の臼右衞門さま、よくおいでなされました、吉田橋の手前まで掛取りに參りました。

臼右　それは御苦勞なことであつた。

勢左　（此の內札を算へ居て思入あつて）こりや林之助、こりや十三圓と三錢きりで、三厘不足をして居るぞ。

林之　へい文久の端金がないから負けてくれと申すゆゑ、お序さまで宜しいと負けてやつて參りました。

勢左　えゝそれだからおのれの事を、世帶知らずだと常から言ふのだ、三厘のことはさておいて、一厘でも一毛でも、勘定の內が不足では請取れませぬと何故言はぬ、文久錢が二つあれば煮込みのおゝ

でんが二本喰はれる、おのれ棒先を切りをつたな。
林之　いえ、どういたしまして、そんな賤しいことをいたしませう。
勢左　いや〳〵それに相違ない、有體に言つてしまへ。
臼右　はて、三厘位の不足なら小遣ひにやつたと思つて、まあ〳〵勘辨さつしやるがよい。
勢左　いや、默つて居ると癖になります。
林之　お、、默つて居ると申しますれば、今途中で本町の五郎右衛門樣にお目にかゝりましたが、長崎にござる伯父樣の御病氣の事は、まだ此方へ知せの手紙が屆きませぬか。
勢左　何だ、長崎の藤右衛門が病氣で居ると聞いて來たと。
林之　へい、二三日後に長崎から郵便が屆いたと、五郎右衛門樣がおつしやりました。
勢左（思入あつて、）あの藤右衛門は相場で儲け、今では彼の地で何萬圓といふ大身代になつたといふ事、三年あとに女房に死なれ、家督を讓る子とてもなく、今ぽつくりと死んだ日には、跡はみんな他人のものだが、近い所なら駈附けて親切ごかしに身代をこつちへ悉皆ずり込まうもの、長崎では都合が惡い。
臼右　その門戸どのは、こなたを始め林之助どんや此のわしまで、脫れぬ中の緣者ゆゑ死ぬと見込みが

附いたなら、こなたと二人で蒸汽へ乗り、入費をかけて乘込んでも、こりや若干か儲かる仕事だ。

勢左　いや〳〵それも藤右衞門がきつと死んでくれゝばいゝが、もし全快でもされた日には入用の遣ひ損で、指を啣へて歸らにやならぬ、こりやうつかりと手は出されぬ。

林之　いえ〳〵九死一生との手紙が來たと申す事ゆゑ、成らうことならわたくしは見舞に行きたうござります。

臼右　いや、さう聞いて見れば猶の事、全快したら入費だけ向うに出させてやつてもいゝから、親切ごかしに行かねば嘘だ。

勢左　いや入費位を出させても、こつちの暇が缺けるから、全快されては割に當らぬ。

臼右　はて、そこが所謂一かばちか、危ふい橋を渡らねば大きい儲けは出來ぬ世の中、

勢左　こりや女房とも相談の上、どうか工風を附けねばならぬ。

臼右　まあともかくも奧へ行つて、とつくり相談いたしませう。

勢左　そんなら奧で、臼右衞門さん、

臼右　儲かることなら、厭とはいはぬ、

勢左　とつくりと相談しませう。

ト勢左衛門作の札を持ち、臼右衛門附いて奥へはひる。林之助跡に殘り呆れし思入にて、

林之　いやも、眼の寄る所へ玉とやらで、伯母御を始め娘まで慾に目のない義理知らず、そこへ立入る親類も義理人情はそつちのけで、寄るとさはると慾張り話し、呆れ返つた人ではある。

ト奥よりおくら島田髷やつし裝、下女同樣のこしらへにて出來り、

くら　林之助さん、お歸りでござんしたか。

林之　おゝおくらどのか、お前にも話さうと思ひましたが、長崎の伯父樣が大病との郵便が屆きました。

くら　今奥でそのお話し最中でござんすが、お前さんやわたしの爲にも大事の伯父樣でござんすゆゑ、近いとこなら早速にお尋ね申しに行かねばならぬが、何をいふにも長崎ゆゑちよつと自由は足りませぬわいな。

林之　さあ、それも當時は開けて居るゆゑ、金さへあれば蒸汽にて早速行かれぬ事もないが、蒸汽どころか電信を掛ける錢さへ自由にならぬ、實に不仕合せなわしが身の上、愚痴のやうだが其の以前は辨天通りで惠府林と人にも知られた瀬戸物問屋、異國へ手廣く取引して豐かに暮した身代も、母がこの身を產んだ時產後で死んで乳もなく、乳母の世話にて成人するうち、親父樣には慾に迷ひ、不圖米相場にかゝりてより損亡續き身代潰れ、遂には御病死なされしゆゑ、わしは此の家へ

引取られ、養育うけし乳母とても掛り息子の夫婦に死なれ、十一になる孫を相手に仙元下に幽な暮し、其の上ならず先頃より長の病氣で居るとの事、どうか以前の恩返しに貢いで遣り度く思へども、僅か二厘か三厘の不足に目角を立てられる伯父の家に厄介人、長く斯うして居た日には義理の缺ける事ばかり、どうしたものと明暮に、苦勞の絕えたことはありませぬ。

くら　そりやもうお前さんばかりぢやござんせぬ、わたしも以前は本町の倉田宗右衛門と人に知られた生絲の仲買をする人の娘、何不自由なく育ちしもその父さんが蠶種紙で大そう御損をなされしゆゑ、それから身代左り前、引續いてのお煩ひで終に果敢なくなられしを、氣病に母が煩ひつき又も御病死なされしゆゑ、便りない身に伯母の家へ引取られて來て下女同樣、追使はれてをりますが以前の事を考へますと、悔しいやら悲しいやらで、夜の目もろくく合ひませぬわいなあ。

林之　成程こなたも本町で、それ相應に暮したる宗右衛門どのゝ一人娘、

くら　お前も以前は辨天通りで瀨戶物問屋の息子さん、

林之　世が世であるなら、此の家と親類同志の附合に、

くら　甥よ姪よと呼ばれても、斯うすげなうはされまいに、

林之　厄介人よ喰潰しと、たゞ取るやうにこき使はれ、

くら　辛い思ひを押し怺へ、我慢に我慢はして居れど、
林之　漏るは涙の瀬戸土瓶、
くら　心細いも生絲の縁、
林之　思へばしがない、
兩人　身の上ぢやなあ。

ト兩人萎れしこなし、やはり木琴入り濱唄になり、花道より千之助散切鬘襤褸裝藁草履にて、辻占昆布の入りし箱を肩に掛け出來り、

千之　辻占昆布ぢや、板こぶぢや、頭を打たれていたこぶぢや、（ト呼びながら門口へ來て內を覗き、）若旦那樣、それにおいでゞござりますか。
林之　（千之助を見て、）おゝ千之助か、よく商ひに精が出ますの。
くら　あの子はたしか仙元下の。
林之　わしを育てた乳母の孫、高島町へ辻占こぶを、每日賣りに行くとのことぢや。
くら　てもまあ、それは感心な、どれお品さんへ內證で、お菓子を持つて來てやりませう。
林之　いや、その志しは有難いが、知れると惡い、止しにさつしやい。

くら　いえ腐るほど仕舞つてあるゆゑ、知れる氣遣ひはござんせぬ。
　　　トおくら奥へはひる、千之助も内へはひり、あたりを見廻し、
千之　若旦那樣、餘儀ない事でお前樣に、お願ひがあつて參りました。
林之　丁度折よく見世の者も爰に居ぬゆゑ遠慮はない、どういふ頼みか言うて見やれ。
千之　祖母さんの病氣の事で、お願ひがあつて參りました。
林之　おゝ其の病氣が氣になるゆゑ、見舞に行きたく思つて居れど、使ひに出ても心が急き、少し歸りが遲くなると、伯父にがみ〳〵噛附れるので心に任せず無沙汰をしたが、乳母の病氣はどんな樣子だ。
千之　御親切にお前樣がお案じなされて下さいますが、鹽梅が惡いその上に貧乏に追はれますので、段段重くなるばつかり、あれでは快くなる筈はないと案じられてなりませんから、それでお願ひに參りました。
林之　さうして頼みといふ譯は、どういふ譯か言うて見やれ。
千之　若旦那樣、まことに申し兼ねましたが、お金を少々貸して下さりませ。
林之　そりや頼まずともこつちから、持つて行かうと思つて居るが、幾らばかりあればよいのだ。

千之　いえ幾らでも宜しうございますが、お金の入用一通りお聞きなすつて下さりませ。（ト合方になり、）祖母さんが達者で居れば、異人さんの洗濯屋の下仕事をして稼ぎますから、そんなに困りもしませんが、其おばあさんが去年の暮から長煩ひをして居るので、米屋や薪屋へ借りが出來、やいやい催促されましても、辻占こぶを賣つた位の儲けの内では返されず、藥を買つてお米を買ひお粥を炊いて二人して啜つて居るのが精一ぱい、餘計な錢が儲からぬ故それを案じておばあさんが、年の行かぬ一人の孫に苦勞をさせるが氣の毒だから、一日も早く死にたいが、病氣で死んでは葬ひや何かでやつぱり跡で物が入るゆゑ、いつそ人に見られぬやう海ツ端まで這つて行き身を投げて死ぬと言ひますから、そんな事でもされましては大變でござりますゆゑ、案じなさんなと力をつけ、據ろなく御無心に參りましてござりまする。（ト泣聲をして言ふ。）

林之　おゝ尤もな其の心配、わしもそれゆゑ疾うからして尋ねてやらうと思へども、今いふ通り少しの間も暇がないゆゑ無沙汰をした、さうして米屋薪屋の拂ひは幾らばかりあればいゝか、それを序に聞かしてくれ。

千之　はい薪屋は僅かでござりますが、米屋は二圓も遣りませんでは中々あとを送りません、其の内一番困りますのは大家さんに三月ぶり、店賃の借がござりますので、それをやらねば店を明けろと

毎日やい／＼言はれますので、病人が氣を揉みますを昨夜もだまして寐かしつけ、高島町へ商ひに行き、夜通し賣つて歩きましても四錢か五錢の儲けゆゑ、お米を買つてしまひますと藥の手當がござりませぬ。

林之　去年の暮から又一倍諸式の相場があがつたから、其の困るのは尤もだ、然し必ず案じるな、何れ後方都合をして金をわしが持つて行くから、料簡違ひをせぬやうによく病人にも力を附け、わしの行くのを待つて居やれ。

千之　そんなら願ひをお叶へなさつて、お金を貸して下さるとか。

林之　お丶育ての恩ある乳母の病氣や、年端の行かぬそちの苦勞を、何で見捨て丶居られうぞ。

千之　そんならどうぞ若旦那樣、お助けなすつて下さりませ。

林之　必ず心配せぬがよい。

ト爰へ奥より以前のおくら、菓子パンを紙に包み、奥を憚りながら、持つて出て、

くら　聞けば聞くほど哀れな話し、これは同じお菓子のうちでもお腹の足しにならうから、内證でお前に上げますぞえ。（ト出す。千之助開き見て、）

千之　こりや菓子パンでござりますな。

林之　爰で喰べては差合ひゆゑ、袂へ入れて持つて行きやれ。
千之　持つて歸つて、病人のお婆さんに喰べさせます。
くら　ても感心なことぢやなあ。
千之　左樣なら若旦那樣、姉さん有難うござります。
林之　早く家へ歸るがよいぞ。
千之　是れでお暇申しまする。（ト門口の外へ出て、）辻占昆布ぢや、板昆布ぢや。
　ト呼ぶ。これより木琴入りの濱唄になり、千之助呼びながら花道へはひる、おくらこれを見送り、
くら　斯うして互ひに人の家で辛い思ひをすると思へば、又あのやうに幼年にて苦勞をして居る子供もあり、あれから見れば二人とも、少しはましでござんせうわいなあ。
林之　それゆゑ餘計な心配が、
くら　えゝ。
林之　いえなに、餘計な心配をしてくれたので、あれも悦んで歸りました。
くら　あんなお菓子は腐るほど、奥にしまつてありますわいなあ。
　ト爰へ奥よりおらん半纏着流しの婆アにて出來り、

らん　何が腐るほどしまつてあります。

林之　や、こなたは伯母様、さては様子を。

らん　腐るほどしまつてあるとは、何の事だか耳障りだ。

くら　さあ、それはあの、奥の間にお金が腐るほどしまつてあらうと。

らん　え丶餘計な事を喋べらねえで繼ぎ物でもするがい丶、間がな隙がな見世へ出て男の側へ寄りたがるとは、こんないやらしい奴はありやあしねえ。

くら　それでは、お菓子といふことを、

らん　何だと、

くら　いえ、をかしな事はいたしませぬわいなあ。（ト奥へはひる、林之助思入あつて、）

林之　もし伯母様、折入つてお願ひがござりますが、お叶へなされては下さりませぬか。

らん　改つて願ひがあるとは、娘の聟にでもなりたいといふのか。

林之　いえ左様ではござりませぬ、實は唯今見世先へ、あなたも豫て御存じの乳母の孫が參りまして段段との因果ばなし、婆あが長の煩ひにて其の日の煙りを立兼て困つて居ると申すことゆゑ、私も其の以前母のない身を乳母の乳で養育受けし恩あるゆゑ、貢いで遣り度く思ひますが、唯今の身

分では金子の工面も出來ませねば、どうぞあなたのお計ひで十圓ばかりわたくしに、お貸しなされては下さりませぬか。

らん　何だ十圓貸せ、これ林之助何處を押せばそんな音が出るのだ、十圓の事はさておいて一圓たりとも纏めた金を何でそなたに貸されるものか、よくまあ物を積つて見なさい、いはゞ此處の家の喰潰しで一錢一厘の働きもなく、頭の天邊から足の爪先まで伯父の厄介になつて居ながら、乳母に貢いで遣り度いから金を貸せなどゝは呆れた料簡、乳を呑んで育てられようがたゞでも呑ませて貰やあしまいし、高い給金でそなたの親が乳母に抱へた雇人、いはゞ此方がお客さまだ恩にきる所は少しもない、人間らしい料簡で恩返しをする心なら、親に別れ家に離れ途方に暮れてゐる所を引取つて、世話をしてやるこちら夫婦は大恩人、思入れ孝行するがよい。奉行人なら貸した金を給金で差引くといふ見當があるゆゑ、少し位貸してやるまいものでもないが、厄介人のそなたなどに、何で金錢が貸されるものか。

林之　あなたは左樣におつしやりますが、死んだ親父の遺言にも母が產後の惱みで死に、乳に困つて居たところを乳母の丹精一方ならず養育うけしそちなれば、母同樣に心得ろと末期の際に言殘し此の世を去つてござりますゆゑ、乳母の難儀を聞きながら捨ておく譯には參りませぬ、厄介人ゆゑ

貸されぬとおつしやりますならわたくしは、何れへなりとも雇ひに出て、主人に頼み給金の前借をいたしてなりと貢いで遣りたうござりますから、お金をお貸し下さらずば、どうぞ伯父様へお話しなすつて奉公に出して下さりませ。

ト此の以前奥より勢左衛門出で、これを聞き居て、

勢左　いや奉公に出す事はならぬ、貴様は一生この家で飼殺しにして使はねば、この伯父が引合はぬわえ。

ト前へ出る。

林之　おゝ好い所へ旦那どの、聞いてござつたか知らねども、あんなふいゝて勝手を言ひますわいなう。いえ喰潰しとおつしやりますゆゑ、奉公に出ると申しましたのが、なんでふいゝて勝手でござりまする。

勢左　えゝ、それだからおのれの様な理も非も分からぬ奴はないと、おれが不斷から言つて居るのだ、親なき後は伯父が親と、此の日本はいふに及ばず、各國まで例へてあれど、親なき後は乳母が親だと、そんな間違つた譬はない、その乳母に貢ぎたいといつて親同然な伯父を捨て奉公に出て、それで濟むか、給金の前借をして乳母に貢がうと思ふなら、その金を伯父によこせ、それでこそ

孝行者と直新聞へ出て褒められるが、乳母に貢ぎをしたいから金を貸してくれろなどゝは、途方とてつもない奴だ、金も貸さねばおのれの自由に奉公にも出さぬから、伯父へ孝行と思ふなら、喰潰しにならぬやう一生懸命に働きをれ、そんな曲つた料簡だから、伯父の心にかなはぬのだ。

らん　こりや旦那どの、言はれる通り、親なき後は伯父が親、母なき後は伯母が母、家の身代さへ肥してくれゝば、何でこつちで邪魔にしよう、料簡違ひな事を言はずと一生懸命に働くがよい。

林之　そんならどうでもわたくしを、奉公に出しては下さりませぬか。

勢左　大恩のある伯父を捨て、不實をすると捨ておかぬぞ。

林之　そんな手前勝手な、

らん　何だとえ。

林之　いえ手前の勝手を申しまして、お腹をお立せ申しました。眞平御免下さりませ。

勢左　さう詫るなら料簡してやる。（ト爰へ奥よりおしな島田鬘振袖娘にて出來り）

しな　もし父さん、臼右衞門さんがお歸りなさるが、何ぞ御用はござりませぬか。

勢左　いや金儲けの病氣見舞に、半口乘つておかねばならぬ。

らん　儲かる事ならわたしも半口、娘と二人で乘りませう。

勢左　いや乘られては割が惡い。（ト勢左衞門奥へはひる。）
らん　何だかこりや甘さうな話しだ。（ト跡を追かけ奥へはひる。おしな思入あつて、）
しな　これ林之助どの、いつも見世へ東京から來る、小間物屋さんは見えなんだかえ。
林之　東京から來る小間物屋とは、吉兵衞さんでござりますか。
しな　あの人に少し賴むものがござんすから、來たら奥へ知せて下さい。
林之　畏りました。賴むものとは又指輪でござりますか。
しな　いいえ、此の間出來て來たこの銀簪の耳搔きが少し小さいゆゑ、直して貰はうと思ふのぢやわいな。
ト珊瑚珠の玉の入りし簪を見せる。
林之　成程玉に合はせましては少し小さいやうでござりますが、色氣と云ひ形といひすいすいほな玉でござりますな、こりやあ古渡りでござりませう、なかなか安くは出來ますまいね。
しな　いいえ、そんなに高くはござんせぬが、玉ばかりが十圓でござんした。
林之　へえゝ、玉ばかりが十圓でござりますか、いや此の位の分があつては、無疵でござりますからその位はいたしませう。
しな　銀簪だけの損さへすれば、いつでも十圓で引取るといふゆゑ、四五日あとに拵へたのぢやわいな。

林之　左樣でございますか、好い簪でございますな。（ト簪を持ち思入あつて、）おしなさん、折入つてお前さんにお願ひがございますが、此の簪をわたくしに、少しの内貸して下さりませぬか。

しな　えゝもう馬鹿らしい、お前に貸さうと思つて拵へはしないよ。（ト簪を引取る。）

林之　そりやさうでございませうが、長くではございませぬ、二三日貸して下さりませ。

しな　誰がお前に貸しませう、常談をお言ひでないよ。

林之　いえ常談ではございません、眞實に貸して下さりませ。（ト袖にすがる、）

しな　えゝも、厭だヨウ。（ト袖を振拂ひツンとして奥へはひろ、林之助これを見送り、）

林之　親が親なら娘まで、色氣を捨てゝ、慾がたつぷり、こゝらが開化の娘か知らん。

ト呆れし思入。引違へて奥より以前の臼右衛門出來り。

臼右　入費を遣つて見舞に行き、向うが死ねばたんまりと儲かる仕事の目論見も、乘り手が殖ゑては割に當らぬ。（ト懷より札を出し、）然し土産の資本金も半分出ればこつちも氣安い、ちつとも早く買立てよう。

ト札を紙入に納め門口の方へ行かうとする、林之助この體を見て羨しきこなしにて、

林之　もし雅羅田さま、お見掛け申して、折入つてお願ひがございまする。

臼右　見掛けて賴みがあるといふは、貴樣も半口乘せてくれろか。

林之　いえ左樣ではござりませぬ、差當りまして今日中に金子が十圓ござりませねば、義理のかけまする事が出來て當惑いたしてをりまする。どうぞあなたのお情で親類うちの誼を思ひ、十圓お貸し下さりませぬか。

臼右　これ〳〵林之助どん、その親類呼はりは止して下さい、そりやあそなたの親父とは商法仲間で入懇を結び、親類の附合もしたが家が潰れてこつちの家へ引取られてゐるそなたへ對し、金を貸す謂れはない、十圓どころか少しの緣も、今となつちやあ他人向きだ。

林之　さうおつしやらずと、お達引にて、

臼右　いや見當のねえのに、金は貸せねえ。

林之　そこを何卒、（ト袂にすがるを、）

臼右　えゝうるせえ、放さねえか。（ト袖を振拂つて花道へはひる、林之助これを見送り思入あつて、）

林之　伯父は勿論今の人も、元は親類同然の附合をしたお人だが、斯うも分からぬ人ばつかり揃ひも揃つて居るものか、金が出來ねば千之助の貧苦を助ける事もならず、乳母の命にかゝはる大事、いつそ此の間に本町の五郎右衞門樣の所へ行き、膝へ縋つて賴んで見よう、それが何より上分別だ。

ト身支度をする、爰へ奥より幕明きの蒙八出て、

蒙八　これ〳〵林之助どの、金がいるなら蒙八が差繰つて貸して進ぜようか。

林之　おゝ蒙八どの、有難い、どうかなるなら貸して下さい。

蒙八　その代り又こつちでも、こなたに一つの頼みがあるのぢや。

林之　さうして、其の頼みといふのは。

蒙八　外でもないが、こなたの縁者でこつちの家に厄介人で居る、あの倉田のおくらさんを、わしに取持つて貰ひたい。

林之　人が心配して居る所へ、そんな常談を言はないで、金の都合が出來るなら、どうかわしに貸して下さい。

蒙八　いえ常談ではない、おくらさんさへ取持つて下されば、きつと金は都合して貸してあげませう。

林之　それだと云つて色事の取持はどうもわたしには出來ませぬ、それぢやあもうお前にも借りませぬ　やつぱり本町の、いえなに、外で都合をしませうから、みだらな事はお斷り申します。

蒙八　さういつこくを言はないで、取持つことが出來ずば、せめて、おくらさんと情人になる智慧をわたしに貸して下さい。

林之　情人などをした事のないわたしだから、そんな智慧はありません。
蒙八　さうおつしやらずと、お達引にて、
林之　えゝ色氣のないのに、智慧は貸されぬ。
蒙八　そこを何卒、（ト袂へすがろゆゑ、）
林之　えゝうるさい、放しなされい。
ト袖を振拂ひ逸散に花道へはひろ、此の内奥より幕明きの野毛松此の體を見て居ろ、
蒙八　旦那もいつこくだが、今の人も身内だけ揃ひも揃つたいつこく者、いつそ此の間に當人の尻へ縋つて賴んで見よう、それが何より上分別だ。
野毛　番頭さん、わたしが取持つてあげるから、晩に軍鷄でもお奢りな。
蒙八　いや情事などをしたことのない小僧に此の取持ちは賴まぬから、それよりやつぱり直談じに、いえなに、旦印に小言をいはれるから、みだらなことはお斷りだ。
野毛　さういつこくを言はないで、軍鷄が厭ならせめて牛でも、
蒙八　おごつたことはないわたしだから、そんな散財はまつぴらさ。
野毛　さうおつしやらずと、お達引にて。

蒙八　えゝ色氣のないのに、牛はおごれぬ。
野毛　そこを何卒、
蒙八　えゝうるさい、放しなされい。
ト追かけて奥へはひる、入替つて奥より以前の勢左衞門おらんを連れて出來り、
らん　もし旦那どの、內々用とは何事でござるか、晝日中見世先で、まさか提灯で餅もつけまい。
勢左　えゝ馬鹿な事を言はつしやるな、內證の用とは外でもないが、あの林之助めが乳母へ貢ぐと十圓の金を借りたがるは、何に遣ふか分らぬゆゑ持逃げでもされぬやうに、貴樣もこれから氣を附けさつしやい。
らん　ほんに彼奴めも年若ゆゑ、いづか近所へ馴染をこしらへ穴ッ這入りでもするのか知れぬ、こなたも是れから林之助は金の使ひなどにせぬがよい。
勢左　いやそればかりぢやない、今聞けばあの番頭めが林之助に金の工面をしてやると言つて、爰で吐かしてをつたは、くすねゝ錢でも持つては居ぬか。
らん　いやもう家に居る奴はみんな泥坊、少しも油斷はならぬから、今夜から代り〳〵に金の番人に起きて居ませう。

勢左　どうか他人を遣はずに、金の儲かる工夫はないか。
らん　又見世の奴が奥へ行つて、女共とゝちぐ狂つて居るか。
勢左　貴様は奥を氣を附けろ、おれは帳面を調べにやならぬ。
らん　やれ〳〵世話の焼けたことだ。

ト おらんは奥へはひろ。勢左衞門は上手帳場の內にて帳合なして居ろ、やはり木琴入りの濱唄になり、花道より毛織五郞右衞門散髮髮羽織着流し駒下駄がけにて先へ立ち、後より門戶の手代藤太郞同じく散髮半合羽脚絆草履がけの旅裝にて、下等の蝙蝠傘を突き出來り、花道にて、

五郞　向うの家がお前に話した、邊勢といふ積問屋の見世だ。
藤太　成程、强慾と呼ばれるだけあつて、金のありさうな見世構へでござりますな。
五郞　あすこへ行けば、門戶どのゝ身寄りの者が寄合つて居れば、遺言狀はあすこで開きませう。
藤太　勝手を知らぬわしの事ゆゑ、何分よろしくお賴み申しまする。

ト 右の唄にて兩人舞臺門口へ來て、

五郞　邊勢どの、お店に居られましたが。（ト內へはひろ。）
勢左　これは本町の五郞右衞門どの、お珍らしい、よくおいでなされた、まあこれへお寄んなさい。

五郎　それぢやあ藤太郎どの。
藤太　先づ〳〵お先きへ。
五郎　御免なさい。

ト五郎右衞門二重へ上りよろしく住ふ、藤太郎平舞臺下手に住ふ、これにて勢左衞門帳面を片附け前へ出て、

勢左　繁用に取紛れ、毎度御無沙汰に打過ぎましたが、五郎右衞門どのはいつもながら、お替りなうて結構でござる。
五郎　その御無沙汰はお互ひの事、用がなければ年始の外、問ひ音信もしませなんだが、いつもこなたもお達者で、お見世も繁昌すると聞き、蔭ながらお悦び申します。
勢左　有難いことに、どうか斯うか取り續いて居るものゝ、旨い錢儲けが少ないので、思ふやうには行きませぬ。
藤太　（前へ出て、）これはお初にお目にかゝりまする。（ト辭儀をなす、勢左衞門藤太郎を見て、）
勢左　ついぞ見馴れぬ旅の御仁、これは何れのお人でござる。
五郎　あれはこなたも知らぬ筈、今度始めて出て來ました長崎表のこちらの親類、門戸どのゝ手代にて

藤太郎どのといふ若者、先頃より藤右衛門どのには大病で居られた所養生叶はず病死され、それに附いて遺言狀を預り今方蒸汽で此の地へ着き、わしの家へ尋ねて來たゆゑ、直ぐに連立つてこちらの家へお知せ申しに來ました。

トこれを聞き、勢左衛門〻たといふ思入あつて氣を替へ、態とびつくりせしこなしにて、

勢左　えゝ、そんならなんと言はつしやる、長崎表の門戸どのには、大病で死なれましたか。

藤太　後月二十八日の夜、果敢なく病死を遂げられました。

勢左　やれ〳〵それはお氣の毒な、さつき林之助が途中で五郎右衛門どのにお目にかゝり、長崎の門戸どのが大病だといふ書面が屆き御心配との噂を聞き、まだ六十にもならぬお人、どうか本復させたいと、丁度その折雅羅臼どのも店へ來合せて居ましたゆゑ、見舞に行かうと相談極まり今度の蒸汽の出帆には乘込む積りで居ましたに、その見舞さへ間に合ず死なつしやつたとは情ない、末期に一目逢はぬのが、まことに殘念な事でござる。（トわざと愁ひのこなしよろしく、）

藤太　それに附けてもこちらのお家へ、主人の血緣の林之助さまや倉田の娘御おくらさまが、先年より引取られ御厄介人でをられますとのこと、これなる毛織五郎右衛門さまより承はりましてござりますゆゑ、先づ兎も角もその方へと、お知せ申しに參りました。

勢左　いやその二人より藤右衛門どの丶縁に繋がるわしの女房おらんを始め、娘のおしなも嘸この事を聞いたなら、力を落すことであらうが、言はずに居れば後での恨み、これへ呼んで言ひ聞かせませう。（ト奥へ向ひ、）これ〳〵婆さん、大變だ、娘をつれて爰へ出さつしやい。婆アどん〳〵。

ト呼び立てる。これにて奥より以前のおらん、おしなを連れて出來り。

らん　大變だとは旦那どの、何事が始まりました。

しな　父さん、何ぞ見世の品でも紛失をしましたかいなあ。

勢左　いやそれしきの事ではない、長崎表の藤右衛門どのが、たうとう病死さつしやれたのだ。

らん　それはお氣の毒なことなれど、四百里餘りも隔たつて居るゆゑ。

しな　爰でとやかういうたとて、仕方がないではござんせぬか。

勢左　なに、仕方がない事があらうぞ、藤右衛門どのは女房もなく跡を取るべき子供もないから、何萬兩といふ大身代も他人の物にせねばならぬ、そこは差詰め縁者のものが跡へ乘込み丸取りに、いやさ、まるで他人の其の中で病死をしては看病も屆かぬ勝であらうと思へば、おりや殘念でこたへられぬ。（トわざと愁ひのこなし、）

らん　成程、それでは、わしの姪のおくらの親の兄御なる藤右衛門どの丶事なれば、わしの爲にも繋が

る縁、
しな　又父さんの甥に當る林之助どのゝ實家とは、脱れぬ縁者の門戸さまゆゑ、父さん始めわたしとてもやつぱり縁者に違ひない。
勢左　おゝさうだとも〳〵、親子三人その外に、二人の縁者を家へ引取り世話をして居る勢左衞門だ、形見分けなら五人前、いやさ。五人の涙を三人で、女房も娘もたんと泣け、おれは一倍悲しいわえ。
らん　さう聞いて見れば誰よりも、一番縁者のわしが悲しうござる。
しな　林之助どのよりおくらどのより、わたしがたんと悲しいわいなあ。

ト三人わざと泣くことよろしく、五郎右衞門藤太郎顔見合せ思入あつて、

五郎　扨それについて藤右衞門どのが、末期の際に縁者のものへ所有の金を取調べ、殘らず形見に割附けられて遺言狀を書殘し、これを故郷の縁者のものへ病死の後に渡してくれと、言殘されて死なれし由。
藤太　壯年ながらわたくしが主人の手許で病氣中晝夜の世話をいたしましたゆゑ、我が亡きあとで横濱へ手前がこれなる遺言狀を持參いたし、五郎右衞門さまへお屆け申せと主人の言付け、葬式萬端

濟ませまして直に蒸汽へ乘込んで、三日三晩で波濤を越え、先刻この地へ着しました。
勢左　さう聞いて見れば猶以て、こりや泣いて居る所ぢやない。
らん　さうして、どういふ形見わけか。
しな　早う聞せて下さりませ。
五郎　その遺言狀は、親類一統寄り集りし列座の上、開封して佛の遺言。
藤太　お手數ながらこちらから緣者の衆を廻狀にて、お呼びなされて下さりませ。
勢左　緣者といつても本町の雅羅臼どのと、太田町の山當どの、二軒なれば、早速呼びにやりませう。
ト有合ふ帳場の掛硯を出し、卷紙へ廻狀を書く、おらん奧へ向ひ、
らん　これ〳〵野毛松、使ひがあるぞ。（ト呼ぶ、奧より以前の野毛松出來り）
野毛　へい〳〵、何處へお使ひでござります。
しな　大急ぎで、本町から太田町まで行つて來るのぢや。
野毛　はぢかれ番頭に、お暇でも出ますのでござりますか。
しな　えゝもう、そんな譯ではない。（ト此の內勢左衛門廻狀を書いて、）
勢左　これを本町の雅羅臼から太田町の山當へ持つて行き、急に耳よりな儲け口が、いやさ、儲け口だ

と嘘をついて、早く來るやうに呼んで來い。

野毛　へい〳〵儲け口だと嘘をついて早く呼んで來いと、言附けましたと申しますのでござりますか。

勢左　え、馬鹿野郎めが、默つて行つて來い。

野毛　それではだまつて行つて來ませう。（ト廻狀を持つて門口へ出る。）

らん　又道草を喰つてはならぬぞ。

野毛　なんでも默つて行つて來ます。（ト野毛松花道へはひる。）

五郎　いやなに勢左衛門どの、今度長崎の藤右衛門どのが不慮の病死を遂げられても、家督を嗣ぐべき子がないゆゑ、年頃仕出した身代も他人のものにせねばならぬ、それに附けてもこちらの家、斯うして立派な娘御が年頃になつて居られるゆゑ、跡を取るべき聟をこしらへ、老後の安心さつしやれたらよからうやうに思ひますが、お心組でもござりまするかな。

勢左　それはおつしやるまでもなく、疾うから搜して居りますが、扨搜さうとなりますと氣に入つたのは少ないもの。

らん　偶々あれば長し短かし、これぞと思ふ相手のないので、未だに聟が定まりませぬ。

五郎　いや外を穿鑿するに及ばず、勢左衛門どの、一人の甥ゆゑ、あの林之助どのを聟にしたら、男も

好し、氣立も好し、殊に娘御のおしなどのとは丁度似合の從妹同志、他人交ずの水入らず好い都合ではござらぬか。

藤太　遠國生れのわたくしゆゑ、詳しい譯は存じませぬが、病死いたした主人にも林之助さまのお身の上を案じておいでなされましたゆゑ、こちらのお家の御養子にお直りなされば冥土から、佛もさぞや喜びませう。

勢左　いや折角のお勸めだが、あの林之助は聟養子に直す譯にはなりませぬ。

五郎　扨は若氣の過失にて、心得違ひの事でもして、

藤太　こちらの親御のお眼識に、叶はぬ事でもござりますか。

らん　いえ、これぞといつて疵もないが、相場にかゝつて身代を潰した人の悴ゆゑ、男は好いが三文の働きもない彼れの性分。

勢左　どうか持參の一萬圓も持つて來るやうな、聟があつたら周旋をして下さりませ。

五郎　それでは持參を澤山持つた、聟が望みでござつたか。

藤太　しかしあんまり不釣合の醜男にては、御當人が、

しな　いえ持參金さへたんとあれば、男振には構ひませぬ。

勢左　お丶、それでこそわしの娘、
らん　なんでも當時は、慾の世の中、
五郎　はて、今時の娘御は、
藤太　氣立が替つて居ると見える。
勢左　それにつけても遺言狀を、
らん　早く開封した上で、
しな　形見分けなら何人前でも、
勢左　あこれ、(ト押へ)早く使ひが歸ればいゝが。
藤太　ても呆れかへる。(ト言ふを冠せて、)
五郎　はて、爰等が地金の、(ト煙草盆にて煙管をはたくを道具替りの知らせ)開けた所だ。
ト皆々引つぱりよろしく、木琴入りの濱唄にて道具廻る。

(仙元下裏借家の場)――本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻しの反故張りの障子屋體、正面上の方一間の押入戸棚、内三尺の佛檀、この下手一面の鼠壁、下手の褄古びたる竹格子の半窓、この内に一ツ

竈、その外臺所道具よろしく並べ、いつもの所古びたる門口、此の外正面總雪隱の屋根を見せたる板塀、總て横濱仙元下裏借家の體、上手に古びたる蒲團を敷き、この上におしづやつし裝の老母病人のこしらへにて、行火に凭れ起き直り居る、これを以前の千之助後へ廻り背中を摩り介抱して居る、この見得四ツ竹節の合方にて道具留まる。

千之　これ祖母さん、若旦那さまからお金が屆き、これで當分安心ゆゑ、もう身を投げて死なうなど、悲しい事を言はないで、土產に貰うたパンの菓子でもしこたま喰つて力を附け、早くよくなつておくんなせえ。

しづ　さあ思ひ掛けなく十圓といふお金が屆き、こちらでは飛立つ樣に嬉しいが案じられるは若旦那さま、以前と違ひ今の身は伯父御のお家へ掛人、どんな工面で十圓といふお金をお貸し下されしか無理な事でもなされたる工面の金ではあるまいかと、又案じられてならぬわいなう。

千之　なあに、そんなに案じなさんな、居候でも若旦那のおいでなさる彼のお店は、土藏があつて五間間口、おいらの家よりよツぽど立派だ。十圓ばかりの金などはそこらに轉がつて居さうな家だ。

しづ　さあ、それゆゑに猶々心配、伯父御といへど日頃から强慾非道なお人と聞けば、もし若旦那が掛先のお使ひ込みでもなされたら、どんな憂き目に逢はうも知れぬと、それが心配でならぬわいの。

千之　その心配をするよりは早くよくなつてくれさへすれば、おいらも稼いで金を溜め、若旦那にお返し申して、御迷惑なざあ掛けやあしねえ。

しづ　そなたが晝夜呼び歩き、聲をからして稼いでも高の知れた辻占昆布、纏めた儲けは出來ぬわいの。

トこの時下の七輪へかけし藥土瓶吹きこぼれるゆゑ、

千之　お前、藥を呑まないか。

しづ　煎じあがつた樣子ゆゑ、枕頭へ持つて來や。

千之　あい〳〵。

ト四ツ竹の合方きつぱりとなり、花道より以前の林之助腕組をして出來り、花道にて、

林之　五郎右衞門さまのお宅へ行きお願ひ申さうと思つた所、生憎お留守で用が足りず、乳母の家へも行き難いが、といつて此の儘捨ておいては、乳母が短氣な事でもして、あの千之助が路頭に迷ひわしを恨むは知れたこと、假令頼みの金は出來ずとも力を附けて言延し、金の工面に取り掛らう（ト門口へ來り、内を窺ひこちらへ來り、）せめて一圓でも持つて居れば、見舞に來たと入られるが、どうも手ぶらでは入りにくい、いつそ寄らずに出直さう。（ト花道の方へ行きかけ、）いや〳〵それでは爰まで來て、こつちの心が屆かぬゆゑ、やつぱり寄つて力を附け金を言延べて歸るとしよう。

ト門口の外にまご〳〵してゐる、おしづこなしあつて、

しづ　これ千之助、誰か表へ來たではないか。

千之　誰が來ようとも大丈夫だ、もう掛取りには恐れねえ。

トこちらへ來て門口をあけろ、これにて林之助びつくりして、

林之　おゝ千之助、歸つて居たか。

千之　や、若旦那さまでござりましたか。

しづ　なに、若旦那がおいでなされた。

千之　さあ〳〵おはひり下さい。（トこれにて林之助是非なく内へはひり、）

林之　乳母や、久しく御無沙汰をしました。

しづ　これ千之助疊がきたない、せめて寢蓙なと敷いたがよい。

千之　あい〳〵。（ト押入より破れた寢蓙を出し上手よき所へ敷き、）さあ若旦那さま、これへお坐り下さりませ。

林之　いやそれでは却つて面目ない、必ずともに構はぬがよい。

しづ　はてむさくるしうござりますから、どうぞあれへお坐り下さい。

ト これにて林之助是非なく上手へ住ふ。

千之 祖母さん、お茶でも買つて來ようか。

林之 あゝこれ、決してそれには及ばぬ、茶などを買はれてはわしが困る。

ト この内おしづ蒲團より這下りて、

しづ 扨若旦那さま、何とお禮を申しませうか、口では申し盡されませぬが、以前の誼を思召され世に落果しわたくし共をお救ひなされて下さりまして、有難い事でござりまする、お蔭さまにて病人も大安心をいたしまして、これでは追々藥もきゝ全快いたすでござりませう。

ト 頻りに禮を言ふゆゑ、林之助術なきこなしにて、

林之 これ〳〵乳母や、其の樣に丁寧に禮を言はれては、わしは穴へでもはひりたい、成程さつき千之助から話しを聞いて氣の毒ゆゑ、僅かながらも貢ぐ氣で心はやきもきして居れど、何をいふにも出來ぬは金。

しづ さゝ、其の出來難い金子をば十圓まとめて下さいますとは、なか〳〵容易な事ではないと、實はどうして御都合をなされし事かと、老の身の取越し苦勞をいたすくらゐ。

林之 さあ、十圓出來るか五圓出來るか、そこの所は知れぬけれど、遲くも明日の夕方までには、工面

をしてよこしませう。
千之　いえなに、さつきお使ひで屆きましてござりまする。（トこれを聞き林之助びつくりして、）
林之　なに、使ひで屆いたとは、
しづ　さあ、四十恰好な使ひのお方が、あなたさまから賴まれたと金子を十圓お持ち下され、使ひの事ゆゑ面倒ながら端紙でよいから、請取をくれとおつしやりますゆゑ、千之助に印紙を買ひにやりまして、請取を書き判を押しお渡し申してござりまする。
千之　それでは先刻のお使ひは、あなた御存じござりませぬか。（ト林之助合點の行かぬ思入にて、）
林之　さうして使ひの持つて來た、其の十圓はまことの札かな。
　　トこれにておしづ蒲團の下より紙に包みし札を出し、
しづ　一圓札で此の通り、十枚屆いてござりまする。（ト出す、林之助改め見て、）
林之　僞物にあらぬ眞の札、はて、何者が屆けしか。
千之　それではもしや門違ひで、持つて來たのぢやありますまいか。
林之　（思入あつて、）いや、こりや千之助の孝心を神や佛も憐みて、貧苦を救ふ天の惠み、よも門違ひではあるまいわえ。

しづ　とあつて出所もたしかならぬ、お金をお貰ひ申したとて、遣ふわけにもなりませぬ。
千之　慾張り大家に話したら、取り上げばゞあにするかも知れぬ。
林之　いや、後日に主が知れたらば、此の林之助が借りた積りで二人の科にはせぬ程に、心おきなく此の金で、諸方の拂ひをするがよい。
しづ　道ならぬとは思ひますれど、貧苦に迫りどの道とも、なくてかなはぬ切羽ゆゑ、
千之　若旦那さまのお詞に、隨ひますでござりませう。
林之　いづくの誰が惠みしか、不思議な事もあるものぢや。

トよろしく思入、やはり四ツ竹の合方になり、花道より家主武太兵衛半纏着流し下駄がけにて先に立ち、宇四郎の米屋、勘次郎の薪屋兩人着流し前垂掛にて通を持ち出來り、花道にて、

武太　これ〳〵二人の衆、あんな貧乏人を相手どつて願つた所が入費損で、向うの入費を差配人が立替るやうな事に成行き、甚だ迷惑しますから、それよりわしが承知だから家のがらくたをあらひざらひ、貸の抵當に持つて歸らつしやい。
宇四　家のがらくたといつた所が、油揚のやうな三布蒲團に荒布のやうな搔卷が一枚、腐つた疊が三疊半に反古張障子が二三枚、行火が一つに口の缺けた藥土瓶や七輪では、五厘の直打も覺束ない。

勘次　金氣といつたら臺所に鍋が一つあるッきりで、素麵箱に古手桶、瀨戶物小鉢をかき集めた所で、天道干に並んでゐる一品文久の代物ばかり、掘出し物にならうといふめぼしいものは一つもない。

武太　はてそこが所謂百貫の抵當に編笠一蓋で仕方がない、此の差配人もあんな者にいつがいつまで店を塞がれては、店賃は取れず手數はかゝる、こんな迷惑な事はない。

字四　御差配人が承知なら、構ふ事はない、やッつけませう。

勘次　斯ういふことなら道具屋でも、一緒に連れ立つて來ればよかつた。

武太　まあ、ともかくも責掛けさつしやい。（ト三人舞臺の門口へ來て、）

三人　さあ〳〵、來たぞよ〳〵。（ト内へはひる。千之助見て、）

千之　大家さまも御一緒に、米屋さんに薪屋さん、よくおいでなされました。

武太　いや〳〵何でよく來るものか、あんまり貴様達がいゝけづるいから、心持惡く出掛けて來たのだ。

字四　御差配人へ斷つて、今日こそ一番頗ひつけようと、二人揃つて出かけて來たを、

勘次　大家さんの御理解で、身代限りと相場が極り、家中さらつて歸るのだ。

武太　さあ〳〵身ぐるみ、

三人　脫いだり〳〵。（トわや〳〵言ふ。）

しづ　成程段々あなた方へ差上げまするお拂ひも、延び／＼になりましたゆゑ、そのお腹立ちは御尤もなれど御覧の通りお客もあれば、まあお靜かになされませ。

武太　え丶客來があるの何のと、しやあ／＼とした落着き顏。

宇四　客といふも、大方借金取りか代言人だらう。

勘次　まご／＼するとがらくたでも、向うへ持つて行かれるから、

武太　わしが承知だ、やッつけなされい。

宇四
勘次　さうしませう／＼。

ト三人立ちかゝり、臺所道具を前へ持ち出し並べる事あつて、トゞ林之助の前にある行火を取りあげ下手へ持つて來、敷いてゐる寢蓙をあげにかゝる、この内林之助煙草を呑みゐて、此の時むつとせし思入にて、

林之　え丶、人に一言の挨拶もなく、餘りと言へば無法な衆達だ。

武太　いや無法も作法もあるものか、爰の店を貸しておく此の差配人が先へ立ち、店立てをする貧乏神。

宇四　貸した錢をよこさぬから、不足ながらもがらくたを家中淩つて持つて行き、それで勘辨してやるのだ。

勘次　いはゞこつちは大負けに負けた捌きのお客さま、客であらうが親類だらうが、遠慮會釋があるものか。
武太　それともこなたが中へはひり、
宇四　貸した拂ひをすつぱりと、
勘次　綺麗に勘定つける氣か、
武太　それが出來ずば、
三人　退いて居なさい。
林之　さうして幾干ありましたら、拂ひが綺麗に附きますな。
武太　おゝ五十錢づゝの店賃が三月溜つて一圓二分、今月になり今日までを日割にすれば日に二錢、六日溜つて十二錢。
宇四　こんなにづるいと氣も附ず、二分づゝ送つた米の代も一斗が二斗と度重なり、地藏の顏も三斗六升、金に直して三圓一分、
勘次　土釜が二俵に炭團が十五、薪が十把で一からげ三錢づゝゆゑ三十錢、都合で一圓八十五錢、
武太　双方しめて六圓二分と、

宇四　二十二錢の勘定だが、

勘次　家中さらつて、

林之　それでは七圓おげましたら、一分と三錢釣錢が來ますな。

三人　負けてやるのだ。

武太　そりやあ言はずと、

三人　知れたことだ。（ト林之助件の札を七枚出し、）

林之　さあ、改めて請取らつしやれ。

三人　やあ。（トびつくりする、合方きつぱりとなり、）

林之　いくら借りがあるかは知らぬが、十圓あつたら追附かうと、これこの通り持つて來て、拂ひを取りにござるを先刻から待つて居ました、長屋の差配もなさるといふお前さんも無慈悲なら、また米屋さんも薪屋さんもあんまり因業ではござりませぬか、とさあ、厭なことを言度いとこだが病人で居る年寄りや、小供に免じて何事も言はずにお歸し申しますから、拂ひを取つたら近所の衆あとを送つてやつて下さい。

武太　いやさういふ慥かな身寄の衆が、後楯に附いてござれば、これで大家も大安心。

宇四　米屋もこれから安心して、どん〳〵米を送りませう。
勘次　まき屋もぱツぱと燃えるやう、枯れた薪を送りませう。
しづ　それでこちらも、安心して、
千之　肩身が廣くなりました。
林之　いや地獄の沙汰も。（卜件の札を下へ置くを道具替りの知せ）金次第ぢやわえ。
　　卜皆々引つばりよろしく、四ツ竹の合方にて道具廻る。

（邊見宅遺言狀開きの場）＝本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し障子屋體、正面上の方一間の床の間こ の次一間地袋違ひ棚、下手一面腰張りの茶壁、總て邊勢の宅奧座敷の體。爰に以前の五郎右衞門遺言狀を持ちて眞中に住ひ、上手に勢左衞門、おらん、おしな、下手に藤太郎、蒙八の番頭住ひ、この見得合方にて道具留まる。

勢左　先づ兎も角も遺言狀を開いて、讀んではどうでござるな。
五郎　いや〳〵親類一同が列座の上で開かねば、後で兎や斯う苦情があると、死んだ佛へ言譯がござらぬ。

藤太　さうして本町の雅羅臼さまや、太田町の山當さまは、まだお見えなされませぬかな。
蒙八　今又小僧を追ひ迎ひに、急がせてやりましたれば、程なくおいでゞござりませう。
らん　遺言狀を開封して、形見の高が極らぬ内は、どうやら心が落着きませぬ。
しな　何の事はない、無盡に行つて鬮を引く前のやうに、胸がどき〳〵するわいなあ。
勢左　これ〳〵蒙八、もう一度誰か迎ひにやるがよい。
蒙八　いいえ、迎ひに參つた野毛松が、まだ歸つて參りませぬ。
勢左　いや小供では埒が明かぬ、貴樣急いで行つて來い。
蒙八　いいえ、わたくしが參りませんでも、程なく見える時分でござります。
勢左　えゝ何時まで待つて居られるものか、行けといつたら行かねえか。
蒙八　へい〳〵畏りました。（ト澁々立たうとする、爰へ下手の障子を開けおえい出て、）
えい　只今お歸りでござりまする。
らん　おゝ野毛松が歸つたか。
しな　御親類も一緒であらうの。
えい　いいえ、林之助さんがお歸りでござりまする。

勢左　え丶あんな奴はどうでもい丶。
五郎　いやく戻りし林之助どのは、藤右衞門どの丶身寄りゆゑ、是へ來るやう、さう言つて下さい。
えい　畏りましてござりまする。（ト下手へはひる。）
蒙八　どれ、わしも行つて來よう。（ト下手へはひろ、入替つて以前の林之助出來り。）
林之　これは五郎右衞門さまを始めとして、長崎よりのお使ひのお手代、只今見世で承はりますれば、藤右衞門さまには御養生叶はず、たうとう御病死なされし由承はつて驚き入り、遠路のことゆゑ御末期にお目にか丶らぬ此の身の殘念、たゞく愁傷いたしまする。（ト皆々へ辭儀をする。）
藤太　扨はあなたが惠府の御子息、林之助さまでござりましたか、私事は門戶の手代藤太郎と申す者。以後はお見知り下さりませ。
林之　左樣ならお前樣が豫てお名を聞き及びし、藤太郎どのでござりましたか、定めて伯父の病中もお手を盡され御丹精を、なされたでござりませうが、其の甲斐もなく相果てまして、お力落しお察し申しまする。
五郎　林之助どのは藤右衞門どの丶、肉身分けし甥なれば、遠慮に及ばぬこれへござれ。
林之　それでは餘り高上りゆゑ。

五郎　はて、不斷とは違ふゆゑ、遺言狀を讀むまでは、血緣の者が上席ぢや。

林之　左樣なら藤太郎どの、眞平御免下さりませ。

ト藤太郎へ會釋して五郎右衛門の次へ住ふ、此の内勢左衛門、おしな、おらん立つたり居たりして、待ち詫びるこなしにて、

勢左　えゝ、まだ親類は參らぬか、第一使ひが野呂間だからだ。

らん　又異人館で玉轉しでも、見て居るのでござんせう。

しな　母さんわたしが、一走り行つて來ようぢやござんせぬか。

藤太　はて其のやうにお急きなされずとも、もう程なく見えられませう。（ト此の時下手障子の内にて、）

蒙八　さあ〳〵お早くおいでなされませ。

勢左　やれ〳〵、嬉しや、見えたやうだ。

ト合方きつぱりとなり、下手より以前の蒙八ついて臼右衛門、後より山本當助、散髮鬘羽織着流しの親類にて出來る、林之助これを見て、

林之　こりや、わたくしが是れに居ては。（ト立たうとするを留めて、）

五郎　はて、今日ばかりは爰に居さつしやい。（ト無理に住はせる。）

臼右　勢左衞門どの、先刻はおやかましうござつた。
勢左　二度まで迎ひをあげたのに、大そう遲いではござらぬか。
臼右　いや、太田町が一緒に行くと言傳をしてよこしたので、待合せて居て遲くなりました。
當助　(前へ出て、)思ひも寄らぬ、廻狀を讀んでびつくりいたしましたが、長崎表の藤右衞門どのにはとんだ事でござりました、緣者の衆のお力落し、嘸かし御愁傷でござりませう。
勢左　いやく紋切形の悔みなどは、長々しいから預りにして、後でゆつくり言ふとしませう。さあく、これで人數が揃へば、
しな　お早くお開きなされませ。
五郎　いや、まだこれへもう一人、血緣の者が坐らねばならぬ。
勢左　いやく、これでよい筈ぢや。
五郎　はて、倉田の娘がもう一人、是れへ列坐せねばならぬ。
らん　いえ、あのおくらはわしの姪ゆゑ、形見分なら二人前、
しな　母さん、わたしが預からうわいなあ。
林之　丁度只今次の間に、涙に暮れて居りましたゆゑ、これへ呼んでやりませう。

らん　えゝ、呼ばいでもよいといふに。

蒙八　いえ、別に手間は取れません、おくらさん〳〵。

ト呼び立てろ、これにて下手より以前のおくら、悄々として出で、下手下に居る。

くら　何ぞ御用でござりまするか。

藤太　只今主人が形見分の遺言狀を開きますから、お血筋ゆゑに林之助さまのお側へおいでなされませ。

くら　いえ〳〵、これが勝手でござりまする。（トやはり下手に居る。）

臼右　これで人數が揃ひし上は、

當助　藤右衞門どのゝ遺言狀を、

勢左　さあ〳〵、早く讀み上げて下さい。

五郎　わしの名宛で屆きしゆゑ、嗚呼がましいが讀み上げませう。

ト　これより誂への合方になり、上手に勢左衞門、臼右衞門、おらん、おしな、下手に林之助、當助、藤太郎、蒙八、おくら、眞中に五郎右衞門件の遺言狀を取上げる、皆々耳を澄して聞くこなしよろしく。

『形見分遺言狀の事、一、我等儀商法上の都合に依り、先年此の地へ引移り開店以來運に叶ひ

繁昌致し居り候所、此の度不慮の重病に臥し、藥用手當等屆き過ぎ候程手を盡し候へ共、全く定命の來りしにや冥土黄泉へ旅立ち候事是非もなき次第に御座候。たゞ〳〵殘念に心得候は、我等不幸にして孤獨の身ゆゑ家督を讓るべき、一子御座なく賴みに思ふ親族とても皆故鄕なる其の御地にて國を隔て候ゆゑ、末期の際に至り候ても他人のみの世話に相成り空しく相果て候は、約束事とは申しながら遺憾の至りに御座候。』（ト是れを聞き上手の四人態と愁ひの思入にて、）

勢左　おゝ、尤もぢや〳〵、嘸末期の際までも親類の者に、唯一目逢ひたかつたであらうわえ。

臼右　病氣と聞いて蟲が知らせ、明日にも蒸汽で見舞に行かうと土產物まで買ひ調へ、

らん　えゝ、そんならこなた早まつて、もう見舞物を買はしやつたか。

しな　それでは半口母さんと、乘つたお金が無駄になり、

勢左　こつちもやつぱり、

四人　殘念ぢやわえ。

林之　して〳〵、お後は五郞右衞門さま。

當助　何と認めござりまするか。

藤太　承はるも涙ながら、

蒙八　これから先が肝腎ゆゑ、

くら　お讀みなされて、

五人　下さりませ。

五郎　『就いては、身寄り緣者の方へ垢附の形見にても差送り度候へ共、里數隔てし此の地の儀ゆゑ所有の金圓爲替手形にて差送り候間、御手數ながら名宛通り貴所より御分配下さるべく候。一、金千圓、右は一の親類貴所樣へ形見のしるしに差送り候間正に御落手下さるべく候。一、金五十圓右は太田町山木當助殿儀、我等此の地へ引移り候てより遠路の所毎度心に掛けられ、新聞を送り下され候ゆゑ御禮として形見の印に些少ながら差送り候、次は本町の臼右衞門殿儀は親類とは申しながら、商法上の取引より入魂を結び候までにて、我等此の地へ引移り候ても音信不通に御座候間。我等病死の儀を御申し傳へ下され候のみにてよろしく〳〵』

ト これを聞き臼右衞門氣を揉み出し、

臼右　これ〳〵五郎右衞門どの、其の遺言狀當てにならぬ、如何にこなたが讀まつしやるとて、おのれの田へのみ水を引き、此の臼右衞門に傳言のみとは、當ずつぽうを讀むのであらう。

五郎　いや、何もわしが讀めばといつて、勸進帳ではあるまいし、書いてないものが讀まれませうぞ、

疑はしくばこれを見さつしやい。（ト件の遺言状を突附けて見せる、臼右衛門よく／＼見て、）

臼右　えゝ、斯ういふ事と知つたなら、不斷手紙の音信でもしておかうもの、忌々しい。

勢左　扨これからがこつちの番だ、切つても切れぬ縁者の上に斯うして身寄りを二人まで、世話をして置く大親類。

らん　しかし初筆に記してある、一の親類が千圓では、

しな　たいがい相場が知れて居れば、百圓位でござんせう。

勢左　いや／＼向うの身代は何萬圓と聞いて居れば、まだ／＼こんな事では。さあ／＼、讀んで聞かせて下さい。

五郎　（又遺言状を取り上げ、）『金百圓、右は以前本町に絲問屋致し居り候倉田惣右衛門儀は、我等父の代より重縁の親類にて二ヶ年以前病死後相續人娘くら事、境町の伯母の方へ引取られ厄介人と相成り居り候由不便の至りに存じられ候間、當人身に附き候やう致し度く然るべき縁も御座候へば、貴所の御周旋を以て、縁邊の儀御取結び下さるべく候。』

らん　えゝ、そんなら姪のあのおくらに、百圓形見を下さるとか。

しな　成程これでは後の方でも、なか／＼馬鹿にはなりませぬ。

くら　不便な奴と思召して、藤右衛門さまのお情お慈悲、有難い事でござりまする。

藤太　これから跡に殘りしは、林之助さまとこちらのお宅、如何なる形見が記してあるか、現在使ひに參りし者すら、主人の深慮は分りませぬ。

勢左　無盡でいへば爰等が切分け、年のせゐゆゑ此の頃は耳がぐわん〱してならぬ、大きな聲で五郎右衛門どの、高らかに讀み上げて下せえ。

五郎　『次に長崎へ移りてより、此方よりは書狀を出し、寒暖の見舞として國產なども度々贈り候へ共つひに一度返書も送らず、餘りと申せば不實意に存じ候ゆゑ、形見として金三圓』

ト讀みかゝるゆゑ、勢左衛門氣の揉めるこなしにて、

勢左　これ〱五郎右衛門どの、それは大方林之助めであらうの。

五郎　いや、『邊見勢左衛門殿親子三人へ。』

三人　えゝ、（トびつくりなし、）

勢左　これ常談も時によるわえ。

五郎　いや、常談ではない。此の通りだ。（ト勢左衛門に見せる、勢左衛門よく〱見て、）

らん　旦那どの、

しな　父さん、
勢左　えゝ忌々しい。（ト遺言狀を打ち附ける。）
當助　して〳〵、これなる林之助どのへは、何程形見を分けられしか。
蒙八　親子三人三圓では、此の番頭はあきらめもの。
くら　後をお讀み下さりませ。
五郎（件の遺言狀を取上げ。）『右不實意なる伯父に引替へ、遠路の所長崎まで月々機嫌きゝの書狀を送り多年の間實意を盡し心に掛けくれ候は、壯年の身ながら行き届きし心底の程實に感心致し居り候且又我等肉身分けし一人の甥に候間、惠府林之助へ形見として金二萬圓遣はし申すべく候。』
トこれを聞き勢左衞門思はず立上り、
勢左　なに、二萬圓、むゝゝゝ。
トびつくりして氣絶する、これにて皆々驚き、おらんおしな勢左衞門を介抱して、
らん　これ〳〵旦那どの、どうさつしやつた。
しな　こりや癲癇と見ゆるわいなあ。
蒙八　癲癇ならば草履がいゝ。

ト有合ふ上草履を取つて勢左衛門の頭へ載せ、手拭にて結へつけ、

親類皆々 勢左衛門どのいなう。

らん 旦那どのいなう。

しな 父さんいなう。（ト皆々にて呼び生ける、勢左衛門心附き、）

勢左 いや死にやあしねえ、大丈夫だ／＼。

白右 そんならいよ／＼林之助は、伯父の形見を二萬圓、

五郎 それ、此の通り相違はあるまい。（ト突き附けて見せる。）

らん えゝ今度は、ほんまに悲しくなつた。

しな 母さん、わたしも悲しいわいなあ。（ト兩人めそ／＼泣出す。）

林之 いやも夢にも知らぬ二萬圓、お形見分を下さるとは、潰れし家名を立てよといふ、亡き伯父さまのお情お慈悲、こんな嬉しい事はない。

藤太 （懐中より手形を出し、）大金ゆゑに爲替にて送る積りで此の如く、何れも手形で持參いたせば、御銘々にお渡し申しまする。（ト林之助、おくら、當助へ渡し、）金三圓の爲替手形、勢左衛門さまお受取り下さりませ。（ト勢左衛門の前へ出す。）

勢左　え丶こんなものが、(ト打附けようとするを、おしなおらん、モシと兩方の袖を引くゆゑ、勢左衛門思入あつて、) 取らぬにましか。(ト懐へ入れる。)

五郎　いや流石は、門戸藤右衛門どの、

當助　賞罰正しきお形見分け、

藤太　潰れし恵府のお家も立ち、

林之　こんな嬉しい事はなく、

くら　お目出度いことでござりまする。

勢左　そつちは定めて目出度からうが、

らん　こつちは少しも目出度くなく、

しな　こんな悲しい事はない。

臼右　とんだ見舞の買損をした。

蒙八　それも日頃の強慾から、

臼右　やあ。

蒙八　いいえ、お早くお歸りなされませ。

門右　えゝ、おのれが言はずと、勝手に歸る。

五郎　どれ、親類一同、

常助　これにてお暇、

藤太　いたしませう。

林之　これなる手形は、五郎右衛門さま。

くら　あなたへお預け申しまする。（ト兩人手形を出す。）

勢左　いや、その手形はおれが預かる。（ト取りに掛るを、五郎右衛門手早く引取り、）

五郎　いや佛の遺言、（ト手形と遺言狀を持つて立上るを木の頭）反故にはなるまい。

　トにつたり笑ふ。勢左衛門、おらん、おしな手形が欲しきこなし、林之助おくらは嬉しきこなし。跡皆々引ばりよろしく、木琴入りの濱唄にて、

ひやうし　幕

二幕目大切

横濱本町惠府新宅の場
同　境町邊見見世の場
同　波戸場脇海岸の場
同　惠府林宅婚禮の場

〔役名――惠府林之助、邊見勢左衞門、毛織五郎右衞門、壽無田宇津藏、雅羅田臼右衞門、代言人口上糊ス實は落語家梅生、邊見番頭蒙八、惠府の若者藤七、同喜助、同錦藏、邊見若者鐵造、電吉、荷介。邊見の妻おらん、同おしな、おらんの姪おくら、下女おえい。〕

（惠府新宅の場）――本舞臺四間通し常足の二重、更紗の暖簾口、左右の棚薩摩燒金入畫模樣の花瓶、香爐、茶碗、大皿などの書割、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方食違ひに土藏二棟、此前に惠府林と記せし用水の桶、總て横濱本町陶器店の體。爰に喜助、錦藏散切紺の前垂手代のこしらへにて陶器を帳面に記し居る、藤七羽織着流しにて眞中に住ひ、下手に○□△の三人羽織着流しにて足附の鰹節箱を前へ置き控へ居る、小僧三人へ茶を出して居る、此の見得、合方へ異國の鳴物を冠せ幕明く。

小僧　へい、お茶をおあがりなされませ。
三人　これは〳〵、有難うございます。

藤七　してお前さまは、何方からおいでなされました。

○　へいわたくしは辨天通りの、元濱十兵衞の手代の者でござりまする、惠府林さまには御舊地へお立歸りで御開店は、まことにお目出度いことでござりまする、わざとお祝ひ申しまする。

藤七　御丁寧に御祝ひ下され有難う存じまする、主人お目に掛りますでござりますが、只今客來にござりますれば、これよりお禮を申し上げます、して又そちらのお二人さまは。

△　手前ことは太田町の、吉田七右衞門の代の者にござります。

□　又わたくしは馬車道の、櫻木五郎兵衞の代の者にござりまする。

△　御先代林左衞門さまとは、まことに御懇意にいたしましたゆゑ、

□　どうか相變らず先々通りお取引を願ひます。

△　これはほんの印ばかり、

□　お祝ひ申し、

兩人　上げまする。

藤七　舊地とは申しながら、いはゞ歸り新參ゆゑ手前方から皆様へ、お願ひ申しに出ます所、まことに恐入りまする。

○　何れ主人も、お祝ひに、出まするでござりますが、
△　憚りながら旦那様へ、
□　よろしく仰せ下さりませ。
藤七　申し傳へますでござりまする。
○　左様なればわたくし共は、
藤七　まだ宜しいではござりませぬか。
△　先づお暇、
三人　いたしまする。（ト三人辭儀をなし、右の鳴物にて下手へはひる。）
藤七　これ小僧、この箱を片附けておけ。
小僧　はい〳〵。（ト鰹節箱を片附ける、）
藤七　今朝ッから祝儀の人で、何をする事も出來ぬ。
喜助　まことに人は正直なもので、家の旦那が零落中は詞もかけぬ其の人が、二萬圓のお形見で爰へ店をお出しになると、
錦藏　やれ以前の近附だの、昔は懇意にしたのといつて、うるさく人が出て來るが、みんな金が見當て

だか、氣の知れたものではない。

藤七　世界は開化に進むほど人が薄情になるといふが、成程學者の言ふ通り、落目になれば往來で逢つても顔を背けるのに、

喜助　ろく／＼顔も知らぬ者が、俄かに追從輕薄を言つて來るのも無理ではない、一夜の中に二萬圓の金がお手にはひつたからだ。

錦藏　これといふも日頃から不實な心が少しもなく、目上の人を敬つて遙々遠い長崎まで、よく音信をなされたゆゑ。

藤七　門戸さまからそれを褒め、二萬圓と、いふ金をお形見に下すつたのだ。

喜助　其の古への富でさへ、千兩取りが高だのに、二萬圓お手に入るとは、

錦藏　何といふ御運だか、斯ういふ所に仕へるのは、奉公人まで仕合せだ。

藤七　この御新宅のお祝ひに、諸方から來る遣ひ物、

喜助　鰹節玉子はいふに及ばず、

錦藏　鯛や海老の山をなし、

藤七　ほんに肴の喰ひあきだ。

ト右の鳴物にて花道より前幕の臼右衛門羽織着流し駒下駄にて、下男鰹節の箱を持ち出來り、花道にて、

臼右　こりや杢助、惠府林が本町へ見世を出したは向うの家か。

下男　へい、左樣にござりまする。

臼右　成程これは立流な家だ、かゝる見世をば開くといふも、長崎表の門戸どのから形見に寄越した二萬圓、斯ういふ金を持つ者に、近しくせぬのはこつちの損だ。

下男　此の間まで食客でおいでなされた惠府林さま、大した事でござりますな。

臼右　こんな仕合せな事はない。（ト右の鳴物にて本舞臺へ來り、下男入替つて、）

下男　へい、お賴み申します。

藤七　はい、どちらからおいでなされました。

臼右　雅羅田臼右衛門でござりまする。

喜助　これは雅羅田さまでござりまするか。

錦藏　さあ〳〵お通りなさりませ。

臼右　左樣なら御免下され。（ト合方になり内へはひり上手へ通り住ひ、）御主人にはお内でござりまするか。

藤七　へい、宅にをりますでござります。

臼右　お内であらば臼右衛門がちよいとお目にかゝりたいと、御主人へ申して下さい。
藤七　畏りましてござります。（下奥にて、）
林之　雅羅田さまがお出でとか、（下奥より林之助羽織着流しにて出來り、）これは〳〵臼右衛門さまには、ようこそお出で下さりました。
臼右　御開店のお悅びに昨日參る所であつたが、脫れ難き用事があつて、大きに延引いたしました。
林之　御繁用でござりませうに、わざ〳〵お出でなされずとも、お使ひで宜しうござりますに。
臼右　いや〳〵使ひなどでは失禮千萬、自身に上らにやなりませぬ。これは甚だ些少ながら、わざとお祝ひ申します。（下下男に持たせし鰹節箱を取り、）こりや其の方は先へ歸れ。
下男　畏りましてござります。（下下手へはひる。臼右衛門鰹節の箱を林之助の前へ出す。）
林之　新居をお祝ひ下さりまして有難う存じまする。（下辭儀をする、臼右衛門思入あつて、）
臼右　扨此の度は御親父の跡を立てられ陶器の開店、以前にまさる御見世附き何れの棚もぴか〳〵と、光り輝く赤繪の金入、目を驚かすお見世附き、まことにお悅び申しまする。
林之　父林左衛門が大借に據ろなく家名を失ひ、所詮生涯開店は思ひも寄らぬことゝ存じ、暫く伯父の厄分になり徒に月日を過せしも測らず青雲の時到り、長崎表の門戸さまが厚き惠みのお形見分け

に、昔に歸りし陶器の開店、嘸や冥土で亡親が悅びまして居りませう。
臼右　草葉の蔭でどの位なお悅びだか知れはせぬ、實に冥土ばかりでなく此の世の一家親類まで、世間の見得になりまして、まことに嬉しうござりまする。
林之　御親類とは申せども遠い御緣のお前樣が、左樣に仰せ下さりますは、實に有難うござりまする。
臼右　いや血筋をいはゞ遠からうが、御先代とは近しくいたし、水魚の如く交はりました、以前に返りて親御同樣、どうぞ親しくして下され。
林之　それは緣家も少なきわたくし、お前樣よりわたくしから、親しくお願ひ申しまする。
臼右　どうした事かこれ迄は、つい御疎遠にいたしたが、これから先は火の中でも當家の事なら飛込む心、其の代りに又此方に困る事がござつたら、そこはどうか奮發して力になつて下さりませ、爰が親類の誼でござる。
林之　左樣な時がござつたら、及ばずながらお力になります心でござりまする。
臼右　それは千萬忝ない、斯樣な富家の親類を持つたはまことに身の仕合せ、いとゞ大きな此の體が猶肩身が廣くなります。
林之　これ、お茶を早く持つて來ぬか。

藤七　只今差上げますでございます。

ト前の鳴物になり、菓子鉢に茶を出す、此の内花道より前幕の勢左衛門羽織着流し駒下駄、おしな紋附裾模様綺麗なこしらへ、おらんも紋附の着附、おえい下女、何れも駒下駄、鐵造手代のこしらへ尻端折り草履にて、反物を臺に載せしを風呂敷に包み、是れを持ち出來り、花道にて、

しな　もし父さん、林之助さんのお家といふは、あの向うでござんすかえ。

勢左　おゝ二ツ藏のある家だ、丁度そつくり居抜きがあつて、地面ぐるみ買つたさうだが、まことに運のいゝ男だ。

らん　ほんに家に居る時分も、なに一ツ拔目なく、疵といふのは朝寐であつたが、とう〳〵果報を寐て待つたか。

えい　此の間までわたくしどもと、一つに御膳をあがつたお方が、

鐵造　居附地主の旦那樣とは、夢のやうでござりますな。

勢左　何にしろ、二萬圓の金を持つてる親類が出來たは、おれが仕合せ。

らん　何でも今日はこぢ附けて、

勢左　あゝこれ、往來中でいらぬ事を、

しな　早く向うへ參りませう。
鐵造　それが宜しうござりまする。
　　　ト皆々本舞臺へ來て、門口へ來り。
勢左　林之助は內かな。
喜助　はい、在宿でござりまするが、
錦藏　何方さまでござります。（ト門口をあける。）
勢左　誰でもない邊勢だ。
林之　これは伯父樣でござりまするか。
臼右　おゝ勢左衞門どのか、さあ〳〵これへ通らしやい。
勢左　誰かと思へば臼右衞門、もう摺込みに先へ來たのか。（ト內へはひる。）
らん　さあ娘、早くはひりや。
しな　わたしや何だか恥かしくつて。
らん　何の恥かしい事があるものかいの。
えい　さあ〳〵おはひりなされませ。

ト皆々内へはひり、勢左衛門おらんおしな三人上座に住ふ。

勢左 よい家とは話しに聞いたが、これ程とは思はなんだ、婆あどん見さしつたか、まことによい見世附だな。

らん よいとも〳〵申分のない見世附き、これを他人に取られるのは、いや、他人にあらぬ親類中、こんな嬉しい事はない。

しな 縁に繋がるわたしまで、お嬉しうござりますわいな。

鐵造 まことにお見事なことで、

兩人 ござりまする。

勢左 さうして、開店は何日さつしやる。

林之 やう〳〵棚廻りが出來いたし、明日開店いたしますゆゑ、後程お屆けに上らうと存じました所でござります。

勢左 義理堅いそなたゆゑ、大方そんなことであらうと、家でも噂をして居たが、

らん 一人體で留守居はなし、嘸お困りと思つたゆゑ、

しな 三人連れでお悦びに上りましてござります。

林之　手前の無人をお察し下されい、よくおいで下さりました。
勢左　これ鐵造、包み物を爰へ出しやれ。
鐵造　畏りましてござりまする。（ト風呂敷を解き臺に載せし反物を出し、）これは主人から御開店を、わざとお祝ひ申しまする。
林之　これは〳〵結構な品を、有難うござりまする。
錦藏　へい、お茶をお上りなされませ。
林之　これ、御酒の支度を早くしやれ。
錦藏　畏りましてござりまする。
勢左　あ、いや〳〵必ず構はつしやるな、他人ではない親類中に、馳走振りはいらぬことぢや。らんこの間までこちの家に親子同樣にして居た中、決して義理立てには及ばぬわいの。
臼右　勢左衞門どの御夫婦の言はるゝ通り、われ〳〵は切つても切れぬ親類中、構はぬ方が嬉しうござる。
林之　なか〳〵以つて開店前、家内も取込みをりますれば、お構ひ申すことは出來ませぬ。
勢左　その取込みを知りながら氣の毒ではあるけれど、ちとそなたへ密々に話したいことがあるが、若

い者を暫く奥へ。

林之　畏りましてござりまする。

臼右　いかなることか存ぜぬか、御密々とあるからは、

勢左　いや／＼貴様は脱れぬ親類中、その遠慮には及ばない。

林之　皆のもの、暫く次へ。

藤七　はッ、御内々とござりますれば、

えい　わたしどもゝ、とも／＼に、

鐵造　お奥へ一緒に參りませう。

喜助　さあ、おいでなされませ。（ト合方にて、藤七先に五人奥へはひる。）

林之　して密々にわたくしへ、お話しとおつしやりますは。

勢左　いや話しといふは外でもない、そなたとおれは甥と伯父、元より深い縁なれど猶も深く縁を結ばば、死んだそなたの兩親も草葉の蔭で悅べば、又この世に居る伯父伯母の我等二人も悅ぶ譯、まだ此の外に大悅びに悅ぶもの、ある譯だが、そなたはおれの言ふことを、うんと言つて聞いてくれるか。

林之　どういふことか存じませぬが、さう皆様がお悦びでは悪いことではござりますまい、よいことなら聞きますから、早うおつしやつて下さりませ。

勢左　それではきつと聞いてくれるな。

林之　して悦びとおつしやりまするは。

勢左　さあ、悦びといふは、これなる娘を、そなたの女房にやりたいのだ。

林之　え、悦びとおつしやりますは、其の事でござりますか。

らん　丁度二人は年頃もまことに似合ひ相應ゆゑ、お前が家に居た折から末々二人を夫婦にせうと親父どのと言つて居たが、まだ遅からぬこと、思ひその儘に延ばしおいたが、斯うして見世を出すからは無くてならぬ家の締り、早く女房を持つのが肝腎、見張るものが一人ないと、どの位臺所に損がたつか知れはせぬ。

しな　所詮不束な者ゆゑにお前のお氣には入るまいが、疾うからわたしは女房になる氣で、いつぞやお前が二見さんで寫した寫眞をこの通り、肌身離さず持つて居るのは朝夕一つに居る心、いつ親達が言出して縁を結んで下さんすかと、清正さまへ茶斷ちをして待ちに待つてをりましたわいな。

勢左　こりや娘ばかりぢやない、我等二人も同じこと末々妻す心ゆゑ、そなたの親父が死んだ後直ぐに

家へ引取つて息子のやうにしておいたのだ、親なき後は伯父が親、わるい事は言はぬから娘と夫婦になるがよい。

らん　知らぬ所から氣心も知れぬ者を貰ふより、一つ所にゐた二人、見合ひもいらねば身許をも問合せるにも及ばぬ中。

臼右　成程これは好い御緣、脇から貰ふその時は互ひに見得も飾りもあれば大した物が掛ります、邊勢さんと惠府林さんは親類中の水入らず、見得も飾りもいらざれば、こんな御緣は又とない、幸ひ爰に臼右衛門が居たも不思議な御緣ゆゑ、此の媒人は親類中でわしら夫婦がいたしませう。

勢左　成程外へ賴まずにこなたが媒人してくれゝば、他人入らずの身內ばかり、此の林之助の親父といふは我が現在の弟ゆゑ、元より深い緣者なれど親子となれば又一倍、緣が深くなることゆゑ、こんな悅ばしいことはない。

らん　兩親のないお前ゆゑ、親代りにわたし等が替り〴〵家へ來て、萬事の事を搔廻し、いや萬事の世話をするからは、第一家の爲めによい。

しな　わたしも思ひに思うたことゆゑ、お前と夫婦になるからは、お上さんのする事は、こりや言はいでも知れたこと、中働きから小間使ひ、下女の代りもいたします。

臼右　まことに一家親類の緣に緣を重ぬるは、此の上もない目出度いことゝ、幸ひ今日は日柄もよし直に
　　爰で極めるがよい。
勢左　そなたが貰ふ心なら、明日とも言はずこつそりと內祝言の杯して、娘を置いて行きませう。
らん　長々お前の世話をしたも魚心ありや水心、是非とも貰うて貰はにやならぬ。
しな　疾うから思ふ身の願ひ、どうぞかなへて下さりませ。
臼右　さあ〳〵早く惠府林どの、
勢左　色よい返事を、
三人　聞して下さい。（ト皆々詰め寄る、林之助困る思入）
林之　伯父さま伯父さま始めとして、臼右衞門樣まで共々に、御親切なそのお詞、實は家を持ちまして
　　も、留守居がなくて困りますゆゑ、
勢左　それを察して押掛けに、
らん　娘を連れて來たのだ。
臼右　さあ〳〵、早く返事をしなさい。
林之　さあ無くて困る所ゆゑ、直にも御返事いたしたけれど、其の御返事のならぬといふは、所々方々

言込みがござりますゆゑ、其の方を斷りませねば御返事がいたし難うござります。

勢左　おゝ二萬圓の身上ゆゑ所々方々から言つて來ようが、それはみんな金が目當で慾張つた奴ゆゑに片ッ端から斷るがいゝ、おれなどのは金に構はず、親類中で勸めるのだ。

らん　知つての通りこちの家も萬福長者といふではないが、その日に困る家でもなければ、何萬圓あらうとも、決して金には目を掛けませぬ。

しな　今お母さんの言ふ通り、わたしも金には目は掛けませぬ、押掛け女房に今日來たは、男振なら器量なら人に勝れたお前ゆゑ、それが目當でござんすぞえ。

臼右　そりや我等とても同じこと、今勢左衞門どのも言はれたが所々方々から言込むは、みんな二萬圓の金が目途、それに引替へ我々は金には少しも目は掛けぬ、たゞ親類中の濃くなるのを悅んでお世話するのだ。

林之　家を買つたも昨日今日、まだ開店もいたさぬのに所々方々から言込む嫁は、皆二萬圓の金が當て慾張連でござりますから。末々賴みになりませねば、迂闊に相談はいたしませぬ。

勢左　慾張連とは事變り、こちらなどのは親類合、一切金に目をかけず、

らん　末々思ふ伯父伯母が、親切づくの此の緣談、

しな　どうぞ貰つて下さるやう、
臼右　媒人役の我等もとも〴〵。
勢左　よい返事をば、
四人　いたして下され。
林之　直にも應と御返事を申し上げたうございますが、慾氣を離れた五郎右衛門様から申し込みがござりますれば、此のお話しを致しませねば御返事がなりませぬ。
勢左　その五郎右衛門も親類中、とや斯ういふ譯もなし、
らん　後で言うても濟むことなれば、
しな　後とも言はず今爰で、
臼右　强談めくが、此の返事を、
勢左　どうぞ早く聞かして、
四人　下さい。
林之　そりや何様おつしやるとも、どうも只今お返事は。
勢左　それでは折角伯父伯母が、

らん　爲めをば思ふ親切を。
しな　お前は無足にしなさんすか。
林之　中々もつて、さういふ譯では。
臼右　さうでなくば、貰はつしやるか。
林之　さあそれは。
勢左　但しは心にかなはぬか。
林之　さあそれは。
らん　貰うてくれるか。
林之　さあ、
四人　さあ、
五人　さあ〳〵〳〵。
勢左　否やの返事を、
四人　聞かして下さい。
ト四人詰寄る、林之助困る思入、此の内下手より宇津藏羽織駒下駄、梅生長き羽織木綿の襠高袴下駄、

代言人のこしらへにて出來り、門口にて內を窺ひ思入あつて、

宇津　いや御免下さい、惠府林さんのお宅はこちらでございますか。

林之　はい、惠府林は手前でございます。

宇津　左樣なら、御免下さい。（ト門口を明け內へはひる。林之助見て、）

林之　何方かと存じましたら、壽無田宇津藏樣でございましたか。

宇津　まことに久々お目に掛りませぬ。

臼右　いや何方樣か存じませぬが、わたくしどもは皆親類、ら
ん　內輪の者にございますれば、御遠慮なされず、先づ〳〵これへ。

宇津　いや、餘りそれでは高上り、

勢左　いえ、お構ひなされませず、

らん　これへお通り下さりませ。

宇津　然らばどなたも御免下さい。（ト上手へ通り、梅生シヤツポを持ち、）

梅生　甚だ失敬。

ト辭儀をなし同じく上手へ通り、宇津藏の側へ住ふ、勢左衞門皆々は後へ下り樣子を窺ふ。

宇津　扨承はれば惠府林殿には大した金がお手に入り、昔へ返つて御當所へ陶器の開店なされしは、まことにもつてわれ〳〵も、悦ばしいことでござりまする。

林之　お聞き及びもござりませうが、長崎表の伯父が歿し、則ち惠みの形見金でこれへ宅を持ちましたが、親共からの御懇意ゆゑ疾くにもお宅へ上りまして、委細をお話し申さねばなりませぬ所でござりますが、何を申すもわたくし一人、それゆゑ御無沙汰になりました。

宇津　實は四五日あとからおいでをお待ち申しましたが、何の御沙汰もござりませぬから、今日上りましてござりまする。

林之　こちらから上らぬうち、あなたからおいでを蒙つては、まことに申譯がござりませぬ。

宇津　前以ておいでがあつたら、御相談づくに致さうと思つてをつた所なれど、おいでがないゆゑ今日はお掛合に參つてござる。（ト宇津藏きつと言ふ、林之助當惑の思入、勢左衞門思入あつて、）

勢左　これ〳〵林之助、二萬圓を目當にするあなたも嫁のお口入なら、親類共から貰ひますと、らん早くお斷りを申すがよい。

林之　いえ〳〵、左樣な譯ではござりませぬ。

臼右　そんなら嫁ではなかつたのか。

しな　それでわたしも落着いたわいな。
宇津　爰においでの皆樣は、御親類の方とあるからは、御遠慮申すに及ばぬから、是れにてお話し申します。
勢左　どういふ事か存じませぬが、親類中にござりますれば、
らん　御遠慮なさらず何なりと、
臼右　これでお話し、
三人　なされませ。
宇津　（思入あつて）今改めて言はずとも知つて居なさる事だけれど、お前の親父の林左衞門殿へわたしが貸した一萬圓、利息もろく〳〵取らぬうち思ひ掛けなく死なれてしまひ、地面家作有代物殘らず外へ書入の抵當に取られて家は退轉、家内の衆も散り〴〵に催促をする當もなく、一萬圓のその抵當に紙一枚を持つて居たが、紙魚に喰はれてしまふことかと思つて居たらお前の手へ、二萬圓といふ金がはひつたことを聞いたゆゑ、貸した時から今年までの利子を計算して見たら、一萬圓から上になるが、端たは負けて二萬圓、そつくり返して貰ひたい。
林之　それでは親父がお借り申した一萬圓のあの金は、一萬圓餘の利子が積り、二萬圓になりましたか。

宇津　これまで一度も催促せず、長々待つた其の代り、又貸すとても一度は元利揃へて二萬圓、器用に返しておくんなせえ。

林之　親父が死んで負債の爲、惡府の家名も退轉なし、暫く緣家の厄介になつてをります流浪中、遂に一度御催促をなされたことのないあなた、實に感心いたしました、それゆゑ元利揃へましてお返し申すでござります。

宇津　むゝ、それぢやあ元利二萬圓、揃へてお返しなされますか。

林之　へい、お返し申しまするでござりまする。

宇津　流石は親に孝心と噂に聞いた林之助さん、元利揃へて二萬圓後とも言はず返すとは、わたしもお前に感心した。

梅生　とやかう言はゞ壽無田氏の助言を仕ようと思つて來たが、元利揃へてそつくりと返すといふは珍らしい、こんな人が澤山あると、代言人は揚つたりだ。

林之　何も珍らしいことはござりませぬ、親父が借りたを子が返すは、こりや當り前でござりまする。

ト此の内下手で勢左衛門始め四人顔見合せ、うなづきあつて、

勢左　これ〳〵林之助ちよつと來やれ。(ト林之助を下手へ連れて來り、)さつきから掛合を默つて聞いて居

たが、何で親父が一萬圓あなたにお借り申したのだ。

らん　そんなに借りのあることは、ついにこれまで聞かなんだが、

臼右　いつたい借りたその金を、何に親父が遣つたのだ。

林之　堅い人ではござりますが、米相場が大好きで上ると見込んで買ひ込んだ米が非常の下りとなり、今日は賣らう／＼と待つて居るうちずん／＼下り、遂に彼方に一萬圓借りるやうになりましたが家藏まで抵當に入れる程ゆゑ金はなく、借用證を入れましてお借り申した一萬圓、元は相場にかかりまして損した金でござります。

勢左　それでは借りたは米相場のだれへ廻つて損した金か、假令一萬圓が二萬圓でも正金で借りたといふ譯ではなし、いはゞ博奕も同然な米相場の借りなどは、いくらあつても怖くはない。

臼右　そんな借りを今が今、返すには及ばない。

竿津　もしそこに居なさる親類方、お詞の中でござりますが、返すには及ばないとはどういふ譯か知らないが、御制禁の博奕で勝つた金なら知らぬこと、假令負勝はあらうとも天下晴れての米相場、金で貸したも同じこと、それも大きな勝負をするから一萬圓といふ金だが、居候に居る人に催促をしても無駄だから今日まで默つて捨ておいたが、昔にまさる陶器の開店、二萬圓といふ大金が

手にはひつたといふ事を、聞いたから取りに來たのだ、返さなくつてい丶金なら返すにやあ及はねえ、出る所へ出て取つて見せよう。

林之　いえ〳〵これは私が只今お返し申しますから、お腹をお立て下さりますな、全く親父が借りました金に相違ござりませねば、假令これなる親類共が何やう申しませうとも。

宇津　それぢやあ金を返しなさるか。

林之　元利揃へて二萬圓、お返し申しますでござりまする。（ト勢左衞門又林之助を引張つて來て、）

勢左　これ〳〵林之助、親の借りた金だから子が返すは當り前だが、餘りといへば馬鹿正直、これが十か二十の金なら返すのもよいけれど、元金といふ一萬圓は空米相場で損した金、まだその上に一萬圓、たゞ取られる利息まで、そなたは揃へて渡す氣か。

らん　形見に貰つた二萬圓、それで地面や家作を買ひ、見世の仕入れや何やかや、しな大したお金が入りましたらうに、

臼右　元利揃へて二萬圓、どうしてこなたは返す氣だ。

林之　一萬圓の爲替手形に地面家作有代物、そつくり附けて渡す積り。

宇津　さういふお前が料簡なら、假令二萬圓にならずとも、こつちも不足で料簡しませう。

勢左（これを聞き思入あつて、）それではこなたは二萬圓の、借りた地所から家藏まで、そつくり渡してしまふ氣か。
らん　こんな馬鹿げたことはない。
臼右　こりやあわたしに任しなせえ。一萬圓の借高へ半金入れゝば結構な、言分なしの掛合だ。
林之　いえ〳〵それでは濟みませぬ、親の借を子が濟すは、こりや當然でござりますから、揃へてお返し申します。
勢左　當然だらうが何だらうが、古い借をそつくりと返すものがあるものか。
らん　こりや代言人の眞似をする、臼右衞門さんに任しなせえ。
臼右　おれが引受け裁判所で、半金濟しにして見せよう。
林之　そりやさうでもあらうけれど、不意に貰つた二萬圓、貰はぬ昔と思ひますれば、親父が借りた一萬圓を返したゞけが儲けゆゑ、悔む所はござりませぬ。
勢左　えゝ聞けば聞くほど馬鹿々々しい、貴樣はそんな慾のない時世に合はぬ料簡だから、悔む所がないか知らぬが、娘をやつて其の金をおれが自由に、いやさ、おれが金ではないけれど、
らん　他人にあらぬ親類中、損をするのを見ては居られぬ。

臼右　何でもこれはおれが引受け、一裁判受けねばならぬ。

　　ト三人きつと思入、林之助は困る思入。

宇津　それぢやあお前方は、借主が返す金を横合から返すなと言ひなさりやあ、言はずと知れた故障人お前方が願はずともおれが方から願ひ立て、御用状を附けてやるから家へ歸つて待つて居ろ。さつきから聞いて居りやあ、おれを白癡だと思つたか、代言めかした事を言つて、いやに脅した事を言ふが、平假名付の用書を手本に讀みのくだらぬ漢語の文面、筋が立たねば書く字さへ横に寐て居る鐵釘流、裁判所へ出て突き戻され書直さうにも根が盲目、字引がなければまご〳〵と杖に離れた座頭同然、走らぬ筆の探り足何處等が鍼の利所だか急所を知らぬへつ、へつぽこ代言、返す金を返すなと惡く揉んで邪魔をすりやあ、故障の廉を言ひ立つて闇い所へ入れてやるぞ。

　　ト宇津藏思入にて言ふ、梅生前へ出て、

梅生　今日僕が壽無田氏と同道いたして參つたのは、とやかう言はゞ有無を論ぜず、出訴いたす心で參つた。年中斯うして大金を盛に貸せる壽無田氏、出訴の絕ゆる間がないから斯くいふ口の上糊が委任を受けて原告人、これまで被告に一度でも說破された事のないのは、產れが士族に幼年より學資を費し書生となり、勉強なして漢學から英獨二國の學に亘り、佛の民法を心得て府廳の試驗

を受けしゆゑ忽ち免許の代言人、北冥社の社員となれば二等と下らぬ僕が腕前、されば各區の分署から勸解又は裁判所、何處へ行つても先生と代言社會で立てられるは、條理を立てゝ義務を盡すから。今こなた衆が故障を言へば、それを書き立て出訴なすが今日僕が則ち職掌、片ッ端から勸解へ呼出してやるから待つて居ろ。（下梅生立掛るを林之助留めて、）

林之　そのお腹立は御尤もだが、先づ〳〵お待ち下されませ。假令これなる親類共が何と申しませうとも、親父の借りゆゑわたくしが耳を揃へてお返し申せば、先づ〳〵お待ち下さりませ。

梅生　そりやあお前が條理を立て、借りた金さへ返しなさりやあ、何ぼ僕が生業でも好んで出訴はいたしませぬ。

宇津　第一お上へお手數を掛けるのが恐れ入るから、待てといふなら待ちませう。

林之　唯今お返し申しますから、暫くお待ち下さりませ。

勢左　これ林之助、どうでもそれでは二萬圓、元利揃へて返す氣か。

林之　へい、親父の借りた金ゆゑに、どうも返さにや濟みませぬ。

しな　又これからは一人身で、流浪なさらにやなりますまい。濟まぬといふて有金から、地面家藏そつくりと渡してしまつたことならば、らん

臼右　あまりといへば馬鹿げた話し、是非ともわたしに任せさつしやい。

林之　いえ〳〵何とおつしやつても、お前方には任されませぬ。

勢左　人は正直がよいとはいへど、餘りといへば正直過ぎ、らん馬鹿に劣つた、しな恵府林さん。

臼右　えゝ、さりとは齒痒いことだなあ。

ト皆々悔しき思入、此の内林之助は奥へはひり手箱を持つて出來り、中より手形證文紙幣を出し、

林之　左樣なれば壽無田樣、一萬圓の爲替手形に居宅の地券、陶器の控へ、紙幣の殘りが千二百圓殘らずお渡し申しますから、不足の所は舊來の誼にお負け下さりませ。

宇津　おゝ負けますとも〳〵、爲替手形で元金の一萬圓がそつくり返れば、千二百圓の有金に地面家作に有代物、これ丈が只儲け、不足はいくらあらうともさらりと負けて證文は、お前へお返し申します。

ト宇津藏、勢左衞門皆々へ見せびらかす、四人は悔しき思入、宇津藏紙入から一萬圓の證文を出し林之助へ渡す。梅生感心なし、

梅生　これまで僕も壽無田氏の、委任を受けて貸先きを相手取つた事があるが、先づ被告から掛合へば

第一等が半金濟し、二等が三ツ割三分の一、三等四等は五分の一、僅かな金の入金に跡は月賦か年賦の濟方、二萬圓といふ金をそつくり返すは前代未聞、實に身代限りをする世間の太い借方に、爪でも煎じて呑ましてやりたい。（ト林之助證文をいたゞき、）

林之　噓やこれまで親父樣が、草葉の蔭でこの借りがお心掛りでございましたらう、唯今元利返濟いたせば、お悦び下さりませ。（ト勢左衞門四人は呆れし思入。）

勢左　借りたものを返すといふは、まことに道であらうけれど、先づ半金か三ツ一分、らん大概相場のあつたもの。しなお金は元より地屋敷まで、

臼右　殘らず渡してしまふとは、

勢左　餘りと言へば、

四人　馬鹿々々しい。

ト藤七、喜助、錦藏、鐵造、おえい出來り、

藤七　唯今奧で御樣子を、承はりましてござりますが、御先代の旦那樣が、

喜助　お借りなされた其の抵當に、地面家藏お金まで、

錦藏　お渡しなさるとあるからは、お抱へなされたわたくしどもは、
林之　氣の毒ながら今日限り、暇をやらねばなるまいわい。
藤七　御縁あつて良いお店へ、御奉公しましたと、
喜助　悦びました甲斐もなく、
錦藏　僅かなうちにお暇とは、
三人　本意ないことでござりまする。(ト三人手を突き別れを惜しむ思入)
鐵造　内の旦那もお孃さまを、嫁にやらうとおつしやりましたが、お家がなくてはこれも破談、
えい　爰をば早くお開きに、なされましたがようござりまする。
勢左　おゝ目當に思つた二萬圓の、金がなければ何が當に、可愛い娘がやれませう。
らん　まだしも遣らぬ其のうちゆゑ、これきり破談にすれば濟むが、
しな　來てから後であつたらば、仕樣模樣もない所
臼右　わしも媒人せぬが仕合せ。
林之　伯父樣始め皆樣へ面目もない事ながら、又もや元の身の上に零落なせし林之助、どうぞこれから
親類の誼をもつてわたくしの、力におなり下さりませ。

勢左　その親類は今日限り、餘りと云へば馬鹿々々しい、こなたに愛想が盡きたから、これから甥と思はねば、必ず伯父と思つてくれるな。

らん　目當の金がない上は、最早こなたに用はない、決して家へお出では御無用。

林之　そりやさうでもございませうが、切つても切れぬ親類ゆゑ。

臼右　その親類は噂にも是れから言つて下さるな、折角肥つた臼右衛門肩身が狹くなりますわ。

林之　それではこれからわたくしの、力になつては下さりませぬか。

勢左　誰が力になるものだ、人を恨むな心柄だぞ。（ト憎く言ふ。）

林之　はて、是非もないことぢやなあ。（ト林之助腕を組み、ちつと思入。）

宇津　さあ、此の家は一萬圓の抵當に取つた上からは、今日からしてはわしが家、お前方には用はないから、早く歸つてくんなせえ。

勢左　おゝ、歸らないでどうするものだ、居ろと言つてもこんな家に、

臼右　誰が長居をするものだ。

しな　さあ母さま、早く歸りませう。

らん　おゝ歸らうとも／＼。（ト立上り。）いやうつかりとは歸られない、先刻祝ひに持つて來たあの絲織

を返して下さい。

宇津　いや〳〵あれは一萬圓の、高のうちゆゑ返されねえ。

梅生　達て欲しくば十圓も、金を置いて行くがよい。

らん　十貫出せば新規に買へます。

鐵造　所詮こんな因業な人に言つても無駄なこと。

えい　早くお歸りなされませ。

　ト合方にて勢左衛門先きに皆々附き、花道へ行き」

鐵造　とはいへ、餘程な、

えい　金目な品を、

臼右　利息の抵當にしてやられ、

しな　大阪天滿の唄ではないが、

らん　こんな酷い目に逢うたことは、

勢左　絲織一反たゞ捨てた。（ト合方、異國の鳴物にて皆々花道へはひろ、林之助思入あつて、）

林之　もう四時過ぎでござりますから、暮れぬ其のうちわたくしはお暇いたすでござりまする。

宇津　斯う貸借の片が附けば、昔馴染の惠府林さん、今夜は一杯呑みませう。

梅生　知つての通り壽無田氏は俠客肌の氣性ゆゑ、お前の爲めにもならうから、今夜は泊つておいでなさい。

林之　有難うはござりますが、此の證文を菩提所へ持つて參つて石碑へ手向け、草葉の蔭の親父さまへお目に掛けたうござります。

藤七　そりやさうでもござりませうが、明日それを御菩提所へ、

喜助　お持ちなされましたとて、

錦藏　お遲いこともござりますまい。

林之　いや〳〵これは少しも早く、お目に掛けるが親父へ孝行、目には見えねど心の内に、嘸やお悦びなされませうと、思へば早く持つて行きたい。

宇津　親孝行のお前ゆゑ、さういふ心で居なすつては所詮止めても止まるまいから、これから直においでなさい。

梅生　身の振方の御相談が、あるなら明日出直して、ゆるりとおいでなさるがよい。

林之　御親切なる其のお詞、いづれ再び上りまして、お願ひ申すでござりまする。

藤七　それではこれより、

三人　あなたは直に、

林之　暮れぬそのうち菩提所へ、

宇津　左樣なれば惠府林どの、

林之　これでお別れ申しまする。（下唄になり、林之助しな〳〵と花道へはひる。）

藤七　どれ、わたくし共も荷を片附け、これから宿へ、

三人　下りませう。

宇津　いや貴樣達は置据ゑに、これからわしが抱へませう。

喜助　それではこの儘あと〳〵へ、

錦藏　お使ひなされて、

三人　下さりますか。

宇津　一萬圓の利息の抵當に地面家藏有代物、そつくりわしが取つたけれど、人がなくては困るから、貴樣達を改めて今日からわしが使ひたいのだ。

梅生　商人衆とはいひながら、一厘錢から取上げるけちな稼業と事替り、ちよつとしても百圓から何千

圓といふ高の、商ひをする米の相場師、惡いやうにはなさるまいから、出精して奉公しなせえ。
藤七　わたくし始め二人とも、中年者にござりますゆゑ、
喜助　半途でお暇が出ましては、まことに困り切ります所、
錦藏　跡へお使ひ下さりますれば、何より有難う、
三人　ござります。
梅生　時に旦那、お祝ひに一杯どうでござります。
宇津　おれも丁度呑みたい所、何ぞ肴を言ひ付けてくれ。
藤七　いえお肴ならば諸方から、貰つた魚が臺所に山ほど積んでござります。
喜助　幸ひ少しはわたくしが、料理心がござりますゆゑ、摑み料理にいたします。
錦藏　お酒も樽でござりますれば、先づ今日は有合で。
藤七　目出度くおあがり、
三人　なされませ。
宇津　それぢやあ骨はぬすまねえから、酒の支度をして下せえ。
三人　畏りましてござりまする。（ト合方にて三人奥へはひる。梅生四邊を見廻し）

梅生　もし旦那。
宇津　何だ。
梅生　まことに首尾よく行きましたが、お禮はいくら下さいます。
宇津　さうさ、いくらやつたものだらうか、先づお前の禮は片手だな。
梅生　なに、片手禮を下さいますえ、五百圓ではあるまいね。
宇津　慾張つたことを言ひなさんな。
梅生　それぢやあ五十圓下さいますか。
宇津　どうして〳〵、もつと下だ。
梅生　それより下では五圓かね。
宇津　まだ〳〵。
梅生　五百疋といふのは今はないが。
宇津　おれが片手は五十錢だ。
梅生　え、たつた二分かね。
宇津　何も驚くことはない、一枚貰へばたつた二分だが、十枚貰へば五圓だぜ。

梅生　む丶、百枚貰へば五十圓、え丶、忝けない。

ト宇津藏煙管で灰吹を叩く、梅生ワッと定九郎の鐵砲で打たれし思入。

宇津　とんだ五段目だ。

ト異國めいた唄にて道具廻る。

（邊勢宅の場）――本舞臺序幕邊勢宅の場の道具、爰に以前の勢左衞門、おらん、おしな住ひ、前の唄にて道具留る。

勢左　婆アどん、馬鹿々々しい目に逢つたぢやないか。

らん　馬鹿々々しいの馬鹿々々しくないのと、此の間からのことを考へて見ると、夢ぢやあないかと思はれますよ。

勢左　いつたい長崎から届けて寄越した、形見別けが不當な割方、いくら音信をよくしたとて二萬圓とは大したくれやう、おれが所へ遺言狀を持せて寄越せば開封して、調合して置いたけれど、流石は門戸も目が高い、正直物の五郎右衞門へ當て丶來たゆゑ仕方がないわえ。

らん　親類一同立合で居候の林之助へ、二萬圓の形見分け、餘りといへば氣の惡さに、

勢左　このおしなを女房に持たせ、そなたとおれが親顔で家の中を搔廻し、二三千圓ずゝ込まうと覘つた的の矢が外れて、

らん　あの相場師の宇津藏に一萬圓の爲替手形に地面藏までたゞ取られ、こんな悔しいことはない。

しな　わたしもあそこの嫁になつたら、頭の物から衣類手道具心のまゝにこしらへて、今日は芝居明日は花見と榮耀をしようと、思ひの外、樂しみ損をしましたわいな。

勢左　まだしもおれが仕合せは、昨日行つて相談極め内祝言でもさせたらば、聟は我が子と林之助をまたノヽ家へ置かねばならぬ。

らん　どうしてあんな間拔になつたか、こちの家に居た時分は目から鼻へ拔けるやうな、利口ものであつたのに、古借金をまるノヽに返すといふは馬鹿々々しい、然し男は立派ゆゑ、おしなは殘り惜しからう。

しな　何であんな意氣地なしが殘り惜しうござんせう。二萬圓といふお金があるから行く氣でござんしたが、もう斯うなつては林さんと夫婦になるのは厭でござんす。好い男を亭主に持つてしがないゝ暮しをするよりか、どんな醜い男でもお金のうんとあるのが好き、わたしやお金にや惚れるけれど、男に惚れはしませぬわいな。

らん　流石はわたし等二人の娘、金にや惚れるが男には惚れぬといふは感心な。斯うも親に似るものか。

勢左　世間の娘は十に八九は男選みをするものだが、金でなければ惚れぬとは、まことに見上げた心立て、末頼もしい料簡だ。

らん　詰らぬ男をこしらへて逃げ隠れした其の果てが、此の世で添はれぬことならばと、心中をして死ぬ者などには、此の上もないよい手本。

しな　お金に惚れて二目とも見られぬ男を亭主に持てば、女狂ひの氣遣ひなく、却つて氣樂でござんすわいな。

らん　然しあんまり醜い男を、亭主に持たすも可愛さう。

しな　いえ〳〵わたしや厭ひませぬ、業平さんでもひよつとこでも灯りを消したその時は、別に替りはござんせぬ、お金のあるのと無いのとは一目にそれと知れますれば、わたしや男にや惚れませぬ、お金のあるのに惚れますわいな。

勢左　おゝ金に惚れるは開化進歩、さて〳〵開けた娘だなあ。

ト誂へ異國の唄になり、花道より以前の林之助悄々として出來り、花道にて、

林之　まことに人の貧福は天より授かる所にして、一度我が家退轉なし、伯父の方に身を寄せて果敢な

い月日を送りしも、思ひがけない長崎の門戸さまの形見分けに立派の姿に立至り、やれ嬉しやと
いふ間もなく親の古借を取立てられ、又もや元の身となりしはよく〳〵金に見放されしか、あゝ
生き甲斐のない事ぢやなあ。（ト門口へ來り、内へ入らうか止さうかといふ思入あつて、小聲にて、）はい
御免下さりませ。
勢左　誰か表へ來たやうだ。
らん　はい、何方でござります。（ト門口を明け、林之助を見て、）や、林之助か。
林之　はい、左樣でござりまする。
勢左　もうおれの家に用はないのに、何しにこなたは爰へ來た。
林之　お禮に上りましてござります。
らん　禮とは、何の禮に來たのぢや。
林之　數ならぬわたくしを、お二人さまのお眼識で、お話しありし御緣談、まことに身に取り何程か有
難うござります。
勢左　その緣談が、どうしたといふのだ。
林之　古借の抵當に家藏を渡して家がござりませねば、嫁にはお貰ひ申されませぬが、是れからどこへ

れか御厄介にならねばならぬ林之助、お二人さまのお眼識で不束者ではござりますが、聟になされて下さりませぬか。

勢左　何だ、聟にしてくれぬかとは、そりや誰がことだ、晝寐でもして來たか、顔でも洗つて來るがよい。

らん　そんな寐惚けた散切を誰が聟にするものだ、さつき口の酸くなる程二人で勸めたその時に、外から澤山言込みがあるとそなたは言つたぢやないか。外へ行つて聟になれ、おらが所では眞平だ。

林之　お腹立ちは御尤も、申し譯もござりませぬが、先刻御覽なされる通り親父の借りを返しまして、身に一錢の貯へなく、實に路頭に迷ひますから親類合の誼を以て、どうかお貰ひ下さりませ。

勢左　親類合の誼といふが、おれを伯父と思ふなら二萬圓貰つた時なぜおれに預けないのだ。親父の古借があらうとも、二割も爰で入金して跡は年賦に掛合つて、どうでもかたの附くことだ、それを親父の借だから殘らず返さにや濟まぬなど〻、馬鹿律義の道立てして家藏地面代物までそつくり渡すといふやうな、そんな間抜けを邊勢が、何で聟にされるものか。

らん　親父どのも此の婆も金がなければ何を目當に、こなたに娘をやるものか、第一わたし等二人よりこなたは娘の氣に入らぬわ。

林之　そんなら最前、疾うからしてわしと夫婦になりたいと、言つたはまことでなかつたか。

しな　わたしがお前に惚れたのは、男振ではござんせぬ、二萬圓のお金が目當、それがなければ何でまあ、お前などに惚れませう。

らん　娘が斯ういふ心だから、所詮聟には貰はれない。

林之　(呆れし思入にて、)さういふ事なら仕方がないが、先刻あれ程御親切に、おつしやつて下さいましたお詞がございますゆゑ上りましたが、家藏までも失ひし足らはぬ心に愛想が盡きたとおつしやいますれば仕方がない、左樣なれば緣談はない御緣とあきらめまして、これから一先づ何れへか立退きますでございまする、路用の當もございませねば、親類合の誼にて、どうか十圓私にお貸しなされて下さりませ。

勢左　なんだ親類合の誼を以て十圓金を貸してくれろ、いや途方もない事を言ふ奴だ、十圓は扨おいて一圓も貸されない、決しておれを伯父だと思ふな、おれも甥だと思はぬぞ。

林之　それではあなたは伯父甥の、切つても切れぬ深い緣を、

勢左　金があるなら親類だが、無ければあかの他人附合、決してあると思つてくれるな。

林之　そりやさうでもございませうが、今となつては何處といつて便る方なき林之助、どうか不便と思

召し、十圓出來ずば五圓でも、お惠みなされて下さりませ。
勢左　假令僅か一圓でも貸さぬといつたら貸さぬから、口數きかずと早く歸れ。
らん　何處へなりとも勝手に行つて、人らしい身になつたらば、それは五圓でも十圓でも貸すまいもの
でもないけれど、その有樣では百も御免だ。
しな　大した金を持ちながら、殘らず人に渡してしまひ、僅か五圓のその金を借りに來るとは意氣地な
し、そんな人とは思はなんだが、夫婦にならぬがわたしの仕合せ。
勢左　ぐづ〳〵せずと早く歸れ。
林之　そんならどうでもわたくしへ、お貸しなされて下さりませぬか。
勢左　えゝ、百の錢でも貸せるものか。
林之　餘りと言へば、（ト悔しき思入、奧より前幕の蒙八出來り、）
蒙八　これ〳〵林さん、樣子は奧で聞きましたが、長居をすればお前の恥、あゝお二人がおつしやつて
は、所詮貸しては下さらぬから、早く東京へでも行きなすつて、車でも曳きなさるがよい。
林之　伯父でない甥でないとおつしやいますれば、もう再びお家へ參りはいたしませぬ。
勢左　おゝ、そりや見上げた、いゝ料簡。

らん　必ず家へ來てくれるな。
蒙八　さあ〳〵早く行きなさい、長くぐづ〳〵して居るうち、巡査さんの目にかゝると、こちらの家も迷惑します。
林之　只今參りますでございます。（ト立ち上り行きかけるを、）
勢左　これ林之助、何處へ行くか知らないが、もし是れから喰ふに困り、死にでもするなら一思ひに、海か川へどんぶりやれ。
らん　親類合に家の前へ、ぶらりなどは眞平だぞ。
林之　それほどまでに、わたくしが。（ト立ち戻るを蒙八留めて、）
蒙八　あもし、憎まれ口は不斷の常、聞き流しになされませ。
林之　（氣を替へ、）そんならお暇いたします。
蒙八　さあ〳〵、早く行きなさい。
林之　思へばこれまで長い間、厚いお世話になりました。（ト立ち戻り辭儀をする。）
勢左　えゝ、口數きかずと、
勢左
らん　早く行きやれ。

林之　參りますでございます。（ト門口へ出で思入あつて、）情を知らぬ人達ぢやなあ。

ト唄になり、林之助よろしく思入あつて花道へはひる。蒙八後を見送り門口をしめる。

勢左　お丶蒙八、よく林之助を追ひ出してくれた。

蒙八　爰へ出ますも如何と存じ、樣子を聞いて居りましたが、餘り果てしがございませぬから、ちよつと仲裁にはひりました。

らん　そなたが出ずば未だぐづ〳〵、なか〳〵歸ることぢやない。

勢左　子供の內から目から鼻へ拔ける程の利口であつたが、どうしてあんな間拔けになつたか。

らん　あの鹽梅では喰ふに困り、仕舞は身でも投げませう。

しな　ほんに男と產れながら、意氣地のない人でござんすな。

らん　あんな間拔けな男でも、形見の金がそつくりあれば、

しな　それを目當に女房になれど、

勢左　金がなければ七里けつぱい、

しな　摘んで捨てるげじ〳〵同樣、

蒙八　をと丶ひ來いでございますな。

勢左 あゝ歸つた後は鼬花だ、はツくしよ。(ト勢左衛門嚏をする。)

らん おや、風邪氣かえ。

勢左 なに、彼奴が惡く、(ト肩を叩くを道具替りの知らせ、)言つて居るのだ。

ト幕明きの鳴物になり、皆々よろしく此の道具廻る。

(波戸場脇海岸の場)――本舞臺一面の平舞臺、上の方煉瓦造りの異人館鐵の駒寄せ、内に冬木の植込み、下の方石造の異人館、松の立木、正面は海岸より神奈川を見たる灯入り夜の遠見、港に掛りゐる外國船の書割よろしく、月を下し、總て横濱海岸通りの體。波の音にて道具留まる。と本釣鐘、誂への獨吟の唄淨瑠璃になる。

〽青柳の枝に風なき春の宵、岸へ打ちくるさし汐の音も靜けき海原へ、照り添ふ月はさゆれども、さえぬ思ひにしよんぼりと、佇む影の薄霞。

トうすく波の音を冠せ、花道より林之助腕組をなし、出來り花道へ留り、本釣鐘を打込み思入あつて、

林之 今更いふも愚癡ながら落目になるは情ないもの、形見に貰うた二萬圓の金が手許にある内は、他人ばかりか現在の伯父伯母までがやれこれと、無理に女房の押掛け相談、金がなければ直に斷り

僅かな事の無心さへ聞かぬ其の上伯父甥の緣さへ切ると愛想づかし、斯うも人が薄情になるのも
元は皆金づく、利口になるも馬鹿になるも、まことに金の世の中ぢやなあ。
〽まだ如月もきのふけふ綻ぶ梅も開きかね、餘る寒さの身にしみて塒はなれし水鳥の、行き
つ戻りつたゞ一羽、

トやはり本釣鐘、うすき波の音にて林之助よろしく思入あつて舞臺へ來る、此の時上手より以前の臼
右衞門出來り、林之助思案の思入にて行き當るを、臼右衞門突き退け合方になり、

臼右　えゝ、氣を附けて歩かぬか。
林之　や、さういふこなたは臼右衞門どのか。
臼右　誰かと思つたら惠府林か、何をまご〳〵して歩くのだ。
林之　最前こなたが見らるゝ通り、親父の古借有金から地面藏まで渡してしまひ、今日に迫りし我が身
の上、どうしたらよからうと、途方に暮れて居ります。
臼右　そりやあ貴樣の心柄だ、先刻おれに任せれば半金遣れば皆濟に、すましてやるに地面から家まで
渡してしまふとは餘りといへば馬鹿々々しい、これが正金といふではなし、米の相場で借りた金
いはゞ博奕も同然だ、そんな金を耳を揃へて返すといふがあるものか。途方に暮れて困るのもみ

んな貴樣が間拔だからだ。

林之　そりやさうでもござりませうが、正しく親父の借りた金ゆゑ返すが道でござりますから、家藏までも添へまして返しましてござりますが、これから何處へ參りますにも小遣さへもござりませねばどうすることも出來ませねば、申し兼ねましてござりますが、どうか親類の誼を以て、五圓お貸し下さりませぬか。

臼右　えゝ五圓金を貸してくれ、途方もない事を言はつしやい、親類だつてほんの遠緣、不斷附合せぬけれど立派な家を持つたといふゆゑ、何ぞの役に立たうと思つて家見にやつた鰹節でさつき一圓損をした、其の取返しがありやあしない。五圓の金はさておいて五錢の銀貨も貸されるものか。

林之　御親切なお詞を用ひませぬはわたくしが、如何にも惡うござりました、お腹立ちは幾重にもお詫びいたしますから、どうぞお許し下さりませ、今の世界は薄情な人ばかり多いに最前も、これまでよりか親類の緣を深く重ねたいと、御親切なお詞に甘へてお願ひ申しまするが、どうぞ親類の誼にて、お貸しなされて下さりませ。

臼右　どうして〳〵親類は今日限りお斷り、元より鰯を煮た鍋くらゐ腥さい中のこなたとおれ、灰汁でさつぱり洗ひ落し、腥さツ氣を去つてしまへば、五錢でも貸す緣はない。

ト臼右衞門行き掛けるを袖に縋り、

林之　さう仰しやらずと是れまでの、親類中の緣をもつて。

臼右　まだ〳〵そんなことを言ふのか、一圓損した上からは、一錢たりとも貸されねえ。

林之　すりや、どうあつてもわたくしへ、

臼右　貸してやる緣がない。（ト振り切つて行くを、）

林之　そこをお慈悲に、（ト又すがる。）

臼右　執拗い、知らぬといふに。

〽磯馴の松に去年のまゝまつはる蔦も二葉三葉、殘る古葉も夜嵐に散りて行方も白波の、

ト臼右衞門振拂ひ行かうとするを林之助前へ廻り留る、これをかき退け林之助を突倒し、起き上らう

とするを、臼右衞門むごく蹴倒し花道へはひる。

〽沖に漂ふ蜑小船、篝の火さへ消えがてに、空も朧の雨もよひ、

ト林之助後を追つかけ行かうとして、着物へ附きし砂を拂ひぢつと向うを見て口惜しき思入、この時

下手より前幕のおくら出來り、四邊を窺ひ側へ寄り、

くら　もし林之助さん、お前怪我でもしなさんせぬか。

林之　おゝ、誰かと思つたらおくらさんか、仕合せと何處も怪我はしませぬ。
くら　揃ひも揃つてあの衆は、情を知らぬ人でござんす。
林之　初手から知れたことではあるが、愛想もこゝそも盡きました。

ト訛への合方になり、おくら思入あつて、

くら　さつき家へお出での時お氣の毒だと思つたれど、情を知らぬ人達ゆゑなまなかわたしが口出しをいたしましたらお前さんの、却つてお爲になりませねば、素知らぬ振りで清正樣へお詣りいたす積りにて裏からそつと脫けて來ました、實に無慈悲な人達は言はずと知れた事ゆゑに、いつぞや門戶の伯父さまから形見に貰うたお金をば、お預け申した五郎右衞門樣からわたしに十圓下さんしたが、何も其の後入ることのないので持つて居たこそ幸ひ、此の十圓を上げますから先づそれまでの小遣ひに、お遣ひなされて下さりませ。

ト懷から紙入を出し、此の中より紙に包みし札を出す、この時書附を落すこと。

林之　人の落目を見捨てざる情を知つたお志し、まことに嬉しく思ひますが、お前も今は掛人、これで着物の一枚も早く拵へて着なさいまし、何處へ取付く島もなく困りはすれど男の一人身、是れから雇ひにはひづても命は繫いで行かれます、お志しは受けましたが金はお返し申します。

ト札の包みを出す。

くら　そりやさうでもござんすが、折角お前に上げようと人目を忍んだその志しを、林之助さん、どうぞ受けて下さんせいな。

林之　その志しは此の如く頂いて受けました、必ず徒には思はぬから、此の儘納めて下さいまし。

くら　それではどうでも此の金を、お前は受けて下さんせぬか。

林之　さあ受けぬといふではないけれど、お前とても掛人、あり餘るといふ金でないゆゑ。

くら　成程お前のいふ通り、便りに思ふ兩親にとうに別れて寄邊なく、伯母を便りて掛人、餘計なお金はなけれども、形見に貰うたこの十圓、なければ無いで濟みますゆゑ、これをお前の用に立て、どうぞ使うて下さんせ、今にもお身の納りが附きましたらば其の時に、わたしに返して下さりませ。

林之　それほどまでに言はれるを、無下に返すも本意でなければ、これはお借り申します。

くら　そんなら使うて下さんすか。

林之　これを力に何れかで、身の振方を附けまする。

くら　それで心が晴れましたわいな。

〽曇りて見えぬ遠山も、思はぬ東風に吹き晴れて、景色整ふ春の月、

トおくら嬉しき思入、林之助札包みを頂きおくらの親切に感心の思入、おくらは林之助がいとしいといふ思入

林之　忠臣藏の淨瑠璃に、國が亂れて忠臣が知れると書いてありますが、なるほど違ひござりませぬ、落目になつて構ひ手のなき時信を盡すのが、これがまことの人の親切、おくらどのゝ志し生涯わたしは忘れませせぬ。

くら　僅かな事を其のやうに、厚くお禮をおつしやつては、お氣の毒でござります。

林之　思へばこれまで二人共、長年伯父の厄介にて、一つ所に居たけれど、

くら　お前もわたしも物堅く、四邊に人の居ぬ時は、話しもろくにした事なく、

林之　常の朋輩同樣に、たゞ睦まじくしたのみにて、色戀といふ譯でもなく、

くら　人に勝れた眞實に、惚れてお貢ぎ申します。

林之　その心ならどうか末々。

くら　え。

林之　末々までも信義を盡し、

くら　永く御懇意結びませう。

林之　いや人通りなき海岸に、長居は恐れ、少しも早う。
くら　左樣ならば御機嫌よう。
林之　お前も達者で居て下され。
くら　わたしよりお前の身を。（トほろりと思入。）
林之　それ程までに。
くら　煩うて下さんすな。
〽梅の薫りの慕はしく、後のよすがと袖に留め人來と告ぐる鶯の、初音待たるゝ聲ぞ樂しき、
トおくら跡を見返り〳〵花道へはひる。林之助跡を見送り思入。獨吟の切れ誂への合方になり、
林之　まことに人の親切は落目にならねば知れぬもの、現在伯父でありながら見下げ果てた勢左衞門どの、目の寄る所へ玉とやらで伯母御といひ、娘といひ揃ひも揃ひし薄情者、乳母が難儀を救ひたく十圓貸して下されと賴みし時に貸しもせず、門戶どのゝ形見にて元の身分に立歸れば、娘を女房に遣りたいと金を目當に押しての賴み、それも古借へ返してしまへば伯父でなければ甥でないと、今となつて他人より、情ない心の二人の衆、それに列なる臼右衞門親類中を深くしたいと、追從輕薄言つたのも、つまりみんな金を目當、それに引かへおくらどの、親切づくで此の金を貸して

くれたは忝ない、今に禮をしますぞや。（ト舞臺に落散りある書附を見附け取上げ、）爰に落ちてる此の書附は、金を出す時おくらどのが大方落した書附ならん、拾つて置いて其の内に金諸共に返しませう。（ト月影にすかし見てびつくりなし、）や、こりや十圓の請取書、（トよく／＼見て、）慥に是れは千之助が拾ひ書きにかいた請取、それではいつぞや乳母の所へ十圓の金を送つたのは、おくらどのであつたか、それと言はずに我が名にて送つてくれし親切は、世にも稀なる心立て、爰から禮を言ひますぞ。（ト林之助手を合せ拜み、）一度ならず二度までも我れを助けしおくらどの、禮・は詞に盡されぬ。（ト花道の方へ思入、下手より以前の宇津藏出て、）

宇津　林之助さま。

林之　おゝ宇津藏どのか。

宇津　ちつと時代なせりふだが、まんまと首尾よく。（ト大きく言ふ。）

林之　これ、（ト押へるを木の頭。）大きな聲だな。

ト波の音合方へ、ラッパを冠せよろしく

ひやうし幕

ト波の音にてつなぎ直に引返す。

（邊見見世の場）＝本舞臺元へ戻り邊勢宅の道具、二重に勢左衛門紙幣の五圓札を二百圓算へ居る、おらん煙草を呑みながら見て居る、異國めいた唄にて幕明く。

勢左　これ婆あどん、惡い跡は善いといふが、昨日林之助が新宅の祝ひに、氣張つて絲織を一反土産に持つて行つて、七圓五十錢損をしたゆゑ、昨夜は寐心が惡かつたが、思ひ掛けなく二百圓不意な金を今日取つた。

らん　あの五郎右衛門さんがおくらをば、急に娘にくれろといつて、養育金を二百圓出して貰つて行きなすつたのは、まさか自分の權妻になさるのでもあるまいし、らしやめんにでも遣る氣かしらぬ。

勢左　いや〳〵それは大丈夫、おれも度々勸めて見たが、なか〳〵頑固な女ゆゑ、そんな氣遣ひは決してない。

らん　二百圓でも取らぬは損だが、もそつと家へ置いたなら、髭さんからでも貰ひに來て、大きな金になりませうに。

勢左　所があれは髭さんなぞへ行く心は少しもない、始終は何處へかおれが手で片附けてやらねばならぬ、さうした日には裸でやつても二十と三十掛けねばならぬ、まことにそれは入れ佛事、親類中

の五郎右衞門へ、二百圓の養育金でやつたは大極上々吉、この上もない仕合せだ。
らん　あれはわたしの姪だから、養育金の二百圓は、半分わたしへおくれだらうね。
勢左　どうして〳〵、長年喰はした雜用代、これはみんなおれが取るのだ。
らん　それはあんまり慾どうしい。
勢左　數年來添つて居ながら、おれが慾どうしいのを今知つたか。
らん　とうから知つては居るけれど、それはわたしが貰つてもいゝ金だからおくれといふのだ。
勢左　何といつても、これは遣られぬ。
らん　くれずばわたしが手籠めに取ります。
勢左　これを取られてなるものか。
ト勢右衞門手早く紙に包んで仕舞はうとするを、おらん取りに掛る、異國の見世物の鳴物になり、これを奪ひ合ふ立廻り、トヾ札の包みを投り出しばつと散る。奥より蒙八、おえい、前幕の鐵造、電吉、荷介出來り、
蒙八　旦那さまが紀文もどきで、札を爰へお蒔きなされた。
皆々　拾へ〳〵。

ト五人拾ひに掛るを、勢左衞門あちらへ突きこちらへ突き、なかしみの立廻り、トヾ札の上へべつたり坐り、

勢左　あゝこれ〳〵蒔いたのではない、飛ばしたのだ、一枚でもこれを拾ふものは直に給金で差引くぞ。

鐵造　それぢやあ、蒔いたのではござりませぬか。

勢左　誰が札を蒔くものだ。

電吉　しわんばうの旦那だから。

荷介　不思議なことだと思ひました。

ト ばた〳〵になり、下手より以前の臼右衞門足早に出來り、直に門をはひり、

臼右　邊勢どの、大變だ〳〵。

勢左　いやそつちよりこつちが大變、いゝくすねぬやうに拾つてくれ〳〵。

五人　はい〳〵畏りました。（ト皆々札を拾つて出す。）

臼右　これ邊勢どの、大變な次第を聞いて下せえ。

勢左　何だか知らぬが、勘定をしない内は聞かれない。（ト此の内勢左衞門勘定をして、）やあ、三枚誰かくすねたな。

蒙八　いえ〳〵どうして、
五人　わたくしどもは、
らん　その三枚はわたしが拾つた。
勢左　早くそれを出しをらぬか。（ト取りに掛るを臼右衛門留めて、）
臼右　あゝこれ〳〵、札の三枚や四枚は後でどうでも分かる事だ、まあわしが云ふ事を聞いて下せえ。
勢左　して大變とは、どんな事だか、
らん　早く話して聞かせなさい。
臼右　昨日貸方へ家を渡した、あの惠府林が元へ返つて明日開店するに就き、今夜嫁が來るさうだ。
勢左　え、あの惠府林が、元へ返つて明日見世開きをするといふは、
蒙八　分らぬ話しでござりますな。
らん　さうして嫁の來るといふのは、そりや本當でござりますか。
臼右　そこは臼右衛門如在なくしいやつぷを冠つて店へ立ち、家の様子を見た所、羽織袴で林之助が町内廻りをして歸り、家はどん〳〵賑はう様子、近所の知つた者の家で、今夜嫁が來るといふ慥なことを聞いて來たのだ。（ト皆々びつくりなし、）

勢左　それにいよ〳〵相違なくば、このまゝにしてはおかれない。
らん　元へ返らば先約ゆゑ、娘を女房にさせねばならぬ。
蒙八　何にしろお孃さまに、早くお支度おさせ申せ。
えい　畏りましてござります。（ト奥へはひる。）
鐵造　どういふことで御親類の、
電吉　こちらへお話しなされずに、
荷介　嫁をお貰ひなさりまするか。
蒙八　これは最前旦那さまが、伯父でなければ甥でないと、おつしやつたからでござりませう。
勢左　今々思へば貸方の、宇津藏とやらいふ男も、何だか胡散な物の言ひやう。
らん　代言人といつたのが、慥あれは落語家かと、わたくしは思ひます。
臼右　こいつは一番あいつ等に、狂言をかゝれたわえ。
ト奥より前幕のおしな、おえい附き出來り、
しな　樣子はおえいに聞きましたが、林之助さんが元へ返り、外から嫁を貰ふとは憎い仕方でござんすなあ。

らん　これから直に押掛けて、術よく娘を貰へばよし、

勢左　兎やかう言はゞすてばちに、思入れ恥をかゝせてやらう。

蒙八　わたくしども、御一緒に、

三人　お供をいたして參りませうか。

勢左　臼右衛門どのが一緒に行けば、番頭どのも皆の者も、家の留守居をしてくりやれ。

四人　畏りましてございます。

しな　ちつとも早く行きたいが、歩いて行つては遅くなる。

らん　後押し綱引三枚で、車を早く頼んで來い。

荷介　はツ。（ト駈出して下手へはひる。）

蒙八　何なら家の荷車で、

鐵造　わたくし共が、

電吉　曳きませうか。

臼右　それでは向うに幅がきかぬ。

らん　まだ車は來ないかな。

蒙八　まだ〳〵、めつたにや參りますまい。

勢左　あゝ待ち遠で。（トぽんと筒へ煙管を入れるを道具替りの知せ、）ならぬなあ。

ト待ち遠なる思入。皆々よろしく、右の見世物の鳴物にて道具廻る。

（惡府林宅婚禮の場）＝本舞臺一面平舞臺、正面床の間鶴龜の掛物、陶器の花瓶へ梅を活け、續いて金地の袋戸棚、此の下腰張の茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下の方同じく障子、下手へ金屏風を立て、眞中に島臺、三方に三ツ組杯、同じく干肴、長柄、加へ銚子女蝶男蝶を附け、左右に菊燈臺を置き、總て惡府林宅婚禮の體。上手に林之助羽織袴、下手におくら綿帽子をかぶり白の打掛、白の着附、眞中に五郎右衞門羽織袴にて扇を持ち左右に子役袴裝、同じく振袖にてよろしく控へ、四海波の謠曲にて道具留まる。とやはり謠曲にておくら杯を取上げ子役の娘酌をなし、おくら呑んで三方へ杯を置く、五郎右衞門林之助の前へ持ち行き、子役の男の子酌をなし祝言の模樣よろしく。ばた〳〵になり花道より藤七、喜助袴裝、手代にて手を廣げ留めながら出來る、後より以前の勢左衞門、おらん、おしな、臼右衞門出來り、花道にて、

藤七　只今御婚禮の杯最中、

喜助　お通し申すことはなりませぬ。
勢左　その婚禮を留めに來たのだ。
らん　假令杯最中ぢやとて、
しな　親類中のわたし共、
臼右　通されぬとは何のことだ、
勢左　留立てせずと、
四人　通した〳〵。
藤七　いえ〳〵奥へは、
兩人　通されませぬ。（ト合方にて留ろを掻き退け、四人舞臺へ來り）
勢左　合點の行かぬは林之助、昨日親父の古借の抵當に、渡した家藏、
らん　今日又家へ立歸り、婚禮するとは何うした譯、
しな　なぜ、親類のわたし等へ、
臼右　此の相談をしないのだ。
五郎　貴樣達は林之助へ絶交すると申せし由、それゆゑ沙汰はしないのだ。

勢左　して、此の家へは、どうして歸つた。（ト上手にて、）
宇津　その譯、只今お話し申さう。
勢左　何と。（ト合方になり上手屋體より宇津藏羽織袴にて出來る、）や、こなたは昨日の古借の貸方、
臼右　して又、話しといふ譯は。
宇津　昨日これなる林之助さんの、親御へわしが一萬圓貸したといふは、ありやあ嘘だ。
四人　え。（トびつくりして、）
勢左　貸したといふが、嘘だとあれば、
らん　有金地面この屋敷まで、
しな　林さんの手へ返りし上は、
臼右　又元々に親類附合。
勢左　娘を嫁にやらねばならぬ。
宇津　どつこいさうは行きませぬ、嫁御は爰に極つて居る。
らん　して〳〵それは、
三人　何處の娘だ。

五郎　今そなた衆に逢はせませう。
勢左　そんならそれが、
しな　花嫁なるか。
らん　何處の娘か、帽子を取つて。（ト立ち掛るを、）
五郎　いや急ぐに及ばぬ、花嫁は今近附きにいたします。
　　ト五郎右衛門おくらの帽子を取る、皆々見てびつくりなし、
勢左　や、嫁は誰かと思つたら、五郎右衛門どのへ、今日やつた、
らん　そなたは姪のおくらなるか。
臼右　どうして嫁になつたのだ。
五郎　先頃これなるおくらから、形見の金の爲替手形を此の五郎右衛門が預りし、其の夜窃に店へ來て、急に十圓入用ゆゑ形見の内を貸してくれと、頼むは如何なる譯なるかと、樣子を聞けば林之助が乳母へ貢ぎの十圓を、母の形見の櫛簪脇へ預けて金を借り、それと言はずに林之助の許より送りし積りにて、乳母へ惠んで遣りしと聞き、奇特な事と櫛簪を取り入る金を貸して遣りしが、又もや昨日我が方より十圓借りて林之助の落目を救ふ志し、實意なものと見拔きしゆゑ、二

十圓を十倍に二百圓を是れ迄の、養育金にこなたへ渡し、おれが娘に貰ひ受け、改めて林之助へ送りしおくらは嫁なるぞ。

しな　わたしが嫁と思つたに、そんなら先へおくらさんが、

くら　毛織さまへ貰はれて、わたしや爰へ參りました。

宇津　この身代の嫁になるのも、人を憐むお心ゆゑ、則ちこれが天の惠みだ。

勢左　して又貸しもせぬ金を、

臼右　貸したといつて僞つたは、

林之　お前方の薄情を、試さう爲めにしたことだ。

勢左　扨はさつきの推量通り、

臼右　貸したといふのは、

四人　狂言なるか。

宇津　その立作者はこの宇津藏。（下奥より梅生羽織着流し、落語家のこしらへにて出で、）

梅生　狂言廻しは圓生の、前座を勤める此の梅生。

勢左　して又何ゆゑ、此のやうな、そちは狂言書いたのだ。

宇津　その略筋は立作者があらまし話して聞かさうが、これなる主人の恵府林殿が乳母の難儀を助け度く十圓の無心を云つた時、僅かの金を貸しもせず、門戸どのから二萬圓形見が來ると忽ちに、それを目當に追從輕薄、この身上を乘つ取らうと娘を餌に押掛け女房、古借の抵當に家藏まで渡した體に見せかければ、切つても切れぬ伯父甥の緣をば切つて立歸り、

林之　猶も心を試さんと路頭に迷ふ體に見せ、又も十圓無心を言へばけんもほろゝの挨拶にて、一錢たりとも貸されぬと、伯父、伯母、娘、臼右衛門揃ひも揃ふ强慾者、たゞ金にのみ目がくれて義理を知らざる薄情に、愛想もこそも盡きました。

勢左　いや、その薄情は當時の流行、凡そ三千五百萬の人は殘らず薄情だ。

五郎　曲つた目から見たならば人も曲つて見えようが、林之助どの始めとして條理を守る我々ども、道に缺けたる事はしない。幾ら慾の世の中でも我さへよければどうでもよいと、人の難儀も構はずに、たゞ慾張るばかりでは、親しむ人も無くなる道理。

林之　これから心を入替て、慈悲善根をなさるがよい、たゞ金にのみ目がくれて人を惠まぬその時は、天の御罰で忽ちに、

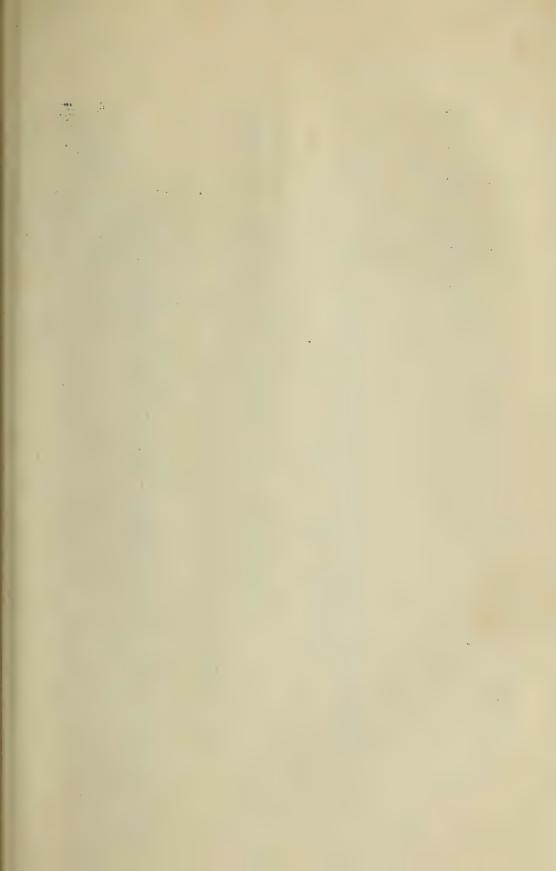
宇津　こなたが企む嫁入も、裏をかゝれて鵙の嘴、

しな　今更女房にしてくれと、言つても外に極つたからは、
勢左　いふだけ野暮な禿頭、
らん　何にも言はぬ其の代り、
臼右　どうか親類附合を、
くら　伯父さま始め皆様が心をお替へなされしからは、以前に替らず睦まじう、どうぞお願ひ申します。
林之　一旦お世話になつたれば、何處がどこまで此方では、伯父と敬ひ親類附合、
宇津　拵へおいた引物を、お四人へ上げてくりやれ。
藤七
喜助　はツ。（ト床の間の廣蓋の中にある鰹節の切手の包みを、四人の前へ並べる。）
勢左　この包みは、
宇津　中を開いて御覽下され。
ト勢左衞門開き見る、中に百圓札入れてある。
勢左　や、こりや鰹節の切手かと、
らん　思ひの外に百圓札、
しな　そんなら是れをわたし等へ、

臼右　今日の祝ひに下さりまするか。

五郎　それで目出度く、（トうなづくを木の頭。）

林之　お開き下され。

ト下座にて「千秋萬歳千箱の玉を奉る」と、謠にて、林之助の側へおくら寄るを見て、おしな立掛るを、勢左衛門留める、皆々よろしく、

ひやうし　幕

金の世の中（終り）

勸善懲惡孝子の譽

第二番目は新聞の小學雜誌の美談をば劇場に新茶の一夕話結ぶ縁しも短夜の夢に三浦の高尾が切れし文重三の思ひ半七が覺て悔しきお梅の行方尋ねて爰へ北庭の情に明す甚兵衛が盗みし古着の罪科を我身に着たる善吉は世間へ恥を柿染の身はゞも狹き懲役人逢れぬ親に寫眞の對面筑波の妻が贈りたる菓子を土産に卯之助が親孝行に北向の腹に毒ある虎藏も己が不孝を後悔なし善に還りて惡黨の野毛重右衛門巳之吉お村悦びあれば悲しみと池田の息子が兄弟とも知らで契りし畜生道はかなき戀に墓原で死るを止る朝日山屑屋は貧に修羅道の苦しみをなす其處へ地獄で佛忠八が掘出す金の三千圓忽ち元の福住と家富榮える極樂世界

「孝子善吉は明治十年六月、六十二歳の時、新富座に書卸された。この作は作者が横濱へ行つた時、海岸通りの道普請へ外役に出て懲役人共が働いてゐた。そこへ七歳ばかりの少女が駈けて來て、ある人相の惡い男に縋りついて、「お父さん、早く歸つておくれ」と泣出した。ところがその男は邪險にもうるさいと言はぬばかりに振拂つた――といふ光景を眼にして立案されたものだといふ。それにこの少し前から芝居に對する官憲の取締りが次第に嚴重になつて來て、風教上害になることを禁じ、勸善懲惡を主眼とするやうに注意されてゐたので、旁〻その主意に叶つたものを書いたのであつた。淺草本願寺のある僧が獄内說敎に借用したといふのもそのせゐであらう。左團次の虎藏は、菊五郎の善吉と共に大好評であつた。

書卸しの時の役割は、尾上菊五郎(善吉、寫眞師北庭筑波)、市川左團次(虎藏、池田の手代忠八)、中村宗十郎(浪人島田重三郎、池田半七、濱崎重義)、中村仲藏(甚兵衞、野毛重右衞門)、中村芝翫(朝日山浦右衞門)、市川子團次(巳之吉、高山登)、岩井半四郎(淸元延梅)、岩井小紫(茶見世のおむら)、岩井粂三郎(新造高窓)、中村喜世三郎(北庭女房おかつ)、中村鶴藏(安達屋喜兵衞)、中村銀之助(下谷上野)等。北庭筑波といふ寫眞師は實際この當時淺草にあつて繁昌してゐた人で、今の伊井蓉峰氏の父君である。

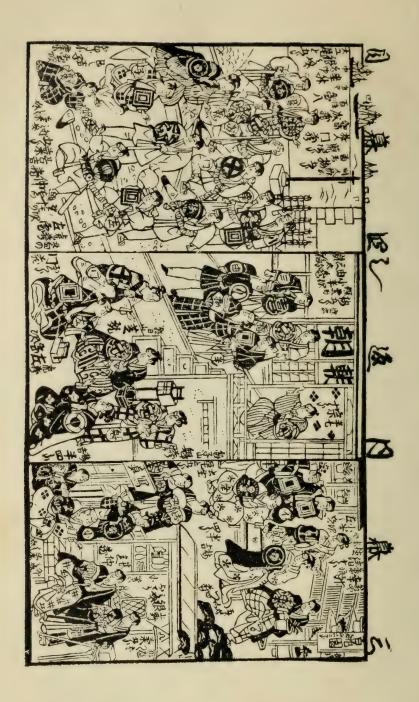
挿繪にしたのは、繪双紙の一部で、横濱道普請の場である。

大正十四年七月　　　　校訂者

勸善懲惡孝子譽（孝子善吉一名懲役改心錄——五幕）

序幕

萬年橋茶見世の場
三浦屋別莊夢の場
仙臺堀巳ノ吉内の場

（淨瑠璃）あれと言ふ間に遠ざかる時鳥　夢結葉影一聲（清元連中）

〔役名——朝日山浦右衞門、船乘北向の虎藏、池田の手代忠八、島田重三郎、虎藏弟巳之吉。清元延梅後に藝者梅吉、三浦屋の傾城高窓、虎藏母おしげ、其他。〕

（茶見世の場）——本舞臺上の方九尺葭簀張の茶見世、眞中より上手へ畫心に萬年橋、正面柾木の稻荷より大川を斜に見たる遠見、下手石置場、柳の立木上下樹木の張物にて見切り、總て深川萬年橋袂の體。床几に金太淺黄筒ツぽ草鞋がけ魚賣の打扮にて盤臺をおろし財布の錢勘定をして居る、勇次同じく魚賣にて燒團子を喰つてゐる、長八着流し駒下駄船頭の打扮にて兩人に茶を出して居る、此見得波の音飴賣の鎌倉節にて幕明く、

金太　今向う河岸を流して來るのは、何時も假宅に居る飴屋ぢやあねえか。
勇次　さうよ、ありやあ一昨日の晩手前とひやかしに行つた時、金瓶の横丁で、二階の部屋から客がやらした新内の邪魔をしたと、そいつが種で喧嘩をした飴屋の聲に違えねえが、あいつもたうとう新聞に出たぜ。
長八　定めし其時手前達は、彌次馬に出たらうな。
金太　人聞の惡い事を言ふなえ、以前と違つて此頃は喧嘩や火事の彌次馬は藥にしたくもありやあしねえが、こりやあまつたく昔と違つてお巡りさんのお骨折だ。
勇次　お骨折といへば、長八の野郎はおむらッ女の亭主氣取で、がうせいいゝ働いて居るぢやあねえか。
長八　なに今し方爰へ來たら、此頃水道が水切で、船が廻つて來ねえから、掘拔を汲んで來る内見世の番をしてくれと、頼まれたから居てやるのだ。
金太　そんならもうちつと待てばいゝのに、おら達が汲んでやらうもの。
勇次　いや、手前もやつぱり魚賣より經師屋の仲間だが、いくら張つてもあいつア無駄だ、それより早く家へ歸つて、女房に水でも汲んでやんねえ、きつと效驗が違はうぜ。
金太　成程手前の言ふ通り、

長八　こんな丈夫な事はねえ。

ト上手よりおむら島田髷前垂茶見世の娘にて、手桶を提げ出來り、

むら　長八さん、有難う、見世へお客はなかつたかえ。

長八　ないどころか、入替り立替りめつぽふけえに忙しいので、團子を燒いたり茶を出したり、よつぽどお前の穴を埋めたぜ。

むら　そりやあお氣の毒だつたね、さうしてお客はお歸りなすつたかえ。

長八　まだ二人壹溜の勘定を仕ながら、團子を喰つて居らあ。

むら　おや、お客といふのは、金太さんと勇次さんのことかえ。

金太　おいおむらさん、おら達では客でねえかえ。

勇次　毎日商ひの歸りがけに、きつと寄る定得意だ。

むら　それだからお前方を、他人とは思ひませんよ。

長八　そんなうまいことを言ふと、自惚が強いから兄弟か身内の氣取で、團子を喰つても拂やあしめえ。

金太　なに拂はねえことがあるものか、かうして毎日定客で、歸り掛に休む故、つど〳〵置くのも面倒だから、かためて晦日と十四日に勘定をしてやるのだ。

むら　えゝも、人聞のいゝことをお言ひでない、つひに拂つたこともないのに、

長八　なるほど、こいつあ拂ふめえ、自分の住ふ店賃さへ滿足に遣らねえから、どうして茶代や團子の錢は、のんこのしやあで居るたまだ。

勇次　こいつあ圖星當てられた、長家内でも金太のことを、皆がのん金〱と言ふぜ。

金太　なんぼ己が魚賣でも、そんなにあらを言つてくれるな、承知で拂ひをしねえのは、一件が一件だからよ。

勇次　さうよ、拂はねえでも大よしだ。

むら　なぜ拂はないでよいのだえ。

金太　言ふだけ野暮な兀天窓、

勇次　毎日團子をたゞ喰ふのは、

金太　こりやあお前の、

兩人　受賃だ。

むら　なに、受賃とはえ。

金太　なに、受賃とはえと、がうせいお前はしらばツくれるが、內證の事なら人並より先へ聞出す早耳、

に、ちらりと聞いたは此間仙臺堀へ横濱から引越して來た小舟乘の巳之の野郎と疾からしていゝ仲だといふことは、己が鐵棒引だから長家中で誰一人知らねえ者はありはしねえ。

勇次　ほんのことだがおらなども、面はまづいが心意氣でお前と色に成らうと思つて、無駄に團子をよく

つぽど喰つたが、今となつちやあ癪に障つて、文久一つ置くのもいやだ。

むら　何のことだと思つたら夢にも知らない其疑ひ、そりやあ巳之さんと譯でもあるなら、たゞ喰べられても仕方もないが、假令人が何と言はうとも、證據もない噂話しを眞に受けられてはうまりませぬよ。

金太　さう口綺麗に言ふことなら、巳之と譯がないにして、茶代も團子も拂つて行くが、

勇次　もしも譯があつた時は、其替り罰金に、五圓取るが出すだらうな。

むら　さあ、それは。

長八　いや喰物と色の思ひは、譬の通り恐ろしいが、罰金と來りやあ半口乘りてえ。

金太　おむらさん、罰金を取らずにやあ、

金太
勇次　おかねえよ。（下おむら術なきこなしにて）

むら　さあ、そんな覺えは露程もなけれど、お前方には叶はないから、澤山上つておいでなさいよ。

金太　それ見たことか、喰へと言ふからァ何と嘘ぢやァあるめえが、さう極つたら構はねえから、思入れ團子を喰ふがいゝ。

勇次　いくら喰へと言はれても、胸がやけて澤山は喰へねえ、其代り己の喰ふだけ、嚊の所へ持つて行かう。

長八　えゝ色氣のねえことを言ふなえ、深川の魚賣ぢやあねえか。

勇次　いや、こいつあ己が閉口だ。いや常談は常談、茶代は爰へ置いて行くぜ。

むら　なに、それには及ばぬわいなあ。

勇次　なに、受賃は團子より、

長八　此の頃又ゆつくりと、

金太　一ぺい呑まして貰ふとしよう。

むら　長八さん、まことに有難うござりました。

勇次　跡でお樂しみヨウ。

ト鎌倉節波の音にて、勇次魚を賣る眞似をしながら兩人付いて橋を渡りはひる、跡流行唄の合方になり、おむら思入あつて、

むら　思ふ事一つ叶へば又二つと、巳之吉さんとい丶仲になつたことをばいつの間にか、世間の人に噂され、なぶられるのは嬉しいけれど、末始終を考へると、もしあの人の氣が替り、是見よがしにされたなら、何うしようかと先を思ふと、氣掛りでならぬわいなあ。

ト案じるこなし、流行唄になり、花道より巳之吉長半纒三尺藁草履船頭の打扮、小さなお櫃を網に入れ、是を肩へ掛け出て來り、

巳之　花見の客も先月限り、是から涼みになる迄は車に押されて仕事がねえから、引越しの荷を頼まれ牛込迄行つて來たが、眼鏡橋から先の落汐ぢやお骨ばかり折れて叶はねえ。

ト舞臺へ來りおむらを見て、

おいおむらさん、何を考へて居るのだ。

むら　おや巳之さん、何故お前來ておくれでない。（ト側へ寄る。）

巳之　何だ藪から棒に不意をくはして、びつくりした。

むら　それでもあんまり來ないからさ。

巳之　なに、來ねえことがあるものか、昨日一日拔いたばかりだ。（ト床几へ掛ける、おむら茶を出し、）

むら　今も今とてお前のことを、わたしや爰で一人言に言ひくらして居たのだよ。

巳之　道理でめつぽふ嚔が出たが、大方惡く言つたのだらう。

むら　そりやあお前が何處ぞへ出來た、お樂しみの所へお出で、大方私の噂をば惡く言つたのでござんせう。

巳之　こいつあ大きに逆捻だが、誰にお前は煽てられたか、證據もねえに何で又、そんなことを言ひ出したのだ。

むら　別に誰も言はぬけれど、毎日爰へ遊びに來る魚屋の衆や近所の人が、お前と譯のある事を、何のかのと言ふ故に、ぱつと世間へ知れぬ内、少しも早く一緒になり、共稼をしたいものと不動樣へ御願を掛け、わたしやそれのみ樂しみに暮して居るのにお前の方では、外に思ふ情人でも出來てか此間からよそ〳〵しく、爰へは少しも立寄らず、あんまりひどい仕方故、嫌になつたら樣に、打明けて言うて下さんせいな。（トよろしく思入にて言ふ。）

巳之　いやつまらねえことを言つたものだ、今もお前に言ふ通りたつた昨日一日見世へ來ねえばかりだ、そりやあおち〳〵此頃ぢやあ逢つて話しもしねえけれど、以前と違つて己だつて親掛りと言ふではなし、兄貴に別れてお袋と居馴れた土地の神奈川から追手の風に東京へ流れ〳〵て深川へ、碇を下すと言ひてえが、もやひの綱の漸々に細い煙りの棟割長家、板子一枚其下は薪と草履の一座

から、壁の境に隣の内と話しの出來る貧乏暮し、稼かにや其日が送れねえから、一番水棹を突張る氣で、うんとこたへる料簡故、それでこつちへ來ねえのだ。

むら　そりやわたしとて同じこと、斯うして見世を出して居るのも微な暮しに親の手助け、そりやもうお前が稼ぐのを惡いと言ふではなけれども、以前に替り此頃はどうも樣子が違ふ故、定めし心が替つたことゝ、疾より思つて居るわいな。

巳之　なに、おれの心が替つたとは。

むら　さあ、お前の心の替つたと思ふ證據は此間、不動樣の歸りがけおつかさんをお尋ね申しに家へ寄つたら、美くしい別品さんが居た故に、それで私を袖にして少しも顏を見せてくれぬは、てつきりそれと氣が付いたら、夜もろく／＼寐られぬ程、苦勞になつてならぬわいな。（ト愁ひの思入）

巳之　いや大方そんなことだらうと思つた壺に違ひなく、こいつあ大きな間違だ、あの娘ッ子は斯ういふ譯だ。己のおつかあが若い時分乳を上げてお育て申した御恩になりし若旦那、又側に居た女と言ふのはありやあ濱の太田町で、清元の師匠をして居る延梅といふ別品だが、當時も濱で催しのある旦那手合の義太夫へ、一番向うを張る積りで富貴樓でやつた溫習の時若旦那と情人になり、互ひに思ひ思はるゝ仲から土地を退く氣になり、以前の緣にお母あを目當に賴つて來なすつたが

それから間もなく念の入つた風から重い病氣になり、先づ全快迄と其儘に後の月から二月越し、穢い家に假住居、なんぼ色とはいふもの、、立派なお家のある身分で、おれなどの內に居なさるかと、思ふと早くお二人を、表向で添はして上げてえ。

むら　人のことよりわたしをば、早く家へ引取つて女房にして下さんせぬと、世間の口がうるさい故、さうした上で共稼ぎに、暮して見たうござんすわいな。

巳之　そりやあお前が言はねえでも早く一緒になりてえが、爰に一つ困るのはあのお二人のある上に、惡い心の己の兄貴が堅氣になつて神奈川から泊りがけに來て居るが、根が性惡の產れ故堅いといつても心がゆりねば、それらこれらの一件が片付く迄は待遠でも、家へ引取る譯には行かねえ。

むら　さういふ込み入つた譯があるなら、そりやもう今が今といつて急く譯ではないけれど、お前が不斷浮氣故若しとやかういふ人が、外にあつても其時に心を移しておくれでないよ。

巳之　そりやあ己の方で言ふことだ。

むら　なに、お前の方で言ふことゝはえ。

巳之　さ、十人並の女なら安心をして居るけれど、口前といひ程のいゝ、男好のする顏だから、お前よりは己の方が案じられてならねえのだ。

むら　えゝも止してもおくれ、その口前に惚れるのだよ。（ト巳之吉の膝をつれる。）
巳之　あゝ痛え、酷いことをするぢやあねえか。（トおむら巳之吉をぢつと見て、）
むら　お前はよつぽど性があるね。
巳之　當りめえよ、生きてるらあ。
むら　それぢやあきつと、今のことを、（ト四邊へ思入あつて、）忘れるときかないよ。
ト波の音端唄になり、花道より虎藏半天着流し船頭の打扮、草履下駄にて出來り、
虎藏　朝の蒸汽船で神奈川の高島町から、判人の源六が向うの茶屋へ尋ねて來る約束だが、まだ出掛けて來ねえかしらぬ。（ト舞臺へ來り兩人を見て間の惡き思入にて、）えへん〳〵。
ト咳拂ひをする、是にて兩人びつくりして飛退き、
巳之　や兄貴か、何うして爰へ。
虎藏　何をそんなにびつくりするのだ。
むら　よもや爰へ虎さんが、
巳之　來ようとは思はなんだ。（ト虎藏思入あつて、）
虎藏　邪魔になりに來度くもねえが、さつき向う河岸へ行つた時、お前の所へちよつと寄つたら、是か

ら寺町迄行きてえが留守居がねえので行かれねえと、おつかあが困つて居た故見世番はしてやるから、早く家へ行つてやんねえ。

むら　それは有難うござんした、そんならどうぞ少しの内、見世をお頼み申します。

虎藏　おゝいゝとも〳〵、ゆつくり行つて來てやるがいゝが、お前一人ぢやあ淋しからう、巳之お前も一緒に行つてやれ。（ト巳之吉へ思入、巳之吉面目なき思入にて）

巳之　なあに、わつちが行かずとも、

虎藏　えゝ我慢をせずと、早く行つてやんねえ。

巳之　それだといつて、眞ツ晝間、

虎藏　留守居をするに、時はいらねえ。

むら　ほんに、兄さんは通り者、

巳之　それぢやあ一緒に行つてやらうよ。

むら　これで思ひが、

巳之　これ、（ト押へる。）

虎藏　こつちも都合が、

兩人　え、
虎藏　早く行けといふに。
むら　あい、さあ巳之さん。
　　ト波の音流行唄にて、おむら巳之吉橋を渡つてはひろ、虎藏伸上り跡を見込み、につたり思入あつて、
虎藏　飛んだ七段目の由良之助だが、間夫があるなら逢はしてやらう、夫があるなら添はしてやらうと立役らしい思入で二人の幕を切つてやつたら、尻尾を巻いて行きやあがつたが、實は爰で判人の源六と打合せをするに邪魔を拂はうばつかりだ、早く此間に來りやあいゝが。
　　ト端唄になり、上手より源六半合羽判人の打扮にて出で來り、
源六　おい〳〵虎兄ィ、ごうせいいゝ待たしたぢやねえか。
虎藏　おゝ源公か、己の方でも待つて居たのだ、まあ爰へ掛けねえゆつくり話さう。（ト兩人床几へ腰を掛け、）己も氣が急いてならねえのだが、漸々今邪魔を拂つた。
源六　己もこれで三四度爰へ尋ねて來て見ても、お前の居る樣子がねえから、こいつあきつと前祝ひにお神酒を上げに行つたのだらうと、此近所を搜したのだ。
虎藏　どうして〳〵仕上げる迄は酒所ぢやあねえ、極く堅氣だ、それに昨日出した郵便は定めし讀みに

くかつたらうが己は手が書けねえから、話しの樣にぽつ〱書いてお前の處へ出したのだが、よく早く來てくれたな。

源六　今朝早く屆いたから直開封して見たが、どうして〱分らねえ所かひじきの行列でもお前のはたいちがいゝから大分りだ、所で極䟿なのは此頃馬喰町へ上州から倉ヶ野屋の三郎兵衞さんが藝者を搜しに來て居るから、かいつまんで話した所がそんなら早速行つて見ようと、八時の汽車で直に來たのだ。

虎藏　そいつあ何しろいゝ都合だ、以前の日にやあ飛脚と駕籠でよつぽど錢を取られる所だが、二錢の郵便に一分の鐵道、便利な世界になつたぢやねえか。

源六　そりやあさうと其玉を、己が知つてると書いてあつたが、それぢやあ神奈川近所の者かえ。

虎藏　なあにお前も知つてる、それ、横濱の太田町で淸元の師匠をして居た、延梅よ。

源六　あの延梅なら別品だが、ありやあ慥朝日山といふ角力取の妹で、めつぽふ淸元の旨え師匠だが、あれがどうしてお前の手で始末を付けるやうになつた。

虎藏　さあ其譯といふのは、一通り長い話しがあるのだが、他聞を憚る一大事、まあ少し待つてくれ。

源六　いや、がうせいゝ時代に出かけたぜ。

ト此内虎藏立上り四邊を見廻し、思入あつて誂への合方になり、

虎藏　定めし話しに聞いて居ようが、神奈川の宿で指折の青木町の酒問屋池田の息子の半七さんが、疾より色になつて居たが、先々月の末つ方家をこつそり出たッ限り、歸つて來ねえ所から己も其時掛り合ひ、所々方々を尋ねた所が丁度濱の競馬の日で群集の中で出ッくはした東京の淺床に樣子を聞いて知れたのは、以前の緣にお袋の所に隱れて居ると聞き、こいつあまとめた金儲、蒸汽のはしけへ積むよりも此荷を積んで乘廻しやあ、先當分は樂が出來ると見込みを付けて居所を池田へ知らして禮を取りそれから堅氣の立役仕込みで、身裝を拵へ出て來たのは、旨く騙して旅へ賣り金をどしいと握る積りだ。

源六　さういふ仕事になつて居りやあ、無論れきいにやあなるけれど、飯より好きな酒呑が何だか知れたものぢやねえ。

虎藏　さう思ふのは尤もだが、金にする迄死んだ氣で、おらあ呑まずに辛抱するのよ。

源六　何にしろあの師匠なら、先づ三年と見積つて百五十兩は默つて出すぜ。

虎藏　所がさう長えと折合ねえのは、昨日郵便へ書いた通り、男の病氣をみつぐ金故、側を離れるのは厭がるから、先一月二十圓と手輕く言つて證文させ、後で百といふ字を書込み二の字を五の字に書

直し、百五十圓と證文面を旨くごまかす魂膽だが、只困るのは田舍へやるのに、肝腎の籍がねえが、こいつに實は當惑した。

源六　（思入あつて）籍なら決して案じなさんな、己の娘の籍があるから、名前は違ふがごまかして、それを向うへ送つてやれば、どうか濟むに違えねえ。

虎藏　それぢやあお前の娘の籍を、師匠の方へ廻してくれるか。

源六　おゝ貸すとも〳〵、無駄にしまつて置くのもつゝうえ、働かせるのが割事だが、二割の禮は呉れるだらうな。

虎藏　二割はちつと高過ぎるぜ。

源六　默つて出しねえ、爰らが判人の付目だ。

虎藏　（花道の方へ思入あつて）おい付目といやあ、ちよつと目を貸してくれ。

源六　え、

虎藏　向うへ來るのは、師匠ぢやあねえか。

源六　お前の目玉で見分らねえのが、何で己のへこんだ目で、遠くが見えよう譯がねえ。

虎藏　どうもさうらしい、何にしろ爰に居ちやあまづい‥‥ちつとの内隱れてくれ。

源六　おい〳〵。（ト上手へ行きかけるを、）

虎藏　おい、ちよつと待ちねえ、筋は昨日の郵便の通りだぜ。

源六　そりやあ源六だ、如在はねえ。

ト源六上手へはひる。跡しんみりした端唄の合方になり、花道より延梅、やつし裝駒下駄にて出來り、花道に留り、

延梅　わづかな風から半七さんが二月越しの長煩ひ、思ひ掛なく治つたは水天宮樣の御利益故、お禮參りに出て來たれど、いはゞ日陰の身の上なれば、どうぞ誰にも逢はねばよいが。

ト右の合方にて舞臺へ來り、橋を渡らうとするを虎藏茶見世の蔭より、

虎藏　もし〳〵延梅さん、どちらへおいでゞござりました。

延梅　（振返り、）どなたかと存じましたら、巳之さんのお兄いさん、只今水天宮樣へ御禮參りの出がけでござりまする。

虎藏　さうでござりましたか、まあお掛けなすつてお茶でも上つておいでなさい。

延梅　有難うござりますが、家が氣がせきますから、直にお暇致しまする。

虎藏　まあ宜しいではござりませぬか、爰の見世は懇意な者で今留守を頼まれまして、外に誰も居りま

せぬから、御遠慮なくお茶を一つお上りなさい。（ト茶を汲んで出す。）

延梅　どうぞお構ひ下さりますな。

ト餘儀なく床几へ腰を掛ける、虎藏思入あつて、

虎藏　看病なさる其あひに水天宮樣へお參りは、大抵なことぢやあござりませぬが、何にしろ若旦那の御病氣が治つたので、嘸御安心でござりませう。

延梅　それといふのもお前方の、みんなお蔭でござりまする。

虎藏　いえどう致しまして、私共のはお世話ばかり御病氣の治つたのは、ありやあ全く御信心と名高いお醫者と値の高い藥の利目でござります、こんな事を申すのも恩に掛けるやうで濟みませぬが、立派なお醫者のその替り診察料が一度二分、藥の代が一日に煎藥丸藥水藥で一分宛故勘定しますと、二十圓から掛りましたが、それも命の助ることゆゑ、考へて見りやあ安いもの、いくらかゝつてもようござります。

延梅　とはいふもの丶其お金を、立替へて下さいましたは、誠にお氣の毒でござります。

ト延梅當惑の思入、此內以前の源六出て窺ひゐる、此時虎藏目くばせをなし、源六前へ出て、

源六　そこに居るのは、虎藏ぢやねえか。

虎藏 (態とびつくりなし、)や、わりい所へ源六さん。

源六 いや、おれが方ぢやあい、所で丁度お前に逢つたのだ、今家へ行つた所が留守だといふから出直して後に行かうと思ふ矢先、爰で逢つたはこつちの仕合せ、もう居催促でも取らにやあならねえ。(と床几へ腰を掛ける、虎藏茶を汲み、)

虎藏 まあお茶を一つお上りなさい。

源六 いや茶などは呑み度くねえ。さ、此間貸した二十圓、たつた今戻して下せえ。

虎藏 其の御立腹は御尤もだが、中々其儘棄ておく樣なわたくしぢやあござりませぬが、何分都合に行きます先が、今日や明日には出來ませぬから迚ものことの待序、どうぞもう四五日の所をお待ちなすつて下さりませ。

源六 どうして〳〵四五日所か、もう一日でも一時間でも待たれねえといふ譯は、いはゞ、こりやあ恩金だぜ、深い話しは知らないが、慥お前のお袋が大恩受けたお主の息子を仔細あつて家へ引取り、思ひ掛けない大病に既に命も危い所を救つて貰つた診察料と、藥の代に差支へるから、どうぞ主人の實家から金の來る迄時借に二十圓貸してくれろと、淚をこぼして賴みなさるから、親切づくで貸した金だ、それも達て出來ねえなら文句を言ふにやあ及ばねえ、これから勸解へ願つて出る

から、差紙の來るのを待つて居なせえ。（ト源六立上り下手へ行かうとするを、）

虎藏　あゝもし〱、まあ待つて下さりませ、そりやあ今も仰しやる通り診察料と藥の代に遣つたあれは恩金故、家を賣つても上げませねばならぬ所だが家は店借り、又造作を拂はうにもやうやく五圓か六圓では百貫の抵當に編笠一蓋、それも上げぬとは申しませぬが、さうした日には二月越し苦しい中でお世話をした若旦那も置くことが出來ねば、折角盡した是迄の親子の忠義も水の泡、こんな困つたことはござりませぬ。

ト虎藏延梅に見えるやうに泣く、延梅氣の毒なる思入にて、俯向き居る。

源六　さうお前の方で譯を言ふと、是が女郎買に遣つたといふぢやあなし、人一人助けたこと故少しの勘辨はしてやりてえが、又此方に言はせると知つての通りわしは判人、あの時貸した二十圓は、此頃上州の高崎から藝者を抱へに、馬喰町へ泊つて居なさる倉ヶ野屋の三郎兵衞といふ旦那から請取つて來た手付金、今日藝者に行かうといふ娘ッ子があつて出て來た故、あの金を取らねえ日にやあ、旦那に顏が出せねえ譯だが、まあ己の身にもなつて見なせえ。

ト源六當惑の思入、虎藏延梅に向ひ、

虎藏　今お聞きなさる通りの譯で實に源六さんにもお氣の毒でござりますが、こりやあ何も出して下さ

いと申す譯ぢやあございませぬ、まあ御相談でございますが、長く借りて置きませんでも、是から夏季になりますから、涼み舟の脇艫を押しても十五や二十は返せますから、それ迄の御工風は付きますまいか。

延梅（ちつと思入あつて、）虎藏さんやおつかさんに、斯ういふ御苦勞掛けるのも半七さんの御病氣故、私がどうかしてなりとお返し申さにやならぬけれど、横濱とは違ひ東京では四邊に知つた所もなく、それには女のこと故に思つたばかりで心に任せず、お氣の毒でございます。

ト俯向き居る、源六思入あつて、

源六 お詞の中でございますが、此間虎藏さんからちよつと話しに聞きましたが、お前さんが横濱の延梅さんでございますか。

延梅 誠にお恥かしう存じまする。

源六 こりやあお初にお目にかゝりましたが、定めしお聞きでもございませうが、此金の一件ぢやあ誠に迷惑して居ますが、お前さんも思ふお方の命を助けた二十圓、お掛り合の其金故どうか仕ようと思召すお心ならば今が今、金を取らずに濟ませます工風もないぢやアありませんが、此虎藏さんを延梅さん、助けてやる氣はございませぬか。

延梅　其お金とて虎藏さんの身に付けたといふではなし、半七さんの御病氣へ遣ひました事故に、私で濟みますことならば、助けて上げて下さりませ。

ト源六虎藏顏見合せ、こなしあつて、

源六　其思召しならお前さんに、御相談がござります。

延梅　して其相談とおつしやりますのは。

源六　外の事ぢやあござりませぬが、此人に貸した金は今爰で話した通り上州の高崎から藝者を抱へに來たお方が、わしに渡した二十圓、どの道金で返さずとも詰り藝者をやれば濟むこと、まあ話さないことは分らないが、十日か二十日の所をお前さんが高崎へ行つて、藝者の眞似をしちやあどうでござりますね。

虎藏　もし〳〵そんな失禮を言つちやあいけませぬ、金は金で返すとして、延梅さんを藝者などに。

源六　これさ、つまらねえ事を言つたものだ、何も是が延梅さんがお孃さんといふではなし、稽古の間には淨瑠璃で座敷があればお客をも勤めにやならぬお師匠さん、東京でなら家元へ濟まないといふ譯もあらうが、譬にもいふ旅の恥二十何里とある所、こつちへ知れる氣遣ひなしだ。

虎藏　そりやあ東京へ知れもしまいし、又女郎でもなし藝者の事故身を穢す事もなければ、少しも恥に

はならぬから師匠がわしの妹なら、默つてお前に渡してやるが、現在恩ある旦那の色を、そんなことでもした日には、天道樣へ濟まぬからそりやあどうも不承知だ。

源六　さ、さういつて居ると果しがないから、是非勸解へ出にやあならねえ。

虎藏　いくらとやかういつた所が、渡す金が出來ないならようござります、是から直に勸解へ召連れ訴へをして下せえ、わつちやあ檻倉へ這入る氣で、もう覺悟を極めました。

源六　それぢやあどうでもお袋が、恩を受けた主人の爲故、罪を着て行く心か。

虎藏　妾らが御恩の送りどころだ。（ト覺悟の思入、是を聞き延梅氣遣ひのこなし、）

延梅　あゝもし〳〵、源六さんとやら、お世話になつた虎藏さんへ、御苦勞掛けては濟まぬゆゑ、わたしをどうぞ高崎へ藝者にやつて下さんせ。

虎藏　どうして〳〵お前さんに、そんなことをさせる位なら、此の心配は致しませぬ。勸解へ願つて下せえ。

延梅　其の御親切は忝いが、所詮今の所では半七さんも又わたしも、不義理に家を出たことなれば、斯うしてくれと親許へ無心を言うてやるにもやられず、いつその事に旅へ出て覺えた業の三絃で稼いだことなら此お金が戻せようかと思つて居た故、決して遠慮に及びませぬから、どうぞやつ

て下さんせ。（ト愁ひの思入にて言ふ、虎藏しめたといふ思入にて、氣を替へ）

虎藏　それぢやあ誠に濟みませぬが、厭でも三日か五日の所を高崎へ行つて下さいまし、其替りお店から金が屆いた其時は、直お迎ひに參ります、どの道長いことぢやあなし、十日より先へは延びますまい。

延梅　其の替り私の留守中、まだ病擧句の體故、どうぞ風を引かぬやう氣を付けて上げて下さいまし。

虎藏　そりやあお言ひなさる迄もござりませぬ、お袋が付いて居りますから、必ずお案じなされますな。

源六　さう相談が極つたら、念の爲め證文して古證文は返してやらう。（ト源六懷中より呉服屋の引札と文紙を出し）さあ、證文はそつちへ渡します。（ト出す、虎藏受取りよく〳〵見て、）

虎藏　こりやあ引札のやうだぜ。

源六　あゝこれ、引替の古證文渡したら言ひ分あるまい。（ト呑込ませろ。）

虎藏　へい、慥にお貰ひ申しました。（ト懷中なし、又文紙を取上げ、）此の證文は版でござりますね。

源六　それも今のと同じ事で、段々世界が開化に任せ、此頃用ふる文紙といふのだ。

虎藏　初めてこりやあ見ましたが、まるで御布告の樣でござりますね。

源六　こんな調法なものはない、只金高と名前さへ書入れゝば、それでよいのだ。ちよつと硯箱を貸し

て下さい。

虎藏　へい〳〵。（ト茶見世より硯箱を持つて來る、源六書入をして、）

源六　則ち此の證書は二十圓で、名前はうめと書きましたから、爰へ爪印を押して下さい。

ト延梅の前へ出す、延梅爪印をする。

延梅　此處で宜しうござりますか。

源六　それでようござります。（ト證文をしまひ、）さ、よければお梅さんわしと一緒に出かけませう。

ト立上ろ、延梅ちつと思入あつて、

延梅　とは言ふものゝ、十日でも、旅へ稼ぎに行くことなれば、半七さんへ相談して、

虎藏　成程そりやあ御尤もだが、然しそれを打明けられては。

延梅　え。

虎藏　いえなに、打明したら若旦那へ、私親子が濟みませぬから、助けて下さるお心なら、どうぞ逢はずに下さいまし。其替り、後でとつくりお話しは致しまする。

延梅　それでもどうも心が濟まねば、ちよつと門から一目逢うて、暇乞をさして下さんせ。

虎藏　そんなら宜しうござりますから、何にも言はずに見たばかりで、直お歸りなされませ。

延梅　決して何も申しませぬわいな。
虎藏　きつと言つてはいけませぬぜ。あ、これでやう〳〵落着いた。
源六　何にしろ爰は往來、魚幸へ行つて待合せよう。
延梅　どうぞ其間に水天宮樣へ、お禮參りにやつて下さいまし。
虎藏　御信心のことだから、早く行つておいでなせえ。
源六　それぢやあ魚幸に待つて居ますぜ。（ト延梅立上り思入あつて、）
延梅　あ、どうやら氣掛り、
兩人　え、
延梅　いえ直に行つて參りまする。
　　　ト端唄になり、延梅愁ひのこなしにて橋を渡りはひる。兩人跡を見送り、
虎藏　源六どうだえ、旨くいつたぢやあねえか。
源六　すつかり筋が立つて居るから、利口さうだが一ぺい喰つたな。
虎藏　此の狂言を書かうばつかり、濱からこつちへ出掛けて來てから、お袋初め家の奴等へ堅氣になつた面をして、好な酒も呑まずに居たが、是からあいつを玉に遣つて、先づ百五十兩で上州へはめ

込む所迄仕上げたから、其證文へ書き足して、早く直しておいてくれ。

源六　案じるなえ、其處は抜目のねえ俺だ。（ト源六文紙へ書足し、）どうだえ、手際の程を褒めてくれ。

ト手に取りよく〳〵見て、

虎藏　むゝ旨え〳〵、斯う證文が仕上つたら、早く金を取りてえものだ。

源六　魚幸に倉ヶ野屋の親指が待つて居るから、水天宮様から歸つたら、娘を連れて直に來ねえ。

虎藏　それぢやあ爰に待合して、女が來たら直に行くぜ。

源六　まあ手付に五十圓、こりやあ今渡しておかう。（ト紙入より紙幣を出し、）紙はあるか。

虎藏　さつきの古證文があらあ。（ト以前の引札を出し、）いや有難え〳〵。（ト紙幣を包みながら、）古證文といやあ、こいつぢやアさつきおれはひやりとしたぜ。

源六　大丈夫だ、知れツこはねえ、文紙が版の所から引札でごまかしたのは、何と己が智慧だらう。

虎藏　しかもこいつあ呉服屋の、夏物賣出しの引札だ。（ト紙幣を懐中する。）

源六　其の夏物の賣出しより、先づ口明に百五十兩、

虎藏　是から方々背負ひ廻し、荒い利得を取つた上、

源六　本場の柄で賣り込めば、

虎藏　一といつて二のねえ代物、
源六　寫眞で客に見立てさしても、
虎藏　正札付掛直なしだ。

ト此以前橋の上より以前のおむら出來り、是を聞く、虎藏心付きびつくりし、

むら　もし、兄さん。
虎藏　や、おむらさん、其處に居たか。
むら　いゝえ、わたしやたつた今。
源六　むゝ、それぢやあ二人の今の話しを。
むら　なに、今の話しとお言ひのは。
源六　それ、吳服屋の、（ト言ひ掛けるを、）
虎藏　あゝこれ、（ト留めて、）めつたに符牒を。

ト源六と顏見合せ思入あるを、道具替りの知せ。

言つちやあいけねえ。

ト吞込せる、おむらは合點の行かぬこなし、此の模樣宜しく流行唄波の音にて道具廻る。

（夢三浦屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面上手一間床の間、月に時鳥の掛物、籠花生に杜若を活け、下手銀襖紅葉に流、光琳風の畫、上の方一間障子屋體、正面一面に伊豫簾をおろし、いつもの所枝折戸、下の方二階家の淨瑠璃臺、是も伊豫簾を下し、二階下舟板の塀、此の前卯の花の四ツ目垣、總て三浦屋別莊の體、爰に太助若い者の打扮竹箒を持ち、土松奴鬘紺半纒、腹掛股引植木屋の小僧にて番手桶にて水を打つて居る、高窓振袖、高人留袖新造にて、枝折戸の側に立掛りゐる、此見得端唄にて道具留る。

高窓　太助どん、よく綺麗に掃除が出來たね。

太助　あんまりしたくもないけれど、旦那が來ると小言だから、見えるだけ掃除をしたのさ。

土松　なに、太助さんは邪魔をするばかり、みんな私が掃除をしたのだ。

太助　そりやあ手前は小さくつても、日に幾らといふ立前を取る植木屋だから、當りめえだ。

高人　そんな骨をしみを言はないで、まあ爰へ來て一ぷくお上りな。

太助　さつきからのみてえ所だ。どれ足を拭いて一ぷくやりませう。

ト手拭で足を拭ひ、こちらへ來て煙草を呑む。

高窓　廓と違つて此の寮は、何かゞ不自由な其替り、向島を一目に見て、こんないゝ所はござんせぬ。

高人　それに又お客は取らず、勝手に宵から早く寐られ、何よりわたしや嬉しうござんす。
太助　是で色男に逢はれゝば、言ひ分なしでござりますね。
高人　おゝ情人と言へば、文さんの返事をお前聞いておくれか。
太助　昨日江戸へ行きましたから、お前の文をお渡し申し、返事を取つて參りました。
高人　おや返事を書いてよこしたら、早く見せておくれならよいに。
高窓　太助どん位見世中で、意地の悪い人はありませんね。
土松　喜助さんはいゝ人だが、太助さんは意地が悪い、それといふのも曲つて居るからだ。
太助　なに、曲つて居る、おらあ神田で生れやあしねえ。
土松　ほんにお前も氣の早い、曲つて居るのはいつけんぢやあないよ。
太助　さうして、何が曲つて居るのだえ。
土松　根性ぽねが。
太助　何だと、
土松　なに、こつちのことさ。
高人　そんなことはどうでもいゝから、何といつてよこしたか、早く見せて下さんせ。

太助　見せるのは造作もないが、昨日文さんを尋ねるのでどんなに暇をつぶしたか知れません、只ちやあ是は渡されない。（下懐から手紙を出して見せる。）

高人　そんなことを言はないで、早く私に渡しておくれ。

高窓　此のお禮には高人さんが、不斷お前が頼みなさんす、願ひを叶へて上げるとさ。

太助　それなら直に渡しますが、高人さん、違ひないかえ。

高人　まあ違ひないのよ。

太助　まあといふのは怪しいね。

高窓　そりやあわたしが證人だから、早く見せて上げて下さんせいな。

太助　高窓さんが證人なら、文ちやんの返事を渡しませう。（下高人へ渡すを、高人開き見て、）

高人　おや〳〵是は四角な字ばかり、假名がなくツては讀めはしない、高窓さん讀んで見て下さんせ。

高窓　お前に讀めない文が、何でわたしに讀めようぞいな。

高人　何でこんな分らぬ返事を、私の所へよこしたのか、此頃聞けば新聞の投書とやらをするとやら、それで四角な字を書くのか、ほんに生利ぢやアありませんか。

高窓　さまして置いて澤山お上り。（下背中を叩く。）

高人　太助どん、お前それを讀んでおくれな。
太助　どうして〳〵、わたしにやあ讀めねえ。（ト土松竹切を取り、）
土松　おい太助さん、お前杖を上げようか。
太助　なに、己に杖をくれようとは。
土松　それでもお前は目が見えないから。
太助　見えねえことがあるものか、大きな目が二つある。
土松　三つあれば化物だが、幾つあつても此文が、讀めないければ節穴同然。
太助　そんな憎まれ口をきいたつて、手前にも讀めやしめえ。
土松　これが讀めねえなどゝいふのは、そりやあお前の子供の時分だ、今時の子供に新聞位讀めねえ者
　　があるものか。
高人　ほんに、此子は手を能く書くよ。
太助　それぢやあ是を讀んで見ろ。
土松　今讀むから、御苦勞ながら、東西々々と言つてくんねえ。
太助　惡く洒落やがある。「東西々々。」（ト土松件の文を開き、）

土松　淨瑠璃名題――――（ト太夫連名役人替名を讀む。）
太助　イヨ口上、成程、是は感心だ、
土松　何とおいらの目は見えるだらうね。
太助　こいつあ一番閉口した。
高窓　さうしてこりやあ文さんの所から來たのかねえ。
土松　なあに、こりやあ、爰の隣の寮へ、今日清元の家元さんが來て、新淨瑠璃を語る連名だ。
高人　それぢやあ後に、淨瑠璃があるのかえ。
高窓　そりやあまあ嬉しいねえ。
高人　然しそりやあほんたうかえ。
土松　なに、嘘をつくものか。「いよ〳〵此の所淨瑠璃初まり左樣。」
太助　おゝ、御苦勞〳〵。
土松　どなたもおやかましう。（ト見物へ辭儀をして上手へはひる。）
高窓　今の手紙は太助どん、お前がした戯事だね。
太助　なに、そんなことをしますものか。

高人　ほんに憎らしい太助どんだよ。（ト背中を叩く。）

太助　どうで年中憎まれ役、可愛がられる方はむづかしい。

高人　お前そんなことをお言ひだが、遣り手衆のお爪どんが、お前に思ひ付いて居なさんすよ。

太助　そりやあほんたうの話かえ。

高窓　毎日願の叶ふやうにと、頻に拜んで居なさんすわいな。

太助　しつかり溜めて持つて居るから、眞實ならば有難い。

高人　そんなに嬉しうござんすかえ。

太助　それでも女だから嬉しいのさ。

高人　おやまあ、あんなどら猫を。（ト此時奥よりお爪遣手の裝にてずつと出て、）

お爪　なに、どら猫がどうしたえ。

高窓高人　え、（トびつくりする。）

太助　其どら猫と言つたのは。

高人　あれさ、それを言つてはいけませんよ。

太助　えゝ、言ひたくツて〳〵、むか〳〵胸へこみ上げて來た。

高人　太助どん、覺えておいでよ。（ト端唄にて高窓高人奥へはひる。）

お爪　今どら猫と言つたのは、大方わたしのことだらう。（ト此内太助髷を直し、お爪を尻目で見る。）これ太助どん、何故をかしな日付をするのだ。

太助　お前が私に氣があると、高人さんが言つたから、それでお前を當込む氣だ。

お爪　えゝ氣樂なことを言ひなさんな、そんな色氣は取つておいて、欲氣で急に話があるよ。

太助　そいつは何より耳よりだが、其欲氣といふ話しは。

お爪　外でもないが高尾さんを、今度いよ〳〵賴兼樣が、身請をなさる事に付き邪魔になるのは惡足の浪人者の重三郎、此間から說得して、先づ花魁は得心させ思ひ切らせることにしたが、今にも爰へ重三郎が來たらば思ひ切る樣に、恥をかゝせて遣りたいから、助鐵砲に出てくんなせえ。

太助　憎まれ口は己が持まへ、厭がらせるのは譯はねえが、それが欲氣になるのかね。

お爪　腹を立たして突出せば、賴兼樣から一廉の御褒美を下さるのさ。

太助　御褒美にさへなることなら、思入恥をかゝせてやらう。

お爪　得心ならば奥へ來ねえ、言ひ合せをして置かう。

太助　わたしを奥へ連れて行つて、欲氣と言つて色氣かね。

お爪　え丶己惚れたことを言ひなさんな。
太助　さう言ひなさるが、此の中ぢやあ、
お爪　ほんに欲氣と色氣ばかりは、
太助　幾歳になつても抜けやあしねえ。
お爪　其の色欲でゆつくりと、
太助　奥へ行つて話しませう。
ト端唄の合方にて、兩人上手へはひろ。時鳥笛になり、知せに付き、下手二階家の伊豫簾を巻上げる。
爰に清元連中羽織袴にて居並び、延壽太夫獨吟の淨瑠璃になろ。
淨るり〽幾かへり待乳越行く時鳥角田の渡りに程近き、三浦が寮は里遠く浮世離れて青々と、
茂る樹木の若楓、
ト此内時鳥笛をあしらひ、知せに付正面の伊豫簾を巻上げろ、内に高尾裲襠好の打扮にて唐机に向ひ、
立文を書いてゐる。
〽高尾は爰へ川竹の、憂を脱れて出養生濁に住めど川水の、淸き流れに影寫す筑波の山もま
だ春の名殘惜しみて薄霞、

ト此内高尾墨を磨り、書きかけて考る事など宜しくあつて合方になり、

高尾 物の本にも光陰は、矢よりも早く月日には關守なしと記せし通り花の盛と諸人が愛しもいつか昨日と過ぎ今日は梢も緑して、おち返りなく時鳥、此の啼音をば聞くにつけ、君の身請に是非なくも言交したる重三さんと、切れねばならぬわたしが身の上、月日と共に指折れば言交してより三年越し、二夜と逢はぬことのなき一方ならぬ深き仲、後へ心の引かされて、鳴く音血を吐く思ひぢやわいなあ。

〽雨もつ東風に誰が寮か、松に通ひし大和琴、

琴うた『世をうしと言ひし御前の神垣へ、掛し誓ひも洩れ易く浮名の立ちて人毎に、よしなき事を庵崎や、

ト此内花道より重三郎着流し大小浪人の打扮、富士編笠を持出で來り、花道へ留り思入あつて、

重三 替り易きは秋の空と世の諺に言ふけれど、時鳥啼く頃ほひはしげく〳〵雨も降勝に、兎角に空も定まらず、見る間に替る卯の花くだし、是に付ても三浦の高尾、二世の誓ひをなせし故よもやと思へど人心、賴兼公に身請され俄に館へ參るよし、それが實の事ならば我に話のあるべきに、今に文さへよこさぬは卯月の空の心替りか、はて賴み少なきことぢやなあ。（ト又琴唄模樣になり、）

〽心關屋に書送る筆の綾瀨の水かれて、緣淺瀨の葭蘆原に愚癡を水鷄の啼くや短夜。

ト此內高尾は文を書居る。重三郞高尾の心がどうであらうといふ思入あつて、舞臺へ來る。よき程に奧より高窓、高人出來り、重三郞門口から覗く、高窓つか〳〵と枝折戶の側へ來る、高人は誂へ二枚折の御簾屛風で高尾を圍ふ、合方にて、

高窓　もし、其所へござんしたは、重三さんではござんせぬか。

重三　おゝそちは高窓、花魁は此寮にか。

高窓　あい、此間から氣合が惡く、廓を離れて此寮で、養生してござんすわいな。

重三　寮で養生するといふは、大したことであつたのか。

高窓　いえ〳〵、さのみなことではござんせん。

重三　さのみでないとは何より嬉しい、重三が來たと言うてくりや。

高窓　あい、さう申しませうわいな。（ト立掛る、此時高人前へ出て、）

高人　あゝもし高窓さん、花魁は氣合が惡く、人に逢ふのが面倒故、誰が來ても逢はぬから、斷つてしくれと言ひなさんすれば、折角お出なさんしたが、お目にかゝりはなさんすまい。

重三　いや逢はぬ故に斷れと、いふのはそれは外の者、なに遠慮ない此重三、起返るのが面倒なら寐て

居てよいから逢はしてくりやれ。

高人　誰彼なしに人さんに、逢ふのが厭ぢやと言はしやんすれば、今日はお歸りなさんせいな。

ト重三郎思入あつて、

重三　すりや重三郎でも逢はぬといふのか。

高人　お氣の毒でござんすわいな。

〽すげなき風に花散りて葉隠れに咲く遲櫻、ふつと目につき見合す顏、

ト此內高人氣の毒だといふ思入、重三郎合點の行かぬこなし、高窓は高尾に逢へといふ思入にて二枚折を明ける、是にて高尾重三郎顏見合せ、

重三　や、其處に居るのは高尾ぢやないか。

高尾　あい、わたしでござんす。

重三　脫れぬ事で二月越し、逢はぬ重三が尋ねて來たに、其處に居ながら最前から只の一言詞も掛けず、知らぬ顏をして居やるは、

高尾　氣合が惡うござんす故、人に逢ふのが厭でござんす。

重三　氣分が惡く逢ふのが厭とは、そりや人にもよつたもの、末は夫婦の約束なし何隔なき重三郎に、

逢はぬといふはどうしたことだ。

高尾　さあ、いやと言うて逢はぬのは、お前のお爲を思ふ故。

重三　何と言やる。

ト重三郎つか〳〵と行かうとするを、高窓高人もしと重三郎を留める、高尾立上り、

高尾　今更言うて返らねど、馴初めたるは三とせ後、（ト口説になる。）〽櫻まだゆき花の頃、人目忍びし富士笠に腰卷羽織主や誰、内やゆかしくさし覗く戀の山口巴屋で初に逢ひしが緣となり、其夜は雨にしつぽりと曉傘のきぬ〴〵も、しらで契りし二世三世、

ト高尾よろしく振あつて、さほどの仲でありながらと立掛るを、高窓高人是を留めることあつて、

重三　さ程迄に言交せしに、何故あつて今となり、おぬしは左樣な事を言ふぞ。

高尾　さあ、雪の降る日も雨の夜も通ひ詰めたる重三さん、大門を打つ大盡も廓の金には詰るの習ひ、此後長く逢ひ通さば、末は互ひに身のつまり、死ぬより外はござんせぬ、さうならぬ内お互ひに別れてしまふが上分別、何よりお前の爲めでござんす。

重三　それは今更言はずとも疾より知れたことなれど、いつもと違ひ今日に限り、何故左樣なる事を申

すか、それとも久しく參らぬ故惡しき氣合の其所で、何ぞ心に障りしか、障りしならばゆるしてくりやれ。

高尾　何も許すの許さぬのと、そんな譯ではござんせぬが、わたしや疾より心が替り、切れる氣になりましたわいな。（ト思ひきつて言ふ、重三郎思入あつて、）

重三　すりや、二世迄と言交したる、二人が仲を今となり、切れる心になりしとは、合點の行かぬそなたが詞、以前に替り某が尾羽打からせし浪々に、愛想をつかす心底か、隱さず爰で言うてくりやれ。

〽野邊に萠出し早蕨の拳握りて詰寄れば、折から奧の一間より立出る遣手、若い者、ト重三郎思入あつて、高尾へ詰寄る、高人支へる、此時奧よりお爪太助出て來る。重三郎高人を振拂ひ、立掛るをお爪太助立ふさがり、

お爪　これ〳〵重三さん、見世とは違ひ此寮へ、何でお前はござんしたのだ、高尾さんを以前の身と大方思つて居なさんせうが、賴兼樣に身請をされ、廓を引いた上からは、最早お妾同然故、指でもさして下さんすな。

太助　今花魁が見限るも、少しも無理なことはない、名におふ六十四萬石のおほ大名の賴兼樣と、三度

の食もむづかしい瘦浪人の重三さん、身請に附て新造に出來た屋形の高尾丸、乘替るのは尤だ、

お爪　手鍋提げても添ひたいと、いふのは昔の君傾城、今時そんな野暮はない。

太助　そでないものと言はれても、襟に付くのがまあ當世、

お爪　身幅も狹い瘦浪人、しがないその身を顧みて、

太助　早く家へ歸りなさい。

重三　すりや高尾には心が替り、賴兼公に身請され、館へ參ると申すのか、そなたばかりは其樣な、そでないことはあるまいと思うて居たは我過り、百度千度悔ゆるとも今更返らぬことながら、思へば悔しきことぢやなあ。

ト悔しき思入、高尾ぢつとこなしあつて、

高尾　嘸やわたしが重三さん、お前は憎うござんせうが、是には深い譯あつて。

お爪　あゝもし、深いも淺いもござんせぬ、金がないから嫌はれたのだ。（ト憎く言ふ。）

太助　金のないのは重三さん、首のないのに劣つたものだ。（ト同じく憎く言ふ。）

重三　何とっ（ト口惜しき思入。）

お爪　首のないとは、失敬千萬。

太助　まつぴら御免下さりませ。

重三　諺に言ふ妓女に戀なし、寶を以て戀とする八つを忘るゝくつわの薄情、今ぞ思ひ當つたり。かゝる心と知らずして眞身の異見も餘所に聞き、通ひ詰めたる重三郎、人に面は合はされぬ、よくもうつけに致したな。(トきつと言ふ。)

お爪　こつちでうつけにせぬけれど、お前があんまり間拔だから、とゞの詰りが花魁から愛想をつかされ今となり、行所のないみじめな其のざま。

太助　二階をせかれて其後は、大引過にうろ〳〵と、格子の外で百度を踏み、按摩や犬に蹴つまづき轉んだざまはなかつたが、今考へると重三さんだ。

お爪　もし太助どん、替ればかはる今の此のざま。

太助　花魁が乘替へたは、こいつあ少しも無理ぢやあねえ。

重三　よくもわいらは言合せ、浪人なせど大小をたばさむ島田重三郎に、恥辱を與へたな。

高窓　是にも譯のあることなれば、

高人　今日は此儘お歸りなさんせ。

重三　歸れとそちが言はずとも長居致す所存はない∴人と思へば今日迄欺れしが腹立てど、人の皮着

た畜生と、思へばさのみ腹も立たぬ。

お爪　其處へ心が付いたらば、

太助　とつとゝ爰を、

兩人　歸らつしやい。

重三　とはいへ、此の儘、

〽落來る水に上げ南、風に波立つ風情にて立歸らんとなせしをば、

ト重三郎しを〳〵として行きかけ腹の立つ思入にて、つか〳〵と立歸るを、お爪太助兩人重三郎を支へる、高尾思入あつて、

高尾　もし重三さん、二世も三世も言交し、一方ならぬ仲なれど、別れにやならぬ今日の仕儀、是もお前の爲ゆゑに。

重三　や。

高尾　さあ、爲にならうがなるまいが、構うた事はなけれども、浮世の義理に心では。

お爪　あもし、切れる男に入らぬ義理。

太助　お構ひなくと、花魁には。

高人　一先づ奥へ、

三人　ござんせいなあ。

重三　すりや、どうあつても、高尾には、

高尾　これが別れでござんすわいな。

重三　さう聞く上は。（ト立ちかゝるを留めて）

お爪　斯う嫌はれた上からは、

太助　兎やかう言ふはこなたの恥。

高尾　さりとは未練でござんすぞえ。

〽月の出汐に打寄する南も北に吹替り、日は山の端へ入相に胸に時打つ思ひにて、

ト此時高尾濟まぬといふ思入にて、側へ寄らうとするを、お爪隔てる。重三郎口惜しき思入にて立掛、るを太助支へ、雙方宜しく、トゞ高尾、高窓、高人、お爪奥へはひる、重三郎　太助を投げのけ、きつとなり、

重三　あゝ、頼み少なき世の中に、昨日に替る飛鳥川、いかに流れの女とて二世の誓ひを水となし、深き契りに引替へて淺き心の高尾が薄情、何か仔細のある事と思ひの外に頼兼が、妾となつて榮耀な

す、其身の榮華に見かへしか、淸き心と思ひしも濁江に住む水臭き常の遊女であるからは、奥へ踏込み一刀に、此身の恨みを晴らしてくれん。」

〽雲立つ空に雷の音も烈しく一陣の梢を落す夜嵐に、夢は破れて、

ト此内重三郎太助を相手に立廻り、宜しく雷の音にて奥へ走り入る、太助跡を追掛けはひろ。大ドロドロにて、此道具知せに付き、居所替りに替る。

（巳の吉内の場）――本舞臺一面の平舞臺正面一間押入戸棚、眞中一間障子二枚の出はひり、上下破れたる鼠壁、下手の屋根に引窓、平舞臺に一つ竈を置き、此外一間葺おろしの下家、三尺繩暖簾三尺中窓、いつもの所門口、總て仙臺堀舟乘内の體。上手に小高き二枚折を立て、ドロ〳〵にて道具納る。

とさんげ〳〵の合方になり、奥よりおしげ世話裝の母親にて盆へ急須と茶碗を載せ出來り、

しげ　若旦那はまた晩にはおよられまいに、高鼾でよく〳〵お休みの御樣子だが、もうお目覺でもよからうが、（ト屛風の側へ行き思入あつて）、胸へ手でもお上げなされてかだいぶ魘されておいでなさる、こりやお起し申して上げよう。（ト急須を置き、）もし若旦那々々、もうお起きなされませぬか、お目覺しを上げませうと、お茶を入れて參りました、もしお起きなされませぬか、若旦那樣。

ト大きく言ひながら屏風を取ろ、内に半七五十日鬘着流し前帯にて、床の上に起上り、ほつと思入あつて、

半七　扨は今のは夢でありしか、むう。（ト誂への合方になり、）

しげ　お勞れのせゐか大そうあなたは魘されておいでなさいましたが、怖い夢でも御覽なさいましたか。

半七　まだ病擧句で身體が勞れたせゐか、枕に就くと夢ばかり見てならぬが、今日は取分け腹の立つ夢を見た故、思はずも魘されたことゝ見える。

しげ　なに、腹が立つとおつしやりますは

半七　さあ、外の事ではないけれど、お梅が隣の娘から借りてくれた合卷は、芝居を直した伊達の狂言徒然の餘り一二枚讀んで其儘とろ〳〵と、現の樣に夢に見たは、高尾が太守賴兼の心に從ひ、現在の間夫の島田重三郞へ愛想づかしを言ふ所を、あり〳〵見し故まことゝ思ひ、人の事でもそでない奴と腹が立つてならなんだが、それで思はず魘されて今起されたと見えるわえ。

ト思入、おしげ介抱しながら、

しげ　何の事かと存じましたら、それはいらぬあなたの御苦勞、譬にも申す通り夢は五臟の勞とやら、まだお體がほんとでない故夢を見てさへ其樣に、魘されておいでなされば、もう一週間も牛の乳

を上つて、御養生なされませ。（トおしげ力を付ける思入、半七思入あつて、）

半七　見ればお梅が居らぬ様ぢやが、何處ぞへあれは行きましたか。

しげ　はい、先程ちよつと水天宮様へ、お禮參りに行くというて、お出掛けでござりました。

半七　よくまあ彼女も心に掛けて參詣をしてくれる、わしが病氣の其内も毎晩川岸で百度をあげ、水迄あびてくれた故、其一心でも此病氣は、治らぬ事はない筈ぢや。

しげ　お梅さんのお心立は、稽古所などをなされたやうなそんな様子は露程なく、堅い所の娘にもまさつた優しい取廻し、あなたがお家を餘所にして連れてお逃げなすつたも御尤もでござります。そりやお器量は十人並に勝れた娘は幾らもあらうが、あゝいふやさしいお心の、娘は外にはござりませぬ。

半七　いかにもそなたの言ふ通り、眞身も及ばぬ看病は、なか〱餘人の及ばぬ所、それに引替へ今見し夢は、本ではあれど人情ゆゑ我身につまされ悔しかつたが、どうやら夢に縁のある所の名さへ仙臺堀、其三つ股も目の先に、愚癡の様ぢやがもしお梅が、二心にもなる時は一途にそれと定めたる深き思ひも今の間に、散るや紅葉の仇あらし、あゝどうかさういふことのない様、早く安心したいものぢや。

しげ　外の人なら知らぬこと、お梅さんに限つては、そんなことはござりませぬ。

半七　然し、知れぬが人心、もしや今のが正夢なら、

しげ　えゝ。

半七　嘸殘念なことであらう。

　　　トぢつと思入、おしげ捨ぜりふにて茶をついで出す。此内下手より、以前の延梅へ虎藏付添ひ出來り、下手にて是を聞き延梅内へはひらうとするを虎藏留める、延梅許してくれと手を合せ拜む、虎藏見られぬ内と無理にせきたてろ、此内源六出來り早くといふこなし、延梅名殘を惜しむを源六無理に手を取り、歸らうとする延梅を虎藏留めろ。是にて是非なく泣きながら源六にせりたてられながら花道へはひろ、虎藏花道附際にて後を見送り、しめたといふ思入あつて足音をさせ、門口を明け、

虎藏　若旦那、お心持がよいと見えて、是へお出掛けでござりますか、かるはずみをなすつちやあいけませんぜ。

半七　おゝ誰かと思つたら虎藏か、今日は取分氣分もよく、まことに全快したやうだ。

虎藏　それはまア結構でござりまする。（ト下手へ住ひ思入あつて、）おツかあ、今己が行つた先で、おつな話しを聞いて來たが、お梅さんは內に居なさるかえ。

しけ　水天宮樣へお禮參りに、さつきおいでになつたわい。

虎藏　え、、（ト合點の行かぬ思入あつて）はてな、それぢやあ今聞いて來た話しに違えねえかしらぬ。

ト半七おしげ思入あつて、

半七　なに、お梅の事に付いて、違ひないと言やるのは。

しけ　これ悴、どういふことであるぞいの。

虎藏　まだ慥には申されませぬが、あなたにお話し申すのは、ちとお氣の毒な事でござりまする。

しけ　若旦那へはお氣の毒でも、言はずに居ては事が分からぬ。

半七　さ、どういふ事ぢや、話してくりやれ。（ト進み寄る、虎藏思入あつて）

虎藏　言はずに居ても氣掛り故、思ひ切つて申しますが、丁度只今汐時が下げへ廻つてをりますから、若旦那が召上るのに仙臺堀のへちへ行つて三ちよぼ許り白魚をすくつて來ようと存じまして、荷足を出した其所へ、佐賀町の方から銀次の野郎が汗を流して駈けて來て、わつちを呼ぶから行つて見ると、お梅さんが其以前死ね死なうといふ仲であつた、横濱の才取の慶次郎とかいふ男と相車で、水戸の方へ乘つて行くのを慥に見たと銀次が知せに來ましたが、よもやそんな不義理な事をしなさる人ぢやァあるめえと思つて歸つて來て見ると、留守と言はれて解せねえのは、御緣日

でもねえ間日に水天宮様といふのも怪しい、さうして見ると以前の蟲が喰ひつきに來て逃げたと見えるが、若旦那はいふに及ばずおつかあや己迄を、あんまり踏付にした仕方だと、癪に障つてこてえられね。（ト虎藏無念の思入、兩人びつくりなし、）

半七　え、そんならお梅は其以前、言交したる男があつて、

しげ　一緒に連れて逃げたといやるか。

虎藏　さあ、銀次が車へ乘る所を慥に見たと言ふからにやあ、てつきり逃げたに違えねえ。（トきつとなる。）

半七　扨はお梅は半七を、袖になして逃げたとかや。

しげ
半七　え、、、、、（ト兩人びつくりしてどうとなり、）

しげ　さういへばお梅さんは、水天宮様なら疾のこと。お歸りなさらにやならぬ筈ぢやが、これで思ひ當つたわいの。

虎藏　なに歸つて來なさる譯がねえ、しかも車は後押附き、大急ぎだといふことだから、大方二人は今時分水戸街道の立場茶場で、ちん〳〵かもでやつてるだらうが、酷い女もあるものだ。（ト半七に向ひ、）もし若旦那、飛んだやつにお掛り合ひなすつたね。（ト無念の思入にて、）

半七　さういふやつとは露知らず、心を奪はれ現在の育ちし實家も外となし、以前のよしみに乳母が厄

介、か丶りやつながる虎藏迄に難儀を掛けるも是迄に不孝をなせし親の罰、夢は正夢目前に斯うい ふことのある端か、實に七人の子はなすとも女に肌をゆるすなとの、古人の詞に違ひなく思へばそでないやつだなあ。（ト思入あつてきつとなる、虎藏きつとなつて、）

虎藏　流石は以前が懐育我身の上に引きくらべ、親の罰だと諦めてぢつと辛抱なさいますが、わつちは癪に障ります。死んだ後は兎も角も世界の内に居ることなら、何處の國へ洋行するとも、きつとそりやあ尋ね出し赤恥か丶してやりまする、車へ乗る時水戸街道と言つたさうだが當にもならず、こいつあ一番本國堂で、易の表で逃げて行つた方位を聞いて參りませう。

半七　手數を掛けて氣の毒ぢやが、どうぞさうしてくりやいの。

虎藏　御心配もお察し申しますし、又癪にも障りますから、大急ぎに見て貰つて來ます。

ト尻を端折り門口へ行き、

しげ　それぢやあ早く吉左右を。

虎藏　よし、合點だ。（トつか／＼と下手へ行き、内へ見える樣に、）え丶、履物は面倒だ。

ト駒下駄を手に持ち門口をしめて、逸散に花道迄走り行き、後を振返りにつたり思入あつて舌を出し、駒下駄を穿いて悠々と花道へはひる、おしげ思入あつて、

しげ　折角御氣分の宜しい所を、斯ういふことになりまして、定めしお腹も立ちませうが氣を落着けていらつしやらぬと、お體の爲めになりませぬから、冷えぬ樣になさいまし。
半七　お梅の心替りしは、全く長の看病に倦きはてた其所へ、以前馴染し其者が呼出せし故斯の仕儀、今となつては誓紙迄取交したのが口惜しい、あいつの事が人の皮着た畜生といふのぢやわえ。
しげ　御尤もでござりますか、又お風でも召しますとなりませぬ、まあお床の上へいらつしやいまし。
ト おしげ介抱して蒲團の上へ住はせ、搔卷など掛ける、甚九の合方になり花道より、朝日山浦右衞門羽織着流し角力取の打扮、雪駄にて出來り、
浦右　今中洲の新渡しで、船頭が敎へてくれた小舟乘の巳之吉の家は、慥向うに違ひないが、あれが池田の若旦那半七樣が妹のお梅と忍んでござる家、どれ行つて問うて見よう。（ト舞臺へ來り、門口から、）ちとお賴み申します。
しげ　はい。（ト門口を明け、）どちらからおいでゞござります。
浦右　わしは横濱から參りました。（ト此聲に半七浦右衞門を見て、）
半七　や、さういふは、朝日山ぢやないか。
浦右　へい、わしでござります、眞平御免なされませ。

ト合方になり、浦右衞門内へはひり下手に住ふ、半七思入あつて、

半七　思ひがけない朝日山、久しくそちにも逢はなんだが、どうして爰へ尋ねて來たのぢや。

浦右　いやもう其後絶えてお店へも大御無沙汰を致しまして、申し譯がござりませぬが、三月後からわたくしも上方筋から中國を所々方々と興行なし、やう〳〵一昨日神戸から東京丸で戻りまして、母に委細を承はり、そりやあとんでもねえ事と、取るものも取敢ずお尋ね申しに上りました。

半七　然し旅から歸り早々種々用事もあらうのに、濱でもあるか東京の、此深川迄親切に心に掛けて尋ねてくれた、まあ、ゆつくりとして行くがいゝ。

浦右　有難うござります、それに旦那は久しいこと御病氣と聞きましたから、一日も早く上りませねば、お店へ對して濟みませぬ、尤もまだ修業中故師匠の方へ參つてをり、濱の家はお袋と妹ばかりでをります故、覺えた業に清元の稽古をさしてはおきますが、今にわしが出世をすれば、立派な家業は出來ませんでも、溫泉位は出させまして、堅氣にしたいと思ひますうち、若い同志とはいひながら、いやさ惡いことゝは知りながら若旦那と言交し、後先見ずに親を捨て、此東京へ逃げて參り、跡はお袋只一人苦勞をするのを大旦那がお聞き遊ばし困るであらうと、今迄山程御恩になつた其上塗にお袋迄、お貢ぎ受ける有難さ、是といふのも妹が心得違ひに起りし事、それゆゑ

あなたのお見舞ひ旁〻妹を連れて歸ります、所存で今日上りました。(トよろしく思入おっていふ。)

しけ　そんならお前はお梅さんのお兄ィさんでござりましたか、嘸まあお家でおつかさんも御心配でござりませうとお察し申し、わたくしも今では堅氣になりましたが、一人の伜が放埓者で、寐る目も寐ずに心配を致しましたが、親が我子を思ふのは又格別でござりまする。

浦右　御挨拶も致しませぬで失禮を致しました、まつぴら御免なされませ。(ト辭儀をする半七思入あつて、)

半七　その連れに來た妹は。

浦右　へ。

半七　いやなに、その妹の心得違ひも皆我過りより起りし事、是にもいろ〳〵仔細はあれど今打明けて言はれもせず、十九や二十の者でも無きに、何んで斯ういふ事をしたかと、定めしそちも笑ふであらうが、それがまことに面目ないわえ。

浦右　そりやあ幾歳になりましても、色戀ばかりは思案の外、ない事でもござりませぬが、是に付けて私の難儀になることがござります。

半七　なに、此の事に付きそちが身に、

しけ　難儀がかゝるとお言ひなさるは。

浦右（思入あつて、）難儀のかゝると申しまするは、わしが師匠へ弟子入してまだ取てきの時分から、始終お店へ出入をして萬事お家の尻押に何處へ行つても肩身も廣く、やう〳〵是迄取上げた角力といへどまだ幕には遙に間はござりまするが、來る場所每も大入に名前の太る仕合は、こりやあ全く天朝の治る御代と二つには、御贔屓樣の皆お蔭、せめて萬分の一なりと御國恩を報ずる心で、別手組の消防方へ加入したのは片時も、御上の惠みと大旦那の御丹精をば忘れぬ氣で御恩返しを爲ようといふ、矢先へ妹が今度の一件、そりやア同じ身代なら丁度似合の年ばいに、好いた同志故媒立て表向で上げますが、違ひも違ふ大家の旦那、例へて言はゞ提灯に釣鐘所か天秤にも掛らぬ身分の不釣合、妹を餌に朝日山が金にする氣と世間の人に言はれるのみか横濱の、新聞へでも出された時は大旦那樣は言ふに及ばず、神奈川きつて濱中の旦那方へ御機嫌を伺ふことが出來ませぬ、爰の難儀を御承知なすつて、お厭でもござりませうが、どうぞ只今妹をお渡しなすつて下さりませ。（ト宜しく思入にて言ふ。）

半七 譯を詳しく聞いてみると、そちが難儀をする事故尤もとは思へども、再び實家へ戻らぬ氣で道ならねどもお梅を連れ、家出をなせし上からは、假令此末二人が身に辛い事があらうとも厭はず辛抱仕果せて、細い煙を立てる氣で、出たれど今はわし一人、いやさ、わし一人なら兎も角もお梅が

浦右　行くとは言ふまいから、事を分けての賴みながら、どうもあれは歸されぬわいの。

浦右　すりや、これ程に朝日山が事を分けてお願ひ申すに、聞分けては下さりませぬか。(ト詰寄る、半七俯向いてぢつとなる。)いやさ若旦那、(ト言へども默つて居る故、)えゝ情ないことだなア。

ト宜しくこなし、おしげ見兼れて、

しげ　さあ、其の御得心の行かぬのも、是にも深い譯あれば、言ふに言はれぬ此場の仕儀、直に返すと御返事をおつしやる譯には行きますまいから、今日は此儘お歸りなされ、後で御得心のなります樣、わたしがお話し致しませう。

浦右　いや、假令旦那が不承知でも、此の儘一人すご〳〵と、どの面さげて歸られよう。(ト半七へ思入あつて、)もし若旦那、くどいやうだが妹をわしに渡して下さるか、それともに又親御樣が、御心配をしておいでなさる故、是よりお家へお歸りなさるか、どちらなりとも承知して下さらないと御實家へ、今日から出入りが出來ませぬが、それでも救つて下さりませぬか。

半七　さあ、それは。

浦右　お前も共々賴んで下せえ。

しげ　それぢやといううて、お梅樣は。

浦右　渡されぬといはつしやるのか。
しげ　さあ、それは。
浦右　聞かれませぬか。
半七　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
浦右　救つて下さる思召なら、此朝日山が面の立つやう、二つに一つの御返事を、どうぞ聞かせて下さりませ。

トきつと言ふ。半七ぢつと俯向く、おしげは心遣ひのこなし、此の以前よき時分に下手より手代忠八羽織尻端折りにて出來り、門口に窺ひゐて思入あつて、

忠八　いやゝ、鬮取、其の心配には及びませぬ。（ト門口を明ける、皆々見て、）
浦右　や、思ひがけないお店のお手代、
しげ　忠八樣でござりましたか。
忠八　まつぴら御免下さりませ。（下内へはひり、下手に住ふ、半七思入あつて、）
半七　おゝ忠八、よく來てくれたの。

忠八　若旦那、久しくお目にかゝりませぬが、おやつれなされし其のお姿、（トほろりと思入あつて氣をかへ）先づ御無事のお顏を拜し、恐悅にござりまする。

半七　はからずそちに逢うたのは、わしも何より悅ばしいが、面目もない此のしだら、どうぞ堪忍してくりやれ。

忠八　いえもう御心配には及びませぬ、今日此方へ出ましたは、よいお話しでござりまする。

半七　なに、よい話しと言やるのは、

浦右　どういふ事か、忠八さん、

しげ　早くお話しなされませ。

忠八　さう急き立てられてはたまらない、まあ茶を一つ下さい。

しげ　はい〳〵。（ト茶を汲んで出す、忠八茶を飮みながら汗を拭き）

忠八　若旦那、まあ斯うでござりまする。あなたが家出をなされた後は、わたくし初め出入の者迄一統旦那へ詫言を致しますれどなか〳〵に、世間の人に後ろ指を指れるやうな事をしたと、もつての外の御立腹故、是ぢやあ所詮仕方がないと途方にくれた其晚に、見世の者を寐かした後でそつと一間へお呼びなされ、他人へ是は話されぬが實は今迄立腹したのも、內外の者のしめしゆゑ、表向

では詫言を聞かぬといへど肚の内は、なにも是が世間にはないといふ事でもなければ、互ひに好いた其の仲を無理にも離した事ならば若い身そらの二人故、無分別でも出さうもしれず、さういふ事のあつた時は、かゝりやつながる難儀故、いつその事今の内女房に貰つてやりたいから、そちより相談してくれと打明してのお詞に、いやもう涙の出ます程有難い故取敢ず、お知せ申しに參りがけ、神奈川のステーションで札を買はずに乘る所、車長の咎めに氣が付いて、すんでのことに罰金を取られる所でござりました。

半七　すりや、親父樣が表向お梅を貰つて下さると、そちにお話しなされたとか、そりやほんとのことかいの。

忠八　いやもうほんと所ではござりませぬ、それ故直に飛んで來ました。

半七　是迄少しの孝もせず、却つて不幸を重ねし身を、それ程迄に思召して下さるのみか表向き婚姻さすとは悅ばしいが、それに引替へあれが不實。

浦右
忠八　え。

半七　いやさ、不實にしては濟まぬとは、知りつゝ今迄過したる詫をそちが親人へ、よう申してくりやいの。

浦右（思入あつて、）そんならわしの妹を、表向若旦那の女房に貰ふとおつしやりまするか。

忠八　いかにもお貰ひなさる事に、ちやんと話しが調つたから、關取お前も安心だらう。

浦右　いや、安心どころか、さうなるのは、わしは不承知でござります。

忠八　え、そりや又なぜに。

浦右　さあ、其不承知といふ譯は、わしは元より妹もつながる緣に賤しい身分、欲に迷つてやつたのだと近所隣で言はれなば、是迄山程お世話になつた大旦那へ濟みませぬから、是ばかりは忠八さん必ず兄が斷ります。

忠八　關取そりやあ入らぬ義理立て、不斷こなたの俠客に堅い氣立で思つたら、さう言ひなさるは無理ぢやあないが、大旦那樣の一の見込みは、好いた同志の生木をさいて、もし二人が料簡違ひに心中などゝ舊幣な事でもあつたらお家の不吉、第一先旦那へ濟まぬ故、必らず心配しなさらずと、表向で上げたがよい。

浦右　さう事柄を聞いて見ると、承知せねばなりませぬが、こいつはどうも困つたものだ。

ト　ぢつと思入、忠八四邊へ思入あつて、

忠八　してお梅さんは先程から、お家にお見えなされぬが、何處ぞへお出でなされましたか。

半七　さあ、そのお梅は、
浦右　大方兄が小言を言はうと、それで隠れてをりますかな。
半七　いや〳〵さうでは。
忠八　おしげどの、何處へ參られましたな。
しげ　さあ、あのお梅樣は。
浦右　何處にをります。
半七　さあ、
忠八　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
忠八　もし若旦那、なぜお隠しなされます。
半七　（ぢつとなり、思ひ切つて、）さあ、そなたに話すも面目ないが、實は此の家に居らぬわい。
浦右　
忠八　えゝ。
しげ　（思入あつて、）今日迄露程若旦那も、御存じのないこと故に、よもや〳〵と思ひましたが、其の以前から二世迄と言交したる男があつて、今方逃げたと聞きましたわいな。

兩人　え〻〻〻。（トびつくりなし、）

浦右　すりや妹はまだ外に、言交したる者あつて、

忠八　あなたを捨て不人情にも、逃げて行つたと、

兩人　おつしやりまするか。

しげ　お梅さんに限つては、こんな事はあるまいと思ひの外なるなされ方、嘸若旦那がお悔しからうと

　ほんにお察し申しまする。

忠八　（きつとなつて、）もし、若旦那樣、是だからわたくしが申さぬことではござりませぬ、人に物を教へるゆゑ師匠と申す名はあれど、いはゞ浮氣な生業故上部は綺麗な事を言うても、腹にはどんな目算があらうも知れない代物故、うつかり是は引合ふと飛んだ損を仕ますから決してお掛り合ひはなりませぬと、懇々御異見申しました、それを用ひず仕入れをなされ、詰りが丸で算盤の玉にも當らぬ此の成行き、あんまり品に惚過ぎると、こんな目に逢ひますわえ。

　トきつと言ふ、浦右衞門も氣の毒なるこなしにて、

浦右　若旦那は言ふに及ばず、忠八さんにも此の兄が、たつた一人の妹で面皮をかゝねばならぬ仕儀、おのれ其の儘にするものか。（トずつと立つて門口へ行かうとするた、忠八おしげ押留め、）

忠八　こりや關取には、きつさう替へ、

しげ　何處へお前おいでなさる。

浦右　はて知れたこと、逃げたといつても今日の事、まだ遠くへは出まいから、探索方の手を借りて引捕へた其の上で、旦那へ言譯しなければ、わしがどうも濟みませぬ。（ト又行きかけるを、）

忠八　これ〳〵關取、其の腹立も尤もだが、さう荒立てゝは世間へ知れ、却つてお爲にならぬゆゑ、まあ靜にして下され。

浦右　それだと申して此の儘に、どうも捨ては置かれませぬ。

忠八　さあ〳〵、それも尤もだが、然し、是が表向ぱつとした曉は、若旦那樣も又お梅殿も互ひに日陰の身にするも、是も本意でない譯故、一先爰は世間へ隱し、穩便にして下され。

しげ　忠八樣もあの樣に、御心配をなされますれば、まあお待ちなされませ。

浦右　（思入あつて、）なるほどそれもお道理だ。（ト餘儀なく控へる、忠八思入あつて、）

忠八　さあ、お梅殿の居ぬ曉は、ぺん〳〵と爰にも居られませぬゆゑ、もうすつぱりと思ひ切り、直ぐ御實家へお歸りなされませ。

半七　いや、假令お梅がその以前馴染し者と逃げたというて、草を分けても尋ね出し、一目逢うてあれ

が胸を、聞かねばどうも思ひ切られぬ。

忠八　それは惡い御料簡、元より虫のある者がこつちで思ふ百分一も何で思つて居ますものか、そりやアあなたの己惚でござりまする。まあそんな事をおつしやらずと、お家へお歸りなされませ。

半七　今更家へどの顏下げ、戻る譯には行かぬわえ。

浦右　左樣なれば私が、これ迄積りし御恩返しに、家へお連れ申しませう。

半七　其の志しも忝いが、お梅に別れて又候や、兄の家へも世間を恥ぢ、參つて居るも面ぶせ。

しげ　今に悴が歸りますれば、吉左右も知れませうから、やはり此儘わたくし方に。

半七　いや最早此家にもをり難し、兩親初め人々に苦勞を掛けし此身故、一先是より緣家の菩提所祐天寺へ參りし上、改心なした其後に、再び實家へ立歸れば、どうぞそちより宜き樣に不孝の言譯申してくりやれ。

忠八　よくそこへお心が附きました、とは申すもの、、

浦右　もしや、寺にて無分別な、

半七　いや、其の心配はなけれども是非共一度尋ね出し、いやさ、尋ねて人の來ぬやうに寺と心が付いたわえ。（ト是にて三人安堵をなし、）

忠八　そんなら暫時祐天寺へ、其の身をお忍びなされませ。
浦右　其内草を分けましても、妹はきつと尋ね出し、御無念晴しは致しまする。
しげ　何にしろ其お裝では。ちよつと、お召し替へなされませ。
半七　成程着替を出してくりやれ。
しげ　はい〳〵。（ト後の戸棚より着替を出し、半七に着替へさせる。）
忠八　然し是から目黒迄、二里餘りの道なれば、これから直に車を雇ひ、
浦右　共々お供をして行けば、決してお案じはござりませぬ。（ト半七思入あつて、）
半七　永々是迄其方の厚い介抱受けたのは、決してわしは忘れぬぞよ。
しげ　何のまあ勿體ない、爰らが身分相應の御恩返しでござりまする。（ト是にて三人門口へ出ろ、此の時薄く本釣鐘。）ありや靈岸の七時の鐘、
半七　暗き此の身の黄昏に、
忠八　人目厭うて行く先は、
浦右　今の浮名を捨法師、
しげ　左樣なれば、旦那樣、

半七　あゝ、どうも思ひが、（ト門口へ寄るを忠八隔てゝ、）

忠八　さ、暮れぬ内に、

浦右
忠八　ござりませ。

ト誂へしんみりとした合方になり、半七心の殘る思入、忠八浦右衛門せり立てながら花道へはひる、
おしげ門口に取付き後を見送り、

しげ　二つの年よりお乳を上げ、お育て申せし若旦那も、戀故其身を果すといふは、是が世間の若いお方へよい手本になると思へば、ほんにおいとしい事ぢやな。

ト門口に縋り泣く、さんげ〳〵の合方ばた〳〵になり、花道より以前の巳之吉お村急ぎ出來り、直舞臺へ來て巳之吉汗を拭ひながら、

巳之　おい〳〵、おつかあ〳〵、お梅さんは家に居なさるか。

しげ　さあ、お梅さんは今朝出た限り、いまだに歸つて來ぬわいの。

兩人　えゝ。（トびつくりする、）

しげ　今方虎が知せに來たには、男があつて水戸の方へ車で逃げたと言うたわいの。

巳之　えゝ是で思ひ當つたのだ、そいつあ兄貴の拵へ事で、實は上州高崎へお梅さんを百五十圓で、藝

者に賣つたと聞いたから、びつくりして知せに來たのだ。

しげ　え、すりやお梅さんをあの藝者に、して〳〵それは何處で聞きやつた。

むら　さあ、わたしの見世で判人の源六といふ奴と賣つた話しをして居る所を、小蔭で殘らず聞きましたわいな。

しげ　えゝ、（トびつくりしてどうとなり。）そんなら兄が惡巧みで、仕組んだ事とは露知らず、お歸りなされた若旦那に、もしもの事でもあつたなら、猶々私が濟まぬ譯、今方お出かけなされたばかり、まだ遠くへはござるまいから、是から行つて委細の譯をお話し申して來ようわいの。

巳之　そんなら旦那は居なさらねえのか、してこれから行つた先は。

トおしげ身支度をなす。

しげ　先は目黑の祐天寺、車で行くと忠八さんがおつしやつたわいの。

巳之　それでは是から二人引で、急いで後を追掛けたらば、必ず逢ふに違えねえ。

むら　巳之さん、車を誂へようかえ。

巳之　いや道で乘るから構はねえ。（ト尻を端折り。）お前は留守を何分賴むぜ。

しげ　それでも家が一人では、

巳之　なあに、取られる物はねえ。

ト巳之吉先におしげの手を引き花道へ行く、やはりさんげ〳〵にて花道より虎藏、酒に醉つたる思入にて出來り、花道にて巳之吉に突當り、入替つて又おしげに突當り、互ひにすかし見て、

虎藏　おい〳〵おツかあ、何處へ行くのだ。

巳之　おゝ兄貴か。

しげ　なに、悴が、（ト虎藏を見て）、おゝいゝ所で出ツくはした。（ト胸ぐらを取る。）

巳之　さあ、おれと一緒に歸んなせえ。

虎藏　藪から棒につかめえて、何の譯だか知らねえが、行くなと言つても今行くとこだ。

しげ　えゝ、ふて〴〵しい野郎め。

巳之　さあ、行きなさい〳〵。

虎藏　えゝい。

ト息をつける、おしげ顏を背け、巳之吉と兩人にて無理に虎藏を引張り舞臺へ戻り、三人内へはひる此の内おむらは行燈を灯し、虎藏眞中に住ひ左右より詰寄り、

しげ　これ、おのれはなあ〳〵、よくも是迄親をだまし、堅氣になつたと見せかけて、お梅樣を一ぱい

いゝはめ、藝者などに賣りをつたな。

巳之　萬年橋の茶見世の縁で、高島町の判人と惡巧みの相談したのは、現在おむらが證人だ、愛想の盡きた根性だなあ。

虎藏　いや、そんな事は知らねえ。假令お村が證人でも誰が脇艫を押さうとも、そんなあぶねえ舟などへ己が何で乘るものか、そいつあ大方混雜する中洲の渡しで人違ひだ、おれは白川夜船と出かけて、是から一寐入りやツつける積りだ。（ト横にならうとするを、）

しげ　よくしら〴〵しくそんな事をさ、何處へお梅さんをやつたのだ、其行く先をわしに話せ。

巳之　もし話さねえと若旦那が、飛んだ事にならうもしれねえ。さ、隱さずに明してくんねえ。

むら　もし虎さん、どうぞ言うて下さんせ。（ト三人詰寄るを振拂ひ、）

虎藏　えゝ、寄つてたかつてやかましい、何でまた形のねえ事を、ほんとの樣にぬかすのだ、賣つたといふにやあ手前の方に、慥な證據でもあつて言ふのか。

三人　さあ、それは。

虎藏　それ見ろ、證據はありやあしめえ。よくもうぬらは此の己を、勾引しにしやあがつたな。

ト虎藏おしげを足蹴にする、おしげどうとなる、巳之吉むつとして、

巳之　何ぼ酒の上だといつて、現在實のおッかあを足蹴にするとは人でなし、こりやあお前は金比羅樣へ禁酒をしながら破つたので、それで罰が當つたのだな。

虎藏　禁酒をしたと言つたのは、ありやあほんの僞りだ。

巳之　どうしたと。

虎藏　實は濱から出て來てから、ぱつたり酒を我慢して、堅氣になつたと見せかけたは、お梅を玉に金にしようと、是迄己が仕組んだのだ。

巳之　そんならいよ〳〵お梅さんは、

虎藏　おゝ、おれがいつぺい喰はしたのだ。

しげ　おのれどうするか、見てをれよ。

むら　もし〳〵、あぶないわいな。(トおしげ虎藏の胸ぐらを取りに掛るを、)

虎藏　えゝ何をしやあがる。

ト振拂つて立掛る、巳之吉割て入り、おしげを庇ふ、虎藏有合ふ薪にて巳之吉へ打つてかゝる、此の立廻りの内ばた〳〵にて下手より幕明の金太、勇次、長八ぶら提灯を提げ尻端折りにて出來り、

金太　やあ、喧嘩だ〳〵。

勇次　虎さんを早く留めねえ。
長八　合點だ〳〵。
ト三人飛込み虎藏を留める、虎藏始終生醉にて三人を薪でなぐり、わつと後へ倒れる、巳之吉早緒を取つて縛らうとする、皆々ごつちやの立廻り宜しくあつておしげ留めに出るを、虎藏薪にて肩を打つ、是にてどうとなる、おむらびつくりなして介抱する。巳之吉ウヌと組付くを振ほどいて額を打つ、巳之吉の眉間糊紅になり、びつくりなし、
巳之　おツかあといひ己が眉間を、もう兄貴とは言はさねえぞ。
ト立掛るをおむら留める、三人は捨ゼリフにて虎藏を留めるを、
虎藏　えゝ、やかましい。
ト三人を蹴返し、ひよろ〳〵とするを木のかしら、
三人　長家の衆、留めて下さい〳〵。
ト虎藏上手に薪を振上げる、巳之吉眉間を押へ、三人わや〳〵言ふ。此見得さんげ〳〵にて、宜しくひやうし　幕

二幕目

私學校門前の場
善吉裏住居の場
市中交番所の場

〔役名＝紙屑屋善吉、善吉親甚兵衛、朝日山浦右衛門、警部濱崎重義、巡査浦部砂道、同入江葭成、善吉悴卯之助、教員高山登、古着屋安達喜兵衛、其他。〕

（私學校門前の場）＝本舞臺正面上手へ寄せて瓦葺の軒口を見せ、此下白壁、角の所石にて積上げし西洋造り、三尺間に硝子張の窓を付け上の方一間持出しの破風の庇、ペンキ塗の唐戸此の柱に、『官員昇降口』と記したる木札を掛け、下手ペンキ塗の柵矢來。同じく三尺の門、此柱に『生徒入口』と記したる木札を掛け、上下樹木の植込み舞臺前に床几二脚並べあり總て小學校門前の體。爰に□片襷やつし裝尻端折り、散髪鬘、學校の小使にて、〇象股引尻端折りにてパンを入れたる大きな箱を風呂敷に包みて背負ひ、△同じく散髪鬘前垂かけ書林の若い者にて本の包を持ち、何れも立ちかゝり居る、此模樣賑かなる鳴物にて幕明く。

□　いやお前方も、毎日々々此學校へ商ひに來さつしやるが、あの通りの徒だから、嘸商ひがしにくからう。

○どう致しまして、わたくしなぞは問屋から日に十貫も買出しまするパンを殘らず賣りますから、いくら世話がやけましても、是が商法でござります。

△それに引替へ小使衆は、湯茶の世話から跡掃除、また遊歩場の草取り迄、嘸お草臥でござりませう。

□毎日何だかがつかりします。

○然しまあ此頃は、何處の果も、此樣に小學校が出來たので、習ふ子供は言ふに及ばず、育てる親迄大仕合せ。

△何でも勉強は子供の内で、大きくなつては學問より欲が先へつきますから、夜業に店でありものの本を讀んでも尻へ拔け、何の役にも立ちませぬ。

ト此時十二時の盤木の音する、皆々心付き、

□や、うか〳〵して居る其の内に、もう今のが十二時だ、どりや辨當の支度でもしようか。

○遊歩時間が、パン屋の附日、

△訓導さんから御註文の、輿地史略の次本を直に納めて參りませう。

□それぢやあ一緒に、

三人　さあ、參りませう。

　ト矢張り以前の鳴物にて三人上手へはひる。あと盤木の音になり、奧にて、

生徒大勢　毬を取つて見さいなく。

　ト駒鳥の合方になり、下手の門の内より小山大助、散切鬘生徒の餓鬼大將にて大きな西洋毬を持つて出る、後より生徒大勢何れも散髮にて袴など、思ひくの裝にて、やはり西洋毬を持ち、卯之助やはり散切肩入の布子、やつし裝にて是を追ひながら出て來て、

卯之　小山さん、わたしにも其毬を少し貸しておくれく。

大助　いや貸す事は厭だく、側へ寄ると穢ないから、おら達と一緒には遊ばせぬく。

卯之　それでも先生が毬や輪を廻して遊べとおつしやつたから、どうぞ一緒に入れて遊ばせておくれな。

大助　いくら先生がおつしやつても、此の大助は一舍の生徒、下等小學を卒業して上等第八級、貸さうと貸すまいと、取締をする小山樣だ。

生一　それに君の家は貧乏だから、去年の暮から其の裝故、

生二　側へ寄ると寐臭くつて、厭な匂ひがする樣だから、

生三　誰も一緒に遊ばぬのぢや。

大助　おゝ穢ねえ、それ虱が上這ひをしてゐる、誰も側へ寄るな〳〵。

卯之　そんな事を言はないで、どうぞ毬を貸しておくれな。

ト大助の持ちたる毬を取らうとするを突退け、

大助　えゝ穢ない、そんな乞食を見る様な裝で、おいら達の仲間へ入れるものか、それにもう試驗が來るのに、やつぱり着物を着替ることは出來まいから、今度は斷つて試驗の席へ出ぬがいゝ。

卯之　いえ〳〵試驗の時には、お父さんがよい着物を拵へてやると言つてだから、それを着て僕も試驗に參ります。

大助　君のお父さんは紙屑買だから、大方古着でも買つて着せるのであらう。えゝ穢ない、土左衞門か行倒れか死んだ子の着物を安く見倒して、それを買つて來るのだらう。

生一　そんな延喜の惡い着物を着て來るのは、此學校の恥になるから、

生二　身分相應裏店か、占者の內職にやつぱりいゝろはを教へる家か、

生三　お寺へ頼んでお經を讀み、味噌摺坊主になるがいゝ。

大助　さうだ〳〵、乞食の様な裝をして一つ机に並ぶのは、外聞が惡いから、早く爰を退校して舊弊の私學校へ上げて貰つて習ふがいゝ。

卯之　そんな意地の悪い事を言はずと堪忍して、どうぞ一緒に遊ばしておくれな。

ト大助皆々の袖をひかへ頼む、

大助　えゝ穢ない、何といつても遊ばぬから勝手に一人で、

生徒大勢　遊ぶがいゝ〳〵。

ト卯之助を突倒し、皆々は遊んで居る、卯之助は是非なく一人で泣いてゐる、合方になり上手入口より登散髪、靴を穿き、洋服の打扮鞭を持ち、教員にて出來り、

登　こりや卯之助、何を泣くのぢや。

卯之　はい。

登　あゝ、又小山にいじめられたか。

大助　いえ〳〵何もいぢめたことはございません。

生一　僕はたゞ装がきたないと言つたばかり、

生二　わたしは福住さんの背中を、ちよつと打つ眞似をしたばかり、

生三　毬を貸さぬと言つたばかり、

大助　何にも申しは、

生徒大勢　致しませぬ〳〵。

登　いや〳〵只何も申さぬのに泣いて居る譯はない、いつもの樣に卯之助が、身裝のことを申したのであらう。

大助　いえ〳〵申しはしませんが、只貧乏だと申したのでござりまする。

卯之　いえ〳〵僕が惡いのでござりますから、どうぞみんなを叱つて下さりますな、又後でいぢめられますから、泣かずにおとなしく遊びます。

登　年も行かぬにあの通り、朋友に信義を盡す卯之助に引替へて、最早十五に近い大助、其外の者もそれへ出い。

大助　へい〳〵。（下皆々うじ〳〵する、登思入あつて、）

登　はて、出いと申すに。（下きつと言ふ、合方になり、）こりや、子心にもよく聞けよ、彼の西洋の敎にも、幼年の折は白糸にて何に染まるも敎による、例へば赤く美しき忠孝信義と人に稱され、或は黑く文盲の文字さへ讀めず世の中を暗く送る者もある、されば福住卯之助が假令身裝は穢くとも多くの生徒に勝りし勉强、學問上達致せば自主獨立の體にて、成人なさばどの樣な美麗な衣服も望みの儘、そなたなどより年下なれどなか〳〵及ばぬ此の卯之助、千金積んでも此の右へ出る

才はあるまいと、教授を致す我々迄竊に褒めて居る位、必ず此後今の様にいぢめることは相ならぬぞ。

生徒
大勢　へいへい、御免なすつて下さりませ。

登　然らば、福住卯之助を、一緒に中へ入れてやりやれ。

大助　それでも、着物が臭うございますから。

登　はて、又そちが意地の悪い、早く一緒に遊歩して、必ず口論なぞ致すまいぞ。

大助　いやいや先生、さう貴方がおつしやりますが、側へ寄ると虱が移り、寐臭い匂ひをかぎますと、身の健康を害しますから、どうも一緒には遊べませぬ。

登　いや、口功者な事を申すな、卯之助が衣類よりそちが口中の悪臭は、寐ぐさいにも遥に勝るぞ。

大助　なに、そんな匂ひがしますものか、是でも毎朝花王散の西洋歯磨を遣ひます、小い時から胎毒で天窓は少し黴びましたが、もう此頃ではすつぱり治り、只耳垂はありますが、そんなに口は匂はぬ筈だが、（ト大助思入あつて、大勢の生徒に向ひ息を吹きかけ、）何と、厭な匂ひがするか。

生一　是はたまらぬ、臭いくく。

生二　君の口の悪臭では、健康を害すから、

生三　僕も一緒に、さあ、みんな、
生徒大勢　逃げたまへ〳〵。
大助　いや、こいつはどうやら門違ひだ。
生徒大勢　さあ〳〵逃げよう〳〵。

ト駒鳥の合方になり、生徒皆々下手へはひる。大助も後より追掛けはひる。跡合方になり登卯之助をいたはり、

登　さあみんな叱つてやつたれば、そちも泣かずに機嫌を直し、早く行つて習ふがよい。
卯之　それでもまた參りますと、いぢめられますから、綺麗な着物の出來る迄わたくしは參りませぬ。
登　いや〳〵決していぢめはせぬ、左樣な事を流布なすと、此學校の規則にも拘る位の妨害なれば、涙を拭いて參るがよい。こりや爰は門前、人が見ると見ッともないから、早く教場へ參るがよい。
卯之　それでもわたしは悔しくつて、涙がこぼれてなりませぬ〳〵。
登　おゝ尤もぢやが機嫌を直して、早く勉強したがよい。

ト種々卯之助を介抱する。トヾ卯之助は泣いて居る故登當惑の思入にて、

年にませたる其方故、父が貧困を思ひてか、いまだに泣きゐる其樣子、扨々不便な事ぢやなあ。

甚兵　もう十二時だから、嫐孫が待つてゐよう、早く悦ばしてやりませう。（ト舞臺へ來り、卯之助を見て、）
ト誂への唄になり、花道より甚兵衛白髮鬘やつし裝世話親仁の打扮、重箱を包みたる辨當を持出來り、
そこにゐるのは、卯之助ではないか。

卯之　や、祖父さんか。（ト取縋る。）

甚兵　お、嫐腹がすいたであらうが何を言ふにも腰が痛く、わづかな道も一時間、急いで步けぬ此の親仁嫐まあ待つて居たであらう。（ト卯之助の泣いて居るを見て、）これ〳〵何をそちは泣いて居るのぢや、又お友達と喧嘩でもしたのか。

卯之　いえ〳〵喧嘩はしませぬが、わたしや悔しい〳〵。

甚兵　何が悔しいのだ。あゝ又いつもの樣に着物が穢ないと言つて、恥でもかゝされたのか。
トホロリと思入、登甚兵衛を見て、

登　おゝ、これは誰かと思うたら、卯之助の祖父の甚兵衛殿か。

甚兵　や、お前樣は教員の高山樣でござりましたか、其處においでと存じませず、御挨拶も致しませんで、これは失禮を致しました。

登　いや、其の挨拶には及ばぬこと、只今實は此方も當惑して居つたところ、是にて只今生徒同志物爭

ひを致せし故、相手を厳しく懲らしたれば涙を止めて勉強致せと、再應申せど悔しいと只泣いて居て聞入れず、ほとんと困却致して居つた。

甚兵　それはハヤお氣の毒でござりました、いやもう多くの子供をお預りで、日々御教授なされますれば、大抵のお世話ぢやござりませぬ、それに取分け此孫めは、年よりませてをります代り、誠に強情で困りきります。

登　いや〳〵決して強情ならず、四百名もある生徒の内で五本の指に算へる位、學才勝れし卯之助なれば、親父を初め貴君迄末頼もしく成人を待つて樂を致すがよいが、差當つて此の通り泣いてをつて困り入る、僕は教授の時間もござれば、跡にて篤と言諭し、早く校内へよこして下され。

甚兵　是は恐入りました、何を申すも頑是なくまだ十年になりませぬわんぱく者故わたくしが、跡にて篤と申聞け、直お後から御教場へ、連れて參るでござりませう。

登　然らば、是にてゆつくりと、

甚兵　これ卯之助、お辭儀をせぬか。

登　いや〳〵、それには及ばぬ。

甚兵　へい〳〵、有難うござりまする。

ト合方になり、宜しく思入にて上手入口へはひろ、甚兵衛思入あつて、

これ卯之助、何でそなたは泣くのぢや、今先生がおつしやる通り見所があるそちだから、外の子供衆より一倍餘計に御教授下さる御親切、其先生のおつしやることを何故聞いて行かぬのぢや、え丶泣いてばかりでは何も分からぬ、どういふ事でいぢめられたか、其譯を言つて聞かしや。

卯之　いえ〳〵先生のおつしやる事を聞かぬのではないけれど、私の裝が穢いから側へ寄るなと大きな者が、皆に意地を付ける故、私ばかり除者にされるのが、わたしや悔しくツてならぬ〳〵。

甚兵　大方それとは思つたが、何をいふにも今の身の上、子供でさへも肩身が狹く悔しいと思ふのに、纔三ツ身のさつぱりした縫返しの着替さへ着せられぬといふ親の身は、どの樣で居るだらうと、悴が胸は察しても心に任せぬ貧乏世帶、思へば生甲斐のないことぢや、それに付けても學校の教授樣は流石に開化、依怙贔屓は少しもなく地面持の息子でも又裏店の子供でも、上下の隔て少しもなく教へ諭して下さるに、其生徒でありながら着物が臭いと孫めをいぢめ、多くの中で恥をかすは、てもまあ惡い、(ト悔しいといふ思入あつて氣を替へ、)いや〳〵それもみんなこつちの愚癡だ、これ卯之助、今日は隣のをばさんから竹の子を貰うたから、お辨當へ入れて來た、是を持つて早く行き、負けぬ樣に習ふがよい。これもう泣くのぢやない、見ツともないぞや。

卯之　もう泣きはせぬけれど、又是を持つて行くと、やれ重箱でをかしいの、麥の樣なお飯だと、皆がいぢめていけぬから、今日は家へ歸りたい、どうぞ今度の試驗迄に、よい着物を着せて下され、これから每日勉強して其時いぢめた者を追拔き、意趣を返してやりたいわいの。

甚兵　おゝよく言つた、感心だく、試驗迄には都合していゝ着物を着せてやるから、必ず負けぬ樣にしやれ。

卯之　穢い物は着て居ますが、稽古で負けは致しませぬ。

甚兵　さういふことなら今日は此の儘、內へ歸つてお辨當を喰べて、ゆつくり來るがいゝ、さあ泣顏をなほして行きや。

卯之　折角持つて來て下さいましたが、それでは家で喰べませう。

甚兵　おれは少し用事があつて、外へ廻ればそなたは早く。

卯之　そんなら、お先へ。

甚兵　いや、そこ迄一緒に行きませう。

ト合方になり、卯之助先に甚兵衛花道へはひる。上手の入口より、以前の登出て、

登　今卯之助の辨當を携へて來た老人は、僕がいまだ幼年の時には、慥神奈川の青木町にて福住と苗

字を名乘る米問屋、居附地主に貸藏から千石積の帆前船を、所持なす程の身代なりしが、世の盛衰とはいひながら纔三代の其内に零落なして、卯之助が父といふは賤業の紙屑買をなすとやら、然し富貴は天の賜、いまだ七年何ヶ月と九歳に足らぬ卯之助は、天然備はる才智にて衆に勝れて學も進む、勉强なせば末々は官のお役に立つべきもの、平民にても學力あれば官位に登る開化の御代、末賴もしき、(ト花道の方を見て感心の思入あつて、)少年ぢやなあ。

ト此模樣宜しく盤木の音、誂への合方にて、道具廻る。

(善吉住居の場)——本舞臺一面の平舞臺、正面折廻し上手へ寄せ佛檀の書割、此下破れ襖の押入、眞中暖簾口、是より上手中敷居の押入、同じく反故張の障子屋體、下手破れのある鼠壁、所々を反故にて穴を塞ぎ、是より外一間の下家、引窓を見せたる柿葺の屋根を見せ、此下鼠壁と櫺子窓にて臺所を見せ、此内一ツ竈荒神棚水甕手桶など、七輪に土瓶を掛けある、其外臺所道具宜しく、いつもの所世話門口、此外丸物の井戸、釣瓶など宜しく後ろ一間の入口、腰高障子隣家を見せたる張物、何れも裏借家の體、煙草盆長火鉢などを置き、爰にお鹿結び髮、前垂掛、相長屋の女房にて皿へ小魚を載せ鰺切庖刀を持ち立掛り居る、下手井戸の側にお熊同じ女房にて、洗濯をしてゐる、此見得宜しくさんげ／＼にて道具留る。

お鹿　お熊さん、爰の家ではみんな留守かえ。
お熊　今甚兵衞さんは、卯之ちやんの所へ、お辨當を持つて行つたのさ。
お熊　おや〳〵、さうかえ、もう一足早いとお辨當の間に合つたのに、そりやあ殘念な事をした。
お熊　それぢやあ何ぞ御馳走でもあるのかえ。
お鹿　なに御馳走といふ程でもないが、いつもの魚屋が小魚が安いといつて無理に置いて行つたから、ねづぼうや石持だが、こつちの家の卯之ばうに喰べさせようと持つて來たのさ。
お熊　そりやあまあ惜しいことをした、お魚だといつたら嘸あの子が悦ぶだらうに。
お鹿　わたしたちも貧乏だが、こつちの家の善吉さんは、毎日眞身に稼ぐけれど、落目になつてはいけないもので、爲る事なす事鴟となり、今ぢやあ三度のお飯もむづかしい程とのこと。
お熊　それも根が身上のよかつた人の落ぶれだから、本當に可愛さうと、一つ長屋で替る〳〵惣菜でも斯うやつて持つてきて上げるのを、有難いと頂いて親子三人で喰べるのは、どんな心の内だらうと思ふと、實に涙がこぼれ、可愛さうでならないよ。
お鹿　たしか元は神奈川で、土藏の七つもあつた家で、奉公人も大勢居たと話しには聞いて居たが、今こそあんな老爺さんでも、昔は大の感服家で茶の湯や道具に金を遣つて、隨分贅澤に暮したさう

だ。

お熊　悪い時には悪い事ばかりで、おかみさんが死んでからお飯拵へはいふに及ばず、洗濯迄も仕なさるから、時折わたしが洗濯の次手に洗つて上げるのさ。

お鹿　それはさうとお熊さん、善吉さんは一人身だから、世間の口が五月蠅よ。

お熊　おや〳〵常談言つちやあ厭だよ、誰がわたしに惚れるものかね。

お鹿　それでも人は相縁奇縁、割れ鍋にも閉ぢ蓋だから、どうして油斷はなりやしないよ。

お熊　これは失敬な御挨拶、然し此間も西洋床の鏡に向つてしげ〳〵と、初めて自分の顔を見たが、我身ながら驚いたよ。

お鹿　何をそんなに驚いたのだえ。

お熊　それでもわたしの御面相は、もう少しよからうと自惚て居たけれど、よく〳〵見ると人間が三分でお化が七分、是がほんとの人三化七、

お鹿　又いつもの常談ばかり、ほんにお前は愛敬者だねえ。

ト兩人宜しく、お熊は洗濯をしまひ内へはひり、煙草をのみ居る、合方になり、下手より以前の卯之助辨當の包を持出て來り、直に内へはひり、

卯之　小母さん、祖父さんはまだお歸りでないかえ。
お鹿　おや卯之ちやんか、祖父さんはお前の所へ、お辨當を持つて行つた。
お熊　それぢやあ何處ぞで行き違ひ、祖父さんに逢はなかつたかえ。
卯之　いえ〳〵祖父さんには逢ひましたが、道で別れて歸りましたから。
お熊　あゝ、それぢやあ今日はお辨當を、まだ遣はずに居たのかえ。
卯之　今日はお午限りにしましたから、家でお辨當を遣ひます。
お鹿　そんならお前が持つておいでの、其の重箱はお辨當かえ、今日はお魚を喰べさせようと、これ此の通り持つて來たから、晩の御飯に煮てお上り、
お熊　今に祖父さんが歸つたら、拵へて貰ふがよい、庖刀までお鹿さんが持つて來ておくれだから、晩には澤山お上りよ。
卯之　それは有難うござります、久しくお魚を喰べませんから、祖父さんやお父さんが嘸お悅びでござりませう。
お鹿　おゝ久しくお魚を喰べぬとは、お氣の毒なことでござんすな。
お熊　さあ〳〵卯之ちやん、早くお辨當をお上り。

卯之　それぢやあ小母さん、御免なさいまし。
お熊　どれ、お茶でも汲んで上げようか。
　　ト卯之助は件の包をあけ、小重箱より茶碗へ飯を取つて辨當を遣ふ、お鹿お熊は捨ぜりふにて茶など汲んでやり、
お鹿　おやお辨當のおかずは竹の子だね、困る〳〵と言ひなすつても、どうでも以前が以前だけ走り物を喰べなさるね。
お熊　まだわたしなどは初物だから、七十五日生延びるから、卯之ちやん一つ貰ひますよ。
卯之　あゝ、澤山おあがんなさい。
お鹿　おや〳〵是は旨さうだ、わたしも一つ御馳走にならうか。（ト兩人竹の子を摘み）ほんに大そう是は旨いが、祖父さんが煮たのかえ。
卯之　いえ〳〵、是れはお隣の小母さんに貰つたのだ。
お鹿　あゝ、それぢやあ隣の芝居者かえ、錢もないくせに大そう洒落るの。
お熊　あれさ、大きな聲で聞えらあね。
　　トばた〳〵になり、花道より以前の甚兵衛懐へ着物を入れ、袖にて隱し、後を見返り〳〵出來り、門

口を明け直に内へはひり、息の切れろ思入にて

甚兵　おゝお熊さん、留守を大きに有難うござりました。

お熊　おや祖父さんお歸りかえ、大そう息を切つておいでだが、

お鹿　道でも急いで駈けておいでのかえ。

甚兵　えゝ、（トぎつくり思入あつて氣を替へ、）なに、辨天通で馬車の馬がどうしてか暴れ出し、そこら中を飛んで歩くので、やう〳〵逃げて來ましたから、息が切れてなりませぬ。

お鹿　おやまあ、それはあぶないことだ。

お熊　さあ、お茶でも一つ呑みなさんせ。それに、襦袢は洗つておいたよ。

ト茶を汲んでやろ、甚兵衞ちよつと頂いて一口飲み、

甚兵　それは有難うござりました。

お鹿　おや大そう懷が大きいが、何を入れて、

兩人　おゐでだえ。

甚兵　え、是かえ。（ト思入あつて、懷より小裁物の着物を出し、）近い内に學校で試驗がある故、其時によい着物を着たいと言つて、朝に晩に卯之助が此親仁をせびりますから、其の時條に着せてやらう

と、丁度頃合のがありましたから、一枚買つて參りました。

お鹿　おやまあそれはお奇特な、かう言つては失禮だが、苦しい中で一枚づゝも斯うして可愛いお孫さんに着せて上げるは、どんなにか樂しみだか知れやあしない。

お熊　おや綿銘仙だと思つたら、本當の銘仙で裏も通しの縹色絹、こりやあよつぽど取りましたらうね。

甚兵　思ひの外見倒して安く買つて來ましたが、どの位にふめますか、どうぞふんで下さりませ。

お鹿　此の節古着が上つて居るのに、耀市が流行るので大そう景氣が悪いといふが、質においても一圓は黙つて貸さうと思ふから、一圓二歩もしましたかえ。

お熊　新で買へば一反四圓、二圓を缺いては賣りますまい。

甚兵　成程、何方もお目利だ、實は二圓と言ひましたを、一圓三分で買ひましたが、丁度相場でござりませうな。

卯之　そんなら是は祖父さん、わたしの着物でござりますかえ。

甚兵　おゝ、試驗の時に着せるのだ、何と嬉しからうな。

卯之　あゝ、まことに嬉しうござりまする。

お鹿　丈はどうだか、ちよつと此の子に着せて見せてはどうでござんす。

お熊　もし短かければ、上があるから、わたしがおろしてあげませう。

ト兩人捨ぜりふにて件の着物を卯之助に着替へさせ、帶をしめ皆々見て、

お鹿　ほんに是は誂へ向き、

お熊　長くもなければ短かくもない。

甚兵　縞柄もよう似合ひました。（ト甚兵衞ぢつと思入、卯之助嬉しき思入にて、）

卯之　かういふ着物を着たからは、先刻いぢめた朋輩に是れを見せてやりたいから、決して汚しはしませんから、學校迄是を着て行つて見せてやりたいわいの。

甚兵　おゝ見せたくば早く行つて、思入れいぢめた生徒達に見せびらかしてやるがいゝ。

お鹿　よいべゝだから學校で、又墨だらけにおしでないよ。

卯之　いえ〳〵決して汚しはしませぬ、それぢやあ行つて參ります。

ト卯之助嬉しき思入にて、いそ〳〵花道へ駈けてはひる。甚兵衞後を見送り、

お鹿　男の子でさへあの樣に、着物を嬉しがるもの、女の子はほしがる筈だ。

お熊　わたしも洗つて此布子を、早く袷に拵へて、家の人に着せてやらう。

甚兵　いつでも留守をお賴み申して、有難うござりました。

お鹿　何のお前、どうで長家の鐵棒引き、何時でも遊んで居ますから、用があつたらいつでもおいで、ほんにさつぱり忘れて居た、此お魚は晩のお菜に、卯之坊に遣つておくれ、此鯵切をおいて行くから、後で魚を拵へたら、お向うへ返しておくれ。

甚兵　それは御親切に有難うございます、お蔭で晩には御馳走を久し振りで三人が、御飯をおいしく頂きませう。

トお鹿は以前の魚と庖刀を置き門口へ出る、此時野毛のじやん〳〵になる。

お鹿　おや日が長いから油斷をしたら、もうあれは二時のじやん〳〵。

お熊　それぢやあ襦袢は一緒に干して、乾いたら持つて來ますよ。

甚兵　それはお世話でござりました。

お鹿　さあ、お熊さん、

兩人　一緒に行かうねえ。

トさんげ〳〵になり、お鹿お熊下手へはひる。甚兵衞思入あつて、

甚兵　あゝ昔の歌の譬にも、袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝとは、はてよく言つたものぢやなあ。(ト合方になり、)今も今とて相長家のかみさん達があのやうに、朝夕世話をしてくれるが、

是といふのも善吉が、正路に稼ぐ皆お蔭、鐵砲笊や荷籠を擔ぎ、聲をからして歩いても稼ぐに貧乏追付かずで、足らはぬ勝の瘦世帶、かてゝ加へて頑是ない孫めが祖父によい着物を、着せてくれとせびれども、其の日の米さへ五合か一升買の今の身の上、苦しい中で學校へ月々納める月謝まで伜が腕の細元手、それも知らずに去年から着績けにした古布子、垢によごれて穢臭いと、多くの生徒にいぢめられ子供心に悔しいと、泣いて居るのを見る悲しさ、今の着物を着せてやつたら、いそ〱悦び學校へ行つたが、往來で人の目つまに掛つたら、此身の罪は脫れまい、思へば苦勞は絕えぬものだ。

ト甚兵衛宜しく思入、さんげ〱になり花道より善吉散髮鬘古手拭を冠り、木綿やつし裝紙屑買好みの拵へ、尻端折りにて荷籠を擔ぎ出來り、花道にて、

善吉　屑ごぜい、古着屑ごぜい〱。（ト呼びながら出來り思はず門口へ來り、）高島町から野毛山の下通りを呼びながら、考へ事をして來たので、思はず家へ來てしまつた。（ト門口を明け、內へはひり）、親父樣、今歸りました。

甚兵　お、善吉か、だいぶ今日は早かつたな。

善吉　いつもは是から住吉町の立場で一服やりまして、端口の物を賣りますが、今日ははからず一纏め

によい買物をしましたから、早く歸つて參りました。

ト捨臺詞にて荷を片附ろ、此の内より誂の反故を出し、下手よき所に住ふ、甚兵衞茶を汲みて出し、

甚兵 しつけぬ事で朝から晩迄、此永の日を歩くのだから、嘸がつかりするであらう。さうしてよい買物を今日はしたと言やつたが、どんな物を買つたのだ。

善吉 それはまあかうでござります。(ト合方になり、)今日朝から常得意の大掃除に出ツくはし、木綿や絹の襤褸ッ切をお錢は入らぬ持つて行けと、一貫目ばかり貰ひまして、直に問屋へ持つて行き、どうせ、二朱か三朱だと思つた襤褸も此の頃は、東京の蠣殼町や王子へ出來た製紙會社で西洋紙を漉きますので、ふんだ値段の倍になり、それを元手に一廻り流して歩いた先々で買つた品が多いので、實は財布の底を拂ひ、元手の薄い所から此荷を問屋へ持つて行けば、足許を見て安値故明日のことゝ、今日は早仕舞ひに致しました。

甚兵 それはまあよかつたが、其の日暮しの此の世帶、明日迄買つた代物を一晩家へ置くといふ猶豫がなければ安値でも、問屋へ賣つてしまふのだが、ぼろを貰つたお蔭ばかりで、明日の相場を待たれるのだ。

善吉 そればかりでなく是非あなたへ、お見せ申す物があつて、直に家へ歸りました。

甚兵　なに、見せる物とは。

善吉　さあお目に掛ける其の品は、まあ是れでござります。（下件の反故の内より大きな繪圖を出し、）今日ある所で一纏めに、買つた破本の其内から數寄屋大工が念を入れ圍ひの繪圖の好きな道、及ばぬ事と思つても昔を忘れぬ物好み、かういふ家が出來たなら、嘸よからうと煩惱の起し繪圖さへ出た中に、目に付いたのは此の繪圖面、親父樣定めてお見覺えがござりませうな。

ト件の繪圖を開き見せる、甚兵衞見てびつくりなし、

甚兵　やあ、こりや神奈川に居た時分、何萬兩といふ金を積んであつた盛の時、箱根を切つての米問屋と人にもいはれ見世藏から、座敷を建てた其の時の、慥に是は普請の繪圖、

善吉　今吏言ふも愚癡ながら、こんな家に其以前住つたことかと存じますと、夢の樣でござりますな。（ト合方替つて兩人繪圖をぢつと見て、）地所は海手に北を受け、間口四間の見世藏に、左右に並ぶ鎹藏、

甚兵　奧の住居は二階家に、間每隔てし其先は、海を見晴す廣座敷、

善吉　庭は樹木の植込に、至り盡せし圍ひの茶席、

甚兵　身分に過ぎし住居故、衣服は元より器財迄、

善吉　驕奢にふける物好み、

甚兵　先祖の罰を蒙むりてか、

善吉　續く不幸に左りまへ、

甚兵　抱へ地所から家藏迄、

善吉　終には人の手に渡り、

甚兵　思へば盧生の夢の世に、

善吉　昔戀しき、

兩人　此の繪圖面、

善吉　親父樣、

甚兵　忰、

善吉　思へば夢でござりましたなあ。（ト兩人顏見合せ宜しく愁ひの思入、善吉氣を替へ）いや、よしなき繪圖をお目に掛け、あたら涙を親人にこぼさせましてござりまする。

甚兵　指折り繰れば五十年、廻り／＼て手に入るも、是も不思議なことであつた。

善吉　いや／＼是も人の運、いつ何時よいことが續いて來れば又元の、地面へ返る事もあらう、其の時

再び此繪圖が役に立つまいものでもなければ、賣らずにしまつて置きませう。

ト件の繪圖を宜しく片付ける、善吉以前の卯之助が脱いだ着物に目を付け、

是は慥卯之助が不斷着て居た古布子、もし親父樣、あれは何處ぞへ參りましたか。

甚兵　今學校へ行つたのだが、もう押付歸るであらう。

善吉　一枚きりの布子を脱ぎ、外に何も着る物がないと思ふに脱捨て、學校へ行つたとあれば、何を彼奴が着て行きましたか、あなたは御存じでござりますするか。

甚兵　さあ、それは。

善吉　よもや裸で參りもしまいが、何を着て參りました。

甚兵　さあ、それは、（トぎつくり思入あつて氣を替へ、）其の卯之助の着物に付いて、話さにやならぬことがあるのぢや。

善吉　何とおつしやります。

甚兵　最前隣で竹の子の煮たのを貰ひ辨當を詰めて午に間に合ふやう悦ばしてやらうと思ひ、それを持つて學校へ行つたところ十二時の遊歩時間で卯之助も大勢の子と遊んで居たが、何かしく／＼泣いて居る故何を泣くと尋ねたら、お前の家は貧乏故去年から一つ着物をいまだに着て居て寢身い

から、仲間へ入れぬと餓鬼大將の大助とやらいふ生徒が、孫をいぢめて泣かしたと聞いた時の胸のせつなさ、それから家へ連れて來る途中に幸ひ着頃の古着、買つてやつたら着て行きたいと、嬉しさうに賴んだから今着せ更へてやつたらば、さつきいぢめた意趣返しに、是で再び學校へ行つて思入れ見せてやると、いそ〳〵して行つたのぢや。

善吉　して其の衣類は如何して、あなたはお求めなされました。

甚兵　こりや珍らしい尋ね樣、金を出して買つたのぢや。

善吉　其の日の煙りも立兼ねます、貯のない今の身の上、如何致して其の金を、御都合はなされました。

甚兵　さあ、其の金は。

善吉　高は知らねど其金が、あなたのお手に入りましたのが、どうも合點が參りませぬ。

トきつと言ふ、甚兵衞思入あつて、

甚兵　其の不審は尤もぢやが、お丶それ〳〵其の金子は、我甥の朝日山がさつき來て、旅の土產と二圓吳れたを思ひがけない金故に、孫が着物を買つたのぢや。

善吉　すりや朝日山が吳れましたか、はてさてそれは奇特なことぢや。

甚兵　あれも眞身の妹お梅が、しかも今見た繪圖面の家をそつくり引受けた、酒問屋の池田の息子半七

といふ若者に連れて逃げられたといふ話し、それを苦勞にする中で伯父と思つて小遣ひを送つて呉れる志し、鬼にも負けぬ形に似ず、あんな優しい者はない、そなたも逢つたら今日の禮を、必ず言つてくれたがよい。

善吉　此の善吉とは從弟同士、旅から歸つてまだ逢はねば尋ねて行つて其の金の、出處をとつくり、（ト思入あつて氣をかへ）いや、ようお禮を申しませう。

甚兵　いや〳〵、內證で呉れた金、眞身の中でも此事が家へ知れては惡いから、必ず禮は言はぬがいゝ。

善吉　そんならそれも申しますまいっ

ト兩人氣味合の思入、流行唄へ大太鼓の入りし誂の鳴物になり、花道より浦右衞門若衆髷羽織着流し前幕の角力好みの打扮にて出來り、花道にて、

浦右　家業續きで三月ほど家を留守にしたばかりで、苦勞を求めた妹が行方、あいつに限つて言ひ交した男を捨て外の男と、逃げるなど、いふ道ならぬ事はせぬ筈だが、それもやつぱり思案の外の、譬の通りの人心、何にしろ妹にちつとも早く逢ひたいものだ。（ト舞臺へ來り、門口を明け、）伯父御、家にごんしたか。

甚兵　や、さういふ聲は。

善吉　朝日山殿か。

浦右　おゝ二人共家であつたか。

ト合方になり、浦右衛門内へ入り、よき所へ住ふ、甚兵衛は悪い所へ來たといふ思入あつて、

甚兵　さつき道で見掛けたに、又爰へ來さしつたか。

浦右　なに、わしを道で見掛けたとは。

甚兵　いやなに、かけ違つて久しく逢はなかつた。（トもぢ〳〵する、浦右衛門不審の思入にて、）

浦右　餘儀ない事で難波から梅の咲く頃迎ひが來て、其魁の顔ぶれに替つた出合の取組も、十日の勝を取つた故、金主が勸めに蒸汽へ乘り下の關から長崎の船路も纔三月越し、浪も靜に恙なく家へ歸つて様子を聞けば、妹が家出をしたと聞き知邊の所は尋ねたが、今に行方が知れぬので、伯父御の所へ思はぬ無沙汰、今日は留守中世話になつた、其禮がてら出掛けて來ました。

善吉　何のまあお禮どころか、常不斷厄介になる私等故、お前の留守もろく〳〵に見舞はぬ位の無沙汰をして、譬の通り貧乏暇なし、何にしろ何事なく御無事でお家へ歸つたのは、何よりか目出たいが、氣にかゝるのはお梅どのが、色に迷つて家出をしたと、話にびつくりしましたが、伯母御一人でくよ〳〵して、お前の歸りを待つて居たが、嘸やお前が歸つたので心丈夫になられたらう。

浦右　それも親子の情合故わしが歸る其日迄は、泣いてばかり居たとのこと、それを思へば妹が不孝の罪は脱れぬ筈、伯父御を初めこんたに迄、留守中いかい厄介を掛けました。

善吉　いや〳〵其の禮はこつちから申さねばならぬこと、さつきは親父へ小遣ひに二圓といふ金を下すつて、有難うござりました。

ト手を突き禮を言ふ、甚兵衛はぢつと俯向き居る、浦右衛門不審の思入にて、

浦右　あゝこれ〳〵善吉どの、お前方お二人に今逢うたがわしは初めて、それにさつきも道で逢つたと伯父御の話しも不思議だと、思つた所に小遣ひなぞを上げた覺えは少しもないに。

ト言ふを甚兵衛冠せて、

甚兵　あゝこれ朝日山殿、さつき逢うた其時に、小遣ひにしろと、呉れたではないか。

浦右　何の上げた覺えはないに、そりやあ大方人違ひであらう。

甚兵　いや〳〵何で實の甥の、そなたを見違へてよいものか、而もさつき學校の門前で、逢つたぢやないか。

浦右　何の、今朝から門口へも、出たことはござりませぬ。

甚兵　はてさて、そなたは若いくせに物覺えのわるいことだ、あれ程逢つた其の時に、しかも二圓とい

ふ金を呉れたことを忘れたのか。

浦右　何とお前が言はつしやつても、わしは少しも覺えはない。

甚兵　さて〳〵覺えのわるい男だ。

トばた〳〵になり、花道より以前の卯之助泣きながら逸散に出て來る、後より吾助古着屋の若い者にて付いて出來り、卯之助が家へはひるを見て思入あつて直に引返して花道へはひる、卯之助はハツト泣伏す、皆々見て、

善吉　こりや卯之助、ものをも言はず何で泣くのだ。

卯之　さつきお祖父さんが買つて呉れた此の着物を、學校へ着て行つたら襟に付いてゐる札を見て、こりや天道干で買つた着物、大方是は死んだ者の古いのであらうから、死人臭いとみんなが言ひ、又恥をかゝされました。（ト泣伏す、浦右衛門思入あつて、）

浦右　年端も行かぬ卯之助を、そんなことを言つていぢめるとは、惡い生徒があると見えるな。

善吉　父は知らぬが不斷から、着替一枚ない者が、俄に綺麗な着物をきた故、人の目つまにかゝるも尤も、殊に出所知れざる其の品。

甚兵　や、

善吉　着物を父に見せるがよい。

卯之　あい〳〵。

　　ト卯之助立上り、善吉の側へ寄る、是にて襟に付いてゐる符牒を見て、

善吉　やゝ襟に付いたる此の符牒は、見覺えのある安達屋の小印を押した此符牒、どうして是が親父樣

　いやさ、こりや安達屋でお買ひなされたか。

甚兵　さあ、其の安達屋で今し方、買つて孫めに着せたのぢや。

善吉　して代料はいか程で。

甚兵　慥一圓三分であつた。

善吉　此の符牒には一圓と五十五錢とござりますが。

甚兵　や。

善吉　それをあなたは一圓と七十五錢でお買ひなされましたか。

　　トこれにて甚兵衞ぢつと俯向いて居る、浦右衞門氣の毒なる思入にて、

浦右　見世は隨分大きいが、世間で噂のいか物屋、それは大方見世の者が、つけかけをして賣つたのだ

　らう。

善吉　よもやと思へど代料の其の出所も分明ならず、符牒と値段の違ふといひ、是からわしが安達屋へ行つて調べたことならば、委細の譯は知れるであらう、これから直に一走り行つて樣子を聞きませう。

ト善吉思入あつて立上る、甚兵衞あわてゝ留め、

甚兵　あゝこれ悴、行くには及ばぬ。

善吉　なに、及ばぬとおつしやりますは。

浦右　どういふ譯か來合した、此の朝日山も心掛り。

善吉　此の場で樣子を。

兩人　おつしやりませ。（ト兩人詰寄る、甚兵衞是非なき思入にて、）

甚兵　面目ないが其の品は、何を隱さう買つたは僞り、實はわしが盜んだのだ。

兩人　えゝ。（トびつくりする、甚兵衞思入あつて、）

甚兵　孫が不便と道ならぬ盜みをしたも出來心、每日通ふ學校の生徒に穢ないくと、除者にしていぢめられ、しくく泣くを見るにつけ、いとしく思へど氣替さへ內證で買つてやり度いと、思ふ矢先に安達屋の見世で目に付く三つ身の着物、寸尺さへもよさゝうと心が迷ひ四邊を見れば、幸ひ

の身こ此の身、年がひもない事をして二人の手前も面目ないが、盗んだ上は此の儘に品を返してやつた迚、惡名拔けぬ此の身の科、實に今では死んでなとそなたに詫をせねばならぬ。（ト思入にて言ふ、善吉もぢつと思入あつて、）

人影もなく見世には小僧が居睡り居れば、竊にそれを掠め取り孫に着せたが我過り、年がひもない

善吉　いかに貧苦に迫つたとて、何故此樣な道ならぬ事をあなたはなされました、纔小裁の着物でも盜めば賊の汚名は脱れず、暗い所へ行つた擧句が懲役人にならねばならぬ。（ト以前の繪圖を出し）、これ此の繪圖の藏造り立派な暮しをなされましたお身も段々不幸が續き、終にしがない暮しをすれど、なぜこんな事をなされました、えゝ情ないお人ぢやなあ。

浦右　おゝ其の腹立も尤もだ、此の朝日山も裕福な身の上ではござりませぬが、派手な家業をするお蔭で、どの旦那方へ無心を言うても、五圓や十圓の金は出來ます。斯ういふ譯で卯之助に着物を一枚着せたいと事を分けておつしやれば、他人ではなし伯父御のこと、わしがどうなとして上げように、譬にもいふ親は泣寄り、つながる緣の浦右衛門、何故餘所々々しくして下すつた、えゝそれが恨みでござります。

甚兵　今言ふ通り朝日山や忰に是を聞かれたら、生きて爰には居られぬ甚兵衛、命を捨てねばならぬわいなう。

ト甚兵衞思入、卯之助是れを聞き、件の着物を脱ぎ襦袢一つになり、

卯之　これお祖父さん、お前が取つた此の着物を先へ返して下さりませ、穢ない着物でいぢめられても
ぢつと辛抱しますから、泥坊になつて下さりまするな。

甚兵　おゝそなた迄が其の樣に、言うてくれると返す〲面目もない私がふしだら、死んで言譯する程
に盜みをしたは堪忍してくれ。

ト甚兵衞是迄といふ思入にて、つか〱と立上り、以前お鹿の置いて行つた庖刀を取つて、

幸ひ是で此の身のあかりを。（ト死なうとする、善吉浦右衞門あはてゝ留め。）

善吉　えゝめつさうな事なされまするな、あなたが盜みをなされましたも、元はと言へばわたくしの稼
ぎが疎く卯之助に襤褸を下げさせ置く故なれば、お前樣が死なつしやれば、又わたくしも言譯に
命を捨てねばならぬ仕儀。

浦右　死んでは是迄善吉殿が、晝夜稼いだ孝行も無になる事故尤もだが、まあ〱短氣はせぬがよい。

卯之　お祖父さんやお父さんが死ぬのもわたしが友達に、いぢめられて泣いた故、わたしも一緒に命を
捨てねば、どうも義理が立ちませぬ。

浦右　年は行かねど學校の厚い敎を受けるだけ物の條理を辨へて、大人も及ばぬ今の詞、よく潔よいこ

とを言つたなあ。
善吉　あなたが死ねば貧苦でも二人三人相續の、出來る血筋も絶えますれば。
浦右　氣を落着けてこれ伯父御、死を止まつて、
兩人　下さりませ。
甚兵　すりや、死ぬるにも死なれぬか。はあゝ。（ト甚兵衞泣伏す。善吉思入あつて、）
善吉　かうなる上は少しも早く、此の小袖を安達屋へ返して盗んだ詫をしたら、堪忍せぬこともあるまい。どりや一と走り是から直に。（ト立上るを浦右衞門留めて、）
浦右　いゝや、假令品物を其の儘返して詫びたとて、盗んだ罪は消えぬから、それより是から己が行つて、其の代金を倍にして、金を拂つて詫びたなら、大抵先でも勘辨しませう。
甚兵　えゝ忝ない志し、わしが盗んだ其の代を、こなたが拂つて下さるとか。
善吉　お禮は詞に盡されませぬ、えゝ有難うござりまする。
浦右　いやうか〳〵して居る所でない、先から來ぬ内こつちから、勘定なして身の詫なさん。
善吉　そんなら何分よい樣に、
甚兵　どうぞ詫をして下され。

浦右　必ず氣遣ひさつしやるな。(ト立上り門口へ出て、甚兵衛に向ひ、)私が先方へは掛合ふから、跡で必ず死なうなどゝ、惡い心を出さぬがよい。

甚兵　何から何迄、

善吉　忝ない、

甚兵

浦右　どりや行つて來ようか。

ト早き合方になり、浦右衛門思入あつて足早に花道へはひる、跡甚兵衛見送りちつとこなしあつて、

甚兵　あゝ思へば纔十何年我代迄は神奈川で、五本の指に折られた身代。父が跡を譲られて五十年の其の内に見る影もない姿となり、悴や孫に苦勞さすも、おれが榮耀にふけつた故、またも苦勞を掛け足らず、盜みをしたはどうしたことか、草葉の蔭で御先祖が、嘸や恨んでござるであらう。

善吉　其の御苦勞をさせまいと、思つて日夜稼げども、慣れぬ家業に薄元手、

甚兵　せめては孫が成長をと、樂しむ甲斐も情ない、

善吉　わづか氣替の着物もなく、去年の儘なる古布子、

甚兵　垢に親子がしめりがち、

善吉　涙に袖の綻びも、

甚兵　人手へ頼む不自由に、
善吉　年端も行かぬ忰まで、
甚兵　いかい苦勞を、
兩人　しやるなう。

ト兩人卯之助を引寄せ愁ひの思入、此以前下手より喜兵衛羽織着流し古着屋の亭主の打扮、以前の吾助附添ひ出て門口をそつと窺ひをり、此時ずつと内へはひり、兩人甚兵衛を捉へ、

喜兵　うぬ盜人め、見付けたぞ。
吾助　よく晝日中目を拔いたな。（ト甚兵衛を引きずゑる、善吉びつくりして甚兵衛を圍ひ、）
善吉　あゝこれ、物をも言はず人の内へ、案内もなく親人を手籠めにさつしやる此方衆は、まあ何處からござらつしやつた。
甚兵　いや〱、忰面目ないが此のお人は、さつき盜んだ着物の主、安達屋の旦那樣だ。これ手を合して拜みます、どうぞ許して下さりませ。
喜兵　へへ、いゝゝ、おつウ哀れッぽく持掛けて、隙でもあつたら逃げる氣だらう、そんな甘口に乘る樣な安達屋喜兵衛樣ぢやあねえ。

吾助　とやかう言つても手證を見られ、家迄こつちで突留めて、捉めえに來たからは、何にも言はず往生して、さあ親仁め一緒におゆびあがれ。

ト甚兵衛の胸ぐらをとつて引立てる、善吉是を留め、

善吉　あゝこれ待つて下さりませ、此方に覺えのある事故、どうかお詫と今し方角力取の朝日山が、盗んだ品の代を持ち、お見世へお詫に行きました、ほんの親父が出來心で、いはゞ是が貧の盗み、其代料を拂つたのでまだお心が濟まぬなら、此の善吉をどうなとして、どうぞ親父は此儘にお許しなされて下さりませ。

喜兵　飛んだ馬鹿を言ふものだ、今更代を持つて來たとて何しにそれを受取るものか、それで盗人にならなけりやあ、皆盗んで若し知れたら、後から代を拂つて歩かア。もう盗まれた其の事を委しく屯所へ屆けて出たから、これから親仁を連れて行き、お上の吟味を受けにやあならねえ。

吾助　貧の盗みの出來心と、そつちで言つても此方では、是迄度々盗まれた、見覺えのある此の親仁。

喜兵　それも大方汝等親子で、相ずりをして取つたのだらう、是から屯所へそびいて行つて、白狀させにやァ腹がいぬ。

吾助　さあ、きり〳〵とあゆびやあがれ。

ト甚兵衛を無理に引立てる、善吉留めるを振拂ひ、ト〻甚兵衛を引立てる。爰へ下手より佐次郎兵衛白髪鬘着流し、差配人にて以前のお鹿お熊付いて出來り、捨臺詞にて吾助を留め、

佐次　あゝこれ〳〵、樣子は小蔭で逐一聞いたが、お前方が甚兵衛殿を連れて行くのは尤もだが、話しを聞けば朝日山が金を持つて行つたとのこと。

お鹿　盜んだには違ひないが、いはゞ孫が可愛いので貧の盜みの出來心、

お熊　不斷正直々々と、長家中で噂をする、此人達に限つては、

佐次　此の差配人を初めとして、長家の衆が證人だ、晝挊ぎを生業なぞとそんな事は決してない。

お鹿　今はしがない暮しだが、元は立派ないゝ衆の果。

お熊　何でもちよつと魔がさして、欲しいと思つた小裁物。

佐次　符牒通りに拂ひを取つたら、二割か三割儲かる商ひ、此長家を差配する、此の佐次郎兵衛が扱ひますから、まあ物靜に言つて下されし。

喜兵　いや御差配人の御挨拶だが、斯ういふ事を此の儘に金を取つて濟ましては、後日の爲になりませぬ。何でも召連れ訴へして、泥坊にせねばなりませぬ。お前さん方がどの樣に、言ひなすつても無駄なことだ、泥坊だから聞かれませせぬ。（トきつといふ、佐次郎兵衛むつとして、）

佐次　さう慳貪に言はずとも、膝を抱いて頼むのだ、是が場末のぽんぽち大家、たゞ差配人と一口にお前方は見て居るのか。ちつと古い文句だが、先づ肥代は言ふに及ばず、取るなと厳しいお觸のあつた其の樽代も名を替へて、引越し蕎麥の切手で濟ませ、お廢しにした節句錢や又埃錢釣瓶錢、何だの彼だのと取立てる差配人とは譯が違ふ、表長家十軒に裏長家が兩側で八軒づゝで十六軒、合せて二十六軒の支配を預かる佐次郎兵衛、この頃火事が物騒と店子で廻る火の番へも、毎日炭や辨當の茶まで自腹で遣る位、店子の難儀は見て居られぬ、是非とも聞いて貰はにやならぬ。

ト思入にて言ふ、喜兵衛前へ出て、

喜兵　いやお前もたゞの差配人でないと、理屈を竝べるなら、此方もたゞの古着屋で軒を竝べる質屋あがり、紙屑買から出世をした天道干と思ひなさると、それは大きに違ひますぜ。以前柳原の土手側にまだ床店のあつた時分、粘附仕事の贋物師、双子木綿へ絲拔を拵へて喰せる唐棧張り、唐絲入りを蠟の香でごまかす薩摩のまがひ織、足らぬ行丈引張つて、さす物差の一分でも割を喰ねえ古着の目利、其の生馬の目をぬかれ此間から幾度となく、見世の物を盗まれたは家の暖簾に拘はること、假令誰が口をきいても親仁を屯所へ突出さねば、此の安達屋の顔が立たぬ。

吾助　旦那はともあれ見世を預かる、己が何時でも越度になり、是迄幾度も迷惑したから、爰でぐづぐ

づ分らねえ差配人の立入や、長屋の衆の義理立を聞いて居ては果しがつかねえ。

喜兵 それとも達てぐづ〳〵言ふなら、ふんじばつても、行かにやあ、

兩人 ならねえ。

ト兩人甚兵衛を引立てる。佐次郎兵衛皆々悔しいといふ思入、善吉は此内術なき思入にて、

善吉 身に覺えある親父の罪、今更何と言譯しても所詮聞いては下さるまいと、思つて默つて居りましたが、御覽の通り七十に近い體で繩目にあひ、此先ひよんな事でもあると、やつぱり死なねばなりませぬ、せめて親父が罪を引受け此の善吉を名代に、お連れなされて下さりませ。

卯之 いえ〳〵お祖父さんが盗んだ着物は、わたしに着せたいばつかり故、皆悪いは此の卯之助、どうぞ縛つてどんなめにでも、わたしをお連れなさりませ。

甚兵 あゝこれ、悴やそちには罪はない、必ず庇ふことはないぞ、若い者より老耄した生い先短かい此の親仁、覺悟を極めて行きますから、あとは何分皆さんで、悴や孫を願ひます。

喜兵 何ぞといふと涙をこぼし、餓鬼を引合ひに出しやあがるが、何をいつても見脱すものか。

善吉 其のお腹立は無理ならねど、親父様をやりましては、悴のわしが濟みませぬ。

卯之 いえ〳〵お父さんよりわたくしを、酷いめにあはして下され。

善吉　いや、わたくしを。
卯之　いえ〳〵、わたくしを。
　ト兩人身を突付け賴む、これを喜兵衛吾助振拂ひ、
喜兵　幾ら吼えても無駄なことだ。
善吉　其處を何卒、
喜兵　それから見物しやあがれ。
　ト善吉をむごく突倒して、ばた〳〵早き合方にて吾助甚兵衛を引立て、喜兵衛付いて足早に花道へはひる。卯之助は善吉を介抱する、善吉起上り是非なき思入にて、
善吉　長家の衆や朝日山が代を拂つて詫をするを、一足違ひで親切もみんな水の泡となり、情をしらぬ安達屋主従、
佐次　おゝ尤もだ〳〵、此の濱で名の高い、無慈悲な相手が安達屋故、
お鹿　どうでたゞでは濟みますまい。
お熊　是からお前や大家さんが、
善吉　歎願をしたらお惠みの、深いお上のお慈悲にて、

佐次　お下げになるまいものでもない。
お鹿　さういふことなら、
お熊　少しも早く、
善吉　跡をお頼み申します。
　　ト早き合方、善吉氣の急く思入にて逸散に花道へはひろ。卯之助跡を追掛け出て、
卯之　わたしも是から跡追ひかけて、
佐次　あゝこれ卯之助、まあ待ちやれ、どうで己も行かねばならねば、一緒に連れて行つてやらう。
お鹿　そんならあなたも、
兩人　おいでなさるか。
佐次　差配人が行かなければ、何かに付けて不都合だ。
卯之　をぢさん、早く行きたいわいの。
佐次　歩いて行つては埒が明かぬ、早く己におんぶしろ。（ト卯之助をおぶひ、門口へ出ろ、）
お鹿　こりやあ大家さん、御苦勞でござりますね。
佐次　途中で車に乘つて行く氣だ。

お熊　それぢやあ、何分、

兩人　大家さん、

佐次　おゝ、火の用心を頼んだぞ。

ト時の鐘の送りにて、佐次郎兵衛卯之助を背負ひ花道へはひる。お鹿お熊後を見送り、よろしく此の道具廻る。

（交番所の場）――本舞臺正面八尺の交番所、兩褄硝子張の中窓、正面板羽目柿葺の本屋根、屋體の内に椅子を三ッ竝べ、此の屋體の上の方ペンキ塗り西洋風の柵矢來て見切り、下の方異人館を斜に見たる片遠見にて見切り、總て交易場交番所の體。爰に浦部砂道、入江葭成の二人黑の帽子黑の洋服靴にて椅子に掛り居る。屋體の外下手に畑右衛門、田舍親仁やつし裝尻端折り三尺の上帶、股引脚袢草鞋、太五平同じ裝にて腰をかゞめ、物を聞いて居る體、ラッパの笛の音にて道具留る。

畑右　へい〳〵、失禮ながら少々ものが承りたうござります。

砂道　承りたいとは、何事なるぞ。

畑右　へい、仙元下へ參りますには、どう參りまして宜しうございますか。

太五　お教へなされて下さりませ。

砂道　仙元下へ參るのは、此の道筋を眞直に凡そ十町程參つたら、突當りから左へ曲り、右へ付いて二町行くと、最早其處が仙元下だ。

葭成　まだ近道もあるけれど、田舍の者には入組んで、中々道が知れにくい、今同勤が申せし通り十町程參つたら、又々そこで聞くがよい。

砂道　道の知れざる所をば、聞かずに參るは損の元、面倒でも幾度となく聞いて參るが宜しいぞ。

畑右　へい、今し方此先で職人體の若い人に尋ねましてござりまするが、田舍者だと存じましてそんな所はないのあるのと、馬鹿に致しましたのを、側に居た年寄が見兼ねて、道を聞くならばお巡り樣に、お聞き申せと教へてくれましてござります故、失禮をも顧みませず承りましてござりまするが、人民保護のお役目とて見る影もないわたくし共へ、御懇に行く先をお教へなされて下さりますは、有難いことでござります。

太五　土地の勝手も存じませぬ田舍者が此樣に、道を聞き〳〵歩きますも、あなた方のお務めが行屆きます故でござります。昨日も惡い人力車に酒手をねだられ困りましたが、丁度折よくお巡り樣が御通行なされまして、人力車夫をお叱り下され、酒手を取られずしまひしました。

畑右　恐れ多いことでござりますが、御一新此の方の好い事を算へますれば、先づ第一が御巡り様、續いて郵便針がね便、又鐵道に街の瓦斯燈、橋の掛替へ道普請、犬の糞のないばかりも結構な事でござります。其のよい事は言ひもせず、やれ世が惡いの不景氣のと、おのが働きのないのも言はず、苦情のみ言ふなまけ者、まことにお世話のやけたこと、困つた奴等でござります。

ト此内砂道、葭成新聞を見て居る、砂道懐中時計を見て、

砂道　こりや／＼老人、最早西山へ日も傾き、四時四十分なれば、少しも早く參つたがよい、其の行先も何番地と確と番地を心得ずば、區務所へ參つて聞くがよいぞ。

畑右　勝手知らざる田舍者故、左程に迄御親切にお教へなされて下さりますは、有難涙がこぼれます。

太五　是に付けてもおらが村の戸長殿は心得違ひ、新聞なども假名付でなければ讀めぬ位にて、

畑右　戸長の權で横柄に、小前の者は目も鼻もないもの丶やうに言ひをるが、

太五　大きな違ひでござるの。

砂道　こりや／＼、最早五時を打つたれば、餘計な事は申さずとも、

葭成　早く尋ねに參るがよい。

畑右　へい／＼、これより直に參ります。

太五　まことに有難う、

兩人　ござりまする。（ト辭儀をなし、上手へはひる。）

砂道　田舍者といふ者は、餘計な事を申すものぢやが、問はず語りに申したる戸長の噂は何れなるか、

葭成　開けたやうでも在方は、諸事陰曆を用ひますれば、まだ舊習は脱しませぬ。（ト此時花道の方にて、）

喜兵　うぬ逃げるとて逃すものか。

吾助　さあ、きり／＼とあゆびやあがれ。

ト やはりラッパの稽古笛になり、花道より以前の喜兵衞先に立ち、吾助甚兵衞の胸ぐらを取り、引ずりながら出て、

甚兵　どちらへでも參りますから、手荒い事してくださりますな。

喜兵　人の見世の代物をちよろまかした盜人め、手荒くしねえでどうするものだ。

吾助　ぐづ／＼せずとあゆびやがれ。

ト右の鳴物にて舞臺へ引ずり來る、兩人是を見て、

砂道　こりや／＼兩人暫く待て、見れば老人を引立て參り、

葭成　何らの件で其樣に、手荒きことを、

兩人　致すのぢや。
喜兵　此の老耄はわたくしどもの古着を盗みました故、お訴へを致しませうと召連れましてございます
る。
吾助　手荒いことを大人氣なく致し度くもございませぬが、見掛けと違つてこいつめは、いけツぶとい
奴でございまする。
砂道　すりや召連れし老人は、
葭成　盗みを致せし者なるか。
喜兵　盗みし次第をお二人さま、お聞きなされて下さりませ。（ト此時上手にて、）
重良　其の次第は濱崎重良、それへ參つて承らん。
ト合方になり、上手より重良黒の帽子同じ洋服にて出來る。
砂道　これは〳〵濱崎氏には、日夜を掛けて御巡行、
葭成　御苦勞千萬に、
兩人　存じまする。（ト辭儀をなす。）
重良　各々にも御同樣。（ト會釋をする。）

砂道　何はしかれ、
兩人　先づ〳〵これへ。（ト椅子を出す。）
重良　ゆるしめされ。（ト椅子へ掛け、）只今あれにて承りしが、それに控へし兩人が召連れ來りし老人は、盜みをなせし者でござるか。
砂道　いかにも、盜みを致せし由、兩人訴へ、
兩人　申してござる。
重良　こりや老人、其方は何れの者ぢや。
甚兵　へい、わたくしことは元町の十番地に居りまして、紙屑買を渡世に致す、福住善吉が親甚兵衞と申しまする。（ト重良是を手帳へ書留め、）
重良　して又衣類を盜まれし其方は、何れの者ぢや。
喜兵　わたくしことは住吉町十五番地に住居致し、古着渡世を致します安達屋喜兵衞と申します者。
吾助　又わたくしは同家の手代、吾助と申します者にござります。（ト重良一々書留め、）
重良　こりや喜兵衞、其方が甚兵衞に盜まれし其の品は。
喜兵　則ちわたくし店先へ釣置いたる生業物銘仙縞の小裁小袖、是なる老爺が盜みまして、大膽にも孫

に着せ學校へやりましたを、見附けましたは襟裏に、安達と申す小印を押したる符牒の付いて居るのが證據、それ故召連れ訴へに、親仁を連れて參りました。

吾助　まだ此外に先達より幾品となく盜まれましたが、こいつの仕業と存じられまする。

甚兵　太い親仁でござりますから、其の御詮議を共々にお願ひ申しあげまする。

甚兵　いえ、外の品は存じませぬが、小裁小袖を掠めましたは、何をお隱し申しませう、一人の孫がござりまするが、學問がさせたく學校へお賴み申しましたが、其の日の煙も立兼ねますれば、穢ない裝で參ります故、側へ寄るなと朋輩の惡い子供にいぢめられ、どうぞ試驗の其の時は、綺麗な着物が着て行きたいと申しますのが不便故、假令此身はどの樣な憂目に逢はうとも、もう先の短い體に、生先の長い孫が朋輩と共々試驗に出られる樣、よい着物をば着せたさに、ついわたくしも道ならぬ事を致してござりまする。（ト是を聞き重良不便なといふ思入あつて、）

重良　いや其方は殊の外とり逆上て居る樣子、申すこともそゞろなれば、悴を屯所へ呼出し逐一吟味致すであらう。

砂道　仰せの如く甚兵衞は、賊など致す者とも見えず。

葭成　彼が悴の善吉を、御吟味あるが宜しうござる。

喜兵　失禮ながら賊などを致さぬ者とはお目違ひ、見掛は殊勝に見せかけても心の太い此の親仁、只一通りでは言ひますまい、體の骨が碎ける程栲問なされて下さりませ。
砂道　やあ、上の詮議に入らぬ口出し。
葭成　失禮千萬控へてをらう。
喜兵　へゝえ。（ト控へる、）
重良　兎にも角にも善吉を、呼出して問ひ糺さん。
　　ト此時早めたるラッパ、ばた〳〵にて花道より以前の善吉卯之助の手を引き、足早に出來り、あとより、佐次郎兵衛追ひかけ出來り、花道にて、
善吉　何れへ引かれてござつたかと、心も空に追ひかけしが、向うにござるは親父さま。
佐次　むゝ、甚兵衛殿とあるからは、ちつとも早く善吉殿。
善吉　卯之助來やれ。（トばた〳〵にて舞臺へ來るな、）
砂道　こりや、其の方は、
葭成　何者なるぞ。（ト是にて善吉下に居て、）
善吉　はッ、わたくしことはこれに居ります甚兵衛が悴、善吉と申す者でござります。

佐次　又伴ひましたは孫の卯之助、差添ひ參りしわたくしは佐次郎兵衞と申します、差配人でござります。

砂道　おゝ其方が善吉なるか、只今是なる濱崎氏・

葭成　父甚兵衞が儀に附いて、卽刻屯所へ呼出すところ、

重良　よくぞ是へ參りしぞ。

善吉　はツ、（ト辭儀をなす、重良思入あつて、）

重良　こりや善吉、其方が親甚兵衞は、當年何年に相成るぞ。

善吉　へい、六十七にござります。

重良　おゝ六十七に相成るか、定めし老耄致しをらうな。

善吉　いえ、年程に老耄は。

重良　いや〳〵老耄致し居らう、申さば小兒も同樣に、求むる心で其衣類持歸つたことであらうな。

善吉　へゝえ。（ト思入）

佐次　ても有難い今のお尋ね、左樣でござると善吉殿、早くお受をしたがよい。

ト佐次郎兵衞勸める、善吉思入あつて、

善吉　へい、左樣にござりまする。

重良　然らば忰善吉より、其の代金を償ひなば、喜兵衞方には何がしか利を得る共損は行くまじ、甚兵衞は六十有餘で老耄なせしことなれば、取るに足らざる小兒同樣、其の代金を受取らば喜兵衞は此の儘料簡致せ。

喜兵　あなた樣の仰せなれど、此の料簡は出來ませぬ。

重良　なに、出來ぬとは。

喜兵　假令老耄致さうとも、人の物を只取つて金を渡さず老耄と、申せばそれで濟みますか、金を出しても、わたくしは、其料簡は出來ませぬ。

吾助　今日に限らず是迄も、度々見世の代物を盜まれましてござりますが、大方こいつが人知れず盜んだことでござりませう。

喜兵　此の場で強い拷問なし、白狀させて下さりませ。

重良　拷問なすは其方が、指圖に及ばず我々が、今日務むる職掌なれど、老耄なせし甚兵衞故、借りて參りし心ならん。よしや其方存ぜずとも、家内に誰か甚兵衞に貸したる者のあらんも知れず、人に情を掛けるのも必ず家の祈禱なるぞ、篤と家内の詮議なし、再び屯所へ申出でよ。

ト思入にて言ふ、喜兵衛何なといふ思入にて、

喜兵 いえ、宅へ歸つて其の詮議を致す迄もございませぬ、元より大家といふ程の身代にてもございませねば、是なる吾助の其外に、貸します者はございませぬ。

重良 すりや吾助、其の方貸した覺えはないか。

吾助 いえ假令親類縁者でも一切人に物を貸すなと、申し付つてをりますれば、何しに親仁に貸しませうぞ。

喜兵 小裁小袖は甚兵衛が、我店先で盜みましたに聊相違ございませぬ。

佐次 是はしたり喜兵衛殿、知らぬとこなたが言ふけれど、覺え違ひもあるものだ、情は人の爲ならずと事をわけておつしやるのに、よく考へて見たがよい。

喜兵 憚りながら古着屋の仲間内でも目が利いて、安達の鬼といはるゝ喜兵衛、まだ五十にもならぬ體一錢たりとも貸したものを、忘れる樣なことはない。

吾助 小裁小袖は甚兵衛が盜んで家にあつた故、脫れツこのねえ盜人を、何でお庇ひなさるゝか。

喜兵 昔と違つて上向は、依怙贔屓のない世の中に、さりとは分からぬ御詮議だ。

砂道 やあ、濱崎氏がお調べあるを分からぬ詮議とは、何事なるぞ。

葭成　上を上と思はざる、失禮極まる無禮者めが。
喜兵　それだといつて分からぬから。
砂道　やあ、まだ〳〵左樣な事を申すか。
葭成　强ひて申さば許さぬぞ。（ト是にて吾助喜兵衞の袖を引く。）
喜兵　恐れ入りましてござりまする。（ト重良物柔らかに、）
重良　こりや喜兵衞、其方貸した覺えなく、いよ〳〵以て甚兵衞が、盜み取りしと申すのぢやな。
喜兵　へい、彼が盜み取りましたに、
吾助　聊か相違ござりませぬ。
重良　むゝ、相違ないとか。
　　　ト重良砂道と顏見合せ、是非もないといふ思入。
佐次　えゝ鬼と言はるゝ程あつて、さりとは情を知らぬことだ。
　　　ト此内甚兵衞善吉は俯向き居る、重良甚兵衞に向ひ、
重良　こりや甚兵衞、安達屋喜兵衞が店で、小裁小袖を盜みしか。
甚兵　はい、盜みましてござりまする。（ト是を聞き、善吉前へ出て、）

善吉　おゝ是はしたり親父樣、お前樣は何をおつしやります、其の小袖はわたくしが盜みましたのでござります。

甚兵　えゝ、何と言やる。

善吉　稼人故わたくしを、おかばひなすつて盜みもせぬ小裁小袖を盜んだと、おつしやりますは身に取つて有難うはござりますが、親を罪に落しては天道樣へ濟みませぬ。（ト重良へ向ひ、）只今甚兵衞が盜みましたと申しましたは全く僞り、此の善吉でござりまする。

甚兵　いや／＼それはこなたが僞り、小裁小袖を盜んだは、こなたではない甚兵衞だ。

吾助　親父に違ひござりませぬ。

善吉　違ひないと言はつしやるには、何ぞ親父が盜んだといふ、慥な證據がござりますか。

喜兵　おゝ慥な證據は安達といふ、小印を押した見世の符牒の襟に付いてる小裁小袖が、家にあつたが慥な證據。

善吉　符牒の付いた其の小袖が、家にあつたはわたくしが、盜んで持つて歸つたのだ、それを親父が盜んだ證據と、おつしやりましても喜兵衞樣、そりや證據にはなりませぬ、あなたの見世で盜んだは、此の善吉でござります。

甚兵　いや〳〵善吉ではござりませぬ、貧に迫つて私が、盜みましてござります。

善吉　いえ〳〵親父の申すは僞り、其の小袖はわたくしが、盜みましてござりまする。

甚兵　まだ〳〵そんな事をいふか、道にかけたる事はせねど、引續いての此の不仕合に、其日の煙も立兼ぬれば、生甲斐のない此の甚兵衞、盜み致した其罪で今獄屋へはひるとも、生先のない體故、死んでも悔む所はない。

善吉　勿體ない事おつしやりませ、假令幾つになつたとて、死んでもよいといふ樣な親がなんでござりませう、貧乏暮しに世を見限り、左樣な事をおつしやるのも、此の善吉が意氣地のない故、庇つて下さるお志しは有難うはござりますが、盜みをしたは私故、必ずおかばひ下さりますな。

甚兵　えゝさりとては聞分のない、そなたが獄屋へ行つた日には、後に殘つて孫や己が、何で命が繫がれよう、其日に迫つて行末は首でも縊つて死なねばならぬ、とても死ぬなら獄屋へ行つて、そなたの苦勞が助けたい。

善吉　あなたを獄屋へやりまして、何で苦勞が助かりませう、跡をお案じなされまするが、幸ひ此頃朝日山も旅から歸つてをりますれば、譬にもいふ親は泣寄り、見て居ることではござりませぬ。

甚兵　何であらうと邪に、盜みをしたは此の甚兵衞、さあ繩かけて下さりませ。（ト後へ手を廻す、）

善吉　いえ〳〵盗みを致しましたは、此の善吉でござります。
甚兵　いえ〳〵、甚兵衛でござります。
善吉　いざ、繩掛けて、
兩人　下さりませ。（ト兩人後へ手を廻す。此内重良ちつと思入あつて、）
重良　親子盜みを致せしと、互ひに罪を爭ふ兩人、我に於ても決定し難し、まことに盜みをせしといふどちらなりとも確證あらば、此場に於て申し立てよ。
甚兵　へい、此の甚兵衛が盜みし事は、これなる孫が存じ居ります。是が證人でござります。
ト重良物柔らかに、
重良　こりや小兒、其方は何と申す。
卯之　はい、卯之助と申しまする。
重良　當年何歳に相成るぞ。
卯之　七年三箇月にござりまする。
重良　おゝ、いまだ七年三箇月とか、年より餘程ませて居るな。こりや卯之助、今其方も聞く通り祖父と父が盜みしを、互ひに我と爭ひ居るが、其方それを存じ居るか。

卯之　はい、存じてをりまする。

重良　おゝ存じて居らばそちが證人、年まだ七年三箇月、幼年なれば心中に必ず巧みのあらう樣なし、さあ、祖父が衣類を盜みしか、又は父が盜みしか、有體に言うて聞かせよ。

卯之　はい、此の着物を盜みましたは。

甚兵　こりや、此の祖父であらうな。

善吉　いや、此の父であらうがな。

ト互ひにおれだと早く言へといふ思入、卯之助言兼ねて、

卯之　さあ、それは。

重良　何れなるぞ。

卯之　さあ。

砂道　祖父か。

葭成　父か。

卯之　さあ。

重良　何れが盜みを致せしか、包み隱さず早く申せ。

ト是にて卯之助善吉と顔見合せ思入あつて。

卯之　盗みは父が致しました。(ト泣伏す。)

甚兵　えゝそりやまあ何を言やるのだ。

善吉　おゝよく盗んだと言つたるぞ。

重良　少年なれど利發な產れ、親子の賊を定めしは、近頃感心致せしぞ。

ト重良感心の思入、善吉はよく言つたと嬉しきこなし。

甚兵　いえ〳〵、孫が申しましたは、ありや僞りでござります。

重良　こりや〳〵甚兵衞何を申す、貧に迫つて盗みせし悴善吉は言ふ迄もなく、まだ幼年の卯之助が苦心を思はゞ其方は、何も申さず控へ居よ。

甚兵　それぢやと申して。

重良　まだ〳〵申すか、うろたへ者めが。

甚兵　すりや、助けることは叶ひませぬか、はあゝ。(ト甚兵衞泣伏す。)

重良　罪條極まる上からは、善吉に繩掛けめされ。

葭成　心得ました。(ト善吉に繩をかける、卯之助見て、)

卯之　こりやお父さんは縛られてか、悲しいことでござります。（ト泣く、佐次郎兵衞介抱しながら、）
佐次　おゝ尤もだ〳〵、悲しいのは無理ではないか、命を取らるゝ譯ではないから、必ずともに案じるな。親の心を受繼ぎてわづか七つか八つにて、父と言つたは感心だ。明日はきつと新聞へ、そなたを褒めて出るであらう。（ト喜兵衞吾助思入あつて、）
喜兵　思ひがけない盜人が、あちらこちらになつたれど、何方にならうと此方では取られた小袖が返つた上、盜んだ奴が牢へ入り暗い所に居た擧句が、御處置が付いて懲役人。
吾助　油をしめたり米を搗いたり、仕なれぬ事の苦しみを、させるが此方の腹いせだ。
佐次　えゝ取られた物が返つたら、さほどに言はずとよいことを、成程人が言ふ通り、主從共に安達の鬼だ。

ト此時砂道葭成右左へ立掛り、

砂道　こりや〳〵、何を立つて見物致す、往來の者は早く通れ。
葭成　車は道の妨げなるぞ、早く引いて參らぬか。（ト言捨て元の所へ來る、善吉顔を上げ甚兵衞へ向ひ、）
善吉　もし親父樣、貧に迫つて盜みをなし、思はぬ御苦勞掛けますが、是も時節と思召し、必ず狹いお心をお出しなさらず身を大事に、お過しなされて下さりませ、どうで始終はわたくしも、懲役人

になりませうから、満期で家へ歸る迄、どうぞ伜が御面倒御覽なされて下さりませ。

甚兵　おゝ其の事ならば案じるな、たとひ此身は喰ずに居ても、孫卯之助に一日でもひもじい思ひはさせぬわいの。

善吉　えゝ有難うござりまする。

甚兵　とは言へ此身がなした事にて。（ト言ひ掛けるを、）

卯之　あゝもしお祖父さん、そんな事をおつしやると、お巡り樣へわたくしが、嘘つきになりまする。

甚兵　えゝ利口なことを言ひをるなあ。（ト泣く。）

重良　人立なせば善吉は、屯所へ拘引致すであらう。

砂道　善吉立ちませい。

善吉　はあゝ。

ト此時ラッパ、ばた〳〵になり、花道より以前の浦右衞門走り出來り、花道の此の體を見て、直に舞臺へ走り來り、

浦右　こりや善吉には何故に、かゝる縄目にあつたるぞ。

善吉　伜卯之助に着せようと、小裁小袖を盜みたる、其の科故に此の縄目。

浦右　すりや年とりし親に替つて。
善吉　あこれ、其の年とりし親父様を殘して行くが心掛り、力と頼むはこなたのみ。
浦右　それは氣遣ひさつしやるな、跡の二人は及ばずながら、わしが引取り世話をします。
佐次　さつきこなたが古着屋へ掛合ひに行つて下すつたが、主人が此方へ來て居たれば、留守にて話が調はなんだか。
浦右　いや、似たもの夫婦と女房が、とつても付けぬ挨拶に是非なく歸つて樣子を聞き、爰へ駈付け來ましたが、纔な事で孝心の此の善吉が縛られしも、情を知らぬおのれら故。
　　ト喜兵衞吾助の首筋をぐつと摑む。
喜兵　あいたゝゝ、許して下せえ〳〵。
吾助　目が飛出る〳〵。
佐次　でも扨もよい氣味な。これでさつぱり溜飲が下つた。(ト胸を撫下す。)
浦右　こりやア汝等を何うしてくれうぞ。
重良　こりや浦右衞門、粗暴致すな。
浦右　それだと申して、憎い奴故、

砂道　制し止むるを用ひねば、
葭成　其方とても容赦はないぞ。
浦右　えゝお巡り様がなくばなァ。（ト浦右衛門兩人をむごく突放す。）
喜兵　あゝ痛い〳〵、すンでに此の首が、
兩人　落ちるかと思つた。（ト時の鐘、善吉思入あつて、）
善吉　これ卯之助、爰へ來やれ。
卯之　あい。（ト側へ來る。）
善吉　己が獄屋へ行つてゐる内、たつた一人の親父様怪我でもあつては濟まぬ故、朝夕お側に付添ひて
己に替つてお世話をしてくれ。
卯之　ようお世話を致しますから、それはお案じなされますな。
善吉　佐次郎兵衛様へお願ひは、跡は子供と年寄故、御面倒でも火の許をお氣を付け下さりませ。
佐次　それは氣遣ひさつしやるな、わしと婆アで見廻ります。
善吉　是にて思ひ置くことなし。いざ、お引き下さりませ。
甚兵　そんならそなたは、もう行くか。

善吉　親父樣。

甚兵　倅

善吉　お達者で居て下さりませ。

ト兩人四邊を憚り、言ひたき事も言はれぬといふ思入にて、親子の別れ宜しく。

喜兵　其の身の科とは言ひながら、見るも哀れな屑買善吉。

吾助　是でこつちの溜飲が下つた。

浦右　えゝ憎い口をば。（ト立掛るを甚兵衞留めて）

甚兵　あゝこれ、手出しをしてはお上へ恐れ。

浦右　ちえゝ忌々しい。（ト持つて居る手拭を捻り切る。）

喜兵　やあ、こりや手拭ひを。

吾助　首であつたら大變だ。（ト頭を押へる。）

重良　喜兵衞は調ぶる事あれば、他行致さず沙汰を待て。

喜兵　はッ。（ト下に居る、重良善吉に向ひ、

重良　言ひ置く事は、（ト善吉と顏見合せ、氣味合の思入を木の頭）最早ないか。

善吉　はッ。

ト皆々有難いといふ思入宜しく、調練の大太鼓にて、

ひやうし　幕

三幕目、同返し

奥山北庭宅の場
横濱角力内の場

〔役名〕――寫眞師北庭筑波、北向の虎藏、朝日山浦右衛門、池田半七、善吉親甚兵衛、旅ぜげん源六、北庭弟子下谷上野。浦右衛門妹お梅、北庭女房おかつ、お梅母おくら、卯之助、其他。〕

（北庭宅の場）――本舞臺一面の平舞臺正面眞中更紗の暖簾口、此左右ペンキ塗の壁、上手いつもの障子屋體の所一間のドンクロ、小窓付三尺の入口、開きの戸閉切りあり、下の方九尺畫心に寫眞の受場片流しの屋根付、此正面中塗の壁是へ更紗の幕を張つてあり、暖簾口の上手は幅三尺長さ一間の床几、此後の棚に硝子板藥を入れし瓶などを列べ、暖簾口の下手の壁に大きな姿見鏡掛けてあり、いつもの門口の所西洋風の枝折門、此外正面「北庭筑波」と記せし横物の看板を掛けし西洋造の塗家の前面を見せ、總て花屋敷北庭寫眞場の模様宜しく、爰に椅子をだいぶ列べ、上手よき所に三ッ足の風呂冠りの

切掛けてあり、下手に賢七、繁藏洋服裝にて椅子に掛り煙草を呑みゐる、弟子の下谷上野散髮鬘着流しにて帶へ手拭を挾み、上手の床几へ腰を掛け火鉢にてガラスの繪をあぶり居る、此見得、唄、見世物の囃子にて幕明く。

賢七　いや、つかぬことをお聞き申す樣ぢやが、新富町に居る花輪吉野と申す女の寫眞師は、先生のやはりお弟子でござるかな。

上野　左樣でござります、女でこそござりますが、なか／＼よく取りますから、どうぞ御贔屓を願ひます。

繁藏　當今俳優の寫眞では、花輪子に限ると申す故、先頃僕も大阪土産に三圓ほど求めましたて。

上野　それは有難うござります。ト件のガラスを箱へ入れ、左樣なら仕上りました。

ト出す。賢七蓋を明けて見て、

賢七　いやこれでは僕の鼻の低いのが、どうやら高く相見えまする。

繁藏　兎角寫眞は筑波先生に、寫して貰ふことでござる。

ト爰へ暖簾口より筑波散髮鬘着流し、寫眞師の打扮にて紙取りの寫眞十二枚を封じたるを、請取を持ち出來り、

筑波　これは大きにお待たせ申しました、ツイまだ臺紙へ張らずに置きまして、甚失敬を致しました。

賢七　いや／＼其内硝子取を一枚仕上げをして貰ひし故、別に待遠なこともござらぬ。

繁藏　鼻の低いのは斯の如く、寫し樣でしれませぬが、目の惡いのはどうか出來ませぬか。

筑波　いやお目ばかりは致し方がござりませぬ。（ト賢七洋服の隱しより札を出し、）

賢七　然らば篠田君より屆きました、謝義の三圓御受納下されい。

筑波　これは御叮嚀なるお禮に預り宜しくお願ひ申しまする。是に金子の請取も一緒に添へてござりまする。

ト寫眞と請取を出し、金を請取ること宜しくあつて、筑波有合ふ椅子へ掛ける、此時合方になり、花道より前幕の甚兵衛卯之助の手を引出て來り、花道にて、

甚兵　これ／＼卯之助、又はぐれるといけぬから、祖父の手を放さぬがよいぞ。

卯之　祖父さん是から何處へ行くのだえ。

甚兵　此の花屋敷の北庭さんとおつしやる寫眞師の先生は、お上手ぢやといふこと故、寫してお貰ひ申さうと、それでこつちへはひつて來たのぢや。

卯之　わたしやまだ見たことがないから、寫す所を見たうござります。

甚兵　おゝ一緒に行けば見らるゝわいの。

ト舞臺へ來り、枝折門の外より内を窺ひ、うろ〳〵として居るを筑波見て、

筑波　これ上野、子供を連れて門口に老人がうろついて居るが、大方眼鏡を搜すのであらう、此奥だと敎へてやれ。

上野　いゝいゝしるべの看板が立つてるるに、親仁は無筆で讀めぬと見える。（ト枝折門の所へ來り、）おい老爺さん、子供に眼鏡を見せるのなら、此の奥へ行くと門があるよ。

甚兵　いえ眼鏡ではござりませぬ、こちら樣の先生に、寫眞を願ひに參りました。

上野　なんだ、寫して貰ふのだ。（ト甚兵衛の裝を見て、）其の裝を寫すのかえ。

甚兵　北庭筑波とおつしやりまする先生の、お名を聞き及びまして、濱から出かけて參りました、どうかお安く一朱にて、お寫しなすつて下さいまし。

上野　そりやァ折角のお頼みだが、宅の先生は官員方や世に有名の人達の寫眞ばかり取つて居るから、忙がしくつて寫されない、一朱の寫眞を頼むなら、奥山へ行くと何軒も代價一朱といふ看板を揭げた寫眞の見世があるから、其處へ行つて頼みなさい。

甚兵　定めて左樣でござりませうが、觀音樣が信仰故お參り旁々横濱から名高いお名を聞及び、態々出

かけて參りました、どうか先生へお願ひなすつて、一朱で寫して下さりませ。

上野　いや、いくらお前が頼みなすつても、一朱の寫眞は寫されねえ。

甚兵　それでは願ひは叶ひませぬか。（ト本意なき思入、筑波是を聞いて居て、）

筑波　これ〳〵上野引込んで居ろ。（と枝折門の所へ出て來り、）もしお老爺さん、樣子はあれで聞きましたが、お頼みは承知したから、まア此方へはひつておいで。

甚兵　それは有難うございます。

上野　もし〳〵先生、それでは沽券が下ります。

筑波　馬鹿なことをいつたものだ、假令百圓持つて來ても心に濟まねば天氣合が惡いと斷る客もあり、たとひ一朱が一錢でも寫眞師多い横濱から、態々尋ねて來た老人、其志しが嬉しいから、無代でも僕は寫してやる氣だ。

賢七　いや流石は有名な先生だけ、僕等もそれにて恐縮致す。

繁藏　先生のお寫しあるを拜見致して參りたいが、榊原の倭杖を一見致す心底故。

賢七　是にてお暇仕る。

筑波　丁度これからいらつしやると、名人方の試合になります。

賢七　それは重疊。

兩人　然らば先生。

筑波　篠田君へ宜しう願ひます。

兩人　失敬御免。（トシャッポを冠り、兩人花道へはひる。）

筑波　さあお老爺さん、こつちへおはひり。

甚兵　左樣なら御免下さりませ。（ト卯之助を連れて枝折門の内へはひる。）

上野　いや穢ない装だ。（ト言ひ掛けるを。）

筑波　あこれ、（ト押へ）丁度今が寸暇故、直に請場へござらつしやい。

甚兵　それは早速のお聞濟み、有難いことでござります。

筑波　さうしてお前一人取りかえ。

甚兵　はい、私ばかりで宜しうござりますから、一朱でお寫し下さりませ。

筑波　はて、決して禮には及ばぬから、そんな心配をさつしやるな。

卯之　伯父さん今日は。（ト辭儀をする。）

筑波　此の子はお前のお孫かえ。

甚兵　はい、卯之助と申しまして、一人の孫でございますが、どうかお寫しなさる所をお見せなされて
　下さりませ。

筑波　こつちへはひつて見るがいゝ。さあ、お前は向うへ行つて掛けなさい。

上野　さあ〳〵、此方へ來なさい。

　ト上野甚兵衛を下手の受場へ連れて行き、椅子へ掛けさせる　此内筑波は上手の棚より大版のガラスを出し、風呂へはめ、冠りをして位置を見ることあつて、板と藥を持ち上手のドンクロの内へはひる、藥ごしらへあつて手拭を腰へ挾み出來り、風呂へ板をはめ、前へ出て、

筑波　これから、(ト風呂の蓋をきり、口の内にてセコンドの度を計りちよつと蓋をして、)宜しい。

　ト風呂よりガラスを出して、上手のドンクロへはひり、留藥をして出來り、

　さあ上野、ニースをあぶつて仕上げをしてくれ。

上野　はい〳〵。(ト件の板を持ちて暖簾口へはひる、筑波手拭にて手を拭きながら、)

筑波　今直に仕上るから、爰へ來て一ぷくお上り。

甚兵　へい〳〵有難うございまする。(ト下手の椅子へ腰を掛ける。)

筑波　さうしておぢいさん、其子は幾歳だね。

甚兵　へい、七年と三ケ月になります。

筑波　それでは定めて、學校へ上げさつしやれたでござらうな。

甚兵　へい、其の學校ゆゑ災ひを。

筑波　えゝ。

甚兵　いえ態々寫しに參りました。（ト甚兵衛始終しをれて居る、筑波思入あつて奥へ向ひ、）

筑波　これおかつや、茶を持つて來い。（ト暖簾の内にて、）

かつ　あい〳〵。（トおかつ女房の打扮にて茶盆へ菓子鉢と急須茶碗を載せ持つて出來り、卯之助を見て、）おや可愛らしい子でござんすなあ。

甚兵　それ、御挨拶を申さぬか。

卯之　をばさん今日は。（ト辭儀をする。筑波茶を汲んで茶托へ載せ、）

筑波　さあ、おぢいさん、茶をお上り。

甚兵　これは恐入ります、お手で下さりませ。（ト頂いて呑む、おかつ菓子を取つて紙の上へ載せ、）

かつ　さあ、お菓子を上げようわいなア。（ト出す。）

卯之　をばさん有難う。（ト兩手で受けておし頂く。）

かつ　ほんによい行儀でござんすなあ。

筑波　學校へ行くと見えて、なか〳〵行儀のよいことだ。

ト此内甚兵衞懷より塵紙を出し、一朱の札を紙に包み、

甚兵　これは甚輕少でござりますが、ほんのお禮の印ばかり。お納めなされて下さりませ。

ト筑波の前へ差出す。

筑波　いや〳〵そんな禮には及ばぬ、華族方や官員方のお頼みによつて寫す時は、過分な謝儀を受納すれば、お前方の一人や二人たゞ取つたとて何でもないこと、紙取にして遣りたいが濱と聞いては遠方故、又出て來るのも億劫と、未然を察して大版のガラスへ取つて上げるから、又寫さうと思ふなら、何時でも頼みに來さつしやい。

甚兵　大判と申しましては百疋からのでござりませうに、所詮これでは足りますまい、どうか内金と思召してお納めなされて下さりませ。

かつ　はて其の御心配には及びませぬ。心が濟まぬとお言ひなら、一旦こちらへ受けまして又改めてそちらへ上げれば、是で其の子に入用の筆でも買つて遣らしやんせ。

ト件の札を取つてちよつと頂き甚兵衞へ返す。

甚兵　左程迄おつしやいますゆゑ、濟まぬことではござりますが、仰せに隨ひ此の孫めに、筆を買うて遣はしませう。

卯之　丁度筆がなかつた故、歸りに買うて下されや。

かつ　わづか七ツか八ツ故玩具のほしい年頃に、筆を買ふのを悦ぶは、ても感心なことでござんす、

ト筑波思入あつて、

筑波　かう見た所がお前方も、以前はよしあるお人と見えるが、今寫したる寫眞の面、どうやら愁ひに沈む樣子。

甚兵　えゝ。

筑波　いやさ、何ぞ苦勞になる事でもあつてのことか、おぢいさん何も御緣だ、其の譯を話して聞かせてくれまいか。（ト思入あつて、）

甚兵　いやもう其のお尋ねに預りまして、申し上げるも面目ない身の上話しでござりますが、まあお聞き下さりませ。（ト是より合方きつぱりとなり、）何をお隱し申しませう、元私は神奈川の靑木町に住居を致し、福住甚兵衞と申しまして米問屋をして居りましたが、纔二十年たゝぬうちにかゝる姿となりまして、する事なす事鵙となり、その日の煙りも立兼ねます程零落ましてござりまする。

筑波　むゝ、神奈川の福住といつては、名に響いたる富家であつたが、どうしてこんなに零落して其日の煙りに困る程、難儀の中で何で又、寫眞を取つて置かつしやる、是にも譯のあることか、包まず話して聞かせなさい。

甚兵　さあ、其譯と申しまするは、よい年をして私が心得違ひを致しまして、既に縄目に及ぶ所を悴が罪を其の身に引受け、終に獄屋へ參りまして日影も見えぬ暗い所に難儀を致して居ります。又跡に殘つた私と是れなる孫が艱難辛苦、尤も朝日山と申します角力が緣家でござりまして、是から見繼いで呉れますが、是も妹が家出なし物入多でござりますから、世話になるのも氣の毒故、わづかな元手で燧石やたはしを請けて賣りますが、それさへろくに賣れませねば、いつそのことに、わたくしが。

筑波　えゝ。（ト聞咎める故、甚兵衛氣をかへ、）

甚兵　さあ、いつそわたくしがをりませなんだら、是は子供の事故何處でも置いてくれませう。譬にもいふ人間は老少不定の習ひ故今日斯うして居りましても、明日知れぬが老の身の上、それ故今日はお暇乞に、いやさ老のいとまに觀音樣へお參り申しに參りまして、せめて悴に面影を殘して置いて遣りたいと、とてもの事に東京で名高いこちらの先生にお願ひ申す心得で、わづか一朱の此

のお禮もやう〳〵のことで都合して、持つて參りましてござりまする。

ト愁ひの思入にて言ふ、此内筑波扨はといふこなしありて、

筑波　なゝ・其の話しの息子といふのは、もし善吉とはいひはせぬか。

甚兵　どうしてそれを、御存じで。

筑波　はて知つて居るのは私の友達、假名垣魯文が編輯の「かなよみ」といふ新聞に其の事柄が出て居ました。

甚兵　そんなら悴が入牢した、其の事柄が「かなよみ」の新聞に出てをりましたか。

卯之　お父さんの恥故に默つて居たが、此間表をよんで歩きました。

甚兵　其の新聞を御覽では委細の譯も先生には、よく御存じでござりませう。あゝ面目ない〳〵。

ト頭を押へてさし俯く。

かつ　そんなら此間の新聞にあつた、卯之助さんといふ親孝行は、此お子でござんしたか。

筑波　親御はどういふ人かはしらぬが、今に此子が出世して、こなたに樂をさせるであらう。

甚兵　其の孝行な孫を捨て。

筑波　えゝ。

甚兵　いや、此孫を捨て悴めが、嘸や案じて居りませう。

　　　ト此内卯之助件の菓子を持ちし儘、下手にちやんと控へて居るゆゑ、

かつ　もし卯之さんとやら、何故其のお菓子をお上りでない。

卯之　はい、是は濱へ歸りまして、蔭膳をする其時に、お父さんへ供へます。

かつ　ても孝行な心掛け、お父さんに上げるのはわたしが別に上げるから、それはお前が喰べたがよい。

卯之　よいお菓子でござりますから、お父さんに供へてから、それから喰べたうござります。

かつ　それではもつと入れて上げよう。（ト菓子の包を取つて又菓子を入れ、卯之助にやり、）もし旦那、感心な事ぢやござりませぬか。

筑波　内に居る上野なぞは、倍から年が上だけれど、心立は遙に下だ。

かつ　ほんに此間もビールを一本親御の所へ持たしてやつたら、途中でみんな呑んでしまひ。あんな不孝な人はございません。

　　　ト爰へ暖簾口より上野箱入のガラスを持ち出來り、

上野　ハックション、こりや風でも引いたか知らん。

かつ　今お前を譏つて居たから。

上野　どうでよくは言はれないから、嘘が昂じて來ない內、振出しでも呑みませう。
筑波　どうだ、仕上げが出來たかな。
上野　とんだいゝ繪になりました。
　　ト出す、筑波手に取り寫眞の蓋を明け、ぢつと見る事あつて、懷ろより以前の札を出し紙に包み、件の寫眞に添へ、
筑波　もしおぢいさん、今さる方から一ダース(一打)の謝儀に貰つたこの三圓、是に寫眞を添へて上げれば、活計の足しにして下さい。(ト出す故甚兵衞びつくりして、)
甚兵　めつさうなことをおつしやりませ、斯うして立派な寫眞をばたゞ寫して下さるさへ、濟まぬことだと思ひまするに、左樣な多くのお金をば何で頂戴出來ませう。それはお返し申しまする。
筑波　はて、わづかなる此の金を、こなたに惠むも人命が、どうぞ救つてやりたい故。
甚兵　えゝ、何とおつしやります。
筑波　もしおぢいさん、隱さつしやるな。(ト合方きつぱりとなり、)奉行の大岡越前殿は、人相を見て善惡を悟つて裁きをしたといふが、今は開化の世の中に易者や相見は當にならぬと、けなす仲間のわたしゆゑ死相を悟る術はないが、斯うして毎日諸人の面を寫すが職の寫眞師に、自然と人の喜

怒哀樂一目見れば大抵知れる、それとも目が違ふか知らぬが今寫したる此の寫眞、愁ひを含む面體は是を形見に殘し置き、とさあ、不料簡でも出す時は可愛さうなは此孫だ、附ては又牢内で是迄つらい辛苦をして居る。其息子さんの悲しみはどの樣だと思はつしやる。高のしれたる燧石やゝいゝ位を商つては、其日の烟も立てにくからうが、牢内に居る息子さんも御處置が付けば末は懲役、長い事もあるまいから目出度く滿期で出て來るを辛抱をして待つ樣にと、その取續きに纔だが此三圓を進ぜるから、是を元手に何なりと其身に慣れた稼業をして、此世に長く居さつしやれ、はて、死ぬのは何時でも死なれまするぞ。

かつ　初めておいでのお方故、先生の氣質をば御存じないから、其樣に御遠慮なさるでござりませうが、一旦上げるといつたからは、どうでも上げねば氣の濟まぬ性分でござんす故、辭退をせずと其のお金、そちらへ納めて置かしやんせ。

甚兵　そりや左樣でもござりませうが、是が一分か二分なればお貰ひ申す事もあれど、三圓といふ此のお金を故なくお貰ひ申しましては、どうも心が濟みませぬ。

上野　おい〳〵おぢいさん、どうしたものだ、それは無益の辭退といふもの、此方の師匠は其の金を溜めて仕舞つて置く樣な、けちな料簡は少しもない、三圓あらうが五圓あらうが、直に其晩遣つて仕

舞ひ、二日と家にはない金だ、お前が米でも買ふ時は二タ月位はあらうから、長く遣へばこつちの家も、おかみさんが氣を揉まず、こりや兩爲めといふものだ。

筑波　え丶、餘計なことは言はぬものだ。（ト上野を叱る、甚兵衞思入あつて、）

甚兵　いやもう、よそながらの御異見は實に的當致しましたが、何をお隱し申しませう。（ト言ひかける。）

筑波　いや、それは言はずと此の寫眞の面で僕も推察しました、此の子や息子の歎きを思ひ、どうぞ心を取直し、惡い料簡は止めて下さい。

甚兵　まことにあなたの御教訓にて、危い命を助かりました、左樣なれば此の金子を、拜借致すでござりまする。

筑波　やつた金故返さうなぞと、心配せずに遣はつしやい。

甚兵　いやも有難いことでござりまする。（ト寫眞と金を押頂き懷へ入れる。）

かつ　お丶氣が付かなんだが、卯之さんとやら隣の眼鏡をお見でないか、わたしが案內せうわいなあ。

卯之　いえお父さんが牢へはひつて、難儀をしてをりますから、眼鏡を見ては濟みませぬ。

かつ　ほんに年端も行かないで、そこへ心の付くといふは、新聞に出た筈でござんす。

ト此時四時の鐘鳴る故、

甚兵　おゝ、ありや何時でござりますな。
上野　辨天山の四時の鐘さ。
甚兵　左樣なればわたくしは、もうお暇を致しまする。
筑波　日が長いとはいひながら、遠道抱へし子供と老人、
かつ　少しも早く鐵道で、濱へ歸るがようござんす。
甚兵　左樣致すでござりまする。
筑波　又東京へ出て來たら、
かつ　必ず寄つて行きなさんせ。
甚兵　悴が滿期になりますと、是非又お禮に上りまする。
上野　そんなら早く歸んなさい。
甚兵　是にてお暇致しまする。
　　　ト辭儀をなし、卯之助を連れて門口を出て、花道の方へ行く、此時卯之助ツカ〳〵と枝折門の所へ來り
卯之　祖父さんをお助け下され、有難うござりまする。（ト兩手を突きて辭儀をする。）
かつ　それほどまでに。（ト傍へ寄らうとするを、）

筑波　あこれ、（ト留めて）、急いで行きな。
卯之　はい。（ト花道へ行く、甚兵衞待つて居て、）
甚兵　何ぞ忘れたか。
卯之　いえ、お禮を言ひに。
甚兵　おゝよく氣が付いた。さあ行かう。
　　ト流行唄、見世物の鳴物にて、甚兵衞卯之助を連れて花道へはひる。
筑波　年は行かぬがあの小僧、樣子で悟つて立戻り、祖父の命が助かりしと禮を言ひしは利口なもの、
かつ　ほんに大人も及ばぬ程、賢い子ではござんせぬか。
上野　又噓でもせねばならぬか。
筑波　マア何にしろ、一ダースの謝儀に貰つた三圓で。（ト包紙を取上げる。）
かつ　死ぬる命を止めしは、
上野　無駄にお金は遣へませんね。
筑波　はて、よい功德を、（ト包紙を下へ置くを木の頭、）してやつたなあ。
　　ト双盤のせめ、早き合方にて、宜しく、

ひやうし　幕

ト道具蔭廻しにて、止の木にて鳴物替り、直引返す。

（朝日山宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の障子屋臺、二重の正面暖簾口、此上一間の神棚、上の方一間間平戸のはまりし中仕切のあふ戸棚、下手腰張の茶壁、いつもの所門口、此外正面「朝」といふ字の腰障子をはめし一間の勝手口、此の下手黑塀、總て横濱朝日山宅の體。二重の上手におくら着流し母親の打扮にて、行燈の側に眼鏡を掛け、縫物をして居る。丸藏取てきの打扮にて踏臺をして、正面の神棚へ燈明を上げて居る。此の見得角力甚九の唄にて幕明く、

くら　年寄つてはいかぬもので、少し裁縫をつめてしたら大そうに肩が張つた。これ團子山お燈明を上げてしまうたら、波の市さんを呼んで來てくりや。

丸藏　あの波の市は日が暮れると、高島町へ出掛けますから、もう行つても内には居ませぬ。

くら　そんならふりの按摩でもよいから、聲がしたら呼んでくりや。

丸藏　そんなに肩が張りましたら、わしが揉んで上げませうか。

くら　ほんにこなたは稽古場で、いつでも揉まれて居る故に、揉むのは上手であらうわいの。

丸藏　其の癖揉むのは下手だけれど、だいじなくば揉んで上げませう。

ト油さしなど片付け、おくらの後へ來り揉みにかゝる。

くら　あゝこれ、其の樣にきつくやらずと、和々と揉んでくりや。

丸藏　はいく、わしも此頃はえらく力が出て來ました。

くら　ほんに昨夜悴から話しに聞いたが、團子山も伊勢では出來がよかつたと、悅んで居ましたぞや。

丸藏　あい、六日目の顏觸に伊勢生れの二見岩といふどえらい大きな奴との立合ひ、わしはこないに小い形故土俵へ上ると見物手合が、是は所詮角力にならぬ、小い方がきつと負ける、やれ團子山引込めの早く土俵へ轉がれのと、囃されたのが癪に障り、ヤツと行司が團扇を引くのを合圖に、こつちが下手に組みつを取らうとしたところが、腰をぷりくひねりますぢや、えゝ前袋でやつてこませ。(トおくらの帶をとらへ引立てかゝる、おくらびつくりして、)

くら　あゝこれ、何をするく。

丸藏　所で左をぐつと拔いて、右から仕掛けて手繰込み。

くら　あゝこれ、痛くつてたまらぬわいの。

ト振もぎらうとする、丸藏はよいしよくとおくらの肩をもむ、爰へ暖簾口より二幕目の浦右衛門煙草

盆を提げ出て來る、おくら此の後ろへ隱れる故、丸藏夢中になり、浦右衞門に組付くを、

浦右　えゝ野郎、何をするのぢや。（卜丸藏を突く、丸藏二重より見事に轉り、）

丸藏　あいたゝゝゝ。こりやお袋さん、どえらい目に逢はさつしやれたな。

くら　いや〳〵わしではない、朝日山ぢや。（卜是にて丸藏浦右衞門を見てびつくりなし、）

丸藏　や、お袋さんだと思つたら、親方さんでごんしたか。

浦右　よい年をしたお袋を捉へ、何を戲謔さらすのぢや。

丸藏　いえ〳〵そないな譯ぢやごんせぬ、肩が張ると言はんす故揉んで上げる其内に、角力の話しが初まつて、つい實が入つて張合ひになり、手荒いことをしましたが、是も生業に凝つて居る故、どうぞ許して下さりませ。（卜手を突き詫びる。）

くら　弟子の中では弱いといふが、何というても角力故、なか〳〵力が強いかして、背骨が痛んでなりませぬ。

浦右　後先の考へもない、こいらにお揉ませなされますな、どんなことをするか知れませぬ。

くら　いやもう、一度でこり〳〵しました。

卜是より誂への唄になり、花道より前幕の半七、思案をしながら出來り、花道にて、

半七　よく淨瑠璃の文句にも、人の心と飛鳥川替る慣ひといひながら、延梅ばかりはあの樣な不實の奴とはしらなんだが、見下げ果てたる腐つた性根、あいつ故には半七も明るい體が暗くなり、世間は勿論内々の奉公人へも面目なく、山手の寮へ押籠められ居るのも心に恥る故、そつと拔出し深川へ尋ねて行けど巳之吉も、乳母のおしげも内に居ず、信心故に淺草の觀音樣へ參詣なし、計らず廻つた花屋敷で茶見世の女が持つて居た寫眞は尋ねるお梅故、無心を言うて貰ひ受け、藝者姿で東京へ歸つて居るに違ひないと、柳橋から新橋の藝者仲間を尋ねたれど、何れに居るか在所が知れず、實の母故橫濱の家に隱れて居ようも知れず、是から兄の所へ行き、かまをかけて尋ねて見よう。

ト右の唄にて舞臺へ來り、門口より內を窺ひ居る、浦右衞門門口を見て、

浦右　表へ誰か來た樣ぢやが。

くら　おゝさうか。（トこちらへ來り、）どなたぢや、こつちへはひらつしやい。

半七　はい、私でござる。（ト門口を明ける、おくら半七を見て、）

くら　や、若旦那樣でござりますか。

浦右　なに、若旦那樣がござつたとか。（ト大きく言ふ故、）

半七　あゝこれ、靜にして下さい。（ト四邊へ思入あつて內へはひり、門口をしめる。）

くら　ようまあ、おいで下さりました。

浦右　さゝ、先々こちらへおいで下さりませ。（ト半七上手へ住ひ、）

半七　先達は深川へよう尋ねて來て下された、其後ちよつと來たいにも、家出をなした擧句故、山手の寮へ入れられて片時外へ出られねば、それ故心に任せぬわいの。

浦右　いや私も又忠八殿から話しを聞いて居りますゆゑ、お尋ね申さにやなりませぬが、妹お梅が不始末から御贔屓受けしお店へも敷居が高く上りませねば、つい御無沙汰を致しましたが、ようまあお尋ね下さりました。

くら　いやもう何とお詫を申しませうやら、一方ならぬ若旦那のお世話になつてをりながら、それを見捨て男を拵へ逃げるなぞとは恩知らず、憎い奴めでござりまする。（ト半七思入あつて、）

半七　そりやもう私への義理立に、憎いと口では言はつしやれど、切つても切れぬ親子の中、隱さずに言うて下され。

くら　なに、隱さずに言へとおつしやりますは。

半七　さあ、わしも番頭忠八の厄介になり、神奈川の山手の寮に居ましたが、どうも心が濟まぬ故一昨

日庭から拔出して、直に蒸汽で東京へ行き、知邊の方にて樣子を聞けば、あの延梅は東京で藝者をして居てさる旦那に今は圍はれ氣樂な身分、其の上濱のお袋も尋ねて來たりこちらからも泊り掛けにて行く樣子と、慥に知れて所々方々藝者仲間を尋ねても、言合せでもしてあるか、皆目居所がしれぬ故、晝は人目を憚る身に、日の暮れるのを待つて居て此方の内へ聞きに來ました、なにもあいつに逢つたとて、手荒い事は決してしませぬ、たゞ料簡を聞いた上わしも思案の仕方がある、大事な娘を手籠にされ、ひよつと疵でも付けられては後日の難儀と親の身で、庇ひだてをばさつしやらうが、逢はねばならぬ此の半七、痩せても枯れても酒店の悴と呼ばれた私なれば、少しは身分のある者故必ず無法な事はせぬ、包み隱さず居所を、どうぞ敎へて貰ひたい。

ト是にて浦右衞門おくらびつくりして、

浦右　あゝもし〳〵若旦那、そんなら何とおつしやりまする、あの妹めは東京に藝者をして居りますとか。

半七　おゝ藝者をして居る其の證據は、信心故に一昨日も御鬮を取り、淺草の觀音樣へ參詣なし、歸りに廻りし花屋敷の茶見世の娘が愛想に見せた寫眞は尋ねるお梅、無心を言うてそれを貰ひ、證據にこれへ持つて來た。（ト懷より寫眞を出し、）藝者姿で此樣に、客と二人椅子にかゝり、寫眞を

取りしが何より證據、何と藝者をして居ようがな。（ト寫眞を出す、浦右衛門見て、）

浦右　なるほど之は妹が寫眞、おつしやる通り裝かたちは藝者の樣に見えまするが、並んで居るは何者だか、つひに是迄見掛けぬ顏、いづくの誰でござりますか。

くら　何にもせよ憎いやつぢや、實の親や兄弟故お疑ひは無理ならねど、あなたへ對してわたしどもが何隱し立を致しませうぞ。

浦右　さういふことなら朝日山が、直と明日東京へ行き、藝者仲間を詮議して引捕へるでござりまするが、

くら　さうしてあなたへお教へ申した、知邊の人と申しまするは、何れの誰でござりまする。

半七　え丶、あのそれは、お丶さうぢや、仙臺堀の巳之吉でござる。

浦右　巳之吉なれば猶のこと、詮議をするによき手掛り。

くら　そなたは無口な生れ故、母も一緒に行くわいの。（ト是にて半七思入あつて、）

半七　そんならやつぱりこなた衆も、實の事は知らつしやらぬか。

浦右　いやも、知つて居れば何で又其のまゝ捨て置きませう、御恩になつたあなたをば、袖にした妹故兄が手づから繩をかけ、召連れ訴へ致しまして、お上の御處置を受けまする。

半七　實の所は此の寫眞が、測らず我手に入つた故、柳橋から新橋かけ東京中の藝者仲間をあちらこちらと捜したけれど、何れに居るか知れぬお梅、姿は藝者に見ゆれども欲に迷つて此の客に圍はれてゞも居ることか、斯ういふ心と知らざれば一方ならぬ大恩ある、親に不孝も顧ず家をば捨てし不料簡、忽ち此身に罰が當り、連退したる女に捨てられ友達中へ出されぬ顏、（ト寫眞を見て、）何の恨みで此の樣に此の半七に恥をかゝせ、是見よがしに二人並んで椅子に掛けたる此の顏付、えゝ欺されたのが口惜しい。（ト寫眞を見て腹の立つ思入）

浦右　あもし、寫眞でござります。

半七　おゝ、寫眞は己も知つて居るが、あまりといへばそでない奴、東京中を捜しても在所の知れぬ上からは、人に面が合されぬ、もう此の土地にはをられぬわえ。

浦右　それは明日わたくしが、巳之吉方へ參りまして、それからそれと聞糺し。

くら　捜したならば直知れる、名を賣る稼業の藝者故。

半七　いや、其の藝者で居ることか、圍ひ者にて居ることか。

浦右　そんならそれも巳之吉が、

くら　はつきりとは申しませぬか。

半七　實は嘘故。
兩人　えゝ。
半七　いや、嘘だと思ひこなた衆を、疑うたのが面目ない。
浦右　はて、それも御無理と思ひませねば、
くら　決して恨みは致しませぬ。
半七　どれ〳〵、わしは歸りませう。
浦右　いや折角のおいで故むさくるしくとも今晚は、どうぞお泊り下さりませ。
くら　さうして明日東京の、否やをお聞きなされませ。
半七　あ、思へば兄もお袋も、是ほど實意のあるものを。
浦右　なんで一人の妹めは、そんな不實になりをつたか。
くら　それも三筋の世渡りに、浮いた稼業をさせた罰。
半七　氣違ひ水は身に當る、
浦右　裸家業はして居れど、
くら　兄は正直、妹は、

半七　顔に似合はぬ不實もの。
浦右　あすは必ず深川で、
くら　聞糺すのが身の潔白。
半七　どうも爰には。（ト行くを留めて、）
くら　はてまあ、二階へおいでなされませ。
　　　ト唄になり、おくら半七を無理に連れて暖簾口へはひろ、浦右衞門思入あつて合方になり、
浦右　身に覺えなき疑ひを、受けるといふも妹故、明日は何でも深川へ出掛けて居所を聞糺し、手荒い事もせねばならぬが、それが世間へぱつとして表向にもなる時は、直と表を新聞に讀み歩かれねばならぬ仕儀、それもこつちは不實もの、緣につながる親兄弟、恥を晒すも是非もないが、御恩になりし旦那樣の名前を出しては濟まぬ譯、どうか双方浪風なく納る工夫がありさうなものだ。
　　　トぢつと思入、時の鐘ばた〳〵になり、花道より前幕の藝者梅吉のお梅（延梅）手拭を吹流しに冠り、跣足にて走り出來り、花道にて後を見返り思入あつて舞臺へ來り、門口の格子をたゝきながら、
梅吉　もし〳〵、どうぞ助けて下さりませ。（ト跡を氣遣ひゐろ、浦右衞門是を聞き、）
浦右　慥にあれは女の聲だが、惡者にでも出逢つたのか。（トこちらへ來り門口を明け、）これ女中、どうし

たのだ〳〵。（ト梅吉手拭を取り、）

梅吉　兄さん、わたしでござんす。

浦右　や、わりやあ妹、（トびつくりして門口をしめる。）

梅吉　もし兄さん、どうぞ爰明けて下さんせ。

浦右　やあ見下げ果てた不孝ものめ、兄と言はれる覺えはねえぞ。

梅吉　えゝ、そりや何故でござりまする。

浦右　えゝ何故とは不實者めが。（ト是より誂へ合方になり、）御恩になつたお人を捨て、うぬが勝手に男を拵へ田舍へ逃げて行くなぞとは、義理知らずの畜生めが、おのれゆゑにはお袋も此の浦右衛門も青木町のお店へ對して面目なく、出入りさへもならぬ上、身に覺えなき疑ひ受け、今も今とて姿を見たら此身のめんばれ引くゝり、突出さうとは思つたが、助けてくれと言はれて見れば、其處が親身の同胞故、内へ入れぬも兄の慈悲、目にかゝらねえ積りにするから、何處へなりとも行つてしまへ。

梅吉　そりやあどういふ譯あつてお腹立かはしらねども、半七さんに別れたも餘儀ない譯があつてのこと、それもとつくと母さんやお前に話して聞かせたい、お腹も立たうがもし兄さん、まあ内へ入

れて下さんせ。
浦右　いや〳〵内へは入れられねえ、爰を明ければ其の儘におのれを生けちやあ置かれぬ故、酷いことをばするのが厭さ、情を以て入れぬのだ、奥には憚るお人もござれば聲の洩れねえ其の內に早く何處ぞへ行つてくれ。え丶、きり〳〵何處へか行きやあがれ。（ト門口の內と外にて兩人宜しく思入）
梅吉　え丶情ない其の詞、半七さんの其の爲に遠い所へ行つたのを、あの虎藏がどの樣な巧みを跡でしたことやら、わたしや悔しい〳〵わいなあ。
ト愁ひのこなし、此時暖簾口より以前のおくら出來り、
くら　これ〳〵悴、何をして居る、表へ誰ぞ來ましたのか。（ト是にて浦右衞門思入あつて氣を替へ、）
浦右　いえ〳〵、誰も參りませぬ。
くら　誰にか口をきいたぢやないか。
浦右　え丶、（トぎつくりして氣を替へ、）いえなに、口を利きましたは犬が表へ參りましたから、早く何處ぞへ行つてしまへと、追散したのでござりまする。
くら　は丶あ、そんなら表へ犬が來たのか。
浦右　はい、犬も犬、恩しらずの雌犬でござります。

ト是を聞き、梅吉ハアと門口にて泣伏す故、おくら此聲を聞き、

くら　今泣いたのは、どうやら妹の。（ト寄らうとするを、）

浦右　はてまあ、お構ひなさいますな、ありや病犬でござりまする。

ト ちつと思入、是にておくら扨はといふ思入、門口の梅吉顔を上げ、

梅吉　どういふ譯でわたしをば其の樣に言はしやんすか、日外わたしが深川から僅な内と虎藏の勸めに是非なく上州へ、藝者の勤めに行つたのは半七さんが二月越し、煩ひ中の藥の代や何やかやの入用に、辛い稼もする心、それも十日か二十日の内に迎ひに來るといふ故に、覺えた業を賴みにして、二十圓のお金の替りに向うへ行けば大きな間違ひ、百五十圓といふ證書を張り、三年の年と聞いてびつくり、あの虎藏の惡巧みと知れてはあれど是ぞといふ便りなければ是非もなく、座敷の出先で手紙を書き、郵便でなりと出さうとすれど、張番あつて親許へ文さへ書いて送らせず、どうしたものと思ふ内桑原といふお客に出逢ひ、譯を話してやう〱と二百圓といふお金を借り、向うは濟ませて貰へども濟まぬは借の濟し方に、その桑原が妾にして東京へ圍つて置くと、濱町河岸の別宅へ連れて來られし身の當惑、三年たゝぬ其内は男に肌はふれまいと願掛せしと言脫れ、手代替りに家に居る箱屋を賴んで深川へも、此の横濱へも幾度か手紙を出せど一度でも、屆かぬ

かして返事も來ず、辛い思ひをした事をお目にかゝつて話さうと思ふ女の一心で、今日暮方に其處を駈出し、車で急がせ鐵道へ乘つてやう〳〵ステンショへ上ると後で虎藏が、思ひ掛なく聲を掛け、付けて來た故振切つて危く逃げて來たものを、犬畜生とは情ない、わたしや悲しうござんすわいなあ。

ト泣伏す。浦右衞門門口にて是を聞いて居て、

浦右 そんなら池田の若旦那を、見捨て外に男をこしらへ、旅へ逃げたと聞いたのは、

梅吉 皆虎藏が惡巧み、わたしや悔しうござんすわいなあ。（トおくらも始終を聞いて居て、）

くら おゝ、こりやさうなうてはならぬ筈、よう駈出して來やつたなう。

浦右 いよ〳〵それに違ひなくば、まあ〳〵内へはひるがいゝ。（ト門口を明ける。）

梅吉 何で嘘をばつきませう。（ト内へはひり、手拭にて足を拭きゐる。）

くら 幸ひ奧に若旦那が、來てござる故其譯を。

梅吉 えゝ、そんならこつちに半七さんが。

浦右 おゝ、今連れて行つて逢はせてやる。

梅吉 こりやまあ、夢ではござんせぬか。

ト嬉しきこなし、爰へ暖簾口より以前の丸藏手紙を持ち出來り、

丸藏　もし親方さん、若旦那が手紙を殘して、裏から何處へか行きました。

浦右　なに、手紙を殘して行つたとな。

くら　どれ〳〵わしに見せたがよい。(ト件の手紙を取つて開き、口の内にて讀みびつくりなし、)やゝ、こりや

お梅に見捨てられこつちの家へも無理を言掛け、面目ないゆゑ大阪へ一先づ行つて來るとの書置。

梅吉　えゝゝ。(ト本意なきこなし、浦右衞門思入あつて、)

浦右　遠くは行くまい後追つかけ、連れて戻つておゝさうだ。

ト門口を明け、外へ出ようとする。此の以前下手より虎藏好みの打扮にて出て、門口に窺ひ居て、此の時内へはひり、

虎藏　うぬお梅め、爰に居たか、己と一緒にうしやあがれ。(ト梅吉を引立てに掛るを、浦右衞門留めて、)

浦右　誰かと思へばわれは虎藏、妹を捉へて何とするのだ。

虎藏　何ともしねえ、己が女房連れて行つて稼がせるのだ。

浦右　えゝ人もあらうに現在の、兄の所へうせをつて、連れて行くとはづぶとい奴。

虎藏　何で己が太えものか、持物だから連れて行くのだ。

浦右　えゝ、いけふざけた野郎めが。（ト虎藏が捉へぐつと引付け、）こりや虎藏、よくもうぬは己の妹を百五十圓にはめをつて、まだ飽足らず女房だなぞと、此のうちへ來て言ひ掛り、ごたくをついたらゆるさねえぞ。

ト是にて虎藏浦右衞門の手をやつと拂ひ退け、胡座をかいて下に居て、

虎藏　何で言掛をするものかえ。深川に居た其の時に煩つて居る半七に愛想を盡かし己に乘替へ、夫婦約束した上で、半七野郎をはく爲めに相談づくで高崎へ藝者稼ぎに行つた延梅、根が淸元の師匠だけ、どんな調子で引掛けたか、いつも吾妻へつくばねと寶舟漕ぐ客を連れ、歸つて來たは働きだが、然し亭主も同然な、己に一言斷なく二百圓といふ立金をして旦那の世話になると聞いちやあ、こつちもたゞは通されねえ。手切替りに旅へやり、もう一稼ぎかせがせるから、己と一緒に行きやあがれ。

梅吉　えゝもう此身に覺えもない、色だの戀だの女房のと、呆れて物が言はれぬわいなあ。

虎藏　こう／＼お梅、今となつて喰隱しをしても無駄なことだ、色でなけりやあ何で又、己の判で高崎へ藝者稼ぎに行きやがつた。

梅吉　はて知れたこと、旅へ行つたは半七さんの藥の代や、（トいふを冠せて、）

虎藏　これ〱お梅、馬鹿を言ふな、今時そんな時代なことをするやつがあるものか。

ト此内浦右衛門心のせく思入にて、虎藏を引付け、

浦右　こりや野郎め、半七様のお身の上も心にかゝる其處を藪から棒に出やあがつて、世間に人もない様に大聲上げての言ひがゝり、うぬ、どうするか見やあがれ。（ト虎藏引付けられてゐながら、）

虎藏　やい朝日山、己を手籠にしてどうするのだ。

浦右　おゝ、どうするとは知れたこと、召連れ訴へしてやるのだ。

虎藏　おゝ面白い、さあ突出せ、どうで始終は懲役と覺悟をして居る北向虎藏、己を縛つて突出しやあ、うぬもお梅も抱込んで、連れて行くからさう思へ。

浦右　えゝ言はしておけばよいかと思ひ、あのこゝなごくつぶしめが。（ト虎藏を下手へ投げる虎藏起上り、）

虎藏　うぬ、己を投げやがつたな。

浦右　おゝ投げたがどうした、何とした。

虎藏　どうで悪事で遲かれ早かれ喰え込むのは覺悟の前、生甲斐のねえ體だから、殺さば殺せ誰一人泣く者のねえならずものだ、とても死ぬなら行掛の駄賃にうぬから殺してやるのだ。

ト尻をからげて立掛る。

浦右　うぬ、さうぬかしやあ。（ト立掛る故、梅吉おくら留めて、）

梅吉　もし兄さん、腹も立たうが相手が惡い。

くら　まあ〳〵、下に居やいなう。

浦右　お案じなさるな、摘み出すのだ。（ト尻を端折り肌脱になる、虎藏浦右衛門の透を窺ひ組付く、）えゝ何をしやがる。

ト突飛す、是にて虎藏たぢ〳〵と門口の方へ行き踏止つて雙方きつと見得、是より櫓太鼓の入りし誂の合方になり、虎藏浦右衛門へ組付いては脆く投げられ、又組付く面白き立廻り、此の內丸藏團扇を持つて出て浦右衛門を後からあふぐ、トゞ虎藏勞れたる思入にて浦右衛門へ組付くを、浦右衛門襟上を取つて、門口の所へ引立て來て、

えゝ小うるせえ野郎だ。（ト門口から外へ投出し、）をとゝひうせろ。

ト門口をしめる、虎藏體の痛む思入にて起上り、

虎藏　もう此上は。

ト門口の方へ立掛る、此時下手より番太〇、△等四人、序幕の判人源六に繩を掛け引立來り虎藏を見て、

〇　虎藏御用だ。（ト十手にて打つてかゝる、虎藏びつくりして、）

虎藏　南無三しまつた。（ト突倒して花道の方へ逃げようとするを、折重つて捉へ、）
三人　えゝ、神妙にしろ。（ト繩を掛ける、虎藏起上り、）
虎藏　えゝいま〳〵しい、喰ひ込んだか。
源六　兄イ、諦めねえ。（ト虎藏源六を見て、）
虎藏　や、源六、手めえも御用辨か。
源六　惡事の報いだ、仕方がねえ。

ト此内浦右衞門梅吉おくら門口の方へ聞耳を立て居て、此の時門口を明け、

浦右　是で少しはこつちの胸も、
梅吉　晴れて嬉しいあの繩目。
虎藏　どいつもこいつも。（ト後へ歸らうとするを、）
番太　
四人　えゝ、立たぬかえ。（ト繩を引くゆゑ、虎藏こちらへ來り、）
虎藏　覺えて居ろ。
梅吉　とはいへ氣になる。
くら　若旦那の。

浦右　はて、逢はれる時節を。（ト門口をしめるを、木の頭）待つがいゝわえ。
ト皆々引張り、宜しく合方時の太鼓にて、
ひやうし幕

四幕目

橫濱海岸道普請の場

〔役名｜｜福住善吉、北向の虎藏、野毛の重右衛門、虎藏弟巳之吉、雲念、竹齋、升七、銀太、源六、卯之助。巳之吉女房おむら、其他。〕

（橫濱海岸の場）｜｜本舞臺一面の平舞臺、上の方石造の異人館、硝子窓、此の前鐵の駒寄、下の方樹木の植込み、後ろ海岸異國舟を見たる海の遠見、總て交易場海岸の體、爰に判人の源六、ごろつき熊藏柿の着附同じく股引、草鞋尻端折、腰から腰へ鎖を附け懲役人の打扮にて鍬を持ち、醫者竹齋坊主鬘雲念同じ裝、鶴嘴を持ち、油賣り升七、百姓五右衛門同じ裝、畚をさし荷ひに擔ぎ、七度の銀太、生かれ鐵藏同じ裝鶴嘴を持ち立掛りゐる、波の音唐樂めいた唄にて幕明く、

源六　こう今打つたのは野毛の十時だ、みんな一息つかうぢやあねえか。
熊藏　おゝ、つかうとも〳〵、十時を打つのを待つて居たのだ。

竹齋　然し一息ついた所が、好な酒は言ふに及ばず、煙草を一服呑むことがならねえ。
雲念　所詮茶など、言つた所が、誰も呉れる人はなし、せめて水でも呑みたいものだ。
升七　おつと皆迄言ふべからず、爰に知つてる家があるから、今一手桶貰つて置いた。
　　ト下手より手桶の上へ盃を蓋になし、是へ茶碗を載せてあるを持つて來る、
五右　やあ是は何より有難い、茶碗も付いて居るからは、ぐる／＼廻しに初めよう。
銀太　これがどうか間違つて、酒であつたらよからうな。
鐵藏　そんな贅澤なことを言ふな、水でもめつたに呑めやあしねえ。（ト皆々捨ぜりふにて水を呑み、）
竹齋　あゝ甘露々々、醉醒で是を呑んだら、もう一倍旨からう。
源六　愚癡を言つても仕方がねえ、呑みてえもの、呑めねえのが、其處が懲らしめの懲役だ。
熊藏　なんぼ喉が乾くといつて、いゝ加減に呑まねえか、あんまり呑むと腹が下るぜ。
雲念　それゆゑ愚僧は我慢をして、一杯きりでしまつた。
升七　汚ない話しをする樣だが、昨日此のとつさんが、腹ツくだりで、幾度となく手水場へ供をしたので、懲り／＼した。
銀太　腰に鎖が付いて居るので、手前も一緒に行つたのか。

鐵藏　なるほど、こいつァ弱つたらう。
五右　どれ、もう一杯水を呑まうか。
升七　これさとつさん、昨日に懲りたから止してくんねえ。(ト此内皆々下に居て、)
源六　ときに隨德寺の和尙さん、お前は見るから勿體らしく、惡い事はしさうもねえが、何で懲役にな
　つたのだ。
雲念　いや問はれて語るも面目ないが、門番の女房にお布施の錢を勤めにやり、大黑替りにしたところ、
　いつの間にか大黑が布袋の樣な腹になり、亭主に願ひ付けられて、とうとう終ひが姦通に落ちて
　懲役一ヶ年の御處分にあづかつたのだ。
源六　敎導職の身をもつて、さういふことをしなすつちやあ、懲役になつても仕方がねえ。
熊藏　くわる天窓のお醫者さんは、色事とも見えないが、お前は毒でも盛つたのかえ。
竹齋　愚老が懲役になつたのは、此の和尙から起つたことだ。
熊藏　なに、和尙ゞら起つたこと、は。
竹齋　其の門番の女房の腹のふくれた一件が、檀家へ知れては大變故、おろし藥を吳れと言ふから、禮
　がよければ盛つて遣らうと、三圓取つて墮胎藥を、やつたばかりに此の懲役

源六　人を助ける醫者の身で、おろし藥を盛つたとあれば、此艱難をしにやあならねえ。

ト熊藏升七に向ひ、

熊藏　こう、お前は堅氣な人の樣だが、何を惡いことをしたのだ。

升七　わたしは表を擔いで歩く油賣でござりますが、入底をした升を遣ひ、お負をたつぷりした所から大層油が賣れましたが、終には惡事を見出されて、升の底から身上の底をふるつてしまひました。

源六　おい、そつちのをぢさん、お前は何だ。

五右　おらあ百姓だ。

源六　百姓は言はねえでも一目見て知れて居るが、何をおめえは惡事をした。

五右　おらあ、泥坊だ。

銀太　こう、此をぢさんが泥坊だとは、人は見掛けに寄らねえものだ。

鐵藏　どうで田舍の畑荒し、瓜や茄子を盗む玉だ。

五右　そんなに馬鹿にさつしやるな、是でもおらあ大泥坊だ。

源六　いや大泥坊とは大そうだが、

熊藏　何といふ泥坊だ。

五右　名を聞いたらびつくりしべい、おらあ石川五右衛門といふ。
銀太　これさとつさん、常談を言つちやあいけねえ。
鐵藏　石川五右衛門といふがあるものか。
五右　あつてもなくつても、先祖から苗字が石川、名が五右衛門。
雲念　成程世界は濱の眞砂、同氏同名もありませう。
竹齋　世に盜人も盡きないが、さうして何を盜んだのだ。
五右　凡そ價千金にもならうといふ、金の釜を盜んだ。
銀太　大そうな物を盜み込んだが、
鐵藏　何處でそりやあ取つたのだ。
五右　取つたは芝の增上寺の、山門の下の甘酒屋で。
熊藏　人を馬鹿にしたとつさんだが。
升七　それでお前は懲役か。
五右　おゝ、しかも鬘の百日だ。
源六　えゝ、惡く洒落るぜ。

皆々 はゝゝゝ。

ト波の音になり、花道より巳之吉紺の脚絆尻端折り、草履半合羽を肩に掛け、おむらやつし裝、草履、蝙蝠傘を持ち出來り、花道にて、

巳之 これおむら、向うに大勢柿の着物で道普請をして居るのが、あれが戸部の懲役人だ。

むら それぢやあ大方あの中に、お前の兄さん虎藏さんが、居なさんすでござんせう。

巳之 あの中に居てくれゝばいゝが、道普請ばかりでなく何手傳にも雇はれて出るといふことだから、あすこへ行つて聞いたらば、何處に居るか知れるだらう。

むら どうぞ向うに居て下さんすりやよいが。

巳之 何にしろ行つて聞いて見よう。(ト舞臺へ來り、)もし、お前さん方に少し物が承りたうござりまする。

熊藏 あい、聞きたいとは何だね。

巳之 神奈川の者でございますが、北向の虎藏といふ舟乘りを、御存じではござりませぬか。

熊藏 おゝ虎藏は知つて居るが、お前方は身寄の衆か。

巳之 はい、身寄の者でござりますが、何處に虎藏が居りますか、御存じでござりますなら、ちよつと

教へて下さりませ。

源六　虎藏はわつちらと一緒に地形に出て居るが、お前は慥兄弟だね。

巳之　おつしやる通り虎藏がわたしや弟でござりますが、さうおつしやるお前さんは、何處でかわたしやあ見た樣だ。

むら　おゝ、日外見世へござんした。

源六　萬年橋の茶見世で逢つた、源六といふ判人だ。

むら　思ひ掛けないお前さんも、懲役におなりなさんしたかいな。

源六　いつか虎藏と言合せ、池田の息子が連れて逃げた、お梅を騙して高崎へ藝妓に賣つた其の時に、娘の籍でごまかしたが二十圓の證文を百五十圓に書直して、いはゞ衒も同樣な手酷い法を書いたので、忽顯れ御用となり、兄貴と一緒に懲役だ。

熊藏　おいらは土地のごろつきだが、其の生馬の目を抜かうと、お前の兄貴や此の男の金を目當に爰に居る、隨德寺の堂を借り、片側勝負の丁半にとう〳〵三日で耗らしたが、根が惡錢で身に付かず酒と女にみんな入れあげ。

銀太　虻も取らず蜂も取らず、やつぱり元の下馬一枚、所でこんど源六が金の行場のお調べから、

鐵藏　隱した博奕が現れて、先づ胴取の熊藏から又彌次馬のおら達迄、八十日のお相伴だ。
熊藏　愚癡なことをいふやうだが、是といふのもお前の兄貴が、女を騙して賣つたからだ。
巳之　まことに惡い兄貴故、お前さん方へ對しましても、お氣の毒でござりまする。
雲念　お氣の毒とはいひながら、誰しも其身に過失があるから、元懲役はお上にて惡い心を改めさす、此上もないお慈悲の御處置。
竹齋　以前ならば首のない科も當時は助かつて、假令終身爰に居るとも生きて居るのは有難いから、誰でも改心せねばならぬ。
巳之　家に居ります時分には、親にさへも打つてかゝる無法者で困りましたが、懲役になり目が覺めて少しは心が直りましたか。
源六　所が少しも直りやあしねえ、滿期で出れば又直に相手がいゝからお梅の所へ、強請に行くと言つて居る。
巳之　それぢやあ懲役になりましても、やつぱり心は直りませぬか。
むら　困つたことでござんすなあ。
升七　斯う見た所が虎藏さんとは、氣まへも違つて居る樣子。

五右　兄弟故に東京から、爰迄逢ひに來なすつたのか。
巳之　へい、差入物を致さうと、東京から參りましたが、道普請にでも出て居るなら、ちよつと逢つて參り度く今朝から方々搜しましたが、いまだに心が直らぬと聞いては逢つても無駄なことだ。
むら　そりやさうでもござんせうが、お母さんへの土産故、逢つて歸らにやならぬわいな。
源六　（花道の方を見て、）おゝ噂をすれば影とやら、今向うから虎藏が土を擔いで爰へ來る。
巳之　ほんに向うへ來るのは兄貴。
むら　丁度幸ひ待合せ。
巳之　こゝでちよつと逢つて行かう。
ト又波の音になり、花道より善吉柿の着附、同じく股引草鞋虎藏同じ打扮、善吉先棒にて畚へ土を入れ、小丸太にてさし荷ひに擔ぎ出來り、花道にて、
虎藏　これ善吉、もつとさツさと歩かねえか。
善吉　お前と違つて力がない故、棒が肩へめり込む樣で、さう急いでは歩けませぬ。
虎藏　巾着切の子供でも、是ばかりな土は擔ぐに、意氣地のねえ野郎だなあ。
善吉　今度はどうぞ、もう少し輕くして下さりませ。

虎藏　どうして〳〵、此の次はもう一ぺい盛上げて手前に血へどを吐かしてやる。
善吉　それぢやアわたしが擔げませぬ。
虎藏　擔げねえのを無理に擔ぎ、難儀をするのが懲役だ。
善吉　そりやさうでもござりませうが、
虎藏　えゝぐづ〳〵せずと歩かねえか。
ト擔いで居る棒でこづく故、善吉ひよろ〳〵としながら舞臺へ來る、虎藏強く突く故、善吉ばつたりと前へ轉ぶ、
えゝ意氣地のねえ、轉びやあがつたか。
ト善吉起きようとするを、虎藏鎖を引く故又倒れ、やう〳〵に起上り、
善吉　お前が後から突いた故、それでつい轉びました。
虎藏　何で己が突くものか、よくそんな嘘をつきやあがるな。（ト虎藏善吉を踏倒す、是を源六留めて、）
源六　これ〳〵兄貴、見るから意氣地のねえ野郎、もういゝ加減に堪忍してやんねえ。
虎藏　こいつが素直にして居りやあ厭つて己が使つてやるが、體は弱いが口が達者で、よく口答へをしやあがるので、癪に障つてならねえから、つい己が踏倒すのだ。

熊藏　これ善吉、何故手前口ごてえをするのだ、何でも兄貴に隨つて、下から出にやお手前の損だ。

善吉　いえもう弱い體でござりますから、中々口答へなどは致しませぬ、隨分隨つてをりますが、虎藏さんが氣の早いので。

虎藏　なに、虎藏さんが氣が早い。おゝ、氣が早いからなぐるのだ。（ト善吉の天窓を打つ。）

源六　これさ兄貴、相手にするのは大人氣ねえ、明日は組も違ふから、今日一日だ料簡しねえ。これ善吉、手前も是から氣を付けて、逆らはねえ樣にするがいゝ。

雲念　何でも人は腹を立てず、堪忍するが第一だ。

竹齋　早くこなたも詫るがいゝ。（ト是にて善吉手をつき、）

善吉　口答へをしましたはわたしが惡うございましたから、どうぞ堪忍して下さりませ。

虎藏　惡いといふは己がことだらう、よく當つけをぬかしやあがるな。（ト虎藏立掛るを皆々留め、）

升七　腹も立たうがあの通り、兩手を突いて詫るから。

銀太　もういゝ加減に虎藏さん。

鐵藏　堪忍してやつて、

皆々　くんなせえ。

虎藏　なぐりつけにやあ腹が癒ねえが、お前達が口を利くから、今日は免じて堪忍してやらう。
五右　そりやあ大きに、
皆々　有難うござります。
ト此内巳之吉おむらは下手跡へ下つて、困つたものだといふ思入あつて、此時前へ出、
巳之　兄さん、よく達者で居てくんなすつた。
虎藏　おゝ、誰かと思つたら巳之吉におむら、手前達は何しに來たんだ。
巳之　お梅さんを賣つたことの御處置が付いて、懲役になつたといふ話しを聞き、見舞も入れたし二つには、道普請でもして居なされば。逢はれることがあらうと思つて。
むら　思ひ立つ日を吉日に、其の身其の儘支度もせず、今日鐵道で參りましたわいな。
虎藏　そりやあよく尋ねて來てくれた。（ト熊藏思入あつて、）
熊藏　ときによつぽど休んだから、頭の見廻りに來ねえ内、早く仕事にかゝらうぢやあねえか。
源六　おゝもう半時からたつたから、仕事に掛らにやあならねえが、兄貴は爰へ尋ねて來た、此の二人に話しがあらう。
升七　其の内此方で骨を折り、

銀太　今日受取つた所だけ、
鐵藏　仕事の穴を埋めておかう。
虎藏　穴を埋めさせちやお氣の毒だが、ちつとの內助けてくれ。
善吉　皆さん方と御一緒に、わたしは仕事に參りたいが。
雲念　いや、其の心配には決して及ばぬ。
竹齋　善吉どのもゆつくりと。
五右　其處で息をつくがよい。
善吉　有難うござります。
源六　どれ、一仕事。
八人　やつて來ようか。

ト波の音にて、八人は道具を持ち上手へはひる、跡地ならしの石へ虎藏腰を掛け、此の脇に善吉迷惑さうに下に居る。下手に巳之吉おむら下に居て、

虎藏　こう巳之吉、今日二人連で出て來たからは、おむらは家へ引取つたか。
巳之　此間友達が親父の方へ渡りを付け、表向で月始まりに、わつちが女房に貰ひました。

むら　お前さんも知つての通り、足らぬ生れの私故、どうぞ是から末長く、お目を掛けて下さんせいな。

虎藏　そりやあお前が言はねえでも、巳之が女房になるからは、繋がる緣の妹だから、目を掛けるのは當りめえ、其の替りにやあ兄だから滿期になつて出た時は、小遣ぐらゐはくれるだらうな。

むら　澤山の事は出來ませんが、わたし相應其の時は、お小遣を上げませうわいな。

虎藏　そいつあ何より有難い、巳之の野郎は血を分けた實の己の弟だが、十錢の働きも出來ねえ奴だ、野郎位世の中に仕樣のねえものはねえ、そこへ來ると女のことだ、ちよつと近くて木更津か寒川あたりへお前をやりやあ、五十圓にやあ直になる、それを目當に尋ねて行くぜ。（ト巳之吉おむら顏見合せ思入）これ、何をそんなをかしな顏をするのだ。

巳之　これ兄貴、まだお前は心が直らねえのか。

虎藏　持つて生れた己が根性、何のついけに直るものだ。（ト善吉呆れし思入にて、虎藏の顏を見る、）えゝ何を面を見やあがる。（ト善吉をくらはす。）

善吉　いえなに、わたしやあ見やあしませぬ。（ト頭を押へて蹲る。巳之吉思入あつて、）

巳之　尤らしく言はねえでも、お前も知つて居るだらうが、斯うしてお上で懲役になさるは人を懲す爲め、今爰に居る善吉さんを蹴たり踏んだりするのを見ては、なか〳〵心は直らねえ、惡い心の

お前だが不具な子程可愛いと、明暮家でお袋が噂をしねえことはねえ。世間へぱつとは言はれねえが、先達もあの樣に現在親を足蹴にした此上もねえ不孝者、憮憎からうと思ひの外、愚癡なことを言ふ樣だが、毎日稼いで暮しを立てる己よりお前を案じ、もし煩つてゞも居はしねえか、續いて夢見が惡いから行つて樣子を見て來てくれと、實の所はお袋が頼みで今日は出て來たのだ。

むら　今巳之さんの言ふ通り、お母さんは寐ても覺めてもお前の事が忘られず、どうぞ總領のことだから、心が直つて御先祖から家に傳はるお位牌を、早くお前に讓りたいと、常々言うてゞござんすぞえ。

虎藏　面白くもねえ、眞ッ黑けへな位牌が何になるものだ、そんなくだらねえことを言はねえで、いゝ加減にお袋も、早く死んでしまやあいゝ。

巳之　えゝ勿體ねえことを言ひなさんな、親父は疾に死んでしまひ、跡に殘つた一人のお袋、假令千圓金を積んでも、買ひてえといつても買へやしねえ。

虎藏　其の替りに又賣らうといつても、二朱にも買手はありやしねえ。

むら　親を賣るものがありますものか。

虎藏　それだから滿期になつたら、手前を木更津へ賣つてやるから、己の出るのを待つて居ろ。

巳之　なんぼ知り合つた中だとて、見舞を兼ねて近附に今日連れて來た此のおむら、常談にもせよ賣るなどゝは、亭主の己が面目ねえ。

虎藏　誰も來てくれと言やあしねえ、色で持つた女房を自慢らしく連れて來やがつて、差入物でもすることか見舞を一つ入れやあがらねえで、のんこのしやあとは手前達のことだ、面目なけりやあ早く歸れ。

巳之　お前がさういふ心なら何しに長く居るものか、土地の勝手はしらねえが、産れ故郷のことだから人を頼んで懲役場へ、明日は見舞を入れようと金の用意もして來たが、おらあ目下のことだから何と言はれても仕方がねえが、女親でも親は親、機嫌がいゝかと只一言、尋ねもせずに惡く言ひ、こんな不孝なことはねえ、お前に罰が當らにやあ罰の當る人はねえ。

虎藏　何のべらぼうめ、親だつて三文の事をして貰やあせず。汝等が勝手で拵へやあがつて、ろくな育て樣もしやあがらず、まだすつぺがさねえ時分から、鰯を賣つて活計は己が半分付けて居たのだ、恩は此方で着せてあるから、打ちのめさうが踏倒さうが、己に罰が當るものか。

巳之　人を打つたり蹴たりする其の手足を伸されたのは、誰がお蔭だと思ひなさる、みんな親のお蔭だぜ。

虎藏　十三四からお袋を己がすごして置いたから、差引勘定して見りやあ己の方が餘程上だ。
むら　お前そんなことを言ひなさんすが、おつかさんがどの位苦勞してだか知れやあしません。
虎藏　そりやあうぬが勝手でするのだ。
巳之　汝とは、そりやあ誰がことだ。
虎藏　くたばりそこねえの婆アのことだ。
巳之　えゝ、餘りと云へば。(胸倉を取るを振拂ひ、)
虎藏　えゝ、何をしやあがる。
　　ト巳之吉を蹴倒す、善吉此内そでないことゝいふ思入あつて、懷へ兼ねて虎藏を留め、
善吉　これはしたり虎藏さん、そりやお前の言ふのが惡い。
虎藏　なに、己が惡いとは。
善吉　假令何であらうとも、大恩のある親のことを、惡く云つては濟みませぬ。
虎藏　濟むも濟まねえもあるものか、親にやあ恩が着せてあるのだ。(ト善吉をなぐろ。)
巳之　えゝ又しても善吉さんを。(ト云ふを善吉留めて)
善吉　これ〳〵巳之吉さん、言へば言ふだけお前方が痛いめせねばならぬ故、もう〳〵何にも言はつし

やるな。
巳之　わたしも兄のことだから、言ひたいこともござりませぬが、餘りと云へば不孝故、
むら　つい、わたし迄共々に。
虎藏　まだぐづ〳〵と言やあがるか。（ト立掛るを善吉留める、虎藏振拂つて突倒す。）
善吉　これ〳〵早く逃げて下さい、わしが迷惑しますわいの。
虎藏　どれ、息の根を止めてやらうか。（ト波の音異國の鳴物になり、丸太を持つて立掛るを善吉留める。）
巳之　さあ、打つならおれを打ちなせえ。
むら　巳之さん、默つて居なさんせいな。（ト巳之吉打てといふを、おむら留める。）
虎藏　うぬ打たねえでどうするものだ。
ト右の鳴物にて打つてかゝる、善吉おむら支へる立廻り、此の内上手より重右衛門懲役人小頭の打扮にて出來り、虎藏を留め、
重右　これ虎藏、何をするのだ。
虎藏　や、親分か。（トびつくりする。）
重右　其の棒を持つて、誰を打つのだ。

虎藏　あいつアわつちの弟だが、兄に手向ひしやアがるから、それでなぐつてやらうと思つて。
重右　いゝ加減に嘘をつけ、さつきから一部始終は後に隱れて聞いて居た。
虎藏　それぢやあ聞いて居なすつたか。（ト虎藏棒を捨て天窓を押へ下に居る。）
重右　聞いたといやあ此の儘に、手前を捨てちやア置かれねえ。亂暴すりやあ御規則通り、きつとそれだけの罪を增し、長く苦役をすることは、そりやあ手前も知つて居ような。
虎藏　二年のものは三年と、年を增すのを知りながら、つい弟にうつかりと飛んだことを仕出かしました。（ト虎藏後悔せし思入。）
善吉　わたくしなどが兎やかうと申すは出過ぎたことでござりますが、どうか頭のお目こぼしで、ゆるして上げて下さりませぬか。
巳之　年が增すと承はつては、打たれましたも其の儘に聞流しになりませぬは切つてもきれぬ兄弟仲。
むら　緣につながるわたくしどもゝ、共々お願ひ。
三人　申し上げます。
　　ト誂の合方になり、重右衞門地ならしの石へ手拭を敷き腰を掛け、
重右　此間から出先にて、手前の所業の惡いことを聞いては居るが聞かねえ顏、斯ういふおれを初めと

して、懲役場に居るものにろくな者はありやあしねえ。何百人とある中で誠の人は善吉ばかり、先づ押込みに追落し、明巣を覘ふ小泥坊、又は間男かどはかし、極輕いのが博奕と喧嘩、其の惡行も二度と再びしねえやうにと有難い思召での懲役人、我身の恥を柿染に腰に鎖の猿繫ぎ、面も眞赤に人中へ出るのも初めは面目なく、懲りねばならぬ御仕置も、滿期で出れば直に忘れ、二犯三犯度重なり終には終身懲役に再び娑婆へ出る事ならず、其時よせばよかつたと心が付いても後の祭り、鐵棒引のお喋べりが言ッ附口をするけれど、なるたけ聞いても聞かねえ顏、此後亂暴しねえなら今日は大目に見てやらう、年限増すか增さねえかは、虎藏手前の心次第だ、若い者でもねえからは、よく考へて返事をしろ。（ト宜しく思入、虎藏ちつと思入あつて、）

虎藏 まことに親分濟みませぬ、惡黨だつてわつちらはほんの鼻先料簡故、お前の目から見なすつたら取るに足らねえ小野郎と思ひなさるであらうのに、心を長く此間から腹も立たうに小言も言はず、物和かに言はれるのは、大きな聲で叱られるよりよつぽど辛うございます、是から心を入替へますから、どうぞ親分今日の所は、是限りにしておくんなせえ。

重右 手前がさういふ心なら、濟んだ事は言やあしねえ。何の役にも立たねえ己が、多くの中で小頭を言付つたは身の名聞、何十人と預る内懲役中に惡事をして、限りの年を增すものが出來るは頭の

己が恥、どうぞ、是から心を入替へ、手荒い事をしてくれるな。

虎藏　親分、お前に對してもきつと心を入更へて、惡いことはもうしませぬ。（ト善吉嬉しき思入にて、）

善吉　そんならお前は心を入替へ、手荒いことはしなさらぬか。

虎藏　決してこれからしねえから、さつきの事は善吉さん、手を合せるからゆるしてくんねえ。

ト手を合せる。

善吉　お前が心を入替へれば、誰よりわたしがどの位嬉しいことか知れませぬ。（ト巳之吉に向ひ、）

重右　いや、其處に居る虎藏が弟御の巳之吉さんとやら、今お前も聞く通り是から心を入替へて惡い事はしねえといふから、お前方が歸つたら安心する樣母さんに、よく言つてやんなせえ。

巳之　これといふのもお前さんの、全くお蔭でござります、まことに有難うござります。

むら　嘸お母さんに話しましたら、悦びますでござりませう。

重右　これから兄貴の虎藏も仕事をしにやあならねえから、お前方は東京へちつとも早く歸りなさい。

巳之　有難うござりますが、元神奈川に居りました故、知つた者がござりますれば、今夜は宿へ泊りまして。

むら　明日早く鐵道で、歸る積りでござりますわいな。

虎藏　それぢやあ明日歸つたら、達者で居るとお袋によく言傳をしてくれろ。

巳之　兄貴がかういふ心になつたも。

むら　まことにあなたのお蔭ゆゑ。

兩人　有難うござります。

重右　何の禮に及ぶものかな。

巳之　そんなら兄貴。

むら　御機嫌宜しう。

虎藏　其内逢ひに來てくれろよ。

ト右の鳴物になり、巳之吉おむら皆々へ辭儀をなし下手へはひる。

重右　もう日差ぢやあ十一時だ、休みの時間がおくれたから、早く仕事にかゝるがいゝ。

虎藏　思はぬ弟が逢ひに來て、大きに暇を費した。

善吉　これから一精出しませう。

重右　どれ、己も持場を廻つて來ようか。

ト重右衞門は上手へはひる、虎藏上手へ向ひ、

虎藏　親分、大きに有難うござります。

ト辭儀をする。時の鐘、床の淨瑠璃になる、

淨るり〽跡見送りて虎藏は笑みを隱していう／＼と、傍の石に腰かくれば、見る善吉は氣もせかれ、

ト虎藏後を見送り、騙してやつたといふ思入あつて、土ならしの石へ腰を掛ける、善吉氣のせく思入にて

善吉　さあ虎藏さん、お休みの時間がおくれたれば、ちつとも早く出かけませう。

虎藏　なに親分が行つてしまやあ、そんなに急ぐにやあ及ばねえ。

善吉　さつきから外の衆は、仕事にかゝつて居なされば、遊んで居ては叱られます。

虎藏　手前なざあ慣れねえが、そんなにびく／＼するにやあ及ばねえ、重右衛門が小言を言ふ時、お前の御無理は御尤もと詫つてせえ居りやあいゝのだ。

善吉　それぢやあお前はたつた今、心を改めると言つたのは、あれは嘘でござりますか。

虎藏　嘘は初手から知れたこと、おらあ爰で一寐入りするから、重右衛門が來たら知らしてくれろ。

善吉　お前はそれでよからうが、わたしがそれでは濟みませぬ。

虎藏　濟むも濟まねえもいるものかえ。

善吉　それぢやといつて遊んで居ては。（ト善吉行きかけるを、）

虎藏　何をまご〳〵しやあがるのだ。

〽鎖をぐつと引すゑられ、尻邊にどうと善吉は今更是非も投首なし、溜息吐いて居る折柄、親を慕うて卯之助が懲役人の仕事場を、其處か爰かと見廻して。

ト善吉うろ〳〵するを、虎藏鎖を手強く引く、善吉どうと尻邊に居て是非なき思入、波の音をあしらひ花道より卯之助、前幕の裝、小さな風呂敷包を持出來り、花道にて、

卯之　祖父さんが案じて故、お父さんに逢ひたいが何處へ行つても同じ着物で、どれがどれやら分らぬわいの。

〽目もうろ〳〵と海岸を、尋ねさまよひ來りしが、それと見るより走り寄り、

ト卯之助四邊を見廻しながら舞臺へ來り、善吉を見て、

や其處においでのは、お父さんか。（トつか〳〵と側へ來る。）

善吉　おゝ、そちは卯之助。

卯之　逢ひたうござりましたわいな。

善吉　おれも手前に逢ひたかつた。

〽縋る手を取り抱きしめれば、虎藏見るよりずつと立ち、

ト卯之助善吉に縋る、善吉抱きしめる、虎藏はずつと立つて、

虎藏　どれ仕事にかゝらうか。

〽情も知らず行きかゝれば、引かるゝ鎖に取付いて、

ト虎藏上手へ行かうとする、善吉鎖に引かれながら、

善吉　あゝこれ虎藏さん、悴が逢ひに來ましたから、少しの内待つて下さりませ。

虎藏　べらぼうめ、待たれるものか、油を賣りやあ又頭に己が小言を聞かにやあならねえ。

善吉　決して長くは留めませぬ、ちよつと樣子を聞きますうち。

虎藏　いゝや少しでも待たれねえ、懲役中は身寄の者に逢ふのは上の御法度だ。

善吉　そりやさうでもござりませうが。

虎藏　えゝ來いといつたら來やあがれ。

〽情容赦もあらけなく、引摺り行けば子は縋り、

ト虎藏上手へ行く、善吉鎖に引かれ行く、卯之助縋り、

卯之　お父さん、待つて下さいまし。

善吉　折角來たがおち／＼と、話すこともならぬわいの。（ト虎藏畚を擔ぐ棒を取り、）

虎藏　さあ善吉、これをかつげ。

善吉　はい、只今擔ぎます。（ト棒を取り、）これ卯之助、祖父さんは達者か。

卯之　いえ煩つておいでなさいます。

善吉　なに、煩つておいでなさるとか。

虎藏　えゝ、さつさと歩かねえか。（ト善吉是非なく棒をかつぎ、）

善吉　逢ひたく思つた悴が來た故、少しの内と賴むのに。

虎藏　まだぐづ／＼言やあがるか。（ト棒を引たくつて善吉を突く。）

卯之　あれ、お父さんを。（ト縋るを、）

善吉　卯之助あぶない、そつちへ退きや。

虎藏　どれ、性根の付く樣どやしてやらうか。

〽棒おつ取つて振上げれば、父樣あぶない／＼と隔てる卯之助蹴倒して、打たんとなせし後より、

ト虎藏善吉を打たうとする、卯之助留めるを蹴倒し打たうとする後へ、以前の重右衛門出て虎藏を留め

重右　虎藏、何をするのだ。

虎藏　や、親分か。

〽びつくりはいまう虎藏は、猫に逢つたる鼠の如く、棒投捨て一縮み。

ト虎藏棒を捨て天窓を押へて下に居る。

重右　今手前は此の己に、心を入替へ是からは、亂暴しねえと言つたぢやあねえか。

虎藏　へい。

重右　それに何だ、棒を振上げ、誰をそれでなぐる氣だ。

虎藏　今此の棒を振上げたのは、あれあの通り仲間の者が精を出して居ります故、遊んで居ては濟まねえから早く行かうとせき立つても、此の善吉が悴が來たから待つてくれと言ひまして、ぐづ〳〵しまして行きませんから、ちよつと威しに振上げました。

重右　そりやあ言付つた仕事をせず、遊んで居てはよくねえが、外の者とは譯の違ふ親孝行な此の善吉悴が逢ひに來たならば、逢はしてやるがいゝぢやあねえか。

虎藏　それぢやあ逢はしてもようございますか。

重右　長いことはならねえが、半時や一時はおれが承知だ。

虎藏　親分せえ承知なら、己が構つたことはねえ。
善吉　左樣なら少しの內、お許しなされて下さりますか。
重右　おゝ、ゆつくりと逢ふがいゝ。
善吉　それは有難うござりまする。
重右　善吉、こりやあお前の息子か。
善吉　はい、左樣でござりまする。
重右　見た所から利口さうだが、此の子は今年幾歲になる。
善吉　七年何ヶ月と申して、以前の八歲でござります。
重右　八歲にしては、形も大きし、何やかやが分りさうだ。（ト善吉卯之助に向ひ）
善吉　これ卯之助、爰においでの頭には、朝晩厚いお世話になるから、よくお禮を申してくれ。
卯之　親父がお世話になりまして、有難うござります。（ト辭儀をする。）
重右　おゝおとなしい〳〵、どうでも以前が以前だけ、折かゞみは感心だ。
善吉　もし頭、つひぞ是迄承はりませぬが、お前さんはお子がござりませぬか。
〽ト問掛けられて重右衛門、胸に忘れぬ恩愛に、かたへの石へ腰を掛け、

ト合方になり、重右衛門地ならしの石へ腰を掛け、

重右　己も丁度此位な悴を一人殘して來たので、此子を見てから思ひ出し、人の子とは思はれねえ、是に付けてもお前などは纔八十日の日限だから、今にも滿期で家へ歸れば一つに居られる體だが、それに引替へ己なぞは今更言つても仕方がねえが、性懲りもなく二度三度惡事に惡事を重ねた故、とう〳〵終ひが終身に再び娑婆へ出られぬ體、斯うして居ても親子の情愛、只の一日我子の事を思ひ出さねえことはねえから、大方家でも親や子が思ひ出さねえこともあるめえ、生涯それを語り合ひ目出度い滿期に逢ふことの、出來ねえ己は終身懲役、實に生甲斐のねえ體だが、萬に一つお目出度か又はお上の御法事で非常の大赦で御免になり、逢はれることもあらうかと、よく講釋師が譬にいふ盲龜の浮木で何日逢はれるか、知れねえことを待つて居るのは、思へば空な話さね。

〽御法犯せし惡黨も親子の愛に一雫、こぼす涙は善心に聞く善吉は力を添へ、

ト重右衛門ちよつと涙を拭ふ、虎藏は馬鹿々々しいといふ思入。

善吉　以前と違つて御一新から科人などの御處分は、此上もなくお慈悲の御沙汰、死罪の科も終身の懲役となり助りて、非常の大赦のある時は赦免となりて又元の其の本籍へお返し下さる、冥加にあ

まる有難い思召でござりますから、やがて目出度い御沙汰にて、親子打寄り今日を昔語りになされまする、必ず時節がござりませう。

重右　何日ある事か知れねえが、其御沙汰をば樂しみに惡い心を改めて、馬鹿にされると知りながら、二度はおろか三度迄惡い事を見脫して、人に情を掛けるのも今日人命惜しみ給ふ、恐れ多いが天子樣の、其の思召を萬分の一施す心で今日迄も己が預る人數の中から、只の一人惡事をして、年限增した者はねえ。

善吉　常からみんな打寄つて其のお噂を致しますが、お前さんの樣にお慈悲深ひお方の下に付く者は實に仕合せでござりまする。（ト此內宜しく思入あつて、）

虎藏　もし親分、まだ休んで居てもようござりますかえ。

重右　まだ半時にもならねえから、もう少しはだいじねえ。いや、つまらぬ話しで邪魔をした、さあさあ息子に逢ふがいゝ。

善吉　有難うござりまする。

重右　虎藏、手前又邪魔をするな。

虎藏　なに、邪魔なざアしやあしませぬ。

重右　今度すると丁度三度だ。

虎藏　え。

重右　もう見脱しちやあおかねえぞ。（トきつといふ。）

虎藏　いえ、決してしやあ致しませぬ。（ト重右衛門氣をかへ和かに、）

重右　それぢやあ善吉、ゆつくりと話しをするがいゝ。

〽流石は物の頭とて、善惡分くる重右衛門心殘して行く影を、善吉親子はふし拜み、

ト重右衛門宜しく思入あつて、上手へはひる、後善吉手を合せて拜み、

善吉　お禮は詞に盡されませぬ、あゝ有難うござりまする。（ト虎藏に向ひ、）これ虎藏さん、お氣の毒だが少しの内どうぞ待つて居て下さりませ。

虎藏　親分からの言付だから、仕方がねえ待つてやらう。

善吉　それは有難うござりまする。（ト卯之助を引寄せ、）これ卯之助、よく尋ねて來てくれたな。

卯之　此の間から毎日々々、道普請のある所をば、方々捜して歩いたけれど、お前の居所が知れなんだわいの。

善吉　おゝ知れぬ筈〳〵、己の體が弱い故、今の頭の情にて、骨の折れぬ病人の藥の世話をして居たの

で、外へはさつぱり出なんだわいの。

卯之　道理でお目にかゝりませなんだ。

善吉　今聞けば祖父さんが、煩つてござるといつたが、寐てゞもおいでなされるか。

卯之　いえ〳〵、寐てぢやござりませぬ。

善吉　今日祖父さんがそなたと一緒に、逢ひに來て下すつたら、どんなに嬉しいことだらう。

卯之　おぢいさんはお前に逢ふのは面目ない故、今日は行かぬとおつしやつてゞござりました。

善吉　そんなことをおつしやらずと、逢ひに來て下さればよいに。

〽本意なき顔を見て取つて、卯之助はさかしくも、（ト思入あつて、）

卯之　其の祖父さんに今爰で、わたしがお逢はせ申しませう。

善吉　や、それでは爰らに來てござるか。

卯之　あい、爰においでなされまする。

善吉　なに、爰においでなさるとは。

〽言ふに此方は懐より、ぢゝが寫眞を取出し、

ト卯之助前幕の寫眞を出し、

卯之　さあ、祖父さんにお逢ひなされませ。（卜善吉取上げ見て、）

善吉　おゝ親父樣の寫眞だが、何處で寫して貰つたぞ。

卯之　是は此間祖父さんと淺草の觀音樣へお參りに行つた時、北庭さんといふ家で、寫してお貰ひ申しました。

善吉　其の筑波先生は、今指折の寫眞師故、お禮も多く出たらうに。

卯之　いえ／＼お禮はお取りなさらず、困るであらうと祖父さんへ、お金を三圓下さいました。

善吉　えゝ、只寫して下すつた上三圓金を下すつたとか、流石は名代の先生だけ、全くそれも信心なす觀音樣の皆御利益、あゝ有難いことぢやなあ。此間から明暮に逢ひ度く思つた親父樣、どれ／＼お目にかゝりませう。

〽絶えて久しき我親の俤見ればやつれ果て、迫る涙に善吉が我を忘れて聲を上げ、

おゝ親父樣、お達者でござりましたか、久しくお目にかゝらぬ内、お目も窪み顎もこけ、大そうおやつれなされましたな、お年の上ではあるけれど、つむりは常より白髪がふえ、お目もうるんで愁ひを含み、御苦勞のあるお顏付き、定めてあなたのお心では、己が盗みをした故に其の罪科でわたくしが斯く懲役になりましたを、濟まぬ事だと思召しての御心配でござりませうが、それ

は大きに違ひます、つひに是れまで塵ツ葉一本人樣の物斷なく掠めるなどゝいふことなく、正直正路の親父樣が、

〽ふつと心の迷ひの出たは、此の善吉の稼ぎがうとく、たつた一人の卯之助に、春になつても去年の儘垢によごれし古布子、福住といふ名には似ず貧に迫りて情なや、着替一枚買ふ事も出來ぬ暮しに身の綻び、綴り兼ねたる身代にそでないことをなされたも、元の起りは我なす業、こんな不孝な事はない故毎日お詫をしてをります、今に滿期になりますれば、少しはお樂になりますやう、御恩送りを致しますから、もし親父樣、纔な所故御苦勞でも、お待ちなされて下さりませ。

〽寫眞に向ひ善吉が、在すが如く手をつかへ、身の詫なせば卯之助も共に音を鳴く時鳥、袖に涙の哀れさも空吹く風に虎藏が、

ト此内善吉寫眞を見て宜しく思入、卯之助も愁ひのこなし、虎藏は腹の立つ思入にてずつと立つて上の方へ行く、善吉鎖にて引かれ、ひよろ〳〵となり、

あゝこれ虎藏さん、お前何處へ行きなさるのだ。

虎藏 何處へ行くものか、小便に行くのだ。

〽言ひ捨て彼方へ駈行けば、鎖に引かれ是非なくも、こけつ轉びつ引かれ行く、

ト虎藏無闇に上手へ急ぎ行く故、善吉膝を突きひよろ〳〵と上手へはひろ。

卯之　あゝ情ない、お父さんを酷いことをしなんすなあ。

〽親を案じて卯之助が、行きつ戻りつうろ〳〵と、氣を揉みあせる其處へ、立戻つたる虎藏が、

ト卯之助上の方へ行つて向うを見て、氣を揉む思入、よき程に虎藏づう〳〵しく出來り、

虎藏　頭の頼みに仕方がねえが、汝等が泣いたり笑つたりする、愚癡な話しを聞くなあ大儀だ、もう一寐入してやらうか。

〽傍にするし地ならしの、石を寢臺に寐そべれば、是幸と卯之助が、

ト虎藏宜しく石の上へ臂を枕に寐ろ、卯之助思入あつて、

卯之　お父さんに上げようと、持つて來た此のお菓子、さつぱりと忘れて居た。お父さん、是をお上りなされませ。

〽親子の緣もしつかりと、結ぶ包みの小風呂敷、解いて取出す菓子包み、

善吉　おゝ、是は見事な菓子だが、何處からぞ貰つたか。

卯之　今も言うた淺草の、北庭さんのお家にてお貰ひ申しましたから、お父さんに上げようと、今日迄しまつて置きました。

善吉　それではそなたは喰べなんだか。

卯之　お初穗を上げぬ內、先へ喰べては濟みませぬから、まだわしはたべませぬ。

善吉　おれに初穗を供へずとも、祖父さんに上げればよいに。

卯之　祖父さんは此頃は、何にもお上りなされませぬ。

善吉　さう聞いては少しも早く、己も喰べるかゝ、そなたも喰べやれ。

卯之　其處においでのをぢさんに、一つお上げなさいましな。

善吉　おゝホンにさうであつた。これ虎藏さん、菓子を上りなさらぬか。（ト包の儘出す。）

虎藏　甘えものはおらア嫌えだ。

〽拂ひ退ければばら〳〵と、こぼるゝ菓子を親子は拾ひ、

ト虎藏拂ひのけ、寐返りをして向うを向いて寐る、善吉卯之助はこぼれし菓子を拾ひ紙へ取り、

善吉　をぢさんは厭だとおつしやるから、さあ〳〵そなた澤山喰べやれ。

〽初穗を取つて差出せは、さも嬉し氣に押しいたゞき、年はいかねど大人にも、勝る心に味

ひて、

ト此内善吉菓子を一つ取つて喰ひ、卯之助に跡を遣る、卯之助も一つ取つていたゞき是を喰ひ思入あつて、

卯之　もしお父さん、こんな旨いお菓子は、わたしや初て喰べました。へ言ふ顔つく〴〵打守り、過し昔であるならばと、返らぬことに胸迫り、いとゞ不便のいや増して、

ト善吉卯之助を見て不便だといふ思入あつて、床の合方になり、

善吉　あゝ世が世であらば神奈川の青木町にて指折の、家藏持ちし米問屋、なに不自由のない身代に、親父様にはお茶をなされ、諸方の菓子を求めたまへば、我育ちたる其時分は如何なる菓子も口に飽き、さのみ旨いと思はざりしに以前の如く榮えなば、そちは家督の悴故、今東京で名の高い藤村、野村の菓子なりとも、味を知らざることなきに、我跡繼がぬ其前より次第に家は衰へて、所有の地所は言ふに及ばず住居の地迄池田へ讓り、藏に滿ちたる古帳を反故屋へ賣りしも昨日今日、飛鳥の川の淵は瀬と替り果てたる成行に、反故屋の世話でやう〳〵と紙屑買になつたれど、仕樣模樣も夏の夜に、蚊帳さへ釣れぬくらしとなり、

〽古證文を繼合せ、紙帳となして蚊は凌げど、破れ勝なる身の果に、そちへ土產と買つて來る菓子は駄菓子のおいちかねちがね、それも五つか六つ七つ八つになる迄上菓子の味を知らざるそちが不運、我育ちたる時分とは斯迄違ふものなるかと、思へば不便でならぬわい。

〽手拭顏に押當て聲を忍びてむせ返れば、共に淚の卯之助が親の心を察しやり、

ト善吉手拭を顏へ當て泣く、卯之助是を見て思入あつて、

卯之 これお父さん、そんなに苦勞におしでない、今にわたしが大きくなり、お前と二人で紙屑を買つて步いたことならば、よい身上になられませう、さうなる時はどの樣なよいお菓子でも喰べられますから、今喰べたくはござりませぬ。

〽幼けれども利發故、親の苦勞を慰むれば、

善吉 あゝ利口な樣でもまだ子供、賤しい家業の紙屑買も親が今日營めば、惡い家業もよいと心得、大きくならば二人して稼ぐと言はるゝおれがせつなさ。

〽百萬年稼いだとて、紙屑買で步いては所詮うだつが上らねば、生涯我子に貧乏させ、こんな意氣地のない者でも、あまりといへば親甲斐なく、面目なうてならぬわい。

〽いかなる前世の因果にて、斯迄落ぶれ果てしかと、悔み歎けば氣を勵まし、
ト善吉思入、卯之助こなしあつて、

卯之　いえそりやお父さん違ひます、よい所にはお金があり、お乳母を置いて育てれば親に苦勞はござりませぬ、お父さんの樣にお金もなく、困る中にて此の年迄お育てなされて下された、
〽御恩はお金の澤山ある、不自由のない親よりも、はるかにまさりしことなれば、其日に困る者の子ほど、親に孝行致さねば、人の道にかけますと、
〽子供心に思ふ故、何處から何を貰うても、父さんお前へ蔭膳と一緒に供へぬ其内は、喰べたことはござりませぬ。
〽わづか七つか八つには足らぬ子なれど學校の、敎に物の理も分り、孝行盡す卯之助に嬉し淚を押拭ひ、

善吉　おゝ忝い〳〵、育てがひなき親なれば面目ないと思ふのに、不自由のない者よりもまさりし恩とは忝い、其志しが何よりもおれは嬉しく思ふから、是から何を貰ふとも、初穗を除けて置くには及ばぬ、祖父さんと二人して、早く喰べてしまつてくれ。

卯之　祖父さんはおとつさんが、斯うして居るを苦勞になされ、何を上げてもさつぱり上らず、早く死

んでしまひたいと、おつしやつてヾござります。

善吉　さうして家の暮しや何かは、朝日山からしてくれるか。

卯之　あい、伯父さんの所にもお取込がある故に、お氣の毒だと祖父さんが、北庭さんからお貰ひ申したお金がある故伯父さんから、お貰ひ申しは致しませぬ。

善吉　すりや北庭さんからお貰ひ申した、其の三圓で暮して居たか。

卯之　其の三圓も大家樣米屋薪屋へやりましたら、纔なお錢が殘りし故、此間もお米がなく一日喰べずに居りましたら、力が拔けて其の朝は水を汲むのが汲めませなんだ。

善吉　あゝ己が家に居たならば、假令どんなに困るとも、餓じい思ひはさせまいに、お年寄られた親父樣や、年のいかないそなたに迄苦勞をさせるは何たることか、心は矢竹に思つても滿期でなければ歸られず、もしも其内其の日に迫り、ひよんなことでもあつたらば、

〽今日は明日はと一日づゝ、指折りて待つ八十日、滿期で出てもせんないこと、どうぞそれ迄御無事にて、目出度く顏を合すのを樂んで居る此の善吉、家へ歸らば親父樣に、ようう其の事をいうてくりやれ。

〽親の命が取とめ度く、賴む詞も子心に貧の病の覺束なく、

卯之　よくお話しを致しませうが、おとつさんは何時お家へ、お歸りなされまするぞえ。

善吉　やうやく今日で二十日故、まだ六十日が立たねば歸ることはならぬわえ。

卯之　もし其内に祖父さんが。

善吉　や。

卯之　死なしやんしたらどうしませう、わたしを不便と思ふなら、もしお父さん。（ト善吉に縋り、）早くお家へ歸ることは、

〽出來ませぬかと取縋られ、涙に暮れて善吉は、胸を裂るゝ思ひにて、

善吉　おゝおれも早く歸りたいが、盜みの科にて八十日懲役になつた體故、其の日限が立たざれば歸ることはならぬわいの。

卯之　そんならどうでも、六十日日數が立たねば歸られませぬか。

善吉　七十近き親あれば、心にかゝれど盜みゆゑ。

卯之　其の懲役は八十日。

善吉　入牢してから數ふれば、九十幾日にはや百日。

卯之　たゞ一日も千日の、

善吉　思ひを親子にさせるとは、

卯之　もしお父さん。（ト善吉引寄せ、）

善吉　思へばはかない身の上ぢやなあ。

〽手に手をとりて親と子が、わつとばかりに抱きしめ、涙は波戸場に汐滿ちて、岸に溢るゝ如くなり。

ト此内善吉愁ひの思入あつて、卯之助を抱きしめ泣く。

〽始終を後ろに聞居る虎藏、むつくと起きて吐息をつけば、

ト虎藏起きて平舞臺へ坐り、ホッと思入れ、善吉びつくりなし、

こりや虎藏さんには、どうさつしやつた。

虎藏　寐た裝をしてお前方の今の話しを後で聞き、初めて惡い事を知つた。

善吉　何と言はるゝ。

〽聞咎むれば虎藏は、落つる涙を振拂ひ、

虎藏　餓鬼の時から根性は、つむじと共に曲つた虎藏、盜みはしねえがかどはかし、ゆすり衒りに幾度か惡事千里に搜されても、風を喰つて逃げ歩き親の首へも繩を掛け、不孝なやつと言ひ死に親父が

死んだ其跡は、たゞせえ甘えお袋に小言をいやあなぐりつけ、蹴たり踏んだりした事も悪いと心付かざれば耳やかましく聞いて居たが、年に似合ず目から鼻へ、抜ける利口なお前の息子が、其の日に困る者の子ほど、親に受けたる恩深く孝行せねばならぬといふ、其の一言が肝に徹へ、これ迄盡した親不孝濟まねえことをして來たと、今日といふ今日目が覺めて親父の死んだ其時にも、たゞ一滴の涙せえこぼした事のねえ己が、其の子の勝れた孝行に初めてこぼした此の涙、これが心を改めて、誠の人になつた證據だ。

〽子の孝心が敎となり、悪も忽善心に飜りたる虎藏が、涙に誠あらはせり。

ト虎藏宜しく思入あつて、涙を手拭で拭ふ。

善吉　すりや、卯之助が孝心に、感じてお前は改心せしとか。

虎藏　義理人情も辨へぬ、どんな鬼でも此の子の孝心、聞いて直らぬものはねえ。

善吉　それは何よりわたし等も、まことに嬉しく思ひます。

虎藏　さつきお前を踏んだり蹴たり、何處ぞ痛めはしなんだか、濟まねえ事と氣が付いから、お前に顔が向けられねえ。己を蹴るなりと踏むなりと、存分にして善吉さん、どうぞ堪忍してくんねえ。

〽怪我はせぬかと撫さすり、詫り入れば善吉が、

ト虎藏善吉の體をさすり、詫ろ思入

善吉　お前に蹴たり踏んだりされ、憂目にあふのも身の懲らしめ、決して恨みに思ひはしませぬ、心が直つて下されば、何よりそれが忝い。嘸此の事を聞かれたら、母御や又は弟御が悦ばれるでござりませう。

虎藏　其の悦びはどのやうだか、早く知らしてやりてえものだ。

〽へい言ふ折後へ重右衛門、（ト上手より以前の重右衛門出て、）

重右　世にも稀なる其子の孝心、己も涙をこぼしました。

虎藏　そんなら頭、お前も始終を、

善吉　小陰でお聞きなさいましたか。

重右　善吉殿が孝心に、親の罪をば身に引受け、八十日の懲役になつたと人の話しに聞き、感心をして居た所、其の孝心に輪を掛けた此子は世間の子の鑑、鬼の樣なる虎藏さへ、不孝を知つて發起なし、これ迄泣いたことのねえ鬼せえ涙をこぼすもの、惡い心を改めて今は佛の重右衛門、後生願ひに涙脆く、此の子が切ない話しを聞き、これ此の通り手拭を涙でぐつすり濡らしてしまつた。

虎藏　それぢやあ此の子の話を聞き、親分お前も泣きなすつたか。

重右　これが泣かずに居られるものか。
〽折柄後へどや〳〵と、（ト幕明の八人泣きながら出て）
源六　わしらもみんな、
八人　泣きました。
重右　おゝ手前達も泣いたのか。
源六　泣いたとも〳〵、此の頃登つた綱太夫が、
熊藏　三の切を聞くよりも、
竹齋　世にも稀なる卯之助どのが、
雲念　親孝心に感じ入り、
升七　まことに此身の說教に、
五右　情を知らぬ者共も、
銀太　胸に迫つて一同に、
鐵藏　いまだに淚が、
八人　止まりませぬ。

〽止りませぬと聲を出し、すゝり上げてぞ泣きにける、重右衛門は涙を拭ひ、

ト此内入人聲を上げ泣くをかしみ宜しく、重右衛門思入あつて、

重右　さつきも己が言ふ通り、善吉の外一人でも直な心の者はねえ懲役人が涙に暮れ、悪い心を翻し、皆善心に立返つたは善吉親子が孝心故、名僧知識の說教よりはるかにまさつたことなるぞ。

善吉　親孝行といふ程の事でもないを其樣に、頭を初め皆さんが左樣に褒めて下さいますは、親子が身に取りどの位有難いかしれませぬ。これ卯之助、ようお禮を申しやいの。

卯之　皆樣、有難うござりまする。

〽親子は大地へ手を突いて、嬉し涙にくれにける、虎藏は點頭きて、

ト善吉卯之助皆々に禮を言ふ思入、虎藏こなしあつて重右衛門に向ひ、

虎藏　もし親分、お前さん、折入つてお願ひがござります。

重右　なに、己に願ひとは。

虎藏　外の事でもござりませぬが、此の善吉が懲役の日數をわつちが身に引受け、是から先へ幾日でも餘計に役を勤めますから、お前さんからお掛りへお願ひなすつて善吉を、一日も早く內へ歸し親父に安心させてえから、御免になつて歸ります樣、どうぞお願ひ下さりませ。

重右　おゝ虎藏よく言つた、然し手前が替りを勤め、此の善吉を許すといふ自由な事は出來ねえが、然し惡い事でねえから、一部始終を申上げたら、親孝心の其廉で非常のお慈悲があつたらば、御免になるまいものでもねえ。

虎藏　どうぞ親分お前さんが、力を盡して善吉さんが、赦免になるやうして下さいまし。

善吉　すりや虎藏さんには懲役の日數を勤めて善吉の、赦免を願つて下さりますか、叶ふ叶はぬは兎も角も、お志しが忝い、必ずあだには思ひませぬ、然しお前を替りにしては。

虎藏　其の遠慮にやあ及ばねえ、せめてお前を助けにやあ、折角心を入替へても、まことの人になられねえ。

重右　箸にも棒にもかゝらねえ亂暴者の虎藏が、さういふ心になつたのも、實に此の子のお蔭だから親孝心な事柄を、よくお掛りへ申上げよう。

源六　虎藏ばかりぢやござりませぬ、わつちを始め皆一同七ッか八ッの子でさへも、人の道をば辨へて。

熊藏　親へ孝行盡すかと思ひまするを面目なく、實に今日迄氣の付かぬは、まことに悔しうござります。

重右　是といふのも近頃は何れいづくの果迄も、學校のない所はなく、六歳からして入校なし日々勉强するゆゑに、昔と違つて智慧早く十にならない子供でも、天地の事から世界の事よく辨へて居る

故に、親を大事に孝行する、斯ういふ子供が出來るのだ。

雲念　其の孝心を手本となし、

竹齋　硯の名にし虎藏が、

升七　曲りし墨もまッ直に、

五右　筆の命毛結直し、

銀太　悪い心は水入の、

鐵藏　水に流して我々も、

源六　皆善心に、

八人　なりました。

虎藏　そんならみんなも善心に、己と一緒になつたのか。

重右　晩に歸らば一統へ、今日の事を話して聞かせ皆善心に立返らば、それ〴〵滿期の其後は、二犯を犯す者もなく、さうなる時はどの位お上へ對して忠義だか、善吉親子は言ふに及ばず、虎藏手前も手柄だぞ。

虎藏　生れて丁度三十年、初めて人に褒められて、こんな嬉しいことはねえ。

〽善に返りて虎藏が、悦ぶこなたへ立出る巳之吉、

ト虎藏悦ぶ思入、後ろ異人館の蔭より、巳之吉おむら出來り、

巳之　樣子は聞いた、これ兄貴、よく善心になつてくれた。

むら　おッかさんが聞かしやんしたら、嘸お悦びでござんせう。

虎藏　もう是からは手前達にも、決して苦勞はかけねえぞ。

巳之　是といふのも善吉さん。

むら　又此のお子の孝行故。

巳之　厚くお禮を、

兩人　申しまする。

善吉　いや、其のお禮を受けまするは、此の善吉ではござりませぬ。

重右　虎藏初め一統が改心したは此子の手柄、惡を懲らして善を勸むる、

虎藏　まことに今日の、

皆々　教導職。

〽我子を褒められ嬉しさに、善吉寫眞に打向ひ、（ト善吉以前の寫眞を出し、）

善吉　もし親父様、お悦びなされませ、あなたの祕藏な卯之助が大きな手柄を致しました、嘸お嬉しうございませう。

卯之　少しも早う此事を。

善吉　おゝ、祖父様へお知せ申せ。

卯之　はい。

善吉　あゝ此寫眞は留置いて、朝夕お目にかゝりたいが、懲役の身に斷なく、此儘置いてはお上へ恐れ。

重右　今日の始末を申上げる、次手に願つてやらうから、寫眞は其儘置くがよい。

善吉　すりや、お許し下さりますか、有難うございまする。

虎藏　さあ卯之さんは、少しも早く。

卯之　左樣なれば、お父さん。

善吉　親父樣を大事にしてくれ。

卯之　それはお案じなされますな。お頭初め、皆さん方。

〽小腰かゞめてそれ〴〵へ行儀正しく辭儀なせば、（ト重右衛門初め皆々へ辭儀なする。）

巳之　ても感心な、

むら　あのお子さん。

〽褒める詞を身の出汐、泣く〳〵立つて行掛けしが、磯邊離れし水鳥の風にさまよふ風情にて、名殘惜しみて行きかねれば、親子の愛に善吉が跡を慕へば虎藏も、共に引かれて行く鎖、

ト卯之助後を振返り〳〵花道へ行く、善吉立上り、是を見送り花道の方へ行く、虎藏鎖に引かれ、しをしをと付いて行く、皆々可愛さうだといふ思入。

善吉　そんなら卯之助、もう行くか。

卯之　家へ歸るが遲くなれば。

善吉　あゝ、いつ又逢はれることか。

〽互ひに顏を見合せて、袖に涙の汐曇り、濕りがちなる折柄に、

ト兩人名殘を惜しむ思入、虎藏後ろに泣居る、皆々も愁ひの思入、よき程にどんと大筒の音、是にて善吉眞中へ來り、卯之助舞臺へツカ〳〵と戻る、巳之吉おむらはびつくりなして、

巳之　や、あの大筒は。

むら　ありや何でござります。
重右　今日は異國の祝ひ日に、
虎藏　船中で打つ、
八人　ありや祝砲。
善吉　頓て目出度く、（ト卯之助を引寄せるを、木の頭）
　歸るを待てよ。
　ト善吉につたりと思入、皆々引張り宜しく、海軍の奏樂へ祝砲の音をあしらひ、
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ひやうし　幕

五幕目大切

待合新大和の場
元町善吉内の場
法善寺墓所の場

一筆畫兩面團扇（常磐津連中）

（淨瑠璃）　隣で語る二の口村に
　　　　戀と無常の二道を

〔役名――福住善吉、朝日山浦右衞門、甚兵衞、手代忠八、池田半七、桑原五郎右衞門、忰卯之助。藝者お梅、新大和のお若、お梅母おくら、其他。〕

（新大和の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間銀張地袋戸棚、此上に蒔繪の服臺硯箱など置き續いて一間大塵襖、此下茶璧、誂の臺へ三尺の鏡を置き、下手に茶簞笥、風爐へ釜を掛けあり、軒口に「待合」といふ掛行燈、いつもの所枝折戸、下の方一間晒し竹の格子、中窓下板羽目、總て待合茶屋の體、爰に五郎右衞門羽織着流しにて煙草盆を控へ、煙草を呑み居る、眞中にお梅藝者の打扮、お若待合女房の打扮にて、お梅へ煙管を出してゐる、下手にお筆下女の打扮にて急須へ茶を入れて居る、此見得流行唄にて幕明く、

五郎　これお梅、二百圓といふ金を出して三年の年で賣られた手前を、東京へ連れて來てやつた其の大恩も思はずに、お袋の所へ逃げて來て、それで手前濟まうと思ふか。

お若　これはしたり桑原さん、そんなに大きな聲をなさらずと、まあ靜におつしやつて下さいまし。

お筆　大きなお聲でござりますから、表へ人立が致しまして、外聞が惡うござります。

五郎　いや靜にしろといひなさるが、靜にしちやあ居られねえ。そりやあ讀と歌だから己が心に隨へば其の身の出世ばかりぢやあねえ兄にも力業をさせず、何か商法を開いてやる氣だ、それを何處へ

行つたか行方もしれねえあの半七に心が殘つて、己がいふことを聞かねえからは、よく敵役のいふせりふだが、可愛さ餘つて憎さが百倍、手前を屯へ引張つて行つて、此の始末を分けにやあならねえ。

お梅　そりやあ一旦お前さんのお世話になつたことだから、其のお金はどうしてもお返し申す心故、此間兄さんが百圓お返し申しまして、跡の殘りの百圓は四五日待つて下さりませと、あれ程一昨日兄さんが、お賴み申したぢやあござりませぬか。

お若　私も聞いて居りましたが、待つてやらうとあの時に御承知なすつておきながら、それを今日又お梅さんに返せといふのは桑原さん、男らしくないぢやあございませんか。

五郎　いゝやそんなことを言つた覺えはない、それとも四五日待たうといふ罫紙へ書いた證書があるか。

お梅　そんな物はござりませんよ。

五郎　證書がなけりやあ待たれない、何でも殘金百圓を、たつた今己に返せ。

お梅　ほんに、桑原さんもまだお若いと思ひましたが、もう六十でござんすか。

五郎　此桑原を六十とは、何を見てそんな事を言ふのだ。

お梅　一昨日四五日待たうといつて、今日になつてそんな事を言はないなどゝ言ひなさんすから、それ

でわたしや老耄して、居なさるかと思ひました。

お若　六十といふのはお梅さん、そりや欲目でござります、わたしや七十かと思ひました。

お筆　ほんに桑原さんは、大ゆるみでござりますな。

五郎　女子供を相手にするは、大人氣ねえと我慢をすりやあ、いゝかと思つて付上り、よく人を馬鹿にしやあがあつたな、もう此の上はお梅をば屯へ連れて行かにやあならねえ。さあ、己と一緒にうしやあがれ。

ト引立にかゝる、よき程に浦右衛門着流し角力の打扮、以前の忠八と連立ちて出で、門口にて囁き、忠八は下手へはひる、浦右衛門内へはひり、

お梅　おゝ、よい所へ來て下さんした。や、こりや朝日山か。

浦右　こりや五郎右衛門さんには、己が妹を何處へ連れて行くのだ。

五郎　おゝ殘り金の百圓を返さぬ上に兎や角と、おれが事を惡くいふから屯へお梅を連れて行くのだ。

浦右　いゝやおれが來るからは、此の妹は渡されねえ。

五郎　渡されねえと立派にいふなら、殘りの金の百圓を、たつた今己に返すか。

浦右　一昨日百圓渡す時、後は四五日待つてやると、こなたおれに言つたぢやあねえか。

五郎　そんなことを言つた覺えはない、たつた今金を返すか、それとも金が返されずば、お梅を己が女房に呉れるか。

浦右　慥に待たうと言つたけれど、言はぬといへば水掛論、今更言つても仕方がねえが、言條通り今爰で、百圓金が出來る上は約束變替へした廉で、只こなたをば返さぬぞ。

五郎　そんな脅しを言つたとて、百圓といふ其の金が、力づくぢやあ出來ねえよ。

浦右　其の力づくで出來ねえ金が、若し又出來たら何とする。

五郎　おゝ出來たらこなたの存分に、此の五郎右衞門をするがいゝ。よもや金は出來まいな。

浦右　ところが百圓爰にある。

五郎　やあ。（トびつくりする。）

浦右　それ、數改めて請取らんせ。

ト懷から十圓札の包を出し、五郎右衞門の前へはふる、五郎右衞門取上げ見て、

五郎　おゝ、こりや十圓札で丁度百圓。

浦右　さあ、請取りを書いてくだんせ。

お若　硯箱は爰にござんす。
五郎　よもやと思つた此の金が。
お梅　ほんに兄さん、どうしてこれを。
浦右　そりやあおれも男だから、百圓金を拵へて來たのだ。
　　ト此内五郎右衞門請取を書き紙入より印紙と印形を出し、請取へ張り、印を押す、始終顫へ居る。
お若　桑原さん、何をそんなに顫へなさんすのだ。
五郎　よもやと思つた此の金が、出來た故に氣味が惡い。印紙も張つてありますぞ。
　　トふる〳〵出す、浦右衞門見て、
浦右　おゝ、これでよい〳〵。返せといふ金返したからは、今の詞は忘れまいな。
五郎　あゝ忘れました〳〵、さつき四十と言つたは僞り、實の所は六十故、老耄なして忘れてしまつた。
　　トふるへ居る。
浦右　どれ、存分にしてやらうか。（ト浦右衞門立上る、五郎右衞門ぶる〳〵顫へながら詫びる、浦右衞門思入あつて、）然し一旦受けた恩もあれば、どうもせぬから早くござれ。（ト門口へ突出す。）
お若　をとゝひござんせ。（ト五郎右衞門ホッと思入あつて、）

五郎　どうでもしろと、此の口で言つたばかり、すんでのこと耳か鼻をもがれる所、無事で助かりお目出度い。

ト此内口鼻耳と指で教へ、流行唄にて五郎右衞門花道へはひる。梅吉嬉しき思入。

お梅　桑原さんのお金を返し、今日といふ今日さつぱりと、曇つた空が晴れた樣で。

お若　わたし迄も共々に、こんな嬉しいことはない。

お梅　兄さん、有難うござんすわいな。

浦右　いや、其の禮は己ではない、忠八さんによく言やれ。

お梅　え、何と言はしやんす。（ト合方になり、奥より忠八出て、）

忠八　お前方同胞が、五郎右衞門から借りた金で困つて居ると聞いた故、其の難儀をば救はうと、百圓持つて來る途中、丁度折よく此先で朝日關に出逢つた故、金を渡して爰の門へ、來ると內にて五郎右衞門が、催促故にこつそりと、裏から忍んで聞いて居ました。

お梅　そんなら今のは忠八さんが、お貸しなすつて下さいましたか。

忠八　いや、貸したのではない其の金は、大旦那樣が下すつたのだ。

お梅　え、すりや大旦那樣が、あのお金を。

忠八　若い時には道樂をなされたお方にさばけがよく、此の話しを致しましたら、元の起りは忰から起つたこと故、濟まして遣れとおつしやつて、此の忠八へ内々でお渡しなされて下されたのぢや。
浦右　これといふのも日頃から、御贔屓になされて下さる故。
お梅　何とお禮を申さうやら。
兩人　有難うござりまする。（ト辭儀をする。）
浦右　此の間から、お袋も頭痛に病んで居りました故、是から直に家へ參り、早く知らしてやりませう。
お梅　どうぞ兄さん少しも早う、おしらせ申して下さんせいな。
浦右　失禮ながら忠八さん、先へ御免を蒙ります。
忠八　遠慮に及ばずござらつしやい。
お若　左樣なれば、朝日關さん。
浦右　大きにお世話になりました。
ト流行唄になり、浦右衞門花道へはひる。跡合方彈流し、梅吉思入あつて、
お梅　もし忠八さん、お前さんにお目にかゝつたら委しくお聞き申したいと、疾から思つてをりましたが、半七さんの行先きは何處へおいでなさんしたか、御存じではござりませぬか。

忠八　さあ朝日闕の所から、上方へ行くとおつしやつておいでなすつたと聞いた故、跡を追ひ掛けお止め申し、世間を憚ることもあれば、幸ひ酒匂の御縁家へお預け申して置きました。

お梅　それでは上方へおいでにならず、酒匂においでなさいますか。

忠八　それも山手の御別莊へ、二三日後にお呼び申せば、今においでなされませう。

お梅　そんならこちらへ半七さんが、おいでなされましたとか。

お若　お梅さん、嘸嬉しうござんせうね。

お梅　こんな嬉しいことはござんせぬ。

忠八　最前使を上げましたから、もうおいでなされたかもしれぬ。

お若　人目を憚り裏口から、おいでなさるかも知れませぬ。どれ、行つて見て参りませう。

忠八　お話し申すこともあれば、わしも一緒に行きませう。

お梅　それではおいでなさいましたら、

お若　直にお知せ申します。

忠八　そこに待つておいでなさい。

卜端唄の合方になり、忠八お若奥へはひる。

お梅　かういふことゝは露しらず、上方へおいでなすつたことゝ、明暮お案じ申しましたが、こちらにおいでなさるなら、なぜ便りをして下さんせぬ、早うお目にかゝりたうござんす。

ト合方きつぱりとなり、奥より半七着流しにて出來り、

半七　お梅、そこに居たか。

お梅　や、半七さんですか。

半七　よく達者で居てくれたな。（下下に居る。）

お梅　えゝ逢ひたうござんしたわいな。（ト半七にすがる。）

半七　委しい事は忠八から聞いて恨みは晴れたれど、あの虎藏に誑されて藝者になつたことは知らず、外に深い男があつて捨てられたと聞いた故、腹が立つてく怺へられぬのみなるか人に面が合されず、いつその事身を投げて死なうかと思つた。

お梅　其のお恨みは無理ならねど、お前さんの爲といふ故虎藏めに誑されて、知らぬ土地の高崎へ藝者に行つてどの位辛い思ひをしましたか。それもやうくこつちへ歸り、直に兄さんの所へ行き、段々との話しをして、此身の明りは立ちましたが、お前さんの行方が知れず、どんなに苦勞をしましたらう、お察しなされて下さいまし。

半七　それは己も同じこと、さういふ心と知らぬ故、腹が立つやら悔しいやら、夜もろく〳〵寐なんだわいの。

お梅　思ひがけなくお目にかゝり、何からお話し申さうか、たゞ嬉しいので言ふ事も、急に口へは出ませぬわいな。

半七　そんな事をいふけれど、桑原とかいふ客に前借を濟まして貰ひ、歸つて來たと言ふからは、定めて夫婦約束して、どんな起請があることやら。

お梅　たゞ東京へ歸りたいので、前借金を借りたばかり、そんなことのない證據は、守りをお目に掛けるから、改めて御覽なさい。(ト脊負ひ守を出す。)

半七　さういふことなら其中を、改めて見ずともよい。

お梅　わたしよりはお前さんこそ、久しく逢はぬ其内に、どんな起請があらうやら。

半七　そりや己とても同じ事、起請などはないけれど、疑ふならば此の守り、中を改めて見たがよい。

(ト懷より守りを出す。)

お梅　そんならわたしの疑ひばらし、中を見せて下さんせいな。(ト守袋を明け、中より誂への印籠を一重出し。)や、此の印籠は。

半七　それは實の、親の形見だ。
お梅　えゝゝゝ、(ト びつくりなし、) 此の印籠の片われが、親御の形見でござんすか。
半七　何を隱さう此のおれは、幼き時に道に迷ひ、泣さまようて居たりしを、ある旅僧が拾ひ取り、池田の家へ連れて來て、養ひくれしと頼みしに、丁度其の頃一子なく、まをし子なせし折なれば、是神佛より授かりしと、直に貰ひて育てし由、成人なして其事を養母が我へ竊の話し、守の內に入れありし犬の模樣の高蒔繪、此の印籠の一重は產の親の形見なれば、大事にせよと言はれし故、是を證據に後々に、親子兄弟名乘合ふこともやあらんと肌身にそへ、大事にかけし印籠は、いづこの誰か知らねども、日頃尋ぬる親の形見。
お梅　そりや僞りではござんせぬか。
半七　なに僞りをそなたに言はうぞ、年月立てど實の親、明暮戀しく思ふに付け、もし兄弟でもあるならば此印籠を證據として、名乘り合ひたいものぢやわいの。(ト 此內お梅思入あって、)
梅吉　はあゝ。(ト 泣伏す。)
半七　これお梅、何を泣くのだ。
梅吉　もし半七さん、此の守を見て下さんせいな。

ト以前の守を出す、半七中より同じ印籠の末の一重を出し見て、

半七 や、犬の模様の同じ印籠、しかも末の一重を守へ入れて持つて居るは、もしやそなたは。

お梅 わたしや妹でござんすわいな。

半七 や、、。（トびつくりなす。）

お梅 同胞同士と知つた上は、お前に顔が合はされぬわいな。（ト下手を向き泣く。半七は印籠を合せ見て、）

半七 しつくり合ひし此の印籠、今一重の持主は。

お梅 朝日山の兄さんが、守に入れて居やしやんす。

半七 扨はそなたは眞實の、我妹であつたるか、神ならぬ身の露知らず、三年此方言交し水も洩らさず契りしは、いかなる過去の因果なるか、己もそなたに面目ない。

お梅 此の印籠で名乗合ふ後の證據に入置いた父さんも聞えませぬ、かうして實の同胞が畜生道へ落ちるのを、草葉の蔭から見て居ながら、何故に留めては下さんせぬ。

半七 親を恨むに及ばぬこと、斯ういふことになり行くも、前生からの約束事、三つに分けし三重の此の印籠の高蒔繪、雪に狂ひし犬の畫は、畜生になるこれ前表。

お梅 過ぎし契りを夢となし、是から二人別れるとも、

半七　隱す事程洩れ易く、世間へ是が知れた時は、
お梅　人に面が合はされねば、死ぬより外はござんせぬ。
半七　死ぬと覺悟を極めたなら、そなたばかり殺しはせぬ。
お梅　そんならお前も、共々に。
半七　せめて一言此譯を、兄と知れたる浦右衞門殿へ。
お梅　わたしも共に母樣へ、不孝のお詫を書送り、
半七　明日は連立つ、
お梅　冥土の旅。
半七　思へばはかない、
兩人　身の上ぢやなあ。
　　ト手をとりかはし顏見合せ、愁ひの思入、時の鐘しんみりとした端唄にて、道具廻る。
(善吉內の場)＝本舞臺二幕目の善吉の內、世話場の道具、爰に佐次郎兵衞の差配人、お鹿、お熊相長屋の女房の打扮にて、立掛りゐる。四ツ竹節にて道具留る。

お鹿　大屋さん、お前さんも嘸お悦びでございませう、卯之ちやんの親孝行がお上へ知れて、善吉さんの八十日の懲役も、纔な日數で御免になり、

お熊　一つ長屋に斯うして居れば、他人のやうに思はれず、わたしども、共々に、まことに嬉しうございます。

佐次　長屋内から泥坊や間男などの出ると違つて、親孝行の出るといふのは、實に己の鼻が高い。

お鹿　鼻が高いといへば、今日は表の文字喜代さんのお溫習で、晩には天狗さまが寄合ふさうだ。

お熊　晝の中は子供ばかりだが、後には立派な太夫さんが、出ますさうでございます。

佐次　それは晩には樂しみだわえ。

ト合方になり、奥より以前の甚兵衛卯之助出來り、

甚兵　これは〱皆さん方へ、大きに失禮を致しました。（ト眞中へ住ひ、）扨、何からお禮を申しませうやら、善吉が懲役中佐次郎兵衛様を初めとして、お長屋の衆が御親切故どうなりかうなり今日迄命を繋いで居りましたは、皆さん方のお蔭故、まことに有難うございます。

ト甚兵衛卯之助も共に皆々へ禮を言ふ。

佐次　いつも區務所で自慢をするが、己が支配の店子位親切な者の居る所はない、其のくせ殘らず貧乏

人、先づ紙屑屋に甘酒屋、羅宇のすげ替へに煮込のおでん、竈直しに下駄の齒入、照降なしの生業で、其内での上等は瓦斯燈を附ける人足に、假名讀新聞の配達人、みんな堅氣な者ばかり、斯ういふ堅氣な店子を持つは、實に差配人の仕合せだから、此の頃に强飯でも長家へ配らうと思つて居るのだ。

お鹿　おゝお强飯といへば、今し方隣のお寺へ來た葬式、大そうお强飯が殘つたので、わたしらも貰つたから、卯之ちやん一つ上げませう。（ト懷から强飯の皮包を出し、卯之助の前へ出す。）

卯之　これは有難うござります。

お熊　是はしたりお鹿さん、今日は善吉さんがお赦になつて、目出度い所へ葬式の、お强飯を上げては緣起が惡い。

お鹿　何の惡いことがあるものかね、どうで一度は死ぬ體、呉れるものならお强飯でも、何でも貰ふが世帶の爲め、何とさうぢやござりませんか。

佐次　おゝ、さうだ／＼、開化の世界にそんな事を氣に掛ける者があるものが、餘計にあるなら役得に己も一つ貰はうか。

お鹿　さあ／＼一つ上げませう。

ト叉懐から出して佐次郎兵衞にやる、合方きつばりとなり、下手より善吉やつし裝にて出來り、

善吉　親父さま、今歸りました。（ト内へはひろ。）

甚兵　おゝ善吉、歸つたか。

善吉　これは御差配人の佐次郎兵衞樣に、お長屋のおかみさん達、長々お世話になりまして、有難うござりました。只今御銘々の家へ上り、お禮を申しました。

佐次　何の改めて、禮などに家へ來るには及ばぬのに。

善吉　先刻お目にはかゝりましたが、改めてお家へお禮に、上らなくては濟みませぬ。

佐次　ときに善吉殿、お前が歸つたら話さうと、思つて歸るを待つて居ました。

善吉　何のお話しでござりまする。

佐次　善吉殿に懲役の難儀をさせた因業者、あの安達屋の喜兵衞めが、時ならぬ鰒を喰つて昨日ころりと死んでしまつた。

善吉　え、すりや、喜兵衞殿は、鰒を喰つて昨日死なれましたとか。

甚兵　それは氣の毒なことをしましたな。

お鹿　何の氣の毒なことがござりませう、親孝行な善吉さんを、酷い目に合はしたからは、

お熊　報いがなくてはなりませぬ。
佐次　何でも人は正直に、心を持たねばいけませぬ、今日葬式だといふことだが、不斷憎まれて居るせ
　ゐか、さつぱり人が出なんださうだ。
お熊　寺は何處でござりました。
佐次　慥か寺は法善寺だ。
お鹿　それではさつき貰つたのは、あの安達屋の强飯か。
佐次　鬼の所の强飯なら、是はそつちへ返します。（ト皮包を返す。）
お熊　おゝ、わたしらも喰べるは厭だ。
お鹿　犬にやつてしまひませう。（トお鹿皮包を殘らず門口へ捨る。）
佐次　喜兵衛が死んだことを言へば、最早己も用はない。
お鹿　どれ、わたしらも家へ行つて、
お熊　夜食の支度を致しませう。
佐次　長屋の衆が歸るなら、わしも其處迄一緒に行かう。（ト立上る。）
善吉　まあ宜しいではござりませぬか。

佐次　又明日話しに來ませう。

ト四ッ竹節にて、佐次郎兵衛先にお鹿お熊下手へはひる、時の鐘になり、

善吉　雨氣のせゐか今の間に、大そう暗くなりました、どれ行燈を點けませうか。

ト下手より破れたる古行燈を出す。

甚兵　あゝ、油がたしか無かつたッけ。

卯之　わたしが買つて來ませうか。

甚兵　おゝ一合買つて來てくりやれ。（ト懷から、財布を出し、中より小錢を出して算へ、）こりや一合には二十足らぬ、五勺買つて來てくりやれ。

卯之　いえ、わたしが持つてをりますから、二十足しておきませう。

甚兵　それでは二十貸してくりやれ。

ト卯之助千代紙で張つた小箱より巾着を出し、此中より赤い紙の付きし箔置の錢を二文出すを見て、

善吉　其の錢は、何の錢だ。

卯之　こりやお稻荷樣の棟上の時、拾つたお錢でござります。

甚兵　折角そなたがのけて置いたに。

卯之　いえ、遣ふ爲のお錢故、何の構ひがござりませう。

甚兵　そんなら貸しておいてくれ。

卯之　どれ、行つて參りませう。

ト四ツ竹節にて卯之助瀨戸物の油差を持ち花道へはひろ。善吉門口へ來り、跡を見送り、不便だとい
ふ思入、時の鐘誂への合方になり、元の所へ來り、

善吉　扨親父樣、此の樣に早く赦免になりましたも、忰が孝心二つには虎藏殿が善心に立返つたのが廉
になり、重右衛門殿の願ひ立てゞ思ひがけなく赦免になつたは、此上もないお上のお慈悲、こん
な有難い事はござりませぬ、是から生業精出して少しはお樂をさせます心、懲役中は親父樣へ
忰がお世話をお願ひ申し、思はぬ御苦勞掛けました。

甚兵　其の言譯を言はれては、面目なくて我子でも、おりや顏が上げられぬ。其の懲役になつたのも、
元はと言へば此の己が不圖した心の迷ひから、小裁小袖を盜みし故、今は裏家の住居なれど、元
は家藏所持なせし數代續きし福住の苗字を穢した其上に、そなたの體へ惡名付け、先祖へ對して
濟まぬ故、疾うから死なうと思うて居たれど孫が難儀を思ひやり、惜しからざりし命をば今日迄
存命へ居ましたが、赦免になつてそなたが歸れば、明日からは居ても居なくても障りにならぬ私

が體、安達屋殿が鰒を喰ひ死んだといふは羨しい、早う私も死にたいわいの。

善吉　親子の中に何の義理、死なうなどゝいふ様なつまらぬ事をおつしやりますな。先達も申す通り着替一枚着せられぬ働のないわたくし故、孫を不便と思召し、ついあの様な道ならぬ盜みをあなたがなされたも、此の善吉が皆科故、申譯にはわたくしが先へ死なねばなりませぬが、あなたへ御苦勞掛けますのみか、忰に難儀をさせねばなりませぬ故、辛抱して生存へて居りまする。どうぞあなたも私や孫を不便と思召し、必ず死なうなどゝいふ心をお出し下さりますな。人は七轉八起とやら、今日斯様に困りましても、明日どんな運が向き如何なる身分になりませうか、人の一生は知れませぬ。其の時千萬悔んでも死んだ跡では仕方がない。惡い後は善いものと、世の諺にも申しますれば、是より惡くなりやうのござりませねば段々と、よくなる小口へ向ひませうから、是から死に身に稼ぎまして、せめて五年のお樂をば、あなたへおさせ申したいから、どうぞ氣長に親父様、お待ちなされて下さりませ。

甚兵　それを思うて二月越し、生き存へて己も居た、實のことは幾度か夜半に起きてこつそりと梁へ繩を掛けたれど、あの卯之助が目ざとくて目を覺す故死ぬことならず、井戸へ身を投げようと思つたこともあつたれど、一方ならず世話になる長屋の衆が明る日から水に困るが氣の毒故、つい死

におくれて居た替り、目出度くそなたに逢はれたわいの。

善吉　それ御覽じませ、死んでしまへば再びお目にかゝられませぬ、今にも此の身の運が向き、立派な暮しになつた時、あなたにお樂がさせたくても、位牌となつては仕方がない、假令千僧萬僧の供養をなすとも入佛事、くどいやうだが親父樣、お樂をおさせ申す迄生き存へて下さりませ。

甚兵　それ程迄におれがこと思うてくれるそなたの孝行、幾ら死にたく思つてゝ、義理にも止まらにやならぬわい。

善吉　すりや思ひとまつて下さりますか、えゝ有難うござりまする。

ト兩人宜しく思入、合方きつぱりとなり、花道より以前の卯之助、油差を持ち出來り、直に舞臺へ來て内へはひり、

卯之　先の油屋へ行つたので、大きに遲くなりました。

善吉　話に實が入りうつかりと、いつの間にか暗くなつた、どれ灯りを付けませう。（ト行燈の抽斗を明けて、）親父樣附木はござりませぬか。

甚兵　今朝みんな遣つてしまつた。

卯之　いえ、附木は爰にござります。（ト懷から三枚ばかり結へしを出す。）

善吉　それではそちが買つて來たか。

卯之　いえ〳〵此の先の油屋では附木をお負に吳れますから、其處迄行つて買つて來ました。

善吉　おゝそれは出來した。よく行つて來た。

甚兵　なか〳〵大人も及ばぬわい。

卯之　祖父さん、油が二十下りましたから、棟上の此のお錢は、遣はずにしまひました。

　ト此内善吉行燈を點ける。

甚兵　大事にそなたが持つて居たを、油の足に遣はすは、可愛さうだと思つて居たが。

善吉　二十下つて其の錢を持つて歸るは幸先よし、是から稼いだことならば、必ず運が向きませう

甚兵　とはいへ油を買ふにさへ、二十の足しに困る程、

善吉　貧に迫りて卯之助が、貯へ置きし棟上の、

甚兵　遣ふも惜しき箔錢も、

卯之　思はぬ油の直が下り、

善吉　再びかへる運あらば、

甚兵　いつか手にいる繪圖面の、

善吉　家藏立てる時來り、
卯之　此の箔鐩を蒔くやうに、
甚兵　棒程願つて針程も、
善吉　叶ふ時節を親父樣。
甚兵　悴。
善吉　お待ちなされて、（ト明けて置いた行燈の蓋をしめるを、道具替りの知せ）下さりませ。
ト時の鐘合方にて、兩人宜しく道具廻る。

（法善寺墓所の場）＝＝本舞臺三間の間前の屋體の後ろ瓦を載せし柿屋根古びたるしたみの板羽目、此前に井戸、後ろに二段の臺に墓手桶を載せ、上の方玉椿の生垣、丸物種々の石塔卒堵婆を宜しく飾り、下の方前の二階家殘り、井戸の脇に柳の立木、霞付の月をおろし、總て寺院墓場の體、時の鐘にて道具留ると下の二階にて、

口上　東西々々此の所梅川忠兵衛道行戀の三度笠、相勤めまする太夫常磐津――三味線――、いよ〳〵二の口村の段初まり左樣。

トしらせに付き屋體の伊豫簾を卷上げる、爰に常磐津連中羽織袴にて住ひ、直に淨瑠璃になる。

淨るり〽落人の爲かや今は冬枯れて、芒尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や前人目を包む頰冠り、隱せど色香梅川が馴れぬ旅路を忠兵衞が、いたはる身さへ雪風に、凍える手先懷へ溫められつあたゝめつ、石原道をはかどらぬ、

ト此内本釣鐘を打込み、花道より以前の半七頰冠り尻はしをり、以前のお梅手拭を吹流しに冠りて出來り、後前へ思入宜しくあつて、

半七　知らぬことゝはいひながら、假初ならぬ三歲越し、枕交せし二人が中、實の妹と知つたる上は、

お梅　書置殘し大和屋の裏からそつと拔出し、追手の掛らぬ其内と、心急かるゝ夜の道、たどり〳〵て行く先は。

半七　最早生きては居られぬゆゑ。

半七　そなたの菩提所法善寺。

お梅　其の墓原で死ぬならば。

半七　跡をよしなに弔ひくれん。

〽身の繰言は愚癡なれど、大恩受けし養子親、

半右衛門樣へ一口も孝行らしきこともなく、
〽御苦勞掛けし其上に、明日の歎きの數々は、解くにとかれぬ三度荷の重き不孝の罪科と、
かこち涙に目もうるむ。（ト此内半七宜しく振あつて、）

お梅　〽顏つれ〴〵と打守り、それ其の樣に言はんす程、此の梅川が身の辛さ、
お前を實の兄さんと、知らざる故に惚れこんで、
〽末は女夫と言交し、今のお前の憂き難儀、堪忍してとばかりにて、跡は涙の村時雨、

ト此内お梅振あつて、

〽裾にやつる丶小笹原、行きなやみたる足曳の、大和は爰ぞ故鄕の、二の口村にぞ着きにける。

ト半七お梅宜しく振あつて舞臺へ來り、

半七　いかなる過去の因果にや、凡三千五百萬の數ある人の其中にて、

お梅　現在實の同胞が、廻り〳〵て二世をかけ、わりなき契り結びしは、

半七　日頃そなたが信心なす、神佛にも見放され、

お梅　命捨てねばならぬ仕儀、

半七　あの淨瑠璃にもある通り、

お梅　死ぬるとも故郷の土。

半七　さうして親父の墓といふは。

お梅　此の石塔でござんすわいな。

〽産の母の墓所へ一緒に埋められ、そなたにも嫁姑と引合せ、

ト半七月あかりに墓の戒名を見ろ思入、お梅は愁ひの思入にて泣くを、

半七　よしなき事をいふ暇に、

お梅　心は急けど此世の別れ。

半七　せめて名残の、

兩人　水杯。

〽それは嬉しうござんせう、さりながら、私が父さん母さんは、京の六條の珠數屋町、定めて此間は詮議にあうて居さんせう、母さんは目まひ持、もしもの事はあるまいかと、我身の上より案じられ、ま一度京の二親に一目逢うて死にたいと、又も涙に咽び居る。

ト此内半七墓手桶を下げ、井戸端へ行き釣瓶にて本水を汲み、手桶の中を流し、又水を汲む、お梅茶椀を捜す思入にて、あちこち見廻し上手よりひゞ燒の水向茶椀を持來り、懷紙にて是を拭ひ、兩人

宜しく下に居て、半七茶椀を取上げお梅柄杓にて水を汲み、是を呑みお梅へさし、水を汲んでやる、お梅是を呑み噎る、半七介抱なし、文句に拘らず節に合せ、こなし宜しくあつて、

〽忠兵衛遙の野道を見やり、

お梅　もし兄さん、そこに見ゆる其の家はお前や私と從弟同士の、善吉さんの家でござんす。

半七　おゝ、其の以前神奈川の我家の所で福住とて、人に知られし米問屋、そなたが從弟とあるからは我にも同じ從弟同士、

お梅　此の世の別れあの窓から、よそながら伯父さんに、暇乞がしたうござんす。

半七　明日は冥土におもむけば、

お梅　今夜が顏の見納め故、

半七　おれも共々、

お梅　餘所ながら、

半七　お梅來やれ。

〽身のしがい暫し隱れ家へ、忍んでこそは、

ト兩人窓の方へ思入、時の鐘、三重、知らせなしに道具廻る。

（元の善吉宅の場）――本舞臺元の世話場の道具、よき所に二枚折の屏風を立て、此内に蒲團を敷き掻巻をかけ、甚兵衛卯之助を抱いて寐て居る、枕頭に行燈、土の火鉢へ土瓶を掛け有り、宜しく三重にて道具留る。

〽大阪の義理と故郷の恩愛の道は二つにわかれども、血筋ばかりは一筋に、道場參りの歸り足、

ト時の鐘、奥より善吉出來り、

善吉　今日は表のお師匠さんの、四季の溫習で賑やかだ、今語るのは梅川忠兵衛、あの面白い淨瑠璃も苦勞があつては耳へは入らぬ。

〽身を知る雨の小止みなく、野風に送る畑道、（ト善吉屏風の内を見て、）

親父樣も卯之助も、是迄長の苦勞にて體の勞れしことなるか、枕に就けば高鼾、

ト此内風の音、行燈をかき立てようと蓋を明ける、風の音烈しく行燈消える。

南無三、風であかしを消した、燧打箱は何處にあるか、火鉢に火種があればよいが。

〽孫右衛門は老足の歩むとすれどとぼ〳〵と、野口の溝の薄氷辷るを止る高足駄、鼻緒は切れて横さまにどうと轉べば、忠兵衛是は南無三と踠けども出られぬ身、梅川あわて走り出で

抱き起しつ裾絞り、

ト善吉暗がりを探り、足にて捜すこなし、火鉢に蹟きばつたりと轉ぶ。此の時屏風の蔭より甚兵衛顔を出し是を窺ふ。「梅川あわて走り出で」といふ文句にて善吉起上り膝を摩り、「抱き起しつ裾絞り」といふ文句の内、火鉢に殘る火にて付木を點け行燈へともす、是にて甚兵衛屏風の蔭へはひろ。

〽のべ取出す其手許、孫右衛門不思議さうに、

ト善吉屏風の内を覗き、うなづきて前へ出で、合方になり、

虎藏殿や重右衛門殿の、厚き情に思はずもいまだ半途にならぬのに、お上のお慈悲で御免を蒙り、家へ歸つて親子三人目出度く顔を合せたは、此上もない仕合せながら纔二十の油の足しさへ困る程故明日から、紙屑買ひに出ようにも、元手の錢の當もなし、

〽梅川いとゞ悲しさの、涙は胸にあまれども、（ト善吉情ないといふ思入）

從弟同士故朝日山へ話しをしたら派手な稼業、假令貯ないにもせよ人の難儀を見捨てぬ氣性、脇で借りても元手位は、直にも貸してくれようが、親父様の話に聞けば妹の事で金を遣ひ、表は飾つて居るけれど、都合が悪いといふこと故、其處へ言ふのも心なし、殊には所詮一圓や二圓位の元手では、大した物も買はれねば、儲もやはりすくない故、四五日雨に降られなば、忽ち其の

日の米薪となつてしまへば又直に、元手に困り親父様や、忰を育むことが出來ぬ。

〽お年寄つた舅御樣の伏しなやみの抱かゝへ、孝行は嫁の役、（ト善吉屏風の內へ思入あつて、）

さすれば死ぬより外はないが、わしが死んだら親父様は、直に其の場で死なつしやりませう。

〽父御によう似た親父様の、

形見に殘る卯之助が、便りない身に淵川へ身でも投げて死ぬ時は、數代續きし福住の血筋もつひに絕え果てゝ、御先祖様へ濟まぬ仕儀。

〽塵紙袖に押包む淚にそれと知られけり。（ト塵鼻紙を出し、淚を拭ひ、鼻をかみ思入あつて、）

とはいへ、爰に十圓も金がなければ取續かれず、我家藏を讓りたる池田の家は繁昌なし、巨萬の金があるとやら。

〽世の譬にも言ふ通り、盜みする子は憎うなうて、繩掛ける人が恨めしいとは此の事よ。

ト池田に金のあるを羨む思入あつて、

人の富貴を羨むは、貧する者の常なれど、巨萬の金のある家では、ほんの端金の十圓なれど、二十の錢に困る身は力づくにも智慧づくにも、才覺ならぬといふことは、如何なる此の身の因果にて、斯く迄金に憎まれしか、愚癡に迫れば死ぬよりか、外に思案の仕様もない。

〽お救ひなされて下されと、拜み願ふは今參る、如來樣御開山佛に嘘がつかれうかと、どうと伏せば梅川も、わつと聲を上げ、忠兵衞は窓の內手先を出して伏し拜み、身を揉み歎くぞ道理なる。

ト此內善吉宜しく思入、「忠兵衞は窓の內」といふ件甚兵衞、卯之助屛風より半身出し、愁ひの思入あつて、文句の切にて前へ出て、

甚兵　これ善吉、樣子は屛風の小蔭にて、寐た裝をして殘らず聞いた。

善吉　すりや親父樣には、一部始終を。

甚兵　かゝる難儀を掛けるのも、役に立たざる此の己や。

卯之　足手纏のわたくしが、

甚兵　生きて居る故苦勞をさせれば、少しは樂になるやうに、孫を殺して己が死ぬ。

ト甚兵衞卯之助を捉へ、出刃庖刀で殺さうとする、善吉留めて、

善吉　是はしたり親父樣、早まつたことなされますな。

甚兵　いや〳〵留めるな、放してくれ、死ぬる覺悟で庖刀借り、そちが今方湯へ行つた後で孫にも言ひ聞せ、

卯之　死ぬのを待つて居りまする。

善吉　えゝ、そち迄そんなことを言つて、己に苦勞をまさせるか。(トきつと言ふ。)

〽憎いやつとは思へども、可愛うござると泣沈み、分けたる血筋ぞ哀れなる。

ト甚兵衞死なうとする、善吉庖刀を捉へ、引張の見得にて、知らせなしに道具廻る。

(墓所の場)――本舞臺元の墓原の道具、爰に半七へお梅縋り、泣き居る見得にて道具留る。

半七　夜は墓場へ來るものなく、案じることはなけれども、

お梅　ひよつとお寺の男衆が、

半七　爰へ來たらば見咎めん。

お梅　ほんにわたしは此のなりゆゑ。

〽大阪を立退いて、わたしの姿が目に立てば、借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日あまりに四十兩遣ひ果して二分殘る、金故大事の忠兵衞さん科人にしたもわたしから、

ト此内半七早く死なうといふ思入にて、傍にある明輿の上にある三布の白布を取り、幸ひといふ思入にて、舞臺へ敷き、樒をとつて地へさす思入にて舞臺へさし、懷から七首を出し、是へ水をかけ、手拭

で拭ふ、お梅は我墓へ茶碗へ水を入れて上げ、樒の葉で水向をなし、手を合せ拜み、半七も共々拜み、

半七　親とはいへど母樣に、名乘り合はずに先立ちます、

お梅　不孝な者ゆゑわたし等が、嘸かし憎うござんせうが。

〽嘸憎からうお腹もたとが、因果づくぢやと諦めて、お許しなされて下さりませ。

ト兩人宜しくあつて、

半七　何時迄言つても名殘は盡きぬ、人の目つまにかゝらぬ内。

お梅　早う殺して下さんせ。（ト半七お梅の胸を取り、）

半七　むゝ、南無阿彌陀佛。

〽たつ梅川を押しとゞめ、

ト半七お梅へ突立てようとする。此の時上手より浦右衞門走り出で、半七を留め、

浦右　死ぬに及ばぬ二人共、急く所ぢやない、まあ〳〵待つた。

半七　いや死なねばならぬ其譯は、最前送りし書置に、

お梅　詳しく書いて上げましたが、あれをば讀んで下さんしたか。

浦右　其の書置を見た故に、二人に犬死さすまいと、行方を方々尋ねたのだ。

半七　合點の行かぬ今の詞。
お梅　二人に犬死させまいとは。
半七　そりやまあ、どういふ、
兩人　譯なるか。（ト此の時母おくら上手へ出て、）
くら　譯はわたしが、言ひませう。
半七　思ひがけない、
お梅　お前は母さん。
くら　元我夫は赤坂で、道具屋渡世をして居た時分、兄が生れて宮詣りに連れて行つた氷川の社、鳥居前で思はずも其の印籠を拾ひし故、全く神のお授けと五つの祝ひに提げさせたが、其後二人の子が出來て、三つに分けて一重づゝ其の身の守へ入置いて持たして置いたばつかりに、此の間違ひが出來たのぢや。
浦右　我弟は四つの折、句引されて行方しれず、死んだとばかり思ひましたが、此の印籠があるからは、池田のお家へ拾はれて人となつたる半七どの、證據は二人が持つて居る其の印籠の一重は、即ちわしが持つて居ます。（ト懷より袱紗包みの一重を出して見せる。）

お梅　其の印籠の末の重、わたしの守にありながら、實の妹でないといふは。

くら　此の半七が句引におうた其の時臨月故、常に替つて産が重く、藁の上にて死んだ故、泣の涙の其の折に、隣の家にも産があつたが、育てかねると聞いたを幸ひ、世間へ知らさず貰ひ受け、我子の積りで育てし故、やはり守へ印籠は入れてあれども隣の娘、同胞にてはあらざるぞ。

浦右　證據は其の折取交せし、年限立ちし養女證文。（ト懐から證文を出し開き見せる。）

くら　其の時死んだ實の娘は、此の過去帳に記しある、水草童女がそぢやわいの。

ト懐から過去帳を出し見せる。

半七　そんならお梅は半七が、實の妹でなかつたか。

浦右　親は隣の伊勢屋惣八、いまだに家は榮えて居ます。

お梅　それではわたし等二人は、

半七　同胞にてはあらざりしか。

兩人　ちえゝ有難い。（ト兩人手を合せて拜む。）

浦右　思へば際どい土俵際、二人が命を取留めたは、

半七　最前恨みし神佛の、

お梅　是も偏に御利益故。

浦右　いや、あぶない角力であつたよな。

〽子故の闇の目無鳥、長き親子の別れには、安方ならで安からぬ心残して、

ト半七お梅立上り、皆々引張り宜しく、三重にて此道具廻る。

（善吉宅の場）═本舞臺元の世話場、善吉甚兵衛を留めて居る、卯之助側に氣を揉み居る、此の見得誂へ早めたる合方にて道具留る。

善吉　そんならあなたはどうあつても、命を捨てるとおつしやりますか。

甚兵　所詮生きて居た所が、金がなければ一生涯、人らしき身にならねば。

卯之　わたしも共に祖父さんと。

甚兵　死ぬ覺悟をばしたからは、どうぞ留めずに置いてくれ。

善吉　これほどまでにわたくしが、金は世界の湧物故、時節をお待ち下されと事譯言うてお留め申すになぜ留まつては下さりませぬ。

ト早き合方ばた〲にて、下手より忠八「池田」といふ弓張提灯を持ち、後より手代二人白木の箱を細引で結へ、棒を通し、差荷ひに擔ぎ出來り、門口より、

忠八　善吉樣、お家でござりましたか。

善吉　や、お前は池田の番頭どの、あわたゞしくござつたは、何事でござりますな。

　　ト庖刀を隱す、忠八內へはひり、

忠八　今日藏の地形をなさんと、稻荷の宮のあつた所を、四五尺ばかり掘りましたら、斯樣な箱が出ましたが、主人が他行に歸る迄、其の儘にして置きましたが、只今歸りましたゆゑ、箱を開いて見ましたら、中にあつたは大判で、三千兩ござりました。

甚兵　すりや舊宅の乾にあつた。

善吉　稻荷の社のあつた所より、

忠八　出ました箱はお家のと、改め見れば蓋の裏に「金三千兩福住子孫へ讓る、三代目福住甚兵衞」と、かやうに記してござりました。（ト箱の蓋の裏を見せる。）

甚兵　すりや、三代目が此金を。

善吉　土中へ埋め置いたるか。

忠八　蓋が證據でござりますから、是をお返し申しまする。（ト兩人の前へ出す。）

甚兵　え、すりや、三千兩の此の金を。

善吉　わたくし共へ下さりますとか。
忠八　慶長金故當今の、金に直さば何萬圓、是を資本になされたら、元のお見世になりませう。
ト善吉文庫より二幕目の繪圖を出し、
善吉　思へば此の程買つて來た、此の繪圖面が又再び、世に出る時節になりました。
甚兵　こりやまあ、夢ではないかいの。
ト甚兵衛悦ぶ。此の時上手へ浦右衛門、半七、お梅、おくら出て、
浦右　樣子は聞いた、善吉殿。
半七　思ひがけない金を得て、
お梅　嘸お嬉しう、
四人　ござりませう。
善吉　おゝ、悦んで下さりませ。
忠八　まだ悦びは大旦那が、池田の家を二軒になし、半七樣にお梅樣、又わたくしとお孃樣へ下さりますと仰しやりました。
善吉　ても結構なお捌きだ。

浦右　何から何迄。

皆々　目出度い〳〵。（ト皆々よろしく。頭取出て、）

頭取　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

孝子善吉（終り）

黄門記童幼講釋

東都地名温古安宅丸來由

名に大川に小夜更けて伊豆へ行かうと黒崎が深き企みも石見守が供先切りし河童の吉藏夏目が詮議に先非を悔い天窓の皿も砕けては善に還つて悪事の白狀天下の爲に一命を捨つる分家の暇乞稲葉の露に袖濡らす奥方靜江へ餘所ながら惜しむ名殘も醉醒の水になさゞる家老の忠節あはれを茲に三筋町小魚賣の久五郎が犬を殺して入牢なし杖と頼みし子にわかれ玄蹟は氣をもみ療治花に嵐と李右衛門も散るを待間の櫻風呂湯女の小富はお園が勸に憂を知らざる兼ごとも言に言はれぬ得齋が天晴なるかな薄茶の毒味悪鬼をはらふ皇帝の年賀の能に逆臣の底意をてらす鏡の間に奸士藤井をなさけのお手討祝言謡ふ式日の登城に下馬の大喧嘩紺看板のうらおもてに大老筑後が退出を松の廊下の刃傷に大樹をいさむる老侯は其名も光る國のいしずゑ

昔時雨音聞

「黄門記」は明治十年十二月、作者六十二歳の折、新富座に於て書卸された。九世團十郎を中心とし、五世菊五郎、先代左團次の所謂團菊左に配するに半四郎、仲藏、中村宗十郎等の優秀なる役者によつて上場せられた御家物の先驅をなすものは、蓋し此の作であり、且つその代表作の一つでもある。新富座の座主先代守田勘彌が困厄に逢つてゐた時で、勘彌は早稻田の松本順氏邸に身を潜めつゝ作者と畫策することを怠らず、此の作の完成した際には人目を憚つて、向島なる長命寺の奥座敷に於て內讀をなし突如堂々と開場して世人を吃驚せしめたといはれてゐる。大好評を以て迎へられた狂言で、次興行までその一部分を演續した位である。また後年歌舞伎座の開場に當つて、金主千葉氏の推奬によつて櫻癡居士をして上演せしむるの餘儀なきに立到らしめたのも此の作であつた。團十郎の水戸黄門、殊に能舞臺鏡の間に於ける黄門公、菊五郎の河童の吉藏、仲藏の按摩玄碩等は特に評判であつたといふ。（詳細は「續々歌舞伎年代記」及び「河竹默阿彌」詳傳の參照を乞ふ。）

書卸し當時の役割は市川團十郎（黄門光圀卿、稻波美濃守、水戸の重藏）、尾上菊五郎（稻波石見守、藤井紋太夫、河童の吉藏、小稻波の音藏）、市川左團次（織田筑後守、魚賣久五郎、織田の左九郎）、岩井半四郎（石見守奥方靜江、玄碩娘小富）、中村宗十郎（夏目主膳、大稻波の惣助）、中村仲藏（藤井丈左衛門、按摩玄碩、大久保の秀藏）、中村鶴藏（朝倉三右衛門、家主李右衛門）、市川子團次（同朋多賀得齋、供頭益田金吾、進藤備前守）、市川團右衛門（黑崎伴右衛門）、大谷門藏（飴賣かんから猴、山の邊主水）、中村鶩次郎（烏の勘六、野口九一郎）、市川國五郎（田圃の五郎七、中間ぐづ八）、坂東三太郎（川瀨九郎次）、岩井しげ松（櫻風呂のお咲）、尾上尾登五郎（非人おざ市、見世物師やりの市）、中村鳩藏（見世物師がつちの三、岡本左近）、澤村淸十郎（櫻風呂のお箏）、尾上梅五郎（下馬商人喜介）等。

券頭の口畫にしたのは國周筆水戸街道の見立繪で、挿繪にしたのは九世團十郞の舞臺寫眞で、鏡の間に於ける黄門公である。

大正十四年七月

校訂者

黄門記童幼講釋（黄門記――七幕）

序幕

神田明神境内の場
御船藏向川岸の場

〔役名――柴田軍兵衛、星坂九郎次、竪井郷藏、織田の中間ぐづ八、同づぶ六、稲波の中間茂九助、職人半間の兼、風呂屋藤助、髮結七藏、比丘尼宿勘七、夜鷹宿九助。夜鷹鼻くたお八重、益田の娘撫子、同母おみさ、茶見世の娘お梅等。〕

（神田明神境内の場）――本舞臺眞中に石坂、上の方屋根附の茶見世千代田といふ掛行燈、正面障子立切り、見世に銅壺附の竈茶釜を載せ、水瓶茶道具一式よろしく並べ、舞臺へ掛床几二脚並べ、下の方一面に石垣大樹の松、總て神田明神境内の體。爰に藤助・七藏、勘七、九助何れも羽織着流し町人のこしらへにて、床几へ腰を掛け煙草を呑み居る、お梅茶屋女のこしらへにて盆へ茶碗を載せ茶を出し居る、此の見得大拍子にて幕明く、

お梅　はい、どなた樣もお湯をお上りなされませ。

藤助　いやア、これは香煎と思ひの外。櫻湯とは珍らしいな。

七藏　櫻は花の王といふが、鹽に漬けても好い匂ひだ。

勘七　今日はまだ酒を呑まぬが、酔醒などには、このことだね。
九助　いや、櫻といへば丹後前の櫻風呂は、大そう流行るね。
藤助　櫻風呂の流行るのは、第一家の普請が好く。
七藏　世辭がよいのに手當がよく、取りわけ湯女がみんな好く。
勘七　中にも小富といふ湯女は、器量が好いのに程がよく。
九助　何から何までいゝもの盡し、お客の多いは尤もだ。
お梅　その小富さんといふ湯女は、よく三日に明神さまへお詣りに參りますが、女でさへも私などは惚惚いたしますから、小富々々と皆さんがおつしやる筈でござります、水生業に似合ひませずいたつて堅い心ゆゑ、色が出來たといふ噂を、まだ承りませぬわいな。
藤助　あの小富といふ湯女には、小石川の御家中で藤井紋太夫といふお方が、大層惚れてござるさうな。
七藏　よくお前知つて居なさる、其の紋太夫さまには先達て、織田さまの公用人、
勘七　當時お屋敷の羽振のよい、黑崎伴右衞門樣と御一緒で、お目にかゝつたことがある。
九助　その小富といふのは、軍兵衞さんの所へ商ひに來る、魚賣の妹だといふことだ。
お梅　おつしやる通り小富さんは、三筋町の魚賣久五郎さんの妹になつて居りますが、實は伯母の娘

ゆゑ從兄妹同士でござります。

藤助　どうして委しく知つて居なさる。

お梅　はい、わたしは近い頃まで三筋町に居りましたから、よく存じてをりますわいな。

藤助　はて、三筋町に居なすつたとか、それでは知つて居る筈だ。

七藏　それはさうとして、軍兵衛さんも、もう來なさりさうなものだ。

勘七　かたがた爰で待合す約束なれば、違ひはないが。

九助　大方織田のお役人衆と、一緒に爰へござるのだらう。

藤助　お役人衆と一緒では、何時ござるか知れないから、斯うしてゐるうち明神さまへ、お詣り申して來ようではないか。

七藏　おゝ、それが好いよい、よい額が上つたといふから、額堂へ行つて見て來ませう。

勘七　もし姐さん、今爰へわたし等を尋ねて來た人があつたら、

九助　お詣りに行つたと言つて下さい。

お梅　はいはい畏まりました、左樣申しますでござります。

藤助　それぢやあ皆さん、出掛けませうか。

七藏　御一緒に行きませう。（ト四人立掛る。）

お梅　御ゆるりと行つていらつしやいまし。

　　ト大拍子になり四人石段を上り奥へはひる。お梅茶碗を片付け内へはひろ。右の鳴物にて花道より竪井郷藏羽織袴大小、柴田軍兵衛羽織着流し一本ざしにて連立ち出來り、花道にて、

郷藏　こりや軍兵衛、その方から口入の、願ひ事のある町人共は、何れへ參つて待つて居るのぢや。

軍兵　千代田と申す茶見世へ參つて、あなた方のお出でをばお待ち申して居ります

郷藏　それでは千代田へ參つて居るとか。

軍兵　お重役の黑崎樣は、今日はおいでがござりませぬか。

郷藏　伴右衛門殿はお上の御用で、今日は他出が成り兼ぬるゆゑ、身共一人で參つた。

軍兵　へえ左樣でござりましたか、何にいたせ向うへ參つて。

郷藏　おゝ、ゆつくり願ひを聞いてやらう。（ト大拍子にて兩人舞臺へ來ろ。）

お梅　これは竪井さま、よくいらつしやいました。

郷藏　此間は夜を更し、大きにそちの世話になつた。

お梅　どういたしまして、夜更し所かまだ九ツでござりました、そんな御遠慮をなされませずと、どう

ざいらしつて下さりませ。外のお客さまと違ひまして、御大老様のあなた方ゆゑ、世間へ見得に
なりますわいな。

郷藏　その様なうまいことを言つて、蔭で鹽花をふらうと思つて。

お梅　何でそんなことをいたしませうかいな。

軍兵　ときにお梅さん、わたしが尋ねてお前の所へ、四五人連で來ませなんだか。

お梅　今しがたおいでなされまして、お待ちなされてゞございましたが、おいでのない内明神さまへお
詣り申して來るとおつしやつて、おいでなされてゞござります。

軍兵　それではお詣りに行きましたか。

お梅　先づお茶をお上りなさりませ。（ト兩人へ茶を出す。郷藏茶を呑みながら、）

郷藏　いやなに軍兵衞、久しい馴染の貴樣ゆゑ願ひの筋を聞いてやるが、實に黒崎氏も身共も頼まれご
とでほつとする、爰へ芝居をこしらへたいとか、彼處へ遊女町を取立てたいとか、種々雜多なこ
とを頼みに參り、さて〱五月蠅ことではある。

軍兵　そのお五月蠅のも存じながら、願ひ事のお取次に度々お宅へ上りますも、あなた様と御懇意を人
が知つて居りますゆゑ、つい頼まれては上りまする。

鄕藏　いや貴樣などは舊來の馴染ゆゑに取次ぐが、身共と違つて重役の黒崎氏は取家ゆゑ、贈り物の高下によれば、其の邊は承知であらうな。

軍兵　それは仰せがござりませずとも、ずつと承知でござります、それについても皆の衆が早く來てくれゝばよいが。

お梅　ちよつとお迎ひに、行つて參りませうか。

軍兵　おゝ、御苦勞ながら行つて下さい。

お梅　畏りましたわいな。（ト お梅石段を上り奥へはひる。）

鄕藏　いや、今も言ふ貴樣とは古い馴染の身共ゆゑ、決して禮には及ばぬが、黒崎氏は何事も直に御前へ申し上ぐれば早く禮をするがよい。一兩日のその內に先づお定りの鯛が一折に、御酒代として何程か、目錄を附けて持つて行きやれ。

軍兵　へい／＼畏りましてござりまする。私が願ひ立の富が御免になりますれば、月々儲けの其の內から、二割はお禮に差上げますから、どうかお執成しを願ひまする。

鄕藏　身共は承知いたして居るが、公用人の黒崎氏がうんと言はねば出來兼る、今も申した使ひ物を早く持つて行つてくりやれ。

軍兵　畏りましてござりまする、三筋町に久五郎といふ好い魚屋がござりますから、早速それへ申し附け、持つて上りますでござりまするが、御酒代はどの位上げたものでござりませう。
鄕藏　それは幾らといふ定りはないが、成るたけ力を盡すがよい、多い方はどの位多くつても大事ない。
軍兵　へい〳〵、畏りましてござりまする。
鄕藏　黑崎氏は別段だが、身共に禮は及ばぬぞ。
軍兵　へい〳〵畏りましてござりまする。
鄕藏　然しそこらは其の方も、如在ない男ゆゑ、心得て居るだらうな。
軍兵　へい〳〵、畏りましてござります。
鄕藏　禮は品よりなまの方が、いやさ、生魚が何よりだぞ。
軍兵　へい〳〵〳〵、畏りましてござりまする。（ト大拍子にて石段よりお梅先きに以前の四人出來り）
お梅　はい、皆樣をお連れ申しましてござりまする。
軍兵　おゝ、御苦勞々々。
お梅　御用がござりますならば、お呼びなすつて下さりませ。（ト茶見世の內へはひろ。）
藤助　軍兵衞さま、さつきからこれへ參り、

四人　お待ち申して居りました。

軍兵　それは嘸お待兼でありましたらう。早速ながら爰においでなさるのは、御大老の織田様の御家中竪井郷藏様とおつしやるお方だ。

藤助　これは初めましてお目通りをいたしまするが、軍兵衞殿をもちましてかね〴〵お願ひ申しまする、風呂屋藤助にござりまする。

七藏　次に居りまする私は、一錢職をいたしまする髪結の七藏にござりまする。

勘七　又私は京橋で、比丘尼宿をいたしまする、勘七と申すもの。

九助　私事は、本所で夜鷹宿の九助と申す、妓夫上りでござりまする。

軍兵　何分共に、御贔屓を。

皆々　お願ひ申し上げまする。（ト皆々手を突き辭儀をする。）

郷藏　かね〴〵是れなる軍兵衞より、申し込んだあらましは、身共も承知いたし居るが、猶もこれにて直々當人共より承らん。

軍兵　一々それにて願ひの筋を、あなたへ申し上げたがよい。

藤助　へい〳〵、先づ私の願ひと申しまするは、當時風呂屋が流行いたし、櫻風呂の紅葉風呂のと毎日

のやうに殖えますので、實は共潰れでございますから、此の江戸中に何軒と風呂屋の數を取極めて、その餘は新規に出來ぬやういたしたうございまする。

七藏　今風呂屋が申します通り、髪結床も同じことで、一雨々々數が殖え軒並びで困りますから、どうかこれも風呂屋同様株にいたして何軒と、取極めたうございまする。

勘七　二人の衆と違ひまして甚だ恐入りますが、比丘尼宿と申しまするは隱し賣女同樣な生業をいたしまするゆゑ、兎角ぐわいいいえんや中間の錢貰ひに困りますゆゑ、吉原同樣御免の場所にいたしたうございまする。

九助　私事も同じお願ひ、所々へ毎晩出ましても僅な勤めの二十四文、しがない錢を半分は錢貰ひに取られますから、どうかこれも天下晴れ、御免の夜鷹になりますやう。

藤助　一同お願ひ、

四人　申し上げまする。

鄕藏　願ひの趣き承知いたした、然し市中は何事も町奉行の掛りゆゑ、表向き書面を以て、その手續きへ願ひ出ろ、この方からは許すやう、奉行へ申し通じてやらう。

藤助　それは有難うございまする。

七藏　何分成就いたしますやう。

軍兵　いや、それは氣遣ひさつしやるな、竪井さまがあゝおつしやれば最早出來たも同然だ、假令市中の掛りでも御大老から聲が掛れば、どんな事でも町奉行で聞き濟まねばならぬのだ。

藤助　實はお目に掛るまで、何と仰せがあらうかと心配いたして居りましたが、今の仰せを承はり、

七藏　一同安心、

四人　いたしました。（ト藤助懷より水引を掛けし金包を出し、）

藤助　もし軍兵衞さま、これは四人がお土產のしるしばかりにお目に掛けます。

七藏　何れ願ひが叶ひました。

勘七　その時こそは、しつかりと。

九助　あなたへお禮をいたします。

藤助　どうぞよろしく、

四人　お取次を。

軍兵　承知しました〳〵。只今お聞きなされます通り、あなた樣へ此の者共が、今日のお土產のしるしばかりに差上げたいと申します。何卒お納め下さりませ。（ト鄕藏の前へ出す。）

郷藏　そんな心配はよせばよいに、然し折角の心配を無にするも本意でなければ、今日は受納いたすぞ。

ト戴いて懐へ入れる。

藤助　お納めなされて下さりますれば、まことに有難う、

四人　存じまする。

軍兵　まだ此の外に頼まれたお願ひ筋がござりますれば、見晴しへ參つて一獻差上げ、ゆるりと申し上げませう。

郷藏　身共も左樣存じたところ、早く參つて一杯やらう。

軍兵　お前方も旦那のお供をして、一緒に行くがよい。

四人　それは有難うござります。

郷藏　然し軍兵衞、天窓がふえては。

軍兵　そこは香込んで居りますから、其の御心配には及びませぬ。

郷藏　それで身共も安心いたした。

軍兵　左樣なれば、竪井樣。

郷藏　皆も一緒に。

藤助　お供いたすで、

四人　ござりまする。（ト お梅出來り、）

お梅　もうお立ちでござりまするか。

軍兵　茶代は爰へ置きましたよ。

お梅　はい、有難うござりまする。

ト大拍子になり、鄕藏先きに、軍兵衞四人附いて上手へはひる。お梅は內へはひる。花道より撫子文金島田振袖、小姓裝にて出來る、跡より杢助紺看板一本ざし、中間裝にて風呂敷包みを持ち出來り、花道にて、

撫子　これ杢助、向うが神田の明神さまかいの。

杢助　はい左樣にござりまする、向うがお宮でござりますから、お詣りをなされましたら、よい見晴しでござりますゆゑ、茶見世へお休みなされまして、お袋樣のお出でなさるをお待ちなさるがよろしうござります。

撫子　ほんに母樣は、明神下の澤の井へお寄りなされましたが、まだお見えなされぬわいの。

杢助　今においでなされませうから、先づ御參詣なされませ。

ト右の鳴物にて舞臺へ來る、此の時上手よりづぶ六、ぐづ入紺看板一本ざし、中間裝一升德利を繩にて提げ、酒に醉つたる思入にて出來る。撫子これを見て氣味惡き思入にて避けようとするを、態とその方へ寄つて來て、トヾ行當り、

づぶ　これ、何でおら達に突き當るのだ、見りやァ盲目でもねえやうだが。

ぐづ　この廣い往來中で、突き當るといふがあるものか。

撫子　これは粗相をいたしました、お許しなされて下さりませいな。

づぶ　いや〱、許すことはならねえ〱。

杢助　これはしたり撫子さま、突き當つたは向うから、此方で粗相をしましたとあやまる譯はござりませぬ、向うで粗相をしましたと、あやまらねばならぬのだ。

づぶ　なに、こつちであやまるにやあたらねえのだ、途方もねえことを吐かしやあがる。此の娘が男に見惚れ、うつかりして突き當つたのだ。

ぐづ　それを此方で粗相をしたと、あやまる奴があるものか。

杢助　はて突き當つたはそつちから、あやまるのは當りまへだ。

づぶ　まだそんなことを吐かしやあがるか、穴ツ端へ腰を掛けてる死損ねえの親仁だから、相手にする

もみつともねえ。

ぐづ　そんな言ひ掛けを仕やあがりやあ、料簡ならねえぞ。どうするか、うぬ、見やあがれ。

ト兩人立ち掛るを撫子留めて、

撫子　供の者の申し過ぎも、元の起りは私ゆゑ、粗相をお詫び申しますから、どうぞお許し下さりませ。

づぶ　お前のやうに言ひなさりやあ出合頭のことだから、粗相の詫をしなさりやあ、料簡しねえと言やあしねえ。

ぐづ　それを此の爺いのやうに、突き當りもしねえものを、突き當つたと言はれちやあ、癪に障つて料簡ならねえ。

杢助　まだそんなことをいふか、突き當つたから突き當つたといふのだ。

撫子　あゝこれ、そなたが口を出しては濟まぬ、何にも言はずに默つて居や。

杢助　それだと申して。

撫子　はてまあ、默つて居やいなう。

杢助　へえゝ。

撫子　定めてお腹も立ちませうが、年寄のことゆゑに、どうぞ許して下さりませいな。（ト二人に詫びる。）

づぶ　此の爺いが詫をするのなりやア、どんな事でも料簡しねえが、御殿風のぼつとり者、姉さん、お前の詫だから、

ぐづ　何にも言はず、料簡します。

撫子　そんなら許して下さりますか。

づぶ　おゝ、許さねえでどうするものだ。

撫子　それは有難うござりますわいな。

づぶ　その代りおら達が、姉さん、お前へ頼みがあるが、いゝ、うんと言つてくれるだらうの。

撫子　そりやどんなことでござりますか。

杢助　あゝもし撫子さま、お前さまがあの衆に、頼まれることはござりませぬ。

ぐづ　えゝ、また口を出しやあがるか。（ト杢助を後の方へ突きやる。）

撫子　さうして私へ、頼みとは。

づぶ　いや、外でもねえが此の通り、一升樽は提げては居るが、野郎の酌ぢやあ旨くねえ、どこぞ其處らの水茶屋へはひつて呑まうと思つたが、丁度幸ひ此の酒の、酌をお前にして貰ひてえのだ。

ぐづ　そつちの頼みを聞いたからは、又おら達の頼みをば、お前も聞いてくれるだらう。

ト撫子の手を取るを振拂ひ、

撫子　何のことかと思ひましたら、其の樣な事は、私には出來ませぬわいな。

づぶ　なに、出來ねえことがあるものか、何の造作もないことだ。

ぐづ　さあ、おら達と一緒に來ねえ。（ト撫子の手を取り連れて行かうとする故、杢助これを留めて、）

杢助　あゝ、そんなことはならぬ〳〵、おれがお供をして來た女中衆、わい等の手籠めにさすものか。

づぶ　えゝ又この爺いめ出しやばりやあがるか、斯う見たところが小大名か交代旗本の家來だらう、同じ紺看板は着て居ても、手前達に籠められるやうな、そんなしみつたれな者ぢやあねえ、當時殿中で飛鳥の落ちる、御大老の中間だ。

ぐづ　四の五の言やあ二人でこれから屋敷へそびいて行つて、何處の家來か知らねえが、手のこつぽふを擂らしてやるぞ。

杢助　御大老を笠に着て、そんなことをして濟まうと思ふか。

づぶ　濟むも濟まぬも入るものか、斯う言ひ掛つちやあ二人とも、屋敷へそびいて行かにやあならねえ。

ぐづ　さあ、きり〳〵とうしやあがれ。

撫子　どうぞ料簡して下さりませいな。

ト撫子詫びる、づぶ六ぐづ八捨ぜりふにて引ッ立て〻行かうとするを杢助支へる、早き大拍子になり、
花道より星坂九郎次袴大小にて出來り、花道にて此の體を見て、

九郎　見れば向うに中間共が、手籠めになすは同家中益田金吾が妹撫子、難儀の樣子見捨て難し。

ト早き大拍子にてつか〲と舞臺へ來り、此の中へはひりづぶ六ぐづ八を突退け、撫子を圍ふ。

撫子　や、こりや思ひがけない。

杢助　九郎次樣。

撫子　よい所へ來て下さりましたなあ。

ト撫子嬉しき思入。づぶ六ぐづ八は惡い奴が來たといふ思入にて後へ下る。

九郎　仔細は何か存ぜぬが、難儀の樣子を見受けしゆゑ、これへ支へに參つたが、いつたいこれはどう
したことぢや。

杢助　へい、それなる二人の中間が一杯機嫌でひよろ〲と、おのが方から突當り、金吾樣のお妹御が
突當つたと言ひ掛り、屋敷へ連れて行くと申し、無法なことをいたします。

九郎　一を聞いて十を察す、最早委しく申さずとも、此の場の樣子は相分つた。こりや女子を相手に亂
暴いたす、其の方共は何れの家來だ。

づぶ　おゝ聞き度くば言つて聞せてやらうが、二合半でも武士の端、主人の名をば聞くならば武士の法を以て聞きねえ、うぬが主人の名からして先へ名乘つたことならば、こつちも言つて聞かせよう。

ぐづ　二本さして居るからは、こなたも武士に違ひねえが、いつたいどこの藩中だ。

杢助　おゝ聞いたらびつくりするであらう、當時若年寄の筆頭、稻波石見守樣の御家來だぞ。

づぶ　何でびつくりするものだ、高の知れた若年寄石見守の藩中か、二合半でもこちと等は天下に一人の大老職、犬になるなら大所の犬になれとの譬の通り、毛並の違ふ左り卷、どこへ行つてもこれまでに咬れた事のねえといふは、其の飼主がいゝからだ。

ぐづ　織田の家來のおら達に疵でも附けりやあこなたばかりか、石見守も身分だぞ、お觸れ嚴しい犬同樣、手出しをすりやあ身上仕舞だ。

づぶ　小ッ旗本の中間と思つて留めに出たらうが、御大老の名を聞いちやあその身が大事で手出しはなるめえ。

ぐづ　それとも刀の手前ゆゑ、身上仕舞を合點で、おい等二人の相手になるか。

づぶ　但しは大きに出損なつたと、兩手を突いてあやまるか。

ぐづ　身上仕舞をしてしまふか。

づぶ　よもや手出しは、
兩人　なるめえな。（ト兩方から九郎次の胸倉を取る。九郎次捻上げ突ッ放す。）
づぶ　うぬ、手向ひをなすからは
兩人　たゝんでしまふぞ。
ト大拍子になり、づぶ六ぐづ八木刀を抜き打つて掛る、九郎次身を躱しぐづ八の木刀を引つたくり、ぐづ八を打ち据ゑ、づぶ六と立廻り、トゞ木刀を打落し、づぶ六取らうとする所を打ち据ゑる、ぐづ八起上らうとするを、左右へ打ち据ゑる。
づぶ　あいたゝゝゝ、よくおら達を、
兩人　打ちやあがつたな。
九郎　假令大老の家來にせよ、狼藉なすを其の儘に武士たる者が捨て置かれうか、打つたがどうした、何といいたした。
づぶ　打たれたからは、うぬも此の場で。（トづぶ六立ちかゝるを、ぐづ八留めて、）
ぐづ　あゝこれ〳〵料簡しろ〳〵、手前もおれも醉つてゐるから、素面にやあ叶はねえ、この上打たれた其の時は、猶々恥だ、料簡しろ。

づぶ　いや料簡ならねえ、何でも彼奴を打たにやあならねえ。
ぐづ　これさ、打てりやあいゝが、打たれるから止せといつたらよさねえか。
づぶ　いやだ〳〵、料簡ならねえ。
ぐづ　えゝ、強情いはずと、來いといつたら。
　　　　トぐづ八無理にづぶ六を引立て、捨ぜりふ、早き大拍子にて下手へはひろ。
九郎　御大老の權威をふるひ、中間小者にいたるまで、かゝる所業をいたすのも、上の政事の屆かぬゆゑ、はてさて困つたことぢやなあ。（トお梅茶を汲來り、）
お梅　旦那さま、よい氣味でござりました、先づお茶をお上りなさりませ。
撫子　星坂さまのおいでがなくば、どんな憂き目に逢ふことか。
お梅　憎い奴だと思ひましても、わたくしなどには手出しもならず。
李助　撫子樣を彼奴等に連れて行かれた其の時は、お供をして來たわしが越度、腹でも切らねばならぬところ。
九郎　それは近頃見上げたこと、其の方腹を切る所存か。
李助　無事に此の場が濟みましたから、立派に切ると申しましたが、實は死ぬ氣はござりませぬ。

九郎　まだ長生きがしたいかな。
杢助　あゝいたしたいとも〳〵、これでも月に三度づゝ夜鷹を買ひに參ります。
お梅　呆れたお方でござんすなあ。（ト お梅は內へはひる。）
九郎　いや、何は兎もあれ撫子どのは、又も彼等が徒黨なし、これへ參るまいものでもないゆゑ、片時も早く歸られよ。
撫子　はい、氣味が惡うございますれば、早う歸りたうはございまするが、今母さまが參りますれば、待合して參りませうわいな。
九郎　それでは母御が御一緒なるか。
杢助　はい、お袋さまは明神下へ御用があつてお寄りなされ、千代田でお待ち申すお約束でございます。
九郎　さういふことなら爰に居つて、母御のお出でを相待たれよ。
撫子　どうぞそれまで、御迷惑でも、
杢助　爰においで下さりませ。
　　　ト宮神樂になり、花道より、おみさ更けたる家中者のこしらへにて、足早に出來り、花道にて、
みさ　今鳥居前で人のいふには、酒に醉つた中間が娘を捉へて狼藉なすと、聞いたは若しや娘ぢやない

か、あゝ案じられることではある。（ト舞臺へ來り撫子を見て）おゝ娘、爰に居たか。

撫子　母さま、遲うござりましたな。

杢助　まことにお待ち申しました。

みさ　それにおいでなされまするは、星坂さまでござりますか、あなたも御參詣でござりますかいな。

九郎　手前今日非番ゆゑ、當社明神より湯島の方へ、遊山がてらに參つてござる。

撫子　もし母さま、星坂さまのお蔭にて、危い難儀を脫れましたから。

杢助　ようお禮をおつしやつて下さりませ。

みさ　なに、あなたへお禮を申せとは。（ト合方になり）

杢助　今此の所で御大老の織田どのゝ中間がお孃さまに突當り、なぜ突當つたと逆捻ぢに言掛りをいたし居つて、屋敷へ連れて行くと無體なことをいたしますれど、年取つた私ゆゑどういたさうと思つた所へ星坂さまがおいでなされ、其の中間を散々に打ちのめして下すつたので、危い難儀を助かりました。

みさ　その話しを途中で聞き、若し娘ではあるまいかと案じ暮して來ましたが、そんなならやはり娘にて危いところを星坂さまの、お蔭で無事に助かりましたは、明神さまのお引合せ、何とお禮を申さ

うか、何れ宅へ帰りまして悴金吾に委しく話し、お禮を申し上げませう。

九郎　何のお禮に及びませうぞ、他家の者といふではなし、同家中でも取りわけ御懇意の拙者ゆゑ、決してそれには及びませぬぞ。

撫子　あなたがおいでなされねば、どんな憂き目に逢はうも知れず。

杢助　私共もとも〲に、お禮を申さにやなりませぬ。

九郎　それでは却つて迷惑いたす。

みさ　何はともあれ、此の場のお禮に、何處ぞで一寸差上げたい。

九郎　いや、お志しは忝けないが、私用もあれば某は、これにてお別れ申すでござる。

みさ　左樣なればどうあつても。

撫子　星坂さまには。

九郎　先づそれよりは障りのない内。

みさ　明神さまへの參詣も。

杢助　後してになされて、少しも早く。

九郎　然らば拙者はお別れ申す。

ト大拍子になり、九郎次辭儀をなし花道へ行きかける、此の時石坂の上へ郷藏出て、

郷藏　あいやお侍、お待ち下され。

九郎　待てとお呼び留めなされしは、手前がことでござるかな。

郷藏　如何にも貴殿のことでござる、先づ〳〵これへお歸り下さい。

九郎　ムウ。

ト思入、三味線入り大拍子になり、九郎次後へかへり、郷藏も下へおりる。おみさ、撫子、杢助等は茶見世の内へはひる。九郎次思入あつて、

郷藏　如何にもお出逢ひ申さぬが、手前は織田筑後守が家來堅井郷藏と申す者、以後お見知り下されい。見受けますれば、つひにこれまで、お出逢ひ申せしことなき其許。

九郎　すりや織田侯の御藩中堅井氏でござりましたか、拙者事は稻波石見守家來星坂九郎次と申す者。して、お呼び留めなされましたは。

郷藏　いや外の事でもござらぬが、只今これにて手前屋敷の中間どもが、お手前に打たれたとか申す事を承はつてござるゆゑ、お呼び留め申してござる。

九郎　何事なるかと存ぜしに、狼藉せしゆゑ某が據なく打ち据ゑし、中間共のことでござるか。

鄕藏　定めて仔細もござらうが、假令中間小者たりとも犬も朋輩鷹も朋輩、耳に入つては其の儘に同藩の身で聞き捨てられぬ。

九郎　すりや、それゆゑに其許が。

鄕藏　喧嘩を買ひに罷り出ました。（ト九郎次扨はと思入、づぶ六ぐづ八出來り、）

づぶ　よくもさつきはおら達を、いゝえら酷いめに逢はしたな、力づくぢやお負けねえが、悲しいことには劍術柔術、武藝を少しも知らねえから、手もなくうぬに撲られたが。

ぐづ　竪井さまはお屋敷で家中の者へ劍術の指南をなさるゝ武藝の達人、おいらを相手にすると思ふと當が違ふぞ、覺悟しろ。

九郎　扨は貴殿は中間共の、意趣を返しにござられたか。

鄕藏　如何にも中間小者たりとも、他家の者に打擲されては、則ち主人の恥辱ゆゑ、只今此の場で仕返しなし、打たれた恥辱を雪ぐ所存。

九郎　中間共が打たれしゆゑ仕返しめさると言はるゝは、御尤もなることでござる、拙者に於ても同家中益田氏のこれなる娘が、中間共の手籠めに逢ふを、見るに忍びず中へ立入り止めしかど、聞入れざるのみなるか、拙者に手向ひいたせしゆゑ、刀の手前打ち据ゑしは、これ同家中の誼でござ

る。

ぐづ　同家中の誼などゝいふのは大方其の娘と、ちゝくり合つて居るからだらう、見るから鼻の下が長く、女にのろい面つきだが、少しは腕に覺えがあるので、おら達二人は打たれたが、一刀流の達人たる竪井樣にはかなふまい。

ぐづ　大小差して往來中で打ちのめされるは見ツともねえ、打たれぬ内に手を突いてあやまる方が割だらう、手出しをすりやあ體は微塵、命を捨てにやあならねえぞ。（ト李助腹の立つ思入にて、）

李助　えゝやかましい、默らぬか、何で星坂さまが負けようぞ、おれなら知らぬことなれど。

みさ　あゝこれ、そなたの差し出る所ではない、默つて控へて居やいの。

鄕藏　さあ星坂氏、互ひに主家の恥なれば、此の場に於て立合ひめされ。

九郎　身共は事を好まねど、達てとあれば是非に及ばぬ、貴殿のお相手いたすであらう。

鄕藏　いや相手になるとは神妙だが、今立合へば立所に、こなたの命を失ふが、言ひ置くことでもあるならば、今の内に言つて置きやれ。

九郎　御親切は忝ないが、言ひ置くことはかつてござらぬ。

鄕藏　見掛けに似合はぬよい覺悟、用意がよくば立合ひめされ。

九郎　いざ、お相手仕らん。

　　ト鄕藏下緒を取つて襷にかけ立ちかゝる、九郎次は其の儘前に出る、これを見て、

みさ　あいや御兩所さま、暫くお待ち下さりませ。

鄕藏　なに、待てとは。（ト合方になり、）

みさ　今この場でのお果し合も、元の起りは娘ゆゑ、見るに忍びずわたくしがお止め申しまするのは、勝負は時の機ゆゑ、どちらかお怪我がござりませうと、存じてお止め申しまする。

鄕藏　そりや言はずとも知れたこと、命を取ると取らるゝは、互ひの腕に覺えのあること、いらぬ止めだていたさるゝな。

みさ　さあ何れどちらかお命を、お捨てなさらにやなりませぬが、御主の爲に御馬前でお捨てなさるが武士の道、申さば私事からして忠義の爲にお捨てなされる其のお命を今爰で、徒にお捨てなされましては、今日家族の者までも御扶助下さる殿樣へ、濟みますまいかと存じまする。どうぞ此の場はこの儘に忠義の道を思召し、無事にお納め下さりませ。

九郎　如何にもこなたの言はるゝ如く、主君の爲に捨つる命と存じながら私事に、捨るは本意にあらざれど、引くに引かれぬ此の場の仕儀、されども、相手の堅井氏が御料簡をなさるゝなら、元よ

り事を好まぬ拙者、お扱ひに隨ひませう。
みさ　それは有難うござりまする、（ト鄕藏に向ひ、）今お聞きなさる、通り、星坂さまは御承知なるが、どうぞあなたも此の場をば、無事にお濟まし下さりませ。
鄕藏　いゝや、無事に身共は濟まされぬ、私事とはいふもの、主人の恥辱になることゆゑ、いはゞ御馬前の働きと同じことなる此の場の爭論、主人の恥辱に料簡ならぬ。
づぶ　留手のあるを幸ひに、元より事を好まぬなど、相手が弱い音を出すは、所詮負けると思ふゆゑ。
ぐづ　こつちはそれと事替り、今立合へば一刀の下に命を取るは必定、なんで料簡がなるものだ。
鄕藏　この鄕藏はお手前の、その挨拶は聞屆けぬ。
みさ　すりやどうあつても、此の場にて。
鄕藏　果し合ひをいたさにや置かぬ。
みさ　はて、是非もないことぢやなあ。
九郞　然らばお相手になりませう。
鄕藏　用意がよくば。
九郞　いざ。

鄉藏　いざ。

兩人　いざ〳〵。

と白囃子になり、兩人拔合せ立廻り、よき見得より三味線入りになりて立廻る、此の内おみさ、撫子、杢助氣を揉む思入、鄉藏危くなるゆゑ、づぶ六ぐづ八は木刀にて打つてかゝり、四人からんで立廻る内、づぶ六峰打ちに打たれる、ぐづ八叶はぬから逃げろと、づぶ六を無理に引張り、下手へ逃げてはひる。鄉藏刀を打落され取らうとするを峰打ちに打ち据ゑる、これにて鄉藏どう〳〵と下に居る。

九郎　社頭に於て血をあやすは、尊き神へ恐れあり、命は御身にお預け申す。

鄉藏　ちえゝ。（トロ惜しき思入にて、體を摩りゐる。）

みさ　おゝ星坂さま、お手柄でござりました。

撫子　どうかとお案じ申しましたが。

杢助　ても、よい氣味でござりましたなあ。

九郎　いや御心配を下されたが、先づ仕合せと恥辱を取らねば、益田氏の御母堂には、娘御つれて片時も早く。

みさ　仰せに任せ娘をつれ、直に屋敷へ歸りませう。

撫子　何れお禮は、兄諸共。

九郎　決してそれには及びませぬぞ。

杢助　さうしてあなたは、これより何れへ。

九郎　安宅丸の儀について主命うけし密用にて、大川端へこれより廻れば、歸宅は多分子の刻過ぎ、何かは明朝御意得ませう。

杢助　左樣なれば、

みさ
撫子　星坂さま。

九郎　心を附けておいでなされい。

みさ　有難うござります。

ト唄になり、おみさ、撫子、杢助附いて花道へはひる。此の内郷藏立たうとして體の痛む思入、九郎次側へ寄り思入あつて、

九郎　時の機で打ちましたが、強く痛みはいたしませぬか。

郷藏　なに、これしきに何ともござらぬ。（ト痛さを怺へ立上る。）

九郎　思はぬ失敬、御免下され。

トせゝら笑ふ、唄になり九郎次思入あつて上手へはひる、郷藏あとを見送り、痛き思入にて、

郷藏　あいたゝゝゝゝ。（トへた〳〵と下に居る。宮神樂になり、以前の軍兵衛出來り）

軍兵　堅井さま、ひどい負けをなされましたな。

郷藏　其の方見物いたしをつたか。

軍兵　茶見世の蔭で見て居りました。

郷藏　これがまことに怪我負けと申すのだ。（ト腰を押へ床几へ掛ける。）

軍兵　仰しやる通り大關でも、時の機で二段目に、負けることがござります。

郷藏　決して身共が恥ではないな。

軍兵　なに、恥なことがござりませう、これが角力であらうなら、きつと大入になりまする。

郷藏　いや怪我負けとはいひながら、餘りひどく打たれたので、身内が痛んで歩かれぬ。

ト軍兵衛介抱しながら。

軍兵　それはお困りなされたものでござります、お歩きなさることが出來ませずば、肩へ掛けて行つて上げませう。

郷藏　其の方が豫ての賴み、富は身共が取持つて必ず願ひを叶へてやるから、駕籠屋のある所まで肩へかけて行つてくりやれ。

軍兵　いや願ひを叶へて下さりますれば、何處までもお連れ申します。

郷藏　然らば軍兵衞、賴むぞよ。

軍兵　さあ、おいでなされませ。（ト郷藏を肩へかけ腰の切れぬ思入）いや、これはなか〳〵重くッて、私の力には及びません、これは困つたことだなあ。

　トやはり宮神樂にて、上手より以前の藤助、七藏、勘七、九助出來り、

藤助　軍兵衞さま、こりや、

四人　どうなされましたのだ。

軍兵　おゝ皆の衆、よい所へ來て下さッた、堅井さまが酩酊なされて。

郷藏　いや〳〵、身共は酩酊はいたさぬぞ。

軍兵　はて、酒にお醉ひなされたから、歩くことがお出來なさらぬのだ、何と左樣でござりませうがな。

　ト郷藏に呑込ませる。

郷藏　なるほど、醉うた〳〵、足も腰もきかぬほどに、大酩酊をいたしたわえ。（ト生醉の思入。）

藤助　かう見たとこでは其の様に、お醉ひなされたやうではござりませぬが。

郷藏　先きの相手が強いので、つい此の様にたゝまれた。

藤助　それではお負け、

四人　なされたのが。

軍兵　おゝそれ〳〵、狐拳をなされたところ、先方が手者でひどく負け、續け打ちに、いやさ續け呑みになされたので、こんなにお弱りなされたのだ。

郷藏　何にいたせ駕籠屋まで、早く連れて行つてくれ。

軍兵　爰が願ひの叶ふところ、總掛りでやつてくれ。

四人　合點でござりまする。（ト四人立掛り郷藏の手を左右より擔ぎ。二人は腰を持添へ）いや、是れは重いわ重いわ。

郷藏　何處へいつても器量のよいので、嫌はれてならぬわえ。

軍兵　所詮たゞでは擔げぬから、長持唄でやつてくれ。

ト藤助雲助唄をうたひ長持を擔ぐやうに、宮神樂にて四人郷藏を擔ぎ花道へはひろ、此の時郷藏以前の金包を落す、軍兵衛は後を見送り、

仁王さまにも負けぬやうな大きな形をして居ながら、見掛けによらぬ弱い人、あれでは頼んだ富の願ひも、思つた目が出ればよいが。(ト舞臺に落ちてある金包を取上げ、)や、これはさつき四人の衆が取次たのむ賄賂に、土產に持つて來た十兩、思ひ掛けなく拾つたは富に當つたやうなもの、此奴は願ひの叶ふ知せか、何にしろ三兩も三筋町の久五郎へ渡してやつて鯛を買ひ、二千疋の御酒代をつけてやつてもまだ殘る、これで願ひが叶はなくなッても損の行く所はない、こりやあおれが一の富、大當りに當つたわえ。然し誰ぞ見はしないか。(ト四邊を見廻し、)おゝ千代田の姐えも見世に居ず、こんな間のいゝことはない。(ト此の時茶見世からお梅出て、)

お梅　何ぞ御用でござりますか。

軍兵　え、そこに居たのか。

お梅　いゝえ、今奥から參りました。

軍兵　それで安堵だ。(ト時の鐘。)

お梅　ほんに、燈火を點けませうか。

軍兵　こいつアとんだ、(ト軍兵衛手を打つを、道具替りの知らせ、)噂話しだ。

ト早き大拍子にてよろしく道具廻る。

(大川端の場)――本舞臺正面御船藏、大川夜の遠見、上の方練塀で見切り、下の方葭簀張りの出茶屋、葭簀を卷き床几を積重ね、よき所に柳の立木、半月をおろし、總て大川端の體、時の鐘波の音にて道具留る。とばた〳〵になり、半間の兼やつし裝三尺帶尻端折り草履にて逃げて出來る、跡より鼻くたお八重夜鷹のこしらへにて茣蓙を抱へ、勘七半纏三尺帶尻端折り草履妓夫のこしらへにて追掛け來て、半間の兼を捉へ、波の音甚句の合方にて、

八重　これ〳〵、お前さんは太え人だ。

兼　往來稀な大川端、外に聞き手がねえからいゝが、何でおれが太えのだ。

八重　あんまり細いこともあるまい、二十四文の勤めの中へ目藥ちやァあるまいし、文錢が二文交つて居ますよ。

勘七　僅か二十四文の所へ文錢を二文交ぜられちやあ、十八文にしかなりやしませぬ。

兼　なに、そんなことをするものか、小さいのは二十一波だ、よく改めて見るがいゝ。

八重　そんなごまかしを言ひなすつても、年中闇黑で取る錢だから、文錢か四文錢か手探りで直知れますよ。

勘七　明るい所へ出られねえ、弱い稼業をする者を、籠めなすつちやあいけませせぬ。

粂　誰が手前達を籠めるものか、二十四文のものを二十四文拂やあ、言分のねえお客さまだ。
八重　二十四文の勤めの所へ、直して五十くんなさりやあ、言分のねえお客さまだが、二十四文敲き放しぢやあ當然のお客だよ。
勘七　そこへ二文ごまかされちやあ、此の子が默つて居られませぬ。僅か六文か八文だ、きれいに拂つて行きなせえな。
粂　さう言はれては仕方がねえ、六文やるから早く手を出せ。
八重　何だ御大層な、六文ばかり。
粂　六文だつて天下の寶だ、青砥左衞門は松明で滑川を搜したわ。
八重　そんな引事を言はねえで、早くおくれよ。（ト、お八重手を出す、半間の銭錢をやる思入にて、）
粂　それ、い、か、一ィ二ゥ三ィ四ゥ五ツ六ツ、（ト掌をひどく打つ。）
八重　えゝ、何をするのだ。
粂　それ、其處へ落ちた早く拾へ。（ト波の音ばたばたにて、上手へ逃げてはひる。）
八重　いや、いけ太え野郎だな、聲ばかりで錢はありやあしねえ。うぬ、待ちやあがれ逃すものか。
ト追かけようとするを、

勘七　あゝこれ、追掛けるには及ばねえ、大方こんなことだらうと思つて、彼奴が腰に挾んで居た手拭をおれが上げて置いた。（ト手拭を見せる。）
八重　ほんにお前は拔目がないね。
勘七　こんな事に拔目があつて、夜鷹の妓夫が出來るものか。（ト時の鐘、月を上げる。）
八重　あの鐘は、何時だね。
勘七　今打つたのは、入江町の四ツだ。
八重　それぢやあ、もうはねようかね。
勘七　例と違つて此の頃は、安宅丸が伊豆へ行かうと夜更けて泣くので氣味を惡がり、四ツから先きは通り人がなく、一時早くしまはにやあならねえ。
八重　それでも今夜は宵ッから、だいぶお客があつたから、明日の鹽噌に困らない。
勘七　どうか後にやあ降りさうだ、ばいいれねえ内に早く歸り、
八重　夜明し酒屋で一升買ひ、
勘七　足洗ひ湯へ飛込んで、
八重　葱鮪で一杯やらうかね。

ト波の音右の合方にて下手へはひる、時の鐘少し凄き合方になり、以前のづぶ六、ぐづ八頬冠りにて出來り、跡を振返り見て直に舞臺へ來り、

づぶ　稻波の家來の星坂にさつきの意趣を返さうと、見え隱れに附けて來たが、丁度もツけの幸ひは、今しがたから空が曇り、一寸先きも見えねえ闇に、先きへ拔いたを知らねえ樣子だ。

ぐづ　降るのはどつとしねえけれど、月のねえのがこつちの附目、何でも爰へ來たならば向う臑を引ツ拂ひ、

づぶ　打つて〳〵打ち殺し、死骸をどんぶりやつてしまやあ、誰がしたか知れやしねえ。

ぐづ　この闇いのが幸ひだが、何にしろあんまり闇え。

づぶ　鼻を摘まれるも知れねえな。（ト上手を見て、）

ぐづ　向うへ來たのは、星坂だぜ。

づぶ　茶見世の蔭へ隱れて居よう。

ト時の鐘合方にて、探り〳〵下手出茶屋の蔭へはひる、上手より以前の半間の兼出でずつと上手にて、

兼　あゝ惡いことはしねえものだ、廿四文の夜鷹をば十八文でごまかしたら、百で買た手拭を何處へか落してしまつた。（ト手拭を搜す思入にて舞臺眞中へ來る。づぶ六木刀を持ち、窺ひ寄つて半間の兼の向

う臑をなぐる、）あいた〻〻〻〻。（トどうと下に居る。）

ぐづ　どうやら聲が違つたやうだ。（ト半間の兼起上り、）

兼　あゝ痛い〱、いやといふ程向う臑を打たれた。夜鷹に意趣を返されたか。（トぐづ八を透して見て、）うぬはさつきの妓夫だな。（ト武者振り附くを、突き廻して又毆る。）あゝ痛い〱、斯う打たれてはそつちより、此方がぎうの音も出ねえ。

ト波の音ばた〱にて上の方へ逃げて行くを、ぐづ八追かけてはひる。時の鐘跳への合方になり、花道より以前の九郎次出來り、花道にて、

九郎　秋の習ひといひながら宵には冴し上弦の月も忽ち雲隠れ、雨持つ東風に行く先きの道の黒白も分らぬ闇がり、此の頃夜更けて大川に伊豆へ行かうと安宅丸が、啼くといふのは怪しき風說、正しく狐狸の仕業ならんと、虛實を試しに參つたが、其の啼聲を聞きたいものだ。

ト此の內下手葭簀の陰より、づぶ六頰冠り琉球の薄緣を身に纏ひ、花道を見込みきつと思入、九郎次は舞臺へ窺ひながら來る、づぶ六前へずつと立ち、九郎次の避ける方へづぶ六來る、九郎次かき退けて行かうとするをづぶ六鐺を取る、九郎次振拂つて兩人きつと見得、時の鐘きびしく打込み、凄き合方へ迷子の鉦太鼓を冠せ、兩人探り合の立廻りよろしくあつて、上手よりぐづ八木刀で打つてかゝる

を九郎次引提へ、
聲をも掛けず狼藉なすは、さてはわい等は物取りだな。
ト ぐづ八振拂ふ、九郎次刀を拔き振上げる、上手にづぶ六下手にぐづ八窺ふ、此の途端下手にて、

○　伊豆へ行かう。（ト言ふを聞いて、）

九郎　あれが正しく、

づぶ
ぐづ　安宅丸。

ト聲をしるべに刀で拂ふ、づぶ六はすつぽり着物を冠る、ぐづ八はびつくりして下に居るを、双方見合つて木の頭、又下手にて、

○　伊豆へ行かう伊豆へ行かう。

ト九郎次刀を構へ、これを聞く思入、づぶ六は顏を出し九郎次をきつと見る、ぐづ八は氣味の惡き思入にて、耳をふさぐ、波の音へ佃を冠せ、よろしく

ひやうし　幕

二幕目

織田邸外犬殺の場
三筋町魚屋内の場

【役名】═魚賣久五郎、同親按摩玄碩、家主李右衛門、柴田軍兵衛、飴賣かんから兼實は山ノ邊主水、金貸烏の勘六、日勧進田圃の五郎七、手先猿猴三次。櫻風呂小富實は玄碩娘お富、合長屋娘お蝶、其他】

(織田屋敷外の場)═本舞臺三間の間後一面の煉塀、此の向う火の見櫓、屋敷長屋の遠見、塀の内より松の立木、裾通り溝の心にて所々に捨石を置く、總て織田屋敷外の體、爰にかんから兼尻を端折り、脚絆草鞋にて紐附の箱を首に掛け、飴賣の裝にて鉦を叩き、熊平、虎藏、淺黄手綱染の襟の看板を着たる中間、下手に三太酒屋の御用聞にて通と徳利を提げ、田舎節にて幕明く、

飴賣　飴は一流太白練り、煙管の折でも火箸の折でも、何でも金ならとツけえべにしよ。

ト鉦を叩く。

熊平　おい〳〵、飴屋々々、この煙管を賣つてやるから、直をよく引取つてくれ。

ト熊平煙管を出す、飴賣かんから兼受取り見て、

飴賣　これは眞鍮の煙管で、おまけに吸口がちぐでござりますから、飴なら取替へて差上げます。

熊平　そいつはいけねえ、直をよくばらした其の錢で、いゝしやもで一杯やる積りだ。

虎藏　飴と取替へられてたまるものか。

飴賣　それでも眞鍮の古煙管でござりますから、飴が關の山でござります。

三太　飴屋さん、そんな古煙管でない、天下通用の錢だ、八文おれにおくれ。

虎藏　惡く洒落る小僧だぜ、おつウ當附たことを言やあがつて、やツぱり手前も見世先でくすねて來た錢だらう。

三太　そんな小僧とは小僧が違ふ、内の錢箱の廻りへ行くと、四文や八文はいつでも落ちてゐる。

熊平　大方それを盗むのだらう。

三太　なあに、毎日拾つて來るのだ。

熊平　それぢやあやつぱり盗むのだ。（ト此の内かんから兼箱の内より飴を出し、三太に渡し、）

飴賣　もし、お前さん方にお聞き申したら定めし分るでござりませうが、今度公儀の安宅丸を御大老のお指圖で毀してしまふといふ噂を、市中で專らいたしまするが、本當のことでござりまするか。

熊平　其の噂に違ひなく、安宅丸の不思議といふのは毎晩夜半になると、伊豆へ行かう〳〵と哀れな聲で船が啼くので、忌はしいことだから取毀してしまふさうだ。

虎藏　それに附いてお屋敷の黒崎伴右衛門さまといふその御用人が毀しのお掛り、常から大の慾張りゆ

る毀しの鳶方大工を始め、道具屋又は下金屋所々から賄賂を取込むが、なか〳〵大きなことださうだ。

飴賣　それでは定めしお前さん方も、うまいことがありませうね。

熊平　所がねえこと夥だしい、どうして〳〵中間などには、百の錢も役得がねえ。

虎藏　それに目の寄る所へ玉とやらで、此の頃殿樣の所へ能の稽古にやつて來る、藤井紋太夫といふ水戸の家來、此奴もやつぱり內心は、取込み人だといふ噂だ。

ト爰へ上手より縫包みの犬出來り、三太の持つたる飴を取つて喰ふ、三太びつくりして、

三太　此の畜生め、飴を取りやあがつたな。（ト德利で打たうとするを虎藏留めて、）

熊平　これ〳〵、其の犬をぶつてたまるものか、此の節嚴しいお觸があるのに、

虎藏　疵でも附けた其の時は、手前の命に拘るぞ。（ト是れにて三太びつくりして控へる。飴屋思入あつて、）

飴賣　成程當公方樣は戌のお年で、大層犬を御寵愛御本丸のお居間には犬が蒲團の上に居ると、世間の話しに聞きましたが、其のせゐか此の頃では何處で雌犬が產れても直町奉行へ訴へるさうだ。

熊平　この犬なども厄介物で嚙合つたといつては屆け、病氣だといつては訴へ、犬よりこちと等が吠え面だ。

虎藏　段々今では烈しくなつて、やれ犬醫者だの犬の賄だのと、犬で新規に抱へられた、醫者が出來たといふことだ。

熊平　その錢儲けのある中で錢にならねえおら達の仲間、飴ん棒でも仕方がねえ、此の煙管と取替へてくんねえ。

飴賣　はい〳〵。（ト兼煙管と取替へ）二十四文ぶりござります。（ト兩人飴を取り）

虎藏　この飴ん棒をしやぶりながら、部屋で香代の緡でも縒らう。

三太　緡が出來たら持つて來ねえ、旦那に直をよく買はしてやるよ。

虎藏　えゝ、旨く言つてゐやあがる。（ト三太、熊平の持つたる飴に心附き）

三太　わん〳〵。（ト犬の眞似をしながら、熊平の飴を取つて下手へ逃げ行く。）

熊平　えゝ此の小僧め、犬の聲色で飴を取りやあがつたな。

三太　こりやあ今の犬の埋草だ。（トやはり右の鳴物にて三太「御用はござい〳〵」へ下手へはひる。）

熊平
虎藏　忌えましい小僧だな。

飴賣　取られた飴はわしが立引きませう。其の替り安宅丸をいよ〳〵毀すといふ時は、商ひに出かけますから、どうぞ取持つて下さいまし。

熊平　そりやあきつと世話をしてやる。（トかんから兼飴を出し、）

飴賣　左樣なら、先の通りでござります。

熊平　そりやあ有難え、又犬に取られぬ内、

虎藏　部屋へ行つてしやぶらう。

飴賣　わしはこれから其の飴だけ、今日は稼ぎ出さにやならねえ。

ト矢張り右の鳴物にて熊平虎藏は上手、かんから兼は下手へ呼びながらはひろ。誂への合方になり、花道より、久五郎魚賣好みのこしらへ尻端折り草鞋にて、鯛の入りし盤臺を擔ぎ出來り、花道に留り、

久五　昨日得意先で賴まれた遣ひ物の鯛を二枚、やつと川岸で買つて來たが、今日は上の祝日のせるか、お納屋が諸方へ出て居るので、廻り道をして隱して來たが、先づ此處まで來れば大丈夫だ。

ト舞臺へ來る、此の時上手より金貸烏の勘六、羽織着流しにて出來り、久五郎を見て、

勘六　お、其處へ來たのは、久五郎どのか。

久五　や、こなたは勘六さん。

勘六　これからおぬしの家へ行く所だ。

久五　あ、折角お納屋を脫れたら。

勘六 どうしたと。
久五 いえなに、後程お内へ上るつもりでござります。
勘六 いや、その後程はもうきかねえ、まあ荷を下しなさい。
久五 それでも、生物を持つてをりますから。
勘六 いや代物が腐らうとも、それに構つたことはねえ、まあおろせ。
久五 さうでもござりませうが、後程まで。
勘六 えゝ、下せといつたら下しなせえな。（ト無理に魚の荷を下へ置かせ、溝の縁の石へ腰を掛ける。合方になり、）久五郎、家と違つて商ひ先き、又二つには往來ゆゑ何にも文句は言はねえから、是まで延び延びになつて居る、貸した五兩を耳を揃へて、たつた今返して下せい。
久五 そりや御尤もでござりますが、實の所は此の通り不漁の中で御納屋を切拔け、やう／＼買つた此の鯛は得意先の賴まれ物、これを持つて行きさへすれば纏めた錢も取れますから、それを歸りにあなたの所へ持つて參る積りゆゑ、どうぞ後まで勘六さま、お待ちなされて下さりませ。
勘六 そいつァならねえ、お納屋の嚴しい其の中で元直の高い鯛を買ふ金があるならなぜそれで、此方の片を附けねえのだ、そんな料簡の違つた奴にはもう一時でも待たれねえ。

久五　そりや御尤もでござりますが。（ト言ふを冠せて、）

勘六　えゝ待たれねえといふに。（ト此の前から幕明の犬溝の縁に寐て居て、魚の匂ひに起上り、盤臺の側へ行き、件の鯛を二枚銜へ出す、勘六これを見て、）やあ、犬が鯛を喰つて居るぞ。

久五　えゝ畜生め。（ト有合ふ出刄庖刀を取つて追かけ、犬の鯛を捥ぎ取りながら、）うぬ喰れてなるものか、（ト庖刀にて峰打に犬の眉間を打つ、誤つて眉間を切り犬は鯛を放しわん〳〵と苦しみながら啼いて倒れる、久五郎鯛を見て、）やあ、大事な鯛を疵物にした、やゝゝゝ。

ト勘六犬を見て、

勘六　や、こりや、犬が死んでしまつた。

久五　なに、犬が死んだ。（トびつくりなし、）やゝゝゝ。

勘六　こりやあ大變、犬を殺せば命がないと嚴しいお上のお觸ゆゑ、五兩の金で爰に居て掛り合は眞平だ、こんな所にいぬのが勝ちだ。（ト勘六逸散に花道へ逃げてはひる、跡に久五郎ホツとして、）

久五　今日この鯛で三貫も儲けようと元手を借り、買出して來た甲斐もなく、鯛は犬に疵を附けられむねでくらはした手が外れてうつかり殺せし上からは、おれが命に拘はる大事、それも一人の身の上なら何の苦勞もないけれど、目の不自由な親父が残り其の日の暮しに困るであらう、こりや飛

んだことをしたなあ。（ト途方に暮れしこなし、爰へ下手よりかんから兼出來り、）

飴賣　これ〳〵魚屋さん、こなたが殺した此の犬は、御大老の織田さまが公方樣から拜領物、この屋敷へ知れた日には直ぐ繩に掛ること、同じ出商ひの誼だから、內證でわしが敎へてやるのだ、ちつとも早く逃げなせえ。

久五　なるほどこの場の一件を知つた者はお前ばかり、茫然として居ましたが人の目に掛らぬ內、爰を早く逃げませう。

飴賣　さうとも〳〵、犬の爲めに縛られては、こんなつまらぬことはない、ちつとも早く逃げた〳〵。

久五　もし飴賣さん。（ト手を合せ、）何分お願ひ申します。

飴賣　合點ぢや〳〵、さあ〳〵早く。

久五　有難うござります。（ト久五郎荷を擔ぎ急いで花道へはひる、かんから兼跡を見送り、）

飴賣　時の天下のお觸ゆゑ、言つても仕方がない事だが、犬に代へて人の命を取るといふは何たる事か、昔と違つて今の世はお鬚の塵の役人のみ、人より犬が大事とは譯の分らぬ今日のお觸。（ト犬の死骸を見やり、）うか〳〵爰等にまごついて、犬と命をとつけえべいは、（ト身顫ひをして、）おゝ、眞平だ。

ト田舎節にてかんから鐘は鉦を叩きながら花道へはひろ、ばた〳〵になり、上手より織田の家臣、袴大小、以前の熊平虎藏六尺棒を持ち走り出來り、

家臣 犬を殺せし者ありと、只今屋敷へ訴へゆゑ取敢ず參りしが、何れの犬やら改めい。

熊平虎藏 畏つてござりまする。(ト件の犬の死骸を改め見て、)

熊平 や、こりや御屋敷の飼犬でござります。

家臣 やゝ、こりや拜領の隼といふ、殿樣御祕藏の犬、何者が殺せしか、えゝゝゝ、(トびつくりなし疵口を改め、)死骸の疵口血汐の滴り、見れば刃物で切つたる疵、嚴しき上のお觸もあるに大膽な奴もあればあるもの。こりや中間共、何ぞ證據になるべき品があるまいとも申されぬ、四邊をよく〳〵見たがよい。

熊平虎藏 はツ。(ト四邊を尋ねることあつて、虎藏、門切手を拾ひ上げ、)

虎藏 もし、鑑札が落ちてをりました。(ト家臣に渡す。)

家臣 こりや屋敷へ商ひに來る魚屋が出入の鑑札、察する所魚屋の商ひ物を喰はれしを、遺恨に切つたものと見ゆる、こりやいゝ、證據が手にはひつた。

熊平 して、此の犬の死骸をば、

虎藏　この儘にして置きませうや。

家臣　いや當屋敷前に斯樣なる死骸のありし上からは、此の儘にも捨て置かれず、先づ兎も角も片附けい。

兩人　はッ、畏つてござりまする。

家臣　身共はこの由逐一に、其の掛りへ申し達せん。

　ト家臣股立を取る、中間兩人死骸を片付けにかゝる、此の模樣合方にて、道具廻る。

（魚屋内の場）——本舞臺三間の間平舞臺眞中一間の中窓腰通り鼠壁、上手三尺の佛檀瀬戸物の佛具を飾り、此の下間平戸の押入、下手鼠壁、臺所道具一つ竈、上手の褄やはり鼠壁にて見切り、例の所門口、この外魚としたる腰障子の入口、續いて路地口、總て三筋町魚屋の體。爰に玄碩の親仁そぼろなる裝、盲目のこなしにて佛檀に向ひ團扇太鼓にて題目を唱へて居る、門口の外にお蝶合長屋の娘、前掛駒下駄にて草箒を持ち掃除をしてゐる、この側に五郎七吉原冠り尻端折り、日勸進にて立掛り居る見得、題目太鼓四ツ竹節にて道具留る。

五郎　日勸進でござい／＼。

お蝶　もし伯父さん、日勸進が來ましたよ。（ト玄碩後を振返り、）

玄碩　おゝその笊の中に錢があるから、出して上げてくれ。

お蝶　あい／＼。（トお蝶内へはひり、笊の錢を出してやる。）

玄碩　まあこつちへはひつて、一服呑んで行きなさるがいゝ。

五郎　毎度有難うございます、小屋者の悲しさは斯うして方々歩きましても、お茶や火を貸して下さるのは、こちらのお家たつた一軒、左樣なら一服お貰ひ申します。

玄碩　煙草の火を出したら、茶をついでやつてくれ。

お蝶　あい／＼。（トお蝶煙草盆と茶碗へ茶をつぎ持つて行き、）もし日勸進屋さん、こつちへはひつてお茶をお上り。

五郎　有難うございますが、お内へはひつては濟みませぬ。

玄碩　なに、濟むも濟まぬも入るものか、構はずこつちへはひるがいゝ。

五郎　左樣ならお許しなされて下さりませ。（ト五郎七内へはひり下手へ住ふ。）

玄碩　構ふことはねえ、もつと此方へ來るがいゝ。どういふ譯でいやがるものか、まあ早い話しが是れだ。（ト有合ふ團扇太鼓を取り、）穢れを嫌ふ神佛で使ふ太鼓は新町で、みんな出來た品ではないか。

何で差別を附けたものだか、こんな分らねえ話しはねえ。

五郎　さう言つておくんなさると御遠慮なく内へもはひり、お茶もお貰ひ申しますが、實に穢多や非人といふと人間ではないやうに、世間で人に嫌はれますが、素人衆にも十本の指があればわつち等でもやつぱり十本ありますのに、畜生同樣言はれるのが、實に情なうござります。

お蝶　そんならやつぱりその人でも、指が十本ありますかえ。

五郎　常談を言つちやあいけませぬ、この通りあります。（ト五郎七兩手を出してお蝶に見せる。）

お蝶　やつぱりみんなと同じやうに十本の指が揃つてゐるのに、なぜみんなに厭がられるだらう、斯ういふことなら此の次からわたしの家へも寄つておいで、お茶や火を貸して上げるよ。

玄碩　いや口は利かうものだ、お前も一軒得意が殖えた。

五郎　お蔭樣で有難うござります。お子供衆でも當節は、皆お利口でござります。

お蝶　（五郎七を見て、）伯父さん、たゞの人とは違ふ所がありますよ。

五郎　又惡口を言つてはいけませぬぞ。

お蝶　いゝえ、日勸進屋さんのお母さんは、みんなお產が重からうね。

玄碩　藪から棒に何を言ふのだ。

お蝶　それでも此の人は、天窓があんなに膨れて居ますよ。

玄碩　これさ、そんなことを言ふものぢやない。

五郎　いや段々風が惡くなりましたから、もうお暇いたしませう。（と思入あつて、）もし親方さん、何も私共に御用のあることもございますまいが、ひよつと何ぞありましたら日頃の御恩返しに、何なりともさうおつしやつて下さりませ。

玄碩　そりや親切に有難え、又用があつたらお賴み申します。

五郎　今度來る時惡口は御免でございます。（ト言ひながら門口へ出て、）左樣なら大きに有難うございます。（トやはり右の合方にて、五郎七日勸進と呼びながら下手へはひる、お蝶跡を見送り居る。）

玄碩　お蝶や、もう表は掃いたのか。

お蝶　もう掃除は濟みましたわいな。

玄碩　お、有難え〳〵、悴が川岸から歸るまでは、毎日お前が爰へ來て、家を手傳つてくれるので、おらアほんに大助かりだ。

お蝶　伯父さん、兄さんが歸るまでは、毎日おでこの日勸進屋さんが、話しに來ると面白いねえ。

玄碩　そんなに度々來られてたまるものか。

トやはり右の鳴物にて、花道より軍兵衛羽織着流し雪駄にて出來り、花道に留り、

軍兵　道で人を待合せるのと賴んだことはしつくりと、どうも行かぬものだが、昨日久五郎に賴んでやつた鯛をいまだに持つて來ぬが、家へ行つて尋ねて見よう。（と舞臺へ來り門口を明け、）久五郎はまだ歸らぬかな。（ト內へはひろ。）

お蝶　はい、まだ川岸から歸りませぬ。

軍兵　昨日かた〴〵賴んだ鯛、今日遣物にするのだが、午刻過になつてはやられねえが、何をして居るのだらうの。（ト玄碩この聲を聞き、）

玄碩　おゝ是れは軍兵衛さま、疾うに歸る筈でござりますが、大方お納屋でもやかましいので、廻り道でもして來ませうから、それで遲いのでござります。

軍兵　もう九ツに間もないから、早く歸つてくれゝばいゝのに、斯うしておれも支度をして、待つて居るのだ、氣が揉めてならねえことだ。

玄碩　大方家へ歸りませぬで、川岸から直にあなたのお宅へ、參りましたかも知れませぬ。

軍兵　成程さう言はれて見ると、さうかも知れねえ。それぢやあこれから家へ歸つて、久五郎の安否を聞かう。（ト門口へ出ろ。）

玄碩　まことにお氣の毒さまでござります。
軍兵　早く魚の顏を見てえものだ。
　　ト やはり右の鳴物にて軍兵衛雪踏と草履を片々にはき、足早に花道へはひろ、お蝶心附き、
お蝶　もし〳〵、履物が違ひましたわいな。
玄碩　なに、履物を違へて行つた。
お蝶　あい、雪踏を片々と、伯父さんの草履で行つたわいな。
玄碩　片々雪踏を殘して行つた、そゝツかしい軍兵衛さまだ、晩から療治に出る時に、片々雪踏も不都合だが、大方取替に來なさるだらう、片隅へ置いてくれ。
お蝶　あい〳〵。（ト雪踏を片附ける。）
玄碩　いまだに忰が歸らぬが何をして居ることか、もしや道でお納屋につかまり、買つた鯛を取られはせぬか、軍兵衛さまも嘸お待兼だらう。
お蝶　わたしが見附けまで行つて見て來ませう。
玄碩　それでは氣の毒だが、見て來てくれ。
お蝶　直行つて來ませうよ。（ト門口へ出て、下手へ行きかけろを、）

玄碩　おい〳〵、ちよつと待ちな。（ト手探りにて笊の錢を出し、）爰へ來な。

お蝶　あい。（ト玄碩の側へ來る。）

玄碩　さあ、お遣ひ賃だよ。（ト錢をやる。）

お蝶　あい、有難うございます、そんなら行つて來ませうよ。

ト右の合方にてお蝶下手へはひる。玄碩探り探り門口へ行き、表へ思入あつて門口をしめろ、合方になり、

玄碩　よく諺にいふことだが、四百四病の病より貧程辛いものはない、悴が律義に稼ぐといへど僅かな元手も質を置き儲けの薄い其の處へ、かてゝ加へてわしの眼病、かゝりや繫がる小富にまで相談づくとは言ひながら、兩國へ遣り藝者の勤め、まだそればかりか是れまでに度々金の厄介かけ、せめて僅かな稼ぎでも少しは暮しの手助けと、夜は療治に歩けども素人のせゐか呼び手も少なく、曲る道さへやう〳〵に直なる杖の力にて、呑込む涙笛の音も自と曇る胸の内、一人悴に働かせ半人前の事も出來ぬは、何ぼ盲目といひながら情ない身の今の有樣、どうでこの世を捨てた體、いつそ死んだがましであらうわい。（ト思はず以前の錢笊に蹴躓き、びつくりして探り見て、）いや、瀬戸物でなくツて、まあよかつた。

ト笊を片寄せながら住ふ、合方替つて花道より小富湯女餘所行き好みの裝にて出來り、花道に止まり、

小富　四五日後から風を引き心持が惡いせゐか、引續いて夢見が惡く、心にかゝつてならぬゆゑ觀音さまへお詣り申す序に寄つて内の樣子を、ちよつと尋ねて見ようわいな、（ト舞臺へ來り門口を明け、）もし父さん、お前一人でござんすかえ。（ト玄碩聲を聞附け、）

玄碩　おゝ小富か、まあこつちへはひるがいゝ。

小富　今お詣りの歸りがけ、ちよつと尋ねに寄りましたわいな。（ト内へはひり玄碩の側へ行く、）

玄碩　よく心に懸けて見舞つてくれるが、どうも外の病と違ひこの盲目といふやつは、一人になると氣が鬱ぎ、今もおぬしや久五郎のことを思ひ出しては愚癡になり、ふつ〳〵生きてゐる氣はない、實におれは死にてえのだ。

小富　何をお前言はしやんす、わたしが斯うして湯女をするも、又兄さんが商ひするもみんなお前に樂がさせたさ、必ず惡い料簡を、この後出して下さんすな。

玄碩　惡い心も出さねえが、これまでおぬしの丹誠で目醫者に掛つて療治もしたが、そこひはなか〳〵治らぬものと、斷り半分補ひの藥のせゐか驗もなく、實は煎藥蒸藥も、もうこの頃ではあき果てて、只日朝さまへ信心ばかり、閒さへあれば佛檀でお題目と首ッ引よ。

小富　目の御願なら日朝さまは御利益はござんせうが、藥を止めては治りも惡し、やつぱり上つて下さ

んせ。

玄碩　それだといつて去年この方、藥の代もどの位拂つたことか知れやあしねえが、やつぱり初めも同じこと、さう〱拂ひも續かねえ。

小富　大方そんなこと丶思つて、僅かではありますが、お金を三兩持つて來ました、これで藥を怠らずどうぞ上つて下さんせ。（ト紙に包みし金を玄碩の手へ渡す。）

玄碩　なに、三兩おれにくれるのか。

小富　藥に飽きたでござんせうが、もう少し辛抱して、どうぞ上つて下さんせ。

玄碩　あ丶忝けない〱、そんなに孝行にしてくれるほど、おりやそなたに面目ない。

小富　なに、面目ないとは、そりや何が。（ト合方きつぱりとなり。）

玄碩　今改めて言はずとも定めて聞いて知つて居ようが、元おぬしはおれが姪、丁度五ツの年であつたが兩親共に枕を並べ熱でとう〱死んでしまひ、それからこつちへ引取つて我が娘にして育てたは、たつた一人の久五郎に行々娶す料簡で樂みにした甲斐もなく、女房が長の煩ひから死んだ物入り引續き借金方に困るので、據ろなく櫻風呂へ僅かな金で湯女にやつたお蔭で後の始末は附いたが、思ひ廻せば廻すほど明暮胸に浮むのは、おぬしの實のお袋が嘸や冥土で恨んで居ようと、

それがまことに面目ないのだ。（下涙ながらに言ふ。小富思入あつて、）

小富　何で母さんが恨みませう。死別れた其の時から、これまで育ちし長のお世話、並大抵ではこの御恩お返し申すことは出來ぬ、まして斯うして娘となれば、親の爲めにはどのやうなことでもせねばなりませぬ。

玄碩　血筋といへば其の樣に、實の親子も及ばぬ程いつてくれるは忝ない、それでわしも悦ばしい。悦びといへば此間ちよつと聞きかぢつたに、よいお客が出來たさうだが、お屋敷さんか町人衆か。

小富　さあ、好いお客ではござんすが、それがわたしの苦勞の種。

玄碩　なに、苦勞の種とは。

小富　この間から櫻風呂へ足を近くおいでなさるお客さまは、小石川のお館さまの御家來で藤井紋太夫さんといふ、お屋敷さんには珍らしい切放れもよく何一ツ拔目のない捌き方、それが御縁に其の後は今日は淺草向島と每日體へ仕舞が附き、贔屓になされて下さるので家の爲にはなるけれど、難儀なことがござんすわいな。

玄碩　その藤井紋太夫さんといふお人は、能をなさる方ではないか。

小富　あい、觀世のお弟子で一二とやら、噂の高い方でござんす。

玄碩　むゝ、其のお人なら評判の、目から鼻へ抜ける利口者、今小石川で幅の利く黄門さまをだしに遣つて諸願事を我が身に引受け、出來もせぬのに賄賂を取り、其の場を瞞着す彼れ是れ師、あの人のお蔭では、幾人難儀をしたか知れぬが、そんならそれに違ひない。

小富　その紋太夫さんのお座敷で、出る度毎にわたしへ向ひ、親を樂にしてやるから言ふことをきけといはしやんすを、程よく其の場を斷るのは、久五郎さんと行く〳〵は女夫になる體ゆゑ、一寸脱れに言つてはゐれど晝夜かけての呼詰めに、何を言うてもきかしやんせず、實に家へおいでの度毎ぞつとするのも家では知らず、切放れのよいお客ゆゑ、早く〳〵と言はれるのが、わたしは辛うござんすわいな。（ト小富泣く、玄碩こなしあつて、）

玄碩　そりやあ何より辛からう、おれの體が滿足で居たなら悴と共々稼ぎ、おぬしにそんな苦勞もさせず内へ引取り三人で、細くも其の日を送るのだが、何をいふにもそこひの煩ひ、涙で長の月日を費し乾く間もなき袖の露。

小富　錦は着れど胸の内、襤褸に劣る浮稼業。

玄碩　その日〳〵をやう〳〵に、暮すも悴の腕一つ。

小富　三筋の絲の世渡りに。

玄碩　細き煙の痩世帶

小富　思ひ廻せば廻すほど。

玄碩　これがうき世と、

兩人　いふのぢやなあ。

ト兩人愁ひのこなしにて涙を拭ふ、合方になり、花道より幕開きの久五郎盤臺を擔ぎ出來り花道にて、

久五　がらツちけをくつた擧句に、今日のやうにへいまに行くとはこんなつまらぬことはない、內へ歸つたら親父さまが又これを氣に揉むだらう。あゝ困つたことを仕出來したなあ。（ト矢張右の合方にて舞臺へ來り、）今歸りました。（ト門口を開ける。）

玄碩　おゝ、久五郎歸つて來たか。

小富　兄さん、此の間はお目に掛りませぬ。

久五　お富か、よく尋ねて來てくれた。

玄碩　まあ足を洗つて上るがいゝ。

ト久五郎盤臺を內へ入れ、小富盥へ水を取り、草鞋をぬぎ足を洗ひよき所へ住ひ、

久五　此の間同朋町の薪屋へ商ひに行つた時、小富はこの頃風を引いたと、ちよつと話しに聞いたか

ら大きに親父さまと案じたが、もうさつぱりと直つたのか。

小富　大したことでもござんせぬが、夜更に船で上手から歸つて來た時重くなり、やう／＼此の頃直りました。

久五　早速直つてよかつたが、内ぢやあいゝ心配した。

玄碩　こなたの歸りが遲いので、今しがた軍兵衞さまが、昨日頼んだ鯛はどうだと催促に來なすつたが、まだ持つて行かなんだか。（ト是れにて久五郎思入あつて、）

久五　その鯛は今しがたお家へ置いて來ましたが、今日は不漁で荷が少なく、元の高い鯛を買つて詰らぬ商ひして來ました。（ト腕組をして鬱ぐ、小富久五郎の樣子を見て、）

小富　兄さん、お前心持でも惡うござんすかえ。

久五　なあに、どつこも惡くはねえ。

小富　それでも顏の色艶が。（トいふを久五郎は玄碩に聞かすまいと、）

久五　今朝はめつぽふ寒いので、薄着で出掛けた其のせゐだ、何も案じることはねえ。

玄碩　（是れを聞付け、）稼人に寐られると困る、萬金丹でも呑んだがいゝ。

久五　なに、こりやお妹が思ひ過しでござります。

ト じゆつなき思入、合方になり花道より、幕開の勘六足早に出來り、花道にて、

勘六　さつきあれ程約束したから、今日は一番坐り込んで、居催促でも取らにやあならないが、もう久五郎は歸つたらう。（ト舞臺へ來り、門口を覗き込み、）久五郎どん、歸つたか。

久五　おゝ、勘六さんでござりますか。（と勘六内へはひり、）

勘六　さつき商ひ先きで逢つた時、後程までと約束した、金を受取りに來たから、たつた今渡して下せえ。

久五　さあ、其の金儲けもこなたゆゑ、さつきあすこで。（ト玄碩小富へ思入あつて、）いやさ、あすこでお約束はしましたが、御存じの通り不漁が續き、何分暮しに追はれますから、もう四五日の所をば御勘辨を願ひます。

勘六　いや其の四五日はさて置いて、もう一日も待たれねえ。といふ譯は忘れもしまいが、盆前に不漁が續いて困るから、日掛けで五兩貸してくれと賴みなさるから貸した所、當座の二三日掛けたぎりおどりが來ても書替ず、それも斯うして病人の親父さんも居なさるし、仕方がねえとそれなりに、今日まで勘辨してやつても何の一言挨拶せず、やう〳〵さつき出會し約束をした後程の、時刻が來たから取りに來たのだ、おれに無理はあるめえがな。

久五　さあ〳〵、そりや御尤もでござりますが、見す〳〵金に仕ようといふ矢先きにさつきのあの始末、(ト玄碩へこなしあつて手を合せ、)どうか四五日の所を、お待ちなされて下さりませ。

勘六　いや、ならねえの、正直さうに泣き附いても、そんならさうかと歸るやうな、烏の勘六とは譯が違ひ、毎朝日の出と一緒に飛出し、體のやうな大きな聲で脅し半分怒鳴り立て、その日稼ぎの小ざし錢を日掛に集める腕前だ、鳶とらうと言ひ出したら、月夜烏の夜になつても塒と思つて坐りこみ、是非ともはねをつけにやあならねえ。(トきつといふ。)

久五　それだといつてあの時に、みす〳〵此方が、(ト言ふを冠せ、)

勘六　さあ、それも金さへ素直に渡せば、あの騷ぎにはならねえのだ。

久五　それぢやといつて、今と言つては。

勘六　出來ずばさつきの、一部始終を。

久五　あゝもし、それを言つては。(ト留めるを玄碩小富案じる思入にて、)

玄碩　もし勘六さま、さつきのこと、おつしやりますは。

小富　案じることではござんせぬか。

久五　いえなに、親父さま、決して案じることではござりませぬ、必ず御心配なされますな。

ト兩人を安心させ、勘六に思入にて賴む。

勘六　さあ、隱してやるが金は出來るか。

久五　さあ、そこをどうぞ。

勘六　金が出來ずば訴へようか。

久五　どうしてそれを。

勘六　金を返すか。

久五　さあ。

勘六
久五　さあ〱〱。

勘六　日が詰つた、どつちとも早く返事をするがいゝ。（ト久五郎ぢつと思入玄碩小富心遣ひのこなしにて、）

玄碩　これ娘、今そなたがわしにくれた志しのあの金を、無足にするではなけれど、此の場の切羽に是非がない、どうぞ忰に貸してくりやれ。

小富　其のお案じには及びませぬ、藥の代はどうなりと、わたしが都合をしますから、兄さんに上げて下さんせ。

玄碩　そんならどうぞさうしてくれ。（ト以前の金包を出し、）これ忰、お富がおれに藥を買へと渡してく

れた其の金が、丁度爰に三兩あるから、これをあなたへお渡し申し、跡を待つてお貰ひ申せ。

久五　えゝ妹が三兩くれましたとか、いやそれは忝ない〳〵。然しそれをやつては、どうも心に濟まぬけれど、渡さぬ時はさつきの事を。

玄碩
小富　え。

久五　いえなに、さつき約束した上は、どうでもこれは貸してくりやれ。

小富　心置きなく使ひなさんせいな。（ト久五郎金を受取り、）

久五　圖らず爰へ三兩の金の都合が出來ましたから、これをどうぞ受取つて、必ず他言を、いや、多分の金は出來ずとも、追々あとは入れますから、今日は歸つて下さりませ。

ト始終思入にて勘六に金を渡す。

勘六　三兩取れば殘金は僅かなことゆゑ、今日の所は、先づこの金を取り得に穩便にして歸つてやらう。

ト勘六金を懷中し立ち上るを、

久五　もし、（ト玄碩小富に見えぬやうに袂をとらへ、）何分ともに。（ト頼む。）

勘六　もし殘金が滯ると、又その時は承知だらうな。（ト久五郎をたしなめる。）

久五　必ずお渡し申しまする。

勘六　きつと詞を番うたぞ。

ト時代に言ひ門口をしめ、合方にて勘六下手へはひろ、久五郎ほつと思入、合方引流し、玄碩小富心遣ひのこなしあつて、

玄碩　娘、もう勘六さんは歸つたか。

小富　あい、今歸りましたわいな。（ト玄碩久五郎の側へ摺寄り、）

玄碩　目が見えぬので樣子は知れぬが、嚴しい金の催促に、勘六どのが詞の端々、どうやら棘のありさうな、合點の行かぬ二人の話し。

小富　爰は内輪の三人きり、どういふ譯か、もし兄さん、父さんも安心するやう、話して聞かせて下さんせいな。

久五　何も別にこれぞといふ、譯はなけれど延々のその言譯が聞かれぬとて、家主へ行き斷るの、明日は御上へ訴へるのと嚴しく催促受けるので、遂にこれまで一度でも大家樣へ預りなどを出さしたことのないわしが、僅かな金で遣りともないゆゑ、それでいつてくれるなと止めましたのでござります。

玄碩　いや／＼それはそなたの言拔け、勘六どのが詞の内に、さつきのことゝ言つたのは、何か仔細の

あることだらう。

小富　包まず話して下さんせ。

久五　それだといつて、別に仔細は。

玄碩　すりや現在の、實の親に。

小富　包み隱して言はしやんせぬか。

久五　さあそれは。

玄碩　仔細を話すか。

三人　さあ〳〵〳〵。

玄碩　親が我が子を案じるは、どの位だか知れぬぞよ。

トきつといふ、久五郎じゆつなきこなし、花道よりばた〳〵になり以前の軍兵衛・羽織を抱へ雪駄と草履と片々に穿いた儘走り出來り、直に舞臺へ來て内へはひり、

軍兵　おゝ、久五郎歸つて居たか。

久五　やゝ、軍兵衛さまでござりまするか。

軍兵　さつきから此の通り出掛る支度で鯛の來るのを、今か〳〵と待つて居るのに、待てどくらせど屆

かぬから、腹立ちまぎれ又來たのだ。
久五　刻限が遲くなりましたので、まことに申譯がござりませぬ。
軍兵　なに、申譯がねえ、あれ程賴んだ代物を、今日はそれぢやあ買はねえのか。
久五　お約束はいたしましたが、生憎今日は川岸が不漁で、鯛が一枚もござりませぬ。
軍兵　なに、不漁で無い、無いなら無いと、何故さつき斷りに來ねえのだ。
久五　さあ、それゆゑ只今お斷りに。
軍兵　えゝ、いゝ、てえげえにしやあがれ、大事なお屋敷の獻上物にしようと思ふあの鯛は、今日でなければ間に合はねえのだ、もう手前には賴まねえ、さあ手附の金を返してくれ。
久五　さあ、其の金は。
軍兵　鯛がなくば金があらう、其の金を返してくれ。
久五　さあ、それは。
軍兵　それはとは、何のことだ。
久五　さあ。（ト久五郎途方に暮れし思入）
玄碩　さつきお內へ寄つたといふから、おりや安心して居たに、なぜお斷りを申さぬのぢや。（ト玄碩軍

兵衛に向ひ。）定めしお腹も立ちませうが、どうぞお間に合はぬところは、御料簡なされて下さりませ。

軍兵　さあ、料簡するから金を返せ。

玄碩　悴、よくお詫を申し上げて、金を早くお返し申せ。

小富　そこに持つて居なさんせう、早くお上げなさんせいな。

久五　實の所はその金で、鯛を二枚買ひました。（ト久五郎思ひきつて言ふ。）

玄碩　なに、鯛を買出してしまつたのか。

軍兵　して其の鯛は、どこにあるのだ。

久五　その鯛は。（ト詰る。）

軍兵　えゝ、いけしやあ〳〵とした太え奴だな。（ト久五郎の襟上を取つて引倒し。）うぬ等親子は言合せ衒を稼業にするのだな、買はない鯛を買つたと僞り手附の金の三兩を、ちよろまかさうとは太え野郎だ、これで思ひ當つたは、さつきもおれの履物を片々草履と摺替たな、大方月夜に橋臺で小遣取りをするのだらう、おれの雪踏は香取屋で一分で買つて間のない品だ、二朱が所を稼がうとせつたに油斷もならねえ奴だ、うぬどうするか見やあがれ。

ト軍兵衛久五郎を打たうとするを玄碩探りながら留める。これを突放し又久五郎の襟上を取つて引倒す、此の内小富はうろ〳〵して氣を揉むこなし、久五郎玄碩をかばひながら、

久五　さあ〳〵、其のお腹立は御尤もでございますが、目の不自由な親父めに怪我をさしては濟みませぬ。決して親子が衒でない證據はお目に掛けますから、暫く待つて下さりませ。（ト小富に玄碩を頼み、下手の盤臺の内より誂への鯛を二枚出し、）親子が衒でない證據は、全く昨日旦那から受取りました三兩で、御存じの通り不漁の所、尺五寸といふ此の鯛を、やつと二枚買出して、お納屋の目をば拔けつ潛りつ、歸つて參る途中にてうつかり犬に引出され、これ此の通り疵を附けられ、所詮これではお遣ひ物になりませぬゆゑ悄々と、歸りましたは此の譯ゆゑ、決して嘘は申しませぬから、どうか明日の買出しまで御勘辨下さりますやう。

玄碩
久五　どうぞお聞き濟み下さりませ。（ト玄碩と共々手を突いて詫るを、）

軍兵　犬に魚を喰れたのが何で言譯になるものだ、それはそつちの不調法、今日に限つた獻上物の間が缺けた曉は、金を取つた其の上で、思ふさま腹癒せをしにやあならねえ。（ト大きな聲にて言ふ、）

玄碩　今一足早かつたら、さつきの金をお返し申せば。

小富　このお腹立はあるまいに、悔しいことをしましたわいな。（ト玄碩小富じゆつなきこなし、）

軍兵　さあ、金を出さねえか。

久五　そこをどうぞ。

軍兵　えゝ、どうするか見やあがれ。

ト久五郎を蹴倒す、玄碩すがろを軍兵衛又突放す。これにて玄碩ひよろ〳〵として門口へ突當りどうと倒れる。これを小富介抱する、よき時分下手より杢右衞門着流し家主のこしらへにて出來り、門口に窺ひ居て、この時内へはひり、捨ぜりフにて留める。

杢右　まあ靜かにして下せえ、互ひに怪我があつてはならぬ、わしだ〳〵。

ト軍兵衞を宥める、軍兵衞杢右衞門を見て、

軍兵　どこのお人か知らないが、金を取らにやあ料簡出來ねえ。

杢右　そりやあ御尤もでござります、委細は門で聞きましたが見るに見兼ねて留めに出た、わしは家主杢右衞門、こなたの顏の凹むやうな捌き方はしませぬから、どうぞ預けて下さりませ。

軍兵　えゝこの上凹まされてたまるものか、預けてくれろと言ひなさるには、定めて受取つた三兩はこなたが返してくれるだらうね。

杢右　そこがお話しをする所、多くある店子の内親孝行の久五郎大家といへば親も同然、店子といへば

子も同然、その子と思ふ店子の内で別段わしが目を掛けて置いてやります親子二人、まして盲目を過すといふ哀れな者へ貸した金を、取らうといふは無慈悲な仕方、いやなに、仕方がないから家主の李右衛門が引受けませう、まあ兎も角もわたしの内まで、一緒に行つて下さりませ。

軍兵　そんならきつと渡しなさるね。

李右　どうかお話しいたしませう。（ト兩人立ち上り、軍兵衛は藁草履をはいて門口へ出る。李右衛門思入あつて）軍兵衛さまは内へお連れ申し、とつくりお話しを附けるから、必ず案じぬがよいぞ、あとで親父を氣を附けてやれよ。（ト久五郎涙を拭ひ、）

久五　何から何まで、あなたの厄介。

三人　まことに有難うござりまする。（ト三人愁ひのこなしにて禮を言ふ。）

李右　決してきなく〳〵思はぬがよい。

軍兵　大家さん、どこへ連れて行きなさるのだ。

李右　お前さん藁草履でござりますか。（ト軍兵衛心附き、）

軍兵　とう〳〵一足摺替へたな。

小富　お履物が違ひました。（ト小富雪踏を出す。）

杢右　こりやこなたが違へたのだ。（ト これにて軍兵衞はき替へ、）

軍兵　これで香取屋の一分が助かつた。

ト合方にて軍兵衞に杢右衞門附添ひ下手へはひる。三人はぢつと思入、誂への合方になり、

玄碩　人に鬼はないもので軍兵衞さまの腹立ちを、見兼ねて留めに來てくれた大家さまは地獄で佛、鬼にもまさる呵責に逢ひ、どこぞ怪我はしはせぬか。

久五　いえ、何處も怪我はいたしませぬ。

玄碩　娘も怪我はせなんだか。

小富　あい、わたしも怪我はいたしませぬが、勘六さんといひ今の騷ぎ、何でもこれには仔細のあること。

玄碩　おりや氣が揉めてならぬから、包まず言うてくれいやい。

ト左右より詰寄る。久五郎思案の思入あつて、

久五　親父さまや妹へ話せばびつくりすることゆゑ、今まで隱して居りましたが、それほどまでにおつしやるなら何もかも申しますが、疵物にしたこの鯛の元手の金は三兩ゆゑ、丸々損も仕方がないが、百兩出しても又と買はれぬ、命を捨てねばなりませぬ。

玄碩小富 命を捨てねばならぬとは。

久五 さ、隱して居れど惡事千里、今にも露顯した時は繩目にかゝる其の上に、掛替のない此の首を取られねばなりませぬ。

小富 そりやまあ兄さん、どういふ譯で。

久五 さあ、その譯は。（ト門口へこなし、小富心附き表を窺ひびつしやりしめる、合方になり、）今日は公儀のお祝ひ日お納屋が鵜の目鷹の目を脫れて歸る其の途中、織田の屋敷の門前で勘六めに出ツくはし、金の言譯するうちに、それ鯛だ犬が喰ふといはれてびつくり取返せしが、もう疵物に間に合はず腹立ちまぎれ其の犬を、有合ふ出刃で峰打ちにしたのがうつかり手がそれて、眉間を切つて其の場で卽死、南無三これはと思ふ所へ通り掛つた飴屋の話しに、此の節噂の犬公方樣より市中へお觸れの犬なれば、祟りの來ぬ內逃げるがよいと、言はれてそこを一心不亂逃げては來たが天の網、所詮惡事は脫れぬと、覺悟は極めて居りまする。（トこれを聞き兩人びつくりなし、）

玄碩 むゝ、それぢやあ手前はお觸れの嚴しい、犬を出刃で殺したのか。（ト大きく言ふ。）

小富 あゝもし、父さん、人に知れては一大事、大きな聲をなさいますな。

玄碩 今更いつても仕方もないが、僅か三兩の其の金で買つても買へない人の命を、捨てるといふは何

たることか、情ないことしてくれたな。

小富　しがない藝者はして居れど、お前の爲めならどうなりと、わたしが都合も仕ようもの、なぜ早まつたことして下さんした。

久五　それも此の身になした罪、牢へ行くのも仕方がないが、たゞ心に掛るのは跡に殘つた親父さま、三年このかたそこひの眼病、朝夕お世話をする者なく嘸難儀をなさるだらうと、そればつかりが胸に支へ、忘れる暇がなからうわい。

小富　その不自由なお世話なら、わたしがせねばなりませぬが、身まゝにならぬ藝者の勤め。

玄碩　それも僅かの金策に、困つてそなたを奉公にやつた、親の因果が子に報い。

久五　犬を殺せしその科で、闇い所へ入相の。

小富　鐘もあはれな此の世の地獄。

玄碩　鬼に等しき罪人の。

久五　責に逢ふのもなした科。

小富　假令前世の約束でも、

玄碩　神や佛のお惠みで、

久五　晴れる時節に、

三人　したいものぢやな。（ト三人愁ひの思入、合方にて下手より以前の杢右衛門出來り、直内へはひり、）

杢右　これ〳〵こなた衆は泣いて居る所ではない、さつきあれから軍兵衛どのを内で段々と說き附けてやうやく話しは濟したが、濟ぬは今朝の一件を委しく表で立聞きしたが、斯ういふことはいつか一度所詮漏れずに居ないから、いつそのことに思ひ切つて上から御沙汰のないうちに、駈込み願ひをするがいゝ。（ト久五郎涙を拭ひ、）

久五　まことにあなたへ御難儀かけ、申し譯がござりませぬ。さういふことなら思ひ切つて、これから御番所へ駈込みます。

杢右　おゝ、それがいゝ〳〵。斯う〳〵いふ譯で、つい犬を殺しましたと自身から訴へて出る時は、死罪の者も遠島と、一段そこが減じるから、おれが書面を書いてやらう。

久五　どうぞお賴み申しまする。（ト杢右衛門懷中より紙を出し、矢立にて書面を書く、久五郎は玄碩小富に向ひ、）大家さまのおつしやる通り、所詮脫れぬこの身の罪、上からお手の廻らぬ內、自訴することに覺悟をしました。

玄碩　そんならいよ〳〵自訴する心か、如何に公方樣がお好きたとて、犬に替へて人の命を取るといふ

があるものか。
小富　上と下とはいひながら、無慈悲な仕方でござんすわいな。（ト兩人恨む思入っ）
李右　そりや尤もだ〳〵が、天に向つて唾を吐くやうなもので、言つても所詮追附かねえ、却つてこつちへ罪が來るから、まあ穩便にするがいゝ。
女房小富　それだといつて、あんまり無慈悲な。
李右　いやそれが惡い〳〵、お上のことだ仕方がない、斯うしてやきもきいゝ思ふのも倅の命が助けたいからだ。決して上を恨んではならぬ。（ト書面をこしらへ、）さあ書面が出來た、今月のお月番は中の御番所、ちつとも早く驅込み訴訟をするがいゝ。
久五　段々と有難うござりまする。
　ト書面を受取る、爰へ下手より猿猴三次手先きのこしらへ尻端折りにて出來り、四邊を見廻し思入あつて門口を明け、
三次　まつぴら御免なせえ、魚屋久五郎さんのお家はこちらでござりますか。（ト久五郎門口へ行き、）
久五　わたくしが久五郎でござります。
三次　今日通りがゝりで拾ひ物をしましたが、こりやこちらのでござりますか。

ト懷中より以前の鑑札を出して渡す。久五郎よく〳〵見て、

久五　おゝ、こりやさつき犬騷ぎに。

三次　え。

久五　いえなに、いつ是れをころしいましたか、方々搜して居ります所、まことに有難うござりました。

三次　それぢやあお前さんのでござりますかえ。

久五　毎日商ひに參りまする、屋敷の門切手でござります。

三次　それぢやあ、間違ひはありませぬね。

久五　へい、慥に私のでござります。

三次　違ひがなくば、御上意。(ト久五郎の手を取つて捻倒さうとするを、振ほどき、)

久五　こりや、何となされまするな。

三次　定めて其の身に覺えがあらう、豫て嚴しいお觸のある、犬を殺した囚人だ。

久五　え、そんならそれを。

玄碩　もうお上へ知れましたか、ほい。(ト玄碩皆々呆れしこなし、)

三次　直其の場にて檢分せしに、正しく刃物で切つた疵、脫れぬ所は傍に落散る證據の門切手、さあ

神妙に繩にかゝれ。（ト久五郎もうこれまでといふ思入あつて、）

久五　もうかうなります上からは、何をお隱し申しませう、商ひものゝ魚を喰はれ、腹立ちまぎれ庖刀のみねで打つたる手がそれて、犬の眉間を切りました。

三次　その趣きは自身番で、よくお掛りへ申し上げろ。

杢右　わたくしはこの長屋の家主でござりますが、悴が科人になりますことゆゑ、是れなる親父に御趣意柄をとつくり只今申し聞せ、犬を殺せし始末を書立て、自訴なす覺悟でござりました。

久五　さあ、繩をお掛け下さりませ。

三次　おゝ、よい覺悟だ。（ト久五郎へ繩をかける、玄碩この聲を聞き付け、）

玄碩　もう縛られてしまつたのか。

小富　情ないことになりましたなあ。（ト玄碩小富久五郎に縋り泣く、久五郎愁ひのこなしあつて、）

久五　囚人となるわしは、元より覺悟でござりますが、これから一人で親父さま、それはつかりが氣がかりで。（ト久五郎男泣きに泣く。）

杢右　それは決して案じぬがよい、わしが後を引受けて小富と二人で面倒を見るから、心配をするには及ばぬ。

久五　何分ともに行く／＼を、どうぞお願ひ申しまする。
杢右　おゝ、案じるな／＼。
久五　これ妹、どうぞおぬしも間を見ては、内へ來て氣を附けてくれ。
小富　あい／＼。（ト泣き伏す。）
三次　さあ、お掛りがお待兼ねだ、早く立て。（ト三次繩をとろ、久五郎思入あつて、）
久五　そんなら親父さま、
玄碩　もう行くのか。（ト久五郎に縋り泣く、久五郎愁ひのこなしあつて、）
久五　この後必ずお一人で、短氣を出して下さりまするな。
玄碩　おいやい。（ト玄碩泣く。）
久五　妹、頼むぞよ。
小富　あい。

ト兩人久五郎に縋り別れを惜しむ、是れを振拂ひ立上り門口へ出る。此の前下手より〕〔の手先出來り門口に控へ居て、この時三次の繩を受取り、杢右衛門附添ひ、皆々門口の外へ出、下手へ行かうとして、

久五　御機嫌よろしう。

玄碩　おゝ。（ト思はず門口へ縋り立上るを、）

三次　えゝ、引立てい。

ト三次門口をぴつしやりしめる。是れにて玄碩手を挾み、たぢ〳〵として尻餅を搗く、久五郎情ないと寄らうとして繩に引かれる、双方見合つて木の頭、小富玄碩を介抱する。門口の久五郎手先三人に杢右衛門附添ひ、三重にてキザミ一緒に花道へはひる。跡シャギリ。

三幕目

東兩國廣小路の場
石見守邸拷問の場

〔役名――稻波家老夏目主膳、船頭河童の吉藏、稻波供頭砂田金吾、同家來星坂九郎次、織田家來黑崎伴右衛門、同中間づぶ六、ぐづ八、見世物師やり市、同かつちの三、同あつたの八。茶見世の娘おせん其他。〕

（兩國廣小路の場）――本舞臺三間の間向う並び床、本屋根思ひ〳〵の畫をかきし腰障子を立切り、上の方葭簀張の出茶屋道具をよろしく飾り、下の方開帳札柳の立木、向う筵張り見世物小屋の後を見せ、舞臺に長床几を並べ、總て兩國廣小路の體、爰にづぶ六ぐづ八紺看板尻端折り、木刀の脇差をさ

し、中間のこしらへにて立掛かり居るを、やりの市、かつちの三、あつたの八着流し見世物師のこしらへにて兩人を留めて居る、此の見得見世物の鳴物にて幕明く。

づぶ　これ、何でおら達を突いたのだ、三芝居を見に行つても、木戸でつかれたことはねえ。

ぐづ　引張り物の見世物小屋で、つかれたからは外聞が悪い、もう見ろといつても見やしねえ。

市　誰がお前さん方をつくものか、新參ならば知らねえが、此の兩國の見世物小屋で、知らねえものはありやあしねえ。

三　御存じの通り此の野郎は、目がくいやでござりますから、向うが見えずぼんやりと、つい見損つたのでござります。

八　定めてお腹も立ちませうが、二ツあつても節穴同様、何の役にも立ちませぬ。

市　今日の所はわつち等に。

三　どうぞ此のまゝ下さいまして。

八　御料簡なされて。

三人　下さいまし。

づぶ　いやだ〳〵料簡ならねえ、引張りものでつかれちやあ明日から兩國へ來られねえ、本所あたりの

小ッ旗本の中間とは譯が違ふぞ、當時天下の御大老、織田筑後守の中間だ。
ぐづ　淺草へ行かうが山下へ行かうが、木戸でつかれたことはねえ。それを彼奴がつきあがつて、恥をかゝせた返報はきつとするから、さう思へ。
づぶ　紺看板一枚でも御大老の中間だ、手でも出しやあ片ッ端から、珠數つなぎにした上で、
ぐづ　この兩國へ二度と再び、見世物小屋は掛けさせねえぞ。
市　そんなことを言はないで機嫌を直して下さりませ。お前さん方を此の儘に、たゞお歸し申しちやあわつち等が濟みません。
三　機嫌を直して下さらにやあ、此の怪し目を今日ッから、冷飯にしにやあなりませぬ。
づぶ　そりやあ引込ませるとも引込ませねえとも、
ぐづ　そつちの勝手にしたがいゝ。
市　いえ、此の野郎一人なら引込ましてもようございますが、内にやあ今年七十になる腰抜け婆あがある上に、嬶あが今月臨月で、おつこちさうな腹をして喰ふや喰はずに居ますから、
三　一日休みやあ三人が顎をつるさにやあなりませぬ、婆あや嬶あが困りますから、そこをどうか思召して、御料簡もなり難からうが、助けてやつて下さりませ。（トづぶ六思入あつて、）

づぶ　それぢやあ此の怪し目野郎は、お袋があつて女房があるのか。
八　はい。厄介もの、お袋と、女房が内にござります。
づぶ　おらあ叉木の股からでも生れたと思つた、人間の胤とは思はれねえ。
ぐづ　づぶ六の言ふ通り、人間の方へは遠いが、化物の方へは近いな。
市　おつしやる通りとてものことに、もう少し替つて居りますと、因果者にでも出しますが、
三　なまなか人間らしい所が少しあるばッかり、錢儲けが出來ませぬ。
八　なんぼおれが化七でも、あんまりそりやあ酷いぢやねえか、こんな面でも今の嚊あはおれが所へ
駈込んで來たのだ。
づぶ　どんな女か知らねえが、こんな奴の下歯になるのは。
ぐづ　大方お化の仲間だらう。
市　女房といふは御存じの、鷄娘の一寸法師。
三　お化の仲間でござります。
八　そんなことをいはれると色になつたを思ひ出すが、忘れもしねえ三年あとしつぽり濡る、時雨月、
しかも會式に池上へ夜業を張りに行つた時、一人寐るのも肌寒く、鷄娘と天幕を冠つて寐たのが

縁のはし、ぱつと浮名も立川の親分さんの媒人で、夫婦になつて共稼ぎ、うまい中ではないかいな。

トせりふのまゝ節をつけて言ふ。

づぶ　いや、とんだ惚氣を聞くものだ。

ぐづ　何にしろ二人が子は、どんなお化が生れるだらう。

市　どうでわつちの手にかゝる、不具者でござりませう。

づぶ　不具者が生れりやあ、引張りもの、錢儲け、前祝ひに一杯呑ませろ。

三　さつきからお二人に、上げようと思つて居りました。

市　こりやあ少しばかりだが、一杯上つて下さりませ。（ト懐から四文錢を一本出す。）

づぶ　二人に一杯呑ませると、出した錢はたつた四百か、一本ばかりぢやあ仕方がねえ。

ぐづ　錢貰ひにでも來たやうで、みつともねえ、返してしまへ。

市　これさ、そんなことを言つちやあいけねえ、御存じの通り時化つゞき。

三　長い錢が取れませんから、それで不承しておくんなせえ。

八　又その内たんまりと、一杯お酒を上げませう。（ト無理に錢を渡す、づぶ六ぐづ八思入あつて、）

づぶ 料簡し難い所だけれど、久しい馴染のお前達、顏を立つて料簡しよう。
ぐづ 實は四百錢を見ると、喉がぐびついてこてえられねえ。
づぶ えゝ、しみつたれなことを言ふなえ。
市　それぢやあ料簡して下さいますか。
三人 そりやあ有難うござります。
づぶ 今日の所は四百で、一杯呑んで歸つてやらうが、
ぐづ 又明日出直して來るぞ。
三　いや毎日お出では眞平だ。
づぶ
ぐづ なに、眞平とは。
市　何さ、待つて居りますと申したのだ。
ぐづ あんまり待つて居もしめえ。
づぶ どれ、片足あげて來ようか。（トやはり見世物の鳴物にてづぶ六ぐづ八上手へはひろ、跡見送り。）
市　えゝげぢくめ、一昨日來い。
三　詰らねえ奴で、木戸を明けた。

八　いくら呑太郎が違ふか知れねえ。
市　さあ〳〵早く行かう〳〵。
お仙　毎日來ちやお茶と煙草を、呑み倒して行くにやあ困りますよ。
三　何にしろ彼奴等に斯うあらされちやあ、兩國の見世物師はこつぱいだ。
八　太閤樣が金に飽かして立派にこせえた安宅丸を、啼たといつて毀してしまふ威勢の强い御大老。
市　あゝいふ奴は以後の見せしめ、叩きしめて遣りてえけれど、意趣返しが怖いから。
三　手出しをしねえを好いことに、毎日押して歩かれちやあ、生業をすることが出來ねえ。
お仙　寐臭い體を摺附けて、氣障なことを言はれるのを、眞に受けちやあ居られませんよ。
市　どうか彼奴等を町方で、防ぎをつけて下さりやあいゝが。
三　所が相手が御大老だから、めつたなことを言ひ出すと。
八　奉行職を上げられるから、誰でも知つて、知らねえ顏だ。
お仙　誰ぞ天窓を押へるものが、ありさうなものでござりますね。
市　その天窓を押へるものは、小石川の親玉だ。
三　おゝ小石川で思ひ出したが、今日は佐七の花會だつた。

八　二朱づゝ集めて持たしてやらう。
お仙　わたしもどうか御一緒に。
市　金を包んで寄越しなせえ。
お仙　そんなら皆さん。
三　はねたら一杯。
三人　やらうねえ。

ト又見世物の鳴物になり三人下手へはひる、右の鳴物にて花道より黒崎伴右衞門、羽織袴大小にて出來る、跡より河童の吉藏、やつし裝三尺帶頬冠りにて出來り、花道にて、

吉藏　もし、そこへおいでなさるのは、黒崎さまぢやあござりませぬか。
伴右　我が名を呼ぶは何者だ。
吉藏　誰でもねえ、わつちでござります。（ト手拭ひをとる。）
伴右　おゝ、そちは河童の吉藏か。
吉藏　今日か明日はお屋敷へ、參るつもりで居りましたが、よい所でお目にかゝりました。
伴右　何用なるか存ぜぬが、爰は往來、茶見世へ參つて。

吉藏　お供をいたして參りませう。

ト右の鳴物にて舞臺へ來り兩人床几へ腰を掛ける、葭簀の蔭よりお仙茶屋女にて茶を汲み出來る。

お仙　これは旦那さま入らつしやいまし、今日はよいお天氣でござります。
伴右　今朝は降るかと思つたが、思ひの外天氣になつた。
吉藏　どこから人が出て來るか、兩國ぐらゐ江戸中で、賑な所はねえ。
お仙　それに此の頃大阪から、玉本小さんと申します十七八で美しい女輕業が參りまして、放れ業をいたしますので、大入でござりまする、もし御覽じますならば、御案内をいたしませう。
伴右　その小さんと申す輕業は、同藩にても評判ゆゑ、一日見物に參るであらう。其の節は世話を賴む。
お仙　どうぞ御都合遊ばして、お早く御見物に入らつしやりませ。
吉藏　をかしいのはその小さんが、綱渡りをする時は、みんな客が土間へはひつて、見えもしねえのを下から覗き、助平な奴等さね。
伴右　いや其のやうに惡く言やるな、身共などもそれが當てだ。
お仙　それが當てとおつしやるなら、よく見えます上場所へ、御案内をいたしませう。
伴右　時に吉藏、何ぞ身共に用でもあつてか。

吉藏　ちつとお願ひがござります。
伴右　願ひといふのは、金ではないか。
吉藏　平澤左內の占同樣、すつかりあなたに當てられました。
伴右　いや、手前の金も鬱陶しいな。
吉藏　鬱陶しくもござりませうが、最初からのお掛合、どうか殿樣へお話しなすつて、金を貰つて下さりませ。
伴右　先頃褒美に百兩金遣はしたのは如何いたした。
吉藏　疾うに遣つてしまひました。
伴右　え、もう百兩遣つたのか。
吉藏　もう遣つたかとおつしやるが、日に五兩づゝしみつたれに遣つた所が僅か廿日、いつまで金がありますものか。
伴右　して又いくら欲しいといふのだ。
吉藏　ちび〳〵いふも面倒た、百兩貰つておくんなせえ。
伴右　え、百兩褒美をやつた上、又もや百兩くれといふのは、そりやァあんまりあこぎだぞ。

吉藏　何のあこぎなことがありますものか、貰つてもいゝからねだるのだ。
作右　貰つてもいゝとは。
吉藏　いゝといふのは外でもねえ、人の出來ねえ川中へ。（ト言ひかけるを、）
作右　あゝこれ。（ト押へる、見世物の夜神樂をドロンと打込み、吉藏うなづき、伴右衞門お仙を見て、）このやこりやお娘、ちと內密の話しがあれば、暫くそちは此處を遠ざかつてくれまいか。
お仙　はい〳〵畏りました、お內證話しでござりますなら、ちよつとその間に玉本の輕業を見て參りますから、見世をお願ひ申します。
作右　おゝ、見世は身共が預つた。氣遣ひいたさず行つてくりやれ。
お仙　左樣なら御ゆるりと、どれ、一切り行つて見て參りませう。
トやはり元の鳴物になり、お仙上手へはひる。伴右衞門四邊を見廻し、
作右　かねて他聞を憚かる一義を、四邊も構はずづか〳〵と、氣を附けて物を言やれ。
吉藏　あなたの方ぢや、憚ることだが、わつちの方ぢやあ構はねえから、ついうつかりと言ひました。
（ト四邊を見て尻をまくつて腰を掛ける、見世物の音樂のやうな鳴物になり、）去年伊豆の下田からお船藏へ引いて來た安宅丸に精があつて、伊豆へ行かう〳〵と每晩啼くのが噂になり、御大老の織田さ

まが船の啼くのは御當家へ、甚だ不吉と言立て船を解いたが一つの計略、太閤樣が奢りに長じて拵へた船ゆゑ金銀づくめ、其の金物の金高は何萬兩だか知れやあしねえ、織田樣はいふに及ばず船の毀しに拘つた黑崎さまもしつかりだらう、其の狂言の種廻しは每晩河へ潜つて居て、伊豆へ行かう〳〵と、此の吉藏が言つたからだ。褒美の金は千兩かすくなくとも四五百兩と、思ひの外たつた百兩、あんまり吝な褒美だけれどわつちの命があらん限り、織田樣の御厄介になる積りで、貰つて置いたが、遣ひ切つてしまつたから、又御無心を申すのだ。どうぞお前さまから殿樣へ、さう仰しやつて、もう百兩わつちに貰つておくんなせえ。

作右　そりやあ吉藏胴慾だ、これが五兩か十兩なら不足をいふもいゝけれど、河へ潜つて居たとても僅か十日か十五日、百兩ならいゝ褒美だ。

吉藏　日數に割つたら一日が五兩からの割になるから、いゝ褒美だと言ひなさるが、これが誰にでも出來ることなら、五兩に附きやあ好い仕事、わつちも不足は言はねえが、一時潜つて居ることの出來ねえ事をするゆゑに、千兩取つても安いもの、此の入譯をお前さまからよくおつしやつて下さいまし。

作右　そんな事を今となり、おれがお上へ言はれるものか、それも三兩か五兩なら口入をした身の不承、

吉藏　我が懐で遣はさうから、それで料簡するがいゝ。

伴右　思召しは有難いが、三兩や五兩の端た金を御無心は申しませぬ、百兩お貰ひ申してもいゝ、筋だからねだるのだ。

伴右　それは手前が不理窟だ、元御領分の百姓ゆゑ、いはゞお上の御家來同然、そんな不筋な事をいつては、それでは手前濟むまいぞ。

吉藏　これが正路な筋ならば、五兩の金でも有難くお貰ひ申しますけれど、お頼みなされるお前様方が不筋な事ゆゑねだるのだ、公方様だらうが領主だらうが、斯ういふことがこつちの附目だ、百兩貰つておくんなせえ。

伴右　假令何といはうとも、一旦褒美をやつたからは、又もや百兩やられるものか。

吉藏　それぢやあ是れほど譯を言つても、金は遣れねえと言ひなさるのか。

伴右　知れたことだ。(ト吉藏思入あつて、)

吉藏　さうお前が言ひなさりやあ、くどく言つても無駄なことだ、外へいつて褒美を貰はう。

(ト吉藏ずつと立つて向うへ行かうとするを。)

伴右　これ吉藏、外へ行くとは、何處へ行くのだ。

吉藏　何處へ行かうと、わつちの勝手だ。

伴右　いや先きに依つては遣られぬから、其の行き先きを言つて行け。

吉藏　む丶、言へといふなら言ひませう、わつちの行くのは小石川、當時天下の礎と人も尊む黄門樣へ、伊豆へ行かうと言つた事を、種を割りに行きますのだ。（伴右衛門びつくりして吉藏を留め）

伴右　あこれ、それを言はれてたまるものか。

吉藏　そんなら、百兩下さいますか。

伴右　さあ、それは。

吉藏　小石川へ行きませうか。

伴右　さあ。

吉藏　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。（下伴右衛門ぐつと詰る。）

吉藏　どうでも金はくれられませぬか。

伴右　いや、望み通り遣はさう。

吉藏　それぢやあ百兩下さいますか。

作右　然し只今懐中に、百兩といふ金がなければ、身共と一緒に屋敷へ參れ。
吉藏　いや、お屋敷へは行きますまい。
作右　なぜ屋敷へ參らぬのだ。
吉藏　うか〳〵屋敷へ一緒に行き、襟にひやりと延金の、冷てえ金は眞平だ。
作右　一旦味方に頼んだ其の方、そんな事をするものか。
吉藏　まあそれよりは黑崎さま、ねえといつても懐中に十や二十はありませう、胸倉金に下さいまして跡はいつもの待合茶屋へ、持つて來て下さいまし。
作右　いや生憎今日は囊中乏しく、所持の金子は二兩か三兩、それも只今遣りにくければ。
吉藏　それぢやあ何ぞ明日まで、形をわつちにおくんなせえ。
　　ト これにて作右衞門是非なき思入あつて、紙に包みし五三の桐の金かな物を出し。
作右　手放し難い品なれど、明日までの形代に是れを手前に預けて置かう。（ト吉藏取上げ見て、）
吉藏　や、こりや安宅丸の金かな具、どうしてこれをお前さまが。
作右　實は一枚うんすんで身共が隱して置いたのだ、それを其の方に預けおくから、必ず小石川へ行つてくれるな。

吉藏　脅しにあゝはいふものゝ、行きやあ此方も共々に兇狀を着る體だから、金さへ貰つておくんなさりやあ、何しに小石川へ行きますものか。

作右　それで身共も安心いたした。

吉藏　お前さまでせえ此の金物を、ちよろまかして置きなさるもの、御大老のちよろまかしは何の位だか知れやあしねえ。

作右　餘計な事を申さずと、落さぬやうにしてくりやれ。

吉藏　そりやあ合點でござります。（ト叺煙草入へいれ、懷へしまふ。）

作右　それでは明日鍛冶橋外の、待合茶屋に待つて居やれ。

吉藏　承知しました。

作右　茶見世の娘は、どうした知らぬ。

吉藏　いえ、わつちがこゝに居りますから、お構ひなくとおいでなさい。

作右　然らば吉藏。（ト立上る。）

吉藏　もし、茶代をお置きなされませ。

作右　おゝ、さつぱりと失念いたした。（ト財布より錢を五十出して盆の上へ置き、）どれ、川足しをいたし

て來ようか。

　　ト見世物の管絃になり、伴衛右門思入れあつて上手へはひろ、茶代を見て、

吉藏　いくらあるかと思つたら茶代はたつた五十きり、吝嗇な人だなあ。(ト四邊へ思入あつて、)然しおれにやあ叶はねえ、小石川で脅しつけ、とう／＼百兩くれる約束、手附に渡した此の金物、太閤樣が拵えたゞけ、今と違つた此の金性、これを潰しに賣つたらば幾干になるか知れやあしねえ。

　　ト煙草入から出しにつたり思入、此の時上手へ以前のづぶ六ぐづ八出來り、

兩人　吉藏、いゝことをしたな。

吉藏　え。(トびつくりして煙草入をしまひ、)誰かと思つたら、づぶ六にぐづ八か。

づぶ　今彌太一で一杯やり、何の氣なしに爰へ來て出合頭にちらと聞いたが、太閤樣が拵へたゞけ今と違つた金性とは、どんな物だか知らねえが。

ぐづ　潰しに賣つたらどの位と、聞いたがこつちの地獄耳、うめえ仕事の口塞げに二人に一杯呑ましてくれ。

吉藏　むゝ、づぶ六にぐづ八と名が看板のどんたくれ、酒が呑みたけりやあ呑ませるが、口塞げとは何のことだ。

づぶ　空ツとぼけたことをいふな、その金物と引替に、明日百兩とれる體。
ぐづ　いゝめりを出してもいゝぢやあねえか。
吉藏　それぢやあ今の話しをば、手前達は聞いたのか。
づぶ　葭簀の蔭で聞いて居た。
吉藏　聞いたとありやあ仕方もねえが、めつたなことを言つてくれるな。おりあいゝが手前達の、御主人さまの難儀になるぞ。
づぶ　そりやあ千石とる御家老さまも二合半のこちと等も、今日斯うして命を繋ぐ御恩に二ツはありやあしねえ、めつたなことを言ふものか。
ぐづ　いやに言ふのもこいつちの附目、一杯買はせてえからだ。
吉藏　いや、手前達も惡い奴だな。
づぶ　どつちが惡いか秤にかけたら。
ぐづ　比べものになりやしねえ。
吉藏　そんなおだてを言はねえで、おれと一緒に早く來い。
づぶ　どこで手前奢る氣だ。

吉藏　まさか湯豆腐でも呑ませられめえ、鮪酒屋で一杯やらう。

ぐう　そいつァ何より有難い。

吉藏　どれ、前祝ひに奢らうか。

トやはり見世物の鳴物にて、吉藏先に兩人下手へはひる。直に上手より以前の伴右衛門出來り、

伴右　後悔先きに立ずとやら、今更言つても仕方がないが、心よからぬ河童の吉藏、彼が勝れし水練に身共が殿へ周旋なし首尾よく事は成就なしたが、百兩やつたら言分は、よも有るまいと思ひの外又もや百兩強ねだり、一度はいゝが二度三度度重なれば聞かれもせず、遂にはさがない下郎の口、露顯に及ぶ其の時は、是れに荷擔の者共に忽ち來る身の禍ひ、長く生かしては置かれぬわえ、それに附けても案じられるは、此の場の切羽にうつかりと、渡してやつた金かな具。彼奴も頗る酒好きゆゑたらふく呑んで醉つた上、どこぞへ落してくれねばよいが。(ト向うへ思入あつて、)や、向うから來るは若年寄、稻波の分家石見守、會釋をするも面倒だ。道を違へて參らうか。

ト行列三重へ辻うちを冠せし鳴物になり、伴右衛門上手へはひる。花道より徒士四人絹羽織袴股立大小にて出來る、跡より長棒の乘物を若い衆の陸尺かつぎ、益田金吾、星坂九郎次羽織袴股立にて乘物に附添ひ、跡より若い衆紺看板の中間合羽駕籠をかつぎ出來り、本舞臺へかゝる、此の時双盤になり、下

手より以前のづぶ六ぐづ入逃げ出る、跡より吉藏少し醉つたる思入にて、薪を持つて追駈け出來り、

吉藏　呑ませろといふから呑ませたに、不足をいはれてつまるものか。

づぶ　うぬが呑ませやうが氣に喰ねえから。

ぐづ　不足を言はねえでどうするものだ。

吉藏　うぬ、さう吐かしやあ。

ト兩人を毆らうとする、此の内同勢は舞臺へ來る、三人ごつちやになり供廻りの中へ入り叩き合ふ。

徒士　やあ、供先を切る狼藉者。

四人　後へ返れ〳〵。

ト徒士の者三人を後へ返さうとするを振拂つて敲き合ふ、双盤になりごつちやの立廻り、徒士四人手に餘る思入。

九郎　やあ、亂暴いたす無體者、屋敷へ引く、覺悟いたせ。

ト九郎次づぶ六ぐづ入を取押へようと、立廻りながら下手へはひり、金吾吉藏を引据ゑ、

金吾　爰構はずと、お駕籠を早く。

供廻　心得ました。

ト徒士は駕籠を圍ひ供廻り附添ひ上手へはひる、跡吉藏振拂つて行かうとするを金吾引留め、大小入り見世物の鳴物になり、捕物の立廻りよろしくあつて、吉藏を捕つて押へ早繩を掛ける。

吉藏　何もわつちやあ縛られる、惡いことをしやあしませぬ。

金吾　やあ供先きを切る狼藉者、言譯あらば屋敷で申せ。

吉藏　酒興の上の友達喧嘩、醉つて何にも知りませぬが、どなたのお供を切りました。

金吾　知らぬとあらば言聞さん、當時幕府の若年寄稻波石見守の供先きなるわ。

吉藏　え、そんなら稻波石見守の、(トびつくりして、)南無三しまつた。(ト逃げに掛るを引据ゑ、)

金吾　うぬ、逃げるとて逃がさうか。(爰へ上手より供廻りの中間二人出來り、)

中間　此奴は我々兩人が。

金吾　逃さぬやうに引立てい。

中間　はつ。(ト吉藏を引立てる。)

吉藏　えゝ忌えましい。

ト吉藏よろしく思入、見世物の時の太鼓になり、吉藏を中間引立て金吾附いて上手へはひる。ばた／＼になり下手より九郎次はづぶ六ぐづ八と立廻りながら出來り、見世物をかしみの鳴物になり、三人をか

しみのある立廻りよろしく、引張りの見得にて、此の道具廻る。

（稲波家庭先の場）――本舞臺三間の間高二重、本庇本緣附正面に白洲階子、正面雲母形の襖上の方後へ下げて一間の附屋體塗骨障子、下の方喰違ひに柵矢來、よき所に松の立木、總て稲波家庭先の體、爰に以前の徒士四人○△□◎立掛り居る、この見得中の舞にて道具留る。

○ 時に先刻兩國で、お供先きを切るのみか、亂暴なせし狼藉者。

△ 姿の賤しき奴なれど、力量勝れし其の上に、腕に覺えのある樣子。

□ 取押へんと我々が四人掛りで掛つたが、なか〳〵以て手に合はず。

◎ 往來繁き所ゆゑ、忽ち山なす見物に、思はぬ恥辱を取るところ。

○ 益田氏が日頃の御手練。

△ 持餘したる狼藉者を。

□ 搦め捕つて引かれしゆゑ。

◎ 我々共も、安堵いたしました。

○ 御若年に似合はざる、

△　天晴お手柄な、
四人　事でござる。（ト合方にて、奥より以前の金吾出來る、四人下に居る、金吾眞中に住ふ。）
○　これは〳〵益田氏、只今も我々ども、
△　貴殿のお噂いたしましたが、
□　日頃の御手練現れて、
◎　狼藉者を召捕られし、
○　お腕前を我々ども、
△　一同感心、
四人　いたしてござる。
金吾　某よりか各々方、殿のお駕籠を警固めされし、御苦勞至極にござりまする。
○　途中に於て狼藉あらば、
△　搦め捕るべき徒士役にて、
□　その曲者を召捕らず。
◎　まことに以て不覺千萬。

○して召捕られし亂暴者は、何れの者でござりまするな。

金吾 先刻より某が種々詮議なしたれど、なか〳〵以てしぶとき奴、いつかな白狀いたさぬゆゑ、只今殿の仰せにて、御用人夏目主膳殿これへ引出し御詮議あるよし、尤も酒に醉つては居れど、見るから一癖ある奴なれば、如何なる事をなさんも知れず、取り逃さぬやう警固めされ。

四人 畏つてござりまする。

ト時計の音になり、奥より夏目主膳継上下一本ざし刀を提げて出來る、金吾席を讓り下手へ下る、主膳よき所へ住ひ、徒士四人はツと辭儀をなす。

主膳 益田氏には、お早うござつたな。

金吾 暫く拙者は休息いたし、只今出席いたしてござりまする。

主膳 今日東兩國にて殿御通行のお供先きへ、酒興の者が狼藉なせし樣子は逐一承はつたが、して其の者は何者でござるな。

金吾 見受けし所は下賤の者にて、屋職の者か但しは又、船乗りなどかと存じられまする。

主膳 承はれば其許が一應詮議めされたさうなが、强情者にて言はざるよし、某代つて詮議なすともよも尋常では申すまい。

金吾　いや貴殿が御詮議なされましたら、必ず白狀いたしませう。

主膳　殿の仰せを蒙れば、兎にも角にも引出し、一應詮議いたすでござらう。（ト金吾徒士に向ひ、）

金吾　それ、狼藉者を引出しめされ。

〇　はッ、（ト下手へ向ひ、）それに繋ぎし狼藉者、急いでこれへ引立てめされ。（ト下手にて、）

足輕　はあゝ。（ト時の鐘になり、下手柵矢來より以前の吉藏に繩をかけ、足輕二人片手に六尺棒を持ち繩を取り出來り、）下に居らう。（ト引きすゑる。）

吉藏　えゝ、やかましい。（トづうづうしく下に居る。）

主膳　こりや、面を上げい。

吉藏　えゝい。（ト噯をしながら顏を上げる。）

主膳　最前その方兩國にて、殿御通行のお供を切り、亂暴せしと申すことぢやが、だいぶ酩酊いたせし樣子、定めて酒興の上であらうな。

吉藏　いえ、酒の上ぢやあござりませぬ。

主膳　すりや酒興の上でないと申すか。

吉藏　よく酒々とおつしやるが、五合や七合の端た酒に、醉つたことはござりませぬ。

主膳 酒興の上でなくばないまで、して其の方は何と申す。

吉藏 名は吉藏と申します。

主膳 何れに住居いたし居るぞ。

吉藏 當時無宿でござりますから、山崎町や新網の木賃に泊つて居りますから、何處にも家はござりませぬ。

主膳 すりや、其の方は無宿なるか。

吉藏 へい、宿なしでござりまする。

主膳 生れは何くでうまれたぞ。

吉藏 年中ごろ〳〵ごろ附いて、果から果てを歩きますが、まさか雷の子でもなし、方々ゆすつて歩きますが、地震の子でもありませぬ、やつぱり親父の子でござります。

主膳 いやさ、親は兎もあれ、其の方は、何處の地にて生れしぞ。

吉藏 わつちが生れは上州の、いや、こいつァうつかり言はれませぬ。

主膳 なに、言はれぬとは。

吉藏 生れを言やお親の恥、こればかりは言はれませせぬ。

主膳　すりや、親の恥ゆゑ言はれぬとか。

吉藏　どんなことでも言ひませぬ。（ト金吾怺へかれて、）

金吾　うぬ、言はぬとて言はさずに置くものか。（ト緣端へ進み、）さあ、何れ何處の生れなるか、地名は元より親の名を、包み隱さず申し上げろ。

吉藏　えゝ餘計な口を出しなさんな、嘴青いお前達が百萬だら言つたつて、石を抱いても言はねえおれだ、言ふめえと言つたら言やあしねえ。

金吾　さりとはおのれは死太い奴、言はずば此の場で、拷問なすぞ。

吉藏　おゝ、拷問なすなら勝手にしろ。

金吾　只今背骨を挫いてくれるぞ。（ト金吾せき立つを、）

主膳　益田氏、先づ待たれよ。

金吾　貴殿へ對して失敬ながら、何卒拙者に拷問を、お許しなされて下さりませ。

主膳　若い者の料簡では、彼に拷問望まるゝは御尤もにござれども、先づ〳〵身共にお任せなされい。

金吾　へゝい。（ト金吾控へる。）

吉藏　ざまア見ろ。（トせゝら笑ふ。）

金吾　何を。（ト息込むを。）
主膳　いや腹の立つは尤もなるが、見るから死太き奴なれば、拷問なすとも容易に言ふまじ。彼が所持
なす物に、手掛りあらんも測られず、懐中物を改めい。
四人　はッ。
と兩人左右より立掛り、懐へ手を入れるを肩で拂ひ退ける、この機會にぼんと轉るを又一人掛るを、
吉藏　えゝ、何をしやあがる。（トずつと立つて蹴返す、これにて又ぼんと轉る。）
金吾　やあ、手向ひいたさば打ち据ゑい。
皆々　はッ。
ト徒士二人棒で打つて掛るを身を躱して蹴返す、足輕繩を持ち逃すまいと引附ける、金吾見兼ねてつ
かつかと下り棒を取つて足を掻く、吉藏どうとなるを打ち据ゑ、懐中の叺煙草入を引出す。
吉藏　南無三、それを。（ト立ちかゝるを足輕繩を引据ゑる。）
主膳　その煙草入を。改められよ。
金吾　心得ました。（ト煙草入の中より以前の桐の金物を出し、）や、こりや五三の桐の金かな物。
吉藏　その金物を。（ト又立掛るを、足輕六尺棒で引据ゑる。）

金吾　身分に應ぜぬ此の品を。所持なすからは、いよ〳〵曲者。
主膳　その品これへ。
金吾　御覽なされい。（ト主膳に渡す。）
主膳　金色勝れてうるはしき五三の桐の金物は、これぞ正しく先達て御大老が破却せし、安宅丸に打ちたる金物、如何いたして其の方は、これを所持なし居つたるぞ。
吉藏　その金物は今しがた、廣小路で拾ひました。
主膳　すりや、此の品は拾ひしとな。
吉藏　へい、拾ひましてござります。（ト主膳包み紙を見て思入あつて、）
主膳　吉藏、そちは織田の家臣、黑崎伴右衞門と懇意であらうな。
吉藏　え丶、どうしてそれを。
主膳　仔細あつて存じ居るが、安宅丸のこの金物は、伴右衞門から受取つたか。
吉藏　いや、そんな人は知りませぬ、又受取つた覺えもござりませぬ。
主膳　いや受取らぬとは言はさぬぞ、此の金物を包みたる、反故の名宛は黑崎伴右衞門。
吉藏　そんなら、それに。（トびつくりなす。）

主膳　今拾ひしと言ふは僞り、如何いたして安宅丸の、此の金物を所持なし居つたぞ、
吉藏　さあ、それは。
主膳　察するところその方は、織田の領地の者であらうな。
吉藏　さあ。
金吾　伴右衞門から受取りしか。
吉藏　さあ。
主膳　領地の者か。
吉藏　さあ、
二人　さあ、
三人　さあ〳〵。
主膳　包み隱さず、白狀いたせ。（ト此の時下手にて、）
九郎　そやつの故鄕は星坂九郎次、それへ參つて申し上げん。
金吾　何と。（ト時の太鼓になり下手より以前の九郎次、づぶ六ぐづ入に繩をかけ引立て出來り、）こりや星坂氏
には、彼等二人を。

九郎　廣小路にて搦め捕り、一應詮議なしたるところ、その吉藏と同國にて、素性はよう く存じ居ります。

吉藏　さては二人が喋べつたか。

づぶ　おゝ、包み隱せば拷問され、痛い棒を背負はにやあならねえ。

ぐづ　それゆゑ手前の素性から、又こちと等の身の上も、殘らず言つて、

兩人　しまつたぞ。

吉藏　えゝ喋べらねえでもいゝことを、尻腰のねえ奴等だな。

主膳　すりやその方共は吉藏が、產れ故鄕を存じ居るとか。

づぶ　へい、一つ村で育つたゆゑ。

ぐづ　よく存じて居りまする。

主膳　して吉藏は、何れの者だ。

九郎　最前身共に申した通り、今一應これにて申せ。

づぶ　あゝ申しますとも〳〵、あの吉藏が產れ在所は、則ち上州安中在枇杷窪村の水呑百姓、親父は佛と人に言はるゝ吉左衞門と申す者。

ぐづ　親父に似ざる吉藏は、餓鬼の時から博奕が好きで、勘當同樣追出され、流れ〳〵て江戸へ參つて今船乘をいたして居ります。

主膳　して又吉藏の兩親は、今に在所に達者で居るか。

づぶ　親父は先年死にましたが、六十になるお袋は、未だに達者でござりまする。

ぐぶ　たゞ明暮に吉藏が人でなしを苦にやんで、歎いてばかり居りまする。

主膳　吉藏はじめ其の方達も、安中在の產れとあれば、當時天下の大老職織田侯の領地の者だな。

づぶ　へい、私ども兩人とも、國から屋敷へ出て來ました。

ぐづ　中間共でござりまする。

主膳　おゝ、よく有體に申せしぞ。（ト主膳思入あつて、）こりや吉藏、そちも包まず申してしまへ、達て言はねば是非に及ばぬ、拷問なしても此の一條、詮議いたさにやならぬといふは、先頃夜な〳〵大橋なる御船藏の河中にて、伊豆へ行かう〳〵と怪しき聲のいたせしは、豐太閤造營ありし安宅丸に精あつて、元の下田へ歸り度く歎きの餘りと取沙汰なすも、信じ難きことなれば、老若諸侯は何者の奸計ならんと察せられしに、大老これを深く信じ豐太閤の乘船ゆゑ、此の儘おけば御當家へ祟りをなすは必定なり、破却いたすに如くはなしと將軍家へ申し上げ、さしも美麗の安宅丸

を破却なせしは大老の、深き所存あつてのこと、種々の取汰汰なすゆゑに、諸役人は密々に詮議をいたす時に臨み、不審に思ふ大老の領地に生れしその方が、安宅丸の金物を所持なし居つたは詮議の緒口、如何なることにて懐中せしか、仔細を包まず申してしまへ。

吉藏　柄のない所へ柄をすげて、味にからんでおつしやりますが、元より拾つた其の金物、いくら御詮議なすつても、知らぬことは申されませぬ。

主膳　定めて口外いたすまじと、誓ひを立てしこともあらうが、最早事の破れ口、これまでなりとあきめらて、仔細を逐一これにて申せ。

吉藏　さりとてはあなたにも、しつこい御詮議、幾度言つても同じこと、拾つた品ゆゑ知りませぬ。

九郎　いや幾らわれが拾つたと、情を張つても拾はぬことは、これなる二人が存じて居るぞ。

吉藏　あいつ等が何を言はうとも、こつちに覺えないことだ。

づぶ　これ〳〵吉藏、手前ゆゑにおら達も共に難儀をしにやあならねえ、もういゝ加減に言つてしまへ。

ぐづ　それとも手前が言はれざあ、おらッちが代りに言はうか。

吉藏　これ後先を見て口を利け、同じ所で産れながら其の御領主の御難儀に、いやさ、其の領分での育ち合、詰らぬ事を言やあがるな。（ト吉藏思入にて言ふ。）

づぶ　それだといつておら達は、旨え汁を吸ひもせず、鮪の刺身で二銚子、さつき馳走になつたばかりだ。

ぐづ　その酒ゆゑに喧嘩をはじめ、縛られたのも手前のお蔭、痛い思ひをしちやあ合はぬ。

九郎　して吉藏が金物は、如何いたして所持なし居るのだ。

づぶ　委しいことは存じませぬが、あの金物は百兩の金の代りに吉藏が、預つたのでござります。

ぐづ　これより外にわたくしどもは、跡は何にも存じませぬ。（ト主膳思入あつて、）

主膳　今兩人が證人に、拾はぬことを知つて居るが、それでもそちは知らぬと言ふか。

吉藏　あいらが何を申さうとも、知らぬことは申されませぬ。

主膳　知らぬといへど其の方が、安中產れとあるからは、大概それと察せしゆゑ、強てそちに尋ぬれど知らぬとあらば是非に及ばぬ、拷問なして言はするぞ。

吉藏　時代なことをいふやうだが、水責め火責めは愚なこと切身に鹽の拷問でも、知らねえことは言はねえから、あきらめの爲め拷問しなせえ。

金吾　その拷問は召捕りし、益田金吾がいたしてくれう。（ト誂への合方になり、金吾割竹を持ち立ちかゝり、目先へ突附け、）これ吉藏、この割竹で今金吾が、背中の皮の破れる程打つて〳〵打ち据ゑるが、

それでもわれは白狀せぬか。

吉藏　これまで博奕兇狀で五十百敲かれたは、幾度だか知れやあしねえ、背中の皮は千枚張り、お前が腕の續くだけ力を入れて打ちなせえ。

金吾　おゝ、背中の皮はまだなこと、骨も微塵に挫いでくれるぞ。（ト金吾續け打ちに打つ）これでも白狀いたさぬか。

ト酷く打つ吉藏せゝら笑ひ、そんこな事ぢやお言はれえといふ思入、此の內づぶ六ぐづ八は氣味の惡き思入にて顫へ居て、

づぶ　もし〳〵、亂暴したはあの吉藏、ほんの二人は卷添へゆゑ。

ぐづ　どうぞお慈悲にわつち等は、お許しなされて。

兩人　下さりませ。

金吾　いや此の吉藏が金物の、出所を白狀いたすまでは、其の方共も掛り合、この儘直には歸さぬぞ。

づぶ　それぢやあ屋敷へ、

兩人　歸られませぬか。（ト投げ首をする。）

九郎　その兩人にも詮議あれば、一先づ大部屋へ引立て、取逃さぬやう張番めされ。

足輕　心得ました、いざ立ちませい。（トこれにてづぶ六ぐづ八立上り、）

づぶ　斯うして繩にかゝるのも、吉藏手前のお蔭だぞ。

ぐづ　早く惡事を、

兩人　言つてしまへ。（ト時の太鼓になり、づぶ六ぐづ八下の方へ引かれてはひる。）

九郎　今度は身共がさし替り拷問なして白狀させん。（ト合方きつぱりとなり、九郎次割竹を取りて立ち掛り、）さあ何者から預かつたか、其の出所を白狀なせ。（ト割竹にて吉藏を打ち、我が手が痛いといふ思入あつて、）さあ、これでも言はぬか／＼。（ト續け打ちに打つ、）

吉藏　一旦言はねえといつたら、打ち殺されても言やあしねえ。

九郎　さりとは死太い奴だなあ。（ト主膳これを見て思入あつて、）

主膳　その拷問、暫く待たれよ。

九郎　何ゆゑお止めなされまするぞ。

主膳　斯程に打つても白狀せねば、打ち殺すとも申すまじ、某思ふ仔細もあれば、先づ拷問を止まりめされ。

九郎　仰せにもどくは恐れ入れど、今一應此奴めを。

主膳　はてまあ、止まりめされと申すに。（トきつと言ふ。）

兩人　はッ。

ト控へ金吾平舞臺上手へ床几に掛り、九郎次は下手に低く控へる、主膳前に進み物柔らかに、

主膳　こりや吉藏、その方は何歳に相成るぞ。

吉藏　十四五までは何歳と、年も覺えて居りましたが、それから先きは忘れました。

主膳　何歳になるか存ぜぬが、斯う見た所が三十三四、最早分別の出る年なるが、懷中なせし金物の出所を白狀いたさぬは、科を脱れて一命を、助かる所存であらうがな。

吉藏　別に命を助からうと思ふ心はございませぬ、元より盜んだ覺えはなし、拾つた品でございますれば、何もわつちが命をば、取られることはございませぬ。

主膳　取られることがないと申すは、吉藏そちは分別盛りの、年に似合はぬ愚だな。

吉藏　わつちを愚とおつしやりますは。

主膳　今有體に仔細を申さば、罪を犯せしそちが一命、助かるまいものでもないが、たゞ此の儘では助からぬぞ。

吉藏　いや助からぬとおつしやるは、些とお詞が分りませぬ、物を拾つて命をば取られる法があります

ものか。

主膳　それがそちの愚なるぞ、なぜ拾ひし時即刻に、その事柄を訴へ出でぬぞ。

吉藏　え。（トぎつくり思入。）

主膳　道に落ちたる此の品を、其の儘所持なし居る時は、取りも直さず盜賊なるぞ、其處へ心が附かざるか。

吉藏　ム、。

主膳　何と愚であらうがな。

吉藏　ムウ。（ト吉藏口惜しき思入。）

主膳　まして外なる品と違ひ、太閤殿下が造營ありし安宅丸に粧ひたる五三の桐の金かな具、これ何人の所持と思ふぞ、恐れ多くも將軍家の御乘船であつたるを、その方存じ居らざるか、其の金物を所持なし居れば、盜賊の名は免れず、所詮命はあらざるぞ。（トきつと言ふ。）

吉藏　ムウ。（ト思入。主膳又やはらかに。）

主膳　今承はれば安中在、枇杷窪村に六十有餘の年取る母があるとやら。そちが白狀いたさねば不便ながらその母をこれへ呼びよせ拷問なし、呵責の苦痛をそちに見せ、包む惡事を白狀さすぞ。定

めて壯年の頃よりして母に苦勞を掛けたであらう、それも追々年取りて心を改め樂々と、手足を擦り孝養を盡さにやならぬ時に至り、苦勞に苦勞を掛けし上又もや苛責の憂き目を見せ、そちは快くそれを思ふか、よも快くは思ふまじ。それも惡事を言脱けて命の助かることならば、親が憂き目を見ようとも我が命さへ助かればよいと思ふ不孝者は、いたすまじきものでもないが、所詮命がないことゝ極るからは白狀なし、親に苦勞を掛けぬのがこれぞ正しき道ならずや。定めて人に頼まれて、大方なしたことであらう。こりや物の譬なるが、我が產れたる其の土地の領主を主人の如く仰ぎ、上なきものと田舍などでは思ふ族も往々あれど、それは大きな心得違ひ、普天の下卒土の濱、斯くいうては分かるまいが何れの土地も其の主人は、恐れ多くも今上皇帝、又國中の政事をなし四海を治むは將軍職、領主はいはゞ預り主、もし國替にでもなる時は忽ち替る預り主、それへよしなき義を立て天下の主人の朝廷や將軍職へ不忠をなすは、五常に缺けたる畜類同然、例へば町人百姓達が今泰平の世に生れ、枕を高くいねるのも天下あつてのことなるぞ、そちも分別盛りゆゑ爰の道理を辨へて、領主に代へて將軍家へ先非を悔いて白狀いたせ、さすれば母も憂き目に合はず、上にもお慈悲の御沙汰あらん、篤と分別いたして見よ。

　ト主膳やはらかに思入あつて言ふ、吉藏ぢつと思入あつて、

吉藏　今割竹で御兩所が、背骨を折れよと續け打ち、不死身でなければ身にこたへ涙の出るほど痛えけれど、それは我慢を仕馴れて居れば齒を喰ひしばつてこたへますが、夏目さまの御理解はこらへにくうござります。

金吾　血の出る程に打たれるより、こらへ難いと言ふからは、さては只今夏目氏が、事を分けたる御理解に、流石のそちも會得なしたか。

九郎　會得なしたら善は急げ、片時も早く白狀いたせ。

吉藏　えゝ、やかましい、靜かにさつせえ。

主膳　如何なる者に賴まれしか、定めて露顯なしたる時は決して口外いたすまじと、誓ひを立て居るゆゑに、嚴しき今の拷問にも白狀なさぬは惡事ながら、天晴男一人前、命を捨ても仔細を言はぬは尤もながら、些細な小事も天下に拘る大事に至らば國の司の將軍家へ濟まざることゝ、氣が附かば、今惡心を善心に飜へして忠義を盡せ、さすれば在所に殘りたる母の悅び如何ばかり、諄くもいふが分別盛り、よく考へて返答いたせ。（ト物柔らかにいふ。吉藏思入あつて、）

吉藏　一旦人に賴まれたら善惡ともに言ふまいと覺悟をしたがそれも慾づく、生れた所も明日が日に領主が替れば又跡の、領主に支配を受けねばならぬ、いつも替らぬ將軍家の、妨げになる事をして

濟まねえことをいたしました。

金吾　そこへ心が附いたらば、夏目氏の仰せに隨ひ、隱せしことを白狀いたせ。

吉藏　それに附いて夏目さまへ、お願ひがござりまする。

主膳　して、某へ願ひとは。

吉藏　惡事を白狀いたしましたら、此の吉藏の命をば、直に取つて下さりませ。

九郎　その儀は決して氣遣ひいたすな、安宅丸の金物を盜みしからは命はない。

吉藏　又口出しをさつしやるか。

主膳　然らばそちは改心なし、包まず此の場で白狀なすか。

吉藏　今あなたの御理解で濟まねえこと、氣が附いて、考へて見ると世の中に、惡い事は出來ませぬ。
(ト誂への合方になり、)今日黑崎作右衞門をゆすつて金のその代り、明日までと預つた五三の桐の
金かな具、これを持つて居たばかり、此の御詮議を受けるのも脫れぬ惡事の天の網、我これ迄の
罪滅し、天下の爲めに申し上げます。

主膳　おゝ、其の仔細を申し聞かせよ。(ト主膳嬉しき思入にて前へ進む。)

吉藏　元わたくしは上州の安中在の片田舍枇杷窪村の產れにて、餓鬼の折から惡戲者、烏川にて泳ぎを

習ひ兩眼明いて水底を自在に歩くことを覺え、遂に河童の吉藏と言はれるほどになつたが因果、土地の領主の御大老織田さまの御家來にて、黑崎伴右衞門といふ人に據ろなく賴まれて、金に目がくれお船藏の、川に沈んで每晩々々、伊豆へ行かう〳〵と怪しい聲で言つたのが、ぱつと世間の噂になり、それを種に御當家へ祟りをなすと言立つて、安宅丸を解いたのも、深い巧みがあつてのこと、其の時河に沈んでゐた禮に百兩貰つたけれど、根が惡錢に忽ちなくし、今日又百兩跡ねだりに伴右衞門をゆすつたところ、明日百兩遣はすからそれまでこれを取つて置けと、金の代りに渡しました。其の金無垢の金物は、毀したときに伴右衞門が竊に盜んで置いた品、露顯なしても此の事は決して白狀いたしませぬと、約束しては置きましたが、天下の爲とおつしやるから、先非を悔いて吉藏が、殘らず申し上げまする。

主膳　ほゝお、惡に強きは善にもと、世の諺に言ふごとく、よくぞ惡心飜へし包まず白狀いたせしぞ。

金吾　いやこれに附けても面目なきは我々ども、一途に迫り背中の皮の破るゝ程拷問なせしが言はざる吉藏、所詮白狀いたすまじと思ひの外に夏目氏が、事を分けたる御理解にて、改心なして今の白狀。

九郞　流石は當家の御用人、われ〳〵共がよい後學、まことに感服。

兩人　いたしてござる。（ト兩人感心の思入。）

主膳　安宅丸に精あつて伊豆へ行かうと申すのは、心得がたく思ひしが、今吉藏が白狀にて、事明白に分つたり、天下の大事を自訴なしたる其の功に依り其の方が、命は某執成して心ず助け遣はすぞ。

吉藏　有難うはござりますが、命惜しさに言ふまいと誓ひを立つた其の事を、言つてはわしが濟みませぬ。天下の爲めとおつしやるゆゑ、包まず白狀いたしました、命は取つて下さりませ。

主膳　よしや惡事をいたすとも、自訴に當れば其の方が、命は決して取らざるぞ。

吉藏　それぢやあお約束が違ひます。

主膳　死する覺悟は義を立つる、所存であらうが某に、死する命を暫く預けよ。

吉藏　すりや、どうあつても私の。

主膳　命は自訴に取らざるぞ。（トきつと言ふ、吉藏これまでといふ思入あつて、）

吉藏　取らぬとあれば、是非に及ばぬ。

トアッといつて前へ俯伏になる。九郎次つかくと行き引起す。吉藏舌を喰切りし思入にて口より糊紅流るゝ。皆々驚き、

金吾　やゝ、こりや口中より流るゝ血汐。
九郎　正しく舌を食切る様子。(ト介抱する、吉藏よろしく苦しみばつたり倒れる。主膳これを見て、)
主膳　あゝ、此の心をばよき事に用ひしならば一方の、役に立つべきこれなる吉藏、悪事に命失ふは、
　さて殘念なことぢやなあ。(ト思入。)
九郎　して吉藏が、この死骸は。
主膳　某思ふ仔細もあれば、先づ其の儘に大部屋へ。
九郎　畏つてござりまする。(ト九郎次先きに徒士吉藏を抱き、下手へはひる。)
金吾　今吉藏が申し口では、容易ならざる一大事。
主膳　かね〲殿にも此の事を、心得難く思召し、眉を顰めたまひしが、案に違はず深き巧み、定めて
　是れは奸曲なる、臣下の者の勸めならん。
金吾　それといふのも金銀を、鏤めたる安宅丸。
主膳　終に破却に及ばれしも、
金吾　私慾に耽る大老ゆゑ、(ト大きく言ふ。)
主膳　これ、(ト押へるを木の頭)竊にめされ。

ト兩人四邊へ思入よろしく、早き合方にて、

ひやうし幕

四幕目

呉服橋内土手の場
丹前風呂二階の場
小石川傳通院の場

〔役名――黄門光圀卿、藤井紋太夫、魚賣久五郎、按摩玄碩、同朋多賀得齋、家主李右衛門、黑崎作右衛門、飴賣かんから兼實は山ノ邊主水、日勸進田圃の五郎七、竪井郷藏、横田兵藏、非人あざ市、同おた七、家主與九兵衛、町代佐右衛門、同太助、櫻風呂の小富、同女房お園、同下女お靜其他。〕

（呉服橋内土手の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面後へ下げて高足ほどの石垣の張物、この上通り一面の草土手所々に松の立木、上手大盡柱へ取附けやはり草土手のある石垣の張物、下の方疊んである葭簀張りの出茶屋、平舞臺所々に腰を掛ける程の捨石、總て呉服橋内土手際の體。爰に與九兵衛羽織着流しの家主にて、捨石に腰をかけ、佐右衛門太助同じく羽織着流し町代のこしらへにて捨石へ腰を掛け、煙草を吸付けて居る、此の見得飴屋の笛、おいとこ節にて幕明く。

與九　時に町代の佐右衛門さん、今日は何で番所へ出さしツた。

佐右　與九兵衛さん聞いて下さい、昨夜裏の掃溜の脇へ牝犬が子を産んだゆゑ、其のお屆けに出ました

のさ。

太助　はゝあ、それぢやあこなたも犬のことで、今日は番所へ出なすつたとか、わしもやッぱり犬のことでお訴へに出ましたのだ。

與九　いやもう當公方樣が戌のお年で犬を御寵愛なされるので、白が子を産んだ、それお届け、斑が居なくなつた、それお訴へと、馬鹿々々しいこともあるものだ。

佐右　その上犬が咬合をして怪我でもすると人間同樣、醫者に掛けてお届けに出るとは、神武このかた無いことだ。

太助　然し惡くはいふものゝ、毎日々々犬のお蔭で町代などは忙しいから、馬鹿々々しいと笑つて居ても、蔭へ廻ればお犬さまだ。

與九　その犬の事に附いて、爰に無慚な話しといふは、毎日長屋へ商ひに來た魚屋の久五郎だ、名に負ふ當時勢ひのいゝ御大老の屋敷の犬を殺した科で直に入牢、何と可愛さうなことではないか。

佐右　わしも昨日腰掛けで、其の話しを聞きましたが、跡にはそこひで目の見えぬ、親父が一人あるとのこと。

太助　それゆゑ度々長屋中でお慈悲願ひに出るさうだが、犬を殺した科人ゆゑ、いゝわんの御沙汰もないさ

うだ。

與九　然し、さういふごたごたがあつては、其處の家主は錢儲けだらう。

佐右　所がそこの家主の杢右衛門とやらいふ人は、世間の家主と事替つて、樽代や節句錢などを取らぬといふ評判ゆゑ。

太助　店子が引合でも喰つた時に、悦んで辨當代や番所入用を取るやうな、そんな慾張つた事はしなからう。

與九　いやさういふ家主が世間にあるから、お上に御苦勞が絶えぬといふもの、先づ家主をするからはいゝかすりを取るのが役德といふもの、親子喧嘩や夫婦喧嘩を長屋でするのを覗つて居て、大きな聲でもした時は出掛けて行つてそつと立聞き、中へ飛込み双方宥め、仲直りだと酒でも買はせ、十分馳走になつた上で、土產でも持つて歸るのが、家主の上手といふものだ。

佐右　はゝあ、それぢやあやつぱりお前さんは、家内繁昌長屋騷動といつて、神棚を拜む方だね。

與九　はて、それでなければ地主から僅かな給金を貰つた位で、ろくな暮しが出來るものか。

太助　わしも長らく町代をして、お前さんの近所に居るが、そんな慾張つたお人とは心附ずに居りました。

與九　はて、そこが浮世の譬の通り、町代元くらしといふものだ。

兩人　何を言はつしやる。

三人　あはゝゝゝ。（ト此の時下座にて、時の太鼓を打込むゆゑ。）

與九　八ツの太鼓は、呼込む刻限。

兩人　そんなら、與九兵衛さん。

與九　さあ一緒に來さつしやい。（ト三人上手へはひる、これにて時の太鼓を打上げ、床の淨瑠璃になる。）

〽打ちおろす太鼓も響く丸の內、風は南か北がゝり今日呼出しと聞く親の、眼病を連れて、
杢右衛門、道案内も氣あつかひ、

ト此の內花道より杢右衛門前幕の家主、羽織着流し草履にて先へ立ち、跡より玄碩着流し草履にて、
杖をつき出來り花道にて、

杢右　それ〳〵、其處に石があるから、杖の方へ寄んなせえ。

玄碩　はい〳〵、左樣でござりますか。

杢右　今渡つたのが吳服橋で、爰はもう丸の內だから、向うの土手で待合すとしよう。

玄碩　左樣なら、只今のが吳服橋でござりましたか、いやもう中年盲目で勘が惡く、嘸御迷惑でござりませう。

杢右　何さそんな心配をしなさんな、どうで盲人と一緒に歩きやあ、此のくらゐな世話はありうちだ。

〽杖を力と頼みある連れの跡より探り足、（ト此の内兩人舞臺へ來り、）

玄碩　もしお家主さま、さうして只今鳴りましたは、ありや何時でござりまする。

杢右　あれは八ツのお太鼓だから、丁度これからお白洲へ呼込みになる汐先きだ、爰にお約束の石があるから、まあ腰を掛けなせえ。

玄碩　はい〳〵これはお世話さまでござります。（ト杢右衛門玄碩の手を持ちて有合ふ捨石へ腰を掛けさせる。これより合方になり、）昨日日勸進の五郎七どのが來まして、忰は今日お呼出しになるから、逢度くば呉服橋内の土手際へ來て待つて居ろと敎へてくれましたから、お前樣へ御相談申してお長屋の衆でも賴みまして、連れて來て貰ひませうと存じたところを、お家主さまが御自身に斯うやつて出掛けて來て下さりますとは、お慈悲深いと申しませうかお情深いと申しませうか、お禮は詞に盡されませせぬ、此の御恩は一生忘れはいたしませせぬ。

杢右　何の〳〵其の禮には及びませせぬ、よく噺し家のいふことだが、大家といへば親も同然店子といへば子も同然だ、其の店子のこなた衆が不時な災難で難儀をするのを何で默つて見て居られう、おれが世話をするのは當り前だ、たゞ感心だと思ふのは日勸進のあの五郎七、尤も長らくこつちの

町内を廻つて居るとはいふものゝ、非人に稀な親切もの、聞けば仲間の通りもよく小頭とやらをして居るさうだが、何になつても心掛けをよくせえすれば、天道樣が默つて見ちやあ居さつしやらねえ。それに又感心なのは小い時に養女に貰つて、育てたとやらいふ妹ツ子だ、いつぞやこなたの連合が長の病氣で死んだ時、取片附の金に困り、丹後前の櫻風呂へ藝妓の勤めにやつたさうだが、水生業に似合はねえ、素人も及ばぬ孝行もの、淸正公さまの歸りだといつちやあ每朝內へ見舞に來て、共々心配して居るのはどんなにこなたの强身か知れねえ、それもやつぱり天の惠みだ。

玄碩　いやもう義理ある中の親の身で、あんな勤めをさせますのを恨みもせずして、あのお富も孝行にしてくれます。

杢右　そこがやつぱり天道さまの、お惠みといふものだ。

玄碩　どうぞいたしてお惠みで、早く悴を牢內から、出してやりたうござりまする。

杢右　それ〳〵そこがお惠みだ。

玄碩　まだ悴めは見えませぬかな。

杢右　大方程なく天の惠みで、息子がこれへ來るだらう。

玄碩　あゝ早く逢ひ度いものぢやなあ。

〽天の惠みもあれかしと、我が子の來るを待つ折柄、

トばた〳〵になり花道より、五郎七半纏着流し股引尻端折り、草履がけにて手拭を冠り、日勸進のこしらへにて走り出來り、直に舞臺へ來て、

五郎　玄碩さんお待遠でござりました、あれ〳〵あすこへ息子さんが、畚に乘つてやつて來ます。

玄碩　さういふ聲は五郎七どの、よく知らせて下された。

杢右　五郎七どん、御苦勞だの。

五郎　これはお家主さま、御苦勞さまでござります。

玄碩　さうして悴は、どこへ來ます。

五郎　あれ〳〵向うへ參ります。

玄碩　あゝ、これ、何處へ來たやら目は見えず、早く側へ來ればよいが。

〽見えぬ目ながら延上り待つは血筋かしばり繩、牢舍の疲れ畚へかゝる憂き目も身一ツに、荒くれ男兩人が、差擔ひてぞ歩み來る、

ト此の内花道より、久五郎お仕着裝にて繩にかゝり畚に乘り、これをあざ市あを七の非人擔いで出來り、花道にて非人兩人五郎七を見て、

あざ　コウ七やい、向うに頭が待つて居るぜ。
あを　もう一息だ、肩をかへて遣ツつけろ。
あざ　合點だ。
〽足を早めて差寄れば、（ト舞臺へ來る。）
五郎　御苦勞々々、そこへそつと下してくれ。
あざ
あを　承知しやした。
ト舞臺よき所へおろす。此の内久五郎始終弱りし思入にて、ぐつたりとして俯向き居る、玄碩聞き耳を立て居て、
玄碩　そんなら、悴は參りましたか。（ト側へ寄らうとするを杢右衞門留めて、）
杢右　あゝこれ、今逢はせるから待つて居さッし。（ト非人兩人此の樣子を見て、）
あざ　それぢやふ頭、ちつとの間、
あを　どこぞへ、行つて居ませうか。（ト杢右衞門思入あつて、）
杢右　二人の衆、ちよつと待つて下せえ。（ト紙入より二朱金を一つ出し、）五郎七どん、これを二人に遣つて下さい。（ト五郎七に渡す。）

五郎　これぢやあどうも濟みません。

李右　はて。ちつとばかりだが、やつて下さい。

五郎　コウ二人とも、お禮を言ふがいゝ。

あざ　こりやあ旦那、

兩人　有難うござります。（ト件の金を貰ひ、）

あざ　コウ七やい、丁度向うに燗酒屋が居るから、此の間に一杯遣つて來よう。

あを　さうよ、半把になつちやあ呑まずに居られぬ、それぢやあお頭お頼み申します。

五郎　おれが慥に預つた。

あざ　こりやあ旦那。

兩人　有難うござります。（ト非人兩人下手へはひる、玄碩この樣子を聞いて居て、）

玄碩　何から何まで、お世話さまに。

李右　はて、其の禮は何時でもいへる。早く息子に逢つてやんねえ。

玄碩　さうしてどれに居りますな。（トこれにて五郎七久五郎の側へ行き、畚の棒をぬき、）

五郎　もし久五郎さん、しつかりしなさい。

〽言はれて思はず顔を上げ、（ト久五郎顔を上げ五郎七を見て、）

久五　おゝ、こなたは日勸進の五郎七どの。

玄碩　さういふ聲は久五郎か。

〽探り寄るのを見てびつくり、

久五　や、お前は親父さま。

玄碩　おゝ、おれだ。

久五　親父さま、よく逢ひに來て下すつたなあ。

〽思ひがけなき親の顔、見るも夢かや現かと、身を摺寄せて共涙、

ト此の内玄碩は久五郎へ縋ろ、久五郎は後手に縛られしまゝ玄碩に摺寄り、兩人愁ひの思入よろしくあつて、これより誂への合方、かすめて飴屋の笛をあしらひ、

玄碩　達者で居るとは聞いたれど、もし牢内で煩らうて死んでしまつたら逢はれぬと、夜の目もろくろく合はなんだが、よくまあ生きて居てくれた、おりやもうこれで明日が日に、死んでも思ひは殘らぬわいやい。

久五　えゝ親父さま詰らねえことを言はつしやるな、今お前が死んで見なさい、訪弔ひをする者もなく、

それこそ無縁ののたれ死、そりやもう稼ぎ人が居ないゆゑ、嘸困つてはござらうが、義理ある妹のあのお富が、年でも明けて歸るまで、どうぞ達者で居て下せえ。

玄碩　いや／＼おれが死んだとて、無縁になる氣遣ひはない、爰にござる大家さまを始め、お長屋の衆もそれは／＼親切にして下さるし、お富もあゝいふ氣質ゆゑ三日にあげず見舞つてくれ、その度毎に何がしか小遣ひだといつて、置いて行けば、おれが死んだ後でも差荷ひの葬ひ位は出してもくれよう。おれがことは案じずと手前はどうぞ達者で居て、早く娑婆へ出られるやう、神信心でもしてくれろ。

久五　さあ、わしも體を丈夫にして、再び娑婆へ出たいものだと明暮信心して居るが、この疲れでは所詮長くは。（ト言ひかけるを杢右衛門割つて出で、）

杢右　えへん／＼。（ト思入あつて久五郎に呑込ませ、）いや久五郎どん、とんだことだつた、此方のやうな善人がこんな馬鹿な目に逢ふといふは、神も佛もねえやうだが、そこが正直の頭に神宿るとやらいふ譬で、こなたが送りになつた跡でも長屋一同が氣を揃へ、お慈悲願ひにも二三度出たし、又とつさんが困るだらうと地主からは米を送り、長屋の者からは味噌を送り、それに妹ッ子は今聞く通り三日にあげず見舞に來て、小遣ひを置いて行けば、却つてこなたが内に居るより、とつさ

んは都合がいゝ位だ、それもこれも天道様が見通しでござるから、天の惠みといふものだ、まだもう一ツ仕合せといふのは牢へはひつたこんたの體だ、どんな煩ひでもして居るかと、實はわしも案じて居たが、見ると聞くとは大きな違ひ、ぴん〳〵として其の通り、（ト玄碩へ思入あつて呑込ませ。）却つて内に居るよりは、顏の色艶などがいゝといふのは、やツぱりこれも天の惠みだ

〽見えぬ目かいを幸ひと、嘘も道具の一筋に、親父はまことゝ嬉しげに、

玄碩　もしお家主さま、左樣なら悴めはあの丈夫さうに見えまするか。

杢右　おゝ丈夫とも〳〵、天の惠みで大丈夫、これぢやあめつたに死にやあしねえ。

五郎　いやもう畚などに乘る者は、病人のやうに素人衆は思ひ違ひをして居るが、囚人の中でも役附なけりやあ、めつたに乘られぬ此の畚、侍でいへば乘物でございます。

杢右　さうとも〳〵、これもやつぱり天の惠みといふものだ。

〽言ひ繕へば盲人の、さてはさうかと打ち頷き、（ト玄碩思入あつて。）

玄碩　見えぬ盲目の悲しさに、畚へ乘つて來ると聞き、煩うて居る事かと側へ駈寄り撫でまはせば、中々疲れた樣子といひ、聲も不斷の大聲が瘦嗄れて居りますゆゑ、所詮長くは持つまいと悴の牢死をせぬ内に先きへ死なうと思ひましたが、それで少しは落着きました。それはさうとこれ悴、人

の話しに聞いて居るが牢へ初めてはひる時は、蔓をたんと持つて居ぬと、極め板とやらでひつぱたかれ、痛い思ひをするといふことだが、あゝいふ不意な場合でいつたことだから、ろくに手當が屆かぬゆゑ、嘸牢内へ行つた時、酷い目に逢つたらうな。

久五　そりやもう、此方のいふ通り。（ト言ひかけるを、）

李右　えへん／＼。

〽目で知らすれば心得て、身の憂き事を押隱し、（ト久五郎思入あつて氣を替へ、）

久五　なあにそりやあ大違ひだ、わしも勝手を知らぬからどんな酷い目に逢ふことかと、心配をして居ましたが、さゝやを這入つてお戸前から裸でどんと突き込まれ、地獄へ落ちたと思ひの外、そこが地獄にも知る人で名主をして居る旦那といふのがわしの顔を知つて居て手當者との聲がゝりに、極め板牢法負けて貰ひ、向う通りへ遣られるところを、金毘羅下へ廻されて、夜は旦那のおいたはりを勤めて高い疊の上、思ひ掛けなく樂をしました。

五郎　こなたがはひつた西の大牢は、情深いと名代の名主、元上州の長脇差で人殺しのある惡黨だが、産れが武家ゆゑ物も讀め、昔の惡事を後悔して、今ぢやあ中の囚人に仁義の道を說いて聞かせ、罪滅しをするさうだ。

杢右　さういふ名主の居る所へ、久五郎どんがはひるといふも、これもやつぱり天の惠みだ。

玄碩　いやも地獄で佛といひませうか神の助けといひませうか、お情深い名主さま有難いことでござります、それ程まゝに親子の者に、天の惠みがあるならば、たつた一目悴の顏が見たいものだが、それとても、三年このかた目を煩ひそこひとなつて按摩鍼、杖と賴んだ悴にも今日別るゝが一生の、別れと思つて居りまする。

杢右　これ〳〵親父どん、又そんな詰らねえことをいふか、よく物を積つて見なせえ、お觸に背いたとはいふものゝ、同じ罪でも生業物の鯛を引いたは犬が惡い、いはゞ盜人も同樣ゆゑ久五郎どんが打つたのだ、その打ち所が惡くツて死んだ犬ゆゑ下手人に、こんな馬鹿な目にあつたれど、少しは上でも思召があるから、赦免になるが違ひはねえ。

五郎　お家主さんの言ふ通り、きつと出牢になりませうから、そんな心細いことは言はぬものだ。

玄碩　いえ〳〵お家主さまや五郎七どのは、わしに氣を落させまいと力を附けては下さいますが、娘を贔屓にして下さる其ノ筋のお客さまに委しく聞いて貰ひましたが、將軍家より下されし御大老さまの手飼の犬を殺した科で入牢したれば、所詮命は助からぬと慥な事を聞いて居ります。

久五　それぢやあこなたも其の事を、疾うから聞いてござるとか。

玄碩　おゝ、それゆゑ、どうで助からぬと、おりやあきらめて居るわいやい。

李右　こりやあ天の惠みぢやわ、押し切れなくなつた。（トこれより床の合方になり、）

久五　わしも牢内で名主の旦那の足を摩るその時に、どういふものかと身の罪の譯を話して聞いたところ、輕いやうでも手前のは其の筋道が惡いから、所詮命は助からぬ、もう〳〵娑婆へ出ようなど と無駄な事を考へずに、斯うして命のある内に身寄りへ蔓でも言つてやり、好きな物でもたんと喰ひ體の樂をするがいゝと、只のものでは喰はれない干物の正身やちらしの飯、旦那が殘したお餘りを喰へといつては下されど、命がないと聞いてから胸はひつたり痞へてしまひ、喰物さへも碌々にわしが喉へはひりませぬ。

〽今は我慢もなく涙、まことを明し伏沈めば、親父は一倍胸せまり、

ト此の內久五郎よろしくこなし、玄碩愁ひの思入あつて、

玄碩　そんなら娘が聞いて來た通り、どうでも命は助からぬか、幾らいつても追附ぬが、假令お觸が出て居ようと生業物の魚をば犬に銜へて行かれゝば、元も子も失ふゆゑ有合ふ出刃で峰打ちにした手が外れて眉間を切り、死んだ犬めは自業自得、それをお觸に背いたと直に縛つて入牢させ、まだ其の上に犬の代りに人の命を取らつしやるとは、何ぼ將軍樣だというて、あんまり無慈悲な犬

氣違ひ、その理窟をば言つて下さるお人は天下にないことか、おりや公方様が恨めしいわえ。

〽わつとばかりに取り亂し、上を恨みて盲人のもゝもむ下々ぞ、〽あはれなる。

ト玄碩よろしく泣き落す。

五郎　おゝ尤もだく、當公方様の犬氣違ひは、誰でも言はねえことではないが、御大老を始めとして上お役人に誰一人御異見をする者もなく、下の難儀を構はぬからこんなことにもなるといふもの。

杢右　何でも當時公方様の天窓を押へて萬民の、難儀を救つて下さるお人は小石川の親玉ばかり、外に賴みになるお方は、あつてもみんな御大老へ、遠慮があるから默つて居るのだ。

五郎　どうぞ水戸の黄門様でも、御異見をして下さればいゝ。

杢右　さうなる時には杢右衛門も、天の恵みと言はれるわえ。

〽影の噂も天道の照すを賴む下の口、逢ひ度き親の顏さへもこれがこの世の見納めと、思へば跡を打ち案じ、（ト此の内久五郎思入あつて又床の合方になり、）

久五　もし親父さま、今いふ通りもう所詮再び娑婆へ出られぬとあきらめて居りますから、今日逢うたのが逢ひ納め、是れから白洲へ呼込まれ、多分仕置の言渡しと心で承知して居れば、この世でお目には掛られません、どうぞこなたもこれまでの定まり事とあきらめて、お富が年の明くまで

は、體を丈夫に生き延びてあれに聟でも取つた上、安心をして死んで下さい、假令仕置になりましても、こなたの體に何事もないやう祈つて居るからは、短氣を出しては下さるな、逆さまながら一遍の跡で回向を頼みますぞ。

玄碩　いや其の回向をしては居られぬ、牢死をしたと聞かぬ内に、先きへ死なうと思つたが、今日呼出して仕置きと極り手前が切られて死んだと聞けば、直ぐ首を縊つて死んで行くから、六道の辻で待つて居ろ。

久五　さゝ、それぢやあ親から貰つた體を、失ふ不幸ばかりでなく、親殺しも同じことゆゑ、此の世の罪が重くなり、死んだ先きにて又どんな責に逢はうも知れぬから、死ぬのは止めにして下せえ。

玄碩　いや〳〵、あの世で若し手前が、責にでも逢ふやうなら、おれが出て言譯をする。

久五　それぢやあどうも濟みませぬ。

玄碩　えゝ濟むも濟まねえもいるものか。

〽杖にはあらで突詰めし、老の一徹二言とは、止め兼ねてぞ居る所へ、

ト此の內兩人よろしく思入、爰へ以前のおざ市、おなを下手より出來り、

あざ　もし頭、向うの土手でさつきから、見合せて居ましたが、

あを　こんなに暇が掛つちやあ、又お掛りに叱られます。
五郎　いや、どうせおれが一緒に行つて、遲參のお詫をするつもりだ。
久五　それぢやあ父さん、もう所詮再び娑婆へは出られぬとあきらめて居りますから、此方も體を丈夫にして、お富の年が明くのを待ち、あれに聟でも取つた上安心して死んで下せえ。
玄碩　いや達者では居られぬから、もう一遍探らせてくれ。
杢右　はて、さう言はずと二人とも、天の惠みを待つがいゝ。（ト是れにて久五郎玄碩の顏をぢつと見て、）
久五　あ、わしが稼いで居てさへも、足らぬ暮しに天秤は肩へ當れど細元手。
玄碩　その手助けと日暮から、杖をつツぱり路地口を出ても按摩の中年もの。
久五　馴れぬことゆゑ療治もなく、歸る夜風にぴい／＼と。
玄碩　笛の音よりも身にしみる、寒さに探る高足駄。
久五　がらつく音に米櫃の、輕き親子の錢財布。
玄碩　はたいて朝の買出しも、嘸辛からうと思つたが。
久五　今考へればあれが極樂。
玄碩　それに上越す苦しみは。

久五　何たる因果なことだやら。

玄碩　目の見えぬが殘念だぞ。

〽涙果しのあらざれば、非人が元の春へ乘せる體も痩枯れて入る日間近き八ツ下り、居所の未の下刻ぞと、行くを止むる盲人の親は子ゆゑの闇の目や、あかぬ別れと家主が支へ隔つる其の暇に、せり立てゝこそ急ぎ行く、

ト此の内久五郎へ取縋りよろしく愁ひのこなし、非人兩人これを引分け、久五郎を介抱して春へ乘せる。側から五郎七棒を通す、これにて非人兩人久五郎を舁上げる。玄碩これを知らず五郎七の袂へ縋つて居るゆゑ、五郎七氣の毒だといふこなしよろしく、李右衞門は始終この體を見て愁ひの思入あつてトヾ玄碩を隔てる、これにて五郎七せり立て非人兩人久五郎を擔ぎ、五郎七附いて上手へはひる。玄碩はこれを知らず、上手の方へ思入あつて、

これ悴、未練なことは言はねえから、もう一遍詞を交してくれ。これ、悴々。

李右　これ〳〵玄碩どん、息子は疾うに行つてしまつた。

玄碩　えゝ、そんならもう行つてしまひましたか、あゝ情ないことだなあ。

〽本意なく〳〵も伏し轉ぶ、共にあはれと李右衞門諭し兼ねてぞ忍び居る、小蔭を出づる小

商人。

ト此の内玄碩愁ひのこなしよろしく、爰へ下手の疊んである出茶屋の蔭より前幕のかんから鉦飴賣のこしらへにて箱を肩に掛け、摺鉦を持ち手拭を冠り出て、

飴賣　お家主さま、大きに今日は御苦勞さまでございます。

玄碩　や、さういふ爰は。

杢右　不斷町内を廻つて歩く、飴賣の兼藏どの。

玄碩　そんなら、今の樣子をば。

飴賣　へい、一部始終はさつきから、小蔭で聞いて居りました。（トこれより本町二丁目の合方になり、かんから鉦捨石へ腰をかけ、）いやも、親子の衆のお話しを聞いて、貰ひ涙を思はずこぼし、箱の中へ仕込んで來た飴が涙でとろける程、葭簀の蔭で泣いてをりましたが、あの時のことを思ひ出すと久五郎さんが殺した犬は、當時天下で飛鳥も落ちる御大老樣の手飼ゆゑ、所詮命は助りますまいが、そこを一番助けようといふ、好い工風がございますが、何と遣つて御覽なさらないか。

玄碩　さうして、悴の命を助ける、

杢右　いゝ工風と言ひなさるのは。

飴賣　旨く行かぬかは知れませんが、此の趣きを小石川の、黄門樣へ申し上げたら、十に八九はお取上げになつて、久五郎さんの切られる首も、繼げるだらうと思ひますが、此の分別はどうでございます。

ト是れにて杢右衞門思入あつて、

杢右　いや、三人寄れば文殊の智慧と、通り掛りの兼藏どのまでが、さう親切に言つてくれゝば、爰は家主が肌を脱いで、水府樣へ訴へて出ようが、然しお屋敷へ願つて出るにやあ、餘つぽど手續きがむづかしい。

飴賣　はて表向きに願つて出ては手數ばかり掛つた上、ひよつと役人の惡いのにでも出會すと、上へ通らぬこともあれば、幸ひ今日は水戸樣が御菩提所への御佛參、お成りの歸りを待受けて駕籠訴をしてはどうでございます。

杢右　いやお成先きの駕籠訴には、この家主も氣が附かなんだ、失禮ながら飴屋さんにしては、恐れ入つた思ひ附きだ。

飴賣　これといふも水戸樣の、御佛參にさつき出逢つて、下に〳〵を喰つたから、それでふつと思ひ附きました。

玄碩　さうして水戸様の御菩提所は、どちらさまでござりますな。

飴賣　その御菩提所はお國ださうだが、傳通院が假の菩提所。

李右　おゝ、あの寺なら知つて居る、そんなら爰から直に行つて。

玄碩　善は急げといひながら、それではあんまりお氣の毒。

李右　はて、やつぱりこれが天の惠みだ。

飴賣　そんなら爰からちつとも早く。

玄碩　御歸館のない其の内、

李右　どれ、それぢやあ支度をしよう。

〽尻引ッからげ家主が、羽織を脱いで身ごしらへ、

ト此の内李右衛門よろしくこなし、玄碩かんから兼の居ぬ方へ手をつかへ、

玄碩　これは〳〵飴屋さん、御親切に有難うござります。

飴賣　玄碩さん、わしはこつちだ。

玄碩　はい、左様でござりましたか。

李右　さあ親仁どん、一緒に來なせえ。

ト手を取つて引立て、花道へ行かうとするを、かんから兼落ちてゐる杖を取りあげ、

飴賣　もし、杖が爰にありますぜ。（ト玄碩に渡す、玄碩さぐり取つて、）

玄碩　すんでに忘れて行くところ。

杢右　それもやつぱり天の惠みだ。

〽手を引連れて行先きも、躓く砂利の小石川、道を早めて走り行く、

ト杢右衛門玄碩の手を取り花道へ行きかけ、こつちが近いといふ思入あつて兩人舞臺の上手へはひろ、かんから兼これを見送りぢつと思入、ばた〳〵になり下手より中間一人狀箱を持ち出來り、かんから兼を見て、

中間　山邊さま、

飴賣　あこれ。（ト押へ四邊へ思入。中間小聲になり、）

中間　はツ、我君よりの火急の御狀、持參いたしてござりまする。

ト出す、これにてかんから兼侍の心になり、

飴賣　おゝ、大儀であつた。

ト件の狀箱を受取り、中より狀を出し開き見て、口の内にて讀むことあつて頷き、懷中より封じ

切りの狀を出し、狀箱へ入れ中間に渡す。

中間 すりや、此の御狀を我君へ。

飴賣 むゝ、(トうなづく、此の時下座にて時の太鼓の頭を打ち込むゆゑ、かんから鉦氣を替へ元の飴賣の思入にて鉦を叩きながら、)「鐵灸の折れでも火箸の折れでも、何でもかんでもとつけいべいにしよ。」

ト言ひながら四邊へ思入 中間は件の狀箱を持ち、下手へはひる。此の模樣時の太鼓にて道具廻る。

(櫻風呂二階の場)＝本舞臺一面の平舞臺上下折廻し障子屋體、正面上の方一間の床の間、この下手一間地袋違ひ棚、ずつと下手腰張の茶壁、此の前に客の小袖を衣紋掛にて釣しあり、この下に服臺の中へ懷中物、帶など入れてあり、下手よき所に、階子の下り口、日覆より一面に櫛形の欄間をおろし舞臺前雨落より二階の手摺を出し、總て丹後前櫻風呂二階座敷の體、爰に酒肴を取散し黑崎作右衞門くりさげ鬘敵役の侍、着流しにて座蒲團の上に住ひ酒を呑み居る、お靜島田鬘前垂がけ櫻風呂の女にて酌をして居る、竪井鄕藏同じく敵役の侍にて座蒲團の上に住ひ、手を叩きながら囃し立てゝ居る、橫田兵藏同じく敵役の侍にて手拭を後鉢卷にして、此の間へ箸を二本挾み扇を持ち踊つて居る、この見得賑かなる騷ぎ唄にて道具留る。

鄕藏 蛙ひよこ〳〵蛇ぬら〳〵の、中に蛞蝓が見てござる、ヨカバイ〳〵。

兵藏 蝸牛つッつくな、まい〳〵つッつくな〳〵。(ト踊ることよろしく。)

作右　ヨウ〳〵、横田氏の蝸牛踊、まことに以て感心々々。
お靜　ほんに、これから横田さまは蝸牛といふお名にいたしませう。
郷藏　いや身共の美音を褒めずして、斯樣な踊が何で感心でござる。
兵藏　どこかよい所があればこそ、黑崎氏の御賞美に預りまするて。
作右　外の踊と事かはり、只今のは間の狂言から引出した踊ゆゑ、どこか品がよろしうござる。
お靜　それでは大方藤井さまが、お師匠番でござりませう。
郷藏　然らば身共も紋太夫殿に、何ぞ指南を受けねばならぬ。
兵藏　さう問屋を知られては、類が殖えて共潰れでござる。
作右　まづ藝道は差しおいて、息つぎに獻じませう。
郷藏　餘所の座敷の三味線で、騷いで居るのが見得でもござらぬ。
お靜　それはさうと小富さんは、何をしておいでなさるやら。
兵藏　小富も長いが藤井氏のお湯も、大分長いといふもの。
作右　さては下にて女子供に、當りを附けて居られはせぬか。
郷藏　いや〳〵長湯をいたすのは、綺麗に磨いて當込みの小富に見せる氣でござらう。

お靜　成程さうでござりませう。

兵藏　どれ、下へ行つて見て參らう。

ト立上る。爰へ階子の口より紋太夫湯上りの浴衣裝にて出來り、兵藏を見て、

紋太　横田氏には角を生して、何ぞちん〳〵の筋でもござるかな。（トこちらへ來る。）

作右　藤井氏にはお磨きと相見え、大分お湯がお長うござつたな。

紋太　いや先頃から風を引いて居つて、久しぶりにて入湯いたしたゆゑ、大きに長湯をいたしてござる。

鄕藏　餘りお長いゆゑ、お先きへ始めてござる。先づ〳〵、お席へおいで下されい。

トお靜うしろ　掛けある小袖を取つて、

お靜　お風氣なら、今の内お召し替へなされませ。

紋太　然らば御免を蒙つて、浴衣の上へ羽織つて居よう。

ト紋太夫上手の座蒲團の上へ住ひ、浴衣の上へ小袖をはおる事などよろしく、伴右衛門猪口を取つて、

作右　藤井氏持合せました。（ト猪口をさす。）

紋太　昨夜からの持越しで、未だ腹に殘つて居るゆゑ、先づ〳〵酒はお預けといたさう。

兵藏　左樣な節は熱いのを、ぐつと一杯迎ひにやらるゝと、それでお心持が直りまするて。

お靜　いえ、藤井さまの召上らぬのは、お持越しではござりますまい。
紋太　なに、持越しでないとはな。
お靜　小富さんのお顏が見えぬゆゑ、それでお厭なのでござりませう。
鄕藏　こりやお靜の申す通り、熱燗の迎ひ酒より、小富を迎ひに遣はす方が、お腹直しにはよいといふもの。
紋太　いや、左樣に胸中を見拔かれては、藤井紋太夫一言もござらぬ。
作右　こりや〳〵お靜、下に何をいたして居るか、餘り遲いから見て來てくりやれ。
お靜　はい〳〵、畏まりましてござりまする。
　　トお靜は下手の階子の口へはひる、伴右衞門四邊へ思入あつて、
伴右　いやなに藤井氏、幸ひ他聞もござらねば貴殿へ內々申し入れるが、豫て御密談申しおきたる夫の安宅丸破却の一條、拙者が賴んで水中へ玉に入れたる河童の吉藏、昨日稻波石見守の供先きにて亂暴いたし屋敷へ引かれて參つたと、手前屋敷の中間が、知らせに密々樣子を探れば、褒美代りに渡し置いたる五三の桐の金物より、嚴しき詮議になりしとやら、なか〳〵彼奴も癡者ゆゑ容易な事にて一大事を白狀いたす奴にはあらねど、萬一手痛き拷問に逢ひ恠へ兼て何もかも、若し喋

べりでもいたさぬかとまことに以て心掛り、よき御手段はござるまいか。

ト是れを聞き紋太夫思入あつて、

紋太　いや其の儀は必ずお案じあるな、假令彼奴めが如何樣に大事を白狀いたさうとも、石見守は若年寄、大老職たる其許の御主人に、齒は立たぬの道理、かれこれ見合せ居る内に、手前主人の水府公へ石見守を讒言なし、お役御免の平大名といたす時には淀稻波の高が分家の石見守、それにて萬事泣き寐入り、御心配なことはござらぬ。

作右　左樣に貴殿が仰せあれば、それにて我々安堵いたす。

鄕藏　何卒水府へ石見守の、

兵藏　讒言をお構へ下さるやう、

作右　偏に願ひ、

三人　奉る。

紋太　その儀は身共が承知いたした、その代りには御兩所には、小富がこれへ參りなば、座敷を暫時お外し下され。

鄕藏　その儀は承知、

郷藏
兵藏　いたしてござる。
伴右　いや、戀には身をも捨小舟と、小富の儀にて我々へ、斯くまでお頼みなさるれど、貴殿方へは諸方より種々な事を持込みまして、水府公への御推擧を、お頼み申しに參るでござらう。
紋太　いやもう參るとも〳〵、それからそれと傳手を求め、樣々な儀を頼みに參り、實に當時はうるさうござる。
郷藏　その代りには、お袖の下が。
兵藏　又うるさい程に參るでござらう。
紋太　いや、左樣の事は船中にて、必ず申さぬものにて候。（ト ちよつと謠をうたひ、）
皆々　あはゝゝゝ。（ト笑ふ、此の時下手の階子の口にて、）
お靜　さあ〳〵小富さん、お早くおいでなさいまし。
　ト流行唄きつばりとなり、小富藝者好みのこしらへにて出る、後より以前のお靜三味線を持ち出來る、皆々小富を見て、
伴右　いや、藤井氏の思ひもの、
三人　待兼ねて居た〳〵。（ト小富下に居て、）

小富　皆さん、よう入らつしやいました。

紋太　これ小富、いかに當所の流行ッ子だと申して、あまり勿體をつけ過ぎるではないか。

小富　お待遠と存じながら、生憎昨日髪を洗ひ、結び髪で居りましたゆゑ、髪結さんの來るを待ち、それで大きに遲くなりました。

伴右　左樣な譯なら其の儘にて、洗ひ髪にてをる所を見せてくれゝばよいことを。

鄉藏　つくらぬ所が又一倍、美しいのに惜しいことをいたした。

兵藏　さあ〳〵、そこは餘り手遠だ、藤井氏のお側へ〳〵。（ト無理に小富の手を取り、紋太夫の側へやる。）

小富　ちよつとお座附をつけまして。（ト三味線を取らうとするゆゑ。）

紋太　いや、三味線は後にして、早速酌を頼みたい。

お靜　ほんに藤井さまは小富さんの、お酌でなければ御酒をあがらぬとおつしやつてゞございます。

小富　それは人違ひであらうわいなあ。（ト酌をすることよろしく、紋太夫酒を一口吞み）

紋太　又今日も吞過さねばよいが。

伴右　我々も小富の酌では、例の通り酩酊なし。

鄉藏　黑崎氏の淸元に、横田氏の諸國行脚。

兵藏　角力甚句の打留めまでは、種々藝道を取仕組み。
お靜　ほんに只今ので、むしろ踊りは、ありや新藝でござりますな。
　　ト此の內皆々捨ゼリフにて酒盛よろしくあつて、
作右　いやなに、御兩所、今のうちに御入湯をなされぬか。
鄕藏　酩酊いたして湯へはひるは、體の毒と申すこと。
兵藏　湯よりもやはり小富の酌で、熱燗といたさう。
作右　はて、御兩所も程のわるい、いやさ、程の惡い時入湯いたすと、溫い湯へ出ツくはします、丁度今が幕の切り所、いやさ、沸き加減でござらうがな。
お靜　丁度お湯もすいて居りますから、只今のうちおはひりなされませ。
　　トこれにて兩人なるほどゝいふ思入あつて、
鄕藏　いかさま、爰等が粹を通し、入湯いたす所でござる。
兵藏　我々共も丹前風呂の、水に染つて色男と、
鄕藏　名の附くやうに、
兩人　なるでござらう。

お靜　どれ、御案内いたしませう。

　　　　　　　　　トお靜先きに鄕藏兵藏踏子の口へはひる、小富こなしあつて、

小富　どれ、わたくしはお燗を直して、（ト德利を持つて立上るを、）

紋太　これ小富、爰に居やれ。

小富　でも、お銚子が。

紋太　はて銚子はおぬしが行かずとも、女を呼んで申し付ける。まあ下に居やれといふに。（トこれより端唄の合方になり、）先達てよりこれに居る黑崎氏を媒介にて身共が妻にいたしたいと、得心の儀を申し入れても、按摩導引の娘ゆゑ不釣合だと言拔けて、一向おぬしは取合はぬさうなが、假令下賤の娘でも、そこが世俗の玉の輿、器量の勝れた一得にて、身共の妻になる時は、その身ばかりか親父まで直に出世の樂隱居、又親許が惡いゆゑ肩身が狹いと思ふなら、黑崎氏を假親に賴む手當もいたしてゐる、さすれば何も身分違ひの不釣合とは言はれぬ譯、さあ斯う申し出したからは、深くはまつた風呂の湯より熱くなつたる紋太夫、外から水をさゝれぬ內、いなやの返事を聞かせてくりやれ。（トいへども小富差俯向いて默つてゐるゆゑ、）いやなに黑崎氏、これ程身共が申しても、小富が返事をいたさぬは、こりや氣に入らぬと見えまする。

伴右　何の〳〵左樣なことがござらうぞ。斯樣申せば其許へ輕薄らしく聞えますれど、當時天下の名君と呼ばるゝ水府の御家臣にて、衆に秀でゝ何事も貴殿でなければならぬ程、光圀卿の御意に入り、御人品といひ男振り、美男といつても恥しからず、其の上第一御內福で金銀珠玉が山の如く、御藏の內にどろ〳〵と納る御代こそ目出度けれ、その老松の一生涯枝葉を榮えて暮せる御身分、又藝道なら能に謠曲、その外何でも一ツとして、出來ぬといふことのない先生株の藤井氏、男でさへも惚々と貴殿のお德を慕ひまするに、それをとやかく申すなどゝは、女の冥利に盡きるといふもの、何氣に入らぬことがござらう。

紋大　いや〳〵、貴殿は日頃より身共と水魚の中なるゆゑ、申さば緣者の贔屓目で左樣に仰せ下されど、似合の惡き大小もさゝねばならぬ役目にて、手前のやうな無骨者は婦人の方での嫌はれもの、所詮美人の聞えを取つた今流行ッ子の小富などの、口に合ぬは知れて居れど、そこが凡俗戀の慾、足でも近く參つたなら、厭な客でも義理づくにて靡かぬこともあるまいかと、これまで日每通つて參り、遂には貴殿へ取持ちをお賴み申すことになりしが、それも向うできつぱりと厭なら厭と申しなば又あきらめもござらうが、あのゝものゝと申し拔け、所謂蛇の生殺し、釣られて居つては埒が明かぬ、氣に入らぬなら入らぬでよい、身共も武士ぢや今日限り、ふッつり思ひあきらめ

ようわえ、

（トきつと言ふ、此の内小富術なきこなしよろしくあつて、）

小富　さあ、餘り古風な藝者だと、お笑ひ受けるも恥しく、申し兼ねて居りましたが、實は子供の時分から、定まる夫がござりまする。

紋太　して、其の定まる、

紋太 作右　夫と申すは。（ト合方きつぱりとなり、）

小富　何をお隠し申しませう、定まる夫と申しまするは、兄だと申して居りました魚賣の久五郎、とさお斯うばかり申しましては、御合點も參りますまいが、わたくしことは五ツの年兩親に死別れ、今の父さん玄碩さまは死んだ母さんの兄さんゆゑ、その縁により養女に貰はれ、末々従兄の久五郎と夫婦にするとの許嫁、假令かうした藝者になり浮いた勤めはして居れど、年が明ければ家へ戻り、夫に任せる此の身ゆゑ、女子の冥加に叶うたる申し分ない藤井さまが、それ程までにおつしやるは、飛び立つほどにお嬉しいが、其の御返事のなりかねまする譯と申すは義理のある、兄妹中の許嫁がござりますゆゑお二人さま、どうぞこれにて悪しからず思召して下さりませ。

紋太　そりや定まりし夫と申すは、兄と聞きたる魚賣の久五郎にてあつたるか。

作右　魚屋仲間に身が屋敷へ出入をいたすものもあれば、そちの身許も聞いて置きしが、義理ある中と申す儀は、つひぞこれまで聞かなんだ。

小富　いえ〳〵嘘と思召すなら、家へお尋ね下さりまして、お聞合せ下さりませ。

トこれにて紋太夫思入あつて、

紋太　いや、それ程に申すゆゑ夫に相違なからうが、其の久五郎と申す者は、最早この世の人ではないわえ。

小富　えゝ、そんならもしや牢死でも。

紋太　いや、まだ牢死はいたすまいが、先日も申す通り、これに居らるゝ黒崎氏の御主人、織田筑後殿の寵愛ありし犬を殺し、その科により入牢の身となり、申さば天下の法度をば破りし罪ゆゑ遅かれ早かれ、どうで命はこの世になきもの、さ、爰がものは相談ぢやが、そちが身共に隨ひなば繋がる縁に久五郎の、命はきつと助けて見せる。何と得心いたさぬか。

小富　えゝ、そりや又どうしてお前さんが。

紋太　さ、天下のお觸を背きし罪人、助かる譯はない筈ぢやが、そこが所謂藝の一德、この紋太夫が日頃より謠曲指南で取入り居る、大老老中奉行職へ頼めば師弟の誼と申し、名に負ふ天下の副將軍

たる光圀卿のお側去らず、お覺え目出度き紋太夫が由緣と聞いて久五郎の、無き一命もきつと助かる、其の恩義をば手切れとなし、夫の緣を切る時は義理も操も十分立たう。また盲人と聞き及ぶ親父も直に引取つて、別宅させて樂隱居、久五郎とて義理のある兄のことゆゑそれ相應、元手を貢ぎ魚屋の見世の一つも出させてやらう、それでも身共に隨はぬか。

作右　こりや願つたり叶つたりと、双方全きうまい相談、よもやそれでは藤井氏へ、色よい返事をせずばなるまい。

小富　さあ、それは。

紋太　身共が心に隨ふか。

小富　さあ、それは。

作右　返事をせぬか。

小富　さあ、

紋太 作右　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

紋太　いなやの返事を、聞かせてくりやれ。

小富　はあゝ。（ト泣伏す、爰へ下手の障子を明け、お園茶屋の女房いこしらへにて出て、）

お園　そのお返事はわたくしから、いたさせますでござりませう。（ト前へ出る、皆々お園を見て、）

小富　思ひがけない、お上さん。

紋太　然らば、そちが得心させ。

伴右　色よき返事を。

紋太　いたさせるか。（トこれにてお園よろしく住ふ、合方きつぱりとなり、）

伴右

お園　女子だてらに差出まして、お歴々さまへ御挨拶をいたすと申すもぶしつけながら、そこが不斷のお馴染甲斐、お邪魔ながらも主人の役、御挨拶をいたさせませうと、これへ出ましてござります。

紋太　流石は當家の女房ほど、事のわかつた其の扱ひ。

伴右　然らばそちに任せるから、何卒返事をさせてくりやれ。

お園　畏りましてござりまする。（トこちらへ向ひ、）これ小富、障子の蔭で段々の樣子は殘らず聞きましたが、所詮命は助かるまいと、わたしも案じた久五郎さんの、命を助けてやらうとある結構すぎた思召しゆゑ、蔭で聞くさへ心嬉しく、わたしも共々勸めに出ました、惡いことは言はぬから、此の場であなたへきつぱりと、よいお返事をするがよいぞえ。

トこれにて小富じゆつなき思入にて顔を上げ、

小富　さあお上さんまで其の様に、お勸めなされて下さりますゆゑ、つい御挨拶もしたけれど、其の御返事のならぬのは、命の恩があればとて夫へ暇を出しましては、女子の道が立たぬゆゑ、假令明日が日久五郎がお仕置に逢ひ死にませうとも、彼の世で添ふを樂しみに、義理ある親父を大事にして、一生一人で居る心、それとも夫久五郎が暇をやるから藤井さまへ、隨へとでも申しましたら、此身をお任せ申しませうわいな。（トきつぱり言ふ、これにてお園尤もだといふ思入あつて氣を替へ）

お園　それではお前は久五郎さんを、見殺しにする心かえ。

小富　さあ仕度いことはござりませんが、

お園　はて、よく物を積つて御覽、假令お仕置にならぬまでも、此の寒空に向ふのに牢へはひつてゐる時は、並大抵の人間ではなか〳〵凌げるものではない、其の當人へ情を立て、みす〳〵命を助けてやらうと、おつしやるお方が目の前に、おいでなさるを斷つて、お腹をお立たせ申したら命の蔓を失ふ同然、手はおろさねど久五郎さんを、お前が殺すも同じこと。

小富　えゝ。

お園　さ、命を助け二つには、義理ある親御の難儀を救ひ、その身を立てゝ居る時は操を捨てゝ操が立

つ、わたしも家の米櫃と名のつく藝者に暇を出し、藤井さまへあげるのも、みんな親御や兄さんの爲を思つて勸めるわたし。惡いことは言はぬから、好い挨拶を聞かせておくれ。

トこれにて小富思入あつて、

小富　ても有難い思召し、其の御異見に附きまして、なるほどあなたの思召しに隨ひますでござりませう。

紋太　すりや心に隨ふとか。

お園　その代りには藤井さま、どうぞあなたのお詞通り。

紋太　身共も藤井紋太夫、武士の詞に二言はないわ。

作右　これと申すも女房の働き、なるほど餅屋は餅屋だわえ。

小富　とはいへ、ちよつとこの事を、一走り行つて父さんへ。

紋太　はて、後でゆつくり行くがよいわえ。

ト小富の手を取り引寄せる、これにて小富是非なく紋太夫へ寄添ふ。お園作右衞門思入あつて、

お園　ほんにお連のお二人さんは、お長いお湯ではござりませぬか。

作右　その長いのが此方の仕合せ、又もや御意の替らぬうち。

お園　丁度隣の小座敷にて。
作右　日頃のお望み藤井氏。
紋太　はて、日の暮れぬその内は、
作右　えゝ、痩我慢を言はるゝな。
小富　どうも心が。
お園　はて、何事もわたしが胸に、
紋太　積る思ひも打解けて、一風呂はひる小座敷も。
お園　しめる雨戸に日の影を、防げば夜のお積りで。
作右　互ひに白い肌と肌。
小富　お見せ申すも恥しい。（ト立たうとするを留めて、）
紋太　はて入込みは、（ト小富を後より捉へようとするを道具替りの知せ、）斯うしたものぢや。
　　トこの模樣よろしく、流行唄にて道具廻る。

（傳通院門前の場）――本舞臺一面に後へ下げて常足の二重、敷石の蹴込み、正面眞中二間寺の表門、後院內の中門が見たる遠見、上下共一面の筋塀、總て小石川傳通院門前の體、爰に以前の玄碩杢右衞門、門の內へはひらうとして居るを、○△の棒突き二人留めて居る、此の見得音樂の鳴物にて道具留る。

○　やあ、見れば盲目の分際で、手引も側に附添ひながら、

△　水府公の御佛參中、出入を禁ずる門內へ、

○　はひらうなどゝは不屆き奴。

△　下れ〳〵、下り居らう。

玄碩　その御佛參と承はり、お願ひの筋がござりまして、出ましたのでござりまする。

杢右　どうぞお慈悲に門內へ、お通しなすつて下さいまし。

○　やあ、願ひがあらば其の筋へ、順を以て願つてよからう。

△　お成先きにて不順の願ひ、叶はぬことだ、

兩人　下り居らう。

玄碩　そこを何卒、お情に。

李右　お通しなされて、

兩人　下さりませ。

○　え丶、ならぬと申すに。

兩人　下り居らう。

ト双方よろしく爭ひ居る、ばた〳〵になり、上手より縫包みの斑犬逃げて出る、これを子供三人稍棒を持つて追掛け出來り、

子供三人　病犬だ〳〵。

ト棒にて追散らす、これにて犬はおちこちと逃廻り、トヾ玄碩の足へからみ喰附くことよろしく、玄碩はアッと倒れる。棒突き二人は棒にて犬を追散し犬は花道へ逃げてはひる、子供三人追掛けてはひる、李右衛門びつくりして玄碩を抱き起し、

李右　え丶これ、泣きッ面へ蜂とやらで、とんだ怪我をするものだ。おゝ〳〵、だいぶ血が出るわえ。

ト懷より紙を出して、玄碩の足を拭いてやる、玄碩疵を押へながら、

玄碩　はい〳〵、これは憚りさまでござります、いつそ犬に噛殺されて死んだがましでござりませうに。

李右　はて、詰らねえことを言つたものだ、今黑砂糖を買つて來てやるから、ちつとの内待つて居なせ

え。

〇　やあ、此の門前を血汐に穢し、

△　それにて事が相濟まうか。

〇　盲目を連れて、

△　立去り居らう。

トきつと言ふ、爰へ門の内より多賀得齋、紅絹裏の熨斗目の麻上下股立大小お同朋のこしらへにて出來り、

得齋　あいや足輕衆、お控へなされい。

〇　あなたはお同朋、

兩人　得齋さま。（ト足輕兩人下に居る、得齋玄碩の樣子を見て、）

得齋　只今あれより見受けし所、盲人には病犬の爲めに足を嚙まれて難儀の樣子、犬毒は大事ゆゑ身共が藥を遣はすぞ。

玄碩　なに、お藥を下さりますとな。

杢右　見れば立派な御典藥樣、有難いことでござります。（ト得齋懷中より藥包みを出し、）

得齋　これを疵口へ附けて遣はせ。（ト杢右衛門に渡す。）

杢右　へい／＼、頂戴いたすでござりまする。

ト件の包みより粉薬を出し、玄碩の足へ附け、手拭ひを裂いて結へることよろしく、玄碩痛みの去りし思入にて、

玄碩　もしお家主さま、此のお薬を附けると其の儘さつぱり痛みが去りましたが、世には希代な良薬があるものでござりますな。

杢右　そんならもう痛みが去つたか。やれ／＼それは仕合せだ、これといふのもあなたのお蔭。

玄碩　えゝ有難うござりまする。（ト杢右衛門作の薬を、元の通りに包みへ納めて、）

杢右　おあとの残りはそちら様へ、お納めなされて下さりませ。（ト出す。）

得齋　残りはそちへ遣はす間、痛みが癒えたら兩人共、早く此の場を退散いたせ。

ト此の時靜謐の聲になり、正面の門の内より水戸黄門公好みの鬘羽織袴大小にて、供廻り大勢附添ひ出る、これにて皆々ハッと平伏する、杢右衛門この體を見てびつくりして玄碩を下手へ連行くゆゑ、

玄碩　又病犬が參りましたか、

杢右　あこれ、天窓を下げて下に居さつしやい。（ト玄碩に平伏させる。光圀これへ目を附け、）

光圀　こりや得齋、あのものは。
得齋　はッ、只今これにて狂犬の爲めに足を嚙まれて難儀の樣子、門内より見受けましたゆゑ、お手製の消毒散を遣はしましてござりまする。
光圀　おゝ左樣か、それは善根をいたせしぞ。
得齋　はッ。（トこれにて杢右衞門前へ出で、）
杢右　恐れながら私共は、お願ひの者にござりまする。
光圀　なに、願ひの者とな。（ト思入。）
得齋　如來なる仔細か存ぜねど、お成先ゆゑお屋敷へ、順を以て願うてよからう。
杢右　火急の事にござりますゆゑ、お成先きをも顧ませず、御直訴いたしてござりまする。
光圀　して、彼の者は何れの者か、住所姓名を尋ねて見やれ。
得齋　はッ、（ト此方へ向ひ、）してそち達は、何れの者ぢや。
杢右　それ、玄碩どの申し上げなさい。（トこれにて玄碩前へ探り出で、）
玄碩　私事は淺草三筋町にて、魚渡世をいたしまする久五郎と申すものゝ親父めにござりまして、按摩にて玄碩と申す盲人にござりまする。

杢右　また私は此のもの、長屋の支配をいたしまする、杢右衛門と申しまする家主めにござりまする。

光圀　むゝ、それ、願ひの趣き問うて見やれ。

得齋　はッ、して願ひの趣きとは、如何なる仔細ぢや、申し上げてよからう。

玄碩　そのお願ひと申しまするは、只今申し上げました魚賣の悴久五郎と申しまするもの、先頃魚の商ひ先きにて、鯛を一枚犬に引かれ逃げ行く所を追掛けまして、取戻さうと庖刀のむねで打ちました手がそれて、つい犬の眉間を切り思はず其の場で殺しました、其の科にて召捕られ入牢いたして居りまするが、段々様子を承はれば打ち殺しました其の犬は、上様から御大老様へお下されになつたお犬とやらで、豫てのお觸を辨へず犬の命を取りしゆゑ、どうでも命が助かりませず、近近お仕置になるとのこと、御覽の通り目は潰れ年取りました此の親父、稼ぎ人の悴をば失ひましては今日に差支へて困りますゆゑ、何卒お慈悲をもちまして悴の命が助かりますやう、そのお願ひに恐れながら、お成先きをも顧ませず、罷り出ましてござります。

杢右　いやも、長屋の支配もいたす者が差越し願ひを共々にいたしまするは不屆きながら、これなる親父が悴を失ひ途方に暮れて淵川へ、身を投げて死ぬと申すを、やう／＼留めて長屋中引連れましてお役向へ度々お慈悲も願ひましたが、天下のお觸に背きました大罪ゆゑとのお諭しにて、お取

上げござりませぬゆゑ、止むことを得ずお館様のお成先きへ縋りまして、御直訴いたしてござりまする。

玄碩　何卒お慈悲の御沙汰にて、親子の命が助かりますやう、

李右　お願ひ申し、

兩人　上げまする。（ト平伏なす。光圀これを聞き思入あつて）

光圀　むゝ、すりや大老たる織田筑後が、將軍家より拜領せし犬を害せしそれゆゑに、近々死刑に行はるゝとか。

玄碩　御意にござりまする。

李右　犬に代へて人命を斷つは、こりや刑法にあらざること、先頃よりして其の沙汰は予が耳へも入り居れど、未だ犬を害せし者なく死刑の沙汰も聞かざるゆゑ其の儘に打捨ておきしが、今聞き及ぶ久五郎とやらが、犬を過ち害せしも元より止むを得ざる儀ならん。殊更以て飼主は大老職を勤め居る織田筑後とあるからは、假令將軍の命により處刑の御沙汰あるとても、事穩便に計らふべきを、諫めも入れず打捨て置くは以ての外なることゞもなり。願ひの趣き聞き濟み得させん。こりや得齋、彼等が住所姓名書を、料紙へ篤と認め置きやれ。

得齋 はッ、委細承知仕つる、御近習衆御料紙是れへ。

近習 はッ。

ト革文庫を持つて出る、得齋此の内より料紙硯箱を出し、兩人の名前を書留めることよろしく、これを聞き玄碩李右衞門嬉しきこなしにて、

玄碩 もしお家主さま、お聞き濟みになりまして、忰の命は助かりませうか。

李右 お館樣があのやうに思召して下されば、こなた衆ばかりか此の後に、犬の御沙汰も止むであらう。

玄碩 どうぞ忰を一日も早く、助けてやりたうござりまする。(ト此の内得齋姓名を認め、)

得齋 はッ、認めましてござりまする。(光圀へ渡す。)

光圀 おゝ、これでよい〳〵。(ト取つて見て得齋へ戻し、玄碩の方へ思入あつて、)こりや老人、そちは今年何歳になるな。

得齋 それ、御直答申し上げい。

玄碩 へい、六十五歳になりまする。

光圀 導引渡世と申すことぢやが、產れだちより盲人なるか、中年にて盲目になりしか。

玄碩 三年以前にそこひを煩ひ、皆目見えなくなりました。

光圀　中年よりの盲人とは、嘸不自由なる儀であらうな。
玄碩　御賢察の程恐れ入りましてござります。
杢右　たゞ此の上のお願ひには、久五郎めが一命の助かりますやう、御仁慈の御沙汰を願ひ上げまする。
光圀　おゝ、其の儀に於ては心配いたすな、やがて一命助け得さすぞ。
玄碩　ても有難い、あのお詞。
杢右　これでこなたも安堵であらうの。
光圀　當主が入牢いたしをつては、嘸かし困窮いたし居らう、あの者に金子を取らせよ。
得齋　はッ、（ト件の手箱より金を出し紙に包み、扇へ載せて下手へ持行き、）こりや老人、そちが困苦を我が君樣には、御賢察遊ばされ、お惠み下さる此の金子、有難く頂戴いたせ。
玄碩　えゝ、すりや此の上に金子まで、お惠みなされて下さりますとな。
杢右　何とお禮を申し上げませうか、これがまことの天の惠み。
玄碩　有難涙が、
兩人　こぼれまする。（ト玄碩金を取つて押し戴く。）
光圀　願ひを聞き濟み遣はす上は、家主附添ひ歸宅いたせ。

得齋　それ、兩人とも立ちませい。
杢右　長居をしては恐れ多い。
玄碩　お暇いたすでござりませう。（ト金を懷に入れ立たうとして、）あいたゝゝゝ。
ト疵を押へて下に居るゆゑ、
光圀　犬に足を嚙まれしとやら、疵が痛むと相見ゆる。
得齋　消毒散を遣はしおけば、三日と過ぎず毒も去り、全快いたすでござりませう。
光圀　いや返す〴〵も秕政蔓り、犬めが橫行いたすと見える。（ト此の時花道の揚幕にて、）
子供
三人　病犬だ〳〵。
ト聲してばた〳〵になり、以前の犬逃げて出る、これを子供追つて出て舞臺へ來る、光圀思入あつて拔打ちに犬の首を切落す、子供三人びつくりして上手へ逃げてはひる、供廻り大勢びつくりして、
皆々　これは。（ト光圀血刀をふるひながら玄碩を見て、）
光圀　老人、敵を取つてやつたぞ。
玄碩　すりや、病犬をお館樣が。
杢右　おゝ、物の見事にお切りなされた。

得齋　とはいへ、天下の、

供
皆々　御法度を。

光圀　犬を害せし科あれば天下の法に行ひくれと、届けを出して政事を改め、入牢の囚人を助け遣はす。

得齋　すりや、それゆゑに我が君様には。

玄碩　えゝ有難う。

玄碩
杢右　存じまする。（ト是れにて光圀血刀を得齋に渡し）

光圀　最早夕景、歸館なさん。

得齋　はッ、（ト後へ向ひ、）君のお立ち。

供
皆々　はあゝ。（ト答へる、光圀玄碩を見て、）

光圀　こりや、老人、

玄碩　はッ。

光圀　やがて無罪に、（ト袖の袂を返すを木の頭）なるであらうぞ。

トぢつと思入、玄碩杢右衛門は、はッと平伏なす。得齋は懐紙にて刀の糊紅を拭ふ。此の模様行列三重、寺鐘にてよろしく、

ひやうし　幕

五幕目

稲波本家茶室の場
同　分家奥殿の場

〔役名――稲波美濃守、稲波石見守、家老夏目主膳、茶道奥村宗賀、老女葛飾、植木屋請地の作兵衛、同職人ひよろ松、同やぶ竹。石見守奥方靜江、老女葉末、其他。〕

（庭内茶座敷の場）――本舞臺眞中に二間常足の屋體、本庇附き奥深に飾り、上手四尺五寸の洞床好みの掛物、置花活に茶花を入れ、下手三尺口太鼓張りの襖、上下の褄角柄の中窓、下手の隅瓦燈口、下の方水屋の附屋體、正面袋戸棚下二段の棚、茶道具一式よろしく飾り、上の方枝折門、この前に誂への石燈籠蹲ひの手水鉢、下の方折廻し靑竹の建仁寺垣、本物の樹木をあしらひ、二重本疊塗緣の爐に釜をかけ、側に水差し炭取などよろしく、舞臺所々に飛石の置物、總て稲波侯庭内茶座敷の模樣よろしく、爰に作兵衛、ひよろ松、やぶ竹半纏股引草鞋がけの植木屋にて、下手に誂への角形の石燈籠を積立て据附けをして居る、上手に宗賀坊主鬘十徳のこしらへにて、庭下駄をはき立掛り居る、此の見得合方しらべにて幕明く。

宗賀　もう一寸程、右の方へ振つて見て貰ひたい。

作兵　これでよろしうござりますか。

宗賀　おつとそこだ〳〵、丁度松の枝を受け、そこらが居所と思はるゝ。
作兵　何でも斯ういふ据付ものは、遠く離れて見ますのが、一番よろしうございます。
松　宗賀さまが御覧になつて、よいとおつしやればそれが定規。
竹　殿さまが御覧なすつても、よいとおつしやるに違ひございませぬ。
宗賀　いやなんぼ愚老の顔が、足の裏に似て居ると申して、さう下駄を預けられては困る。
作兵　いえ、お蔭さまで思ひの外、早く終ひになりました。
宗賀　その検分の禮だと思つて、歸りに愚老の小屋へ寄り、植木を二三本植ゑ替て貰ひたい。
作兵　そりやもう生業でございますから、植替るのは何でもないが、
松　宗賀さまのは、何時でもお納屋で、
竹　肝腎のものが下りませぬ。
宗賀　はて、ちよつと燈籠を据附けるに三人の手間を取る植木屋、そのくらゐなことは當り前だ。
作兵　とんだ油蟲だ。
宗賀　何ぢやと。
作兵　いえ、植木に油蟲でも附いては居りませぬか。

宗賀　いやそんなものは附いて居ぬから、植直して行つて下さい。

作兵　それはさうと此の燈籠は、何れからお求めになりましたか、なか〳〵古物でござりますが、足利時代の燈籠とでもいふやうな品でござりますか。

宗賀　さあ、貴公達も知る通り、御前さまにはお茶好きゆゑ、先達て御大老様へお茶に呼ばれておいでなされた其の節に、お庭にあつた此の燈籠がこちらの御前のお目に附いて、大層褒めてお歸りになつたら、流石御大老は御大老だけ直に翌日お使者が附いて、此の燈籠を下されたが、そこで貴公達も仕事にありつき、愚老も庭の手入れが出來、双方仕合せといふもの。

作兵　左様なら此の燈籠は、御大老さまからの御到來ものでござりますが。

松　この間尾張様のお圍へはひつた燈籠も、古いものでござりました。

竹　慥あれは桃山の太閤様の、お圍にあつた燈籠だとかいふ話し。

作兵　こんな結構な燈籠は、なか〳〵植木屋の庭などに、遊んでは居りません。

松　それゆゑ斯ういふ稀なものは、取扱ふのにまことに心配。

竹　ひよつと落して割りでもすると、申し譯がござりませぬ。

宗賀　どうして〳〵、粗相があつては貴公達ばかりでなく、掛り合つた愚老まで掛け替のない首が飛ぶ

わえ。

作兵　先づ〳〵、首尾よく据附けまして、

三人　お目出たうござりまする。

宗賀　どれ、此の由を申し上げよう。

ト此の時時計の音になり、正面の茶立口をあけ、美濃守羽織袴馬手差、更けたる大殿のこしらへにて近習一人袴裝、紫の帛紗にて刀を持ち附添ひ出で、

美濃　あいや、其の知せには及ばぬぞ。（ト宗賀この體を見て、）

宗賀　や、御前樣には疾くよりこれへ、はゝはッ、

ト平舞臺下手に下に居ろ、これにて植木屋三人下手へ平伏する。美濃守二重の緣端へ出て、

美濃　おゝ作兵衛參つたか、いつもながら達者でよいな。

作兵　はゝ。（ト平伏して居ろ。）

近習　御前のお越し、宗賀どの、植木屋共はお庭外へ。

宗賀　はッ、（ト立たうとするを、）

美濃　いや苦しうない、それには及ばぬ、作兵衛ことは數年來予が屋敷へ出入の者、豫て目通り許しお

けば遠慮いたさず、其のまゝ〳〵。

作兵　はゝッ、有難いお詞にござりまする。

美濃　當春のことであつたが、其の方へ預け置きし石臺の寒梅は何うぢや、成木いたしたかな。

作兵　へい、幹は成木いたしましたが、惜しいことには左りの枝が、一枝枯れましてござりまする。

美濃　なに、左りの枝が枯れしとか。（ト心に掛る思入よろしく。宗賀是れを紛らすこなしにて、）

宗賀　御大老より御到來の燈籠、植木屋共が据附けいたせば、あれにてよろしうござりませうや、御覽なされて下さりませう。（トこれにて美濃守二重へ住ひ、件の燈籠を見ることあつて、）

美濃　流石は宗賀の指圖と申し、茶事に明るき植木屋作兵衞、松をかたどり圍より斜めに望む据附け方、これで聊か言分ないわえ。

宗賀　はゝッ、恐れ入つたる御前のお詞。

作兵　有難いことで、

三人　ござりまする。

ト此の内美濃守左右へ體を寄せ、件の燈籠を見て不審の思入あるゆゑ、宗賀氣にかゝるこなしにて、

宗賀　御前樣には、御不審の御樣子にお見受け申しまするが、何ぞ御意に叶ひませぬか。

美濃　されば、あれなる燈籠の据ゑ所はあれにて言分はないが、直なやうにて何處やらに曲りの見えるが不審の一つ、これへ參つてよく見やれ。
宗賀　左樣なら御免下さりませ。（ト宗賀二重へ上り美濃守の前へ住ひ、下手の燈籠を見ることあつて、）何さま御前の御意の通り、左りへ寄れば右へ曲り、右に寄れば左りへ曲り、棹に癖でもある樣子。（ト二重より下りて元の所へ來て下手の燈籠を見て、）又爰へ來て見ますれば少しも曲つて居ぬ樣ぢやが、こんな不思議なことはない。これ〳〵作兵衞、もう一遍下振りをして下さい。
作兵　へい〳〵、畏りました。（ト水繩にて小手を結へ下振りして見ることあつて、）もし〳〵宗賀さま、此の通りでござります。（ト宗賀同じく見ることあつて、）
宗賀　成程斯うして見るときは、一分一厘曲らぬやうだが、はて面妖なことではある。
　　ト此のうち美濃守思入あつて、
美濃　大老より贈られし、世にも稀なるあの燈籠、直なやうでも何處やらに、曲りの見ゆるは心得ず、
宗賀　曲らぬやうで曲つて居るとは、不思議なことでござりまする。（ト美濃守氣を替へて、）
美濃　いや直きを曲げて見するも祕密、これも風雅の一ツならん、植木屋共に酒を取らせよ。
宗賀　それでは植木の植替ゑ、いえなに、植木屋共もなるたけ早く、酒を切上げて歸るがよいぞ。

作兵　好きなお酒まで頂戴とは。

松　有難いことで、

三人　ござりまする。

美濃　藤作には勝手へ參り、掛りの者へ申し附けい。

近習　はツ。

作兵　どれ、お臺所へ。

三人　參りませう。

ト是れにて近習は茶立口へはひる、植木屋三人小腰をかゞめながら、下手切戸口へはひる、宗賀跡を見送りて、

宗賀　作兵衞は酒好きゆゑ、又醉倒れにならねばよいが。

美濃　いや、なにも馳走ぢや、好きとあれば十分に呑すがよい。

宗賀　それでは植木の植替が、いえなに、植木は植木でござりまする。

美濃　幸ひ釜もたぎりし樣子、これにて一服立てゝくりやれ。

宗賀　委細承知仕つりました。

ト是れより誂への合方になり、美濃守は二重上手よき所へ住ひ、頻りと下手の燈籠を見て心にかゝる思入れ、宗賀は上手の蹲ひにて手水を遣ひ、二重へ上り、下手にて茶を立てることあつて茶碗を袱紗へ載せて持ち、前へ出て美濃守へ出す、美濃守茶を呑むことあつて、

美濃　よい服加減ぢや、今一服所望いたす。

宗賀　はツ。

ト茶碗を持ち後へ下る、此の時後の茶立口より近習一人出來り、平舞臺下手に下に居て、

近習　はツ、申し上げます。

美濃　何事ぢや。

近習　只今御分家石見守様、御當家へお越し遊ばし、密々御前へお逢ひの儀を御申入れにござりまする。

美濃　なに、石州が參りしとな。

近習　御意にござりまする。

美濃　何用なるか、密々とあれば庭口より案内いたせ。

近習　はツ。（ト引返して茶立口へはひる。此の内宗賀茶を立てかけしまゝ手をつかへ、）

宗賀　御密談とござりますれば、お次へ御遠慮仕つりませうや、此の儀伺ひ奉りまする。

美濃　幸ひ石見も茶好きなれば、持成いたして次へ參れ。

宗賀　はッ。

ト又茶を立てにかゝる、爰へ下手の切戸口より石見守、好みの鬘上下一本ざしにて、庭草履をはき出來り、美濃守を見て、はッと下に居る。

美濃　おゝ、石州にはようこそ入來、遠慮に及ばぬ。さゝこれへ〳〵。

石見　然らば、御免下し置かれませう。（ト二重へ上り下手へ住ふ、美濃守思入あつて、）

美濃　日々の勤役、石州には嘸かし心勞ならん、身に於ても察し申す。

石見　御老侯にも御精勤にて御繁多の其の中へ、ちと申し上げ度き一儀ござつて、罷り出ましてござりまする。（ト此の內宗賀菓子器を石見守の前へ出し、直に茶を立て袱紗に載せ石見守の前へ出し、）

宗賀　不手前ながら粗茶一服、召上られ下さりませう。（ト出す、石見守茶碗を手に取り、思入あつて、）

石見　はッ、頂戴いたしまする。

美濃　あまり徒然と存ぜしゆゑ、それなる宗賀に申し附け、一服所望をいたせし折柄、御身が入來めされしは、よい幸ひと申すもの。（ト石見守は呑み居る、）こりや宗賀、用事あらば驛路を鳴らさん。そちは暫く次へ立て。

宗賀　はッ、（ト辭儀をなし下手茶立口へはひろ、石見守は此の内下手の燈籠へ目をつけ居て、）

石見　はて結構なるお燈籠、先頃拙者出ました節まで目に附かざりし夫の古物、いつ頃お手に入りましたな。

美濃　あれぞ此の程大老へ、我が好める茶事にて招かれ、其の折かしこの庭中にて我が目に叶ひし古物ゆゑ、賞美いたして歸邸なせしが、直に翌日我が方へ、贈りこされし稀物の賜。

石見　すりやお燈籠は御大老より、御到來にてありしとな。むゝ。

ト燈籠を見てぢつと思入、美濃守もこなしあつて、

美濃　して〳〵今日入來なし、密事の直談いたしたいとは、如何なる仔細か申し出されよ。

石見　はッ、密事と申すは餘の儀にあらず、天下の安危に拘はる大事。

美濃　なに、天下の大事とな、（ト前へ進む、これにて石見守懷中より箇條書の縱文を出し、）

石見　この一書、御内見下さりませ。

ト美濃守の前へ差出す。美濃守傍にある誂への眼鏡を取つて掛け、件の縱文を開き見て、

美濃　こりや大老が行狀を、書記したる此の縱文。

石見　さ、篤と御熟覽下さりませう。

ト是れより室の入りし誂への合方になり、美濃守口の内にて件の條目を讀みて、うなづくことよろしくあつて、トヾ讀終り、

美濃　かゝる箇條のあるゆゑか、測らず當家へ大老より贈り越したる燈籠に、自然と歪みを顯はせしは、時に取つてのこれ前表。

石見　拙者も只今入來なし燈籠の儀を承はり、もし老君にも大老へ御同意なるかと心中に、疑惑を生ぜしは愚の至り。

美濃　して此の箇條の第一たる、安宅丸破却の儀は、我も不審に思ひ居りしが、かゝる奸計あることを、如何いたして存ぜしぞ。

石見　それぞ此の程猿江なる、我中屋敷へ參る途中、兩國に於て此方の供先き切りし無禮の曲者、剰へ亂暴せしゆゑ屋敷へ引いて取糺せば、住所姓名明かならず、これぞ胡亂と家來に言附け懷中を改めさせしに、安宅丸に粧ひありし五三の桐の金かな具、所持なし居るは容易ならずと、嚴しく拷問いたせしゆゑ、脫れ難く其の者が、逐一白狀いたしてござる。

美濃　して其の者の住所姓名、いづく何れの者なるか、それ等も吟味いたせしか。

石見　それぞ則ち大老の領分、上州安中の產、河童の吉藏といへる奴にて、世にも希代の水練を得、管

を携へ水底へ忍ぶに妙を得し奴にて、夫の曲者を奸臣共が前なる河へ忍ばせ置き、伊豆へ行かうと怪しげなる聲にて夜な〳〵啼かせしゆゑ、下人の取沙汰街の風說、それを一つの種となし安宅丸を破却させしと、白狀によつて露顯せり。

美濃　して又京師の大佛を、取崩さんといたせしは。

石見　これは能の指南なす藤井紋太夫が勸めにて、夫の大佛を取崩し永錢數多に鑄替させ、天下の御益と申し立て、其の內實は奸臣共が謀計とあつて大老より、既に沙汰に及びたり。

美濃　扨は吟味が行屆き、事明白に調べ置きしか。

石見　假令奸臣共がなすにもせよ、かゝる事を正すが職務、打ち捨ておくは天下の大事と、箇條に認め持參なしたり、只此の上は御老侯の、御賢慮願ひ奉る。（卜これにて美濃守當惑の思入あつて、）

美濃　はて、不都合なることゞもぢやわえ。

石見　なに、御不都合と仰せあるは。（卜これより合方替つて、）

美濃　さ、我も疾より大老が驕奢に耽り權威をふるふは、心得難く存ぜしゆゑ、水府公へ申し上げ取調べんとは存ぜしかど、今老中の筆頭たる美濃守ゆゑ大老の職を拒み讒言なし、その身の出世を願ふなど、言はれんことの無念さに今日まで見合せ居りしが、容易ならざることゞものみ、斯く何

ヶ條も明白に露顯の上は捨て置かれず、明日登城の折柄副將軍まで、此の由を竊に進達いたさんが、惡事千里の諺ゆゑ此の事世上に流布なさば、下馬將軍たる雅樂殿が大老職を免ぜられ、蟄居ありしも上樣のお眼識違ひと相成りしに、未だ年限立たざる内又もや大老筑後殿に斯る御沙汰のある時は、將軍家の御恥辱にて神君以來堂々たる天下の御威光薄きに似たり、さある時には日の本の政事の亂れ、二つには、遠く外夷の物笑ひ、はて歎はしきことであるわえ。

ト歎息の思入よろしく、石見守も思入あつて、

石見　拙者もさこそと存じまするゆゑ、今日貴殿へ御相談を申し上ぐるは外ならず、お聞き濟みをば願はん爲。

美濃　して、聞き濟んでくれと申すは、

石見　餘の儀にあらず、拙者めに、何卒お暇下さりませう。

美濃　なに、暇をくれとな。（ト思入。）

石見　天下のお爲めに石見守、一命捨てたく存じますゆゑ。

美濃　ムウ、（ト兩人氣味合の思入あつて、美濃守ずつと立つて下手の茶立口の所へ行き、奧を伺ひこちらへ來り、元の座へ住ひ小聲にて、）すりや石州には、殿中にて、すつぱりといたす所存か。

石見　はツ、(ト辭儀をする。美濃守小膝を打ち、)

美濃　おゝ、よくぞ決心いたせしよな。(ト感心の思入よろしく、これにて石見守ぢつと思入あつて、)

石見　只殘念なは數年來、かく御本家の御助成に預りし身も聊かなる御恩報じも仕つらず、跡々までも御苦勞を掛けます段は幾重にも、御容赦願ひ上げまする。

美濃　いや〳〵假令汚名を取り、可惜分家を失ふとも天下へ盡す誠忠義心、何時かは美名の世に顯はれ、恥辱を雪ぐ期もあれば、其の斟酌には及ばぬぞ。

石見　その御賢慮を承はり、安堵いたしてござりまする。

美濃　又跡々へ何なりと、申し殘す儀もあらん、遠慮いたさず申すがよいぞ。

石見　一大事の儀にござりますれば、貴殿へ申し上げるのみ、愚妻をはじめ老臣共へも、祕して大事を漏らしませねば、跡々の儀は萬事よろしう。

美濃　その儀は、勿論承知いたした。

石見　それさへ願ひ置きますれば、最早お暇仕りまする。(ト美濃守思入あつて、)

美濃　あゝ思へば先刻植木屋めが、預け置きたる石臺の幹は成木いたせしかど、左りの枝が枯れたりと告げしも分家の石州が、花咲く時節も待たずして、枝折れいたす知せなりしか。

石見　申すも女々しきことながら、幹に等しき御本家は枝葉の榮えを年毎に悅びたまふものなるに、其の枝ゆゑに幹までを傷めて惜しき木振りをも、空しくなさねばならぬ仕儀。

美濃　その斟酌も芳しき、薫を含む枯枝に、

石見　花咲く春も白梅に、心の留木くゆらせば、

美濃　野邊の煙となるとても。

石見　明日は武門の魁に。

美濃　名殘りの一盞催さん。

石見　とはいへ、最早お暇を。

美濃　いや、酒宴にあらぬ水杯。

石見　すりや、老君のお手前にて。

美濃　目出度く門出を、祝して立ちやれ。（トこれより下座の琴唄になり。）

〽君が代は治まる國や四つの海、岸打つ波も長閑にて千歳を過る雛鶴が、直なる枝に巣をくひて、

ト此の内美濃守立上り、件の茶棚の所へ行き水差へ柄杓を添へ持ち出て、平茶碗へ茶の手前にて水を

汲み、石見守の前へ出す。

石見　先づあなた樣より、

美濃　然らば先きへ。

〽（唄）惠みも深き玉川の流れに住めるわれ等まで、心浮木の龜數多、萬代までも幾千代と、

ト此の内美濃守茶の手前にて水を呑乾し、又水を汲んで石見守の前へ出す。石見守押戴き矢張り茶の手前にて件の水を呑乾す、美濃守思入あつて、有合ふ驛路を鳴らす。奧より以前の近習出來り手を支へ、

近習　御用にござりますか。

美濃　居間の馬手差を持參いたせ。

近習　はツ。

〽治まる御代の目出度さよ。

ト近習奧へはひる。此の内美濃守茶器を仕附ける、爰へ奧より近習誂への刀を袱紗にて持ち出來り、美濃守に渡してはひる、美濃守思入あつて、

美濃　無銘なれども金味は、兼房なりと目利の鑑定、これを御身に餞別いたす。（ト差出す。）

石見　はゝツ、思ひ寄らざる御賜、有難く頂戴いたしまする。（ト押戴き、）失禮ながら、中身を拜見、

美濃　おゝ、遠慮に及ばぬ、抜いて見やれ。

石見　はッ。

ト懐紙を口に銜へ、件の刀を抜いて見ることよろしくあつて、思はず銜へし紙を落し天晴な品といふ思入。此の時下手の切戸口より作兵衛酒に酔つたるこなしにて出る、跡より宗賀これを支へ、

宗賀　これ作兵衛どん、そんなに酔つちやあ困るぢやあねえか。

作兵　何でそんに酔ふものか、お殿様へお禮を申し上げるのだ。

ト此の聲を聞き、石見守件の白刃を後へ隠す。

宗賀　はて、お禮は愚老から申して置くから、さつき頼んだ植木の植ゑ替へ、歸りに小屋へ寄つてくりやれ。

作兵　いや〳〵、何でもお禮をいふのだ。

宗賀　えゝ、御密談をも憚らす、御前へ出るのは失禮だ。

作兵　御みつ談でも四つだんでも、お禮を言ふのに遠慮はいらねえ。

宗賀　はて、お庭外へ出ろといふのに。

ト作兵衛を突きやる。これにて作兵衛ひよろ〳〵として件の石燈籠へ突當る、燈籠ばら〳〵と崩れる

ことよろしく、宗賀びつくりして、
やあ、こりや大切なるお燈籠を。

作兵　おゝ地震だ〳〵、萬歳樂々々。

ト頭を押へながら、下手へ逃げてはひろ、美濃守石見守これを見て、につたりと思入あつて、

美濃　大老方より贈られし燈籠、測らず只今倒れしは、

石見　粗相といへど左にあらず、時に取つてのよき幸先き、

宗賀　すりや、寛仁の御沙汰にて。

石見　明日は吉左右。

宗賀　えゝ。

ト聞咎める、これにて石見守は件の白刃を鞘へ納める、美濃守はむゝと頷く、双方見合つて道具替りの知らせ。

美濃　相待ち申すぞ。

ト兩人よろしく氣味合のこなし、宗賀は合點の行かぬ思入、此の模様時計の音にて道具廻る。

(分家奥殿廣間の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の床の間墨塗の框、此の下手一間の違ひ棚、地袋、この下手銀地の襖、上下折廻し銀地の襖、日覆より銀地花の丸の大欄間をおろし、舞臺花道とも一面に薄縁を敷詰め、花道の揚幕の所杉戸の出入口、總て稲波侯御分家奥殿廣間の體。爰に丸形朱塗の行燈を點し、この傍に葛飾白髪鬘袷裝の老女にて居睡をして居る、左右に△○□◎いづれも腰元裝にて住ひ、此の見得琴唄の合方にて道具留る、

△ 何と皆さん今宵のやうに、お行燈のお明りが、暗い晩はござりませぬ。

○ ほんに左樣でござりまする、それに御老女の葛飾どのが、側で居睡をしておいでゆゑ。

□ 猶々陰氣になりまして、舌切雀のお婆アさんが、重い葛籠の蓋を明け。

◎ お化の出たので氣を失ひ、悶絶でもして居るやうで、氣味が惡いぢやござりませぬか。

△ その樣なことをおつしやつて、若し聞えでもする時は。

○ 鹽辛聲で叱られますから、まあお靜になされませ。

□ いえ〳〵お年の若い時から、耳の遠い葛飾どの。

◎ 本所ゆゑに葛飾と、名を附けられたお人ゆゑ、

□ 聞えることでは、

○ ござりませぬ。

△　ほんにお年が寄つたゆゑ、猶々耳が遠くなり。
○　かな聾のやうなお人ゆゑ、幾ら惡く申したとて。
△　こりや大丈夫で、
○△　ござりませう。（ト これにて葛飾目を覺し）
葛飾　かな聾とは、誰のことだ。
△　そんなら聾の早耳とやらで、
○　今のお噂が聞えましたか。
葛飾　十五の年から御殿へ上り、五十年來勤めて居るわしのことを聾と、失禮なその戯言、聾なりやこそ中老の葉末どのを後役にしてわたしは老女の隱居株、昨日今日の腰元端女に馬鹿にされてたまるものか、これでもこちらのお屋敷では一番古い古狸、ぽん／＼言つて力まねば長生きをした甲斐がないのだ。
△　ほんに狸は、本所の名物。
○　葛飾といふお名前ゆゑ。
□　こりや古狸で、

四人　ございませうわいなあ。

葛飾　何ぢや、この葛飾は生酔だえ、いつ酒を呑ませなさんした、あい酒は呑んでも呑まいでも、勤める所はきつと勤める、鼈甲第一の昔の兀だわ。（トちよつと聲色を遣ふ。）

△　歌舞伎芝居の中役者に、こんな聲の人がをりますぞえ。

○　ほんに市川團八とやらに、よく似て居るではござりませぬか。

□　なるほど、團八で、

四人　ござりますわいなあ。

葛飾　えゝ團八とは恨めしい、これでも、此間故人になつた、坂彦の氣で居るものを、團八とはあんまり酷い、この返報には頭から、鹽をつけて噛つてしまふぞ。

△　えゝ、噛られて、

四人　たまりませうかいなあ。

葛飾　えゝ腹の立つ、もゝんがあ。（ト化物の思入よろしく）

四人　あれえ〳〵。

ト逃廻るを、葛飾追廻す、爰へ下手の襖を明け、葉末片外し袿装の老女にて出來る、葛飾これに心附

ず、葉末を捉へ、

葛飾　もゝんがあ。

葉末　葛飾どの、ちとお嗜みなされませ。

葛飾　ほい、これは間違つたか。（ト下手へうづくまる、腰元四人も下に居る。葉末よろしく住ひ、）

葉末　お腰元衆も葛飾どのを、御老體と侮つてからかひ立てはよくないこと、ちとお嗜みなされませ。

△　いえ〳〵左樣ぢやござりませぬ、葛飾どのが私共を、鹽を附けて嚙るの何のと。

○　お年に似げなく御難題をおつしやりますゆゑ、そこ爰と、

□　逃歩きまして、

四人　ござりまする。

葉末　はて、何んであらうと御前樣の、もうお歸りに間もあるまい、其處らをお片附けなされませ。

△　畏まりまして、

四人　ござりまする。

ト腰元四人四邊を取片附けて居る、合方きつぱりとなり、上手の襖を明け、靜江奥方好みの鬘裃裝にて出る、撫子振袖腰元裝にて附添ひ出來る、皆々手をつかへ、

葉末　これは〳〵奥樣には、御前樣のお下りを、お待佗びしういらせられ。

△　これへお越しで、

皆々　ござりまするか。（ト靜江よろしく住ひ。）

靜江　いや、今日は我君樣御殿のお下りから御本家樣へお立寄りゆゑ、大方お茶のお催しでもおありと見え、それでお歸りが遲いのであらうわいなう。

葉末　御前樣には御平生より、お茶事がお好きでいらせられますゆゑ、左樣なことかと存ぜられまする。

靜江　見ればきつう行燈の、明りが暗いぢやないかいなう。

撫子　お廊下のお行燈も常より暗うござりますが、皆さんお搔き立てなされましたかいな。

△　最前より搔き立てますれど、

○　どうしたことにかお明りが、

□　今宵は暗うござりますゆゑ、

◎　不思議なことゝ一統に、

△　お案じ申して、

四人　居りまする。（トこれにて靜江思入あつて、）

靜江　明りの暗いは心がゝり、もし御前樣のお身の上に、變りしことでもなければよいが。
葉末　いえ〳〵それはお天氣に、つれまするのでござりませう。兎角時雨の催す折は、御殿の内も掻き曇り、明りの暗いことなどが、往々あるものでござりますれば、必ずお案じ遊ばしまするな。
靜江　ほんに葉末のいやる通り、雨催ひにて暗いのか。
撫子　いえ〳〵、空は晴渡り、雨氣は少しもござりませぬ、それに火勢の立たぬのは。
葉末　あこれ、晴れて居るのに暗いのは、油のせゐであらうわいな。
撫子　何にいたせ此のやうに、暗い晩はござりませぬ。
ト此の内葛飾は下手に居睡りをして居て、此の時目を覺し。
葛飾　ほんに、坂彦は、惜しいことをいたしました。
△　あれ、又夢でも、
四人　御覽なされたかいなあ。
靜江　ても、氣にかゝることぢやなあ。（ト此の時花道の揚幕にて）
呼ビ　殿樣のお下り。（ト呼ぶ、皆々向うを見て、）
葉末　それ、お下りで、

皆々 ござりまする。

靜江 皆のもの、お出迎ひをしや。

皆々 はッ。（トこれより床の淨瑠璃になり）

〽時雨降る神無月もお下りと聞いて悦ぶ奥御殿、武家の掟に隔てある、杉戸も明けてそれぞれとは、岩見守が默然と心あるじに打通れば、待ち設けたる腰元が褥も厚き君の恩、はるか下つてひれふすにぞ、態と機嫌に座に着いて、

ト此の内靜江先きに舞臺の皆々よろしく出迎ふ、よき程に花道より以前の石見守件の馬手差を持ち出ろ、跡より小姓一人刀を持ちて附添ひ出で、石見守花道にて舞臺を見て氣を替へ、舞臺上手へ通ろ、これにて△〇褥紙置臺などを持ち出で、上手よき所へ直しおく、石見守この上へ住ひ、

葉末 御前樣には御機嫌よろしう。

△ 只今お下りで、

五人 ござりまするか。

石見 奥をはじめ皆の者、出迎ひ大儀に思ふぞよ。

靜江 御前樣のお下りがあまりお遲うござりまするゆゑ、お案じ申して居りましたに、

葉末　御機嫌のよい御樣子を、
撫子　伺ひまして、私共も、
葛飾　一同安堵いたしまして、
△　恐悅申し、
皆々　上げまする。
〽悅ぶ體も今生の別れと知らぬ不便さに、浮む淚をおし鎭め、
ト石見守思入あつて氣を替へ、
石見　おゝ、其の戾りの遲刻せしは、奧へ今朝申し置きしが、殿中より下りしまゝ御本家へ立寄りし所、例の茶事にて長座いたし、思はず歸りが遲うなつた。
靜江　定めて左樣と存じまして、お噂いたして居りました。それ、お召替の用意しや。
△　畏りまして、
四人　ござりまする。
石見　いやその用意より今晚は、酒宴の支度をしてくりやれ。
靜江　てもお珍らしい其のお好み、早速掛りへ申し附け、支度いたすでござりまする。

葉末　日々のお勤めゆゑ、御氣鬱を散じまするには、結構な儀にござりまする。それ腰元衆、御酒宴のお支度を。

腰元皆々　畏まりました。

〽酒宴の支度腰元は、お次へ立つて入りにける。(ト腰元四人下手襖の内へはひる。)

靜江　君にはその内、お召替を、

葉末　それがおよろしうござりまする。

〽奥方はじめ兩人の、老女が運ぶ服臺や、疊む上下の折目さへ馴れて正しき手扱ひ、お召納戸も染色に、何れおろかはなかりける。

ト此の內靜江は立入り、石見守の肩衣袴などを取る、腰元はこれを疊む、葉末は上手へはひり服臺へ小袖を載せしを持つて出て、皆々手傳ひ石見守小袖を着替へることよろしくあつて、皆々下に居る、石見守小姓の持ちし刀を取り、有合ふ刀掛けへ掛ける。

靜江　御前樣には如何して、つひに見馴れぬお刀を、御所持でお歸り遊ばしました。

〽尋ねにわざと機嫌よく、(ト石見守思入あつて、)

石見　おゝこれか、此の一刀は御本家にて、今日測らず拜領いたした。

靜江　すりや、御本家にて、

葉末　お刀を。

石見　皆の者、悅びくりやれ。（トこれより下座の合方になり、）今日登城の歸るさに御本家へ立寄りし所、折よく奥のお圍にて御老侯御一人相手欲しさのお茶の湯半、それへ某參上せしゆゑ殊の外なる御機嫌にて、お手厚きお持成に預り、殊更以て勤役中心得置かねばならぬ事ども、種々御敎導に預りし上、精勤いたす褒美なりとて、此の一刀賜りしはこれに上越す悅びなし、それゆゑ今宵は心祝ひに、目出度く一獻過すのぢや。何と奥、目出度いな。

靜江　はツ、お目出度う存じまする。

石見　皆の者、目出度いなう。

葉末　はツ。

石見　おゝ身共も目出度い、あゝ悅ばしいわえ。

〽胸の曇りを吹きはらす、空は晴れても晴れやらぬ時雨の宴と腰元が、運ぶ銚子や杯の模樣も菊の高蒔繪、取並べたる酒肴の用意。

ト此の內石見守よろしく思入、爰へ奥より以前の腰元四人銚子杯硯蓋など持つて出て、よろしく並

△　〽下手へ手を支へ、御酒宴の用意、取揃へ、
○　持参いたしまして、
四人　ござりまする。
靜江　おゝ、大儀であつた。（トこちらへ向ひ、）段々御様子承はりますれば、此の上もない今日の御首尾。
葉末　數なりませぬ私共まで。
撫子　お目出度う存じますれば。
葉末　恐悦申し上げまする。
石見　おゝ目出度う祝して、一獻過さん。腰元ども酌いたせ。
撫子　はッ。

〽口に勇めど胸の内、こぼるゝ涙おし隱し、滿々受けし杯を、ぐつと一息呑みほして、

ト此の内撫子酌をする。石見守酒を呑むことよろしくあつて、石見守靜江の前へ出し、

石見　こりや奧、改めて杯いたす。
靜江　常はならずとお目出度ゆゑ、なみ〳〵頂戴いたしまする。

石見　おゝ、よく申した、悦ばしいぞ。

○　どれ、お酌をいたしませう。

〽それと知らねば奥方は、心嬉しく御杯手に取上げて半ほど、受けて呑み乾す見事の手際、

ト此の内静江杯臺の杯を取上げる、腰元○酌をして静江呑乾すことよろしく、石見守思入あつて、

石見　おゝ見事ぢや、さゝ返杯いたせ〳〵。

静江　左様なれば、仰せに任せ

〽これが妹背の別れとも露白紙におし拭ひ、さす杯に何事も石見守は引受けて、又も滿々つぐ酒を口に當てれど塞がりし、胸にあふれて噎び入る、奥方側へ差寄りて、

ト此の内静江懷紙にて杯を拭ひ臺の上へ載せて出す。石見守これを取上げ、△酌をして石見守酒に噎ぶことよろしく、静江側へ立寄り介抱しながら、

お悦びの餘りにて、お心はずむはお道理ながら、夜長の儀ゆゑ御ゆるりと召上り下さりませ。

石見　悦ばしいと目出度いとで、餘り心が勇み過ぎ、酒に噎せたは予が不覺ぢや。どれ、下物を賞翫いたさう。

〽箸とり上げてお料理を、見れば何れも精進物、（ト石見守前へ並べし下物を見て、）

こりやこれ魚類は一つもなく、皆精進の獻立ぢやな。

靜江　お目出度ゆゑに魚類をも。取寄せまする筈なれど、御先祖樣のお逮夜ゆゑ、それにてお許し下さりませ。

ト　これにて石見守思入あつて、

石見　明日の忌日に、丁度この身も。（ト思入あつて、）いやさ、明日は好みの魚類にて、又も一獻呑直さう。

靜江　左樣なされて下さりませ。

石見　して今日の獻立は、葉末そちが申し附けしか。

葉末　御意にござりまする。

石見　いや、流石はそちの言附けゆゑ、膳部はなか／＼よう出來た、これにて杯をとらすぞ。

葉末　はツ、有難く頂戴いたしまする。

〽褒美によそへ杯を、さすも主從三世ぞと心の名殘り淺からず、受けて見事に呑み乾せば、

ト此の內石見守葉末へ杯をさす、○酌をして葉末よろしく呑む、石見守思入あつて、

石見　こりや葉末、そちは當家に何年居るな。

葉末　はッ、十四歳の春御當家へ御奉公に上りまして、今年三十路を七ツほど越しましてござりますれば、廿三年御當家にお仕へ申して居ります。

石見　むゝ、すりや廿三ケ年、そちは當家に勤め居りしか、長年の間世話になりしぞ。

ト此の内葛飾始終杯に目をつけ、酒が呑みたいといふこなしよろしくあつて、此の時前へ出で、

葛飾　御前樣へ申し上げます、葛飾は十五の年より六十五の今年まで、五十年來お仕へ申しまする。申さばこれなる葉末どのは、廿三回忌の佛さま、此の葛飾は五十回忌の古い御法事、お目出度ゆゑにお杯を下さりませ。

靜江　えゝもう左樣な忌はしい、年回などゝ申すことは、酒宴の席では言はぬものぢや。

石見　こりや葉末、早く返杯いたさぬか。

葉末　恐れ多うござります。

石見　いや苦しうないく。（ト葉末鼻紙で拭ひ、石見守へ出す、石見守呑んで、）撫子、そちは金吾が妹、譜代のものゆゑ遣はすぞ。

撫子　はゝ有難う存じまする。（ト杯を取り上げる。○酌をする。）

石見　後はそちより、順杯にいたせ。

撫子　はッ。

葛飾　やれ有難い、南無阿彌陀佛〳〵。

靜江　ても、忌はしいことばかり。

△　ほんに御老女葛飾どのは。

○　直お念佛か。

四人　出ますわいなあ。（ト石見守思入あつて）

石見　明日は必ず前表に。

皆々　えゝ、

石見　いや、必ず遠慮に及ばぬ〳〵。

葛飾　それ、お許しぢや、こちらへ〳〵。

〽それお許しと年嵩の、老女が欲の深酒も、外へはやらぬ續け呑み、

ト葛飾杯を取り、手酌にて續け呑みに酒を呑む。

石見　いや、呑めぬ口にて三獻ほど、過せるゆゑに醉が廻り、どうやら心が春めいて參つた、えゝい、

〽浮ぬ思ひも浮立ちし、機嫌を見するとろ〳〵目、

ト此の内石見守よろしく思入、これより床の浮いた合方になり、

えゝい、こりや奥、酔うて申すのではないが、よく大名といふものは手廻りの腰元などに手を附けるとやら申すことぢや、予はそちといふ美しい奥を一人守り居れば、未だ妾の味を知らず、餘り意氣地のないやうで他家へ對して外聞が悪い、小身ながら石見守ぢや、腰元の内で一人位は手を附けてもよからうかな。(トこれにて靜江思入あつて、)

靜江　何時にない其の御機嫌、仰せ通り御分家ながら、諸侯の列にも加はる御身分、何のわらはに御遠慮が入るものでござりませう。

石見　すりや、手を附けても苦しうないか。

靜江　御意に叶うた女子があらば、仰せ出されて御覽じませ。

葉末　差出た儀にはござりますれど、未だ御當家御世取りの若様とてもござりませねば、お一人位は御意に叶うたお妾さまをお見立て遊ばし、お伽を仰せ附けられまするが、よろしからうと存じられまする。

石見　いやそち迄がさう言つてくれゝば、それにて予も安心といふもの。然らばこれにて見立て遣はすこりや腰元ども、顔を見せい。(ト是れにて撫子及び腰元四人さし俯向くゆゑ、)え、見せいと申せ

ば隠し居る、はてさて埒の明かぬ奴ぢや。（トよろしくこなしあつて）かうツと、葉末はちと盛りが過ぎたし、撫子は綺麗ぢやが兄金吾が堅藏ゆゑ、それを見習ひ得心せまい、吉野はあまり神妙過ぎて手があるまいし、又此糸は子供でいかず、紅葉はあまり色が黒し、明石はどうやら眼がないやうぢや。あゝ斯うなると目移りがいたして、急に決心がいたし兼るわえ。

トこの内葛飾酒に醉うたる心にて、いやらしきこなしあつて、

葛飾　御前樣。わたくしはいかゞでござりまする。

石見　いやそちのやうな狸婆アは、顏を見てさへ胸が惡い、

葛飾　えゝ、お胸が惡いとは、お情ないことをおつしやりまする。

石見　いや〳〵、やつぱり美しい奥と、仲よういたさうわえ、妾の沙汰は止めぢや〳〵、

〽跡はたわいもなが〳〵と、褥の上へ伏しければ、

ト石見守醉ひたるこなしにて、褥の上へ横になるゆゑ、靜江側へ差寄り、

靜江　これへ御寢なり遊ばしまして、お風を召しては御身の大事、お奥へお出で遊ばしませ。

石見　いや〳〵此の儘そつくりと、暫時寢かして貰ひたい。

葉末　それでは後程御寢所へ、お伴ひ申し上げませう。

石見　さうしてくりやれ〳〵。

靜江　それ腰元ども、お枕とお搔卷を、この所へ。

撫子　畏りました。

〽お次へ立つて入りにける。（ト撫子、腰元四人奥へはひる、葛飾酒に醉ひたるこなしにて前へ出で、）

葛飾　御前樣が御寢なりますれば、わたくしは御免を蒙ります。

靜江　老體なれば葛飾は、勝手に部屋へ引取りませうぞ。

葛飾　左樣なればわたくしは、これにて御免を蒙りまする。

〽年の上とて酒の醉ひ、まはる廊下の長局、足もしどろに立つて行く、

ト葛飾ひよろ〳〵としながら、花道にて尻餅をつくことなどあつて花道へはひる、爰へ撫子腰元四人錦のくゝり枕、結構なる搔卷を持ち出來り、

撫子　お枕を持參、

四人　いたしました。（トこれにて靜江枕を持ち、石見守の側へ行き、）

靜江　御前樣、お枕を遊ばしませ。

〽胸にくゝりのあるぞとは、知らで枕やかい卷の、介抱如在內室の手當ても屆く氣扱ひ、こ

なたは邪魔を拂はんと、

ト此の內靜江寐て居る石見守に枕をさせる。葉末搔卷をかけることよろしく、腰元四人四邊を取片付けろ、石見守は寐た裝をして居て、よき程に顏をあげ、

石見　おゝまだ皆の者はこゝに居つたか、いや、酩酊をいたしたので、さつぱり忘れて居つたわえ。

靜江　なに、御失念を遊ばせしとは。

石見　今宵は先祖の逮夜ゆゑ、佛間へ參つて御靈前へ拜禮なさねばならぬところ、この酩酊では覺束ない、奧は予が名代を、大儀ながら勤めてくりやれ。

靜江　御名代とござりまするなら、御回向いたすでござりまする、

石見　葉末をはじめ腰元共は、奧と一緒に佛間へ行きやれ。

撫子　私共はこれに居て、

△　宿直をいたすで、

四人　ござりませう。

石見　いや、そち達がこれに居つては、今の矢先ちや、奧が氣を揉む。

撫子　左樣なことは、

四人　ござりまぬ。

石見　はて、悋氣の基ぢや、參れ〳〵。

靜江　そんなら、皆も諸共に。

葉末　暫くお次へ、

皆々　參りまする。

〽常に替りし酒機嫌、樣子ありげと主從は心を跡に入りにける。

ト此の内石見守枕に附いて寐て居る、靜江葉末顏見合せて合點の行かぬこなしあつて、撫子、腰元四人附いて上手へはひる、跡時計の音になり。

〽跡はひつそと鳴り響く、時計も五つむつまじき妹背の中も今日限り、明日は散行く命ぞと無常をさとる折柄に、次の一間に人音のあるを察して空寐入、鼾の聲も高頭夏目主膳は白銀の茶碗携へ立ち出でゝ、四邊窺ひ進み寄り、

ト此の内よき程に石見守顏をあげ、奧へ思入あつて愁ひのこなしよろしく、ト、下手の襖の内にて足音するゆゑ、石見守耳聞立て、元の如くに寐る。爰へ下手の襖を明け主膳好みの鬘總上下老臣のこしらへにて、銀の茶碗を盆へ載せて持ち出で、四邊を見廻し石見守の側へ來り、枕許へ件の盆を置き、

搖り起しながら、

主膳　御前樣々々。

〽搖り起されて顏をあげ。（ト石見守起返り、主膳を見て、）

石見　おゝ、誰かと思へばそちや主膳、何ゆゑこれへ參りしぞ。（トこれにて主膳下手へ下り、）

主膳　はゝツ、最早お目覺と存じまして、水を持參いたしました。

石見　なに、水を持參せしとな。

主膳　はツ。

石見　いや、流石は當家の家老職、氣轉のほど感服いたす。

主膳　有難きその御諚、いざ召上り下さりませ。

石見　如何にも、賞玩いたすであらう。

〽座に起直り一口に、吞むは甘露の水の味。（ト石見守よろしく吞んで、）

いや、下戸の知らざる醉醒めの水、どうもいはれぬ、過分々々。

〽跡を吞まんとなしければ、（ト石見守殘りの水を吞まうとするを、）

主膳　あいや、そのお殘りを拙者めに、頂戴仰せ付けられませう。

石見　何ぢや、跡が呑みたいとな。
主膳　はッ。（トこれには石見守合點の行かぬ思入あつて氣を替へ）
石見　扨は、そちも醉醒めと見えるな。
主膳　仰せの通り拙者めも、大醉いたしてござりまする。
石見　すりや、あのそちも。（ト思入あつて、）いや大醉とは賴もしい、惜しいものぢやが讓り遣はす。
主膳　はゝッ、有難く頂戴いたしまする。
〽樣子ありげに押し戴き、呑む冷水も忽ちに熱き涙と替りたる夏目主膳が落涙を、石見守は見て取りて、
ト此の內主膳愁ひの思入にて、件の水を押戴きて呑み、茶碗を下に置いて、はッと落涙して打ち伏すゆゑ、石見守この體を見て、
石見　こりや主膳、そちや何ゆゑに落涙いたすぞ。
主膳　君のお流れ頂戴いたすも、今宵限りと存じられ、お名殘り惜しう存じまする。
〽思ひ入つたる一言に、さては大事を悟りしかと、知れども態と打ちわらひ、
ト石見守思入あつて氣を替へ、

石見　あは〻〻〻、さてはそちは泣上戸と見えるな、酩酊いたして水を呑み、名殘りが惜しいと申すのは、こりや朋友と連立つて、遊里へ參り別れとやらの、辛いことなぞ思ひ出し、それで落涙いたすのぢやな。

主膳　さ、それは。（ト思入あつて氣を替へ、）御前樣の仰せの如く、明朝未明にきぬ〴〵のお名殘りなさねばならざるかと、それゆゑ落涙いたしました。

石見　はて、その後朝も雨降れば、居續けすると聞き及ぶ、期に至らねば別るゝやら居續けするやら知れぬゆゑ、取越し苦勞は無用々々。

主膳　君は聰明叡智にまし〳〵、下ざまのことまで聞き及び、よく御合點にゐらせらるれば、申すまではござりませねど、傾城遊女と申すものは客を欺き手管とやらにて、詞を飾るも遊里の習ひ、されども廓の意氣地とやらにて間夫と唱へる男には、千金の寶を費やし、寵愛受ける客を捨てゝも實を明すと承はる、なぜ我が君にはまことをば、拙者にお明し下さりませぬぞ。

石見　明せとは、そりや何を。（トこれにて主膳四邊を見廻し、前へ進み、）

主膳　御前は明日殿中にて、御刃傷を遊ばしませうが。

石見　あ、これ。（ト押へ、兩人四邊へ思入あつて、）すりや其の事を、察し居るか。

主膳　知らいで何といたしませう。（ト是れより床のめりやすになり、）先頃猿江のお屋敷へお越しの砌り、兩國にて狼藉なせし曲者が白狀により、御大老が安宅丸を破却なせしも奸臣共が元勸めに起るといへど、さあることを用ゐたまふは御大老の職にあらず、この後又もや奸臣共が勸めによつて如何なる事の、出來なさんも計られず、嫩葉のうちに苅らずんば斧を用ゐる悔あれば打ち捨て置かれぬ一大事と、仰せあつたる其の日より兎角御樣子常ならず、御心勞のほど推量り愚臣も心を勞する所、御先祖樣の御忌日も二日と早きお立ち日なるに、昨日不意の御廟參、又今日は御下城より直御本家へお立寄り、かれこれ以て心得ずと、猶も御樣子窺ひますれば、御歸館あると其のまゝ常にお愼みの御酒を上り、それとはなしに奧樣へ餘所ながらのお暇乞、扨こそいよ〳〵御刃傷と御決心遊ばせしかと且つは驚き且つは憂ひ、お名殘り惜しく存じますゆゑ、醉醒の水に事寄せ持參なしたる冷水を、願つてお跡を頂戴せしは、これぞ主從三世のお別れ、なぜ老臣たる拙者めにかゝる天下の一大事を、御相談は下さりませぬぞ、愚昧の者とお見限りを受けし主膳が身の述懷近頃お恨みに存じまする。

〽流石老臣かねてより悟る大事を明さぬを、恨む涙ぞまことなる、石見守は感じ入り、

ト此の內主膳思入よろしく、石見守もこなしあつて、

石見 はゝまことに當家の礎と頼みし家來のそち程あつて、よくぞ所存を申したり、かゝる大義を思ひ立ち今まで包み隱せしは、近頃不念に似たれども、申し出せば家名をも捨てねばならぬ一儀ゆゑ、忠臣無二の所存より妨げなさんも計られずと、我が一存にて決定なし、今其の方に言はるゝまで發言なさで打ち過ぎしぞ、僅かな知行や家國に替へて居られぬ天下の爲め、假令一命捨つるとも世の人口に狂人の汚名を取るともなに厭はん、あたら忠義のそちはじめ多くの家來に明日より困苦をさするも不便なれど、これも天下の御爲に、いたせしことゝあきらめくりやれ。

〽懷紙を取つて顏に當て、涙隱して居たまへば、主膳は猶も愼んで、

ト此の内石見守よろしく思入、主膳こなしあつて、

主膳 こは勿體なきその御諚、天下のお爲めに我が君すら、御一命を捨てさせたまふに、臣たる者が聊の祿に離れて浪々いたすを、など煩はしく存じませうや、斯く御決心遊ばす上は、決してお留め申しませぬ、して御本家の御老君へ、大事をお明し遊ばしましたか。

石見 おゝ分家の儀ゆゑ御本家へ、申し置かずに居られねば、他聞を憚り御老侯へ竊に大事を申し上げしに、天下の爲めに一命を、捨てるは家名の譽れなりと、殊の外なる御機嫌にて。

主膳 すりや、御機嫌よく御承引を。

ト石見守傍の紙臺の上にある、以前の刀を取り、

石見　それのみならず、彼の者を見事すつぱりいたすやうと、此の一刀を賜はりしぞ。

ト差出す。主膳これを見て、

主膳　はゝツ、斯く御本家の御老君まで、御得心ある上からは、物の見事に遊ばしませ。

石見　おゝ、きつと首尾よく仕果せん。（ト件の一刀を拔き、ぢつと見て）もし、萬一仕損じなば。

主膳　其時こそは義黨を語らひ、下城を待ち受け下馬先きにて。

石見　そりや、其の方が。

主膳　はツ。

石見　おゝ、（ト一刀をしやんと納めるを木の頭）出來し居つたぞ。

ト此の以前上手の襖を明け、靜江窺ひ居て鼻紙を口に當て、ハアヽと泣く。兩人よろしく思入、鳴物なしに、

ひやうし　幕

六幕目

小石川黄門館の場
同家中藤井宅の場
同能舞臺ノ鏡間の場

［役名――黄門光圀卿、藤井紋太夫、魚賣久五郎、按摩玄碩、藤井丈左衛門、同朋多賀得齋、山邊主水、近習中野右内、同江島主計、同渡邊多膳、同岡本左近、侍左源太。藝者小富。］

（小石川御殿の場）――本舞臺四間通しの高二重、本緣附白洲階子、正面銀襖、上の方一間塗骨障子屋體、下の方本緣折廻し、後へ下げて一間同じく障子屋體の出はひり、下座の前土塀紅葉の立木、總て小石川御殿の體、爰に中野右内、江島主計、渡邊多膳、岡本左近等何れも袴一本ざし、近習のこしらへにて、書院火鉢に打寄り居る、この見得調べにて幕明く。

右内　さて今日は、御隱居樣六十一の御賀の祝ひ、お目出度に付き久々にて、御殿に於てお能のお催し、お出入りの觀世を始めとして、名ある役者が集りて各々得手を勤むるよし、珍らしいことではござらぬか。

主計　役者ばかりか囃子なども皆一流を極めし者にて、就中笛はこの廣い御殿の内へ響き渡り、不斷稽古に我々が吹く音色とは餘りの違ひ、然し下手あればこそ上手も知れ、無くてならぬものでござる。

多膳　拙者などはお國より近頃出府いたせしゆゑ、武邊の外は何事も一向辨へ居らざれば、お能などは更に分らず、實の所は欠伸を殺し、餘程切ないことでござるて。

左近　その替りには狂言は腹を抱へる可笑味あつて、餘程面白いものでござる、殊更大藏彌右衛門が鎌腹などは感に絶えます、實に上手なものでござる。

主計　いや大藏も上手だが、鷺は一段立勝り、上手のやうに思はれます。

左近　いや〳〵それはお目違ひ、大藏の方が上手でござる。

右内　それは人々の好み〳〵で、芝居の役者も同じこと、我が好く役者はよく見えます。

多膳　仰せの如く拙者なども、芝居役者のその内で尾登五郎位上手なものは、又あるまいと思ひますが、世間の人は何とも申さぬ。

右内　それは所謂贔屓目でござる。

主計　いや、贔屓と申せば女中衆の、贔屓の多い藤井氏、俄の病氣で出勤なきよし、長局の女中達は嘸力落しでござらう。

左近　いや紋太夫殿は器用なお人、武藝は元より諸藝に達し、中にも能は大の得手にて、四座の内にもあの位舞ふお役者はないとやら。

右内　よしやあつても男が違ふ、藤井氏は美男ゆゑ女中方の受けがよく、いつもお能のその跡で貰ひがあるとは、實に羨ましいことでござる。

多膳　して今日御隱居樣が、お勤め遊ばすその御能は、何と申す名でござるな。

主計　皇帝と申す御能にて、鍾馗をお勤め遊ばします、藤井氏にはワキを勤めらるゝ所であつたが。

左近　風邪によつて勤められぬが、多分は昨夜の呑過ぎで、二日醉でござらうて。

右内　何にいたせ近頃は、諸家へ出入りをいたされるので、內證の都合が好い樣子。

主計　それゆゑ毎日藝者を買ひ、酒浸しで居られるとは。

多膳　よい月日の下で産れたお人。

左近　まことに果報なことでござる。（ト奥より茶道二人天鵞絨の褥蒔繪の煙草盆を持ち出來り）

茶一　これ〱、何れも方靜にめされ。

同二　只今御隱居さまが、

兩人　これへ入らせられまする。

右内　おゝ、是れはよく、

四人　知せて下すつた。

ト四人下手へ下り辭儀をなす。誂への合方になり、奥より光圀更けたる好みの鬘、羽織袴一本ざし太守のこしらへ、得齋坊主鬘十德茶道のこしらへにて附添ひ出來り、光圀は褥の上へ住ふ、得齋下手へ控へる、茶道奥へはひる、

右内　今日は還暦の御年賀、一同恐悅。

四人　申し上げまする。

光圀　年賀の祝ひに久々にて、能の催しいたせしに、空に一點の雲もなく此の頃になき好い天氣、予に於ても滿足至極、一家中の者共へ見物を許しおいたが、皆見物に參つたかな。

右内　仰せに隨ひ今朝より、翁を拜見いたさんと。

主計　一家中の老若男女、我劣らじと出ましたゆゑ。

多膳　流石に廣きお座敷も、お庭内もいつぱいに。

左近　錐を立つる地もなき程、押詰めましてござりまする。

光圀　それは何より悅ばしいことぢや。こりや得齋、予が皇帝のワキを勤むる、紋太夫が不快のよし、出勤はならざるか。

得齋　はツ、四五日前より風邪の所、夜前俄に發熱いたし、何分にも眩暈にて出勤なりかねまする趣き、

申出ましてござりまする。

光圀　それは餘程の風邪と見ゆるな。

得齋　少しなりとも快ければ、是非出勤をいたすと申し、それゆゑ病氣のお屆けも延引せしと申すこと病氣ゆゑとは申しながら、御前のお相手仕らず、嘸殘念にござりませう。

光圀　して、代り役は、誰が勤むるぞ。

得齋　觀世新九郎が勤めまする。

光圀　おゝ新九郎が勤むるとか、それでは稽古いたすに及ばぬ。後刻申し合さう程に、丑之進に左樣申せ。

得齋　畏まつてござりまする。

光圀　最早人數は揃つたかな。

右內　觀世をはじめ諸家の者。

主計　打ち揃ひましてござりまする。

光圀　然らばよき程に始めさせい。

多膳
左近　畏つてござりまする。（ト辭儀をなし奧へはひる。）

光圀　壯年の折はなき事なるが、年取つては覺えごとも不圖どう、忘れをいたしてならぬ。(ト眼鏡を掛け皇帝の謠本を見て、)「實に今思ひ出したり、か丶る惱みの折節に明王鏡を立て置かば病の姿顯はるべし、急ぎ鏡を置くべきなり、かくて暮れ行く雲の足たゞよふ風もすさまじく、身の毛もよだつ折節に、不思議や鏡の其の内に、鬼神の姿ぞうつりける。」

ト此の内光圀よろしく思入、下手縁側より主膳、左近見事なる桐の菓子折を持ちて出來り、下に置き、

多膳　はッ、申し上げまする。

光圀　何事なるぞ。

多膳　先刻御大老織田筑後守殿の家來、黑崎伴右衞門。

左近　今日の御賀を祝し、則ち主人の名代に、參上仕つてござりまする。

光圀　お丶、筑州より使ひが參つたとか。

多膳　はッ、今日御能の御催し、お慰みに進上いたすと。

左近　これなる二重の菓子折を、持參いたされてござりまする。(ト光圀の前へ出す。)

光圀　お丶、左樣か。(ト心に叶はぬ思入。)

得齋　これは見事な二重折、定めて中の御菓子は大久保主水の製なるか、嘸結構なことでござりませう。

多膳　御恐悦を申し上げ度く、お目通りを願はれまするが、
左近　如何取計ひませう。
光圀　なに、筑後の使者が、予に逢ひ度いと申すか。
兩人　左樣にござりまする。
光圀　今日は能の催しにて取込み居れば、面會はいたされぬと、斷り申して歸してしまへ。
左近　是非お目通りを願ひたいと、
多膳　再應申し居りまする。
光圀　えゝ、面倒だ、歸せと申すに。(トきつと言ふ。)
多膳
左近　はツ。(ト恐れて下手へはひろ。)
光圀　陪臣の身を以て、失禮を知らぬ奴だ。
　　トばたばたになり、花道より左源太袴一本ざしの侍にて出來り、花道へ控へ、
左源　はツ、申し上げます。
右內　何事なるぞ。
左源　只今お內玄關へ淺草三筋町に於て、魚渡世をいたしまする久五郎と申す者、親玄碩同道にて先達

の御禮に參上いたせしと申し、取次を願ひますゆゑ、據なく申し上げまする。

右内　このお取込みを存じながら、左樣なものは取次がず、直に歸してしまへばよいに。

左源　仰せなくとも拙者めが、左樣申しましたれど、是非御禮を申し上げたいと、强ひて願ひまするゆゑ、如何取計らひ申すべきか、お伺ひ申し上げまする。

光圀　むゝ、淺草三筋町の久五郎が參りしとか。

左源　はッ。

光圀　同道なせし老人は、目の不自由なるものであらうな。

左源　御意にござりまする。

光圀　苦しうない、これへ通せ。

左源　はッ。（ト引返して花道へはひる。）

右内　只今これへ參りしは、先達御菩提所で、玄碩と申す老人が、

主計　御歎願申し上げし、魚賣でござりまするな。

光圀　おゝ織田が祕藏の犬を殺し、その科により入牢なし、既に一命を取らるゝと承はつて不便ゆゑ、予が餘所ながらの諫言にて、其の沙汰止んで久五郎が、赦免になりしと申すこと。

得齋　これ皆君の御仁惠ゆゑ、御禮に參上いたせしならん。（ト花道揚幕の內にて、）

左源　さあ〱、此方へ通られよ。

ト合方調べにて、花道より久五郎着流しにて菓子折を入れし風呂敷包みを持ち、四幕目の玄碩の手を引き左源太附添ひ出來り、

久五　もし、お庭內を草履を穿いて、叱られはいたしませぬか。

左源　いや〱、決して叱るものはない。

玄碩　然し泥草履で踏みあらしては、勿體なうござりまする。

左源　苦しうないから、穿かつしやい。

ト恐ろ〱舞臺へ來る、久五郎光圀を見てびつくりなし、玄碩を引据ゑ、はツと下に居てうづくまる。

光圀　玄碩、參つたか。

玄碩　はツ、お殿樣でござりまするか。（トひれ伏す。）

光圀　苦しうない、近う參れ。

久五　いえ、これでよろしうござりまする。

光圀　そこに居つては話しがならぬ、近う參れ〱。

兩人　はッ。
右内　御前のお許し、
主膳　遠慮いたさず。
久五　でも勿體なう、
兩人　ござりまする。
左源　さあ〳〵早く參られよ。（トせり立てられ、これにておづ〳〵舞臺下手へ來り、下に居る。）
光圀　こりや玄碩、悴久五郎が一命助かり、嘸悦びであらうな。
玄碩　はツ、お館樣のお蔭にて危い命を拾ひまして、まことに有難い仕合せゆゑ、今日御禮に上りましてござりまする。
光圀　おゝ、眼の不自由なのによく參つた、同道なせしは悴久五郎か。
玄碩　はツ、左樣にござります。お禮を早く申し上げぬか。（ト久五郎顏を上げ、恐れ入りし思入にて、）
久五　へい、まことに有難うござりまする。（ト不器用に禮を言ふ。）
玄碩　これ〳〵悴、どうしたものだ、危い命を助かりましたも、あなた樣のお蔭なれば、もつと長く丁寧に、よくお禮を申さぬか。

久五　爰へ來る道々もよく御禮を申さうと、胸に思つて居りましたが、あなた樣を見ましたら、恐れて何も口へ出ませぬ、今の御禮が精一杯、やつとのことで言ひました。（ト手拭で汗を拭く。）

玄碩　賤しい稼業の魚賣り、がさつ者ゆゑ御禮もろく／＼申し上げませず、失禮の段は幾重にも御免なされて下さりませ。

光圀　いや／＼苦しうない、只一言でも久五郎が誠は面に顯はれて、諂ふものゝ千言にも遙かに勝つて覺ゆるぞ。

玄碩　はゝあ、有難いそのお詞、嬉し涙がこぼれます。（ト玄碩涙を拭ふ。）

久五　おいらは汗が出てならぬ。（ト久五郎無暗に汗を拭く。）

玄碩　これ悴、粗末なものだがお菓子をば、あなた樣のお目に掛けぬか。

久五　さつきから上げようと思つちやあ居たけれど、父さんお前は見えめえが、あすこに立派な折があるゆゑ、みつともなくておらあ出せねえ。

玄碩　御三家樣の事なればお大名からのお遣ひもの、立派な折もあらうけれど、志しは松の葉とやら。折角持つて來たものなれば、早くお目に掛けてくりやれ。

久五　それだといつて、あんまりけちで。

玄碩　はて、それが身分相應だ。（ト久五郎思入あつて風呂敷を解き、小さな菓子折を出し、）
久五　まことにお目に掛けるも、お恥かしうござりますが、貧乏人でござりますから、ほんの御禮の印ばかり、わざとお目に掛けます。（ト言ひにくさうにいふ、左源太取つて、）
左源　すりや此の菓子を、御前樣へ。（ト呆れし思入、）
久五　どうぞお上げなされて下さりませ。
光圀　その品これへ。
左源　はツ。（ト菓子折を光圀の前へ置く。）
光圀　心に掛けしこの土産、忝けなく受納いたすぞ。
玄碩　すりや、お受けなされて下さりまするか。
兩人　えゝ有難うござりまする。（ト兩人辭儀をなす。）
光圀　これ、その折を開き見せよ。
得齋　はツ。（ト折の蓋を明ける。光圀見て、）
光圀　これは未だ見慣れざる、珍らしい菓子ぢやが、何と申す名ぢや。
久五　それは麴町の名代、助惣燒と申しまする。

光圀　その名はかねて聞き及びしが、見るは今が初めてぢや、後に賞翫いたすであらう。

玄碩　不斷結構なものばかり、召上つておいで遊ばす故、所詮お口には合ひますまいに。

久五　それを上つて下さりますとは、えゝ有難うござりまする。（ト光圀思入あつて、）

光圀　こりや、其の菓子折を彼れに遣はせ。

得齋　えゝ、（トびつくりなし、）あの結構な此の菓子を。

光圀　遣はせと申すに。

得齋　へゝい。（ト前へ持ち出て、）御前樣から下されるぞ、有難く頂戴いたせ。

久五　それを私共へ下さりますか。

光圀　今到來いたせし品、土產のうつりに遣はす程に、親仁にこれを喰べさせてくれ。

ト久五郎風呂敷を下へしき、その上へ菓子折を載せ、

久五　これ父さん、お前は眼が見えねえが、滅法界な菓子折を下すつたから、探つて見ねえ。

玄碩　どんなお菓子を頂戴したのだ。（ト玄碩菓子折を探り見て、）悴、こりや菓子折か。

久五　何と大きな折ぢやあねえか。

玄碩　内の竃程あるやうだ、定めて中は見事であらう。（ト久五郎明けて見て、）

久五　見事の何のと、產れてから初めて見た此のお菓子、斯ういふ見事なものゝあるのに、それへはお手をお附けなされず。

玄碩　粗末な菓子の助惣を、召上つて下さりますとは、冥加に餘る親子が仕合せ。

兩人　えゝ有難うござりまする。

光圀　見事なれども其の菓子は、送りし主が光圀のいさゝか心に叶はねば、見たばかりにて手は觸れぬ此の助惣は粗菓なれども、志しが嬉しいゆゑ、それを賞翫いたすのぢや。

久五　三年あとにお袋が死んだ時さへ泣かなんだが、有難涙がこぼれます。（ト手拭で涙を拭ふ、誂への合方になり、）先達て親父から、定めて申し上げましたらうが、御大老の犬とも知らず、大事の鯛を引かれたので、峰で打つ氣で其の犬を出刃庖刀で打ちましたが、つい手が外れて眉間を切り其の儘犬が死んだので、直に縛られ入牢なし、中にゐる內囚人の頭立つたる其の人に委しい樣子を聞きましたら、犬を殺せば命がないと言はれてがつかり力も落ち、假令死罪になるとても、なした罪ゆゑ仕方もないが、後に殘つた眼の惡い親父が嘸や困らうと、それのみ心に掛りまして飯さへ喉へ通りませず、今日か明日かと御沙汰を待ち、夜の目もろくに寐ませなんだ。

玄碩　家でも命のないことを聞きましたゆゑ、一生の親子の別れにこの間吳服橋で逢ひまして、泣きの

涙で別れましたが、どうかいたして助けたく思ふ所へ親切な飴賣どのゝ勸めにて、あなた樣へお願ひ申し、測らず悴を拾ひました。

久五　出られぬ娑婆へ立返り、親父に逢つて話しを聞けば、あなた樣の皆お蔭。

玄碩　恐れ多くもお手づから、犬をお殺し遊ばして、天下の法に行へと、仰せあつたばつかりに。

久五　犬を殺した其の者の、死罪の御沙汰の止みましたは。

玄碩　悴ばかりぢやござりませぬ、まことに世界の人助け。

久五　知るも知らぬも聞き傳へ、悦ばぬものはござりませぬ。

玄碩　實に親子はその晩から。

久五　小石川の方角へ。

玄碩　寐ても足は、

兩人　向けませぬ。（ト兩人手を突き禮をいひ、玄碩思入あつて、）

玄碩　斯く有難い思召のあなた樣の御家來に、似合はぬお人がござりまする。

久五　これ〳〵父さん、今更言つても仕方がねえ、餘計なことを云はぬがいゝ。

玄碩　言ふまいとは思うたれど、人の娘を僞つて慰みものにさつしやつたゆゑ。

光圀　して、それは何者なるぞ。
玄碩　さあ、其のお人は。
右内　御前樣の仰せなれば。
主計　包まず早く申し上げよ。
玄碩　いえ、悴が言ふなと申しますれば。
光圀　いや、予が心得にも相成れば、遠慮いたさず言うて聞かせよ。
玄碩　はい、唯今申し上げまする。
久五　あゝ、言はねえでもいゝことを。（ト跳への合方になり、）
玄碩　何をお隱し申しませう、此の久五郎が妹に、小い時に貰ひましたお富と申すわたくしの娘が一人ござりまするが、母が死んだその時に跡の始末の金に困り、丹後前の櫻風呂へ藝者に出して置きましたが、御當家の御家來にて、藤井紋太夫どのとおつしやるお方が、女房にするから言ふ事を聞けと度々おつしやりますさうなが、末々悴と夫婦にする話しも聞いて居りますゆゑ、お斷り申しましたが、悴が入牢いたしてからおいでなすつておつしやるには、所詮久五郎は助からぬが、おれは日頃御大老の織田さまと懇意ゆゑ、一言賴めば御大老のお聲がゝりで久五郎が命は直に助

けてやるから、言ふ事を聞けとおつしやるので、兄の命が助けたく紋太夫どのゝ心に隨ひ、いはば主ある體をば疵者にされたのが、まことに悔しうござりまする。

久五　父さんお前はさういふが、貧乏暮しの棒手振、おれが女房になるよりか藤井さまの女房になれば下駄と燒味噌、鼈とお月樣ほど違ふ身の上、妹が生涯仕合せゆゑ、そんなに悔むことはない。

玄碩　唯ならおれも悔まねど、そちが命を助けてやると噓僞りを言はしツて、主あるものに疵を附け慰みものにさつしやつたから、腹が立つてならぬわい。

久五　それだといつて妹が藝者をすれば生業柄、金に轉んで人さまの慰みものになるものも、世間にはいくらもあることだ、おれと違つて灰汁脫けた好い男ゆゑ妹が、惚れて居るかも知れねえから、もうよい加減に言ひなせえ。（ト久五郎玄碩を留める、光圀思入あつて、）

光圀　こりや老人、今その方が申せしことは、予が含み置くほどに、先づ其の儘にいたして置け。其のうち心の晴るゝやう、取計らうて遣はすぞ。

玄碩　あゝ返すがへすも御仁情、有難う存じまする。

久五　これ父さん、長居は恐れ、よい加減にもうお暇をいたさうぢやないか。

玄碩　年寄りの口數多く、餘計のことを申し上げた。

久五　左様なればわたくし共は。
玄碩　お暇いたしますで、
兩人　ござりまする。
光圀　その方の眼が不自由でなくば、今日は能の催しあれば、見物させようもの。
玄碩　いえ、わたくしは見えませいでも、悴に見せたうござりますが、お許しなされて下さりますか。
光圀　おゝ、遠慮に及ばぬ、見物いたせ。
久五　それは有難うござりまする、まだ能といふものを、見たことがござりませぬ。
玄碩　又わたくしは鳴物の音を承はりたうござりまする。
光圀　然らば二人を庭内へ、案内いたしてやりやれ。
左源　畏まりました。
玄碩　左様なれば仰せに任せ。
久五　御見物いたしまする。
玄碩　これ、御見物といふがあるものか。
久五　つい、丁寧に言はうと思つて。

左源　さあ、少しも早く參られよ。

玄碩　お世話さまでござりまする。

ト合方しらべにて左源太先きに、久五郎玄碩の手を引き、片手に折を持ち下手へはひる。

光圀　最前より氣鬱いたした、久五郎が持參の助惣、これを口取りに一服呑まん、得齋立て、參れ。

得齋　はツ、畏まつてござりまする。（ト奥へはひろ、光圀折を前へ引寄せる。）

右内　すりや、御前にはその粗菓を。

主計　お口取りに召上りますか。

光圀　おゝ、志しを賞翫いたす。

ト合方になり、奥より得齋紫の袱紗に茶碗を載せ持ち出で、光圀の前へ置く、光圀茶碗を引寄せ助惣燒をを取上げる。此の時薄き風の音になり、茶碗の中へ蠅の落ちし思入、光圀これへ目を附け、茶碗を取り上げ中を見て不審の思入にて、

得齋此の茶は、

得齋　お園のお棗に、ござりましたお茶にござりまする。

光圀　むゝ、左樣か、立て直して參れ。

得齋　はッ、（ト茶碗を持ち奥へはひる。）
光圀　鬮の棗に入れ置きしは、宇治上林より參りし茶、口を切りしも此の程なるが、はて合點の行かぬことぢやな。
右内　何か唯今のお茶のうちに。
主計　替りしことがござりましたか。
光圀　いや、別に替つたことはない。
ト合方にて得齋又茶碗を持ち出出り、光圀の前へ茶碗を出し、後へ下つて平伏なし、
得齋　はッ、只今は申し譯なき粗相を、仕りましてござりまする。
光圀　なに、粗相をいたせしとは。
得齋　お茶碗を仕替んと中を改め見ますれば、蠅がはひつて居りました、心附ずに其のお茶を差上げましたる不調法、恐れ入りましてござりまする。
光圀　それゆゑ立替させたのぢや。（ト光圀茶碗を取り、中を見て、）こりや、白湯ではないか。
得齋　仰せの如く、お白湯にござりまする。
光圀　なぜ茶を立てぬのぢや。

得齋　只今立て直せしお茶碗に、心のせゐか常と違ひ、たゞならざる泡立ちゆゑ、若しやと存じお白湯なば、差上げましてござりまする。

光圀　おゝ、よく心附いた。

得齋　はツ。（ト言ひながら苦痛を怺へる思入）

光圀　こりや得齋、如何いたした。（ト光圀得齋へきつと目を附け）

得齋　お茶の泡立ち心得難く、立直したる其の半を、お毒味いたしましたが、別に替りしこともなけれど、大事に大事を取りまして、お白湯を差上げましてござるが、只今俄に腹中痛み胸苦しく覺えまするは、たゞ事にてはござりませぬ、必ず御油斷遊ばしますな。

光圀　すりや、其の方が毒味せしとか。

得齋　はツ。（ト苦しみ、血を吐くを、紙にて押へる、右内主計介抱なし）

右内　得齋どの、御前でござるぞ。

主計　心を慥に持ちめされ。（ト此の樣子を光圀ぢつと見て）

光圀　おゝ毒味なせしは出來したり、只今毒消しの藥を與へん。
　と懷中の紙挾より藥を出し、件の湯にて呑ませる。

得齋　こはお手づから下し置かれ、有難う存じ奉つりまする。俄に五臓惱亂なすは、正しくお茶に。

　　ト言ひかけるを。

光圀　いや、思はぬ蠅が落ちしゆゑ、それが毒となりしならん。

　　トばた〳〵になり、下手より袴裝の侍出で、

侍　はッ、申し上げます。

右内　何事なるぞ。

侍　山邊主水どの、お目通りを願はれます。

光圀　おゝ山邊が歸りしとか、これへ通せ。

侍　はッ。（ト下手へ走りはひる。）

光圀　こりや得齋、その方は部屋へ參り、醫師の治療を受くるがよい。

得齋　はッ。

光圀　其の方共は介抱いたせ。

右内 主計　はッ。いざ得齋どの。（ト手を取るを、）

得齋　いえ、決してそれには及びませぬ。

ト苦痛を怺へ立上りひよろ〳〵とする、右内主計左右より押へる、得齋苦しき思入、唄になり兩人介抱して奥へはひろ。

光圀　若年ながら得齋は其の身同朋の職を忘れず、毒味なせしは感心なり、祕法の毒消し與へし上は命に障りはよもあるまじ、さるにても心得難きは、口切りなして程なき茶に、かゝることのあるは不思議、何者の仕業なるか、圍ひの内へ立入る者、ムウ。

ト光圀ぢつと思入、下手より主水上下にて出來り、下に居て、

主水　山邊主水、只今歸邸仕ッてござりまする。

光圀　汝が歸りを待ち侘びしぞ。

主水　はッ。

光圀　近う〳〵。

主水　はッ。御免下しおかれませう。〔ト合方きつぱりとなり、二重下手へ上りて住ひ、平伏なして〕何時に替らぬ我が君の、うるはしき御尊顏を拜し、恐悦至極に存じ奉つりまする。

光圀　その方も無事にて、滿足なるぞ。

主水　はッ。

光圀　今日は予が六十一の賀を祝ひ、久々にて能の催し、よき折に歸りしぞ。

主水　その御祝儀を申し上げ度く、且つは御内命蒙りし密事もあらかた探索なし、行き屆きましたるゆゑ、一先立ち歸りましてござりまする。

光圀　探索が屆きしとか。

主水　これ、御覽下さりませ。（ト懷中より書面を出して差出す、光圀手に取り）

光圀　四邊へ心を。

主水　はッ。

ト合方能の笛をあしらひ、主水四邊へ思入、光圀懷中より眼鏡を出し、是れを掛け開き見て、

光圀　安宅丸を破却せし、大老織田が自儘の計らひ、猶も京地大佛を破却いたして新錢に換へんといふも一つの企み、これに家臣の紋太夫が、加はり居りしか、以前に替る行ひに心得難く思ひしが、斯程のことゝは知らざりし。

主水　君のお名を僞りて町人共が願ひごと、賄賂を取つて欺きし、紋太夫が種々の惡計、探索いたしてござりまする。

光圀　これにて思ひ合すれば、日頃大老筑州方へ親しく彼れが立入るは、かゝる企てあるゆゑなるか。

主水　仰せの如く大老の、相談相手と存ぜられまする。

光圀　あゝ光圀も年老いて、所謂老耄なしたるか。

主水　何と仰せられまする。

光圀　あゝ眼鏡違ひを、（ト眼鏡を取るを道具替りの知らせ）いたしたわえ。

ト思入よろしく、中の舞にて道具廻る。

（紋太夫宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上の方一間床の間好みの掛物、眞中三尺太鼓張りの襖出入り、下の方地袋戸棚銀襖、此の戸棚の上内外謠本の本箱、鼓、舞扇など載せあり、上の方一間障子屋體、總茶壁、下の方一間臺所口三尺繩簾を掛け、いつもの所屋根附の門口、これへ藤井紋太夫といふ表札、總て家中長屋の體、しらべにて道具留る、と床の淨瑠璃になる。

〽其の德は四方へあふるゝ小石川、清き流れの御館に蔓竝べし御家中も、今日はお能の拜見に物靜かなる中長屋、藤井が宅へ由緣ある丈左衛門來かゝりて、

ト花道より丈左衛門上下大小にて出來り、花道へ留り、

丈左　今日御祝のお能に病氣と申して紋太夫が、出勤せざるは心得ずと、詰所に於て家中の者がかれこれ取沙汰いたすを、聞くに忍びず中座なし、樣子窺ひに參つたが篤と實否を糺した上、身の潔白

を立てねばならぬ。
〽心崩れぬ上下の、折目高に門へ來て、（ト思入あつて門口へ來り、）
賴まう〳〵。（ト奥にて、）
紋太　どうれ。
〽おとなふ聲に紋太夫、昨夜の酒のまだ覺めず、目を擦りながら立ち出て、
ト奥より紋太夫着流しにて、寐て居たる心にて出來り、小聲にて、
二日醉に天窓が重く、病氣と僞り寐て居つたに、案内乞ふは野暮な奴だ。
〽呟きながら門の戸を明くれば伯父の丈左衞門、（ト門口を明けびつくりなし、）
や、こりや伯父樣でござりますか、先づ〳〵これへ。
丈左　許しやれ。（ト合方になり内へはひり、）取次の者は、如何いたした。
紋太　召仕は男女とも、お能を拜見に參りました。
丈左　それでは誰も居らざるか。
紋太　わたくし一人にござりまする。
丈左　それは幸ひ、

紋太　え。

丈左　いや早速ながら承はりたいは、そちは病氣と申すことぢやが、餘程念の入つたことか。

紋太　いや、病氣と申す程でもないに、お見舞に預かつては、まことに面目次第もない。

丈左　然らばさしたることでもないか。

紋太　當座のことでござりまする。

丈左　なぜ當座のことならば、今日のお能に出勤いたさぬぞ。

紋太　押して出勤いたさうと、存じましたが眩暈にて、何分足の踏み度も覺えず、據ろなく御届けをいたしましてござりまする。

丈左　大方それは夕べ氣の、宿醉ゆゑであらうがな。

紋太　なに、酒などに醉ひませうぞ。

丈左　醉はぬといへど瞼も重く、其の方はまだ目が覺めまいが。

紋太　いえ、目は覺めて居りまする。

丈左　確と左樣か。

紋太　何ゆゑあつて伯父樣には、左樣に御念をお押しなさるな。

〽いふにこなたは詞を改め、

丈左　むゝ、目が覺めて居るならば、潔く切腹いたせ。

紋太　なに、切腹なせとは。（ト誂への合方になり、思入あつて、）

丈左　今更いふに及ばねど、そも〱汝は幼少より人に勝れし才智にて、文武二道はいふも更なり、遊藝にさへ妙を得て身の行ひ正しきゆゑ、上御二方樣を始めとして一家中の評判よく、凡そ子を持つ其の親は羨まざる者はなし、伯父甥なれば某などは我が子の如く思ふゆゑ、所謂譬の親馬鹿にて二なきものとそちを思ひ、常に多藝を自慢なし、褒めそやせしは我が愚、此の頃家中の者共がそちが好からぬ噂をなすは、人の譏りと思ひしが、まさかに形のなきことを申すものでもあらざれば、心を附けて居つたところ、一昨日雨中の徒然に文武の談話いたさんと參りし甲斐なくそちは留守、一服なさんと座に附いて測らず机上を見返れば、手跡も見事な一通あり、取り上げ見ればさる方より、竊にそちへ送りし密書。

〽丈左衛門は懷中より、一通取出し差附くれば、胸にぎつくり紋太夫、

ト丈左衛門懷より一通を出し、紋太夫に見せる、紋太夫ぎつくり思入あつて、

紋太　え、すりや其の一書を、

丈左　さあ切つても切れぬ伯父甥の、我が眼にこれが掛りしに、まだしもそちが身の仕合せ、もし他人の眼に掛らば、直に其の身は縄目の恥、如何なる處刑に逢はんも知れず、さあ伯父が介錯いたしてやるから、先非を悔いて潔く、お咎めなき内切腹いたせ。

紋太　かゝる證據のある上はお疑ひは無理ならねど、拙者に於て此の一通、毛頭覺えはござりませぬ。

〽いふに藤井は脱れんと、態と一通讀下し、（下紋太夫件の一通を開き見て、）

丈左　斯く明白にそちが名の、記しあるのに此の一通、毛頭知らぬと申すのは。

紋太　察するところわたくしが、上のお覺えよきゆゑに家中に妬むものあつて、かゝる密事の僞書を拵へ、罪に落さん企み事。

丈左　誰が左樣の事をしようぞ、口賢く言解くとも、此の丈左衛門は承知せぬ、それともこれが拵へ事と申す證據があらば言へ。

紋太　これは伯父樣とも存じませぬ、人目に掛らば命にも及ぶ程の一通を、これ見よがしに机の上へ、斯程のことを企む者が、出し散して置きませうや、何と左樣ぢやござりませぬか。

〽常意卽妙理で推せど、いつかな聞かぬ丈左衛門、

丈左　いや〳〵それは卑怯千萬、命惜しさに其のやうな申し譯をいたすであらうが、惡事に荷擔なす者

は露顯の時に命を捨てるは覺悟の前、既に最前御隱居樣お茶のお好みありし時、同朋得齋が圍にて薄茶を立て差上げしに、その茶碗へ天井より蠅が落ちてはひりしゆゑ立替へよとの仰せを受け、若し毒にてもあらざるかと、御隱居樣へはお白湯を差上げ、得齋毒味いたせしに、果してお茶に毒藥あつて忽ち血を吐きたつての苦しみ、忝けなくもお手づから毒消しの良藥たまはり命は助かりしが、毒味いたすは君に代り、我が一命を捨つる所存、同朋でさへも斯くの如し、況して汝はお側小姓、死すべき時に死なざれば死にまさる恥ありと、其の金言を忘れしか命惜しむは卑怯なるぞ。

紋太　すりや同朋の得齋が、お茶の毒味をなせしとか。

〽さては企みの破れ口と、心に思へど餘所になし、

その得齋が毒味なせしは珍らしからぬことでござる。總て主人へ差上げる品は鬼役毒味なすはこれ臣下の者の勤めなり、よし毒ありて死するとも日頃の御恩を報ずる所、今にも事ある其の時は御馬前に於て死す心、卑怯に惜しみはいたしませぬが、身に覺えなきことゆゑに、假令伯父の勸めでも、只今命は捨てませぬ。

左太　まだ〳〵左樣なことを申すか、上の御沙汰を受けぬ內、切腹なせと申すのは、そちが爲めを思ふゆゑ。

紋太　爲めを思ふとおつしやるとも、身に覺えなきことゆゑに、
丈左　然らば何やう申すとも。
紋太　命はめつたに捨てませぬ。

〽言ふにこらへぬ丈左衛門、刀引ツ提げずんと立ち、（ト丈左衛門刀を持ち立上り、）

丈左　我が申す事を聞かぬ上は是非に及ばぬ、此の趣き密書を證據に申し立てる、上の御下知で繩にかかり、死刑にあつて命を捨てろ。
紋太　すりや伯父樣には、これを證據に。
丈左　伯父甥一ツでないといふ、申し譯に訴へる。

〽疊蹴立てゝ行きかけるを、

紋太　あいや、其の儀は暫くお待ち下され。
丈左　然らば此の場で企みを明かし、先非を悔いて切腹なすか。
紋太　さあ、それは。
丈左　密書を證據に訴へようか。
紋太　さあそれは。

丈左　切腹なすか。

紋太　さあ、

丈左　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

丈左　何ゆゑかゝることをなせしぞ。

〽銳き伯父が一言に、刃で胸を刺るゝ如く、今は包むに詮術なく、（ト紋太夫切なき思入にて、）

紋太　その密書を證據となし、今伯父樣に訴へられしなば、最早包むに詮なき次第、後悔至極にござりまする。

丈左　文中總て他見を憚り隱語を以て認めあれど、事成就せし其の時は一萬兩を贈らんとある密書は惡事に相違なし、何不足なく今日を送るは君の御恩なるに、何ゆゑ惡事に與なせしぞ。

紋太　今更申すも詮なけれど、一通りお聞き下され。（ト誂への合方になり、）御存じの如く我が父は小祿の身を顧ず常に大酒を好みしゆゑ、只一錢の貯へなく來る年每に貧苦に迫り目出度き春を迎へしことなく、去年の儘なる汚れ布子に身幅も狹く友達と遊ぶことさへならぬ悔しさ、おのれ今に出世して人に肩を竝べんと、文武の道は言ふに及ばず諸藝に心委ねしゆゑ、年を重ねず奧儀を極め、

既にお小姓に出でしより御隱居樣のお覺え目出度く次第に立身出世なし、父が教へし亂舞の德にて諸侯へ招かれ用ゐらるゝも、これ我が藝のみならず、御隱居樣の光りにて多分の謝物をたまはるゆゑ、昔の貧に引替へて內福の身となつたれば、身分相應父母に榮耀をさせて見送りしは、これ紋太夫が一つの孝、されば人にも褒められしが兩親の亡きその後は只一人身に、愼みし酒も常より度を過し一度遊里に赴きしが我が心の狂ひ初め、貯ふ金も遣ひ果し終には惡しき友の勸めに種々惡計を廻らして數多の金を得たのは身の害、もう止めようと思つても心の駒が狂ひしゆゑ、今更止めるに止められず、初めは親に孝行を盡さん爲にせしことも、今は却つて不孝となり、我が一命を捨つるに至るも、所謂自業自得ゆゑ、是非なき次第にござりまする。

〽兩手を突いて懺悔なし、心のまことを顯はせば、伯父は猶更せき立ちて、

ト紋太夫後悔せし思入

文左 自業自得と覺悟なさば、いざ潔く切腹いたせ。

紋太 切腹なすは易けれど、多年の御恩を忘却なし、惡事に與せし身の大罪、一々君へ申し上げ、御成敗を受くる所存。

文左 まだ〳〵左樣なことを申すか、命惜しまば某が、この場で汝を成敗いたすぞ。

紋太　すりや、伯父上には拙者めを、

丈左　家の爲めゆゑ覺悟いたせ。

〽抜く手も見せず切りかくれば、身を躱して丁と留め、

ト丈左衛門刀を抜いて切つてかゝる、紋太夫身を躱し鍔許を留める。

紋太　決して卑怯にあらざれば、暫く拙者が命をば、拙者にお預け下さるべし。

〽振拂つて切り込むを有合ふ傍の扇おつ取り、上段下段にあしらふ折柄能の囃子の笛鼓、心耳を澄す程拍子、

と丈左衛門切つてかゝる、紋太夫棚にある舞扇を取つて受け留め、よき見得より本行能の鳴物になり兩人眞の立廻り、此の内始終紋太夫扇を遣ひ能の振になる仕組よろしく、なか〱切兼る手練、感心せし思入、

〽烈しき手練に切兼ねて、伯父は刀を投げ出し、（ト丈左衛門どうと下に居て刀を捨て、）

丈左　斯程の手練を持ちながら、何ゆゑ惡事に與なせしぞ、殺すは伯父も殘念なるわ。

〽流石親身の伯父甥に、悔し涙に暮れにける、折から玆へ駈來る侍、門口より聲高く、

ト丈左衛門涙を拭ふ、紋太夫もぢつと思入、ばた〱になり花道より袴一本ざしの侍駈來り、門口

より、

侍　紋太夫どのには病氣のよし先刻お屆けあつたれど、御隱居樣の急お召し、押して出仕なさるゝやう申し附けられましてござる。

紋太　委細承知仕つる、病中にはござりまするが、只今參上仕つると左樣仰せ下されませう。

侍　畏まつてござる。

〽畏まつたと急ぎ行く、跡見送りて紋太夫、（ト侍ばた〳〵にて引返しはひる。紋太夫思入あつて、）

紋太　只今お聞きなさる通り、御隱居樣より俄のお召し、何事かは存じませぬが、これより出仕つかまつれば、暫時御猶豫下さりませ。

丈左　先刻お家の探索方山邊主水が歸りたれば、正しく汝が事なども探索なせしと覺えたり、急のお召しはお咎めならん、その覺悟にて出仕せよ。

紋太　病中推して出ろとあるは、大方左樣と存ぜられます、お糺しあらばわるびれず逐一先非を申し上げ、御刑罪を受くる所存。

丈左　その詞に相違なければ、證據になるべき此の一書は、まツこの如く火中へ投じ。

〽傍の火鉢へ打ちくべれば、

ト丈左衞門件の手紙を火鉢の中へ投込む、掛焔硝ぱつと立つ。

紋太　はゝ、伯父樣のお情、有難うござりまする。（ト辭儀をなす。丈左衞門思入あつて、）

丈左　返す〴〵も殘念なるは、これまで家中の人々に某が自慢をいたせしも、惡事露顯の上からは、後指を人にさゝれ、笑ひ物にならねばなりませぬ。

紋太　わたくし事も今となり成したる事ゆゑ是非なけれど、末世へ惡名殘しますが殘念でござりまする。

丈左　斯くまでならぬ其の前に、改心なさばよかりしに。

紋太　狂ひ出してはなか〳〵に、心の駒の止まらず。

丈左　やがて其の身は猿つなぎ。

紋太　嘸や冥土で兩親が。

丈左　草葉の蔭で歎いて居らう。

紋太　初手に盡せし孝行も。

丈左　今となつては不孝となる。

紋太　愼むべきは、

兩人　私慾ぢやなあ。

〽譬にもいふ泣き寄りの、親身の手に手取交し、暫し涙に暮れにける。

ト兩人よろしく思入あつて、

丈左　然らば身共は、これより御殿へ。

紋太　左樣なれば伯父上樣、

丈左　紋太夫。（ト兩人顏見合せ愁ひの思入あつて、）あゝ殘念なことぢやわえ。

〽これが名殘りにならうかと、咽ぶ涙を呑込みて、御殿をさして急ぎ行く、

トよろしく名殘りを惜しむ思入あつて、足早に花道へはひる。

〽跡見送りて紋太夫は、ほうと一息吐息をつき、

ト跡見送りて紋太夫下に居て、床の合方になり、

紋太　初めは親に孝行をしたさに諸藝を勵みしが、却つて其の身の害となり、習ひ覺えた亂舞にて、思はぬ金を得し所から、世の譬にもいふ如く喉許過ぐれば熱さを忘れ、昔の貧苦は何處へやら日增に募る身の奢り、金が欲しさに惡事に泥み今更千悔いたすとも、言つて返らぬ事ばかり、

〽先非を悔ゆる其の折から、此の家の軒へ來かゝるは、散行く花の櫻風呂、小富も浮かぬ面色にて、

・ト花道より小富藝者餘所行きのこしらへにて出來り、花道へ留り思入あつて、

小富　思へばいつぞや櫻風呂で、兄さんの身が助け度く、藤井さまの詞に從ひ枕かはせし甲斐もなく、黄門樣のお情にて家へ歸らしやんしたゆゑ、わたしが好きでしたやうに、父さんが言はしやんすので、生きて居られぬ身の言譯、ほんに果敢ないことぢやなあ。

〽涙に暮れてさめ〴〵と、門の名札をしるべにて、樞のもとにたゝずみて、
ト兩人心々の思入よろしくあつて、小富舞臺へ來り、門口の名札を見て、

はい、御免なされませ。

〽いふ聲聞きて、

紋太　や、さういふ聲は。

小富　藤井さま、わたしでござんす。

〽門の戸あけて駈け入れば、（ト小富門口を明けつか〳〵と內へはひる、紋太夫びつくりして、）

紋太　そなたは小富、どうして爰へ。

小富　四五日お目にかゝらぬゆゑ、お目に掛りに參りましたわいなあ。

〽縋り附かれて紋太夫、死ぬる覺悟の妨げと、態と詞も愛想なく、

ト紋太夫惡いところへ來たといふ思入あつて、

紋太　あゝ尋ねて來ずともよいことを。

小富　折角尋ねて參つたに、來ずともよいとは藤井さま、きつい愛想づかしでござんすが、わたしや正直者ゆゑに、嘘もほんまに受けますぞえ。

紋太　おぬしは浮いた藝者生業、嘘をいふのが常であらうが、身共は所謂侍氣質、何で嘘をいふものだ。

小富　嘘を言はぬとおつしやるからは、來ずともよいと言はしやんしたのは、ほんまのことでござんすかえ。

紋太　さりとは執拗い、知れたことだ。

〽便りに思ふその人の、思ひ掛けない挨拶に、小富はおろ〱涙ぐみ、

ト小富思ひがけなき思入あつて、

小富　そりやお情ない藤井さま、兄の命を助けるとおつしやるゆゑに此の身を任せ、あなたの仰せに隨ふわたし、元兄さんと末々は夫婦にすると父さんの話しに聞いて居たけれど、命にかへて道ならぬ枕を交せし甲斐もなく、

〽其の兄さんは黃門樣のお情ゆゑに命助かり、わたしが好きで身を任し、言交しでもしたやうに、

父さんが言はしやんすゆゑ死んで言譯する覺悟、言ひ約束はあるけれどまだ杯もせぬ兄さん、お前を夫と思ふゆゑ此の世の別れに來たわたし、それにつれないそのお詞、死んで行く身に思ひの種、未來の迷ひでござんすわいな。

〽さりとはつれない心やと、あやも涙にかきくれて恨み歎くは尤もと、思へどなまじ打ち明けなば、身の妨げと突き退けて、

ト此の內小富よろしく思入、小富は切なきこなしあつて、すがるを突き退け、

紋太　すりや、それゆゑに死ぬ覺悟か、それは惡い料簡だ、これが堅氣な身ではなし、浮いた稼業をするからは、いはゞ人の慰みもの、やかましくいふことはない。この紋太夫が別れたら親父へ濟まぬこともあるまい、死なうといふを思ひ留り、久五郞と添ふがいゝ。

小富　さういふお前の心と知らず、所詮この世で添はれぬゆゑ、あの世へ行つて半座を分け、未來の緣を待つ心、今となつては此のまゝに、わたしや死ぬにも死なれませぬ。とあつてこれを父さんや又兄さんに斯う〳〵と、どうまあ譯が言はれませう。

〽わつとばかりに泣き伏す折柄、又も迎ひの早使ひ、

ト小富ハア、と泣き伏す、紋太夫不便だといふ思入、ばた〳〵になり以前の侍走り出來り、

侍　紋太夫どの〳〵、御隱居樣がお待ち兼ね、急いで御出仕なされませ。

紋太　はツ、只今支度いたしまして、直に出仕つかまつりまする。

侍　お急ぎなされい。

〽言ひ捨て直に引返せば、はやこれまでと紋太夫、

トばた〳〵になり、侍引返して花道へはひろ。紋太夫きつと思入あつて、

紋太　御隱居樣より再度のお迎ひ、これより御殿へ出仕いたせば、爰には叶はぬ早く歸れ。

〽手を取り門へ突出せば、

ト紋太夫心の急く思入にて、小富を門口へ突出す、小富門へ縋り、

小富　そんなら、どうでも。

紋太　もうこの世では。

小富　え。ト兩人顏見合せ、思入あつて、

紋太　逢はぬぞよ。

〽門の戸はたと立て切つて、心殘して入りにける。

ト紋太夫門口をしめさるをおろし、涙を振拂ひ、つか／＼と奥へはひる、小富ハツと泣き伏す。

〽跡に小富は泣き伏せしが、やう／＼に顔を上げ、（ト小富思入あつて、）

小富　男の心と秋の空、變り易いといひながら昨日に替る愛想づかしは、此の身に飽きが來たことか、合點の行かぬは兩の眼に涙を持つてござんすのは、何ぞ仔細のあることか、譯があるならあるやうに、なぜ話しては下さんせぬ。（ト門口をたゝき、）爰明けて下さんせずば、裏へ廻つて、おゝさうぢや。

〽小褄引きあげ庭傳ひ、裏手をさして、

ト小富よろしく思入あつて、三重にて下手へはひる、跡ゆつくりと道具廻る。

（能舞臺鏡の間の場）――本舞臺三間の間平舞臺正面銀襖、上の方橋掛りの心にて緞子の幕、これを揚げる竹を付け。幕の向う晝心に橋掛りの書割、下の方折廻し同じく銀襖、正面に誂への姿見の鏡、この脇に臺附の赤頭衣桁に唐織の裝束を掛け、蒔繪の大服臺に中啓小さ刀など小道具を入れ、舞臺一杯に毛氈を敷詰め、爰に光圀赤頭金の唐冠共切狩衣鍾馗のこしらへにて、蒔繪紋散しの鬘桶に腰を掛け、下手に以前の右内、主計、多膳、左近麻上下の後見にて控へ居る、三重大小の鳴物にて道具留る。

光圀　こりや、紋太夫は如何せしぞ。
右内　先刻仰せの趣き、藤井へ申し達せしところ。
主計　病中にはござれども、押して出仕つかまつると。
四人　お受けいたしてござります。
光圀　未だ出仕いたさぬではないか。
多膳　卽刻出仕なすべきを、思ひの外の遲刻ゆゑ。
左近　又もや只今再應の、使ひを遣はしましてござりまする。
光圀　誰なりとも小屋へ參り、紋太夫を同道いたせ。
四人　はッ、（ト四人立掛る、ばた〳〵になり、下手より侍出で、）
侍　はッ、只今藤井紋太夫、出仕つかまつッてござりまする。
光圀　おゝ、紋太夫出仕せしとか。
右内　此のお能相濟みてお目通りいたすやう、
主計　お次の間に紋太夫を。
多膳　控へさせて置きませうや。

左近　この儀お伺ひ申し上げます。

光圀　年取つては性急に、暫時の内も待つて居られぬ、出仕せしとあるからは、予が出にはまだ間がある、直に出るやう申し附けい。

侍　はッ、畏つてござりまする。

〽はッと答へて入りにける、程もあらせず紋太夫病中ながら君命に、身は禮服に改めて靜々こなたへ歩み出で、頭を疊へすり附けて、はつとばかりにひれ伏せば、太守はぢろり打ち見やり、

光圀　紋太夫出仕なせしか。

ト此の内下手襖をあけ、以前の紋太夫麻上下にて靜々出で、はッと平伏なす。

紋太　はッ、火急のお召しに取敢へず、病中ながら其の儘に、出仕つかまつッてござりまする。

光圀　紋太夫に密用あれば、皆の者は暫く次へ。

兩人　畏つてござりまする。

〽君の仰せに一禮なし、諸士は一間へ入りにける。（ト四人辭儀をなし、上下の襖へはひる。）

〽太守は四邊見廻して、

光圀　近う參れ。

紋太　はッ。

〽はッとばかりにすりいづれば、（ト紋太夫宜しく思入あつて前へ出る。誂への合方になり、）

光圀　改め申すに及ばねど其の方が父丈左衞門は、元觀世の役者にて藤井へ養子に參りし者、覺えし藝に一家中の子供へ謠の稽古をなす、まだ其の頃は予も壯年、紋左衞門を師と賴み謠は元より亂舞を學び終に奧儀を極めしゆゑ、そちを一方ならず思ひ幼少より側近く小姓となして使ひしも、聊か師への恩返し、然るに他の小姓と違ひその器量拔群にて、大人も及ばぬ才智發明末賴もしく思ふゆゑ目を掛けて使ひしに、一として予が心に叶はざることなし、殊には又忠義に厚く孝心深き性なれば、竝ぶ者なきよき家來と、常に稱讚いたせし其の方、この兩三年この方は大老織田を始めとして老若諸侯へ立入りて、其の身持よろしからぬを略風聞に承はれど、佞奸どものさかしらと取上げもいたさゞりしが次第に增長なすと聞き、探索なして聞糺せしに、そちが行ひ惡しき事數箇條に及びしぞ。何ゆゑ以前の忠義に替り心得違ひなしたるか、それにて箇條を披見いたせ。

〽懷中なせし一通を投げやりたまへば紋太夫、恐る〳〵取上げて見れば我が身の犯せし惡事斯くまで探索屆きしかと胸に打ち來る波頭、かの龍宮の玉手箱あけて悔しき箇條書、

ト光圀懷中より一通を出し投げやる。紋太夫取上げ開き見て、一々讀んでびつくりなす思入、光圀ぢつと目を附け居て、

定めて若氣の至りであらう、數箇條の内その方が、申し開きの廉あらば一々それにて返答いたせ。

紋太　はツ、恐れ入つてござりまする。(ト平伏する。)

光圀　これ、恐れ入つたでは相分らぬぞ。

紋太　斯く御探索屆きし上は、數箇條のうち一箇條も、申し譯はござりませぬ。

光圀　すりや、申し譯がないと申すか。(トきつと言ふ、)

紋太　はツ、申し譯はござりませぬ。

〽肌くつろげば腹卷の、布ににじみし血汐の紅葉、老侯早くも認めたまひ、

ト紋太夫苦痛の思入にて片手を突き胸をあける、襦袢の上へ締めし腹卷に血汐にじみゐる、光圀始終心得ぬ思入にて、

光圀　ムウ、眼中どよみて面色變り、五音の調子狂ひしは、さては切腹いたしたか。

紋太　はツ。

光圀　ムヽ、よくいたした。

〽老侯莞爾としたまへば、藤井は苦しき息をつき、（ト能の笛をあしらひ、）

紋太　そも十三の春よりして、君のお側へ仕へ奉り、數多お小姓ある中に一方ならぬお惠み受け、あやかりものと朋輩の常に妬みを受けるほど、御高恩に預りしも私慾に迷ひ忘却なし、今日露顯に及びしは、天の御罰を蒙むるところ、恐れ入つてござりまする。

〽先非を悔いてひれ伏せば、憎い奴とは思召せど、御愛臣ゆゑ不便に思ひ、

ト紋太夫平伏なす。光圀思入あつて、

光圀　幼年よりして手許に使ひ、衆に勝れし器量才智、かゝる企みをいたさずば、家の爲めにもなるべきを、心柄とは言ひながら、今その方を殺すのは、予に於ても殘念なるぞ。

紋太　はッ。

〽厚き情のお詞に、有難涙に暮れける折柄、

ト兩人よろしく思入、ばた／＼になり、主計出來り、下に居て、

主計　はッ、最早お出場にござりまする。

光圀　えゝ、存じ居るわい。（トきつと言ふ。）

主計　はッ。

ト主計びつくりなし後退りに下手へはひろ、これより皇帝の鳴物になり、淨瑠璃なし、光圀思入あつて、

光圀　紋太夫、面を持て。

紋太　はツ。

ト右の鳴物にて紋太夫苦痛を條へ面を取りて差出すを、光圀面を取つて下へ打附ける、面仕掛にて二ツに割れる、紋太夫びつくりなす、光圀立上つて、

光圀　やあ我が祕藏の小べしみの面、打割つたる無禮者、手討ちにいたす覺悟なせ。誰そあるか、刀を持て。

主水　はツ。（ト奧より主水刀を持ち出る。紋太夫思入あつて、）

紋太　すりや、我が君のお手討ちに。

光圀　師弟の誼み、罪は問はぬぞ。

紋太　はツ。（ト有難き思入、光圀惜しき思入にて、）

光圀　あ、可惜若者、（ト兩人顏見合せ、名殘りを惜しむ思入よろしく、光圀主水を見て心附き刀を取つて拔放し、）憎い奴めが。（ト首を打落す、誂へ似顏の切首出る、光圀刀を主水に渡し、上手の幕に向ひ、）お幕。

ト多膳左近幕を引揚げる。此の向う橋掛りの書割。

謠〽抑々是れは武德年中に贈官せられし、鍾馗大臣の精靈なり。

トヽ橋掛りへ出る思入。主水死骸へ毛氈をかける。此の模樣右皇帝の鳴物、木なしにてよろしく、

幕

七幕目

下馬先供待喧嘩の場
殿中松ノ間刃傷の場
同　大廣間評定の場

【役名――黄門光圀卿、中間水戸の重藏、稻波石見守、中間小稻波の音藏、織田筑後守、中間織田の佐九郎、中間大稻波の惣助、夏目主膳、大樹綱吉公、中間大久保の秀藏、大目附近藤備前守、目附朝倉山右衞門、黑崎伴右衞門、下馬商人喜助、旗本篠山五平太、同澤田軍藏、同野口九一郎、同鹿谷六郎太、森惣兵衞、茶道雲才、同珍才、鈍才其他。】

(下馬先喧嘩の場)――本舞臺上手へ寄せて立派な外繫瓦屋根、正面兩褄とも板羽目、下手に下馬の建札駒寄せ附、此の脇に松の立木、向う大手の城門御堀の書割の遠見、ずつと上手折廻し敷紙の風除け、屋根のなき屋體へ煮染を入れし砂鉢を並べ、この脇へ燗をする鐵砲桶を置き、總て下馬先の體。

爰に薄緣を敷き、音藏、佐九郎、秀藏、惣助、重藏何れも紺看板一本ざし中間のこしらへ、一升德利を控へ筒茶碗にて酒を呑み居る、喜助やつし裝縹色の股引尻端折り、下馬商人のこしらへにて、提灯の皮の古いので鐵砲を煽いで居る、この見得、時の太鼓飴賣の唐人笛にて幕明く、

秀藏　おらア下戶の肴あらし、大概喰つてしまつたが、もつと何ぞ喰ひてえものだ。

重藏　成程ひどくあらしたな、今日の拂ひはおれがするから、きす公もつとたんとくんねえ。

喜助　はい〱畏まりました。（と砂鉢に沙魚と筋の煮こゞりのあるを持って來て、）小皿へ盛るも面倒ゆゑ大皿で上げます。

秀藏　小皿へ盛るも面倒だから大皿で上げますと、下馬商人も大勢ゐるが、きす公ぐれえ氣前のいゝ商人はありやあしねえ。

重藏　大久保はあらさうと思つて、きす公へ强氣に胡麻をするな。

秀藏　なに、胡麻ぢやあねえ、本當のことだ。（ト惣助鉢の肴を見て、）

惣助　何にしろ、こいつは强氣だ、鯊の甘露煮に大筋の煮こゞり。

秀藏　おらが若い時分にやあ、鹽餡の大福に、芋と蒟蒻の煮込みばかりだ。

佐九　一年增しに下馬も開けて、今ぢやあ魚河岸の辨當に負けねえやうになつて來た。

音藏　そりやあいゝが此の皿に、幾つはひつて居るか知らぬが、數が知れねえとさばを讀まれるぜ。

喜助　お前さん方に、そんなことはござりませぬ。

音藏　あんまり無いとは言はれねえ、かすりへ廻る者があるから。

喜助　いえ、これが本所あたりの小ッ旗本の中間衆ちやあ險難だが、この下馬先きで顏役の名に負ふ當時御三家の内でも、一際幅の利く水戸樣の重藏さん、又殿中で竝ぶ者なき御大老の佐九郎さん、又御老中で筆頭の稻波さまの惣助さんに、同じ御老中で物知りの大久保さまの秀藏さん、それに若年寄の利者の石見さまの音藏さん、五本の指で算へられる下馬先の五人男、錦繪にでも出したうございます。

重藏　株でき、、す公が油をかけるぜ、下馬先の五人男錦繪へでも出してえとは、聞いても汗が出らあ。

惣助　ときに茶碗を廻さねえか、何處へ滯つてしまつたのだ。

音藏　酒は御大老が持ち切りだ。

秀藏　肴はおれが持ち切りだよ。

重藏　これ佐九郎、何時まで茶碗を持つて居るのだ、い、加減にはたへ廻すがい、。

佐九　早く廻すがい、といふが、今おれが處へ來たばかりだ。

秀藏　い、加減に嘘をいへ、幾度重ねたか知れやあしねえ。

佐九　え、、やかましい奴等だな。さあ〳〵茶碗を渡すから、ぐる〳〵廻して早く寄越せ。

惣助　さつきから此の茶碗を、一人で持切りにして居た上に、早く廻せもねえものだ。

音藏　そこが御大老の手前勝手だ。（ト惣助茶碗を取上げ、）
惣助　さあ、小稻波いつぺいついでくれ。
音藏　もう酒がねえやうだぜ。（ト音藏徳利を取つて注いでやり、）おゝ、もう一杯つぐとありやあしねえ。
秀藏　おらあ下戸だから氣がねえが、誰ぞ跡をつぎ足さねえか。
惣助　今度はおれが一升買はう。
音藏　なに、手前が買ふにやあ及ばねえ、當時殿中で飛鳥の落ちる、御大老が買ふがいゝ。
佐九　小稻波が言はねえでも、今度はおれが一升買はうと思つて居たが、おつなもので買へと言はれると買ふ氣がねえ。
重藏　なぜ買ふ氣がねえといふのだ。
佐九　催促をされて買ふといふのは、氣がきかねえから、おらあいやだ。
秀藏　氣が利かねえと手前はいふが、早く酒を買ひせえすりやあ、誰も催促をしやあしねえ。
音藏　どうでしみつたれな屋敷だから、そんな事をいつて逃げるのだ。
佐九　なに、しみつたれとは誰がことだ。
音藏　手前の主人の御大老のことよ。（ト佐九郎ムツとして、）

佐九　おれは兎も角も主人のことを、しみつたれと言はれちやあ、默つて聞いちやあ居られねえ、一升でも二升でも爰へ德利を竝べるから、呑みてえほど呑むがいゝ。
音藏　奢つてくれるは忝ねえが、人は知らねえがおらあ厭だ、手前の買ふ酒は呑み度くねえ。
佐九　なぜおれが買ふ酒が、呑みたくねえのだ。
惣助　そりやあ小稻波ばかりぢやあねえ、おれも手前の酒は厭だ、何ぞといふと大老の、權威をふるふが氣に喰はねえ。
音藏　それもぱツぱと水戶のやうに、綺麗に錢を使ふのなら、禮を言つて馳走になるが、年中他人のものを喰ひ、かすりへばかり廻るからだ。
重藏　そりやあ手前の言ふのが愚癡だ、爰に斯うして居る所は同じ看板着の中間だが、手前の主人は若年寄向うの主人は御大老、かすりへ廻るは當り前だ。
秀藏　そこが譬にいふ通り、上を見習ふ下とやら、佐九郞だつて三河町にごろついて居た體だから、錢を遣ふことは知つて居る、が上を見習ふ下だから、佐九郞も見習ふのだ。
重藏　手前の主人の大久保は、無事を計らふ人だから、おつウ捌きを附けるのも上を見習ふ下だなあ。
　　　トこの內喜助思入あつて、一升德利を持ち出で、

喜助　もし御酒の切目でござりますから、どなたと言はず私が一升上げたうござりますから、どうぞ上つて下さりませ。（ト出す。）

重藏　詰らねえことをいつたものだ、お前に貰ふ譯はねえ。

喜助　いえ、わたくしもお前さん方の御贔屓になりまして、毎日商ひをいたしますから、冥加に上げたのでござりまする。

音藏　そりやあ毎日來ようとも、酒が呑みてえから勝手に來るのだ。

惣助　お堀端の東北風をくひ、胼胝を切らすのも、儲けが當の下馬商人。

重藏　一升のことはさておいて、たゞ酒を貰ふことは、おらあ嫌えだ。

音藏　たつてそれがくれたけりやあ、しみつたれで取込み屋の御大老へ聞いて見ねえ。

喜助　さうおつしやつては、わたくしは指を銜へて引込みますのか。

秀藏　やつぱりお前は眼のやうに、引込んで居る方がいゝ。

喜助　いや、これは御挨拶でござります。

重藏　いや、その酒はおれが買ふから、其處へ置いてくんねえ。

喜助　それぢやあまことに濟みませぬ。（ト喜助天窓を掻き〳〵後へ下ろ、此の內佐九郎思入あつて、）

佐九　おい音藏、さつきから聞いて居りやあ、しみつたれだの取込み屋だのと、二言目にやあよく言ふが、ありやあ一體誰がことだ。

音藏　さつきも誰だと聞いたから、御大老だと言つたのに、もう忘れてしまつたのか、あんまり弛みが早いぢやあねえか。

佐九　それぢやあ手前が取込み屋といふのは、おれが御主人のことをいふのか。

音藏　昔ッから御大老は取込むものと極つて居て、願ひ事の賄賂に二重に組んだ菓子折へ金を入れて持つて來るのは、そりやあ役徳だから當り前だが、道に缺けたことをして、大した金を取込むから、取込み屋だと人もいふのだ。

佐九　しみつたれだといはうが取込み屋といはうが、おれのことをいふのなら、うぬのわれのといふ中だから、右から左りへ聞き流すが、僅か二合半貰つて居ても主人を惡く言はれちやあ、聞流しにしては居られねえ、恐れ多くも五代將軍綱吉公のお眼鏡で、四海の政事を司どる御大老の筑後守樣だ、道に缺けたことをしたとは、何が道に缺けて居るのだ。

音藏　手前の主人の御大老が、道に缺けたことをしたのは、指を折つちやあ算へられねえ。

佐九　なに、算へられねえとは。

音藏　知らざあ言つて聞かせようが、先づ其の内の第一は、太閤樣が物好きで金にあかして拵へた金銀づくめの安宅丸、伊豆へ行かうと其の船が啼いたなぞと詰らねえ、取るにも足らぬことを言ひ、此の儘おけば御當家へ祟りをなすと毀してしまひ、その金銀の金物をお拂ひ下げになつたのは、ほんの半分、其の跡はみんな引摺り込んだ、それから續いて京都の大佛、無益なものと潰してしまひ、その唐銅で錢を鑄させ、天下の寶を殖すなど、お爲ごかしに半分から、取込んでしまつたのも、何と道に缺けて居るぢやあねえか。

佐九　小稻波手前も小利口に、不斷口を利きながら詰らねえことを言はねえがい、、安宅丸は太閤が拵へた船ゆゑ御當家へ、祟りをなすから毀したのだ、又大佛も無益な品、それを崩して益のある天下の寶に直すのが大老職の働きだ、その金銀や唐銅を半分から取込んだと、いふのはそりやあ人の妬みだ。

重藏　こりやあ佐九郎のいふ通り、名に負ふ天下の大老職、勝れた智慧の筑後樣、人に言はれるやうな事はしめえ、然し多くの家來の内少し位は、ずり込んだものがあるかも知れねえが、こりやあ何處の屋敷にもあることだ。

秀藏　然し石見守も當時の智者、その家來の音藏だから證據のねえことはいふめえ、きつと大老が取込

んだといふ、何か證據があるだらう

惣助　人は兎もあれ、おれは本家の美濃守樣の家來だから、默つて聞いては居られねえ、證據があるなら言つてくれ。

佐九　今水戸がいふ通り、人に兎やかう言はれるやうな、そんなことがあるものか。

音藏　若しあつたらば、手前どうする。

佐九　證據があつたら首をやらう。

音藏　きつと手前首をくれるか。

佐九　遣らねえで何うするものだ。

重藏　この證人は水戸と大久保。

秀藏　二人が聞人になつてやらう。

佐九　さあ、證據があるなら、早く言へ。

音藏　おゝ、言はねえでどうするものだ。（ト兩人きつとなり誂への合方になり、）其の證據は外でもねえ、安宅丸を毀す種の、伊豆へ行かう〳〵と、河の中で言つたのは、織田の領分上州の安中在の枇杷窪生れ、水に明るき河童の吉藏。

佐九　や、どうしてそれを。

音藏　おれの主人が此の事を、委して知つて居るといふのは、いつか兩國廣小路で、その吉藏が供先を切つて亂暴したゆゑに、縛りあげて屋敷へ引き詮議をすると懐中に、五三の桐の金かな物、安宅丸のへいがしをば持つて居たゆゑ心得ず、手酷く責めたら口が明き手前の屋敷の黑崎が、頼みによつて川へはひり、伊豆へ行かうといふことを、殘らず彼奴が喋べつてしまつた。

佐九　それぢやあ彼奴が喋べつたか。(ト南無三といふ思入。)

重藏　かういふ確な證據があつちやあ、佐九郎首が危ねえぜ。

佐九　ムヽ。(ト佐九郎詰る。)

音藏　又大佛を毀したとき、其の唐銅を半分から、これが大老の役德と今いふ家來の黑崎が内證で賣つた其の金は幾らだか知れやあしねえ、それを買つた下金屋五郎兵衛といふ者が、おらが屋敷へ出入りゆゑ、お役所へ來て役人衆へ話した所から知つたのだ。何と確な證據であらうが。

佐九　ムヽ。

惣助　さあ、約束だ小稻波へ、大老首を遣つてしまへ。

佐九　いや、そんなことぢやあ遣られねえ。

惣助　遣られねえとは。

佐九　これが寄らず觸らずの、大久保でも言つたなら證據にしめえものでもねえが、今老中で出頭の、稻波の分家の石見守、そんなことを言ひがゝつて、おれが主人の御大老へけちを附けるに違えねえ。

ト これにて惣助前へ出て、

惣助　これ佐九郎、手前はおつなことをいふな、おれが主人の分家だから御大老へけちを附けるとは、そりやあいつてえどういふ譯だ。

重藏　成程こりやあ咎め所、何か仔細があるだらう。

晋藏　どういふ譯か、譯をいへ。（ト木遣崩しの合方になり）

佐九　譯といふのは外ぢやあねえ、大稻波が黄門樣の受けのいゝので取入つて、酒井樣のその後は御大老はおれのものと、手に取つたやうに思つて居るを、將軍家から筑後樣へ御大老が言附り、思つた壺が外れたので、緣につながる小稻波も若年寄から御老中に、ならうと思つた綱が切れ、その妬みから跡方もねえ事ばかり言觸らし、しくじらせようとするのだが、そりやあ所詮及ばぬことだ、いくら黄門樣の受けがよく、後楯に賴んでも三家の內で末席のいはゞ天下の留守居役、こつ

四ちは名におふ將軍家綱吉公のお覺え目出度き大老職を蒙つたは、器量が人に勝れて居るから、四海の政事は胸一つ、寐かさうと起さうと、おれが主人の心任せ、及ばぬ遺恨を晴さうなど、、思ふと其の身を滅ぼす種だ、それよりお鬚の塵を取り、御老中にでも出して貰へ。

音藏　そりやあ手前の主人のやうな、人に惡く言はれても金せえ餘計に取込めば、それが何より役得と、道に缺けたことをする料簡なればおベッかッて、其の身の出世を頼まうが、そんな曲つたことは嫌ひだ。

惣助　又おれが主人の美濃樣も、成程手前がいふ通り、黄門樣の受けがよく、御大老の御沙汰もあつたが、天下の權を一人で執れば、必ず諸侯の憎みを受け、遂には上のお爲めにならず、其の身の多病を言立つて、達つて辭退をなすつたのだ。

重藏　おれが旦那のおつしやるにも、大老職は亂の基、無いに上越すことはねえが、若し附けるなら今の世の、賢者といはる、大稻波美濃守より外にはねえと、その御内意があつたのだが、誰でも迷ふ欲に離れ、多病と言つて斷つたのは、これがまことの人といふのだ。お鬚の塵で大老になる人など、は大違ひ。

秀藏　とはいふもの、慾の世の中、お役中は殿中で飛鳥落す勢ひでも、御免になりやあ擦ちがつても、

唾の吐ッかけ手もありやあしねえ、人に惡く言はるゝとも、お役中に取れるだけ取つて置くのが當世だらう。

佐九 手前達が同じやうに、根もねえことに枝葉を附け、おれが主人を惡くいふが、そんなお爲めにならぬ者を誰が大老職にするものだ、天下の爲になる程の器量があるから將軍家から、大老職を言附つたのだ、嘸役得があるだらうとうぬ等がけちな心から、惡くいふのは妬むのだ、尾張紀州はいふに及ばず、副將軍の水戸殿でも、將軍家のお指圖で天下の事は一存で極める役目の大老職、それへ對して齒が立つものか。二合半の中間でも主人がよけりやあ身の光り、音藏手前が力んでも高の知れた若年寄石見守の中間だ、おれに喧嘩をふッかけるのは、そりやあ身知らずといふものだ、おれが體へ疵でも附けりやあ、石見守はいふに及ばず、どいつもこいつも身の上だぞ。さあ、それを承知で、おれを打て。(ト佐九郎音藏へ體を突き附ける。)

音藏 ムゝ。(ト音藏悔しき思入。)

佐九 さあ、手出しがなるなら、おれを打て。

音藏 ムゝ。

佐九 さあ、打つてくれ〱。(ト體を突き附ける。)

音藏　ちえゝ。（ト思入、佐九郎立上り、）

佐九　よもや、おれは打てめえが。（ト音藏を蹴倒すゆゑ、音藏きつと思入あつて、）

音藏　おゝ、打たねえでどうするものだ、知行を捨てりやあ怖くはねえ。

ト言ひながら、木刀を拔き佐九郎の頭をなぐる、佐九郎アッと頭を押へ下に居る、喜助出て介抱する。

佐九　うぬ、おれを打ちやあがつたな。

音藏　おゝ、御大老を笠に着てこの下馬先で威張り散し、大小名の供廻りは幾ら難儀をするか知れねえ、うぬを毆るは諸人の爲だ。

惣助　音藏出來した、よく打つた、おれが承知だ足腰の、きかねえやうに毆り倒せ。

音藏　不具にするも可愛さうだ。とても殺してやらう。（ト立掛るを重藏留めて、）

重藏　これ／＼音藏、いゝ加減に毆つておけ、こんな奴でも人一人殺しやあ手前は下手人だ、喰えこんぢやあ詰らねえ。（ト佐九郎鉢卷をし、木刀を持ち前へ出て、）

佐九　寄つて集つてよくおれを、小稻波に打たしたな、片ツ端から相手だぞ。

ト立ちかゝるを、重藏留めて、

重藏　これ手前が小稻波に打たれたのも、御大老風を吹せるからだ、惡いやうにはしねえから、まあお

れに預けてくれ。

佐九　厭だ〳〵、將軍樣なら知らねえこと、水戸だらうが紀州だらうが、小ッ旗本とも思やあしねえ、うぬ等がいふことを聞くものか。

重藏　これ、おれがこれ程留めるのに、手前は料簡しねえのか。

佐九　何で料簡するものか。

重藏　それぢやあどうとも勝手にしろ。（ト佐九郎を突ッ放す。）

佐九　おゝ、しなくつてどうするものだ。

喜助　これさ、水戸の重藏さんが留めるのに。

佐九　えゝ、やかましいやア。（ト喜助を毆る。喜助頭を押へて後へ下る。）

音藏　さあ、料簡ならざあ、おれが相手だ。

惣助　構ふことはねえ、打ち殺せ〳〵。

秀藏　これさ、焚附けちやあいけねえ〳〵。（ト佐九郎音藏叩き合ふ。惣助橫合から毆るを秀藏留める。）

重藏　えゝ、斯うなつたら仕方がねえ、遣る所までやつてしまへ。

ト音藏佐九郎叩き合ひながら上手へはひる、惣助を秀藏留ながら續いてはひる、重藏は紙へ金を包み、

重藏　いゝきす公、こりやあ勘定だ。（ト投げてやる、喜助取つて見て、）

喜助　もし、こんなには入りませぬ。

重藏　騷がせ賃だ、取つて置きねえ。（ト右の鳴物にて重藏も上手へはひる、喜助殘り、）

喜助　酒も肴も錢は取らず、擧句の果の八ツ當りに、御大老に天窓を毆られ、こんなつまらぬことはねえと、思つて居たが流石は水戸さま、重藏さんが此の中で餘計に金を置いて行くとは、黄門さまの御家來だけに、行屆いたことだなあ。

トばた／＼になり、供廻りの徒士若黨中間など大勢出で、

○　おい、爰に今大喧嘩があつたさうだが、どつちの方へ行きました。

喜助　おゝ、喧嘩は向うの方へ行つた。

○　それぢやあ向うへ行つて見よう。

△　さあ／＼、みんな來い／＼。（トわや／＼捨ぜりふにて、皆々上手へはひる。）

喜助　どれ、爰いらを片附けようか。

ト喜助徳利茶碗皿など、取散せしものを片付け居る。ばた／＼になり下手より伴右衞門上下股立ち、大小草履にて出來り、

作右　こりや〳〵商人、今聞けば大老の中間が喧嘩をしたといふことだが、相手はどこの中間だ。
喜助　先づ水戸さまに大稻波、それから大久保小稻波の中間衆が寄合つて、爰で呑んで居りましたが御大老の佐九郎さんと喧嘩をしたのは、小稻波の音藏さんでござります。
作右　すりや石見守の中間が、喧嘩をしたと申すのか、若年寄の分際で御大老と喧嘩をするとは、身の程を知らぬ奴、して喧嘩のその趣意は。
喜助　詳しいことは存じませぬが、安宅丸を毀したことは船の啼いたが始まりだが、それは御家來衆が言附けて河童の吉藏とかいふ者を川へ入れて置いたとやら、石見守さまがそれを知つて、御大老は道ならぬことをするとかしないとか、言つたことから始まつて大喧嘩になりました。
作右　ムヽ、その河童の吉藏が、河へはひつて居たことを、どうして知つて居つたしらぬ。
喜助　その吉藏が石見さまのお供を切つて亂暴したゆゑ、直に縛られ屋敷へ引かれ、詮議にあつた其の時に、五三の桐の金物を持つて居た所から不審が立つて拷問され、何もかもぶちまけて言つてしまつたさうにござります。
作右　それでは預けた金物から詮議にあつて喋べつたとか、道理で明る日來ぬと思つた、露顯なした上からは主人の權威を笠に着たこの身の大事となつたるか、こりや斯うしては居られぬわえ。一つ

穴の狸仲間へ、早く知してやらねばならぬ。商人世話であつた。

ト合方ばた／＼にて、伴右衞門あわてゝ上手へ走りはひる、喜助跡を見て、

喜助　今の話しを聞くか聞かぬに、一目散に駈けていつたは、音藏さんの言つたのが、あれが實のことか知らぬが、多分は今の侍などが、中途で遣つたことだらう、何にしろ兩方とも中間衆のことだから嘘か實か分らねえ。（ト此の時縫包の犬出で皿の肴を喰ふ、喜助見て、）えゝ、砂を拂つて賣らうと思ふに、忌えましい畜生だ。（ト天秤棒でなぐろ、爰へ以前の中間出來り、喜助を留め、）

○　これ／＼、犬を打つと質草同樣。

△　直に縛られにやあならねえぞ。

喜助　なに、水戸さまのお蔭にて、もう質草になりやあしねえ。

○　それでもお上の、

皆々　お觸れだぜ。

喜助　そのお觸れは、流れてしまつた。

皆々　流れたら打ち殺せ。

ト大神樂の鳴物になり、皆々犬を追ひ廻す模樣、これにてよろしく道具廻る。

殿中刃傷の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面松の金襖上下折廻し彩色畫の杉戸黑塗の緣、よき所に蠟色緣金な物の大衝立、日覆より大欄間をおろし、雨落に黑塗金物附の高欄を出し、揚幕に杉戸、舞臺花道とも薄緣を敷き、總て殿中松の間の體、爰に雲才、珍才、鈍才茶道にて立掛かり居る、しらべにて道具留る。

雲才　珍才どの聞かれたか、今しがた下馬先きに大喧嘩があつたさうだが。

珍才　手前は只今これへ參つたから、一向に存ぜぬが、何者が喧嘩をいたしましたな。

鈍才　御大老の中間と、若年寄の石見守どのゝ中間だ。

雲才　まだ其の外に水戸殿や、大稻波の中間が打擧つて酒を呑み、

鈍才　醉つた擧句が喧嘩となり、双方共に餘程の疵を、受けたと申すことでござる。

珍才　日頃からして御大老と中の惡い石見守どの、中間共の喧嘩から、これが元で御兩侯の物爭ひにならねばよいが。

雲才　成程珍才どのゝいふ通り、さういふことになる時は、夫の譬にいふ如く禍は下でござる。

珍才　どういふ喧嘩をしたか、いつたい織田の家來共は、大老風を吹かすから。

鈍才　これはしたり、大きな聲でめつたに噂をさつしやるな、もう御大老の御退出。

雲才　詰所へ行つて話しませう。

ト矢張り調べにて三人下手杉戸の内へはひる。序の舞になり、花道より石見守長上下小さ刀にて出來り、花道へ留り後先へ思入あつて、

石見　將軍家の御眼鏡にて大老職を勤められるは、器量衆に勝れしゆゑ、不正の計らひなき筈なるが、此の程よりの數ヶ條は豫て奸臣の噂ある、黒崎などの計らひならんが、これを正路に訊されなば遂には天下の大事とならん、されば其の幹を斷たずんば枝葉ます〳〵蔓らん。故に今日將軍家のお眼鏡違ひにならぬやう、我が遺恨の體に見せ、大老を殺害なさんと覺悟極めし石見守、今亂心の名を取るとも、知る人ぞ知る我が本心、何時かは忠義の名も顯れん。（ト思入あつて舞臺へ來り、）最早退出に程もあるまじ、これに忍んで待受けん。

ト思入あつて下手の衝立の蔭へはひる、やはり序の舞にて筑後守長上下小さ刀にて出來り、下手より篠山五平太、澤田軍藏、野口九一郎、鹿谷六郎太、四人とも上下一本ざしにて出來り、筑後守を見ながら平伏なし、

五平　今日は式日の御祝儀、

軍藏　恐悦申しゝる

四人　上げ奉つりまする。

筑後　お、、目出たうござる。

四人　はツ。

筑後　何れも、よく御精勤でござる。豫てお頼みの一條は、承知いたし居りますぞ。

九一　何分公のお引立て、

六郎　偏に願ひ、

四人　奉つりまする。（ト辭儀をなす。）

筑後　さゝ、お構ひなくと、お通りなされい。

五平　ムゝ、御免下し、

四人　おかれませう。（ト辭儀をなし、一人々々筑後守へ辭儀をなし、恐る／＼上手へはひる、跡を見送り、）

筑後　酒井殿も一度は大老職の權を執り諸侯に尊敬受けたれど、我が今日の勢ひにはなか／＼以て遠く及ばず、尾州紀州はいふまでもなく、十八國主外様の面々、誰一人筑後守に詞を返す者もなし、これ將軍家の御贔屓ゆゑなり、たゞ天下に心を置くは聰明叡智の水府公、盈れば虧くる世の譬へ、事十分にならぬがよし、かゝる大役勤むれば人の妬みを受け勝ちゆゑ、身を愼むが肝要なり。

ト思入あつて花道へ行きかける、此の時衝立の蔭より以前の石見守つか／＼と出で、筑後守の前へ立つ。

や、石州殿か。（ト石見守肩衣をはねて、）

石見　待ちまうけたる筑後守。（ト直に小さ刀へ手を掛ける。筑後守扇にてこれを留め、）

筑後　やあ、御場所柄も辨へず、刀の柄へ手を掛けて、石州お身は何とする。

石見　天下の爲めに、討つて捨つるぞ。

筑後　何と。

石見　覺悟いたせ。（ト振拂つて拔打ちに切附ける。）

筑後　やあ、狼藉者め。（ト拔合せ　切結ぶ。早舞になり兩人立廻り、）狼藉者なるぞ、出合めされ／＼。

ト ばた／＼になり、以前の茶道三人出來り、これを見て、

雲才　やあ、御大老筑後侯へ、

珍才　稻波石見守殿、刃傷に及びたり。

鈍才　何れも出合ひめされ。

三人　出合ひめされ。

ト此の內筑後守初太刀の深手に弱りし思入にて、たぢ〳〵となるを石見守脇腹へ突込む、これにて苦しみ落入る、石見守刀を拔き筑後守どうとなる。ばた〳〵早舞にて、爰へ以前の五平太、軍藏、九一郞、六郎太何れも下緒を襷に掛け出來り、

五平　やあ、殿中をも憚からず。

軍藏　刃傷に及ぶ不屆き者。

九一　われ〳〵共が討つて取る。

四人　覺悟いたせ。

石見　日頃大老筑後守へ、阿り諛ふ佞人ども、手向ひなさば生けては置かぬぞ。

四人　小癪なことを。

ト早舞になり四人切つて掛る、石見守これを相手に立廻る、この內蔭にて狼藉者々々といふ聲、石見守後より一刀切られ段々手を負ひ、これ迄といふ思入にて左りの小指を喰切る。四人疊みかけて石見守を切倒し止めを刺す、此の內茶道石見守と筑後守の死骸を吹替にする、上手より朝倉山右衛門上下大小目附のこしらへにて出來り、

山右　狼藉なせし石見守を、何れも討留めめされしか。

五平　如何にも討留めましてござりまする。
四人　御檢分下さりませ。(ト山右衞門死骸を改め、)
山右　おゝ、お手柄々々。(ト此の内狼藉者々々といふ聲する、山右衞門向うへ向ひ、)狼藉者は討留めたれば最早動搖めさるに及ばぬ、靜まりめされ〳〵。
ト これにて早舞を止め、ひつそとなる、四人は糊紅を拭ひ鞘へ納める。
軍藏　して、御大老の、
四人　御死骸は、
山右　只今家臣森惣兵衞が、引取りに參つてござる、こりや茶道、これへと申せ。
鈍才　はツ。(ト上手へ向ひ、)それに控へし森惣兵衞殿、急いでこれへ。(ト上手にて、)
惣兵　はゝあ、(ト上手より惣兵衞一本ざし、袴裝の侍四人乘物を差擔ひにして出來り、)森惣兵衞罷り出ましてござりまする。
山右　さて不慮なること出來いたし、御愁傷お察し申す。
五平　然し相手は我々が、
九一　御覽の如く仕留めたれば、

六郎　これにて此の場のお恨みも晴れ、

軍藏　嘸御大老にもお悦び。

山右　先づ相討の體になせば、死骸を改め引取りめされ。

惣右　はッ、畏まつてござりまする。（ト惣兵衛死骸を見て、）篤と疵所を改めますれば、仰せに任せ死骸は引取りまするでござりまする。（ト惣兵衛茶道手傳ひ、白布のまゝ乘物へ入れ戸をたて、）左樣なれば拙者めは。

山右　老臣方へ方々が、手柄の次第をお傳へ下され。

惣右　申し傳へるでござりまする。（ト調べにて惣兵衛辭儀をなし、侍乘物を手舁きにして上手へはひる。）

山右　石見守が公用人、詰所へ參つて居つたれば、卽刻死骸を引取るやう、夏目へ申し達しめされ。

茶道三人　畏まつてござりまする。（トこれにて珍才は花道、雲才鈍才は下手へはひろ。山右衛門跡を見送り、）

山右　若年寄のその内でも、才智勝れし石見守、物の道理も辨へながら如何なる遺恨あつてのことか。殿中をも憚らず御大老を殺害なし、家を捨て事をなすは、合點の行かぬことでござる。

五平　彼が本家美濃殿が、光圀卿のお覺えを、なんぞといふと笠に着て、

九一　小石川の風を吹かせ、おのが身分も顧みず、御政事向へ口出しなし、

六郎　御大老へ立入る者へは、何かに附けて當こすり、憎まれ者でござつたが、
軍藏　到頭斯樣なことを仕出し、家名を斷絶いたさすとは、さりとははたけたことでござる。
五平　何にいたせ我々は、これまでお鬚の塵を取り、
九一　御大老のお蔭にて、思はぬ立身出世なし。
六郎　仲間内でも幅を利かせ、勤めも樂にいたせしが、
軍藏　頼みの綱を失うて、心細いことでござる。
山右　それは兎もあれ此の死骸、石見守が家來の者へ引渡さんと存ずるに、何をいたして居ることだか、
　ト花道の方へ思入。ばたばたになり花道より主膳麻上下にて出來り、花道にて下に居て、
主膳　稻波石見守川人夏目主膳。お指圖によつて主人の死骸、引取りに罷り出ましてござりまする。
山右　先刻より相待ち居つた、遠慮に及ばぬこれへござれ。
主膳　はツ、御免下しおかれませう。
　ト本舞臺へ來り下手に住ふ、此の時下手より侍乘物を手舁きにして出る、以前の茶道白布を持ち附添ひ出て、皆々下手へ控へる、山右衞門思入あつて、
山右　今日稻波石見守殿亂心に及ばれしか、御場所柄も辨へず大老織田筑後守へ趣意も分らず、刃傷に

及び相討ちとなつて相果てしゆゑ、死骸引取り申すべし、尤も御處分は詮議の上、追て上より沙汰に及ばん、左樣心得申すべし。

主膳 委細畏まつてござりまする。

山右 死骸改め、引取り參れ。

主膳 はッ、（ト主膳死骸の傍へ來りぢつと思入あつて、）嘸御本懷にござりませう。（ト落つる涙を振拂ふをきつかけに、誂への合方になり死骸を改め見ることあつて、）唯今御殿で承はれば、御大老には左りの肩に初太刀に切込む深疵一ヶ所、まつた右の脇腹に深き突き疵一ヶ所ありて、外には更に疵なきよし、それに引替へ主人には身體數ケ所の刀疵、初太刀に切下げ、二の太刀に貫く程の手練あつて數ケ所の手疵を負ふは心得難きことでござる。（ト四邊へ目を附ける、皆々顏見合せぎよつと思入、主膳左りの小指の喰切りあるを見て、能くなされしと云ふ思入あつて、）憚りながら伺ひまするが、朝倉氏には此の死骸、御檢分なされましたか。

山右 如何にも、檢使の役目蒙つて、唯今これにて檢分いたした。

主膳 しかと御檢分なされましたか。

山右 えゝ、諄いことを。

主膳　お指圖によつて主人の死骸引取りに出ましたが、拙者に於ては此の死骸引取り難うござりまする。
山右　なに、此の死骸が引取れぬとは。
五平　石見守の家來には。
九一　異なことを言はれるが。
六郎　何故あつて此の死骸が。
軍藏　引取れぬと、
四人　申すのぢや。
主膳　死骸が不具でござるゆゑ。
山右　なに、死骸が不具とは。
主膳　御檢分ありしと言へど、左りの小指が不足でござる。
山右　や。
主膳　今朝出仕いたすまで十指揃ひし石見守、不具なる死骸は受取れませぬ、篤と御檢分下さりませ。
山右　どれ。（ト山右衛門見て、）成程左りの小指がない、これは大方筑後殿に切落された事でござらう。
主膳　いや、ござらうでは濟みますまい、御檢使のお役目にて、なぜお改めなされませぬ。

山右　むゝ。

主膳　この儘引取り參つては、奥方はじめ一家中へ、拙者の不念と相成れば、切つたる指をお搜し下されゝ、揃へてお渡し下されませ。

山右　外へ參る所はない、大方叜等に落ちて居らう、各々方もお搜し下され。

四人　心得てござる。（ト四邊を搜し見て、）

軍藏　何れへ飛びしか、この四邊に、

五平　切りたる指は、

四人　見え申さぬ。

主膳　十指揃はぬ其の内は、主人の死骸は引取り申さぬ。（トきつと言ふ。）

山右　すりや、其の方は引取れぬと申すか。

主膳　前以て左りの指が一本不足と某へ、なぜお斷りはござらぬぞ。

山右　さあそれは、身共の不念であつた。

主膳　身體殘る所なく改めらるゝが檢使の役、不具な死骸をお渡しあつて、それでお役目が濟みますか。

山右　さあそれは。

主膳　いや、そればかりではまだござらぬ、初太刀に切込み二の太刀に、貫く程の手練ある主人の體に數ヶ所の疵、多く後にござるのは、助力がありしと存ぜられます。（ト四人へ目を附ける。）
四人　や。（ト顏見合せ思入。）
主膳　旁々以てこの死骸、この儘には引取られませぬ。
五平　數ヶ所の疵に助力でも、あつたと思ふは無理ならねど。
九一　相手は大老唯一人、われ〳〵共は刃傷と。
六郎　聞いて此の場へ駈け附けたれど、はや相討にて双方とも。
軍藏　落命ありし後にして、委しきことは一向存ぜぬ。
主膳　御存じないとおつしやれど、この主膳の愚眼には各々方が御助力を、なされましたと存じまする。
五平　やあ、緩怠なる其の一言。
九一　何を證據に我々が。
六郎　助力なせしと申すのだ。
軍藏　今一言言つて見よ、おのれ其の座は。
四人　立たさぬぞ。（ト四人立ち掛る。）

主膳　御大老へ阿り諂ひ、御助力ありしと見極めし證據は則ち各々方の、お差料にござらうから、失禮ながら拙者めに、お見せなされて下されい。

五平　やあ、返す〴〵も憎き主膳。

九一　陪臣の身を以て、

六郎　我々共の一刀を、

軍藏　改めんとは無禮千萬。

主膳　其の代りお刀に血汐を拭ひし曇りがなくば、此の主膳が不調法、そのお刀で掛替なき拙者が首をお刎ね下され。

五平　假令何と申さうとも。

九一　この一刀は見せられぬ。

主膳　いや斯程に申すにそのお刀、拙者にお見せ下さらぬは、いよ〳〵御助力めされしか。

四人　何しに左樣な。

主膳　然らば拙者が念晴し、お見せなされて下さりまするか。

四人　さあそれは。

主膳　御助力ありしか。
四人　さあ、
主膳　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
主膳　何とでござる。（ト四人ムヽと詰る、山右衛門思入あつて、）
山右　斯様に主膳が申すからは、念晴しにお見せなされい、元より曇りのなきは必定、言掛けなせし其の罪に、約束通り唯一刀に。
六郎　とはいへ、武士の魂を。
九一　見せては互ひの。
山右　はて、呑み込みの悪い、見せたる上は唯一刀に。（ト山右衛門切つてしまへといふ思入、）
五平　いや、どうでもこれは。
四人　見せられぬ。（ト主膳思入あつて、）
主膳　そのお刀より、各々の見せられぬといふお詞の、五音に曇りが見えまする。
四人　や。

主膳　斯く申し出した上からは、主人の死骸も引取らねば、各々方も此の場をば、お立たせ申しはいたさぬぞ。
六郎　とは又。
四人　何ゆゑ。
主膳　御老中方へ申し上げ、御助力なされし御詮議を、願ひますれば、お覺悟めされ。
五平　すりや、老中へ。
四人　この趣きを、（ト四人顔見合せ思入、山右衞門も思入あつて、）
山右　いや、見せさへすれば事濟むに、御老中へこの事で御苦勞掛けては濟まざるゆゑ。それより早くその刀、彼れにお見せなされませ。（ト切つてしまへといふ思入をなす。四人呑込み、）
四人　ム丶、心得てござる。
ト五平九一郎拔打ちに左右より切つてかゝる、主膳身を躱しちよつと立廻つて、兩人の手首を取り、白刃の表をきつと見て、
主膳　さしこそ拙者が思ふに違はず鎺に殘る生血の曇り、今日の檢使の朝倉氏篤とそれにて御覽あれ。
ト手首を持つたまゝ、山右衞門の目先へ刀を突出す。

山右　ムヽ。（ト詰る、軍藏六郎太拔きつれて、）
軍藏
六郎　それ、知られたら。
ト切つて掛るを五平太九一郎の刀でこれを留め、兩人を投退け、又軍藏と六郎太の手首を捉へ、刀を見て、
主膳　四人が四人鍔許に、血汐の殘るは助力の證據、（ト左右へ投げ退け、）何と脱れはござるまいが。
五平　斯く知られたる上からは、何をか包み隱さん。
九一　御場所柄も辨へず。
六郎　御大老を殺害せしゆゑ。
軍藏　見るに忍びず我々が、助太刀なして。
四人　討果した。
主膳　我が推量に違はずして、助力があれば朝倉氏此の儘にはいたされぬ、只今あなたの仰せには、御大老と我が主人相討ちなりと仰せありしが、斯く四人まで助力あつても相討ちなりと申さるゝか。
山右　さあ、それは。
主膳　助力ありしを包み隱し、相討なりとの御沙汰では、假令十指揃ふとも、主人の死骸は引取られま

せぬ、此の御處分は如何めさる。

山右　さあ、いづれ評定なした上にて。

主膳　その御處分のなき内は、幾日なりとも夏目主膳、決して此の場は立去りませぬぞ。

トきつと言ふ、此の時奥にて、

備前　あいや、双方先づ待たれよ。（ト管絃になり、奥より進藤備前守上下大小にて出來る。）

山右　や、さいふ貴殿は、大目附。

四人　進藤備前守殿。

備前　只今この場の爭論を、水府公には襖越し逐一聞召されし上、助太刀なしたる四人の者は嚴重の咎め申し附れば、主膳は主人石見守の死骸を即刻引取りますやう、水府公の仰せでござる。

主膳　すりや水府公の上聞に達し、助力なしたる四人の者の、罪をお糺し下さりますとか。はゝ、有難う存じ奉つりまする。（ト平伏なす。）

軍藏　さては助力の、

四人　科によつて

備前　やがて嚴重の御沙汰あれば、ぢつと蟄して控へめされ。

四人　はッ。

山右　四人が科を着る上は、拙者も脫れぬ役目の越度、

備前　貴殿も何とか御沙汰あらん。

山右　是非に及ばぬ。（ト備前守思入あつて、）

備前　左りの指のあらざるは、石見どの、深き所存、それを名として引取らぬは主膳が器量勝れしゆゑ、流石は天下の其の爲に一命捨つる程あつて、此の主にして此の家來あり、備前守感心いたす。

主膳　主人のお蔭で拙者まで、斯く御賞譽に預つて、大慶至極に存じまする。（ト辭儀をなす。）

備前　用意よくば片時も早く。

主膳　はッ、乘物これへ。

侍　はあゝ。（ト前へ乘物を出す、主膳思入あつて、）

主膳　返すぐも水府公の、

備前　後日の御沙汰相待たれよ。

主膳　はッ。

軍藏　もう此の上は。（ト拔打ちに切つて掛かるを、主膳身を躱し、襟上を引附ける。）

王膳 御前よろしく。（ト投げのけて辭儀をするを木の頭）願ひ上げまする。

ト山右衛門立ちかゝるを、備前守隔てる、軍藏又掛るを捻上げる、九一郎六郎太息込むを五平太留める見得、よろしく早舞にて、

ひやうし 幕

ト この幕城の道具幕にて、管絃にて繋ぎ、知せに附き切つて落す。

（本丸大廣間の場）――本舞臺四間通し常足の二重、上段蹴込み金地紋散しの欄間、正面上下三方共同じく金地紋散しの襖、屋體の前へ一面に翠簾をおろし、花道の揚幕杉戸出入り、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、總て本丸大廣間の模樣、爰に一、二、三、四、五、六、七、八、何れも麻上下旗本のこしらへにて立掛り居る、此の見得早舞にて道具納まる。

一 何と各々、怪しからぬ椿事出來いたしてござる。如何なる遺恨か存ぜぬが、御場所柄も辨へず。

二 如何なることか御大老へ、若年寄の石見守殿刃傷に及び、双方とも。

三 相討なりとの沙汰なれど、大老方には四五人も加勢の者があつた樣子。

四 それゆゑ松のお廊下は柵む蔦の血汐の紅葉に、上を下へと大騒動。

五 今老中の出頭たる美濃守殿も一家ゆゑ、同腹ならんも測られず。

六　萬一左様のその時は、この虚に乘じて上様へ、
七　如何なることをなさんも知れず、容易ならざる天下の大事、
八　君の御座所を固むるは、我が旗本の役目ゆゑ。
一　これにて警固。
八人　仕らん。（ト この時御簾の内にて。）
○　御出座。（ト呼ぶ、）
一　なに、上様の、
八人　御出座とな。

ト四人宛上下へ別れ並よく住ひ、管絃になり正面の御簾を巻上げる、眞中に綱吉將軍長上下小さ刀にて住ひ、後に振袖袴の小姓二人紫の袱紗にて刀を持ち控へ居る、皆々はツと平伏する。綱吉思入あつて、

綱吉　今日式日の祝儀によつて、總登城とは申しながら、常に替つて殿中の、物騒がしきは審し、何ぞ替りしことあつてか。
一　はツ、拙者共も詰所にて、只今様子承はり、驚き入つたる一大事。

二　殿中松のお廊下に、御大老織田筑後守殿を、

三　若年寄稲波石見守殿、

四　刃傷に及ばれしゆゑ、

五　詰居る諸侯動搖なし、

六　上を下へと大騷動、

七　其の趣意柄を尋ぬれど、

八　未だ仔細も審かに、

一　相知れませぬやうに、

八人　ござりまする。（トこれを聞き、綱吉びつくりせし思入にて）

綱吉　して筑後守には、如何せしぞ、存命なるか相果てしか。

一　御大老にも、石見守にも、相討ちとなり其の場にて、

二　双方即死いたせしゆゑ、其の趣意柄相分らず、

三　殿中一統圖らざる、椿事に動搖いたすゆゑ、

四　君の御守護を仕つらんと、

五　相詰めまして、

八人　ござりまする。（ト綱吉きつとなり、）

綱吉　何等の遺恨あつての儀か。予が目代の大老職筑後へ對し殿中にて刃傷に及ぶなどゝは、場所柄日柄も辨へざる石見守は不屆至極。して老中たる美濃守は、未だ登城いたさぬか。

一　美濃守には、疾くよりか出仕いたして詰所に居り、

二　この騷動を承はり、當惑なせし樣子なれど、

三　現在分家の石見守。

四　斯かる大事を仕出來せしに。

五　本家たる身で事柄を、

六　知らざるといふことはあるまじ。

七　察するところ同腹にて、

八　如何なる密謀あらんも知れず。

一　旁々不審に、

八人　存ぜられまする。

綱吉　美濃守には老中の今出頭を勤め居れば、大老職を奪はんと、我が分家たる石見守に筑後守を失はせ、天下の政事を一存に執らんと欲する底意ならん、何故あつて大老職を美濃守に申し附けんや返す〴〵も憎き奴めが。

一　その御上意を、承つては。

二　美濃守をその儘に。

三　詰所へ置くはお上へ恐れ。

四　退出申し、

八人　附けませうか。

綱吉　おゝ、存意もあれば美濃守、差控へを申し附けい。

一　畏まつて、

八人　ござりまする。

ト立上る、此の時ばた〳〵になり、花道より光圀長上下小さ刀にて出來り、花道にて、

光圀　あいや各々方、暫くそれに控へられよ。

一　やゝ、思ひがけなき、

八人　水府様。
綱吉　只今老中美濃守へ差控へを申し附くるに、何ゆゑあつて水府には、旗本共を止めしぞ。

トこれにて光圀花道にて下に居て、

光圀　お止め申すは外ならず、此の儀上聞に入らざる先き光圀登城仕つり、かねて取調べ置きたる其の趣意柄を申し上げんと、これへ推参仕れば、先づ〳〵お待ち下さりませう。
綱吉　すりや、事柄を取調べしとか。
光圀　はツ。
一　何は格別、水府様には。
二　これへ御着座。
八人　遊ばされませう。
光圀　然らば御免下されい。

トこれより中の舞になり、光圀舞臺へ來り平舞臺眞中へ住ひ、はツと平伏する、綱吉思入あつて、

綱吉　して水府には事柄を、取調べしとあるからは、如何なる仔細か承はりたし、それにて演說いたされよ。

光圀　はッ、只今委細申し上げん。（ト四邊へ思入あつて、）密事にござりますれば、各々は暫く次へ退座めされ。

八人　はあゝ。（ト辭儀をなし、四人づゝ上下へ別れてはひる。）

綱吉　如何なる遺恨あるかは知らねど、先づ善惡は差しおいて、予が目代たる筑後守を私の宿意により場所柄も辨へず、殿中に於て刃傷に及び掟を破りし石見守不屆き至極の者なるぞ、又老中たる美濃守は本家のことゆゑその趣意を辨へ居らざることあるまじ、それに異見も入れざるは察する所美濃守も同意なりと思はるゝ、かた〴〵不審の廉あるゆゑ、差控へを申し附けんとせしを止めしが、水府は如何に思はるゝぞ。

光圀　御諚の如く將軍家のお目代をも勤むる者を、石見守が殺害せしは、卽ち天下の御法を破り上へ御敵對も同然ゆゑ、重々以て不屆至極。

綱吉　それゆゑ本家美濃守に、差控へを申し附くるは、尤もな儀であらうがな。

光圀　君には日頃筑後守が、御最屓ゆゑにその御沙汰。然し差控へには及び申すまい。

ト綱吉ムッとして、

綱吉　なに、差控へに及ばぬとは。

光圀　石見守は天下無二の、忠義な者にござりますゆゑ。
綱吉　これは水府には異なことを言はるゝな、殿中に於て刃傷に及び予が目代たる筑後を殿中に於て殺害なし、天下の法を破りし者を、忠義な者とは何を申すぞ。（ト少し急いて言ふ。）
光圀　只今委細申し上げん、必ずお急き遊ばすな。
綱吉　予は生れついて性急ぢや、疾く〳〵仔細を申し聞けよ。
　　トこれより誂への合方になり、光圀衣紋をくつろげ、悠々と思入あつて、
光圀　厳有院殿御治世の砌り、大老酒井雅樂頭故あつて其の職を免ぜられたる後に至り、その任を預かる者なく暫く中絶いたせしに、君の御代になりお眼鏡にて、織田筑後へ大老職仰せ附られしに、元より器量勝れしゆゑ天下の政事行届き、天晴大老職なりと衆人尊敬いたせしに、家臣に奸智の者あつて種々悪計を企てたるを、主たる者がこれを知らば速に罰すべきを等閑にいたすゆゑ、筑後守も同意なりと世上の風聞よろしからず、先づ其の一二を申し上げんが、安宅丸を破却に及び金銀数多を私なし、其の後京師の大佛を無益なりと取崩し、これを永錢に鑄替させ、上の御益と申し立て半はこれも私せしよし、假令奸臣のなすにもせよ、其身大老の職にあつて、打ち捨て置くは役目の怠り、この外其の意を得ざること算へ立つれば指に餘り打捨て置かれぬ大事ゆゑ、腹

心の者を隠密となし、略々探索いたす折柄、夜前稲波石見守より筑後守が不正の條目書認めて送りしゆゑ、今朝登城仕つり、君へ御密談願はんと存ぜし甲斐なく、石見守はや刃傷に及びしは短慮不覺のことなりと、暫く歎息いたしてござる、思へば先年雅樂頭が大老職を勤め得ざるは、恐れ多くも四代將軍家綱公のお眼鏡違ひ、今又大老筑後守日頃の不正申し立て、糺さば君のお眼鏡違ひ、その御恥辱を隠さんとたゞ私の遺恨と見せ、我が身に受くる汚名を厭はず、家を捨て命を捨つるは古今稀なる誠忠義心、されば本家美濃守へ、差控への御沙汰には及びませぬかと存じまする。

ト光圀よろしく思入あつていふ。綱吉も思入あつて、

綱吉　たゞ私の遺恨により筑後守を討ちたるは、不屆き者と存ぜしに、さはあらずして石見守は、天下の爲めに討ち取りしか。

光圀　則ち夜前石見守より、差送りたる箇條書。（ト懐より縦文を出して差先す、綱吉取上げ、）

綱吉　すりや、此の一書に大老の、不正の廉を記しあるとか。

光圀　篤と御内見下さりませう。

ト思入、合方替つて綱吉開き見て、一々驚く思入よろしくあつて、

綱吉 奸智に長けし家臣の者が、かゝる企みをなすことを罰せざるは役目の越度、よしや存ぜざるにもせよ、同意なりと風評ありとも脱れ難き身の怠り、かゝる不正のことあるを、今日まで知らざりしは予が眼鏡の屆かぬ所、石見守が世になくば猶も恥辱を重ねんもの、予が非を知りしも彼れが忠節、それと知らねば本家たる、美濃守に差控へを申し附けんとなしたるは、返す〴〵も過りなり、流石は水府よく止め、密事を告げてくれられしぞ。

光圀 すりや岩見守の箇條書にて、君には御疑念晴れましたか。

綱吉 おゝ、晴れいで何といたさうぞ。

光圀 誠忠無二の功立てゝ、大慶至極にござりまする。（ト辭儀をなす。綱吉後悔せし思入あつて、）

綱吉 今更申して歸らねど、雅樂頭が退役後、筑後守へ大老を申し付けんと存ぜしゆゑ、御身へ相談なせし所、大老職は將軍の目代ゆゑに政事向き一人にて權を執れば、必ず恨むものあつて終には亂の基となり、國家の爲めによろしからねば、政治は老中衆議の上、光圀添心いたさうと無事を計ふ水府の意見、用ひざりしは思慮なきゆゑ、あの折御身の異見に付かば、斯く今日の變もなく、誠忠無二の石見守、失ふこともあるまじきに、筑後守に大老を申し付けしは予が過り、まことに千悔いたせしぞ。

光圀　昔が今に君の爲め、一命捨つるは臣下の役珍らしからぬことなれど、戰國の砌り御馬前にて討死なすも忠臣なれど、假令一命捨つるとも御加增あつて美名を殘し、その子孫の榮譽となれど、それとこれとは裏表にて、汚名を取りて家を捨て命を捨つるは戰場の、討死よりも遙に勝りし、世にも稀なる忠義でござる。

綱吉　かゝる忠臣世に出しも偏に日光大權現神祖の守らせたまふ所、はゝ、有難う存じ奉つります。（ト綱吉褥を下りて向うへむかひ辭儀をなし、元の所へ住ひ、件の一書を取上げ、）して、此の一書は石見守が、自ら執りし筆なるか。

光圀　他聞を憚る大事ゆゑ、則ち自筆にござりまする。

綱吉　ムゝ、墨色といひ筆意といひ、死する氣色の見えざるは、物に動ぜぬ天晴丈夫。（トぢつと見て、）形見こそ今は仇なれこの一書、あゝ、殘念なことといたせしぞ、

　　ト綱吉不便なといふ思入あつて涙を拭ふ、光圀これを見て、

光圀　はゝ、有難きそのお詞、冥府に於て石見守嘸悦んで居りませう、此の光圀におきましても御落涙の體を拜し、有難涙に暮れまする。（ト光圀も鼻紙を出し涙を拭ふ、綱吉思入あつて、）

綱吉　して誠忠無二の石見守、いかゞ取計らうたものであらうか、水府の意見聞かまほし。

光圀　されば、これまで殿中にて刃傷に及びし者は、家名斷絶、國郡沒收と御規定極り居れば、近頃不便の至りながら、天下の御法は亂されず、石見守は家名斷絶仰せ出されて然るべし。

綱吉　いかにも法は亂されねど、彼が一族はじめとしてこれまで扶助なす臣下の者、主に離れ祿に離れ、俄かに難澁いたすであらうが、か丶る忠死と存じながら見脫し置かんは不仁なり、何とかいたして彼の者共を、救ひやりたきものなるが、能き工夫はあらざるや。

光圀　は丶ッ、御仁慈厚き思召し、恐れ入りましてござりまする。（トちよつと思入あつて、）光圀愚案を廻らしまするに、石見守の知行をその儘本家美濃守へお預けあらば必ず彼より扶助いたさん、年限經つて血筋の者より家再興を願ひ出させ、御取立て遊ばしなば、臣下も散ず本領安堵、此の上もなき御仁惠かと、憚りながら存じまする。

綱吉　む丶、其の工夫至極なり、長の勤役私なく實に賢臣の美濃守、彼へ知行を其の儘に預け置きなば分家の者共、必ず惡しくは計らふまじ、こりやよい所へ心付きしぞ。

ト悅ばしき思入、光圀綱吉を見上げ思入あつて、

光圀　あ丶斯く下々の難儀をも、厭はせたまふ名君も、

綱吉　その任ならぬ大老へ、天下の政事を任せしゆゑ。

光圀　たゞ犬のみを愛せられし、暗君なりと世の嘲り。

綱吉　それも水府の異見に附き、ほとんと悔悟いたしたり。

光圀　これと申すも日の光り、東を照す御神の、

綱吉　加護とはいへど臣は水、

光圀　君は船なる徳川の、

綱吉　清き流れの源や、

光圀　御家は萬歳萬々歳、

綱吉　ムヽ、松の榮えを祈るであらう。

光圀　はゝツ、恐悦申し、（ト肩衣の衣紋を直すを木の頭）上げまする。

ト辭儀をなす、綱吉はにつたり思入、此の模樣太撥の時の太鼓にて、

ひやうし　幕

黄門記（終り）

旹鎌倉三代古温皐月新狂言

抑々將軍實朝公の治世に當つて二代の執權暴威をふるふ北條を討たんと計る泉の親平是に荷擔の安念が勸める同意の由利八郎兄左衛門が利害の異見に天命知つて悔悟の變心味方の運も月星の千葉成胤が計らひにて流石勇士も金窪に天神の森で捕縛され一時の亂も平定なし枕を高く惟久が妻の靜江と眠りに就く寢所へ切込む忍びの曲者主は誰とも白髮の義盛一族引いて廣盛へ赦免願ひも友重が尼公の仰せと支へられ水の哀れや庭前へ引かるゝ繩目の平太を見て涙の雨の古郡新左衛門が堪へ兼ねはげます詞に君前を折義時と胤長が罵しる邪正の問答を聞くにしのびず尼御臺が早速の智辯に義清が無念をしのぶ殿下の營中萬歲いはふ龜鶴が大和舞

顯晦録拔萃

星月夜見聞實記

『茬柄の平太』は明治十三年六月、新富座に書き卸された。作者六十五歳の時である。「星月夜鎌倉顯晦錄」に材料を仰いだ所謂活歷物の一つであつた。團十郎の平太は天神の森で召捕はれる前に、藪蔭から實物の雀を放つ、それを見上げて述懷し、「近頃女々しき今の述懷お笑ひあるな」とくだける所が特によく、營中問答の場は名調子を以て萬夫不當の豪傑を遺憾なく描き出したといふ。菊五郎は惟久よりも古郡新左衞門の方がよかつた。仲藏の安念も實によく、左團次の義時も好評であつたといふ。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(茬柄平太胤長、北條泰時)、尾上菊五郎(由利八郎惟久、古郡新左衞門)、市川左團次(北條義時、泉親平、由利八郎惟久、古郡新左衞門)、市川左團次(北條義時、泉親平、由利惟久)、中村仲藏(阿靜坊安念、和田義盛)、中村鶴藏(金窪兵衞)、岩井小紫(由利奥方靜江)、坂東家橘(千葉之介成胤)、市川小團次(源實朝)、市川團右衞門(筑後左衞門知重)、河原崎國太郎(政子尼公)、等であつた。

挿繪にしたのは、守川周重筆の錦繪である。

大正十四年七月

校訂者

星月夜見聞實記（荏柄の平太）

序幕　鶴ヶ岡段蔓討入の場
荏柄屋敷密談の場

〔役名＝＝荏柄の平太胤長、北條相模守義時、千葉之介成胤、和田六郎義重、同四郎左衛門義直、北條の臣韮山五郎右衛門、同南條九郎兵衛、浪士比企森之助、同秩父山平、同關山峯藏、同大宮五平太、同野上廣太郎、同水野源右衛門、北條の臣平井十郎、同網代七郎、同土肥九郎、同關野八郎、荏柄の臣神木五郎次、同仕丁太郎又、同次郎又、同四郎又、阿靜坊安念。荏柄の腰元白梅、同櫻木、同紅葉等。〕

（鶴ヶ岡段蔓討入の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺。正面朱塗の山門、左右廻廊、此前石段を見たる遠見。上下の見切は桝形の上へ松を植ゑし張物、日覆より同じく釣枝。此道具總て雪持にて　舞臺花道共一面に雪布を敷き、總て鎌倉鶴ヶ岡段蔓雪降の體。爰に仕丁太郎又、次郎又、四郎又、九郎又、草鞋掛けにて、めい〳〵雪掻き竹箒を持ち、雪打ちをして居る。此見得、雪おろし、大拍子にて幕明く。と三人の仕丁、次郎又を相手にさん〴〵に雪を打附ける。

次郎　これはいかなこと、最早降參々々。

荏柄の平太

太郎　おぬしは不斷仲間内で、誰一人褒める者なく、鬼と綽名の次郎又、
四郎　此雪搔きを幸ひに、雪に埋めて凍えさせ、思ふさま難儀をさせてやるが、仲間の者の腹癒せだ。
九郎　雪の山に埋めてやるから、その氣で覺悟をするがいゝ。
太郎　さあ、もつと雪を打つたり〳〵。
四郎
九郎　おゝ、合點だ。
ト又雪を打附ける、次郎又兩手をつき、
次郎　まあ〳〵待つたり〳〵。此大雪に日頃の意趣を返されようとは知らなんだ。是れに懲りて後悔なし、是れから心を改めるから、此雪打は堪忍してくれ〳〵。
太郎　さうあやまるなら仲間のこと堪忍してやるとしようが、今朝夜明からお宮の者が、往來の雪搔きで諸方へ手分をして出たが、
四郎　搔く傍からどん〳〵降るので、場所の廣い段葛、容易に道は附き切らねえが、しかし猶豫の出來ぬのは、飛鳥落ちる鎌倉の、執權職をお勤めなさる、
九郎　北條義時樣の御參詣、何んでもかうと言出したら、理でも非でも我を通し、己は駕籠で來るからいゝが、多くの家來の難儀もかまはず、此大雪に出掛けるとは、思ひ遣りのないお方だ。

次郎　あゝおれが改心したやうに、北條樣も心を改め、お政事向に依怙がなくば、忠臣無二で討死した
重忠樣や數多の人が、少しはあの世で浮ばれように。

太郎　それと言ふのも義時樣は名に負ふ尼公が伯母君ゆゑ、それを笠に權威を振ふと、和田一統の大小
名は、どんなに恨むか知れやあしねえ。

次郎　人の振見て我が振直せと、此鎌倉の執權職もまた鶴ケ岡の次郎又も、人と生れて變りはねえ。和
田畠山とも思ふこなた衆、是れから仲よく附合つて下せえ。

四郎　そりやあ言はずと知れたこと、心を改め附合ふなら、同じ仲間の鎌倉育ち。

九郎　仲好くしねえで

三人　どうするものだ。

次郎　いや、それでやう／＼安心した。

ト鎌倉見たかの唄へ大拍子、雪おろしを冠せ、仕丁四人雪を掻き居る。此内花道より浪士比企森之助
同秩父山平、同關山峯藏、同大宮五平太、同野上廣太郎、同水野源右衞門、いづれも思ひ／＼の拵へ
蓑、赤合羽、竹笠を冠り、大小の見えぬやうに落しざしにさし、旅人の思入にて出來り、皆々花道に
留り、

森之　雪は豐年の貢と言うて、國にをらば觸正月に、こんな目出度いことはないが、
山平　樂しみに樂しんで、やう〳〵の思ひで出かけて來た、鎌倉見物にこの大雪、
峯藏　宿へ着いた半日は、由井ヶ濱から漁船で平戸の明神の景色を詠め、今日は朝から出掛けたら、
五平　まづ長谷の觀音から權五郎樣へ參詣して、それから戻つて大佛で背丈くらべをしようと思つた、
廣太　其樂しみも此雪に、無據晝旅籠で一日くすぶる積りのとこへ、女中の話しに聞いてみれば、
源右　雪の下から花水橋は、此鎌倉の通り町、今日は北條樣のお通りと、聞いて長谷から廻つて來たが、
森之　流石は都の鎌倉だけ、行屆いた路傍の雪掻き、向うへ見える朱塗の門は、あれが名代の鶴ヶ岡だんべい。
山平　參詣してよいか惡いか、雪掻の衆に聞いて見べい。
五人　おゝ、それがいゝ〳〵。

トやはり右の鳴物にて皆々舞臺へ來り、

これは御苦勞でござります。

ト挨拶する。仕丁皆々を見やり、

太郎　おゝ、お前方は鎌倉見物の道者かな。

次郎　噺雪で困りなさるだらう。

森之　たんだ半日廻つたきりで直降籠められましたが、話に聞けば今日は、當時都の御執權北條義時樣の御代參で、お通りがあると承り、

山平　拜まうと言つて拜まれぬ御執權のお通り、又見ようと言うて滅多に見られぬ此鎌倉の雪景色。

峯藏　兩樣兼ねて觀音前の、三橋と言ふ宿屋から、

六人　お通りを拜みに來ました。

四郎　春の内は田舍の衆も、植附迄は暇で居なさるから、皆都見物にぞろ〳〵出掛けて來なさるが、

九郎　都馴れぬ者が多く、度々御通行の道を切り、とんだ咎めを喰ふ者が田舍の衆にはまゝあること。

太郎　まして今日お通りの、北條樣と言ふお方は、大きな聲では言はれぬが、實朝公の御氣に入りで、

次郎　それを笠に權威を振ひ、勝手氣儘を言ひ上るので、上も穩かならぬと言ふ、專ら下の噂ゆゑ、氣をつけて、

四人　拜まつしやいよ。

五平　そりやもう、拜んでよいと云ふことなら、片脇より土下座をして、決して粗相は、

五人　いたしませぬ。

次郎　さうしてお前さま方は、

太郎　どこの衆だえ。

廣太　わし共六人の同行は、奥州者でござります。

次郎　奥州は何んと言ふところだ。

源右　はい、奥州は仙臺鹽竈の少し在郷で、今坂村の百姓、わしは餡九郎と申す者で、此はなに居りますが豆五郎、それから仙平、團五郎、有平、佐藤太と申す六人連れでござりますが、見掛けは人が惡さうでも、はい、至つて甘味でござります。

九郎　成程、そりやあ甘味だらう。此餡九郎といふ人は駄菓子の瓢箪を逆さにしたやうだ。

四郎　當時は田舍が景氣がいゝので、都見物に出掛けたのだな。

森之　昨年から引續き米の値がいゝ所から、田舍は十分な取込みに、

山平　今度同村の者と連立ち、江の島から鎌倉金澤と、ゆつくり見物いたすつもりで、

峯藏　昨日江の島から朝立に、七里ケ濱の海邊を通り、早晝頃に鎌倉の長谷へ着きましてござりますが、

五平　やつ七郷は言ふに及ばず、今日はこれから賴朝樣の、御廟所にも參るつもりで、

廣太　名所を記した案内の、繪圖も宿屋で貰ひましたが、

源右　なか〳〵二日や三日では、廻り切れさうもござりませぬ。

太郎　隅から隅迄廻つた日には、たつぷり三日掛るといふが、誰が來ても廉々を見物すればそれでよいのだ。

次郎　いゝと言へばお宮迄の、道もあらまし附いたから、又積る迄も一旦切上げ、箱崎樣で一服やらう。

太郎　田舍の衆は能く氣を附け、端の方で、

四人　拜みなさいよ。

六人　大きに有難うござります。

次郎　どれ、行つて、

四人　焚火に當らう。

トやはり右の鳴物、雪おろしにて仕丁雪搔箒を持ち、下手へ這入る。跡六人殘り、上下へ思入あつて、比企森之助小聲になり、

森之　何れも、旨くまゐりましたな。

ト本釣鐘、雪の合方になり、皆々うなづき合ひ、四邊を見廻しながら、隱せし大小をさし、森之助思入あつて、

益々降積む大雪に四邊へ茶屋も出でざるは、時にとつての最屈竟、同志の者は符合の通り、今日北條義時が當鶴ヶ岡參詣の道筋にて、松の小陰に身を忍ばせ、天下のため國のため、一刺なりとも恨みの刃。

山平　そも〳〵義時が惡逆は、既に下賤の者ですら今口ずさみの其如く、權威を振ひ自儘をなすと、

峯藏　況んや鎌倉殿中にても、此事一般に言觸らし、打捨て置かば三代の實朝公の御身の大事、それゆゑ我々黨をかたらひ、

五平　信濃の國の住人、泉の小次郎親平どのを發起人となし、義時が館へ押寄せ一戰なし、北條一家を滅ぼさんと、

廣太　同國の住人靑森七郎秀廣が弟、阿靜坊安念を以て諸國の勇士を募りしところ、最早多人數に及びしゆゑ、

源右　長引く時は變心のあらん事を厭ふがゆゑ、親平殿へ進むれど、まだ時早しと控ふるゆゑ、拔がけなせし今日の一擧、

森之　天下のために一命擲ち、雪も血潮の修羅場に、かの義時が首級をあげ、天へ捧ぐる有志の心底。

山平　さすれば天下平穩に、鶴も羽を伸す鎌倉山、由井ヶ濱邊に打つ波も、鼓腹の思ひ都人の、

峯藏　雪は則豐年の、貢と言ひし今日の雪、半町先も見え分かぬ、櫻に勝る六つの花。

五平　落花微塵の雪吹風、映る刃の光りさへ、閻浮に掛けし淨玻璃に見する面の佞奸武士。

廣太　阿鼻焦熱の苦患は愚か、邪欲は忽ち劍の山。

源右　今眼前に同盟が、此場に於て待伏せなし、地獄の呵責に逢はするを。

森之　天も照覽ましませば、必ず本望、

六人　疑ひなし。

ト六人きつと思入、此時花道、揚幕の内にて、

供先　片寄れ〳〵。

ト聲する。是れに聞耳を立て、

山平　正しくあれは彼奴が供先き、

峯藏　是れへ來るのを待伏なし、

五人　日頃の思ひを。

ト大きく言ふを、

森之　あこれ、必らず穩便。

ト制する。合方きつぱりとなり、皆々目釘をしめし、向うへ思入あつて囁き合ふ。森之助、山平、峯藏は上手、五平太、廣太郎、德右衛門は下手へ這入る。是れより行列三重雪おろしになり、雪しきりに降る。此内花道より先供兩人、青漆の紙合羽、竹笠にて先に立ち、跡より赤合羽の陸尺兩人挾箱を擔ぎ、是よりやはり青漆の合羽を着たる徒士二人づゝ並び出來り、段々に上手へ這入る。よき程に誂への乘物へ雨具を掛け、是れを紙合羽を着たる陸尺六人にて舁き、駕脇に北條の臣韮山五郎右衛門、同南條九郎兵衛、一文字の菅笠、半素袍、大小股立を取り、やはり青漆の合羽にて附添ひ、續いて平井十郎、網代七郎、土肥九郎、關野八郎同じ拵へ、此跡より赤合羽の中間大勢、合羽籠を擔ぎ出で、皆々花道より舞臺に掛る。よき程に上手より森之助等三人下を向き顏を隱し乍ら出來り、駕の傍へ近づかうとするゆゑ、

供廻　こりや／＼、片寄れ／＼。

森之六人　へい／＼。

ト言ひながら徒士の中へ紛れ、駕の傍へ近づく。

供廻　こりや、片寄れ／＼。

森之六人　へい、お願ひがござります／＼。

五郎　やあ、直訴は天下の法度なり、

九郎　願ひがあらば表向き、

五郎
九郎　問注所へ罷出よ。

森之　いえ、天下の一大事でござりますれば、

山平　直にお駕へ、

六人　お願ひ申上げます。

ト又寄らうとするを、

五郎
九郎　えゝ、無禮者め、ならぬと申すに。

トきつと言ふ。六人はもう是れ迄と言ふ思入あつて。

森之　ならぬとあれば、もうこれ迄、

山平　それ、各々。

ト三人合羽をはね、拔身にて駕を目掛け切つてかゝる。皆々悄りなし、韮山五郎右衛門南條九郎兵衛是れを支へる。此内下手より大宮五平太等三人、合羽脱掛けにて拔身を持ち、走り出來り、六人一時に駕を目掛け打て掛り、誂への鳴物、雪おろしになり、六人を支へる激しき立廻り、此内中間腰の拔けし可笑味抔ありて、上下へ逃げて這入る、此内花道よりばたばたになり千葉之介成胤素袍袴股立に

荏柄の平太

て、長刀を掻込み走り出來り、直舞臺へ來て、六人と立廻りきつと見得、

五郎　貴殿は千葉の、

九郎
皆々　成胤どの。

成胤　某御助力いたすでござる。

六人　何を小癪な。

ト鳴物替つて成胤長刀を構へ、六人を相手に激しき立廻り、トゞ六人手負ひになる。此隙を窺ひ、五郎右衞門等皆々打つて掛り、雙方手負ひながら六人を切倒す。成胤思入あつて、

成胤　義時殿の御通路を妨げなせし狼藉者、只今此場で討ちとつたり。

九郎　方々、動搖。

皆々　いたされな。

成胤　何はしかれ、義時公の御機嫌を伺はん。

トつか／＼と乘物の傍へ行き、戸を明ける。内に北條相模守義時、烏帽子素袍にてゐる、成胤皆々上下へ手をつかへ。

御安泰なる體を拜し、一統安堵、

皆々　いたしてござる。

義時　測らざる椿事出來、我を殺さん彼等が手段、危ふき場所も各〻が盡力ゆゑに安泰なり、千葉殿始め臣等一統、禮は詞に盡し難し。

五郎　數多御供の其中へ、僅かな人數で切込むほどの、容易ならざる不敵者、

九郎　社へ向ひ雪風に、息もつけざる隙を見込まれ、覆ふ合羽に手後れなし、

十郎　一時は御駕の四邊さへ防ぎ兼ねしを折よくも、成胤どの、御助力にて、

七郎　御安泰に御座ありしは、

九郎　まことにもつて恐悦至極、

八郎　我々共も一統に、

五郎　御禮申すで、

皆々　ござりまする。

ト皆々千葉之介成胤に禮を言ふ。

成胤　恐入つたる其お詞、只今館より歸邸の途中、大藏ヶ谷の邊りにて、里人集ひ動搖なすは、慥に變事と心附き、樣子を聞いて其場より、馳付け參つてござりまする。

義時　幸ひ雪も小止みたれば、それへ出で、休息なさん。

五郎　はッ、床几をこれへ。
　　ト誂への合方になり、關野八郎、有合の挾箱を床几に直す。土肥九郎足駄を出す。義時駕より出て床几へ掛ける。此内以前の比企森之助、秩父山平は苦痛のこなしにて刀を杖に起上り、

森之　天下の害を除かんと、忠臣無二の我々が黨を結んで此所へ、切入つたるも多人數に支へられて討つことならず、

山平　義時めを助けしは我々共が一生の不覺、假令此儘果つるとも、冥府に於て此恨み、よも晴らさいで置くべきか。

森之　返す〴〵も、

森之
山平　殘念至極。（ト手負ながらに無念のこなし、義時思入あつて）

義時　當時天下の政事を執る、鎌倉殿の執權職、既に國中靜謐に、五日の風枝を鳴らさず、十日の雨土塊を破らず、治まれる代に何ゆゑあつて、烏合の勢の浪人共が、此義時を討たんとせしぞ。こりや身が執權を妬く思はゞ、此場で討つて望みを達せよ。よもや我をば討たれまい。

森之　えゝ、數ケ所の手疵に身體の自由ならぬに附入つて、出る儘の雜言過言、汝を此儘生かし置かば

山平 益々悪逆増長なし、伯母の尼公と心を合せ、一天下を覆へさんは我々が知るところ。御若年たる實朝公の御身安泰にましますやう、國家のためを思ひし企、時到らずして全うせずともいかで天道ゆるさんや。

森之 御罰の來るを、

山平森之 相待ちをれ。（ト苦痛ながらきつと思入。）

義時 今此場にて相果つる亡者に申すも無益なれど、冥府へ參り閻王へ現世の土産に承れ、當時將軍の職たれど、實朝公は御若年、天下の政事は政子尼公と此義時が意中にあり、藪蚊に等しき其方等はよし數千人果つる共鎌倉殿の障りならず、又一人なれ共義時が匹夫の刃に討たれなば、世界は忽ち黑闇なるぞ。はて、國人は仕合せものぢや。

ト悠々とこなし。手負の兩人無念の思入にて、

森之 我此處で死するのは、聊惜しみはいたさねど、實朝公を自滅させ、天下を横領いたさするがいかにも無念口惜しい。

成胤 やあ、返す〴〵も悪口雜言、其舌の根にて謝罪なし、來世の苦痛を免かれよ。

山平 えゝ、おのれも千葉家に生れながら、北條家へ阿り諂ひ、立身望む臆病武士、心あらば義時を討

つべき筈を味方に附くとは、
森之　言はうやうない、
森之
山平　卑怯者めが、
義時　我に敵たふ不屈奴、それ、彼が首級をあげい。
五郎
九郎　畏つてござりまする。
ト五郎右衛門、九郎兵衛刀を持つて立上る。比企森之助、秩父山平覺悟の體にて、
森之　臆病武士の手に掛るは、
山平　殘念ながら覺悟の上、
森之　とく〳〵首を、
山平
森之　はねられよ。
五郎
九郎　おゝ、よい覺悟だ。
ト五郎右衛門は森之助、九郎兵衛は山平の後ろへ廻り、拔身を構へ、兩人首を差延べる。是れにてえ
いと打落す。千葉之介成胤思入あつて、
成胤　思はぬ路次の狼藉にて、御參詣も遲刻せり。各〻徒士の面々を、此處へお呼びなされい。

十郎　はツ。(ト平井十郎上下へ思入あつて、)いづれも、お立ちなるぞ。(ト上下にて、)

供廻　はあゝゝ。

ト以前の供廻り殘らず上下より出來り、後ろへ控へる。義時四邊を見遣り、

義時　今日君の御名代に淸めの庭の神前を、血汐に穢せし恐れあれば、此儘歸館いたすであらう。

五郎　又二つには此後に、いかなる狼藉あらんも知れず。

九郎　仰せの通り此場より、御歸館あつて、

皆々　然るべう存じまする。(ト義時思入あつて、)

義時　正八幡の加護なるか、此災厄をまぬかれしは、返すぐも我幸運。

成胤　時めく風に吹き晴れて、國治まれる朝日影。

五郎　開く御運も扇ヶ谷、花水橋の花も實も、

九郎　枝に巢を喰ふ鶴ヶ岡、弓矢を守る神靈は、

十郎　寒梅薰る雪の下、

七郎　梅ヶ谷辻に市をなす、

九郎　下賤が益を松葉ヶ谷、

八郎　此泰平も君の德、
成胤　恐悅申し、
皆々　上げまする。(ト皆々辭儀をなす。)
義時　是れより徒歩にて、(ト立上るを道具替りの知せ、)歸館いたさん。
皆々　はツ。

ト行列三重になり、義時喜悅の思入。是れへ時の太鼓を冠せ、此道具廻る。

(荏柄屋敷密談の場)――本舞臺四間高足の二重、本庇本緣附、上寄に一間の床の間、同じく地袋附きの違ひ棚、此下銀襖、上手一間の附屋體、塗骨障子、平舞臺に雪布を敷き、眞中御影の大沓脫ぎ、上手綱代塀、下手屋根附の門、左右板塀、此前石燈籠梅の立木、總て雪持にて、日覆より松の釣枝をおろし、總て鎌倉營中荏柄屋敷の體、爰に櫻木腰元裝にて、三足の大火鉢に炭をつぎ、紅葉やはり腰元にて書院煙草盆の掃除をして居る、此模樣賑かな合方雪おろしにて道具留る。

櫻木　今朝雜巾掛けをする時は、ほんに指が凍えるやうで辛い事でござんしたが、やう〳〵お火鉢の掃除になつて、樂々としましたわいな。
紅葉　一夜明けてもまだ十三日、寒さの强い時分ゆゑ、つい火の傍へ寄りますと、長くなつてならぬけ

れど、其替りお掃除は、いつ、いつ、そよく出來ますわいな。

櫻木　いつ迄爰になられませぬは、殿樣には軍學を專らお學び遊ばす暇に、此節では書畫のお稽古、大方今に是れへお出で、雪景色を御覽遊ばし、直ぐお書きなされうわいな。

紅葉　又雪景色は一段と、繪にお取り遊ばすには、紅梅へ積りしとこから、お庭の築山からお泉水へ積りし景色をお詠めなさらば、嘸お悅びでござんせうわいな。

ト合方きつぱりとなり、上手屋體より白梅腰元裝にて、褥を二枚持ち出來り。

白梅　皆さん、お掃除は濟みましたかいな。

櫻木　只今お火を入れましたれば、是れで殘らず、

紅葉　調ひましたわいな。

白梅　今殿樣がお客樣と、是れへお出になりますれば、よう氣を附けて下さんせ。

櫻木
紅葉　畏りました。

ト誂への合方、雪おろしになり、上手屋體より茬柄の平太胤長、着附、袴、小さ刀にて出來り、跡より阿靜坊安念、墨の衣、白の着附、旅僧の裝にて附添出來る。腰元下手へ住ふ。

平太　さ、雪中なれば遠慮なく、それなる褥へ住はれよ。

安念　いや、それでは却つて恐入る。やはり愚僧は、此儘にて。

白梅　左樣でもございませうが、殿樣の仰せゆゑ、

櫻木　お褥におつき、

紅葉　遊ばしませいな。

安念　然らば御免を蒙りて、お褥拜借いたすでござる。（ト褥の上へ住ふ。）

平太　酒肴を是れへ持參いたせ。

白梅三人　はあゝゝゝ。

ト白梅等三人上手へ這入る。安念庭へ思入あつて、

安念　いや御居間とは事替り、一層雪の詠めもよく、わけて當家は高臺ゆゑか、由井ケ濱の眺望より、雪の下の町を見おろし、こりや一段とお樂しみでござる。

平太　雪中步行は御難儀ならんが、我庭前は月雪とも詠めに於ては館よりも遙かにまして好うござれば能き折柄の貴僧の御入來、先づゆる〳〵とお話し下され。

安念　詠めがなうても話し好き、お邪魔でなくばいつ迄も、御談話いたす心得でござる。

ト爰へ白梅先に腰元兩人、杯臺、銚子、肴を入れし四方足の器を持ち出來り、前へ並べ、白梅殘り

兩人は奧へ這入る。

白梅　仰せ附りし御酒宴の、用意いたしてござりまする。

ト花柄の平太、杯をとり上げ。

平太　酌いたせ。

ト白梅つぎ、平太呑乾し。

白梅　はあ。

平太　安念老、いざ一獻。

安念　いや、雪見酒とは忝い、然らば頂戴仕る。

ト白梅酌をなし、安念一口呑み、

出家の身にて申上げるも恥入る儀にはござれども、かく雪中を詠めながら、かやうなる美婦人の酌にて、御酒を頂戴いたすとは、實に甘露の味がいたすわ、はゝゝゝ。

平太　いや、是れは近頃興あるお詞、さすれば貴僧も無骨者より、女子の酌がようござるか。

安念　壯年より叡山へ登り、多年研學いたせし身なれど、地鐵を申せば元は凡夫、酌は女子がよろしうござる。

平太　いや、能うぞ打明け申されしぞ、そこが則ち懺悔滅罪、又淸僧は格別でござる。

安念　お詞痛み入りましてござる。

ト平太へ杯を返し、

その女人の事につき、爰に可笑しき一話あり、荏柄氏、先づお聞き下され。(ト合方きつばりとなり)まだ昨今の事なりしが、或る大寺に勤め居る一人の若僧あり、こやつ經文の修業もいたさず、折さへあれば町家へ出て酒を呑み、肴を喰ひ、まだ其上に揚屋へ通ひ、淫酒に耽る亂行を、師の坊是れを深く哀れみ、或時側近く彼を招き、出家は五戒を保つべき其講釋を聞かせしに、若僧、師に答へて曰く、幼年よりして師の坊はその身堅固に五戒を守り、多年の御修業なさるれど、是れ五戒を保つにあらず、五戒の味を知らざるなり、我修業中酒を呑み、又肴の旨きも知り、婦人の言はれぬ味も覺え、而して後に五戒を守らば是れ則ち名僧なり、さすれば我も其後に、やがて五戒を保つ所存と、若僧ながら答へしは、實に一理ある詞なりと、今に話しに殘りをりしが、出家とて同じ人間、誰一人として淫酒の道好まぬ者はござらぬが、一旦なして再び愼しむ、爰が出家の戒めでござる。

平太　こりや面白きその話し、佛祖の釋迦にも摩耶婦人あり、況んや凡夫、愼しみ難きは色なれど、其

若僧の答へこそ、いかにも一理あることなり。

安念　先づその若僧が答へに基き、愚僧も御酒を頂戴なし、後で五戒を保つ所存なれば、道理を附けながらつい過して相成りませぬ。

平太　何獻なりとも遠慮なく、雪を肴にお過し下され。

安念　然らば頂戴仕る。（ト平太の杯を受ける。）

平太　お酌いたせ。

ト此前より白梅向うへ思入あつて、聞えぬこなし。

白梅　御前樣、あれを御覽遊ばしませ。

こりや、何をその方見てゐるのぢや。

ト是れにて平太、安念延び上り向うへ思入あつて、

平太　雪の下より館の方へ、多人數馬上で走り行くは、何とももつて心得ず。

安念　まだその外に里人等が、こけつまろびつ行き交ふは、何か變でもござるよな。

白梅　ても、案じられた事ぢやわいな。

ト三人不審のこなし、爰へ奥より櫻木出來り、

由井一郎殿直
櫻木　殿樣へ申上げます。只今鶴ヶ岡の段蔓に何やら變がござりまするとしらせゆゑに、
樣馳せつけましたれば、今に御左右が知れませう。
平太　何、鶴ヶ岡にて變ありしとな。はて心得ぬ事どもなり。
安念　見おろす街の動搖は、容易ならざる事なるが、
平太　早く樣子が聞きたいものぢや。
ト合方、雪おろしになり、花道より神木五郎次、達附一本ざし、竹笠にて走り出來り、直に舞臺下手へ來り、
五郎　はッ、只今戻りましてござりまする。
平太　おゝ、待兼ねしぞ、して鶴ヶ岡に變ありしとは。
五郎　只今馳せつけ樣子を見しに、今朝鶴ヶ岡の社前に於て、將軍家御武運のため御祈念ありし御代參は北條義時樣とお觸出し、昨夜より降積む雪にお供廻りの難儀いたす其虛に附入り何者なるか、僅か六人にて路に隱れ、不意に討つて出しといふ事、それと申すも執權の暴威を振ふむやくしさを、晴らさんための者共と、專ら街の風說にござりまする。
平太　多勢のなかへ僅かな人數で、切込む程の勇士等では、いづれも手者と相見ゆるが、して義時を首

尾能う打ちしか。

五郎　その儀も社頭で承りしが、近習の者を切拂ひ、執權の乘物間近く六人一度に切入つて、既に本望達せんと、いたせし所へ馳せつけしは千葉之介成胤どの、御助力ありしに北條方は力を增して防戰なし、義時公には手疵一つ負はせ給はず御安泰、哀れ其場で六人共打取られしとの事。

平太　すりや、本望を果さずして、やみ〳〵討たれ相果てしとか、はて扨殘念至極なり。

ト平太口惜しき思入、此内安念始終、平太に目を附け居て、

安念　僅か六人にて討入る程の勇士を其場で失ひしは、暴徒と言へども不便の至り、南無幽靈頓生菩提、南無阿彌陀佛々々。

ト安念珠數を爪繰り、稱名を唱へる。平太思入あつて、

平太　して、其者はいづれの家臣か、其實證は聞かざるや。

五郎　街の噂とり〴〵に、確とそれとは知れませねど、多分は先年滅びたる畠山の殘黨と申すことにござりまする。

平太　てもさうあるべきなり。しかし義時手疵もなく、無難に濟みしは奇怪なり。

安念　一太刀なりとも負はせぬは、浪士の心中思ひやらるゝ。それにつけても義時公は、御幸運なこと

でござる。

ト態と褒める。平太はむやくしきこなしあつて、

平太　雪中そちも大儀であつた。次へ參つて休息いたせ。

五郎　はツ、有難く存じ奉りまする。左樣ござらば御客僧。

安念　御苦勞にござりまする。

五郎　はツ。

ト辭儀をなし、神木五郎次下手の門の内へ這入る。

平太　義時めを討洩らせし浪士の心察しやれば、どうやら酒も旨うない。こりや白梅、此品次へ取片つけい。

ト白梅有合ふ酒肴を上手へ運び這入る。安念平太の傍へ進み寄り、聲を潛めて、

安念　荏柄氏、今御家來が注進に、浪人共が執權を、討洩らせしを貴殿には、左程無念に思さるゝか。

平太　別に恨みと申しては、我に聊かあらざれど、當將軍實朝公の御爲を思ふ某ゆゑ、かれの政事が心に叶はぬ。（ト安念笑壺に入りし思入にて、）

安念　して又執權義時殿に、依怙の沙汰でもござるよな。

平太　當將軍のお爲を思ふ身が赤心を貴僧にも、篤とお聞き下されい。（下謠への合方になり。）抑ゝ壽永元暦の頃より、勿體なくも賴朝公のその御心勞を思ひ奉れば、なか〳〵詞に盡し難し、敵に追はれて山野に臥し、又或時は石橋山の伏木の内の御難戰、やう〳〵文治建久の年、奢る平家を討滅ぼし、源家一統の世となしたまひ、日本總追捕使の職に昇り、武將の業を草創ありて、萬民鼓腹の思ひをなし、御世泰平の鎌倉山も、正治元年の春に至り、御壽五十路に餘る三つの御時御逝去あり、それより二代賴家公の御世となりては傍に外戚北條時政が我意に任せて政事を執り、竟に再び軍起り、恐れ多くも賴家公は間者のために傾くも、修善寺におき御生害、其頃賢者の聞え高き畠山重忠、四十二歳を一期として、二股川に討死なしたり。是れとても間者の舌頭、其元たるは北條時政、今三代の將軍職實朝公の時に當りて、其時政が子息たる相模守義時、執權を襲ぎ政子尼公と心を合せ、威勢鎌倉を覆ひ日に月に增長なすに、諸臣等其時世につれ權門に阿り諂ひ己が登庸を願ふ輩、まことの武士の目から見ると、苦々しき時世なり。飛鳥盡きて良弓隱る、世のたとへ、漢の張良は祿を辭して山林に遊ぶと雖も、又退いて鑑みれば、三代相恩實朝公のお爲を思はゞ、此儘に打捨つべきにあらざれば、日夜肺肝を碎きをる其の幸先に、畠山が殘士の討入りし事を聞き、もし義時一命なくば鎌倉天下は萬代不朽と、思ひの外に運盡きず、無事に館へ

歸りしとは、我胸中に違ひたり。それゆゑ無念に思ひをるわえ。

ト平太殘念なるこなし、安念思入あつて、

安念　こりや御尤なる其仰せ、當將軍は三代の相恩、今御身が山林へ退き給ふその時は、冥府に御座ある賴朝公又賴家公へ濟まざる次第、こりや執權の暴威を挫き、天下一統靜謐に遊ばさずばなりますまい。（ト安念四邊へ思入あつて、）左程其許三代のお爲を思召るゝなら、何と荷擔をなされては下さるまいかな。（トぢつと詰寄る。平太不審の思入にて、）

平太　なに、某に荷擔せよとは。

安念　さゝ、その御不審は御尤も、貴殿を見掛け、御荷擔を願ふといふは外ならず。やはり天下のお爲を思ふ愛に一個の勇士あり、則我同國信濃の國の住人泉の小次郎親平とて、愚僧が親しき友なりしが、是れも貴殿と同意にて、今鎌倉に義時が執權をなす其時は、惡逆日々に增長なし、鎌倉天下を掌握なさんは鏡にかけて見るが如し、御邊も天下の御爲を思はゞ有志を語らひ北條家を討て捨てんに如くはなしと、實に尤もなる詞に付き、此安念同意なし、猶も同志を集めんと行脚の體に姿をなし、諸國經歷いたす內、既に一千を過ぎたれど皆小身の者のみゆゑ、當惑なしてをつたるところ、竊に貴殿の御樣子を心に掛けて見しところ、同じく政事の依怙を悔み、天下のお爲

を思さるゝは、是れ屈竟の味方なりと、我胸中をお明し申せば、何卒一味の同志の内へ、御助力
なされて下さるまいか。

トよろしく思入、平太もぢつとこなしあつて、

平太　流石は青栗七郎殿の御舍弟程あつて、あつぱれ御器量、その身天台の座主たりとも、天下の爲め
に鎌倉の說客となられしは、近頃武士も及ばぬところ、如何にも荏柄一味いたす、必らず御案じ
めさるゝな。

安念　むゝ、すりや拙僧が胸中をお汲分けあつて貴殿には、一味合體下さるとな。

平太　如何にも。

安念　すりや、御荷擔下さるとな。はツ有難くぞんじ奉ります。

ト安念辭儀をなし、悦ばしき思入、平太思入あつて、

平太　北條義時討つて捨てなば、實朝公の御身も安泰、且つは執權の職に出るは、仁者と聞えの泰時殿
さすれば天下は平穩なり。

安念　只此上は三浦一家を、一味に附け度く存ずれば、何卒貴殿の御配慮を願ひ度く存じまする。

平太　それも身共が義盛どのへ、遠からずして勸めんが容易に承諾いたすまじきは、物堅き性なるゆゑ

その機を測り申入れん。

安念　何分よろしく御計ひ、偏に願ひ上げまする。

ト此時下手の襖を明け、和田六郎義重着附袴一本差し、同四郎左衛門義直、同じ拵へにて出來り、兩人下手へ住ふ、平太扱はと悄りなし、

平太　思ひがけない御兩所には。

義重　いや、決してお氣遣ひ遊ばすな。

義直　我々共も安念老と、

義重　一味同意、

義直　いたしてござる。

平太　むゝ、すりや御兩所も一味とな。

義重　親平殿へ合體なし、惡逆無道の義時始め、北條家を討滅ぼし、鎌倉殿を平穩になさん所存にござれども、

義直　今日安念此處にて、荏柄氏へ御荷擔願ふを、御承諾あるかあらざるかを、我々兩人伺ひに參りし所幸先よく、

義重　一味へ御同意下さる段、

義直　龍に翼を得たる心地、

兩人　有難く存じ奉る。

ト兩人平伏なす。平太思入あつて、

平太　して一味同意の姓名は。

安念　則ち愚僧が持參せり。

ト安念懷中より連判の一卷を出す、平太四邊へ思入あつて安念より受取り開き見る。此時上手障子屋體より以前の白梅伺ひゐる。平太姓名を讀終り、思はず上手を見遣り、白梅と顏を見合せる。是れにて白梅障子を締める。平太大事を見られしといふ思入あつて、一卷を卷納め、

平太　かく、大義に一味の上は、目出度く酒宴を汲交し、その上血判いたすでござらう。

安念　それは千萬忝し、是れにて日頃の望みも屆き、

義重
義直　忝く存じ奉る。

平太　やあ〳〵白梅、銚子土器もて。

ト奧にて、

荏柄の平太

白梅　はあゝゝゝ。

ト上手より白梅、三方へ土器を載せ出來り、能き所にて思入あつて、態と躓きばつたりと轉び、件の土器を打割り、恟りなして、

やゝお土器を粗相いたし、申譯がござりませぬ。

ト詫びるを、平太幸ひといふ思入あつて、

平太　やあ、幸先祝ふ酒宴の折に、器を碎きし憎き奴、此場に於て手討にいたす。

ト刀をとつて立掛るを、安念留め、

安念　いや、其御立腹は御尤もなれど、今土器の碎けしを物の數の殖えると見なさば、さのみ不緣起にも候はず、その物の殖えるは、則ち一味の、いやなに、一途にお腹をお立ちなされず、先々お許しなさるがよい。

平太　いや些細なことゝ打捨て置けば、かれよりもしや、いやさ、若し此後の無禮も言はゞと、それゆゑ此場で手討にいたす。

安念　いえ、そこを何卒出家のお詫び、一命お助け下さらば、則ち愚僧が佛へ奉公、偏にお聞き濟み下さりませ。

平太　餘人にあらぬ御僧が詫び、然らば掛替是れへもて。

白梅　はあゝゝ。

ト白梅却つて本意なきこなしにて立上るを、

平太　いや、その方は此處を動く事相成らぬ。こりや腰元共、掛替持て。

櫻木
紅葉　畏りました。

ト以前の櫻木、紅葉、銚子三方に載せし土器を持ち出來り、能き所へ直す。

平太　其方達は次へ參り、肴の用意申附けい。

櫻木
紅葉　畏りました。

ト腰元兩人奥へ這入る。平太土器を取上げ、

平太　いざ、安念老、誓の杯。

安念　先づ御主人より。

平太　然らば身共から。酌いたせ。

白梅　はあゝゝ。

ト白梅酌をなす。平太呑乾し。

平太　目出度く巡杯。

ト出す、安念受け白梅酌をなし、

白梅　是れにてお肴いたしまする。

ト隠し持ちたる短刀を出し、喉へ突立てる。みな〳〵愕りなし、

安念　や、こりや何ゆゑに、

義重
三人　此生害。

白梅　今私が相果てますを、是れを此場のお肴に、目出たうお聞き下さりませ。

安念　女の狭き料簡より、粗相の詫に自殺せしと、存じの外なるその詞。

義重　目出度く聞けと言はるゝは。

義直　扨は此場の密談を。

白梅　お障子越しに承り、御姓名を記したる一味の連判計らずも、目に附きましたその折に、御主人にもお心附き、此事もしや他へ漏れなば、是れ迄多年の御奉公も、御恩を返さず仇となれば、態と疊に躓きて、粗相の罪にお手討を受くる覺悟を本意なくも、其場をお助け下さりますれば、是非なく自殺いたせし白梅、御疑念お晴らし下さりませ。

ト白梅苦痛の思入にて言ふ。平太感心せしこなしにて、

平太　女子なれども未然を察し、男子に勝る此生害、あつぱれ見上げし者なるぞ。

白梅　只此上は御主人樣が、御本意お遂げ遊ばすを、來世で願ふが御恩返し。

平太　かゝる所存のある者を、やみ〳〵生害いたさするは、我に於ても不便に思ふぞ。

白梅　その御詞があの世へ土產、

安念　來世は必らず成佛得脫、

義重　同志は現在善惡の、

義直　生死も國のためなれや。

平太　やがて冥府で、（ト白梅を見返るを、木の頭）

皆々　面會いたさん。

ト皆々勇み立つ、白梅段々落入る。此模樣三重雪おろしにてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

由利八郎屋敷の場
千葉之介邸宅の場

〔役名――由利八郎惟久、同左衞門尉惟光、千葉之介成胤、和田六郎義重、同四郎左衞門義直、由利の家臣荒波磯藏。同岩淵喜四郎、阿靜坊安念。惟久の妻靜江、千葉の家臣等。〕

(由利八郎屋敷の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の大床の間、此次地袋、違ひ棚、下の方白地大形の襖、左右折廻し、杉戸の出這入り。日覆より白地の大欄間を下し、花道揚幕の所杉戸の出這入り。無臺花道とも、高麗縁の薄べりを敷詰め、總て鎌倉扇ヶ谷由利家廣間の體。爰に由利の家臣岩淵喜四郎、荒波磯藏、烏帽子小袴の下侍にて枠火鉢に當り居る。此見得合方調べにて幕明く。

磯藏　いやなに喜四郎どの、今日も殊の外寒じまするではござらぬか。

喜四　左樣でござる。しかし時候は寒じましても、病人のないので安心でござる。

磯藏　とかく當年は季候が後れ、早春とは申しながら、引續いての大雪にて、やう〳〵如月の半ばに至り、梅が綻びし位ゆゑ、來三月にも相ならねば、殘る餘寒は去りますまい。

喜四　いや梅と申せば昨日なぞは、梅が盛りになりしと申して、吸筒なぞを携へしものが、若宮八幡や荏柄天神へ、大分梅見に出かける由、御同然に噂を聞くも羨ましいではござらぬか。

磯藏 仰せの如く市中のものは、左樣な遊山に出掛けますれど、武家は早春鶴ケ岡の騷動よりして外出嚴しく、遊山は勿論私用を達しにも、容易に他出がいたされぬとは、餘程窮屈な儀でござる。

喜四 それと申すも上元の式日祝ふ御社參に、將軍家の御名代たる執權北條義時殿へ、秩父浪士が不意を討ち、段蔓にての大混雜。その後は世界穩かならず、在鎌倉の大小名、世の動靜を窺ふ時節。

磯藏 われ〳〵共が所存でも、その節執權義時殿を秩父浪士が討取りなば、一旦天下は動亂なすとも頓て世界は穩かならんが、

喜四 北條殿は千葉殿の助力に依つて危急を逃れ、秩父浪士は望みを果さず、枕を竝べ討死せしゆゑ、惡運募る北條義時、

磯藏 取分け去月十三日は、鎌倉殿の御武運を祈りのための御社參も、

喜四 早朝よりして大雪降り、會稽の時來りしと、思ひし浪士も意を果さず、

磯藏 雪に汚名を雪がずして、積る白妙諸共に、はかなく命の消え行きしは、

喜四 拙き運とは申し乍ら、

磯藏 誠に不便な、

兩人 儀でござる。

ト此時、花道より下侍一人走り出來り、

侍　はツ申上ます。只今和田四郎左衞門殿、御同姓たる六郎殿御同伴にて、御入來ありて、御直談の儀が願ひたいと、お控へなされてゞござりまするが、此儀如何計らひませうや。

磯藏　外ならぬ和田の一統、別に仔細もござるまい、

喜四　只今上へ申上ぐれば、これへお通し申すがよいぞ。

侍　はツ。（ト引返して這入る。）

磯藏　いで、御主君へ。

兩人　申上げん。（ト立掛る、此時奥にて、）

惟久　あいや知らせに及ばぬ、承知いたした。

磯藏　すりや、御主君には、

兩人　お聞きありしか。

ト下手へ控へる。合方きつぱりとなり、奥より由利八郎惟久、烏帽子素袍、小さ刀にて出來る、能き程に花道より和田六郎義重、同四郎左衞門義直同じ烏帽子素袍、小さ刀にて出來り、花道に住ひ、

義重　八郎殿には御在邸にて、早速のお出迎ひ、

義直　われ〳〵共の身に取りて、近頃恐入つてござる。

惟久　これは〳〵御兩所には、ようこその御入來、何は格別、是れなるお席へ。

磯藏　まづ〳〵お通り、

喜四　下されませう。

義重　然らば御免、

兩人　下されい。

ト兩人舞臺上手へ來り、よろしく住ふ。

惟久　その方共は次へ參り、こがし湯を申附けい。

磯藏
喜四　はツ。（ト立たうとするを。）

義重　あいや、必ず御配慮あるな。われ〳〵今日參上せしは、ちと其許に折入つて、

義直　御密談の儀がいたしたく、評議の席より人選にて兩人連立ち參つてござる。

惟久　御密談とあれば猶もつて、他聞があつては御遠慮ならん。用事あらば呼ぶ程に、その方共は次へ立て。

磯藏　委細承知、

兩人　仕りまする。

ト彌波磯藏、岩淵喜四郎下手の杉戸の內へ這入る。惟久思入あつて、

惟久　思ひ寄らざる凶變より、穩かならぬ此時節、御密談とは如何なる譯、早速仰せ聞けられい。

義重　その密談外ならず、豫ての一儀に泉氏の、

義直　內意をうけてわれ〳〵兩人、お話し申しに、

兩人　參つてござる。

惟久　なに、泉氏の御內意とな。（ト合方になり、）

義重　昨日當家へ廻文にて、竊にお知らせ申せし如く、今日泉の邸宅へ同盟の者集合なし、豫ての一條評議なせしが、貴殿お一人公用にて御出席が是れなきゆゑ、萬事は荏柄が承り、お賴みうけてをるとは申せど、貴殿に面會いたせし上、その御存意を承り同盟のもの決定なさんと、その評議整はねば、是非に貴面を得し上にて、御心腹の程伺ひ參れと、泉氏より內意をうけ、わざ〳〵兩人參つてござる。

惟久　して今日の御評議は、至急に事を企つるが是なりと申すもの多きや、又は時節の到るを待つて、兵端を開きますが是なりと申すもの多きや、衆評の議は如何でござる。

義直　されば銘々存意の程を發言に及びしところ、十に八九は神速に事を發して利ありと申す同意のもの少なからず、いかんとなれば、去年半は鶴ヶ岡の凶變より執權義時油斷をいたさず、路次は素より邸内迄、要害堅固に致しをれば、此末數月を過す時は、猶々用心堅固とならん、そのうち如何なる不平起り、變心のもの生ずる時は、一味の大事此上なし、片時も早く兵を集め、深く用心あらざる內、

義重　不意を打つのが上策ならんと、衆議一決致せしゆゑ、

義直　御同意なるか但しは又、外に御存意これあるか、われ〳〵兩人衆に代り、

義重　承りに、

兩人　參つてござる。

ト惟久思入あつて、

惟久　何さま兵は神速なるを尊しとなす本文ゆゑ、こりや猶豫なす所にあらねば、至急に事を發しまするが、上策なりと存じ申す。

義重　すりや、其許にも、

兩人　御同意とな。

惟久　手前も疾よりその邊に、心を勞しをつたるところ、如何にも御同意仕る。

義重　それにてわれ〳〵、

兩人　安堵いたした。

惟久　して神速に事を發する、時日はいまだ定りませぬか。

義重　その儀は明後十八日が、事を發する吉辰ゆゑ、宵の口より支度を整へ、明くるを待つて北條の館の四方を取圍み、無二無三に亂入なし、目ざす相手の義時を討つて天下の憂ひを拂ひ、源家の御武運長久の基を開く有志の赤心。

義直　それゆゑ明日夕陽の、鐘を合圖に棟梁たる親平殿の邸宅へ、銘々手勢を引率なし、竊に會合下さる樣、御同意あらば兩人にて、わが名代に罷越し、賴み入れよと則內意、御異存なくば、八郎殿、此儀御承引下されい。

惟久　かねて用意はいたしあれば、その儀は委細承知いたす。

義重　至急の儀ゆゑわれ〳〵も、萬事の支度に心急き、

義直　御承引ある上からは、もはやお暇仕る。

惟久　さはさりながら折角の、御入來ゆゑにお湯一つ、只今取寄せ差上げたし。

義重　いや、御配慮のお持成しより、御承知のよし同志のものへ、

義直　申し告ぐるがよき土産、是れにてお暇仕りまする。

惟久　しからば仰せに從はん。

義重　左樣ござらば。

義直　八郎どの。

惟久　御兩所、お使ひ御苦勞に存ずる。

ト唄になり、和田義重、同義直は花道に這入る。跡へ下手の杉戸をあけ、以前の荒波磯藏、岩淵喜四郎出て、

磯藏　御前樣、至急と相成り御支度も、

善四　嘸お忙しく、

兩人　いらせられませう。

惟久　そち達二人は豫てより、我腹心と頼みをれば、明かし置いたる夫の一儀、いよ〳〵明日會合いたせば下人に漏れざる樣にいたし、重役共へ兩人より、竊に供觸れいたして置きやれ。

磯藏　その儀は委細承知いたしました、事なく致してお藏より、武器を取出し調べましては、下人の不

審も如何と存じ、

喜四　お藏へ鼠が這入りしゆゑ、器物へ疵を附けざる樣、鼠狩をいたすと言ひなし、明日武器を取出し用意致すで、

兩人　ござりませう。

惟久　大事の前の小事ゆゑ、他へ洩らさぬが肝要なるぞ。

磯藏　委細承知。

兩人　仕りまする。

惟久　もはや明晩の事なれば、銘々支度の都合もあらう。隨意に引取り苦しからぬぞ。

磯藏　はッ、有難きその仰せ、

喜四　御前のお許し出し上は、

磯藏　御免を蒙りわれ〳〵は、

喜四　是れにてお暇。

兩人　いたしまする。

惟久　おゝ遠慮に及ばぬ、隨意にいたせ。

磯藏　しからば御免、

兩人　下さりませう。

ト兩人下手へ這入る、是より床の淨瑠璃になり、

〽君思ふ誠忠無二も頑に、なるは義膽の人並に勝れてたゆむ八郎が、跡に思案の腕拱き、

惟久　はて、是非もなき事どもぢやなあ。（ト床の合方になり、）主君と仰ぎ奉る、實朝公の御尊慮を驚かし奉るは恐入つたる事ながら、打捨て置かば將軍家のお爲めにならぬ北條義時、さればこそ秩父の浪士などが、早春社參の路次に待受け、討たんと計りしものならんが、事ならずしてその場にて無慚の最期を遂げたるは、殘念なりと泉を始め安念法師の奔走にて、多人數同意なせし上は、われも三浦の黨中にて、鎌倉殿へ對しては譜代恩顧の武士ゆゑに、荏柄の平太の進めにより、一味合體いたせしも君恩報ずる身の面目、たとひ一旦實朝公へ弓引く不忠と呼ばるゝとも、天下の爲めに汚名を厭はず、我意に募りし執權を討つて憂ひを除きなば、誠の武士と末の世迄、名の殘らざる事はあるまじ、連添ふ奥の靜江にも、我赤心を言ひ聞かせ、覺悟させたきものなれど、女は口のさがなき者ゆゑ、それと明かさば出陣の明日は用意の憂き別れ、是れも天下の爲めなれば、武門の習ひ是非なき事ぢや。

〽家を出る時妻子をも、忘るゝ武士の身の覺悟。泣いて襖のへだてある、心を恨み奥方が、さあらぬ體に立出でゝ、

ト此内惟久よろしくこなし、後ろの襖を明け、惟久の妻靜江打掛にて出で、こなしあつて氣を替へ、

靜江　御前樣には先刻より、是れにお出でござりましたか。

〽こなたもわざと機嫌よく。（ト惟久氣を替へ、）

惟久　思ひ寄らざる來客にて、無益に時を移したるが、今宵は是れにて一獻汲まん、九獻の用意をいたすがよいぞ。

靜江　そはお嬉しう存じまするが、最早や明夜は御出陣のお別れなりと存じますれば、心細うてなりませぬ。

惟久　すりや、樣子をば何もかも。

靜江　はい、お叱り受けるか存じませぬが、お襖越しに御樣子を承りましてござりまする。現在連添ふ私へ密事をお明しなされませぬも、里の兄たる保忠へ、もし一大事が漏れんかと、御疑念あつてゞござりませうが、假令お家やお命をむざ〳〵お捨て遊ばすとも、天下のお爲めになる事なら、お止め申しは致しませぬ。萬一御武運拙くして、お討死でもなされなば、女ながらも北條の

敵を引受けはな〴〵しく、殉死いたすでござりまする。

〽死生を共と健氣なる詞を聞いて打悦び、（ト惟久思入あつて、）

惟久　ほゝお、あつぱれなるその心底、親なき後は兄が親と世の諺も顧ず、兄を捨てもわれにつき死生を共になさんとは、誠にもつて悦ばしい。

靜江　そりやもう仰せござりませいでも、父母兄弟を捨てましても、夫につくが世の習はし、少しも未練はござりませぬ。

惟久　おゝよくぞ申せしその詞、われも一人の兄あれど一心の外味方なしと、現在實の兄なれど、同意なさゞる性質ゆゑ、密事を明かさず明日の暮るゝを待つて出張なさん。

靜江　それと申すも北條家は、實朝公の御母堂たる政子尼公のお里ゆゑ、兄君樣へも御遠慮がち。

惟久　その外戚が害となり、上見ぬ鷲の政事。

靜江　此儘おかば鎌倉の、お爲めにならぬと聞くからは、

惟久　假令武運に拙くして、わが一命を討たるゝとも、

靜江　逆意と知つて捨て置くは、臣たるものゝ道ならず、

惟久　それゆゑ竊にこの企

靜江　さは言へあたら御名家を、
惟久　捨つるも是非なき次第なるわえ。
〽思ひ詰めたる金鐵の心に、妻も諫めかね、憂ひを隱す折からに。
ト此内惟久、靜江思入よろしく、此留り上手杉戸の内にて、
惟光　いや、その思案よろしからず、それへ參つて異見をなさん。
惟久　やゝ、あのお聲は、
靜江　兄君さま。
〽見返るあなたの次の間より、思掛けなく立出る左衞門の尉惟光が、威儀を繕ひ座に直れば、
こなたはそれと敬ひて、
ト上手より由利左衞門尉惟光、烏帽子素袍、小さ刀、少し老けたる拵へにて出來り、上手に住ふ。
惟久此體を見て、
惟久　思ひ掛けなき兄上には、いつの間にやら此御入來、
靜江　存ぜぬ事とてお出迎ひも、心附かざる失禮の段、
惟久　平に御容赦、

兩人　下さいませ。

〽もれし密事に何となく、心をおいて敬へば、惟光詞を改めて、

惟光　いやその挨拶には及はぬこと、緣者の儀ゆゑ某も、別段案内も乞はずして、今程入來致せしが、廣書院には兩人が、密話の樣子いぶかしく、承つたるが、よろしからざる企ゆゑ、詞を發して止め申した。

惟久　すりや兄上には一部始終、お聞取り下されしとな。日頃よりしてお物堅く大事を計るお心ゆゑ、その御異見は然ることながら、暴威を振ひ將軍家を倒すと知つて捨て置くは、主君へ對して不忠なりと、同盟有志の勸めにつき、荷擔いたしてござりますれば、只今の此の望み、假令よしなき企たりとも、心を變ずる拙者ならず、何卒兄上のお慈悲にて、餘所にお見なし下さるやう、ひたすら願ひ奉る。

〽先を越したる弟の頼みに兄は詞なし。妻はかたへに手持なく、（ト靜江こなしあつて、）

靜江　あたらお家をむざ〳〵と失ひまするは御先祖へ、御不孝なりとは存じますれど、捨ておく時は御主君のお爲にならぬと承り、御異見いたすにいたされず、御武運拙くわが夫が、もしお討死でもなさるれば、共に殉死をいたしませうと、覺悟いたせし胸の內、御推量なし下さりませ。

惟光　〽つらき別れの壁訴訟、心を察し惟光が、わざと用事を言ひ拵へ、（ト惟久思入あつて、）靜江殿へ御無心ながら、湯を一杯所望いたす。

靜江　畏りましてござりまする。

〽用事を機に立て行く。（ト靜江思入あつて奥へ這入る。）

〽跡に惟光座を進め、

惟光　こりや弟、只今そちが言へる如く、天下の爲めにならざる故、一命惜しまず家を捨て、害を除かん赤心は、兄もけなげと存じをるが、無道の政事を取行ふ執權故に討たんと計る、その棟梁は何者ぞや。それに心が附かざるか。

惟久　その棟梁こそ別人ならず、泉小次郎親平にて、それに附添ふ阿靜坊安念法師の奔走にて、有志の面々竊に募り、君恩報ずる企を、心附かぬと仰せあるは。

惟光　さゝ。その兩人こそ執權の權威を奪ふ謀叛人、それに心が附かざるか。

惟久　えゝ。なんとおつしやる。（ト是れより誂への合方になり、）

惟光　只一向に親平を、謀叛人と申しては御身も合點が參るまいが、われも御身の兄と生れ、目上と呼ばる、年中悲だけ、つら／＼思慮をめぐらすに、天下の政務を司る二代の執權北條家は政子尼

公の御緣といひ、當將軍家の伯父に當り、勢日々に盛んなれば、權威を妬むもの多く、既に早春鶴ヶ岡にて、義時公を討たんとせし、秩父浪士も事成らず、空しき最期を遂げたるを、世人舉つて愁傷なす、その虛へ附入り大義を唱へ、血氣にはやる壯士等を、同志にかたらひ事を計る、その內實は親平が、叛逆謀叛に疑ひなしと推察なすは外ならず、親平事は信州にて僅かな莊を領するもの、それに附添ふ安念儀は、叡山に於てその以前研學せしとは申せども、智識と呼れし僧にもあらず、五戒を保つ沙門の身で、下萬民の困惑なす兵を起して動亂さす、その奔走をいたすなどゝは、賣僧の惡名遁れぬところ、且つ小次郎親平がかゝる大義を思立ち、天下の害を除くとあらば、大江殿なり和田殿なり、その棟梁に賴みてこそ、誠の忠義と呼はれんが、小身ものゝ分際にて、自ら同志の將となり、有志のものを募るなどとは、片腹痛き此の企、御身も三浦の一統にて名家と呼ばるゝわが舍弟、彼等如きに欺かれ、荷擔いたすは成人氣なし、篤と分別いたしてよからう。

〽理非明白に言諭す、兄の異見ぞ賴もしき、八郎實にもと悟れども、誓ひし事の破られず、

ト惟久思入あつて、

惟久　はゝツ、お情厚きその御異見、膽に銘じて有難く、今々思ひ當りますれば、成人氣なしとは心附

けど、同盟有志の壯士等と、假令如何なることありとも、心變ぜぬ盟約いたし、誓紙血判仕り武士の神文いたせし上は、善惡共に此度の大義に荷擔いたさねば、表裏の武士と世の嘲り、またた棟梁親平に、謀叛の色が見ゆる時は、欺かれたる腹癒せに、彼を討取り叛逆に、與せぬ潔白立てますれば、兄の情と思召し、此度の密事の漏れざるやう、お聞流し下さるやう、偏に願ひ奉る。

惟光　いやその儀は相成らぬ、假令潔白立つるとも、謀叛と知つて親平へ、荷擔なしては武士の恥辱、安念如きが舌頭に、欺かれしと言はれなば、その方ばかりの恥辱でなく、由利の家名の恥辱ゆゑいざ速かに改心せよ。さなくば兄が此場にて、成敗せねば相成らぬ。

惟久　すりや兄上には北條の、權威に恐れ媚び諂ひ、弟を成敗なされても、暴威に募る義時へ、隨身なさる、御所存なるか。

惟光　いや諂ひは致さねど、執權暴威を揮ひなば、大江殿なり和田殿なり、君へ願つて征伐なさん。今泰平の時なるに、兵馬を動かすその時は、實朝公へ不忠となり、先祖へ對し不孝ゆゑ、兄弟たりとも捨ておかれぬ。

惟久　しからば拙者が親平へ同意なしたる身の不幸、誓ひを立てし上からは、今更變心いたされねば、同志のものへの言譯に、成敗うけて相果てん。

惟光　おゝ、改心せねば是非なきことぢや。

惟久　いざ〳〵成敗いたされよ。

惟光　家のためには替へられぬ。

〽義をつらぬきし兄弟が、あはやと見えし覺悟の體、靜江は一間を走りいで、

ト此内惟久首を差延べぢつと思入し惟光差添を拔きかけきつとなる。此時奥より以前の靜江出で此中へ割つて入り、

靜江　まづ〳〵お待ち下さりませ。最前よりの御異見を伺ひましてござりまするが、兄君さまのお詞に少しも御無理はござりませぬ。そりやもう一旦泉殿へ、御荷擔なさるお心にて、神文までも取交し誓ひをお立てなされし故、今更御違變なされましては、一味同意の方々に、濟まぬとお思ひなされませうが、お家のお恥になることを知つて御荷擔なされては、御先祖さまに濟みませねば、御改心なし下さりませ。左樣でなくばわたくしも、此場で自害を致しまする。死ぬるも活かすも家國や、天下のお爲めになることなら、さら〳〵厭ひはいたしませぬが、よしなき事にて一命捨つるは口惜しうござりまする。

〽事をわけたる貞節の、戒めの詞兄は猶、心いらだち詰寄つて、

ト惟光思入あつて、

惟光　こりや弟、連添ふ妻迄理を諭し、かゝる異見を致すのに、是れでもそちは改心せぬか、命惜しさに改心を勸むるやうに思はれんも、二人の手前歎かはしい。われも是れにて切腹なし、共に冥土へ赴かん。

靜江　すりや兄君にも御切腹を、遊ばしまするお覺悟なるか。

惟光　おゝ、冥土の魁いたして見せん。

〽素袍はねのけ差添を、拔かんとする手を押し止め、（ト惟久よろしく留める。）

惟久　あいや兄上お待ち下され。

惟光　然らばそちは改心するか。

惟久　さあ、それは。

靜江　此身も自害いたしませうか。

惟久　さあ、それは、

惟光
靜江　さあ、

惟久　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

惟光　義に強いのみが武士ではない。智略の掛引辨へをらぬか。

〽兄と妻とにせり詰められ八郎是非なく誓ひを捨て、（ト惟久思入あつて、）

惟久　は、ッ、今ぞ同志の列を漏れ、改心いたすでござりませう。

靜江　すりや、御改心なされまするか、え、、お嬉しう存じまする。

惟光　然らば汚名を雪ぐやう、鎌倉御所へ訴人せよ。

惟久　すりや、此上に拙者めが。

惟光　さ、誓ひを破りしその上に、訴人いたさば同志のものに、卑怯と呼ばれ人外なりと嘲られんは目のあたり、心苦しく思はんが、名義を表に壯士を欺き、淸き家名をむざ〳〵と、穢す罪科は輕からず、それゆゑ御所へ訴人なし、その身の罪を免れるが、惡事と知らず欺かれ荷擔なしたる身の潔白、親平安念兩人に恨みを返す腹癒せなり。

惟久　そは兄上の仰せながら、謀叛と悟れどその證跡、いまだ見出せし譯にもあらず。名義を表にいたすにせよ、天下の爲めに執權を、討たんと計る企ゆゑ、今某が變心なし、鎌倉御所へ訴人せば、あれ見よ由利の八郎は、命惜しさに變心なし、その身の罪を免れんため、訴人をせしと世の

人口、末代までの恥辱ゆゑ、その儀計りは御容赦下され。

惟光　何さまそれも尤もなり。然らば訴人をせしことは、深く包みて親平か賣僧の安念捕縛なし、他より漏れしと言ひ拵へ、その方諸共詮議いたせば、謀叛の根ざしと相知れなば、その時こそはまつかくと訴人の事をいひ聞かせ、欺かれたる腹癒せいたせ。

惟久　そりや早親平安念が、白狀なせしその上では、假令訴人をいたさうとも、又變心をいたさうとも卑怯と嘲るものもなく、拙者に於ても遺恨の腹癒せ。

惟光　しかし謀叛と知れし上、そちが訴人をいたせしと、鎌倉御所へ進達なすに、なんぞ證據が欲しいものぢや。

惟久　それぞ同盟有志のもの、荷擔をいたすその折に、誓紙血判いたしたる、連判狀を易々と、取得まするが證據の一つ。

惟光　して〱それは如何にして。

惟久　その連狀は安念が、味方を募るそのために、いまだ所持してをる筈ゆゑ、彼を欺きやす〱と、取得る工夫は手裏にあり。

惟光　して又取得る工夫とは、いかなる手段か言聞かせよ。

惟久　その儀に、豫て親平が、千葉之介成胤殿を同志の内へ引入れんと、懇望なしてをることそ幸ひ、かの邸宅へ安念を、欺き伴ひ參りなば、必ず連狀手に入らん。

惟光　む、誠にそれぞ妙計なり、しからば是れより千葉殿へ、我は直に立越えて、その密計を牒し合はさん。

惟久　又拙者めは安念の、宅へ參つて千葉殿を、かたらひ置きしと僞りて、跡より伴ひ立越さん。

惟光　しからばその節連狀へ、血判なさんと取出させ。

惟久　直に召捕るお手配りに、

惟光　油斷を見すまし、

惟久　拙者諸共、

惟光　どうぞ首尾よく、

兩人　やりたいものぢや。

〽早打解ける兄弟の、睦み合うたる密談に、妻はやう／＼安堵の思ひ、

ト三人よろしくこなしあつて、

靜江　なにかの事に取紛れ、兄君樣へこがし湯を差上げまするを失念仕りました。暫らくお待ち下さ

りませ。

〽言はんとするを、

惟光　いや、その所望は預けて置きたし、心急き故千葉殿へ、片時も早く立越えん。

惟久　左樣ござれば御苦勞ながら、

惟光　そちも首尾よく致しくりやれ。

〽密意を約し惟光が、立つを見送る奥方の、會釋を止め、

ト惟光、花道の方へ行く、靜江附いて行かうとするを。

そのまゝ〳〵。

〽立歸る。（ト惟光よろしく花道へ這入る。）

〽跡に惟久心急き、打ちうなづいて立上るを、

靜江　まづ〳〵暫らく、我夫には、お待ちなされて下さりませ。

惟久　いや猶豫なすべき所でない。他出の服を是れへ持て。

靜江　只今持參いたしまするが、いよ〳〵あなたは御改心遊ばしましてござりまするか、但しはお心變じては同志の者へ濟まざると、兄上さまを言ひ繕ひ、お歸しなされしお心か、それをお聞かせ下

さりませ。

惟久　やゝ、何ゆゑに兄上をお騙し申して歸さんや、今々思へば安念めの、布留那の辯に欺かれ、謀叛なりとは知らずして、實朝公のお爲めと思ひ、荷擔致せしがわが不覺、今にぞ惡事の根ざしを聞出し、彼めに恥面かゝせてくれん。

靜江　さは言へいかに御計略とて、安念どのと諸共に、縛についての御詮議を、お受けなさると聞くからは、假令暫時の内たりとも、繩目の恥の御苦勞が、おいたはしうてなりませぬ。

惟久　いやそれも天下の爲めなれば、少しも厭ふ心はない。無益の心配いたさずと、衣服を早く持參いたせ。

靜江　心得ましてござります。

〽衣服をとりに立つて行く、跡へ取次ぐ下侍。

ト靜江は奥へ這入る。ばた〳〵になり、花道より幕明の下侍出來り、花道の下に居て、

侍　はツ、我君さまへ申上げまする。御直談の儀が致したいと、阿靜坊安念さま、只今御入來にござりまする。

惟久　何、安念どのが參りしとな。直に是れへ御案内いたせ。

侍　はッ。（ト引返して這入る。惟久思入あつて、）

惟久　はて、よい都合も、（トうなづくを、道具替りの知せ、）
あるものぢや。

〽待つ間遲しと、（ト床の三重にて此道具廻る。）

（千葉之介邸宅の場）――本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し三方共月星の紋散し、白地の襖、日覆より同じく大欄間を下し、舞臺花道共薄縁を敷詰め、總て千葉家廣間の體。爰に以前の由利左衞門尉惟光上手に住ひ、下手に千葉之介成胤同じく烏帽子素袍小刀にて住ひ、兩人密談の見得、誂へ本調子の合方にて道具留る。

成胤　御密談と仰せあるゆゑ、他聞を憚り廣間にて、事の仔細を承りしが、容易ならざる天下の一大事、よくぞ御舍弟八郎殿に御改心を進められ、手前へ早速お知せあつて、御内談下されしぞ。然らば賣僧安念を、わが宅へ招きし上、一味同意の體にもてなし、かれが所持なす連判狀を首尾よく取り得御舍弟諸共、捕縛いたして詮議を遂げ、謀叛の根ざしを白狀させ、鎌倉御所へ差出す、お手筈萬端なされしよな。

惟光　程なく舍弟八郎が、かの安念めを同道いたし、御邸宅へ推參いたせば、其折は一味の體に見せか

け、一味徒黨の連狀へ、血判召さるゝつもりにて、連判狀を取出させ、首尾よく取得しその上にて、合圖をなして御家臣に、舍弟諸共安念をお召捕らせ下されなば、將軍家への御奉公、萬事よしなにお賴み申す。

成胤　その儀は承知いたしてござるが、改心召されし御舍弟を、共に捕縛をいたさするは、近頃もつて氣の毒千萬。

惟光　さゝそれが一つの計略にて、舍弟諸共縛しませねば、奸智にたけし安念ゆゑ弟が變心いたせしと早くも悟り詮議なすとも容易に白狀いたすまじ、それゆゑ貴殿の御計略にて、荷擔いたすと彼を呼寄せ、捕縛召されし體になさば、素より一味の弟ゆゑ、かれ又苦肉の策をめぐらし、問はず語りに安念めに、白狀さする手段もござれば、御斟酌なく御家臣に、お指圖萬端お賴み申す。

成胤　すりや御舍弟には同意と見せ、繩目も恥辱もお厭ひなく、惡事をお見出しなさるとな。

惟光　それぞ一旦謀叛と知らず、荷擔なしたる申譯、一つの願ひは安念に、白狀させしその上にて、取得し連判證據となし、荷擔のものを召捕りしその功にめで弟の、罪を御赦免下さる樣、御前よしなにお計ひ下されい。

成胤　その儀は手前の身にかへても、きつと赦罪をおさせ申さん。何は格別召捕る手筈を只今の內せね

ばならぬ。

惟光　承れば安念めは、出家に似合はず力量勝れ、手剛き奴との風說ゆゑ、そのお積りにて御用意めされい。

成亂　假令何程安念が、力量勝れをるとても、力士を選み多人數にて、不意に迫つて召捕る時は、よも仕損ずることはあるまじ。

惟光　然らば拙者が貴殿に代り、御家來衆へお賴み申さん。

成亂　何卒よしなに、お指圖下され。

ト此時花道揚幕の杉戸を明け、侍一人走り出で、花道下に居て、

侍　はッ御主君へ申上げます。由利家の御舍弟八郞樣、安念と申す法師を連れられ、只今御入來なされましたが、是れへお通し申しませうや、此儀お伺ひ申しまする。

成亂　その入來待兼ねをつた。粗相なきやう御案內いたせ。

侍　はッ。（ト引返して這入る。）

惟光　扨は弟が欺きおほせ、もはや召連れ參りしか。

成亂　然らば御身は召捕の、お指圖萬端お賴み申す。

惟光　その儀は萬事承知いたした。左樣ござらば成胤どの。
成胤　又もや後刻、御意得申さん。
惟光　どりやお指圖をいたさうか。

ト唄になり、惟光は下手襖の内へ這入る。跡に成胤思入あつて、

成胤　秩父浪士の凶變より、穩かならぬ世の形勢、それと申すも執權の權威を妬むもの多く、義時どのを憎むがゆゑ、その虛を計り親平が企てなせしものなるか、實に高木の茂り程、風がさからふ道理なるわえ。

ト爰へ花道より、以前の侍先に案內して附添ひ、惟久先に安念出來る。成胤此體を見てよろしく出迎ひ、

これは〳〵八郎殿、豫て御身がお話しありし安念殿を御同道よな。よくぞ早速御入來あつた。そこは端近、先々是れへ。

惟久　御丁寧なるお出迎ひ、近頃恐入つてござる。
安念　拙僧事も御當家へ、參上いたすも初めてにて、八郎殿のお執成し、何卒よきにお頼み申す。
惟久　卽ちあれが當家の御主人、成胤どのでござるゆゑ、仰せに任せお通りなされい。

安念　沙門の身なれば上座ながら、失禮の儀は御免下されい。

ト案内の侍附いて兩人、舞臺へ通り、安念、惟久上手へ住ふ。成胤もよろしく住ひ、

成胤　それ、お持成しの用意いたせ。

侍　はッ。（ト下手へ這入る。）

成胤　すりや、それなるが豫て承りし安念殿よな。手前は當家の千葉之介、以後は別段御疎意なく、お交りの儀を頼み申す。

安念　これは〳〵千葉殿には、御丁寧なる御挨拶、その儀は豫て拙僧より、願ふところの御面謁。

惟久　先刻御當家千葉殿より、お使者到來いたせしゆゑ、安念殿のお宅へ立越え、早速吉事の御返事を申し述べんと存ずる折から、折よく貴僧の御入來はよき吉兆と打ち悅こび、直樣お連れ申してござる。

成胤　それぞ誠によき御都合、手前に於ても祝着至極。

安念　紙面をもつて泉殿へも、卽刻知らせ遣しますれば、

成胤　書翰を御披見下されなば、是れも嘸かし御喜悅ならん。

ト爰へ下手より侍二人、高茶臺へ茶碗を載せ持ち出で、安念惟久の前へ置き、下手へ下り平伏なし、

侍　なんぞ御用は、

兩人　ございませぬか。

成胤　別段に用事はなき故、誰も參らぬやうに致せ。

兩人　はッ。（ト下手へ這入る。成胤思入あつて、）

成胤　他聞を遠ざけ此席にて、お話し申せば漏るゝ筈なし、心置かれず御兩所には、御存意の程發言下されい。（ト是れより合方きつぱりとなり、）

惟久　疾よりいたして泉殿や、是れにをらるゝ安念殿に、お頼み受けてはをりしかど、深くも祕する企ゆゑ、容易に發言いたされねば、毎度當家へ參上いたせど昨日までもかの一儀は、申出さずに差控へ貴殿の御樣子伺ひしが、執權職の暴威を憎み、討たんと計る思立ちは、是れ幸ひと泉殿の企の儀を明し申し、合體の儀を願ひしところ、早速御承知を下されて、お使者をもつての御挨拶一統祝着いたせしかど、猶此末に盟約を違へぬ神文願ひたく、則一味の連狀を、安念殿が御持參あれば、此儀御承知下されい。

成胤　その儀は御身が仰せなくとも、天下のための御企、いかで違變がござらうや、誓紙血判承知いたした。早速連狀内見いたさう。（ト是れにて、安念悦ばしき思入にて、）

安念　はゝツ、忝き御承引、日月いまだ地に落ちず、鎌倉殿の御武運を守らせ給ふゆゑなるか、親平殿を棟梁に頼みし此度の企も、招かずいたして徒黨加はり、佐殿以來鎌倉の君恩蒙むる人々には、過半大義へ御同意下され、名家と呼ばるゝ千葉殿にも、はからず合體召されしは、龍に翅を得たるも同然、誠にもつて此樣な大慶至極な儀はござらぬ。

惟久　何は格別安念殿には、かの連狀を成胤殿へ、お見せなされて誓ひの血判、御落手あつて然るべし。

安念　いかにも左樣いたさんが、味方のためには六韜三略、おろそかならぬ連狀ゆゑ、あたりへ心をお附け下され。

成胤　いや、かくあらんと存ぜしゆゑ、客來なぞのあらざるやう、門の通路を止めおいたれば、お心置きなくお見せなされい。

安念　しからば取出し、御覽に入れん。

ト誂への合方になり、上手に惟久、下手に成胤、眞中にて安念懷中より連判狀を出し開き見せる。成胤是れをよく〳〵見る事あつて、

成胤　こりや是れ、荏柄を初めとして在鎌倉の壯士等は、親平殿へ一味合體、

惟久　この同勢にて北條の、屋敷の四方を取圍み、亂入なして討取りなば、

安念　天を翔けるか地を潜り、落延びたらば知らぬ事、やはか爲損じ申すべき。

惟久　いで〳〵此場で成胤殿、

安念　誓ひの血判いたされよ。

成胤　只今姓名認め申さん。

ト件の連狀を卷込み、白紙のところだけ出して前へ置き、思入あつて、

やあ〳〵、者共いづれにある。申付けたる硯を是れへ。（ト上下の襖の蔭にて）

力士八人　はあッ。

ト聲するゆゑ、安念恟りして、

安念　やゝ、多人數のあの聲は。

ト惟久も恟りせしこなしにて、

惟久　他聞があつては一大事。

ト連判狀を取らうとする。爰へ上下の襖を明け、褌鉢卷小袴の力士八人、十手を持ち出で、左右より取卷き、

○　謀叛へ與せし八郎惟久。

△　徒黨をあつむる賣僧の安念。

□　手捕にいたす、

八人　覺悟いたせ。

ト是れにて兩人扨はといふこなしにて、

惟久　すりや千葉殿が親平殿へ、合體なすと言はれしは。

安念　邸へ招き兩人を、召捕る手段であつたるか。

ト此内成胤、件の連判狀を卷納め思入あつて、

成胤　此程よりして泉親平、在鎌倉の壯士等を、竊にかたらひ企てある由世の風說に承り、心を勞するその折から、由利八郎が日每に入込み、わが胸中を探る樣子、早くも悟り合體なさんと今日二人を呼寄せしは、此連狀を取得んため、遁れぬ所と捕縛を受けよ。

ト是れにて惟久、わざと無念の思入にて、

惟久　とは知らずして安念殿を、伴ひ來りむざ〳〵と、欺かれしは口惜しい。

安念　さう聞く上はその連狀、取戾さいでおくべきか。

ト成胤の持ちし連判狀を取りにかゝる。是れにて力士四人打つてかゝる。惟久もわざと、成胤へかゝ

ろを力士四人支へ、是れより双方本手組討の立廻り十分あつて、トヾ力士八人にて兩人を組伏せる。

此内成胤は連判状を懷中なし、

成胤　それ、猶豫いたさず捕縛いたせ。

八人　心得ました。

ト惟久、安念へ繩を掛ける。兩人無念の思入にて、

惟久　彼等如きに後れをとり、捕縛を受くる吾ならねど

安念　多勢をもつて不意を打たれ、不覺をとりしは口惜しい。

成胤　北條殿を討たんと計り、同志を集むる謀叛の擔人、一應某取調べん。それ、廣庭に引据ゑよ。

八人　はッ。

ト立ちかゝろ。是れにて兩人無念のこなしにて、

安念　返すぐも、

兩人　殘念至極。

力士　やあ、きりくと、

八人　歩みをらう。

惟久　やあ、口を噤んで、

兩人　控へてよからう。

ト唄になり、兩人悠々として繩附きのまゝにて先に立ち、是れを力士八人繩をとり附添ひ花道へ這入る。上手襖を明け、以前の惟光出で是れを見送り、成胤と顔を見合せ、

惟光　千葉之介、御苦勞千萬。

成胤　然いふ御身も御苦勞至極。

惟光　して連判へ加はりし、その姓名は誰々なるや。

成胤　されば手前も驚きしは、荏柄の平太を始めとして、和田の一族兩三名、加はりをるは不都合至極。

惟光　はて是非もなき壯士のはやり雄、それと知れなば義盛殿、嘸迷惑をめさるであらう。

成胤　それもことなく納りなば、赦罪を願ふは手前の役。

惟光　しかし此の事同志のものへ漏れ聞えなば一大事、御門を閉めて通路を止め、他へ漏らさぬが肝要なり。

成胤　いかにも左樣いたすでござらう。

惟光　誠にもつて安念は、出家に似合はぬ大力量。

成胤　かれも改心いたしなば、天下のお爲になるべき奴。

惟光　沙門に惜しき、

ト兩人顏見合せ下に居るを、道具替りの知らせ、

兩人　奴めでござる。

ト此模樣よろしく、時計の音にて道具廻る。

(千葉家庭先の場)――本舞臺四間通し高足の二重、本庇本緣附き、眞中書院障子、上手一間塗骨の障子屋體、二重の下手奥庭の片遠見、同じく正面上の方九尺の床の間、此下地袋違ひ棚、下の方一面白地の襖を立切り、出這入あり。平舞臺下手能き所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、その外庭の景容よろしく。總べて千葉家庭先の體。爰に以前の惟久、安念下手白梅の大樹へ繩にて縛られしまゝ、氣絕をして居る。此見得、床の送りにて道具留る。と直に床の淨瑠璃になり、

〽きのふ迄堅く誓ひし梅が香の、よそへ洩れぬも日の影に、忽ち花の綻びて、呵責の笞こらへ兼ね、氣絕の體にその場を退れ、八郎川邊を打見やり、

ト此內、惟久繩附きのまゝ起上り、四邊を見廻し思入あつて、

惟久　安念殿々々、見張の者も休息なし、只今是れに居らざれば、もはや氣遣ひござらぬぞ。

〽言ふにこなたも起上り。（ト安念も起上り）

安念　言ひ合はさねど貴殿も我も、呵責を遁れんその爲に、一時氣絶の體をなせしが、見張りのものも休息なせしか。

惟久　こちらも暫く休息なさん。

安念　誰が訴人をなしたるか、貴殿とかゝる縛に就き、殘念至極な事でござる。

惟久　いかにも貴僧の言はるゝ如く、十が九は仕果せしに、思ひがけなき今日の仕儀、親平どのを初めとして一味なしたる者の不運、言ふも詮なき事ながら、（ト變つた合方になり）そも此度の企は、天下の爲に北條を、討つは名義の表向き、その內實は義時を、討滅すを功となし、執權職を泉殿が握る望みと察せしゆゑ、われも三浦の一統を、司らん望を立て、一味合體いたせしが、かくおめ〱と縛せられ、露顯に及ぶ殘念さ。もはや猶豫のならざれば、繩ぬけなして遁れ出で、一味徒黨の家々へ、討手向はぬその內に、兵士を集め討つて出で、敵たふものは誰れかれと、容赦致さず討取つて、運に叶はゞ鎌倉の天下を奪ひ銘々に、橫領なしては如何でござる。

〽思ふ所を八郎に、先を越されて安念も、包む底意を打あかし、

ト安念四邊へ思入あつて、

安念　おゝ頼もしきその所存、言はるゝ如く義時の權威に誇るを種となし、天下を掌握いたさんと、先つ頃より信濃なる、親平殿へ謀叛を進め、愚僧は諸國を經歷の行脚の僧と相成りて、味方を集め此大望。

惟久　扨は御身も泉殿も、北條義時討ちし後、天下を握る御所存なりしか。

安念　深くも祕するわが底意、お明し申すも賴もしき、同意の御身と思ふゆゑ、警護の奴僕參らぬ內、いで〳〵此場を落延びん。

惟久　言ふにや及ぶ、まツこの通り、

〽由利は素より空繩の縛め解いて立ちかゝる。安念もおくれじと繩喰ひ切らんとする所を、思ひがけなく八郎が、むんずと組んで動かせず。

ト此內惟久我手に繩をぬけ立上る。安念も繩を喰切り拔けようとするを、惟久、安念を引据ゑきつとなる。安念合點の行かぬ思入にて、

安念　八郎殿、こりや拙僧を何としめさる。

惟久　謀叛を企つ賣僧の安念、欺かれたる返報に、汝が底意を聞糺し、鎌倉御所へ引立て行かん。

〽安念扨はと打驚き、

安念　すりや八郎には陰謀の露顯となりし期に望み、卑怯未練に變心なし、罪を逃るゝ所存なるか、見下げ果てたる人畜めが。

惟久　愚かや安念よツく聞け、卑怯と罵る汝こそ、見下げ果てたる賣僧の惡僧、沙門の身にてありながら、謀叛を企て親平を棟梁となして味方を集め、權威に誇る北條を討つて天下の害を除くと、申すは名義の表にて、其內實は鎌倉の執權職を討ちし上、天下を奪ふ謀叛の根ざし、是れまで計り白狀させしは、鎌倉殿への申譯、自業自得と觀念せよ。

〽罵るありさま尻目に掛け、

〽繩先とつて身構ふれば、安念かゝゝ、安念かんらと嘲笑ひ、

ト惟久梅の大樹へ結びある安念の繩先をとつて持ちきつとなる。安念思入あつて、

安念　むゝはゝゝゝ、よくぞ計つて欺きしぞ。誓ひの血判いたしながら、變心なして我を欺き、その身の罪を遁るゝ氣でも、われ又汝が同意と言ひ立て、謀叛の根ざしある事は、金輪奈落白狀せねばどこがどこ迄罪は同然、何れへなりと連れ參れ。

惟久　やあ、謀叛の根ざしあることを、一旦白狀いたしながら、申さぬなどゝは、のぶとき奴。

安念　いや今言つたは僞りだ。謀叛を企つた覺えはない。

惟光　その聞役は是れにあり。

安念　なんと。

〽一と間の障子引明けて、立出づる左衛門尉、（ト上手より以前の惟光出る。惟久見て、）

惟久　扨はそれにて兄上には、始終の様子お聞きありしか。（ト是れより下座の合方になり、）

惟光　かく言ふこともあらんかと、あれなる一と間で先刻より、聞役なせし上からは、最早如何やう陳じても、叶はぬ所と諦めよ。

安念　いやその證人役に立たぬ、承れば八郎が兄と申せば同姓の、左衛門尉惟光ならん。縁者の證據に安念を、罪に落して弟の、罪科を救ふ所存ならんが、遁れぬ證據は千葉之介が、われを欺き取上げたる、連判状に惟久の姓名記しある上は、同意の罪は遁れぬわえ。

惟光　すりや汝には飽迄も、執權職たる義時殿を討たんと計りし事のみにて、叛逆謀叛を企てし覺えはないと申するか。

安念　おゝさ、その身執權の我威をふるひ、今三代の將軍たる、實朝公を幼年なりと蔑にする無道の義時、それゆゑ彼を討滅し、大小名の意中を安んじ、天下を治めん爲ばかり、謀叛を企つなんぞとは、此身にとつて覺えない。

惟久　やあ汝如何程陳じるとも、義時殿を只一人討たんと計るに多人數を、味方に語ふいはれなし。

惟光　殊更もつて執權を、討たんと計るは僻事なり。早春社參の凶變すら、危急を遁るゝ運あれば、

惟久　事ならずして討死せし、秩父浪士がよき手本。

惟光　汝も今より改心なし、その身の赦罪を願うてよからう。

安念　やあ改心とは汚らはしい。暴威をふるふ北條を、高運なりと賞するは、片腹痛き諂ひ武士、八郎とても義時を、討たんと計る連狀へ、血判なせし上からは、變心なしてもなさいでも、罪は遁れぬ一味の證跡。

惟久　いや、その同罪も改心なし、汝の惡事を見出せしからは。

惟光　訴人の功にて赦罪を願ひ、家安泰は必定なり。

安念　いや訴人とは事をかしや、いまだ白狀いたさゞる、此安念を謀叛なりと、訴へ出づるは粗忽千萬。

惟久　やあ、飽く迄陳ずる不敵の安念、いで白狀を致させくれん。

〽かたへに落ちゝる綏棒を手早く取つて立掛る、うしろの方に主人の聲、

ト惟久よろしくこなし、此留りうしろにて、

成胤　あいや八郎、しばらく待たれよ。その詮議には及び申さぬ。

惟光　やゝ、あの聲は、

惟久　成胤どの。

〽襖左右へおし開かせ、當家の主人千葉之介、威儀改めて立出づれば、安念見るより氣もいらだち、

ト此内正面の襖を引拔き、うしろ奧殿の遠見になり、以前の千葉之介成胤、件の連判狀を持ち、侍二人附添ひ出る。安念此體を見て、

安念　かゝる手段のあるとも知らず、千葉は舊家に同盟へ、加へんものと心を碎き、血判さする期に臨み、徒黨の連狀むざ〱と、奪ひ取られしか口惜しい。

〽血走る眼に睨め附くれば、成胤につこと打笑みて、

成胤　ほゝお、汝が辯に惑はされ、天下のお爲と一途に思ひ、荷擔なしたる壯士等に、近頃以て氣の毒ながら、謀叛と知つて改心なし、赦罪を願ふものどもは、又寛典の御沙汰あらん。則ち是れなる連狀を、證據となして訴人せし、八郎事は執權の、執成しにより赦罪となりたり。親子はじめそれ〲へ、討手を一時に差向けたれば、一味の者は一人殘らず、縄目の恥辱は遁れぬ所、安念汝も無駄骨折り、嘸殘念にありつらん。

安念　扨は卑怯な八郎めは、もはや赦罪に及びしか。
惟光　是れと申すも千葉氏の、お執成しゆゑ身の安泰。
惟久　いで此上は速かに、伏罪なして最期を遂げよ。
安念　やあ然言ふ汝を安念が、恨みの念にて取殺さん。
成胤　何は格別八郎の訴人によつて事顯はれ、
惟光　天下の亂れとなるべきを、
惟久　無事に納まる上からは、
惟光　下萬民の困苦も遁れ、
惟久　萬歳謳ふ、
皆々　鎌倉山。
〽四海の波も穩かに、靜まる御代をぞ。
ト此内皆々よろしく居並び、
安念　思へば〳〵。
ト繩付きの儘、書院階子へ踏掛け、成胤の方へ行かうとするを。

惟久　えゝ、控へをらう。

ト縄を引くゆゑ、安念平舞臺へどうとなり、無念のこなしよろしく。惟久は此體を見てにつたり笑ふ。二重眞中に成胤、上手に惟光立並び、皆々引張りよろしく。

〽祈りける。

ト床の段切にて、

幕

三幕目

荏柄天神召捕の場
由利屋敷闇殺の場

〔役名〕——荏柄の平太胤長、泉の小次郎親平、由利八郎惟久、千葉の臣葛飾左衛門、泉の郎黨諏訪市左衛門、同小室次郎太、同更科三平、同須坂四郎次、同飯田五郎、荏柄の臣梅森市平、同香取傳次、同星合四郎太、由利の臣荒浪磯藏、同岩淵喜四郎。惟久の妻靜江、其他。〕

(荏柄屋敷廣間の場)——本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せて九尺の床の間、是れへ唐畫山水の大幅を掛け、此前香爐の置物、是れにつゞいて上下折廻し銀地の襖、出這入りあり、日覆あり同じく大欄間を下し、舞臺花道とも薄縁を敷き、總て荏柄平太屋敷廣間の體。爰に雪洞つきの燭臺を左右に灯し、

荏柄の平太

茬柄の臣梅森市平、香取傳次、星合四郎太袴一本差し近習にて、書院火鉢に當つてゐる。此見得宜しく、時計の音調べにて幕明く。

市平　なんと何れも、先達より毎夜となく、阿靜坊安念どの、君へお逢ひを願はれて、深更に及ぶ迄御密談ある御樣子なれど、お人拂ひに我々の、耳へは隣張入らぬが、餘程祕密の事と思ふが、いづれも方には其譯を、少しは御存じでござるかな。

傳次　是れと申すも頼朝公、薨御この方國政を、尼公が蔭でお指圖ゆゑ、此擧につけて北條家が、外戚たるの威をふるひ、政事にとかく依怙が多く、創業以來軍功ある、忠臣無二の大小名を、臣下の如くもてなすゆゑ、皆憤つて鎌倉は、穩かならぬと申す噂。

市平　それゆゑ正義の武士は、皆和田殿へ隨身なせど、侫人讒者は媚び諂ひ、北條殿へ立入れば、自づと呉越の思ひをなし、兩家の確執日ならずして、いづれ破裂をいたすでござらう。

傳次　高い聲では申されぬが、女さかしくして牛賣り損ふ。是れと申すも尼將軍、お政事向へ口出しをなされるゆゑのことならんが、此虚を測り義時どの、暴威をふるふ我儘氣儘。

四郎　さすれば主君胤長公にも、是等の事を憂ひたまひ、安念法師と密々に、事を計ふ思召にて、他聞を憚り奥殿にて、御内談があるのであらうと、某は察してござる。

市平　さうなる時はわれ〳〵が、再び見せる腕こぶし、
傳次　兎角世間が穏かでは、出世の遅い此世界、
四郎　少しも早く陣鐘太鼓の、めざましい音が、
三人　聞きたうござる。

ト此時花道より袴裝の侍出來り、花道にて、

侍　はッ、申上げます。只今千葉殿より至急のお使者とあつて、我君へ御面會を願はれますが、いかが取計ひませうや、お伺ひ申上げまする。
市平　夜中と申し千葉殿より、わざ〳〵君へ至急の事とて、
傳次　御面會を願はるゝは、定めて樣子のあることならん。
四郎　暫時お使者にお控へあるやう、お使者の間へお通し召され。
侍　はッ。（ト引返して這入る。）
市平　然らば此由我君へ、
傳次　奥へ參つて、
三人　申しあげん。（ト立たうとする。此時奥にて、）

平太　いや參るに及ばぬ、千葉の使者へ胤長參つて面會なさん。
市平　あのお聲は、
三人　我君樣。
ト誂への合方調べになり、奥より荏柄の平太胤長好みの鬘、袴一本差しにて、跡より小姓一人太刀を持ち、附添ひ出來り、上手に住ふ。近習三人は平伏する。
平太　夜陰に及び千葉殿より、至急の使者とは心懸り、片時も早く此處へ案内いたして召連れ參れ。
四郎　はツ、畏つてござりまする。
ト是れにて星合四郎太花道へ這入る。荏柄の平太思入あつて、
平太　豫て同道の由利惟久千葉成胤へ入魂を結び、互に水魚の交りあるゆゑ、此程大事を漏らせしと、由利が詞に聞きたるが、多分はそれ等の事ならん。夜陰を冒し使者を立てしは、近頃信義の至りなり、無禮なき樣心をつけよ。
市平　はツ畏りましてござりまする。
ト調べになり、花道より千葉の臣葛飾左衞門、烏帽子半素袍一本差し、好みの拵へにて、以前の星合四郎太案内して出來り、花道にて平伏する。荏柄の平太是れを見て、

平太　千葉殿より至急の使節、胤長是れにて待受けたり。遠慮いたさず、さゝ、これへ通られよ。

左衛　然らば御免下さりませう。（ト右の鳴物にて四郎太に附いて下手能き所に住ひ）かく夜陰に推參せし某事は、君には未だお目見得せざれど、千葉成胤が身内にて、葛飾左衛門秀國と申す者、以後お見知りおき下さりませう。

平太　いかにも、いまだ面會はせざりしが、豫て其名は聞及べり。して又今宵我が邸へ、かゝる夜中に使節を立てしは、何事なるか此場にて少しも早く申述べよ。

左衛　はッ仰せなくとも此場にて、申上ぐるでござりますが、豫て主人成胤より、機密に渉る一儀ゆゑぢき〳〵に申上げよと嚴しき命ゆゑ、恐れながらお人拂ひを願ひたうござりまする。

ト是れにて平太思入あつて、

平太　おゝ、密事とあれば尤もぢや、こりや近習の者は次の間へ、しばらく爰を退座いたせ。

三人　はッ。

ト近習三人は左衛門へ一禮して、皆々下手襖の内へ這入る。平太四邊へ思入あつて、

平太　して、密用とは何事なるぞ。

左衛　はッ、只今是れにて申上ぐるでござりませう。（ト誂への合方になり、こなしあつて、）先頃よりして

我主人成胤が邸宅へ、阿靜坊安念法師まつた由利惟久どの、度々の御入來にて、豫て公にも御同道ありし泉の小次郎親平殿が、竊に企つ陰謀へ是非とも一味合體せよと、屢々御誘導ありしかど主人は當時の執權職義時殿が威權に恐れ、初めの程はかれこれと、辭して詞に隨はざりしが、當時幕府の苛政を知り、初めて夢の覺めたる如く、北條一家が天下の處置に憤りを發せしより、終に此程一味連判、數ならねども臣下たる某までも力を盡し、親平殿へお味方と、一族すでに三千餘騎、馳加はつて御出馬の先鋒いたす心得にござりまする。

平太　そりや千葉之介成胤殿にも、一味荷擔を召されしとな。

左衛　いかにも御荷擔仕れば、以後は味方と思召し、御隔心なく某へお物語り下さりませう。

ト誂へ笙の入りし合方になり。

平太　成胤殿にも我々が此の隱謀へ加はり給へば、事新らしく申さずとも、臣下の御身も承知ならんが、かく鎌倉の靜謐を、再び修羅の街となし、干戈を動かす所存はなけれど、是れと申すも北條氏が幕府の權を外戚の因みによつて掠奪なし、天下の政事を擅に、處置なすのみか右幕下の御連枝方を暗殺なし、或は刺客を使ふなぞ、奸惡既に顯然たれば、義時始め一家の奴僭に、天誅を加へんと竊に計るを、此程何者が密告せしか、早くも我々が企てあるを薄々さとり、人知れず探索なす

と忍びの者より注進せい、されど名家の千葉殿が一味徒黨に加はれば、龍に翼を得たる心地、親平はじめ惟久安念、さぞ滿足に思ふでござらう。

トよろしく思入にて言ふ。左衞門膝を進め、

左衞 これについて主人より、申附けしは北條家の手配り嚴重ならざる內、事を起さばよろしからんと今宵軍議を決せんものと、竊に千葉の邸宅へ親平殿を始めとして、一味の諸侯駕を枉げられ、只今軍議の最中なれば、胤長公も是れより直に御尊來下さる樣と、則ち成胤申附けしが、夜中とは申し卽刻にて恐入つてはござりまするが、何卒直樣御出馬をお聞屆け下さりますれば、有難う存じまする。

平太 いやそれは近頃易き事、世の譬にも申す如く、先んずる時は人を制す、義時いまだ油斷ある內、事を發せば一擧にして彼が暴威を碎くべし、仰せに任せ胤長も、同道なして千葉殿が、軍議の席へ列なるでござらう。

左衞 そりや夜中をもお厭ひなく、御同道なし下さりますとか。

平太 いかにも天下の安危をも、計る今宵の集會なれば、因循いたすところでなし、直樣貴殿と同道なさん。(ト下手へ向ひ、)誰かある、是れへ參れ。

近習　はあ、（ト是れにて下手より、以前の近習三人出來り。）何ぞ御用にござりまするか。
平太　おゝ今宵至急に千葉殿方にて、朋友等を呼集へ、酒宴の催しある由にて、わざ〳〵使者を立てられたれば、是れより直に御邸宅へ推參なせばそち達は、着替の衣服を是れへ持て。
市平　そりや我君には千葉殿より、
傳次　お招きゆゑに夜を冒し、
四郎　御酒宴の席へ御出とあれば、
三人　われ〳〵お供仕らん。
四郎　いざ御乘馬を引かせませう。（ト立ちかゝるを平太留めて、）
平太　いや〳〵夜會の私事なれば、供廻りには及ばぬゆゑ、忍びに用ゆる編笠と、供は一人で澤山ぢやわえ。
三人　ではござりませうが、それではあまり。
左衞　いやその御心配には及び申さぬ。拙者路次の警護いたせば、必ずお案じ下さりまするな。
平太　我館よりは濱邊傳ひの比企ケ谷ゆゑ、行く道も定めて景色一段ならん、幸ひ庭の折戸を出で、裏の方より忍び行けば、衣服を早く持參いたせ。

四郎　はツ。（ト屋合四郎太奥へ這入る。時の鐘、平太思入あつて、）

平太　今聞ゆるは亥の上刻、夜更けぬ内に支度を調へ、同道なして酒宴の席へ、參らば定めて千葉殿が
　その饗應の厚意を謝し、久方振りにて夜もすがら、お物語をいたすであらう。

左衞　御意の通り主人にも、今宵の酒席を晴れとなし、化粧坂より名妓を呼寄せ、餘興に備へる男舞、
　聊か支度を調へますれば、片時も早く胤長公には、御用意あつて然るべう存じまする。
　　ト此時奥より以前の四郎太服臺へ、誂への素袍を戴せ、同じく編笠をもつて出で、平太の前へ直し、

四郎　いざ、お召換へ遊ばしませう。
　　ト近習三人は平太へ素袍の肩をかけ、平太よろしく素袍を着ながら、

平太　世に頼みある朋友が、打ちくつろいでの宴會に、今宵はゆつくり圓居なし、

左衞　豫ての軍議を、（トきつと言ふと、平太思入あつて、）

平太　あゝこれ。
　　ト左衞門へ目配せするを、道具替りの知らせ、
　さゝ、同道をいたすであらう。
　　ト平太は袴の紐を結ぶ。近習は編笠を持ち下手へ控へる。此見得よろしく、

〽頼みある中の酒宴かな、（と下座の謠ひにて此道具廻る。）

（荏柄天神森の場）――本舞臺後ろ淺黄幕、左右藪疊、舞臺の前へ寄せて丸物松の立木四五本あり、下手能き所に、奉納の石燈籠二基、是れへ灯をつけあり。是につゞいて、荏柄天神の森と記したる石の榜示杭、上下植込みにて見切り、日覆より松の釣枝、捨石などよろしく、總て荏柄天神の森の體。時の鐘、波の音にて此道具納る。と直にばた〱になり、花道より金窪兵部行近、小手膕當、半素袍、大小股立にて、此上へ引廻し合羽を羽織り、三度笠を手に持ち出來り、四邊へ思入あつて、懷中より合圖の呼子の笛を出し吹く、是れにて上下の藪疊の蔭より、小手膕當の捕手六人忍び出で、

捕手六人　兵部樣。

兵部　これ、（ト四邊へ思入して誂への合方になり、）豫て牒し合せし通り、今日千葉の身内たる、葛飾左衞門使者に立ち、軍議と僞りうま〱と胤長ひとり誘き出し、おツつけ爰へ參るであらうが、荏柄の平太は名にしおふ、大力無双の剛のもの、容易な事では搦め捕れず、それゆゑ身共も姿を窶し見え隱れに附けて來たが、騙すに手なしと天神の、森の小蔭に伏勢なし、不意を計るに如くはない。いづれも油斷召さるゝな。

捕一　仰せの通り胤長は、鎌倉名代の剛の者、

二　いつぞや相模の山中にて、大蛇を退治た腕ツぷし。

三　凡人ならぬ力量と、申せど高が人間わざ、

四　執權職の御威勢を、頭に頂くわれ〳〵共、

五　假令鬼神の平太でも、不慮を狙はゞ籠の鳥、

六　やがて是れへ參りなば、手取りにいたして御覽に入れん。

兵部　おゝ、勇ましき各ゝ方、計略通り裏門より、僅か供人一人召連れ、忍び出立で是れへ參れば、最早退れぬ網裏の魚、然し油斷は大敵なれば、必ず彼を逃さぬやう、猶も心を附けられよ。

六人　心得ました。

兵部　どりや網を張つて、相待たうか。

ト右の合方にて兵部向うへ思入あつて捕手六人を同道して上手へ忍ぶ。時の鐘、誂への合方になり、花道より家來一人半素袍股立にて松明を灯し、先に立ち、跡より以前の荏柄の平太編笠、草履、素袍達附、太刀好みの拵へにて、此跡より以前の葛飾左衞門附いて出來り、花道にて、

左衞　最早あれなる森蔭は、則ち荏柄の天神なれば、千葉の邸へ僅かの道、御歩行ゆゑに嘸かしと、左衞門お察し申上げまする。

平太　いや〳〵その御配慮には及び申さぬ、斯く言ふ平太胤長は、數度戰場を往來なし、汗馬に鞭ち、

敵勢の圍みを蹴立てし古兵、何これしきの僅の道に、草臥は決していたさぬ。さゝ、少しも早く御同道仕らう。

左衛　まづ〳〵お先きへ、入らせられませう。

ト右の合方にて舞臺へ來る。此時薄き風の音になり、下手の藪疊より指金の雀大分飛出し頻りに鳴く平太是れへ目をつけ、不審の思入、早き合方になり、

平太　はて心得ぬ、今胤長が信仰なす、此天神の森間近く、夜陰に來かゝる眼前へ、風も吹かぬにざわざわと塒を離れて飛びかふ小雀、野に伏勢のある時は、歸雁列を亂すの譬へ、大事を抱く此幸先きもしや義時兵を伏せ、われを捕縛の結構なるか、何にもせよ、心得がたき有樣ぢやなあ。

ト平太きつとなり、四邊へ心を配る思入、是れにて左衛門思入あつて、

左衛　あいや、その御不審はさる事ながら、白晝とはこと變り、かく深更に及んでは、往來も稀な此森蔭、人の氣勢に物怖ぢなし、塒を離れし事ならん。胤長公にはかばかりの小事にお心掛けらるゝは、近頃女々しき事でござらう。

ト是れにて平太ほぐれて、

平太　いや、こりや葛飾氏の言はるゝ通り、武士に似氣なき今の繰言、是れと申すも大望を、寸の間忘

れぬ平太ゆゑ、思はず胸に浮びしならん。近頃不覺の胤長と、必ずお笑ひ下さるな。

　ト思入にて笑ふ。此途端平太は小石に躓き、草履の緒切れる。

左衛　なに、お草履の緒が切れしとな。

こりや〳〵家來、暫く待ちやれ。おゝこりや小石に躓き、草履の緒を切つたわえ。

平太　海邊ゆゑに砂地なれど、折々石がござるので、思はぬ粗相に鼻緒を切りしか。これ、草履の緒を立てゝくりやれ。

侍　はッ。

　ト家來草履の鼻緒を立に掛る。此内荏柄の平太は捨臺詞にて捨石へ腰を掛ける。葛飾左衛門思入あつて、そつと松明の灯を吹消す。是れにて平太四邊へ思入あつて、

平太　こりや、松明の灯が消えしか。

　ト是れをきつかけに上下より以前の金窪兵部はじめ、捕手大勢、突棒、袖がらみ、思ひ〳〵の獲物を持ち、忍び出で探り〳〵不意に平太へかゝる。平太は扨はといふ思入にて、ちよつと立廻り、捕手をぽんと返し、身構へしてきつとなる。

こは、何ゆゑの狼藉なるぞ。

兵部　やあ、何故とは愚な胤長、叛逆人の捕縛せよと、執權職の嚴命なるぞ。

平太　なんと。

ト大小入りの合方になり、兵部思入あつて、

兵部　汝、謀叛の企あること、竊に注進の者あつて、義時公には疾より御存じ、それを迂濶に千葉殿が使者葛飾が詞に乘り、死地へ陷る阿房者、君命により馳向ひしそれがしは、金窪兵部行近なり。

左衞　まつた主人成胤が、命を傳へて味方と見せ、此森蔭まで誘き出し、からめ捕らんづ計策に、うまうま乘りし淺智の胤長、一味と見せしは僞りなるぞ。

兵部　最早逃れぬ袋の鼠、殊に汝が力と賴む安念坊も搦め捕り、謀叛を逐一白狀せり。

左衞　その外一味徒黨の者は、大凡縛につきたれば逃れぬところと覺悟なし、

兵部　いざ尋常に、

左衞　腕廻せ。

ト詰寄る。平太是れを聞き無念のこなしあつて、齒嚙みをなし、

平太　むゝ、扨は千葉家もわが一味と、心を許し同道なし、汝が手段と露知らず、伏兵ある地に踏入りしか、思へばく汝等如き、へろく武士に欺かれ、不覺をとりし平太胤長、かくなる上は死物

狂ひ、ならば手柄に搦めて見よ。

兵部左衛　何をこしやくな、それ、もの共。

捕手　心得ました。

トどん〳〵になり、捕手大勢平太に掛る。平太一寸立廻つて能き見得にて誂への鳴物になり、トゞ大勢を相手に烈しき立廻り、始終松の立木を小楯にとり、くらがりの見得よろしく、知せに付き後ろ浅黄幕を切つて落すと、此後ろ一面鎌倉の海原を見たる奥深の遠見になり、是れと一緒に日覆より、霞付き灯入りの月をおろし、トゞ舞臺明ろくなり、荏柄の平太は立廻りの內、素袍の袖と袴の裾が邪魔になるといふ思入、捕手は袖がらみ、もじりにて、平太の袖をからめ引倒す。兵部、左衛門は此中へ這入り、やはり立廻つて、トゞ、平太を押へ付け、大勢折重なつて繩をかける。是れにて平太口惜しき思入にて、

平太　不意を討たれて地の理惡しく、事倉卒に出しを以て、鎌倉殿の幕下にて、坂東一と名を得たる、荏柄の平太胤長が、かばかりの討手を引受け、やみ〳〵不覺をとつたるは、身體に兵具なく裾にまつはる我が袴と月の光りを雲に覆はれ、暗夜となりしばつかりに、わいら如き蛆蟲めらに、搦め捕られし殘念さ。さるにても、わが隱謀包みに包む企を、かくまで敵にさとられしは、何とも以て心得難し、誰が口外なしたるか、思へば無念口惜しいわい。

兵部　やあ愚かなるその一言、烏合の勢の企に、所詮及ばぬことゝ知り、汝が一味の由利八郎、變心なして千葉殿へ、密事を注進なしたるゆゑ、嫩葉のうちに苅らざれば、斧を入れるの悔ありと、執權職の内命蒙り、直に安念法師をば、千葉の館に搦めとり、拷問なして白狀させ、

左衞　彼が所持なす連判狀、義時公のお手に入り、初めて知りし叛逆人、姓名多きその中に、大將分たる高山岡田、まつた澁川和田の一族、一時に討手の手配ありて、最早過半は召捕つたり。

兵部　かゝる苦肉の計略と、知らでおめ／＼葛飾が、詞を誠とたゞ一人、是れまでおびき出せしも執權職のお計らひ、天運盛んの北條殿へ、敵たふなぞとは目先きの見えぬ、いやはや呆れたうつけもの、なんと膽が、

兵部 左衞　潰れたらうがな。（ト是れを聞き、平太こなしあつて、）

平太　やゝ、扨は一味の惟久が變心なして義時へ、密告せしゆゑ安念はじめ、連判狀の名前により、殘らず捕縛につきたるとな、思へば憎くき由利八郎、我神國の神々へ、誓ひを立てし神文の約を變じて敵方へ、内通せしとは卑怯未練、まつた北條義時の暴威の虚喝におぢ恐れ、媚を獻ずる千葉成胤、よくも平太を欺いたな。たゞ此上は胤長が假令頭を失ふとも、天の冥罰いかでか免れん。今にぞ思ひ知らせてくれん。

トよろしく無念のこなし、兵部思入あつて、

譬に申す汝が一言、引かれ者の小唄とやら、千度悔いてももう遲蒔き、觀念なして刑を待ち念佛唱へて往生いたせ。

左衛　それ、胤長を引立て召され。

捕手　心得ました。（ト捕手、平太の繩を取り、きり〳〵立て。

ト平太を引立てる。平太は目を閉ぢゐてしを〳〵と立上る。兵部、左衛門は顔見合せ、よい氣味だといふ思入、平太は引立てられて舞臺下手へ來り立留る。捕手は繩を引張り、

歩め。

ト引立てようとする。此時平太はくわつと目を開き、無念の思入にて體を震ふ。是れにて繩取引かれてぽんと返る。平太捕手を踏みにじるを道具替りの知せ。兵部、左衛門は左右より詰寄る。捕手皆々驚く、此模樣よろしく、時の太鼓にて道具廻る。

（由利屋敷庭前の場）――本舞臺四間通し高二重、本庇本縁附、一間御影石の大踏段、向う一間床の間是れにつゞいて袋戸棚、此下銀張り、唐畫の襖の出這入りあり、上の方一間塗骨障子屋體、下の方御影石の燈籠、同じく手水鉢、生花の立木、下草をあしらひ、左右網代塀にて見切り、少し前へ出して萩垣、日覆より松の釣枝、二重一面に雨戸を立てあり、總て由利屋敷庭前の體。時の鐘合方にて道具留

る。とやはり時の鐘の合方にて、下手より前幕の由利家臣荒波磯藏、岩淵喜四郎袴大小にて出來り、

磯藏　豫て殿には安念坊の、進めによつて親平の企みに一味合體なし、執權北條義時殿を同志の者と誅戮なし、世界の害を除かんと、日夜心をゆだねられしが、御舍兄さまの御異見にて、彼等が謀叛なることを初めて知つて思ひ止まり、早速千葉の成胤殿へ、竊に內通あつたるゆゑ。

喜四　千葉殿と牒し合され、安念坊を生捕つて、連判狀を奪ひとり、執權よりの嚴命にて、夫々一味徒黨のものへ、討手を向けて搦めしよし。

磯藏　中にも勇猛勝れたる、荏柄の平太胤長を、成胤殿の計略にて忍び立出で誘引なし、天神の森の小蔭に於て、金窪殿が兵を引き、易々搦め取られたり。

喜四　只棟梁の親平のみ、行方が知れぬと申せども、荏柄の平太が捕はれし上は、最早賴みの味方なければ、

磯藏　其身の罪を自首なして、謝罪を乞ふか但しは又、所詮叶はぬ事と知り自殺なすか此二つ。

喜四　既に天下の大亂に及ぶべきを、只一日に一味の者を搦めとり、平定なせしは我々迄、悅ばしき事でござる。

磯藏　それゆゑ殿にもお悅びにて、奧さまをお相手に、御酒宴をお開きなされ、我々ども、末席にて、

お合をいたして大酩酊。

喜四　最早御上でも御寢なれば、詰所に參つて一睡いたさん。

磯藏　夜詰の役に一廻り、お庭を廻りに出て來たが。

喜四　足許がふら〳〵致す。

ト右の鳴物にて兩人酒に醉ひたる思入にて上手へ這入る。時の鐘を嚴しく打込み、凄味の合方になり花道より泉の郞黨諏訪市左衞門黑の着附、義經袴、黑股引、大小切緒の草鞋、黑の頭巾を冠り、龕燈を持ち出來りつゞいて飯田五郞、小室次郞太、須坂四郞次、更科三平、荏柄の臣梅森市太、いづれも忍びの裝にて出來り、花道にて諏訪市左衞門龕燈で向うを見て、飯田の五郞に囁き、忍び足にて舞臺へ來り、戶を明けて忍び込まうといふ思入あつて、屋體の角にある立樋を取つて鴨居へ突掛け、馬手さしを拔き戶をこぢ明け、內へ飯田五郞這入り、出來り戶を明ける。內に書棚屛風を立廻し、內に誂への夜具、枕許に朱塗の短檠、刀掛けに大小掛けあり。六人刀を拔きつれ頷き合ひ、諏訪市左衞門屛風の眞中を切る。是れにて左右へ屛風倒れる。床の上に由利八郞惟久、好みの寢卷にて寐てゐる。惟久此音に目を覺し、頭を上げて恟りなす。

市左　由利八郞、觀念なせ。

ト切込む、惟久長枕を取つて市左衞門に打附け、夜着の後ろへ拔けて刀掛の刀を取りにかゝるを後ろ

より小室次郎太、肩先へ一刀切附ける。惟久肩先糊紅になり、直に刀を拔いて切拂ひ、一寸立廻つて
きつと見得、

惟久　夜陰に寢所へ切込みし、其方共は盜賊なるか。

五郎　やあ、盜賊なぞとは舌長なり。

次郎　變心なせし不忠の惟久、

三平　天下の有志が打寄つて、

四郎　今天誅に、

六人　行ひくれるぞ。

惟久　扨は泉に荷擔のものか。

六人　知れた事だ。

トどん／＼の入りし誂への鳴物になり、六人一時に切つてかゝる。惟久手負になり、拔けつ潛りつ、危ふきいつもと違ひし好みの立廻りよろしくあつて、惟久六人に切立てられ、段々受太刀になり、後ずさりに行燈を蹴倒し、時の鐘、暗がり模樣になり、惟久後ずさりに上手屋體へ這入る。六人跡を追ひ這入る。障子へ血煙りかゝり、ばた／＼にて障子を蹴散し、惟久下へ飛びおり、緣の下へ這入る。

市左衛門龕燈を持ち、皆々あたりを捜し。

市左　燈火消えてくらがりに、

五郎　網裏の魚と思ひの外、

次郎　敵とねらひし由利八郎、

四郎　いづれへ行きしか、

市平　行方知れず、

市左　殘念なこと、

六人　いたしたり。

ト皆々上下を捜す、奥より奥方靜江しごき裝にて雪洞を持ち出來り、

靜江　合點の行かぬ今の物音、御前の爰にお出でのなきは、こりや常事ではあらざるわえ。

ト雪洞を上げ四邊を見る。六人は片脇へ身を寄せる。靜江これを見て、

や、そこに居るのは、

ト言ふをきつかけに、六人つか〳〵と出て雪洞を切落す。靜江恟りして、

扨こそ曲者。

ト言ふを市左衞門一刀浴びせる。靜江どうとなる。

市左　八郎はいづこへ逃げたか。

六人　案内いたせ。

ト六人刀を差附ける。靜江思入あつて、

靜江　それでは落ちのびたまひしか。（ト嬉しき思入。）

五郎　さあ、行方を言はぬか。

靜江　いえ〳〵、行方は存じませぬ。

市左　面倒な、討つてしまへ。（ト又靜江を斬る。）

靜江　狼藉者が入つたるぞ〳〵。

ト六人疊み掛けて靜江を切倒す。上手より以前の荒波磯藏、岩淵喜四郎出で、此體を見て悄りなしぶろ〳〵震へゐるを、襟首をとり、

次郎　こりや、八郎が行方を知らぬか。

磯藏　いえ、一向に、

兩人　存じませぬ。

四郎 知らぬと言へば命がないぞ。

磯藏
喜四 こいつはたまらぬ。

ト振拂つて逃げ出すを、市左衛門、飯田五郎兩人を切倒しきつと見得、時の鐘、誂へ早めやうの合方にて道具廻る。

(由利家敷裏手の場)――本舞臺上寄りに三間高二重の屋體、本庇本縁附、一面に雨戸を立て、右下手正面へ掛け折廻し、屋根附きの塀、白壁、腰通り板羽目、能き所に誂へ松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て前の道具の裏手の體。時の鐘、合方にて道具留る。と合方にて縁の下より惟久、所々糊紅、手負の思入、刀を持ち出で、舞臺眞中へ來てほつと思入あつて、どうと下に坐る。本釣鐘。誂へ竹笛入りの合方になり、

惟久 いまだ運命盡きざるか、今宵に迫る危急を逃れ、首尾よく是れまで逃げのびしが、此塀越ゆれば名越の裏道、北條殿の屋敷に近し、かしこへ落ちのび加勢を乞ひ、彼等を搦め捕らしてくれん。

ト息の切れる思入にて血汐を吸ひ、立上り、本釣鐘、竹笛入りの合方にて、四邊へ心を配り、刀を咥へ松の樹へ登らうとして、どうと落ちて刀を下に置く、

深手に五體も自由ならぬか。

ト口惜しき思入、此時屋體の戸を明け、覆面頭巾、同じく忍び裝、大小切緒の草鞋にて窺ひ出る。惟久振返り見て、南無三といふ思入。件の忍びの者は下へおり、惟久に向ひ、

忍　天神地祇に誓ひを立て、血判なせし盟約を、破りし卑怯な由利八郎、神罰思ひ知つたるか。

惟久　やゝ、然いふ汝は。

忍　四海のために奸賊たる、執權北條義時を、天に代つて討取らんと、一味をかたらふ徒黨の棟梁

ト頭巾を取つて投る。此忍び泉の小次郎親平にて、袴股立の足輕後ろへ出て、

足輕　おのれ曲者。

ト組附くを振拂ふ。是れにて引拔き錦の四天になり、足輕を切倒し、

親平　泉の小次郎親平なるぞ。(トきつと見得。)

惟久　暗夜に乘じて忍び込み、その姓名も名乘らずして、不意を覘ふは卑怯な親平。

親平　やあ卑怯とは己が事、能くも誓ひの約を變じ、敵へ味方の密事を告げ、有志のものを捕縛させ、我大望を妨げし人非人の由利八郎、かゝる卑怯なものとも知らず、安念法師が媒介にて、一味の數へ加へしのみか、事を發せん手段まで、逐一語りて片腕と、頼みしは我誤りなり。連書の誓ひを反故となし、千葉成胤へ密事を告げ、遂に奸賊義時が、討手の手配り行屆き、安念はじめ剛勇

と其名聞えし荏柄の平太も、多勢のために捕縛され、その外一味徒黨のもの、一人殘らず搦められしは、是れ皆汝が變心ゆゑ、思はぬ不覺に此年月計りし事も水の泡、今宵汝を討取るは、我一人の恨みならず、衆に代つて親平が、罪科を責める恨みの一刀、今こそ思ひ知つたるか。

惟久　天下のためを表となし、國家を覘ふ汝が陰謀、早くもそれと察せしゆゑ兄が異見に基いて、改心なせし八郎惟久、所詮及ばぬ企ゆゑ、先非を悔いて降伏いたせ。

親平　假令及ばぬことにもせよ、圍みを逃れしこの親平、是れより一先故鄕なる、信濃の國へ立越えて時節を待つて旗上げなさん。

惟久　すりや叛逆を飽迄も、貫く所存とあるからは、助け置かれぬ覺悟なせ。

親平　何を小癪な。

ト誂への鳴物になり、兩人立廻り、此內泉の小次郞親平、片手であしらひながら、呼子を吹く、ばたばたになり、上下より以前の六人出來り、

こやつを討つて、恨みをはらせ。

六人　心得ました。

ト是れにて皆々なぶり切に切る。惟久立上らうとしては切られどうとなり、トゞうつぶせに倒れる。

親平　はて心地よやなあ。（ト此時鷄笛になり、）今一聲發せしは、東雲近き二番鷄。
市左　夜明けぬ内に、
皆々　當所を立退き、
親平　國道傳ひに落ちのびん。
　　ト刀を拭ひ鞘へ納め、誂への合方にて、親平先に六人附添ひ、花道へ行き、惟久刀へすがり、
惟久　おのれ親平。
　　ト立上り、ひよろ〳〵と向うへ行き、どうと下に居る。これを木の頭。本釣鐘にて、親平跡より六人附いて花道へ這入る。これと共に惟久落入る。双方よろしく右の鳴物にて、
　　　　　　　　　　　　　　　　ひやうし　幕

四幕目大詰　　鎌倉殿中詮議の場

〔役名──荏柄平太胤長、北條相模守義時、源實朝、和田新左衛門尉義盛、古郡新左衛門保忠、大膳太夫廣元、筑後左衛門尉知重、金窪兵衛尉行近、土屋兵衛義臣、岡崎四郎義實、佐原次郎時連、澤久井三郎義房、蘆名三郎清高、水原次郎爲綱、山口三郎有澄、杉本太郎義家、大多四郎久住、落合三郎盛保。政子尼公、其他。〕

（鎌倉御所の場）――本舞臺五間通し高二重、高欄附、正面一間大白洲階子、二重の上一間跡へ下げて上段黒塗りの框、後ろ金襖、上の方跡へ下げて同じく、跡へ下げて高二重の御簾屋體、下の方柱まで前の屋體と同じ高欄附の高二重、此後ろ一間下げて御簾をおろし、五間の屋體の前へ大欄間、一面に御簾をおろし、總て鎌倉御所の體。爰に侍四人、侍烏帽子半素袍、一本差にて床几に掛り居る。此見得時の太鼓にて幕明く。

侍一　扨此度の騷動は、容易ならざる一條にて、當時鎌倉の執權職、北條相模守義時公の、威勢を嫉んで殺さんと、徒黨を結びし叛逆人。

侍二　此企の棟梁は、信濃の國の住人たる、泉の小次郎親平にて、阿靜坊安念といふ同志の出家が諸國を廻り、法話に准へて味方を集め、

侍三　荏柄の平太を初めとして、在鎌倉の大名を、竊に一味合體させ、遠からずして事を發し、北條氏の邸宅へ、不意に夜打を仕掛ける手筈。

侍四　然る所徒黨のうちなる、由利八郎惟久殿、兄左衞門尉惟光殿の、異見によつて先非を悔い、改心なして千葉殿へ、一大事を明かせしゆゑ。

侍一　成胤殿より北條家へ、早速注進いたせしゆゑ、計略をもつて安念を、千葉殿方にて手もなく召捕

り、彼が所持なす連書を奪ひ、

侍二　一味徒黨の者共へ、一時に討手をさし向けられ、瞬く内に搦めとり、今は檢非違使へ渡し、嚴しき詮議あるとのこと、

侍二　只氣の毒なは改心なし、此企を注進なしたる由利殿の邸内へ忍び出立の者來り、暗殺なして行方知れず、

侍四　察するところ親平が、いづれへ逃げしか在所知れず、由利殿を暗殺せしは、まさしく彼が仕業ならん。

侍一　所詮及ばぬ事なるを、かゝる企なさうより、將軍家の御內緣にて、飛鳥落つる執權職、お髭の塵を取るのが當世、

侍二　一味に荷擔の和田四郎・同じく六郎兩人は、當時諸士の別當たる、和田新左衞門義盛殿が、功勞によつて赦免を願ひ、

侍三　將軍家にても舊功ある、義盛殿の願ひゆゑ、非常の御慈悲で兩人は、赦免になりしは身の仕合せ。

侍四　徒黨の罪は誰彼なく、同罪なるに兩人は、そのお咎めのあらざるは、和田殿があればこそ。能き親族は持ちたいものだ。

侍一　今は執權北條殿、まつた老職大臣殿、その外諸侯出仕あつて、
侍二　謀叛の張本荏柄の平太を、只今是れへ引出し、一應お糺しありし上、
侍三　則ち檢非違使たる山城判官へ引渡され、
侍四　是れより嚴しき拷問あつて、罪料の輕重極まるよし。
侍一　先刻打ちしは四つのお太鼓、
侍二　最早御出仕に間もあるまじ。（ト此時御簾の内にて、）
呼ビ　出御。
侍三　や、出御とあれば我君にも、
侍四　これへ御出座、
四人　あらせられるか。（ト又内にて、）
呼ビ　しい――。（ト制し聲掛かる。）
四人　はツ。

ト上手へ侍の一、二、下手へ侍の三、四平伏する。是れをきつかけに、音樂の頭を打込み、正面の御簾を靜かに卷上げる。眞中に疊臺に、源實朝、烏帽子直垂、中啓を持ちて住ひ、後ろに子役、後ろ茶

筅振袖、袴裝、袱紗にて太刀を持ちて控へ、上手に北條相模守義時、立烏帽子、小さ刀中啓を持ちて控へ、下手に大江廣元、筑後左衛門尉知重、同じ拵へにて控へ居る。よろしくあつて、

實朝　今や四海靜謐にして、萬民鼓腹の時に臨み、清光たる月影に浮雲來つて覆ふが如く、泉の小次郎親平が叛逆により一時の動搖、既に大亂に及ばんとせしを、由利八郎が注進に、徒黨の人數搦め取り、事ならざるは大慶なり。

義時　既に遠からず鎌倉御所へ、逆賊共が攻寄する手筈も大略整ひて、實に薄氷を踏む如く、最も危ふき時に至り由利左衛門が異見により、同姓八郎が改心なし、密告せしは我君の此上もなき御高運。

廣元　假令かれらが徒黨を結び、事をなすとも烏合の勢、及ばぬ事とは思へども、三浦一統のそのうちにて、剛勇人に勝れたる、荏柄の平太胤長などは、容易に打取ることならず。

知重　いまだ密謀發せぬ内、連書によつて徒黨の者を、珠數つなぎに搦め取り、逃失せたるは親平のみ是れとても遠からず、縛につくに疑ひなし。

實朝　予も義時が訴へを聞きし時は驚きしが、僅一日に搦め捕り平定に至りしは、是れなん源家の祖神たる正八幡の正しく加護。冥府にあつて故幕下にも、嘸かし悦び給ふらん。

義時　かゝる危急を免かれ給ふは、源家の榮ふる祥にして、

廣元　一度覆ふ叢雲も、武勇の風に吹き拂ひ。

知重　光りいや增す星月夜、御家はます〳〵萬代不易。

義時　恐悅至極に、

侍四人　存じたてまつりまする。

ト四人辭儀をなす。義時思入あつて實朝に向ひ、

義時　此儀について我君へ、義時申上げ度き事あり、右親平胤長が、謀叛に一味徒黨なしたる和田四郎左衛門義直、同苗六郎義重、何故あつて罪科を糺さず、御宥免なされしぞ。

實朝　義直、義重兩人は當時諸士の別當たる、義盛其身の功に替へ、一族たる兩人の、宥免を願ふゆゑ父幕下の代よりして、多年盡せし忠勤に免じ、歎願を聞屆けて宥免いたし遣はせしぞ。

義時　出て再び歸らざる君命ゆゑに是非なけれど、又もや此後義盛が、何樣な儀を願はんとも御母公並に身不肖ながら、今日執權の職に任ずる拙者に御相談下し置かれませう。

實朝　然らば義盛が勳功に免じ、義直義重兩人を、予が免ぜしは誤りなるか。

義時　假令勳功あればとて、餘りゆるがせなる御政道ゆゑ、拙者はともあれ御母公へ、御相談あつて然るべきかと存じまする。

廣元　その仰せ尤もながら、餘人と違ひ義盛は、源家へ對して數年來、拔群の勳功あれば、夫に免じて兩人を、赦免ありしは君家の慈悲、今三代の將軍とならせ給へど我君には、恐れながら御若年、殊には御代をとり給ひ、その年限僅かなれば、諸事寛典の御沙汰こそ、諸侯歸伏の基にて何よりの儀と存じまする。

知重　こは老職のお詞ながら、御代替りは猶更に、すべての仕置を嚴にされねば、君の御威光うすらぎて、無道の願ひをなす者あらん。其身諸士の別當にて、人の手本になるべき和田殿、我功に替へ一族の赦免を願ふは外ならず、御政道がゆるがせゆゑ、此後惡事をなせしもの、かならず前の功を言ひ立て、赦免を願ふことでござらう。

廣元　そは各々の心得違ひ、戰國にては仕置をば嚴になさねば人隨はず、かの治世には仁をもつて仕置をなさねば君臣和せず亂の基、水清ければ魚住まず、終には恨む者あつて、天下の亂れとなるは必定、斯く仁慈を施し給ふこそ、願はしう存じまする。

實朝　今廣元が申す如く、上たる者下を憐れまば、下たる者上を敬ひ、仁義の道行はれ、必ず天下は泰平なり、さすれば朝廷へ對し奉り、將軍の職空しからず、すべての仕置を嚴になし、權をもつて隨はすは、將軍に器量あつての事、予は若冠といひ柔弱ゆゑ、仁慈をもつて隨はす所存なる

も、これも亦批判あらば、補佐の臣遠慮なく異見せよ。

廣元　は、、寬仁大度の思召し、恐入つてござりまする。

ト義時、廣元を尻目にかけ、心に濟まぬ思入。ばた〳〵になり下手より、侍烏帽子半素袍の侍走り出來り、下に居て、

侍　はツ申上げます。

義時　何事なるぞ。

侍　和田義盛を初め、三浦一統のもの共、君の御目見得を願ひまするが、いかゞ取計らひませう。

義時　む、、義盛初め三浦一統、御目見得願ふは外ならず、義直義重の例に習ひ、謀叛の張本胤長が、赦免を願ひに來りしならん。君には今日御政事向にて、殊の外御繁務ゆゑ、御目見得は叶はぬと申せ。

侍　はツ、畏つてござります。

廣元　いや、和田義盛のみにあらず、三浦一統來りしは、容易ならざる事なれば、仔細も聞かずその儘に歸すは本意ならざれば、御目見得仰せつけられて然るべきかと存じまする。

實朝　む、、廣元が申す如く、諸士の別當義盛はじめ、三浦一統出仕せしは、よも常事ではあるまじ、

目通り許す、これへと申せ。

侍　はツ。（ト義時に氣を兼ねる思入。）

廣元　君の御諚、猶豫いたすな。

侍　はツ。（トばた〳〵にて花道へ引返し這入る。）

義時　天眼通は得ざれども、義盛三浦一統を、引連れこれへ來りしは、荏柄が願ひに相違あるまじ。

知重　執權職の仰せの如く、前に義直義重を御宥免ありしゆゑ、又もや今日胤長が、赦免を願ひに多人數にて、推參せしは無禮至極。

實朝　兎にも角にも義盛が、願ひをとくと聞きし上、予が思慮に及ばずば、その方共補佐いたせ。

義時　委細畏つて、

四人　ござりまする。

ト中の舞になり、下手より二重へ、和田新左衛門義盛、白髮鬘、立烏帽子、水干、小さ刀にて出來る少し離れて土屋兵衛義臣、岡崎四郎義實、佐原次郎時連、澤久井義房、芦名三郎義高、水原澤郎爲綱山口三郎有澄、杉本太郎義家、太多四郎久仕、落合三郎盛保、その外大勢いづれも立烏帽子、水干、小さ刀にて出來り、和田新左衛門義盛、源實朝を見てはツと下に居る。是れにて皆々柱の邊まで一杯

に住ひ、一同辭儀をなし、

義盛　今日不意に推參いたし、御目見得を願ひし所、早速に御許容下され、斯く麗はしき御尊顔を拜し

保忠　臣等が大慶、是れに過ぎず、恐悅至極に、

皆々　存じ奉りまする。（ト辭儀をする。實朝思入あつて、）

實朝　こりや廣元、義盛はじめ、三浦一統出仕せしは、何事なるか、その方より問うて見よ。

廣元　はッ。（ト義盛へ向ひ、）義盛殿には三浦の一族、引連れられて出仕ありしは、何んぞ願ひの筋あつてか。

義盛　はッ、今日三浦一統の者押して參上仕り、かく御目見得願ひしは、君へ歎願の儀がござつて。

廣元　して其歎願とは、いかなる事でござるよな。

ト音樂になり、和田義盛思入あつて、

義盛　其儀は則ち外ならず、泉の小次郎親平が企てに一味なし、既にお召捕りに相成りし囚人荏柄の平太胤長、何卒寬典の御慈悲をもつて、三浦の一統九十八人が微忠を盡せし功勞に替へ、罪科を御赦免下さりますやう偏に願ひ奉る。

ト辭儀をなす。義時思入あつて、

義時　三浦の一統九十八人、押して參上致せしは、大方平太が命乞ひ、斯樣な事もござらうと、義時疾より推察いたす。

知重　流石は天下の執權職、その機を早くも察しられしは、知重などの及ばぬこと、誠に驚き入つてござる。

　　　ト是れに構はず義盛、廣元に向ひ、

義盛　今改めて申さずとも、廣元殿には御存じながら、抑ゝ鎌倉草創より今日に至るまで、一人たりとも不忠の者なく、天下に誇りし三浦の一族、然るに泉の親平に同盟なして召捕られ、一族の恥辱此上なし、前に義直義重は此義盛より功に替へ、恩免を願ひしに、君寛典の御慈悲をもつて、則ち赦免を蒙りたり。

保忠　是れにて三浦一統も、一時恥辱を雪ぎしが、今一人荏柄の胤長、此企の張本なりとて、金窪の手へ召捕はれ、重き處刑に行はれんと、專ら世上の街說ゆゑ、なせる罪科に是非なけれど、檢非違使へ引渡され、獄卒の手へ下りなば、三浦一統の恥辱ゆゑ、再度の願ひは恐れ入れど、又もや今日胤長を御赦免下し置かれますやう、御慈悲願ひに出たる我々、

義盛　只今保忠が申す如く、前に兩人の恩免を願ひ、

義貫　今又爰に胤長が、再度の願ひは憚りあれど、
時連　傍觀ならぬ一家一門、
義房　何卒彼を我々が、
清高　多年の功に替へさせられ、
爲綱　九十八人の者共へ、
時忠　胤長下し給はらば、
有澄　永く君への御恩を忘れず、
義家　猶も是れより忠義を勵み、
久住　臣たるもの丶本分を、
盛保　盡す所存にござりますれば、
義盛　又も寛典の御慈悲をもつて、三浦一統が再度の願ひ、
保忠　御聞濟み下さるやう、偏に願ひ、
皆々　奉る。（ト一同平伏なす。廣元、實朝に向ひ、）
廣元　義盛はじめ三浦一統、九十八人の功に替へ、平太胤長が犯罪を御赦免なし下さりますやう。一同

御慈悲を願ひ上げまする。

ト義時此内實朝へ赦すなといふ思入、實朝も思入あつて、

實朝　源家へ對し舊功ある、三浦一統の願ひなれど、前に義盛がせつなる願ひに、予が特別の慈悲をもつて兩人を赦せしが、今又平太胤長を赦しくれとの願ひなれど、此程尼公の仰せもあれば、卽時にかれを赦し難し。

義時　如何にも君の仰せの如く、舊功ある三浦一統、餘儀なき願ひにござれども、法令を破りてその願ひを、叶へる謂れはござりますまい。

廣元　なに、法令を破るとは。（ト音樂になり）

義時　其身一旦罪を犯し、囚人となりし平太胤長、いまだ吟味も濟まざるに、義盛が願ひ聞し召され、直にお赦しある時は、向後罪を犯せし者、其一族舊功に替へ、必ず恩免願ふべし、一人を赦し一人を罪せば、是れ依怙の沙汰となる、さすれば法令忽ち破れ、必ず動亂の基となる、まして平太胤長は、此企の張本にして、諸士を進めて一味へ加へ、連判せしめし事明白なれば、その罪は猶輕からず、餘人は恩免せらるゝとも、彼にあつては法令の破れとなればその御沙汰、無用の儀かと存じまする。

義盛　すりや執權には胤長を、憎み給ふ事あつて、かくは仰せらるゝよな。
義時　いや、義時彼を憎むにあらず、憲法によつて胤長が、罪の重きを憎むのみ。
保忠　親平始め多人數なるに、胤長一人その罪の、重きと仰せらるゝのは。
義時　胤長罪の重きと言ふは、君を失ひ奉らん容易ならざる企にて、これに上越す罪はあるまじ、假令義盛が願ひ三浦一統の訴訟たりとも、憲法には替へ難し、既に古人も其罪を憎んで其人を憎まずと言へり、胤長先に功勞ありとも、犯せし罪のなす所、是非なき事とあきらめられよ。然し此儀は我君にも、當時政事の補佐なし給ふ尼公へ一應仰せられ、憲法に叶ひなば、その時彼を御赦免あつて然るべきかと存じまする。
實朝　おゝ、義時の申す如く、兎も角も此儀をばお問ひ合せ申すであらう。知重其方奥へ參り、委細尼公へ申上げよ。
知重　はツ、畏つてござりまする。
ト管絃になり、知重辭儀をなし奥へ這入る。義盛思入あつて廣元に向ひ、合方になり、
義盛　いや、廣元殿、其許まで申上ぐるが、今日拙者を始め三浦の一族九十八人、全くもつて御法を犯し、罪を許し給はらんと、强ひて願ふ所にあらず、凡そ死に至る罪人も、命乞ひの品により遂に

宥免し給ふこと、古今に其例し多し、胤長罪を犯すと雖も、死刑の御沙汰はよもあるまじと、恐れながら推察いたす。今日諸士の別當たる義盛一族を誘引して此願に及ぶこと、憲法にかゝはらず、政事の妨げならざるやう、君はいまだ御若年なれど、聰明叡智にあらせられゝば、御明察を願ひ奉る。かく老年に及べども、其職にあつて義盛が非義の願ひを仕るべきや、只我君の御賢慮にて九十八人の一族ども、愁眉を開く御下知を、偏に仰ぎ奉る。

ト よろしく思入あつて言ふ。

廣元　只今君より御母公へ、御問合せに相成れば、御答へによつて寛典の、思召しもござらう程に、暫く一同相待たれよ。

義盛　はツ、御前よろしう願ひ申す。

ト 此時奥より知重出來り、下に居て、

知重　はツ只今尼公へ委細の趣、某申上げし處、外ならぬ古老の義盛一族引いての此願ひ、洵にもだし難けれども、胤長事は鎌倉にてその身謀叛の棟梁となり、專ら計略を廻らせし由、義盛功勞あるにもせよ、今胤長の糺明なく此儘に差許さば、武道暗弱なるゆゑに、政道疎しと沙汰すべし、一度判官の手へ渡し、誡めを加へし後、如何やうとも計らふべし、假令死刑の罪なくともその詮

索を遂げずして、許さるべき謂れなし、我は婦女の身なれども、いまだ故君御在世の折、かやうの仕置きも聞及ぶ、義盛諸士の別當にして、老臣の列に加はる身を以て、胤長が赦免を願ふは心得ず、尤も武道に粗略はあるまじきが、政道に依怙あつては何を以つて萬民を歸伏さする事あらん。假令古老の一族にせよ、世の常ならぬ謀叛の罪科、容易計らふべきにあらずと、尼公の仰せにござりますれば、罪科を正しくなされずば、萬民歸伏いたすまい。（ト實朝思入あつて。）

實朝　義盛が願ひ切なれども、御母公よりの仰せもあれば、その身謀叛の罪あつて、囚人となりし荏柄の胤長、直に赦免致しがたし、追つて沙汰に及ばん程に、暫らく時日を相待つべし。

廣元　只今君の仰せをば、義盛殿には相守り、暫らく御沙汰を相待たれよ。

義盛　知重殿の演說にて、尼公の仰せを我々も、一同是れにて承はり、是非なき次第に、

皆々　ござりまする。

義時　今日山城判官へ、胤長を引渡し、糺明をさすべきよし申附け置いたれば、一旦判官の手へ渡し、其後申譯の手段もあるべし、國法さへ立つに於ては、何ぞ各々の願ひをば、此儘空しく致さうや。今金窪兵衛尉が、胤長を引出さん、三浦一統の各々もこれにて對面いたされよ。

ト これを聞き、義盛、保忠よろしく思入あつて、

義盛　すりや此處へ召捕れし、荏柄の平太を引出し、檢非違使へ渡さるゝとか、

保忠　赦免を願ひし甲斐もなく、却つて彼が面縛されし、姿に出逢ふは殘念至極、

義臣　是れぞ三浦一統の、

義實　此上もなき、

皆々　恥辱なり。

ト皆々口惜しき思入。

義時　總じて此度召捕りたる徒黨の者はその非を知り、皆後悔の氣色あれど、胤長一人無禮を知らず、やゝもすれば有司に對し、上を誹りて惡口雜言、是れ其罪の遁れぬところ。

知重　斯樣の者を此儘に、誡めもなく赦免あらば、君の御威光なきに似て、禮儀の道を失ふ道理、

義時　僞りならぬ證據をば、只今是れへ引出し、各〻に見せ申さん。其疑ひを晴らされて、親身の異見を加へられよ。（トこれを聞き、皆々きつとなり。）

義臣　すりや、執權職には我々へ、

義實　遺恨あつてのことなるか、

時忠　三浦一統の面前へ、

時連　荏柄の平太を引出し、
義房　恥辱を與ふる御所存なるか。
清高　只今是れにて檢非違使、
爲綱　判官の手へお渡しあるを、
有澄　一族の身でおめ〳〵と、
義家　傍觀なしてゐられませうや。
久任　もう此上は胤長と、
盛保　共に面縛さるゝとも、
義臣　身の恥辱には、
皆々　替へられぬ。（ト立掛かるを、）
保忠　やあ〳〵、いづれも靜まらぬか。爰をいづくと思はるゝ。鎌倉殿下の御所なるぞ。
皆々　ぢやと申して。
保忠　やあ君へ對して無禮至極。
ト保忠きつと言ふ。是にて皆々無念の思入にて控へる。

義時　それ、胤長を呼出せ。

四人　はあゝ。（ト侍花道の際にて、）

侍一　やあ〳〵方々、荏柄の平太を引出し召れ。（ト花道の揚幕にて、）

兵衛　畏まつてござりまする。

トこれをきつかけに床の淨瑠璃になり、

〽萬夫不當と呼ばれたる、荏柄の平太胤長も、捕はれの身に繩目にあひ、金窪兵衛に引立てられ、御前を見れば義盛はじめ、竝居る三浦一統に、我ゆゑ恥辱を與ふるかと、面目なげに吐息をつけば、

トこれへ時の太鼓を冠せ、花道より荏柄の平太胤長、袴裝好みの拵へにて繩に掛り、これを士卒四人繩を取りて警護なし、兵衛の尉、烏帽子半素袍、股立小手臑當、太刀馬手ざし、草鞋にて附添ひ出來る。平太花道にて、舞臺の義時を見て無念の思入、義盛を見て面目なきこなしあつて舞臺へ來る。

御前なるぞ、下にをらう。

平太　むゝ、（ト四邊を見廻し、下に居ぬゆゑ。）

士卒　えゝ、下にをらぬか。

〔引据られて胤長は、恐れげもなく座を占むれば、（トこれにて平太能き所に住ふ。）

兵衛　仰せに任せ囚人胤長、召連れましてござりまする。

義時　山城判官行村が手へ、今日是れにて引渡せば、暫らくそれに控へ居よ。

兵衛　畏つてござりまする。

〔金窪かたへに控ふれば、面縛の身を見るよりも、無念の涙呑込みて、拳を握る一族の中にも棟梁義盛は、かく迄我を軽しめて、義時恥辱を與ふるかと、君の御前も忍び兼ね、

ト此内兵衛跡へ下りて床几へ掛る、保忠はじめ皆々平太を見て、無念の思入。義盛怺へ兼ねし思入あつて、

義盛　こりや胤長、前に君の御慈悲にて、恩免を蒙むりし義直義重両人より、其趣意は承はりしが、汝天下のためを思はゞ、なぜ一人にて事をなさぬ。よしなき親平などへ與なし、一味徒黨を結びしゆゑ、遂に謀叛の汚名を取り、かく淺ましき繩目に逢ひ、君の御前へ引出され、よくも一族の者共に、面目を失はせたな。取分け我は年老いて、今日諸士の別當たるに、かゝる恥辱を身に負うて、諸人に面が合はされうか。其身勇猛衆に勝れ、御馬前の役にたつべきに、思慮淺くして罪を負ひ、世の物笑ひに相成るが、義盛殘念至極なるぞ。

〽かゝる恥辱を受くるのも、義時故と義盛は、怒りの眼に涙を注ぎ、白髪烏帽子をつく許り
　齒がみをなせば我君も、大江もさこそと察し入る、傍に義時詞を和げ、
　ト義盛、義時へ當てゝ悔しき思入。實朝、廣元顏を見合せ、尤もと言ふこなし、
義時　日頃三浦一統は、忠臣無二の者のみと、他家へ對して誇られしが、胤長謀叛に與なして、義盛殿の榮譽を害し、さてく氣の毒千萬な。
知重　常に我强き義盛殿、我一族の胤長が、謀叛を企て繩目にあひ、共に恥辱を受けられて、近頃笑止な事でござる、
〽嘲ける詞に氣早の若者堪へ兼ね、保忠はひらりと庭へ飛下りて、荏柄の平太に打向ひ、
　ト保忠これを聞き、無念の思入よろしくあつて、平舞臺へ飛下り平太に向ひ、
保忠　これ、胤長、汝いかなれば一族に隱し、一人無益の企なし、義盛殿を始めとして、是れなる三浦一統に、よくも恥辱を與へしよな。（トきつと思入、誂への合方になり、）抑ゝ三浦の先祖たる三浦平太郎爲繼、往年陸奥守義家公に隨ひ、忠勤を盡してより、君臣の中相和して、聊不忠の志を差挾みし事曾てなし、殊に大助義明は、源家再興の初めに命を落せり。此故に賴朝公御在世に、義明が追善供養を修し給ひ、我武將となりし事、偏に大助が命を捨て義を進めしゆゑなりと宣ひ

しことありしゆゑ二代の將軍頼家公、まつた當君に至つても、猶此儀を捨て給はず、追福を營み給ふ。是れ諸人の知る所なり。義盛父祖の忠義を受け繼ぎ、我一門の棟梁となり、君家御三代を補佐なして三浦一統の美名を擧ぐる。然るに此度其方が、私の計らひにより、義盛はじめ九十餘人、面目を失ふゆゑ、此恥辱を償はんため、一族の功に替へて汝が身を賜らんと、一同歎願なすと雖ども謀叛の張本たるによつて執權是れを支へられ其罪科の重きを算へ、今我々が面前にて、判官の手へ渡さんと、面縛の儘引出され、汝は自らなせし罪ゆゑ、恥辱とも思ふまじきが、義盛はじめ九十餘人、訴訟に出たる甲斐もなく、却つて檢非違使の手へ引渡さるゝを、見聞なす一族の恥辱、先祖へ汚名不忠とや言はん、不義とや言はん、言語に絶えたる事なるぞ。

〽無念の怒りに保忠が、拳を握り、いきまきて、猶も胤長はげまさんと、

既に汝が召捕られし、噂は疾に聞きつれども、よも君を計り奉る企とは思はざりし、いかなる天魔の所爲あつて、不忠の心を生ぜしぞ、汝に限り左様なる惡事を企むまじきものなるに、かく謀叛の名をとりて、先祖の名迄もけがせしぞ、それとも君を計り奉る企なさずば速に、言譯なして汚名を雪げ、さなくば先祖へ申譯に、我手にかけて命を斷ち、三浦の一族九十餘人が不忠を落さぬ證となすべし。さあ、所存あらばとく〳〵申せ。

〽眼怒らし、聲はげまし、義時に當て保忠が、殿中響けと罵るを、義盛はじめ一座の一族心地よくこそ思ひける。胤長はづつと立ち、端近く進み寄り、

ト保忠、義時に當附けて言ふ。義盛初め皆々能く言ひしといふ思入。平太づつと立つて前へ出る。是れにて繩取り引摺られ恟りする。平太下に居て、

平太　今保忠が憤り、又一族が疑ひも、尤もなる事ながら、只奸者の詞を聞いて其實を知らざるゆゑなり、今日胤長縛に就きし、次第を是れにて演說なさん。（ト謠への合方へ、音樂を冠せし鳴物になり）我は三浦が一族なり、何ゆゑ不忠不義をなさん。是れに附け不審なるは千葉介成胤が、密談ありとの迎ひにより、彼が屋敷へ參る途中、天神の森の茂みより、金窪兵衞大勢の士卒を引いて躍り出で、我を目がけて折重り、無體に繩を掛けしゆゑ、仔細を問へど語り聞かさず、是非なく引かれて行きし所、士卒の者が語るを聞けば、君を計る逆臣なりと、申すは奸者の所爲と察し、是れを正さんと思へども、捕はれとなりし身に、諸人に對面なす事ならず、讒者のために犬死なすかと無念に思ひ居たりしに、今此處へ引出されしは、思ひ掛けなき身の幸ひ、願ふ所の君の御前に老臣方の出仕と言ひ、三浦の一族群集の此場に於て正さん事、我悅び是れに過ぎず。抑ゝ不審の廉あらば、其仔細を問訊し、時宜によつて搦め取るが、是れ天下の大法なり。我を逆臣なりと言

ふは何者の讒言なるか。今鎌倉の執權職、よも北條義時殿が跡なきことは申されまじ、讒言せしは誰なるか、その者と對決すべし。古へよりして其罪の疑はしきは刑せずと、再應訊すが道なるに只一應の糺問もなく、我を謀叛の張本なりとは、誠に理不盡千萬なり、人の訴へを證となし、是れを罰するその時は、忠臣は皆讒者のために所刑にあうて亡さるべし。是れを憲法と言ふべきや。是れなる金窪兵衞の如き、武士を捕へる法さへ存ぜず、竊に奸者に一味なし、我を欺き搦め捕れば、いかでその實を辨ふべき。此身千筋の繩目にあふとも、政道正しからざれば、無法の成敗受くべからず。

〈言はせも果ず金窪が、居丈高に大音聲、

兵衞 やあ、某武士を捕へる法を、存ぜぬなどとは舌長なり。其罪明白ならざれば尋問もいたさんが、汝が謀叛なる事は、確かなる證據あつて、その罪明白なるゆゑに、内命受けて某が、有無を問はずに搦めたり、なんで役目の越度ならん。

平太 取るに足らざる金窪兵衞、汝等如きに論は無益、此胤長が邪正を問ふは、執權職の北條義時、さあその譯早く申し聞かせよ、理に叶はゞ罪に伏し、口を閉ぢて刄を受けん、さなくば只今君前にて事明白に實否を訊さん。

〽權威を挫くは此時と、人も無げに罵れば、義時怒つて座を進み、

ト平太きつと思入、義時も立腹せし思入にて、

義時　いかに荏柄の平太胤長、汝かゝる姿となつても爭ひ募る心なるや、正しく謀叛を企て、一味徒黨をかたらひながら、覺えないと申し張るは、證據なしと思うてか、汝を糺問せざることは、既に明白の證據ありて正に君の御手に入り、糺明いたすに及ばざるゆゑ、行近汝に問はざるなり。殊には不敵の其方なれば、糺問にては申すまじ、それゆゑ今日檢非違使山城判官の手に渡し、獄に下して拷問なさんと、只今是れへ引出せしぞ、其罪隱れなしとは雖も、過つて罪を改め千悔なして罪を謝すれば、三浦一統の願ひといひ、又前々の勳功に免じ、思召しもあるべきに、今において改心せず、却つて奸者の所爲などと、己が犯せし惡行を他へ讓らんとなす條、罪科の重くなるも知らず、さりとは愚かな心底なるぞ。

〽尻目にかけて嘲笑へば、强氣の胤長はつたと睨み、

平太　汝執權の威に傲り、御內緣の權に募り、しかのみならず我意を振ひて、忠臣を亡さんとするか。此胤長を逆臣なりと言ふ證據あらば爰へ出せ、それを以て問答すべし、假令閻魔の廳へ出るとも我誠忠動ぜざる事泰山の如くなれば、申譯には何恐れあらん。則君の御前において、忠と佞と

の黒白を正し、國家の逆賊顯はさんこと、我數年の願望なり、證據と云ふはいかなるものか、早く出して事を正せ。こは面白きことになりたり。

義時 所詮遁れぬ罪科と知り、死を決して大言吐くとも、今明白なる證書を出し、汝が廣言止めてくれん。それ迄もなく其方は、泉の小次郎に合體なし、安念と言ふ僧と談じ、鎌倉の諸士を語らひしこと、こと〴〵く御聞に達し、既に其法師は疾に召捕り、山城判官の手へ渡し置く、それのみならず汝等と、同盟なして事を計りし由利八郎惟久は、天命を思ひ先非を悔い、改心いたして陰謀の次第を逐一言上せり、只殘念なは賊のため、其夜一命捨つると言へども謀叛人の名を遁れ、永世汚名を受けざるは、是れ武士の望む所、それに引替へ汝が謀叛は、確かなる證據あつて今日獄屋に下さるゝなり、憲法をもつて罪を正すに分明ならざる事をなさうか。これにも汝返答あるや。

〽言ひも果てぬに胤長は、少しもひるむ氣色なく、

平太 やあ、權をもつて忠を擲き、非を以て理を破るとも、なんぞそれに伏すべき、安念を生捕り證據を奪ひ、由利惟久が注進によつて、謀叛の企明白なりとは、猶以て不審なり、由利は其夜暗殺に遭ひしと言ふゆゑ是非なけれど、召捕られたる安念が君を謀ると申せしならば、某これにて對

決なさん、まつた證書あらば是へ出せ、何者が左樣な事を公廳へ申上げしか、身に曇りなき胸の鏡照さずんば置くべからず。いかにも泉の小次郎と合體なして安念に、諸國の有志を語らはせ、評定せしに相違なけれど、逆臣などゝ、汝等に罵らるゝ事奇怪なり。抑々此度の企と言ふは國家のため君のため、萬民の爲めを思ひ、誠忠の企てなるを、逆臣なりと言ひ立て刑罰せんと計るこそ、是則ち逆臣なり。兎角の問答なすは無益、汝正道の決斷をなさんとならば、今證書を是れへ出し、我罪を演説せよ、恐れ多くも君御直に聞し召さるゝところなれば、是れに過ぎたる明白あらじ、其證人は老臣方、三浦の一族列座なり、すこしなりともゆがみたる言を以て理を破らず、正路の決斷いたすべし。

ト大音聲に罵れば、義盛はじめ一族は心地よげにぞ見えにける。保忠猶も氣をはげまし、

ト平太きつと言ふ。義盛はじめ皆々よく言ひしといふ思入。保忠も思入あつて、

保忠　流石は胤長能く言ひしぞ、三浦一統が恥辱を雪ぐは、今その方が詞にあり、その身に覺えなき事は恐れなく申譯せよ。執權も又正道の糺問なくば今日の、國家の政務立つべからず、證書があらば取出され、君の御前で讀上げなば、此上もなき明白なり。

義臣　證書と申すはいかなる品か。

義實　同じ三浦の一族ゆゑ、
時連　胤長罪科逃れぬ時は、
義房　我々共も家の瑕瑾。
清高　執權職にはその證書、
爲綱　これにてお聞かせ。
皆々　下さりませう。
義時　いや、罪科極りし胤長ゆゑ、その證書聞かすに及ばぬ。（ト義盛思入あつて、）
義盛　證據ありと言はれながら、その書を是れにて讀上げられねば、證據はあつてなきが如し、猶豫召されず義時殿、是れにて證據を讀上げめされ。
義時　むゝ。
〽證書と言へど將軍家を計る徒黨にあらざれば、如何はせんとためらふを實朝公聲をかけ、
實朝　血判なせし誓詞の連狀、何條爭ふことのあるべき、其連狀を取出し、彼が罪條糺すべし。
義時　はッ。
兵衛　君の仰せ義時殿、證據を出して決斷あられよ。

義時　委細承知仕る。大切なる證據ゆゑ、某懐中いたしあり。

〽君の仰せに是非なくも、連書の一卷取出し、（ト義時懐中より袱紗包みの一卷を出し、）

知重殿、連書の姓名讀上げ召され。

知重　畏つてござりまする。（ト一卷を取上げ、）

〽紐をとく〳〵知重が、連判狀を押開き、（ト知重件の一卷を開き、）

泉小次郎親平、阿靜坊安念、岡田七郎成友、澁川刑部兼盛、狩野小平次行持、磯野小太郎安武、細井十郎時重、籠山四郎高盛、和田四郎左衞門義直、同六郎義重、宿屋次郎重房、上田原平三兼綱、和田平太胤長。

義時　知重殿、お待ちなされ、最早跡は讀むに及ばぬ。

知重　はツ。（ト連狀を卷く。）

義時　泉の小次郎親平はじめ、是れなる平太胤長迄、かやうに一味徒黨を結び、君を計る企なし、血判なせし連判狀、かゝる確かな證據あれば、平太が罪科は遁れぬぞ。

〽言はせも果てず胤長が、

平太　いや、其連判狀を讀上げて、我を逆臣なりと言ふは、近頃詮議が足りませぬ。

義時　なに、詮議が足らぬとは。

平太　なぜ大小の神祇に誓ひし、誓詞の文を讀み上げぬぞ。

義時　さあ、それは、

平太　今一應讀みなほすか。

義時　さあ。

平太　但しは讀んで害になるか。

義時　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。

平太　義時返事は如何なるぞ。

義時　むゝ。（ト義時詰る、）

平太　保忠殿、あの連書を今一應讀上げて、我逆臣にあらざるを、君の御聞に達すべし。

保忠　委細承知いたした。（ト義時に向ひ。）執權にはその證書、暫時拙者へお渡し下され。

義時　いや大切なる此證書、囚人なる胤長に由縁ある輩へ、是れを渡す謂れなし、御身平太の一族なれば、其憚りなきにあらず。

〽事を左右に義時が、いなむを保忠威儀を正し、（ト保忠きつとなつて、）

保忠　こは執權の詞とも覺えぬ事を承る。君をはじめ奉り老臣の歷々伺候し、見聞ある所に於て、何ぞ憚りあるべきや、今其連書を我讀むは、則決斷の用なるを、若し一家たりとも私に讀みかすむる事あらば、此保忠は言ふに及ばず、是れに連る義盛はじめ、一族罪を蒙むるべし、殊に執權には其文をよく御存じの證書ならずや、然らば我へ渡されて、是れにて讀ますが潔白なり、それを拒みてお渡しなくば、胤長が罪明白ならず、却つて執權義時殿へ疑ひが掛りますぞ。

義時　むゝ。

保忠　とく〳〵拙者へお渡しあるか。

義時　さあ、それは。

保忠　但し御疑念ござりまするか。

義時　むウ。（ト義時詰ろ。）

兵衛　義時殿には、此場の明白、その證書を保忠へ、お渡しあつて然るべし。

〽言ふに是非なく義時も、

義時　然らば是れにて讀上げよ。

保忠畏つてござりまする。（ト一巻を受取り。）君をはじめ、列侯方、證書の誓文御聞き下され。
〽保忠連書を押開けば、君は元より老臣群侯、心耳をすまして承はる。これぞ我身の一期なりと屈する色なく胤長が、固唾を呑んで待ちにける。保忠は聲張上げ、
ト此内平太、今に見よといふ思入、保忠は連書を取つてゆる／＼とこれを開き、思入あつて、
『抑〻今年今月今日同志の輩、信州戸隠の神社に會集し、猶も天地神明を驚かし奉り、誓詞を以て盟約をなし、各〻誠忠を竭さんと欲する其趣意は、近頃北條相模守義時、權勢専にして我意に募り、己に諂ふ者は推擧し、己に從はざる者は讒言を構へ、或は退け或は罪し、鎌倉の權を掌握なし、君を輕んじ奉りて君の臣を己が奴婢の如く會釋し、榮華榮燿を極め、忠臣を害し佞人を愛し、依怙贔屓專一にして國家の法令を犯し、四海政道を亂る、逆賊の匹夫とは義時を申すべし、故右幕下草創の鎌倉、彼がために奪はるれば誰人も歎かざらんや悲しまざらんや、一味同志の輩は是迄先考の御恩を蒙むる事泰山の如く、片時も忘るゝ時なし、其報恩を思ひ、且は當君へ忠勤の爲め、北條義時一家緣故の者迄誅戮し、四海の患を除かんと欲す、誓約の輩は再び他事を顧みる事なく、唯前條の爲めに一命を擲つの旨、日々夜々思うて忘るべからず、忠義若し空しく、計略或は成らず、彼の賊が爲めに命を失ふとも、元來同志の身命は、先考當君へ忠義の爲

めに獻じ置く所、聊かも厭ひ有るべからざる者也。右の趣違背の心これあるに於ては、日本の諸神、別して弓矢神正八幡の冥罰を蒙り、忽命を落し、不忠不義の醜名を千歳に貽すべし、仍て誓約如件、建暦二壬申年八月』

〽連書の誓詞を保忠が、天も響けと讀終れば、胤長鬢髪逆立て、眼怒らし大音上げ、

ト保忠讀終る。平太義時へ向ひきつとなつて、

平太 いかに義時、汝御内縁あるをもつて、鎌倉御所に横行し、終には君を奪はんとするを、賢者は早くも是れを察す。其身臣たる道を守り、君を君とし御恩を思はゞ、父時政謀叛を企て、君を害し奉らんとせし時、身を屈して謹愼なし、父の非を悔ゆべきに、我こそ父と一ならずと、表に忠臣の形をなし、早速執權の職を受くる、是れ不義不臣の根本也。汝が父の惡逆は、忠臣畠山父子を亡ぼし、仁田四郎忠常を害し、先づ武將を失ひ奉りしのみならず、當武將を殺さんと謀る大罪人、されば天下の人汝を惡み、時政が肉を喰はんと欲する程の怨敵なれども、御内縁あるをもつて一命恙く家相續に及ぶ、是れに過ぎたる依怙の沙汰凡そ世界にあるべからず、然るに一言の辭退もなく、其職を受くるのみか、權勢父に百倍し、諸士萬民の訴へも、己が心に合ざれば高聞に達することなく、他の罪は嚴しく吟味し、自分の罪は隱し含み、横道非義を行ふを、皆君の命

と稱するゆゑに、恨みを抱く輩幾千萬の數を知らず、去ぬる春より今年に至り、天變しきりなる事は、是れ皆天下の政道の正しからざるゆゑなるぞ、既に一夫怨を含めば百日雨降らずと言へり、況や萬民恨み悲めば、そのしるしなかるべきや。然れども、富貴を貪り、時世に隨ふ輩は、君の爲めをも思はずして、厚恩を忘れ、汝に諂ひ無智無能にして高職を勤め、功なくして地頭となる。かゝる輩あまたあるゆゑ、天下の政道いよ〳〵亂れ、國家の騒動止む時なくして、危き事薄氷の如し、今誠忠の眼より是れを見るに忍び難く、爰に於て我輩泉氏の歎きを救ひ、君の爲めに後患となるべき汝を誅戮し、義名を末世に殘さんと、身命をなげうてど、怨敵なれどその職とて常に君の御座を離れず、諸事君命を借りるゆゑ、表向きに事を計らば、却つて汝が讒言に妨げられん事を思ひ、竊に忠義の士を集め、國家のために賊を討たんと、忠義を勵む此の企、是をも謀叛と言ふべきか、我も汝も君の臣なり、同じ臣たる汝が惡を誅せんとする胤長を、逆臣とは何事ぞ。最早武將の心にて、今より左樣の事を申すか、既に其罪を糺さんとする忠義潔白の我々を、無體に縛して逆臣の企などと言立つるは、早く誅せん意なるべし。此連判狀の誓詞を以て是を罪の證據とす一味の者は君の忠臣、汝は國家の逆臣なり、忠と逆との論心得たるや。言譯あらば速かにせよ。返答いかに逆賊義時。

〽恐れ憚るけしきもなく、逆賊と迄呼はれど、義時返す詞もなく赤面なして控へれば、廣元はじめ列座の諸侯、共に詞はなかりける。義盛はじめ列座の一族、よくぞ言ひしと心に悦こび、

ト此内平太きつと思入あつて言ふ。廣元氣の毒なろこなし。義盛はじめ皆々悦ばしき思入あつて、

義盛 義時殿が證據と言はる、誓詞の趣意を承はり叛逆ならざる事を知つたり。親平等と共に汝等が今般の企は、元國家の爲めを思ひ、忠義に出る所と雖も、法に背いて徒黨せしゆゑ、遂に謀叛の汚名を取り、斯く面縛いたされしなり。今其方が申す如く、双方君の御家臣なれば、申さば朋輩喧嘩なり、謀叛とは申されまじ、此後執權の決斷にて、いかなる刑に行はるゝとも、今日君の御前に於て叛逆ならざる證據立ち、我をはじめ列座の一族、少しく恥辱を雪ぎたり。

保忠 三浦一統のその內で、勇猛勝れし荏柄の胤長、能くも恐れず申せしぞ。一同感心いたせしぞ。

義臣 猶も申すことあらば、事のついでに、

一族 此場に於て、

皆々

義盛 胤長は兎も角も、歎願に出でし一族が、口出しなすは無禮なるぞ。（ト義盛きつと言ふ。）

平太 さあ義時、今讀上げし誓詞にて、我が謀叛か謀叛ならぬか、有無の返答いかゞなるぞ。

〽問詰められて義時が、兎角いらへに困りし折から、御簾の内に聲あつて、

ト義時口惜しき思入。此内下手御簾の内にて、

政子　誰そあるか。御簾を上げい。

〽こなたの御簾巻上ぐれば、女ながらも國政の補佐なし給ふ尼御臺、しづ〳〵立つて將軍の次席に座せば列侯も禮を盡して敬ひける。尼公も會釋なし給ひ、

ト下手御簾を上げる、内に政子尼公花色の帽子打掛、尼公好みの拵へ、女小性二疊臺の下へ褥を敷く、政子尼此上へ住ふ。皆々よろしく辭儀をなす、政子思入あつて、

政子　只今あれなる御簾を隔て、此場の詮議を承りしが、餘りと申せば胤長が禮儀をしらぬ不敬の惡口、女の身にて囚人と問答なすも益なけれど、其儘に捨置き難くわらはが其罪糺すべし。

廣元　すりや、尼公には胤長が、罪をお糺しあられますとか。

知重　證據となるべき連判狀の、誓詞の文ゆゑ叛逆と、執權職の申されしが、却つて只今非分となり、

兵衛　とりわけ、是なる胤長を、捕縛なしたる某などは、誠に殘念至極でござる。

政子　胤長謀叛の張本ながら、口賢く言廻し、其罪を遁れんとするとても、天道いかで許すべき。その連書こそ確かな證據。（ト實朝これを聞き、）

實朝　只今讀みし連判狀が、謀叛を企つ證據とは、いかなる御見込みありてのことぞ。
政子　その文中に君を計る、謀叛の證據慥にあり。こりや保忠、故右幕下草創の鎌倉と言へる條より、その末を今一度高らかに讀上げよ。
保忠　畏つてござりまする。
ト保忠立つて思入あつて、連判狀を開き、
〽保忠、心に小ざかしき尼公のさし出と憤り、又も連書を押開き、
保忠「故右幕下草創の鎌倉、彼が爲めに奪るれば誰人も歎ざらんや悲まざらんや、一味同志の輩は是迄先考の御恩を蒙る事泰山の如く、片時も忘るゝ時なし、其報恩を思ひ且つは當君へ忠勤の爲め、北條義時一家緣類の輩迄誅戮し、四海の禍を除かんと欲す。」
政子　あいや保忠、暫らく待たう。
保忠　はッ。
政子　最早それなる條にて、跡は再び讀むに及ばぬ。
保忠　畏つてござりまする。
ト一卷を卷き仕舞ひ、

政子　只今讀みし文言にて逆心の證據慥なり、胤長深く思慮を廻らし假令連書を奪はるゝとも申譯の立つべきやうに、表に北條を傾けんと記し、實は武將を討たんと言ふこと、その文言にて明かなるぞ。

平太　逆臣北條義時を、討たんとせしその誓詞、將軍家をば計ると言ふ、それが證據と言はるゝか。

政子　證據と言ふはその文に、北條一家縁類の輩迄誅戮せんと書きたること、諸士をかたらふ隱詞、わらはは北條家の娘にして、義時が兄弟なり、武將は則ち我子にして、義時とは伯父甥なり、武將もわらはも北條の縁類なること、誰とて是を知らざる者あらんや。然るに誓詞へ北條一家の縁類迄も誅せんと書きしは、我等母子を共に討たんと誓ひし詞ならん。

〽尼公の仰せに義時も、實にもさこそと打ちうなづき、

ト義時思入あつて、

義時　いかにも尼公の仰せの如く、誓詞の文を操りて、諸人をまどはし勸め込み、我を討たんとなせし時、君を殺さん巧みでありしか。

知重　かゝる隱謀押隱し、執權職たる義時殿を、逆賊などゝ罵りしこと、重ね〴〵の罪人たり。

政子　其罪明白に顯はれたれば、最早糺問なすに及ばぬ。早々廷尉の手へ渡し、追つて禁科を加ふべし。

﹝男子も及ばぬ尼公の智略を、感じ入つたる並居る諸侯、胤長猶も聲ふり立て、
ト平太きつとなつて、

平太　いや尼公の仰せ道にあらず、御身時政の娘なるゆゑ、恐多くも武將をば緣類なりと思召すは、一理あるやうなれど、君臣の差別あるを御存じなきと覺えたり。凡そ女は賤山夫迄、一度夫に嫁せし上は、其家に身の終りを極め、再び實家へ歸らざるを則貞女の操とす。是れ實父母の緣はあれども他へ嫁せば離るゝ故なり、御身北條の娘なれど、右幕下故君に嫁し給へば、北條の緣は離れ給ふ。御臺所と仰がれ給ひ、諸人尊敬仕奉るは是れ何故と思召すぞ。北條家の娘ならば、誰か敬ひ申すべき、父時政たりと言へども、御身を敬ひ申せしは主君の御臺所なるゆゑ。しかのみならず若君が當事武將とならせ給へば、尼公又は尼御臺と諸侯に仰がれ給ふのも、是れ武將家の御威光にして、聊も北條家の與りたることにあらず、さるを強ひて緣家なりと仰せあらば御勝手次第、さのみ爭ふに及ばねど、緣類なりと仰せらるゝは勿體なきことならずや。君と臣と其間いか程高下あることか、必竟腹は借り物にして、御身は誰が緣類にもあれ、實朝公は故右幕下賴朝公の若君なり、又義時は御家來たる時政が悴にて、我々が同輩なり。然るを御身義時と君は正しく伯父甥にて、緣類なりと仰せらるゝは、これ義時が逆臣の證據なりと申すべし。

義時　こは心得ぬその一言、正しく伯父甥なるゆゑに、北條家の縁類なりと、只今尼公が仰せありしを此義時が逆臣の證據なりとは、何をもつて。

平太　おゝ其故は臣下の身として、押して武將の縁家と稱し、權威を握るは是正に逆臣たるの證と言ふべし。此源は外ならず、君御若年にましますゆゑ、尼公女儀の御身にて、天下の政事に口入なしおのが氣儘に行ひ給ひ、義時武將の縁類とて、諸人に尊敬さるゝゆゑ、北條家は圖に乘つて己が威勢強きと心得、萬民を痛め諸士を輕んじ、君ましまさずんば國家をも、呑まんと思ふ心底は、おのづから現然たり。既に漢家の始祖高帝崩じ給ひて後、呂后我一族を贔屓し、尊敬させられしは、呂氏の族の權威に恐れしにて、諸人暫らく隨ふと雖も、北軍こと〴〵く左の袒裼て漢家に歸すと言へり。是れ漢朝の臣呂氏に隨はざること斯の如し、今北條家は其呂氏の積惡に勝りたれば、陳平周勃が忠義に習ひ、國家の患ひを除かんと欲し、徒黨を結びし連判狀、横行非道の眼よりは、謀叛とも思はれんが、誠心あつて忠臣の志を知るものは、奇特なりと感賞すべし。我今逆賊の爲めに捕はれたれども、幸ひなるかな君前に於て此趣を演說なせば、我心既に晴れたり、如何なる處刑に逢はんとも、更に恨むべき所なし。殘念なるは、賴朝公草創ありし大業も奸賊是れを奪はんこと、唯歎かはしく存じ申す。

義盛 〽君家を思ひ胤長が、聲ふるはして呼はれば、義盛は面を上げ、
こりや胤長、又しても大聲を發し、君前と言ひ尼公へ對し、假令忠義に出るとも、粗言は失敬至極なるぞ。席に連なる義盛は、汝が今の返答を。（ト能く言つたと言ふ思入あつて、）默して聞いて居られぬぞ。禮義を失せず利害を申せ。
〽能くぞ言ひしと義盛が、心で褒めし表には、御前を憚り制する粗言、尼公は憎しと膝立直し、

ト此内義盛思入、政子もこなしあつて、

政子 さりとは憎き荏柄の胤長、斯く言はゞ斯く答へんと最初より、申譯の己は案をなしたるか、一旦の理をもつて北條に縁なしといふは、汝一人の料簡なり。我右幕下に嫁すと雖も、其の姓は變ることなく、平の政子と記録に記す。是れ父の縁の離れぬ證據、義時は北條の家督にて、これぞのがれぬ平の同姓、わらはは則武將の母なり。北條の縁なしとすべきや。それはともあれ義時に行ひ惡しき事あらば、など其旨を連書して内分に申立てぬぞ。左はなくして徒黨を集め、國家の騷動企てし汝が罪は大なるぞ。

知重 只今尼公の仰せの如く、四海の武士はこと〴〵く、皆武將の臣下なり。其中に汝等ばかり忠義を

知つて、其外は忠義を知らぬ者と言ふか、北條家に逆心あらば、廣元殿をはじめとして、我人共に君の御爲め、其儘にさしおくべきや。

政子　唯己等が嫉妬より、北條家の威勢を嫉み、斯騷動を企ては、謀叛の罪遁れざるを、武將の母たるわらはへ對し、雜言なせし荏柄の胤長、能く老臣と談ぜし上、彼が罪を決し給へ。女の身にてぬきんで、、囚人を糺明すること、いと恥かしきことなれど、武將の威をば落さじと、斯く問答に及びたれば、是れにて糺問いたすに及ばぬ、彼を罪科に行はれよ。

實朝　老臣どもと評議の上、罪の輕重定め申さん。

政子　最早此座に用なければ、わらはゝ退出いたすであらう。

義時　尼公の仰せで某が、一時の汚名をまぬがれて、大慶至極にござりまする。

政子　此後も心を附けられよ。

〽心殘して尼君は、奥殿へとぞ入り給ふ。

ト政子立上り、義時へ思入あつて、能き程にて音樂を冠せ、御簾を下す。

〽跡に義時威儀を改め、（ト義時ちつと思入あつて、）

義時　囚人胤長死を覺悟し、尼公へ對して無禮の雜言、是れを糺さんと存ずれど、胤長しきりに我を憎

み、逆臣なりと惡口に及ぶ。諸士の存ぜん手前もあれば、彼が罪科は決し難し、高木風に折らるる習ひ、今匹夫が猜みを受くるも其身執權の職にあるゆゑ、速かに職を辭し、山林へ身退き、憂世の中と交りを斷ち、人の誹謗をまぬがれたし、功なり名遂げて穀を避くるは、これ忠臣の好む所某その器に當らずと言へども、君家三代に微忠を盡し、他の猜みを顧みず、すべて私の計らひなければ、心中恥づる所なし、何卒山林の閑居をば、御宥許下さりませう。

〽一物ありげに述べければ、最前よりの一部始終、左右なく判斷なし難く、御猶豫ありしが義時の願ひは其儘聞捨難く、（卜義時思入にて言ふ。實朝思入あつて、）

實朝　今執權の職を辭し、山林の閑居を願ふは一身の憂ひを退れん爲め、誠忠とは言ふべからず。假令世上へ、いかやうな惡名を流すとも、まこと正路に立つ上は何ぞ憂ひとするに足らん、然るに其方職を辭し、山林に引籠らば、扨は我身の惡名を流布せられて身退きしは、命は惜しきものなりと却つて指彈の笑ひを需めん、唯此儘に忠勤なし、此後其身をよく愼み、予が政道を補佐なさば此度の惡名も自ら消え果つべし。格別の願ひなれど閑居の望みは許されぬぞ。

義時　すりや某が辭職の願ひ、御許容はなりませぬか。

廣元　只今君の仰せの如く、貴殿山林へ退居あらば、世上の風評よろしかるまじ。以前に替らず忠勤を

盡し給ふが肝要なり。退居は思ひ止まられよ。

義時　御許容なければ是非もなし、惡名受けし恥辱を忍び、忠勤盡すでござりまする。

廣元　して是れなる胤長が、罪科はいかゞ仕りませう。

實朝　一味徒黨を結ぶと言へど、あながち謀叛と言ひ難し、追つて決斷申附けん。先づ今日は引取らせよ。

兵衛　はッ。

〽寛仁大度の君命も、北條無二の懇意ゆゑ、知重御前へ進み出で、（ト知重上の方前へ出、）

知重　恐れながら我君へ、知重申上げ奉る。謀叛の罪は兎も角も、胤長其身囚人にして、尼公へ對して無禮の雜言、又執權を罵りしを、此儘に差置かれなば、武將の威光なきに似たり、今日不敬の罪を問ひ、御決斷あつて然るべきかと、憚りながら存じまする。

實朝　謀叛の聞えあるゆゑに、召捕らるゝ輩を其實否も明白ならぬに、他の罪をもつて罰せんこと、是れ正道の政務にあらず、追つて其沙汰に及ぶとも、なんぞ遲きことあらんや。

知重　ではござりまするが、餘りの無禮。

廣元　やあ君命もどくは失禮なり、口出し召されず、控へめされ。（トきつと言ふ。）

知重　はッ。（下知重控へる。）

廣元　然らば尼公の仰せに隨ひ、我預りの囚人胤長、これより廷尉へ渡し申さん。（下廣元立上るを、）

保忠　いや其儀お待ち下されい。

廣元　君命によつて引立つるを、何ゆゑあつて止めらるゝぞ。

保忠　保忠思ふ仔細あれば、暫らくお待ち下されい。（下知重へ向ひ、）御決斷是れなき内に、一族の者へ胤長を申受けんと拙者を始め、三浦の一統九十餘人、今日參上仕りしに、胤長失敬の罪人となり、獄卒の手へ渡さるゝは、誠にもつて武士の恥辱、我々身に取り殘念至極、

義臣　哀れ胤長を一族へ、

義實　下し置かれ給はらば、

時連　我々どもの手にかけて、

義房　彼を誅戮仕りたし、

清高　何卒此儀寛大の、

爲綱　御慈悲をもちまして、

義臣　御宥免下さりますやう、偏に願ひ。

皆々　奉る。

知重　君より一旦、追つて御沙汰と仰せ出されしを存じながら、一族の面目雪がんと、いまだ罪名決せざるを、

廣元　強ひて三浦一族へ、犯罪人を請ひ受けて、勝手に誅戮なす時は、君の御仕置立たざるなり。

保忠　やあ汝等は何ゆゑに、此願ひを妨げなすぞ、誠忠を盡す武士は、死を輕んじ名を惜しむ。胤長を申受くれば速に誅戮を加へ、三浦一統に於ては不忠の心なきを顯はし、此後かゝることなくして、君へ忠義を盡さんため、且つは他家への誡しめともならん。然らば國家のため君のため、胤長も又本意ならん。

平太　いかにも保忠申す如く、元より死するは覺悟の胤長、何一命を惜しまんや。汝らの如く佞辯をもつて時に隨ひ、世に諂ひ、只己が身の上を思ふ、臆病未練な腰抜けとは違ふぞ。

知重　やあ時に隨ひ世に諂ふとは、それは誰がことなるぞ。

平太　執權職に媚び諂ひ、出世を望む汝等がことだ。

知重　やあ言はして置けばよきことゝ、出るまゝの雜言過言。（ト兩人きつとなる。）

保忠　やあ縛についたる胤長を、相手になすは卑怯なり。保忠相手になり申さん。

〽氣早の保忠立掛るを、義盛暫しと聲を掛け、（ト保忠きつとなるを、義盛思入あつて、）

義盛　こりや保忠、御前なるぞ、爭論なすは恐れあり。胤長忠義にせしことながら、徒黨を結びし犯罪に一族恥辱を受けたるに、又もや汝御前にて、無禮をなさば此上に、恥辱に恥辱を重ぬるぞ。

保忠　ぢやと申して。（ト又きつとなるを、）

義盛　今諸士の別當たる、我詞を用ひぬか。

保忠　全くもつて。

義盛　さなくばぢつと控へてをらう。（トきつと言ふ。保忠是非なく下に居る。）

廣元　君命を重しと思はゞ、今日にも限るまじ、明日願ひを達せられよ。

義時　此儀に於てはわれ再び、決斷の筋申すべからず。事落着いたすまで出仕をなさず籠居いたすが、各〻への申譯。これにて安堵下さるべし。

知重　すりや、執權職には、

廣元　御籠居とな。

義時　是れ皆天下の御爲めなるぞ。

平太　えゝ、口賢くも、

實朝　こりや胤長、事は追ての決斷。

保忠　すりや今日は、

皆々　此儘に、

廣元　いづれも退出。

皆々　はあゝ、

廣元　胤長立たう。

平太　むゝ、

〽獄屋へ引かるゝ胤長を、無念と見やる三浦の一族、胸に一物義時が、口と心の裏表、引別れてぞ。

ト此内平太立上り、義盛、保忠皆々殘念なる思入。義時は今に見よといふ思入。雙方よろしく。よき所より太撥の時の太鼓を冠せ、よろしく。

幕

荏柄の平太（終り）

（附錄）主なる興行年表

金の世の中

年時	明治十二年二月	明治三十六年十一月
座名	新富座	歌舞伎座
名題／役割	人間萬事金世中（にんげんばんじかねのよのなか）	同（おなじ）
惠府林	尾上菊五郎	中村芝翫
五郎右衛門	市川團十郎	尾上菊十郎
勢左衛門	中村仲藏	片岡市藏
宇都藏	市川左團次	尾上菊十郎
おくら	岩井半四郎	市川女寅
おしな	市川小團次	市川染五郎

孝子善吉

年時	明治十六年十月	明治廿三年十月	明治廿五年四月	明治三十六年六月	大正八年五月
座名	新富座	壽座	春木座	市村座	歌舞伎座
名題／役割	勸善懲惡孝子譽（くわんぜんてうあくかうしのほまれ）	同（おなじ）	同（おなじ）	同（おなじ）	同（おなじ）
善吉	尾上菊五郎	市川小團次	坂東家橘	市川延三郎	澤村宗十郎
虎藏	市川左團次	市川荒次郎	中村駒之助	澤村訥子	市川左團次
甚兵衛	中村仲藏	中村壽三郎	中村雀右衛門	尾上菊四郎	市川八百藏
卯之助	尾上菊之助			坂東家久丸	片岡千代麿
已之吉	市川子團次	中村鶴松	中村勘五郎		市川壽美藏
重右衛門	中村仲藏	中村壽三郎	中村雀右衛門	中村勘五郎	市村羽左衛門
朝日山	中村芝翫	市川荒太郎	市川右田作	中村福助	中村歌右衛門
おむら	岩井小紫	市川蔦之助		中村芝若	市川松蔦

黄門記

年時	座名	名題	黄門	紋太夫	吉藏	久五郎	玄碩	丈左衛門	おとみ	夏目（川口）	得齋
明治十年十二月	新富座	黄門記童幼講釋	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	中村仲藏	中村仲藏	岩井半四郎	澤村宗十郎	市川小團次
明治廿二年十一月	歌舞伎座	俗說美談黄門記	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村福助	尾上松助	市川左團次	澤村源之助	市川左團次	市川小團次
明治卅四年三月	歌舞伎座	俗說美談黄門記	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川八百藏	尾上松助	片岡市藏	尾上榮三郎	市川八百藏	市村家橘
明治卅六年九月	東京座	水戸黄門記	市川左團次	市村家橘	市川左團次	市川高麗藏	中村時藏	市川荒次郎	市川米藏	市川高麗藏	市川米藏
大正六年五月	帝國劇場	水戸黄門記	松本幸四郎	市村羽左衛門	市村羽左衛門	澤村宗十郎	尾上松助	尾上松助	澤村宗之助	澤村宗之助	澤村長十郎
大正七年一月	市村座	水戸黄門記	中村吉右衛門	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	守田勘彌	中村東藏	尾上菊次郎	中村東藏	—

茬柄の平太

年時	座名	名題	平太	義時	惟久	古郡	安念	義盛	實朝	政子
明治十三年六月	新富座	星月夜見聞實記	市川團十郎	市川左團次	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村仲藏	中村仲藏	市川小團次	河原崎國太郎
明治二十二年一月	市村座	星月夜見聞實記	市川團十郎	澤村訥子	片岡我童	片岡我童	市川壽美藏	市川壽美藏	市川金太郎	河原崎國太郎
明治二十一年六月	明治座	茬柄の平太	市川團十郎	市川左團次	—	市川權十郎	—	市川壽美藏	市川小米	市川升若
大正九年四月	市村座	茬柄の平太	中村吉右衛門	大谷友右衛門	坂東三津五郎	坂東三津五郎	大谷友右衛門	中村翫助	尾上菊五郎	尾上菊三郎

大正十四年八月十日印刷
大正十四年八月十三日發行

『默阿彌全集第十三卷』
非賣品

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市牛込區榎町七番地
印刷者　竹内喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂